

TUM

TEIKYO UNIVERSITY MUSEUM

帝京大学総合博物館 館報

第4号

2019・2020 (令和元・2) 年度

帝京大学総合博物館



帝京大学総合博物館 館報

第4号

2019・2020（令和元・2）年度

帝京大学総合博物館 **TUM**
Teikyo University Museum

ご挨拶

2019年度、2020年度の本館の活動をまとめた、帝京大学総合博物館「館報」第4号をお届けいたします。

2019年の最大のニュースは、何といたしましては2015年9月の開館から数えた累計入館者数が10万人を突破したことです。その内訳は帝京大学の在学生や一般の方々です。これは地道な活動の結果ではないかと感じております。

同年に実施した企画展「キャンパス遺跡発見伝 - 古代多摩に生きたエミシの謎を追え -」は、古代東北地方に住んでいた「エミシ(蝦夷)」と呼ばれた人々と多摩地域との関係に光を当てた展覧会です。帝京大学八王子キャンパス内の遺跡から、岩手県北上盆地から限定的に出土する「赤彩球胴甕」と呼ばれる特殊な土器が発見され、それをきっかけに明らかになった最新の研究成果を紹介するものとなりました。その他、科学体験講座や多くのミニ企画展を実施し、前年度以上に活動の幅を広げることができた1年となりました。

続く2020年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、本館も他の機関と同じく一時的に臨時休館の措置をとりました。ですが、感染症対策を十分に行い、10月には帝京大学工学部創立30周年を記念し、企画展「工学部のラボのなか! - コトワリとワザの探究 -」を開催することができました。

あわせてコロナ禍における新たな取り組みとして、来館できない一般の方々に本館の活動を知ってもらうための情報発信のツールとしてTwitter、YouTube、Instagramの利用を開始いたしました。特に、企画展「工学部のラボのなか! - コトワリとワザの探究 -」の関連講座のYouTubeでのライブ配信は事前の十分な準備の甲斐もあり、トラブルなく行うことができました。こちらは、現在YouTubeで公開されており、誰でも視聴することができるようになっています。今後もYouTubeやSNSを活用した情報発信を積極的に行っていきたいと考えております。

また、コロナ禍において帝京大学でも授業形式が対面とオンラインを融合させたハイブリッド形式へと大きく変化しました。そのような中で、教員の多くは教材づくりに膨大な時間を割いています。その手助けになればと博物館を活用したオンライン講義用教材(音声データ)を作成し、多くの先生方にご活用いただきました。さらに学習意欲の高い学生に学びの場を提供し、コロナ禍でも力強く生きている人々を応援することを目的として、多摩地域の歴史・文化・自然・現在を取材し、記録するフリーマガジンの発行プロジェクトを開始いたしました。このプロジェクトで学生が取材・作成したフリーマガジン『ミコタマ』は本年度(2021年度)までに3号を発行することができました。

新型コロナウイルス感染症の流行による急激な変化の中において、課題は山積みですが、着実な活動を心掛け、学内、そして社会に必要とされる博物館を目指し、より一層の充実を目指したいと考えております。

目次

ご挨拶	3
I 事業報告 2019年度	5
1 展覧会事業	6
2 教育・公開事業	36
3 資料管理・収集・調査事業	41
4 他機関連携事業等	42
5 管理運営事業	42
II 事業報告 2020年度	43
1 展覧会事業	44
2 教育・公開事業	59
3 資料管理・収集・調査事業	64
4 施設・他機関連携事業等	65
5 管理運営事業	67
III 資料(2019・2020年度)	69
1 2019年度(開館状況 展覧会 授業利用 団体見学 外部視察)	70
2 2020年度(開館状況 展覧会 授業利用 団体見学 外部視察)	78
3 組織(2019年4月1日～2021年3月31日)	82
4 施設概要	83
IV 講座記録	85
■最新研究講座 カビと闘う研究者たち!	86
第1回 健康の質を高める抗菌アロマセラピー	安部 茂
第3回 遺伝子工学と水虫	山田 剛
第4回 カイコを利用して新しい薬や食品をつくる	関水 和久
■シルクロードを旅する企画展講座	114
第2回 シルクロードの夢を旅した父と母	平山 廉
第3回 シルクロード:平山郁夫の夢を共に歩く	前田 耕作
■エミシ研究講座	143
第1回 古代蝦夷社会の実像	八木 光則
第2回 考古学からみた武蔵国のエミシ	平野 修
第3回 東国と蝦夷政策	荒井 秀規
第4回 エミシの赤い土器『赤彩球胴甕』を追う	杉本 良
第5回 東国における牛馬の考古学	植月 学
■「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編	227
第1回 明治憲法と議会	小山 俊樹
第2回 満州事変から太平洋戦争へ	戸部 良一
V 研究ノート	245
■コロナ禍で大学博物館は社会に対して何を果たせるか —帝京大学総合博物館の1年とこれから—	堀越 峰之

I 事業報告
2019

1 展覧会事業

(1) 企画展

帝京大学総合博物館企画展

キャンパス遺跡発見伝

—古代多摩に生きたエミシの謎を追え—

① 実施概要

- 主 催 帝京大学総合博物館
監 修 帝京大学文化財研究所
会 期 2019年10月15日(火)～2020年2月29日(土)
※休館日：日曜・祝日、11月16日(土)、12月7日(土)、年末年始12月29日(日)～1月3日(金)
1月18日(土)、1月30日(木)～2月1日(土)、2月21日(金)～22日(土)
※臨時開館日：10月27日(日)、11月3日(日)、11月23日(土)、1月12日(日)
開館日数 96日間
会 場 帝京大学総合博物館企画展示室
入場者数 9,591名
協力者・機関
イ 監修者
平野 修(公益財団法人山梨文化財研究所研究員、帝京大学非常勤講師)

ロ 資料提供機関

一戸町教育委員会、稲城市教育委員会、今別町教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センター、北上市立博物館、北上市立埋蔵文化財センター
熊谷市教育委員会、国分寺市教育委員会、御所野縄文博物館、多摩市教育委員会、帝京大学医真菌研究センター
帝京大学文学部史学科、東京国立博物館、東京都教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、東北歴史博物館
葦崎市教育委員会、八王子市教育委員会、福島県文化財センター白河館、府中市郷土の森博物館
府中市教育委員会、宮城県教育委員会、盛岡市教育委員会、盛岡市遺跡の学び館、矢巾町教育委員会
山梨県立考古博物館

② 概要

帝京大学八王子キャンパス内の発掘調査で出土した土器や鉄器などを通じて、多摩地域と古代東北に住んでいた「エミシ」とのつながりに関する最新の研究を紹介。

③ 展示構成

- 第1部 エミシの土器「赤彩球胴甕」の発見
第1章 キャンパスの地下に眠る遺跡の発掘
八王子キャンパス遺跡マップ
遺跡発掘の方法
第2章 遺跡をカガクする
遺跡の特徴を探る
建物跡を調べる
土器の時代を探る(土師器と須恵器の分析)

- 土師器と須恵器のちがい
- 赤く彩られた土器の「故郷」(土器の分布)
- エミシが作った土器、赤彩球胴甕
- 赤彩球胴甕の土を分析する(土器の胎土分析)
- 赤彩球胴甕の土を分析する(赤彩の分析)
- 第2部 多摩に生きた古代東北の民エミシ
- 第1章 古代東北の民「エミシ(蝦夷)」
 - エミシ(蝦夷)と呼ばれた人々
 - 国定教科書に見るエミシ
 - エミシの文化
 - エミシの交流
- 第2章 朝廷との争いとエミシの強制移住
 - 「東北38年戦争」エミシと朝廷との戦い
 - エミシの強制移住
- 第3章 移住の地 武蔵国多磨郡
 - 古代の多摩ー武蔵国多磨郡ー
 - 武蔵国府と武蔵国分寺
 - 古代の牧と落川・一の宮遺跡
- 第4章 古代多摩に生きたエミシ
 - エミシが住んでいた頃の八王子キャンパスとその周辺の様子
 - エミシの建物と住んでいた人物
 - エミシの生活
 - エミシの足跡
 - 上っ原遺跡第1次調査で発見されたエミシの痕跡
 - 上っ原遺跡第2次調査で発見されたエミシの痕跡
 - 上っ原遺跡第4次調査で発見されたエミシの痕跡
 - 遺跡から発見された文字

④ 関連事業

エミシ研究講座

第1回 古代蝦夷社会の実像

日 時 2019年10月26日(土) 14:00～15:30
 会 場 八王子キャンパス ソラティオスクエア地下1階 S011 教室
 講 師 八木 光則(岩手大学平泉文化研究センター客員教授)
 参加者 58名

第2回 考古学からみた武蔵国のエミシ

日 時 2019年11月2日(土) 14:00～15:30
 会 場 八王子キャンパス ソラティオスクエア地下1階 S011 教室
 講 師 平野 修(公益財団法人山梨文化財研究所考古第3室長、帝京大学非常勤講師)
 参加者 81名

第3回 東国と蝦夷政策

日 時 2019年11月9日(土) 14:00～15:30
 会 場 八王子キャンパス ソラティオスクエア地下1階 S012 教室
 講 師 荒井 秀規(藤沢市役所郷土歴史課学芸員)
 参加者 76名

第4回 エミシの赤い土器「赤彩球胴甕」を追う

日時 2019年11月30日(土) 14:00～15:30

会場 八王子キャンパス ソラティオスクエア地下2階小ホール

講師 杉本 良 (北上市立博物館館長)

参加者 81名

第5回 東国における牛馬の考古学

日時 2019年12月14日(土) 14:00～15:30

会場 八王子キャンパス ソラティオスクエア地下1階S011教室

講師 植月 学 (帝京大学文化財研究所准教授)

参加者 92名

参加者 延べ388名

⑤ 展示資料数 総出展件数 240点

⑥ 印刷物

展覧会ポスター B2(片面カラー) 50部

展覧会チラシ A4(両面カラー) 10,000部

解説パンフレット A4(72頁) 1,500部

⑦ 広報活動

イ 帝京大学総合博物館 HP

展覧会ページの作成

ロ チラシ等の送付

PRワイヤー、近隣自治体公共施設



展示会解説パンフレット



展覧会ポスター



展覧会開催チラシ





エミシ展エントランス



キャンパスの地下に眠る遺跡の発掘①



キャンパスの地下に眠る遺跡の発掘②



キャンパスの地下に眠る遺跡の発掘③



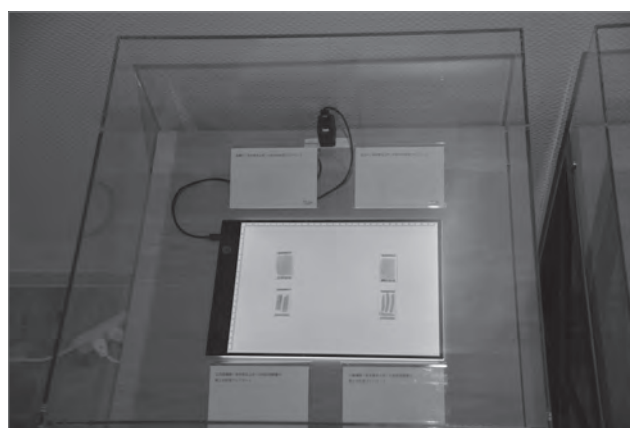
遺跡をカガクする①



遺跡をカガクする②



赤彩球胴甕



土器の胎土分析プレパレート



古代東北の民「エミシ(蝦夷)」



「東北38年戦争」エミシと朝廷との戦い



移住の地 武蔵国多磨郡



武蔵国府、武蔵国分寺関係資料



落川・一の宮遺跡関係資料



古代多摩に生きたエミシ①



古代多摩に生きたエミシ②



古代多摩に生きたエミシ③



古代多摩に生きたエミシ④



古代多摩に生きたエミシ⑤



エミシ研究講座 第1回「古代蝦夷社会の実像」
八木 光則氏（岩手大学平泉文化研究センター客員教授）



エミシ研究講座 第2回「考古学からみた武蔵国のエミシ」
平野 修氏（公益財団法人山梨文化財研究所考古第3室長・
帝京大学非常勤講師）



エミシ研究講座 第3回「東国と蝦夷政策」
荒井 秀規氏（藤沢市役所郷土歴史課学芸員）



エミシ研究講座 第4回「エミシの赤い土器『赤彩球胴甕』
を追う」杉本 良氏（北上市立博物館館長）



エミシ研究講座 第5回「東国における牛馬の考古学」
植月 学氏（帝京大学文化財研究所准教授）



来館者の様子

キャンパス遺跡発見伝
— 古代多摩に生きたエミシの謎を追え—
出品目録

第一部 エミシの土器「赤彩球胴甕」の発見					
第一章 キャンパスの地下に眠る遺跡の発掘					
番号	資料名	出土地	遺跡	数量	所蔵先
0	八王子キャンパス地下から出土した昔の道具たち	東京都八王子市・多摩市	竜ヶ峰遺跡・上つ原遺跡・大塚日向遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
1	縄文土器 深鉢	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
2	縄文土器 甕 上部	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
3	縄文土器 甕 上部	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
4	石斧	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
5	石器	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
6	石器	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
	縄文時代の竪穴建物跡から発見された生活道具	東京都多摩市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
7	須恵器 壺	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
	奈良時代の墓から発見された副葬品	東京都多摩市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
8	鉄製刀子	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
9	須恵器 坏	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
10	須恵器 蓋	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
	江戸時代の建物跡から発見された生活道具	東京都多摩市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
11	陶器	東京都多摩市	上つ原遺跡		帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
12	陶器	東京都多摩市	上つ原遺跡		帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
13	陶磁器	東京都多摩市	上つ原遺跡		帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
14	陶磁器	東京都多摩市	上つ原遺跡		帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
15	陶磁器	東京都多摩市	上つ原遺跡		帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
16	陶磁器	東京都多摩市	上つ原遺跡		帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
17	陶磁器	東京都多摩市	上つ原遺跡		帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
	明治時代の炭焼き窯の跡から発見されたレンガ	東京都多摩市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
18	明治時代の墨焼き窯から発見されたレンガ	東京都多摩市	上つ原遺跡	2	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
	縄文時代の竪穴建物跡から発見された生活道具	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
19	縄文土器 深鉢	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
20	縄文土器 深鉢	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
21	縄文土器 深鉢	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
22	縄文土器片 上縁部	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
23	縄文土器片	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
24	縄文土器片	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
25	縄文土器片	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
26	縄文土器 甕	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
	平安時代の建物跡から発見された生活道具	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
	古墳時代の建物跡から発見された生活道具	東京都多摩市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
27	土師器 甕	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
28	土師器 甕	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
29	土師器 高坏	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
30	土師器 高坏	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
31	土師器 杯	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
32	土師器 杯	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
33	土師器 埴	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
34	須恵器 蓋坏身	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管（多摩市・八王子市所有）
35	柄杓（ヒシャク）			1	帝京大学文学部考古学研究室
36	根切りばさみ			1	帝京大学文学部考古学研究室
37	移植ゴテ			3	帝京大学文学部考古学研究室
38	ねじり鎌			1	帝京大学文学部考古学研究室
39	エンピ（スコップ）			1	帝京大学文学部考古学研究室
40	鋤簾（ジョレン）			1	帝京大学文学部考古学研究室
41	スタップ			1	帝京大学文学部考古学研究室
42	発掘作業員マネキン			1	帝京大学総合博物館
43	ピンポール			1	帝京大学文学部考古学研究室
44	水系			1	帝京大学文学部考古学研究室
45	平板と平板の脚			1	帝京大学文学部考古学研究室
46	ハケ			1	帝京大学文学部考古学研究室
47	箕（ミ）			2	帝京大学文学部考古学研究室
48	ネコ（一輪車）			1	帝京大学文学部考古学研究室
49	アリダード			1	帝京大学文学部考古学研究室
50	野帳			1	個人
GP-1	帝京大学八王子キャンパス内の遺跡地図（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・竜ヶ峰遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-2	上つ原遺跡第1次調査空中写真（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-3	竪穴建物の跡（1号竪穴建物跡）（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-4	建物に使われた柱の跡（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-5	陥穴の跡（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-6	竪穴建物の跡（2号竪穴建物跡）（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-7	竪穴建物の跡（3号竪穴建物跡）（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所

GP-8	炭焼窯の跡(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-9	墓(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-0	横穴式の墓(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-11	横穴式の墓(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-2	屋敷の跡(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-3	上っ原遺跡第2次・大塚日向遺跡調査空中写真(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-4	竪穴建物の跡(SI2)(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-15	竪穴建物の跡(SI1)(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-16	建物に使われた柱の跡(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-17	竪穴建物の跡(SI4)(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-18	竪穴建物の跡(SI5)(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-19	竪穴建物の跡(SI3)(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-20	陥穴の跡(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-21	竜ヶ峰遺跡第4次調査区空中写真(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-22	建物の跡(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-23	土器を焼いた跡(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-24	竪穴建物の跡(SI1)(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-25	竪穴建物の跡(SI2)(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-26	陥穴の跡(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-27	竪穴建物の跡(SI3)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-28	建物跡発見(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡(SI1)	1	帝京大学文化財研究所
GP-29	表土を重機で撤去(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡(B区)	1	帝京大学文化財研究所
GP-30	ジョレンやスコップを用いて表土を剥ぎ、遺構確認(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡	1	帝京大学文化財研究所
GP-31	土色の違いに沿って掘っていく(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡(SI1)	1	帝京大学文化財研究所
GP-3	位置、大きさ、深さを計測し、図面に記載(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡(A区SK142)	1	帝京大学文化財研究所
GP-33	遺物はすぐに取り上げずに出土位置を記録(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡(A区SI2)	1	帝京大学文化財研究所
GP-34	遺構完掘(写真)	東京都八王子市・多摩市	上っ原遺跡・大塚日向遺跡(SI1)	1	帝京大学文化財研究所
GP-35	断面図を作るための計測(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡(東壁断面図)	1	帝京大学文化財研究所
GP-36	平面図作成のため測量	東京都多摩市	上っ原遺跡(調査区測量)		帝京大学文化財研究所
GP-37	土器の注記(写真)	山梨県笛吹市		1	帝京大学文化財研究所
GP-38	土器の接合(写真)	山梨県笛吹市		1	帝京大学文化財研究所
GP-39	土器の実測(写真)	山梨県笛吹市		1	帝京大学文化財研究所
GP-40	調査資料の整理(写真)	山梨県笛吹市		1	帝京大学文化財研究所
GP-1	実測図のトレース(写真)	山梨県笛吹市		1	帝京大学文化財研究所
GP-2	調査報告書の刊行(写真)	山梨県笛吹市		1	帝京大学文化財研究所

第二章 遺跡をカガクする

番号	資料名	出土地	遺跡	数量	所蔵先
51	カマドから出土した道具(石・須恵器)	東京都八王子市	上っ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
52	粘土ひもを使った土器の作り方(再現)			1	帝京大学総合博物館
53	土師器甕	東京都八王子市	上っ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
54	須恵器のうつわ(須恵器坏)	東京都八王子市	上っ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
55	古代の関東地方の土師器(長胴甕)	東京都八王子市	御嶽山遺跡	1	帝京大学文学部考古学研究室
56	須恵器のうつわ(須恵器坏)				
57	土師器のうつわ(土師器坏)	東京都八王子市	上っ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
58	赤彩球胴甕	東京都八王子市	上っ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
59	縄文土器(曾利式)	東京都八王子市	上っ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
60	縄文土器(井戸尻式)	長野県上伊那郡	下伊那郡	1	帝京大学総合博物館
61	縄文土器(加曾利E式)	東京都八王子市	上っ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
62	土師器のうつわ(土師器坏)	岩手県北上市	北上市	1	帝京大学総合博物館
63	立花南遺跡(岩手県北上市)の赤彩球胴甕粘土分析用プレパラート	岩手県北上市	立花南遺跡	1	帝京大学文化財研究所
64	八幡遺跡(岩手県北上市)の赤彩球胴甕の粘土分析用プレパラート	岩手県北上市	八幡遺跡	1	帝京大学文化財研究所
65	北上川(岩手県北上市)の砂の分析用プレパラート	岩手県北上市		1	帝京大学文化財研究所
66	和賀川(岩手県北上市)の砂の分析用プレパラート	岩手県北上市		1	帝京大学文化財研究所
67	上っ原遺跡(帝京大学八王子キャンパス)の赤彩球胴甕の粘土分析用プレパラート	東京都八王子市		1	帝京大学文化財研究所

I 事業報告 2019 1 展覧会事業 《展示資料リスト：エミシ展》

68	多摩川（東京都）の砂の分析用プレパラート	東京都		1	帝京大学文化財研究所
69	入間川（埼玉県）の砂の分析用プレパラート	埼玉県		1	帝京大学文化財研究所
70	帝京大学八王子キャンパスのドブから発見したバクテリア由来のベンガラ	東京都八王子市	帝京大学八王子キャンパス	1	帝京大学総合博物館
GP-3	上つ原遺跡空中写真（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査）	1	
GP-44	平安時代の竪穴建物跡（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴建物跡）	1	
GP-45	石造りで煙出しのトンネルが長いカマド（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴カマド）	1	
GP-46	竪穴建物跡（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査3号竪穴）	1	
GP-47	縄文土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査3号竪穴）		
GP-48	竪穴建物跡（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	
GP-49	須恵器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）		
GP-50	発掘途中の様子（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	
GP-51	発見された生活の道具（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	5	
GP-52	上つ原遺跡から発見された建物跡（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	
GP-53	壁立式の竪穴建物（写真）	福島県白河市		1	福島県文化財センター白河館
GP-54	奈良・平安時代の竪穴建物の台所（写真）	福島県白河市		1	福島県文化財センター白河館
GP-55	カマド（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次2号竪穴）	1	
GP-56	カマド（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次1号竪穴）	1	
GP-57	カマド（写真）	岩手県北上市	千苺遺跡	1	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
GP-58	須恵器坏（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	
GP-59	土師器甕（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	
GP-0	粘土の紐を使った土器の作り方（写真）			2	
GP-1	八王子キャンパスの遺跡から発見された土師器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	3	
GP-2	岩手県北上市から発見された土師器（写真）	岩手県北上市		3	
GP-3	土師器甕（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第2次SI2）	1	
GP-4	須恵器壺（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号横穴墓）	1	
GP-5	縄文土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査3号竪穴）	1	
GP-6	縄文土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査3号竪穴）	1	
GP-7	縄文土器（写真）	長野県上伊那		1	
GP-8	赤彩土器と赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市		1	北上市教育委員会
GP-9	馬淵川の赤彩球胴甕（写真）	岩手県一戸町	大平遺跡	1	一戸町教育委員会
GP-0	大規模集落から発見された赤彩土器（写真）	岩手県盛岡市	台太郎遺跡	1	盛岡市遺跡の学び館
GP-1	三陸の赤彩球胴甕（写真）	岩手県大槌町	夏本遺跡	1	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
GP72	猫谷地古墳1号墳（写真）	岩手県北上市	江釣子古墳群猫谷地支群	1	北上市立博物館
GP73	土器を焼いた穴 SX54・55 千刈遺跡（写真）	岩手県北上市	千苺遺跡(SX54・55)	1	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
GP74	赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	千苺遺跡	1	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
GP75	赤彩高坏（写真）	岩手県北上市	江釣子古墳群五条丸支群	1	北上市教育委員会
GP76	赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	八幡遺跡	1	北上市教育委員会
GP77	赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	立花南遺跡	1	北上市教育委員会
GP78	赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	八幡遺跡	1	北上市教育委員会
GP79	赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	尻引遺跡	1	北上市教育委員会
GP80	赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	秋子沢遺跡	1	北上市教育委員会
GP81	赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	塚遺跡	1	北上市教育委員会
GP82	エミシ軍と坂上田村麻呂率いる朝廷軍が戦う様子（清水寺縁起絵巻 土佐光信筆）（写真）			1	東京国立博物館
GP-83	プレパラートの作成（写真）			6	
GP-84	偏光顕微鏡を使って分析（写真）			1	
GP-85	立花南遺跡の赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	立花南遺跡	1	
GP-86	類似した岩手県北上市川砂（写真）	岩手県		1	
GP-87	八幡遺跡の赤彩球胴甕（写真）	岩手県北上市	八幡遺跡	1	
GP-88	類似した岩手県和賀川川砂（写真）	岩手県		1	
GP-89	上つ原遺跡の赤彩球胴甕（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡	1	
GP-90	類似した東京都多摩川川砂（写真）	東京都		1	

GP-91	青森県今別町赤根沢の赤岩(写真)	青森県今別町		1	今別町教育委員会
GP-92	パイプ状ベンガラ(写真)	東京都八王子市		1	
GP-93	電子顕微鏡の例 帝京大学医真菌研究センター(写真)	東京都八王子市		1	
GP-94	立花南遺跡出土赤彩球胴甕のベンガラ(SEM写真)(写真)	岩手県北上市	立花南遺跡	1	
GP-95	江釣子古墳群八幡出土赤彩球胴甕のベンガラ(SEM写真)(写真)	岩手県北上市	江釣子古墳群八幡支群	1	
GP-96	八王子キャンパスから発見された赤彩球胴甕(写真)	東京都多摩市	上っ原遺跡	1	
GP-97	バクテリア由来のベンガラを発見!(写真)	東京都八王子市		1	
GP-98	八王子キャンパスのドブからバクテリア由来のベンガラを発見!(写真)	東京都八王子市		1	
GP-99	走査型電子顕微鏡(SEM)で確認されたパイプ状ベンガラ(写真)	東京都八王子市		1	
第二部 多摩に生きた古代東北の民エミシ					
第一章 古代東北の民「エミシ」(蝦夷)					
番号	資料名	出土地	遺跡	数量	所蔵先
71	歌舞伎 NEXT アテルイ 阿豆流為			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
72	社会科中学の歴史 日本の歩みと世界の歴史			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
73	日本の歴史 7 大仏問題から平安遷都へ			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
74	日本史 改訂版			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
75	初等科国史 上			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
76	火怨・北の英雄 アテルイ伝			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
77	中学社会 歴史分野			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
78	まんが日本の歴史 なぜなに辞典			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
79	知ってびっくり!日本の歴史のお話 前編			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
80	赤彩球胴甕	岩手県北上市	八幡遺跡	1	北上市教育委員会
81	赤彩球胴甕	岩手県北上市	八幡遺跡	1	北上市教育委員会
82	赤彩球胴甕	岩手県北上市	八幡遺跡	1	北上市教育委員会
83	赤彩球胴甕	岩手県北上市	八幡遺跡	1	北上市教育委員会
84	赤彩球胴甕	岩手県北上市	尻引遺跡	1	北上市教育委員会
85	赤彩球胴甕	岩手県北上市	秋子沢遺跡	1	北上市教育委員会
86	馬用の鉄製くつわ	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
87	鉄製の鍬(鋤)先	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
88	鉄製の斧	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
89	琥珀勾玉	岩手県北上市	江釣子古墳群 猫谷地支群	1	北上市教育委員会
90	碧玉丁子頭勾玉	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
91	メノウ勾玉・ガラス玉の首飾り	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
92	土玉	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
93	ガラス玉・土玉	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
94	鉄の鍬	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	2	北上市教育委員会
95	鉄の鍬	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	2	北上市教育委員会
96	蕨手刀	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
97	和同開珎	岩手県北上市	本宿遺跡	1	北上市教育委員会
98	北海道の影響を受けた土器	岩手県北上市	塚遺跡	1	北上市教育委員会
GP-00	悪路王首像(複製)(写真)			1	一般財団法人奥州市文化振興財団 奥州市埋蔵文化財調査センター
GP-101	日本書紀(写真)			1	国立国会図書館デジタルコレクション
GP-102	続日本紀(写真)			1	国立国会図書館デジタルコレクション
GP-103	尋常小学校国史 上巻(写真)			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
GP-104	尋常小学国史新指導書 上巻(写真)			1	国立国会図書館デジタルコレクション
GP-105	初等科国史(上)(写真)			1	帝京大学メディアライブラリーセンター
GP-106	馬線刻土器(写真)	岩手県北上市	八幡遺跡	1	北上市教育委員会
GP-107	馬を朝貢するエミシの記事(写真)			1	国会図書館デジタルコレクション
GP-108	馬用の鉄製轡(写真)	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
GP-109	昆布を貢ぐエミシの記事(写真)			1	国立国会図書館デジタルコレクション
GP-110	江釣子古墳群(写真)	岩手県北上市	江釣子古墳群	2	帝京大学総合博物館
GP-111	鉄製の斧(複製)(写真)			1	福島県文化財センター白河館
GP-112	鉄製の鍬(鋤)先(写真)	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
GP-113	鉄製の鍬(複製)(写真)			1	福島県文化財センター白河館
GP-114	竪穴建物跡(写真)	岩手県北上市	立花南遺跡	1	北上市教育委員会
GP-115	北上盆地で発掘された赤彩土器と赤彩球胴甕	岩手県北上市		1	北上市教育委員会

GP-116	錫製腕輪（錫釧）（写真）	岩手県北上市	江釣子古墳群 長沼支群	1	北上市教育委員会
GP-117	金層ガラス玉（ゴールドサンドイッチガラス）（写真）	岩手県北上市		1	北上市教育委員会
GP-118	瑪瑙勾玉・ガラス玉の首飾り（写真）	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
GP-119	北海道の影響を受けた土器（写真）	岩手県北上市	塚遺跡	1	北上市教育委員会
GP-20	琥珀勾玉（写真）	岩手県北上市	江釣子古墳群 猫谷地支群	1	北上市教育委員会
GP-121	鉄の鎌（写真）	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
GP122	蕨手刀（写真）	岩手県北上市	江釣子古墳群 五条丸支群	1	北上市教育委員会
GP123	和同開珎（写真）	岩手県北上市	本宿遺跡	1	北上市教育委員会
第二章 朝廷との争いとエミシの移住					
番号	資料名	出土地	遺跡	数量	所蔵先
99	多賀城に向う軍団兵士（復元）			1	福島県文化財センター白河館
GP-24	多賀城政庁跡第二期復元模型（写真）			1	東北歴史博物館
GP-25	御駒堂遺跡空中写真と竪穴建物跡（写真）	宮城県多賀城市	御駒堂遺跡	1	東北歴史博物館
GP-126	弩（復元）（写真）			1	福島県文化財センター白河館
GP-127	多賀城に向かう軍団兵士（復元）（写真）			1	福島県文化財センター白河館
GP-128	弓を射る兵士（復元）（写真）			1	福島県文化財センター白河館
GP-129	東北 38 年戦争関連地図（写真）			1	Google Earth
GP-130	悪路王首像（複製）（写真）			1	一般財団法人奥州市文化振興財団 奥州市埋蔵文化財センター
GP-131	清水寺縁起絵巻 土佐光信筆（写真）			1	東京国立博物館
GP-132	文屋綿麻呂『前賢故実』より（写真）			1	国立国会図書館デジタルコレクション
GP-133	志波城全景（写真）	岩手県盛岡市	志波城跡	1	盛岡市教育委員会
GP-134	徳丹城跡全景（写真）	岩手県矢巾町	徳丹城跡	1	矢巾町教育委員会
GP-135	胆沢城跡全景（写真）	岩手県奥州市	胆沢城跡	1	一般財団法人奥州市文化振興財団 奥州市埋蔵文化財センター
GP-136	『続日本紀』宝亀五年七月（写真）			1	国立国会図書館デジタルコレクション
GP-137	多賀城で発見された火災で焼け落ちた瓦（写真）	宮城県多賀城市	多賀城跡	1	東北歴史博物館
GP-138	『続日本紀』神亀二年閏正月				国立国会図書館デジタルコレクション
GP-139	『日本三代実録』貞観十七年五月				国立国会図書館デジタルコレクション
GP-140	『倭名類聚抄』巻七				国立国会図書館デジタルコレクション
第三章 移住の地 武蔵国多摩郡					
番号	資料名	出土地	遺跡	数量	所蔵先
100	すずり（円面硯）	東京都府中市	武蔵国府関連遺跡	1	府中市教育委員会
101	小刀（刀子）	東京都府中市	武蔵国府関連遺跡	1	府中市教育委員会
102	帯金具（鈔帯金具）	東京都府中市	武蔵国府関連遺跡	1	府中市教育委員会
103	武蔵国分寺の瓦	東京都国分寺市	武蔵国分寺	1	個人蔵
104	武蔵国分寺の瓦（スタンプ入り）	東京都国分寺市	武蔵国分寺	1	個人蔵
105	武蔵国分寺の瓦（線刻入り）	東京都国分寺市	武蔵国分寺	1	個人蔵
106	馬のくつわ（轡）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	2	東京都教育庁
107	馬具	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
108	あぶみを吊る鎖（兵庫鎖）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
109	馬の引き手	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
110	馬に押す焼印（焼印「土」）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
111	牛の鼻環	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
112	弓矢のやじり（鉄鏃）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
113	刀の一部（鏢・鏢・足金物）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
114	青銅のアイロン（火熨斗）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
115	製鉄炉の一部（ふいごの羽口）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
116	お堂に使われたと考えられる瓦（剣菱状単弁蓮華文軒丸瓦）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
117	お堂に使われたと考えられる瓦（牛角状中心飾り均正唐草文軒平瓦）	東京都日野市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育庁
GP-141	ニュータウン開発前の八王子キャンパス（写真）	東京都八王子市		1	帝京大学
GP-42	武蔵国分寺（写真）	東京都国分寺市	武蔵国分寺	1	国分寺市教育委員会
GP-143	武蔵国府（写真）	東京都府中市	武蔵国府関連遺跡	1	府中市郷土の森博物館
GP-144	百草・和田1号窯跡（写真）	東京都八王子市	百草・和田1号窯跡	1	帝京大学総合博物館
GP-145	落川・一の宮遺跡（写真）	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-146	瓦谷戸遺跡（写真）	東京都稲城市	瓦谷戸遺跡	1	稲城市教育委員会
GP-147	発掘された古代東山道武蔵路（写真）	東京都国分寺市		1	国分寺市教育委員会
GP-148	御殿山窯跡群（写真）	東京都八王子市	御殿山窯跡群	1	八王子市教育委員会
GP-149	多摩ニュータウンNo.107 遺跡（写真）	東京都八王子市	多摩ニュータウン No.107 遺跡	1	東京都埋蔵文化財センター
GP-150	国府の中心「国庁」と現在の官庁街にあたる「国衙」を南から見る（写真）	東京都府中市	武蔵国府関連遺跡	1	府中市郷土の森博物館
GP-151	一部復元された国衙と考えられる建物	東京都府中市	武蔵国府関連遺跡	1	帝京大学総合博物館
GP-152	奈良時代に、武蔵国司を務めた巨萬朝臣福信の想像模型（写真）			1	府中市郷土の森博物館
GP-153	役人必須の文房具（写真）			1	府中市郷土の森博物館
GP-154	現在の武蔵国分寺（写真）	東京都国分寺市	武蔵国分寺	1	帝京大学総合博物館

GP-55	武蔵国分寺の復元模型(写真)			1	国分寺市教育委員会
GP-56	武蔵国分寺の瓦(写真)	東京都国分寺市	武蔵国分寺	1	個人蔵
GP-157	馬の線刻画 東京都 瓦谷戸窯跡(写真)	東京都稲城市	瓦谷戸窯跡	1	稲城市教育委員会
GP-158	江戸時代の野馬追いの様子『成田名所図会』(写真)			1	国文学研究資料館
GP-159	牧の名前が書かれた記録『延喜式』(写真)			1	国文学研究資料館
GP-160	落川・一の宮遺跡(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-161	お寺に使われたと考えられる瓦(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-162	青銅のアイロン(火熨斗)(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-163	弓矢のやじり(鉄鎌)(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-164	刀の一部(鏢・鍔・足金物)(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-165	製鉄炉の一部(ふいごの羽口)(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-166	牛の骨(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-167	馬に押す焼印(焼印「土」)(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-168	江戸時代の鍛冶の様子『人倫訓蒙図彙』(写真)			1	国立国会図書館デジタルアーカイブ
GP-169	馬の頭の骨(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-170	馬の轡(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-171	鎖(兵庫鎖)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
第四章 古代多摩に生きたエミシたち					
番号	資料名	出土地	遺跡	数量	所蔵先
	エミシが住んでいた建物跡(9世紀半ば)から発見された生活道具(1号竪穴建物跡)	東京都八王子市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
118	刀子	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
119	須恵器系土師器質土器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
120	須恵器系土師器質土器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
121	須恵器系土師器質土器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
122	土師器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
123	土師器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
124	土師器 甕	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
125	土師器 甕	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
	エミシが住んでいた建物跡(9世紀半ば)から発見された生活道具(2号竪穴建物跡)	東京都八王子市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
126	筒状製品	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
127	棒状製品	東京都八王子市	上つ原遺跡	2	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
128	釘	東京都八王子市	上つ原遺跡	2	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
129	鎌	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
130	用途不明金具	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
131	鎖前金具?	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
132	刀子の一部	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
133	刀子	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
134	刀子	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
135	焼かれた牛の骨	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
136	焼かれた牛の骨	東京都八王子市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
137	砥石	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
138	たたき石	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
139	石斧	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
140	土師器 杯片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
141	土師器 杯片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
142	土師器 杯片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
143	土師器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
144	土師器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
145	土師器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
146	土師器 甕 上部	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
147	土師器 壺	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
148	土師器 甕	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
149	土師器 甕	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
150	須恵器片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
151	須恵器片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
152	須恵器片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
153	須恵器片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
154	須恵器 蓋	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
155	須恵器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
156	須恵器 杯片	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
157	須恵器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
158	須恵器系土師器質土器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
159	須恵器系土師器質土器 杯	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)

227	刀子	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
228	鏃	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
229	土製品	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	4	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
230	須恵器 坏 墨書土器	東京都八王子市	上つ原遺跡	3	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
231	土師器 鉢 ハラ状土器	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	6	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
232	山梨県特有の土器(甲斐型坏)	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
233	土器を試し焼きするための粘土の塊	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	6	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
234	糸紡ぎの道具(紡錘車)	東京都八王子市	上つ原遺跡	2	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
235	鉄製刀子	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
236	鉄製鏃	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
237	鉄斧	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
238	鉄製鎌(茎部)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡	2	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
239	牛の骨	東京都八王子市	上つ原遺跡	1式	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
240	帯金具(鈿帯金具)	東京都八王子市	上つ原遺跡	1	帝京大学総合博物館保管(多摩市・八王子市所有)
GP-72	イラストと同じ方向から見た現在の八王子キャンパス周辺(写真)	東京都八王子市・日野市・多摩市		1	帝京大学総合博物館
GP-73	墨になった木材(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査)	1	帝京大学総合博物館
GP-174	山梨県特有の土器(甲斐型坏)(写真)		上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-175	土器作りの回転台を置いたと考えられる穴(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査SI2)	1	帝京大学総合博物館
GP-176	土器を焼いたと考えられる穴(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査SK1)	1	帝京大学総合博物館
GP-177	土器を焼いたと考えられる穴から発見された「馬」と刻まれた土器(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査SK1)	1	帝京大学総合博物館
GP-178	土器を焼いたと考えられる穴から発見された東北系土器(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査SK1)	1	帝京大学総合博物館
GP-179	土器を試し焼きするための粘土の塊(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査SK1)	1	帝京大学総合博物館
GP-180	「馬」と刻まれた土器(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査SK1)	1	帝京大学総合博物館
GP-181	牛の下あごの骨(写真)	東京都八王子市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-182	牛の骨(写真)	東京都八王子市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-183	落川・一の宮遺跡で発見された牛の骨(写真)	東京都日野市・多摩市	落川・一の宮遺跡	1	東京都教育委員会
GP-184	鎌の一部(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査SI2)	1	帝京大学総合博物館
GP-185	鉄斧(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査1号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-186	穀物の種(写真)	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査)	1	帝京大学総合博物館
GP-187	糸紡ぎの道具の一部(紡錘車)(写真)	東京都八王子市・日野市	竜ヶ峰遺跡(第4次調査2号竪穴) 上つ原遺跡(第1次調査SI2)	1	帝京大学総合博物館
GP-188	役人用の帯金具(帯金具)(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-189	役人用の腰帯とその飾り(複製)(写真)			1	府中市郷土の森博物館
GP-190	多摩ニュータウンNo.241 遺跡調査風景(写真)	東京都八王子市	多摩ニュータウンNo.241 遺跡	1	東京都埋蔵文化財センター
GP-191	建物跡から発見された土器(写真)	東京都八王子市	多摩ニュータウンNo.241 遺跡	1	八王子市教育委員会
GP-192	多摩ニュータウンNo.304 遺跡調査風景(写真)	東京都八王子市	多摩ニュータウンNo.304 遺跡	1	東京都埋蔵文化財センター
GP-193	竪穴建物跡(3号住居)(写真)	東京都八王子市	多摩ニュータウンNo.304 遺跡	1	東京都埋蔵文化財センター
GP-194	建物跡から発見された土器(写真)	東京都八王子市	多摩ニュータウンNo.304 遺跡	1	八王子市教育委員会
GP-195	「狄口」墨書土器(写真)	埼玉県熊谷市	宮下遺跡	1	熊谷市教育委員会
GP-196	「狄」墨書土器(写真)	山梨県韮崎市	宮ノ前遺跡	1	韮崎市教育委員会
GP-197	馬の骨(写真)	山梨県南アルプス市	百々遺跡	1	山梨県立考古博物館
GP-198	竪穴建物跡(5号住居)(写真)	山梨県南アルプス市	百々遺跡	2	山梨県立考古博物館
GP-199	竪穴建物の跡(2号竪穴建物跡)(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-200	東北系土器(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-201	武蔵国産土器(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-202	赤彩球胴甕(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館
GP-203	山梨県特有の土器(写真)	東京都多摩市	上つ原遺跡(第1次調査2号竪穴)	1	帝京大学総合博物館

I 事業報告 2019 1 展覧会事業 <<展示資料リスト：エミシ展>>

GP-204	墨で文字が書かれた土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-205	糸紡ぎ道具の一部（紡錘車）（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-206	砥石（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-207	たたき石（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-208	鉄製品（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-209	役人用の帯金具（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-210	竪穴建物の跡（1号竪穴建物跡）（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-211	東北系土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-212	武蔵国産土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-213	鉄斧（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-214	鉄製品（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-215	墨で文字が書かれた土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-216	竪穴建物の跡（SI 3）（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・大塚日向遺跡（第2次調査 SI 3）	1	帝京大学総合博物館
GP-217	東北系土器（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・大塚日向遺跡（第2次調査 SI 3）	1	帝京大学総合博物館
GP-218	武蔵国産土器（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・大塚日向遺跡（第2次調査 SI 3）	1	帝京大学総合博物館
GP-219	竪穴建物の跡（SI 4）（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・大塚日向遺跡（第2次調査 SI 4）	1	帝京大学総合博物館
GP-220	東北系土器（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・大塚日向遺跡（第2次調査 SI 4）	1	帝京大学総合博物館
GP-221	武蔵国産土器（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・大塚日向遺跡（第2次調査 SI 4）	1	帝京大学総合博物館
GP-222	墨で文字が書かれた土器（写真）	東京都八王子市・多摩市	上つ原遺跡・大塚日向遺跡（第2次調査 SI 4）	1	帝京大学総合博物館
GP-223	竪穴建物の跡（SI 1）（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 1）	1	帝京大学総合博物館
GP-224	東北系土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 1）	1	帝京大学総合博物館
GP-225	武蔵国産土器・砥石（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 1）	1	帝京大学総合博物館
GP-226	土製品（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 1）	1	帝京大学総合博物館
GP-227	くぼみ石（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 1）	1	帝京大学総合博物館
GP-228	竪穴建物の跡（SI 2）（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-229	東北系土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-230	武蔵国産土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-231	土製品（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-232	鉄製品（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-233	ハラで文字が書かれた土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-234	糸紡ぎの道具の一部（紡錘車）（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-235	「馬」と刻まれた土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次 SK 1）	1	帝京大学総合博物館
GP-236	「得」と刻まれた土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次調査 SI 2）	4	帝京大学総合博物館
GP-237	道具で刻まれた跡がある土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次調査 SI 2）	1	帝京大学総合博物館
GP-238	道具で刻まれた跡がある土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次調査 SI 2）	1	帝京大学総合博物館

GP-239	「山」と墨で書かれた土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-240	墨の跡がある土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査2号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-241	墨の跡がある土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-242	墨で何らかの文字が書かれた土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-243	墨で何らかの文字が書かれた土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第1次調査1号竪穴）	1	帝京大学総合博物館
GP-244	「真」か「直」と墨で書かれた土器（写真）	東京都八王子市	竜ヶ峰遺跡（第4次調査）	1	帝京大学総合博物館
GP-245	「个」と墨で書かれた土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第2次調査 SI 4）	1	帝京大学総合博物館
GP-246	「个」と墨で書かれた土器（写真）	東京都多摩市	上つ原遺跡（第2次調査 SI 4）	1	帝京大学総合博物館

八王子キャンパス地下から出土した昔の道具たち

1. 縄文土器 深鉢
2. 縄文土器 壺 上部
3. 縄文土器 壺 上部
4. 石斧
5. 石器
6. 石器

縄文時代の竪穴建物跡から発見された生活道具

7. 須恵器 壺

奈良時代の墓から発見された副葬品

8. 磨製刀子
9. 須恵器 杯
10. 須恵器 壺

江戸時代の建物跡から発見された生活道具

11. 陶器
12. 陶器
13. 陶器
14. 陶器
15. 陶器
16. 陶器
17. 陶器

明治時代の築地窯跡から発見されたレンガ

明治時代の豊原窯跡から発見されたレンガ

縄文時代の竪穴建物跡から発見された生活道具

19. 縄文土器 深鉢
20. 縄文土器 深鉢
21. 縄文土器 深鉢
22. 縄文土器片 土師器
23. 縄文土器片
24. 縄文土器片
25. 縄文土器片
26. 縄文土器 壺

平安時代の建物跡から発見された生活道具

古墳時代の建物跡から発見された生活道具

27. 土師器 壺
28. 土師器 壺
29. 土師器 壺
30. 土師器 壺
31. 土師器 杯
32. 土師器 杯
33. 土師器 壺
34. 須恵器 壺
35. 削片 (ヒシヤウ)
36. 削片 (ヒシヤウ)
37. 削片 (ヒシヤウ)
38. おじり鉢
39. エビシ (スッコップ)
40. 壺 (ジョレン)
41. スタップ

江戸時代の建物跡から発見された生活道具

42. 発掘作業員マスキ
43. ビンゴール
44. 水筒
45. 平板と平板の部
46. ハケ
47. 箕 (ミ)
48. ネコ (一輪車)
49. アリゲード
50. 野帳

明治時代の築地窯跡から発見された道具 (石・須恵器)

明治時代の豊原窯跡から発見された道具 (石・須恵器)

縄文時代の竪穴建物跡から発見された生活道具

54. 須恵器のうつわ (須恵器杯)
55. 古代の陶器地方の土師器 (長頸壺)
56. 須恵器のうつわ (須恵器杯)
57. 土師器のうつわ (土師器杯)
58. 赤彩球罎
59. 縄文土器 (曾利式)
60. 縄文土器 (井戸見式)
61. 縄文土器 (加曾利式)
62. 土師器のうつわ (土師器杯)
63. 立花南遺跡 (岩手県北上市) の赤彩球罎

縄文時代の竪穴建物跡から発見された生活道具

64. 八幡遺跡 (岩手県北上市) の赤彩球罎の粘土分析用プレバート

65. 北上川 (岩手県北上市) の砂の分析用プレバート
66. 初瀬川 (岩手県北上市) の砂の分析用プレバート
67. 上野遺跡 (東京都八王子キャンパス) の赤彩球罎の粘土分析用プレバート
68. 多摩川 (東京都) の砂の分析用プレバート
69. 入瀬川 (埼玉県) の砂の分析用プレバート
70. 東京大学八王子キャンパスのドブから発見したバクテリア由来のパンガラ
71. 歌舞伎 NEXT アテイル 阿豆流
72. 社会科中学の歴史 日本の歩みと世界の歴史
73. 日本の歴史? 大仏明徳から平安遷都へ
74. 日本史 改訂版
75. 初等科歴史 上
76. 火祭・北の真流 アテイル広
77. 中学社会 歴史分業
78. まんが日本の歴史 なぜに辞典
79. 知ってびっくり! 日本の歴史のお話 前期
80. 赤彩球罎
81. 赤彩球罎
82. 赤彩球罎
83. 赤彩球罎
84. 赤彩球罎
85. 赤彩球罎
86. 馬用の鞍轡くつわ
87. 鞍製の茶 (職) 矢
88. 鞍製の茶
89. 琥珀勾玉
90. 碧玉子母勾玉
91. メノウ勾玉・ガラス玉の首飾り
92. 土玉
93. ガラス玉・土玉
94. 表の巻
95. 表の巻
96. 鼻手刀
97. 初瀬川

98. 北海道の影響を受けた土器

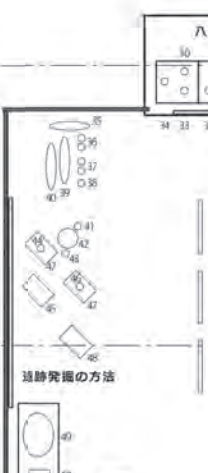
99. 多摩川に遡る国産土 (復元)
100. すずり (内面鏡)
101. 小刀 (刀子)
102. 銅金具 (銅金具)
103. 武蔵国分寺の瓦
104. 武蔵国分寺の瓦 (スタンプ入り)
105. 武蔵国分寺の瓦 (線刻入り)
106. 馬のくつわ (曹)
107. 馬具
108. あぶみを吊る綱 (兵庫綱)
109. 馬の引き手
110. 馬に押す綱印 (焼印「土」)
111. 牛の鼻環
112. 馬のやじり (鉄脚)
113. 刀の一部 (柄・鍔・足金物)
114. 青銅のアイロン (火製斗)
115. 製鉄炉の一部 (ふいごの羽口)
116. お釜に使われたと考えられる瓦 (銅製状 単行遺文軒九五)
117. お釜に使われたと考えられる瓦 (平角状 中心部均正康平文軒九五)
118. 刀子
119. 須恵器系土師器質土器 杯
120. 須恵器系土師器質土器 杯
121. 須恵器系土師器質土器 杯
122. 土師器 杯
123. 土師器 杯
124. 土師器 壺
125. 土師器 壺

132. 刀子の一部

133. 刀子
134. 刀子
135. 焼かれた年の骨
136. 焼かれた年の骨
137. 砥石
138. たたき石
139. 石斧
140. 土師器 杯片
141. 土師器 杯片
142. 土師器 杯片
143. 土師器 杯
144. 土師器 杯
145. 土師器 杯
146. 土師器 壺 上部
147. 土師器 壺
148. 土師器 壺
149. 土師器 壺
150. 須恵器片
151. 須恵器片
152. 須恵器片
153. 須恵器片
154. 須恵器 壺
155. 須恵器 壺
156. 須恵器 杯片
157. 須恵器 杯
158. 須恵器系土師器質土器 杯
159. 須恵器系土師器質土器 杯
160. 須恵器系土師器質土器 杯
161. 赤彩球罎 上部
162. 須恵器 杯
163. 須恵器 杯
164. 須恵器 杯
165. 須恵器 杯
166. 須恵器 杯
167. 須恵器 壺 胴部

エミシが住んでいた建物跡 (9世紀半ば) から発見された生活道具 (2号竪穴建物跡)

エミシが住んでいた建物跡 (9世紀半ば) から発見された生活道具 (53)



エビローク 多摩に移住したエミシとその後



エミシの生活②

エミシの生活①

V4 遺跡から発見された文字

スライディング窓A
W2,863, 2,953

エミシの生活 (建物内の様子)

第3章 移住の地 多摩

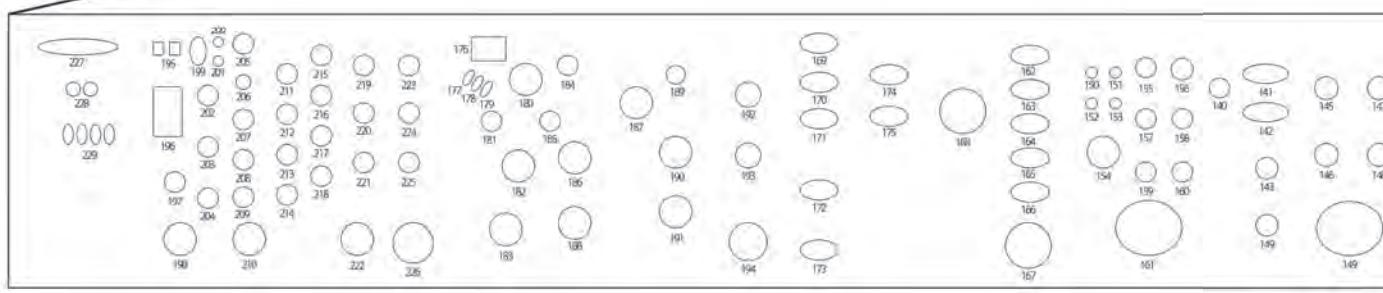
古代の多摩 - 武蔵国多摩郡

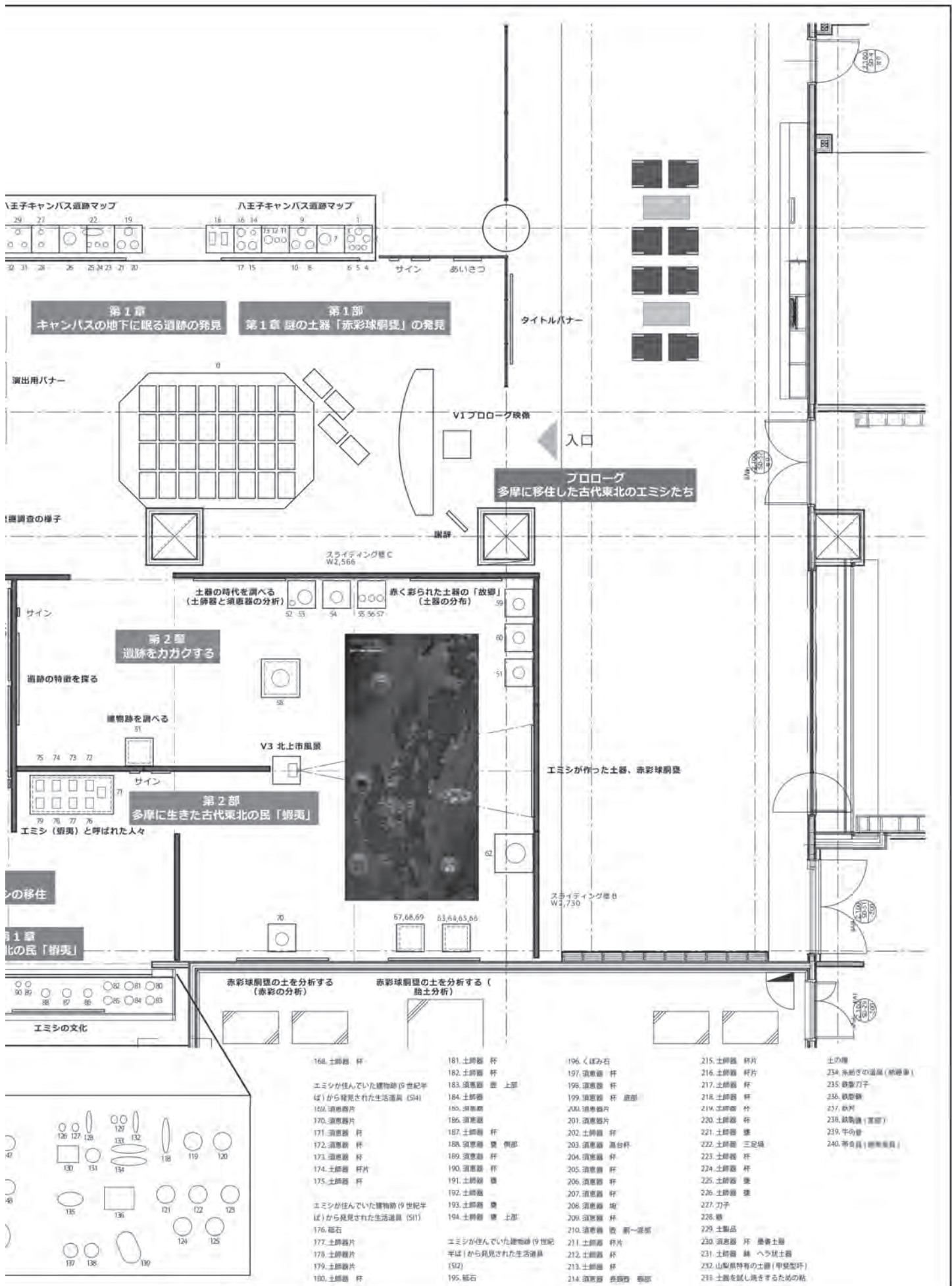
エミシの強制移住

「東北38年戦争」
エミシと朝廷の戦い

第2章 東北38年戦争とエミシ

第1章 古代東北





図面名称： 平面図

(2) その他展覧会

① 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「Teikyo Art Annual - ひとのかたち -」

会 期 2019年1月28日(月)～5月9日(木)

主 催 帝京大学総合博物館

概 要 帝京大学が所蔵する東京藝術大学卒業制作
作品を中心に、現代の若手作家を紹介。

入場者数 5,688名(うち2019年度2,856名)



ミニ企画展「Teikyo Art Annual-ひとのかたち-」①



ミニ企画展「Teikyo Art Annual-ひとのかたち-」チラシ



ミニ企画展「Teikyo Art Annual-ひとのかたち-」②

② 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「狩野派から近代日本画へ」

会 期 2019年1月28日(月)～5月20日(月)

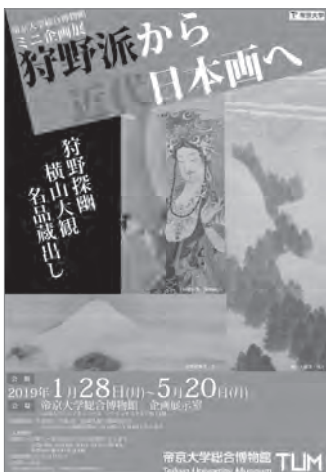
主 催 帝京大学総合博物館

概 要 帝京大学が所蔵する狩野探幽や横山大観を中心
に近世から明治時代の日本画の歴史を紹介。

入場者数 6,643名(うち2019年度3,811名)



ミニ企画展「狩野派から近代日本画へ」①



ミニ企画展「狩野派から近代日本画へ」チラシ



ミニ企画展「狩野派から近代日本画へ」②

③帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「本草学と薬用植物」

会 期 2019年1月28日(月)～9月28日(土)

主 催 帝京大学総合博物館

協 力 帝京大学薬学部

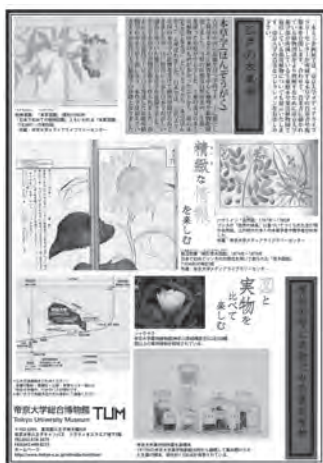
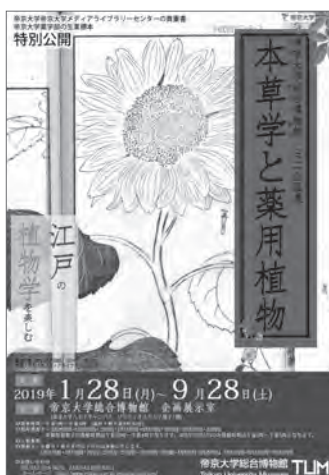
帝京大学メディアライブラリーセンター

概 要 帝京大学メディアライブラリーセンターが所蔵する西洋の植物図鑑や江戸時代の本草学の和本とともに薬学部が所蔵する生薬標本を紹介。

入場者数 20,291名(うち2019年度17,459名)



ミニ企画展「本草学と薬用植物」①



ミニ企画展「本草学と薬用植物」チラシ



ミニ企画展「本草学と薬用植物」②

④ 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「森田安次展」

会 期 2019年6月15日(土)～9月28日(土)

主 催 帝京大学総合博物館

協 力 帝京大学書道研究所

概 要 帝京大学書道研究所が所蔵する夭折の書家、森田安次の作品を紹介。

入場者数 11,260名



ミニ企画展「森田安次展」①



ミニ企画展「森田安次展」チラシ



ミニ企画展「森田安次展」②

⑤ 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「シルクロードを掘る

－世界遺産アク・ベシム遺跡の調査 2019－」

会 期 2019年6月15日(土)～9月28日(土)

主 催 帝京大学シルクロード学術調査団

帝京大学総合博物館

概 要 帝京大学シルクロード学術調査団による本年度
アク・ベシム遺跡発掘成果速報展。

入場者数 11,260名



ミニ企画展「シルクロードを掘る
-世界遺産アク・ベシム遺跡の調査」チラシ



ミニ企画展「シルクロードを掘る
-世界遺産アク・ベシム遺跡の調査」①



ミニ企画展「シルクロードを掘る
-世界遺産アク・ベシム遺跡の調査」②

⑥ 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「Teikyo Art Annual -なつのいろ-」

会 期 2019年6月27日(木)～9月5日(木)

主 催 帝京大学総合博物館

概 要 所蔵する東京藝術大学卒業制作作品を中心に、
現代の若手作家を紹介。

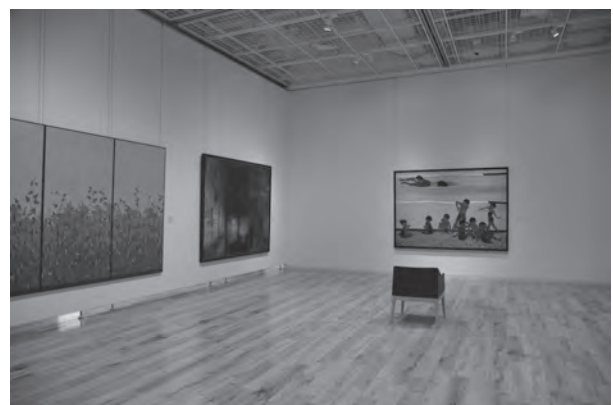
入場者数 7,170名



ミニ企画展
「Teikyo Art Annual
-なつのいろ-」
チラシ



ミニ企画展「Teikyo Art Annual-なつのいろ-」①



ミニ企画展「Teikyo Art Annual-なつのいろ-」②

⑦ 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「経済学の古典をみる」

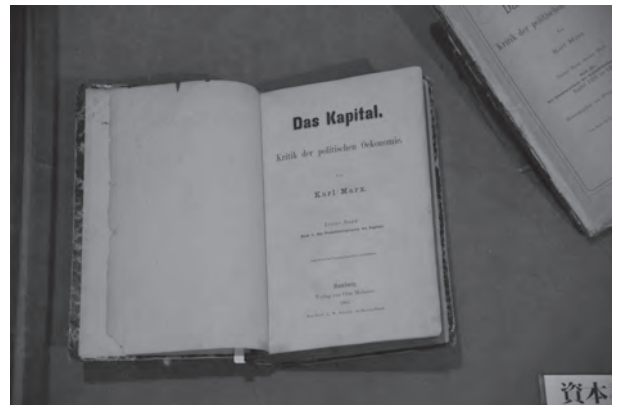
会 期 2020年3月19日(木)～9月13日(日)
 主 催 帝京大学総合博物館
 協 力 帝京大学メディアライブラリーセンター
 概 要 メディアライブラリーセンターが所蔵する経済学の稀覯本を紹介。
 入場者数 4,345名 ※うち2019年度分 170名



ミニ企画展「経済学の古典をみる」①



ミニ企画展「経済学の古典をみる」チラシ



ミニ企画展「経済学の古典をみる」②

⑧ 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「Teikyo Art Annual VOL3」

会 期 2020年3月19日(木)～9月13日(日)
 主 催 帝京大学総合博物館
 概 要 所蔵する東京藝術大学卒業制作作品を中心に、現代の若手作家を紹介。
 入場者数 4,345名 ※うち2019年度分 170名



ミニ企画展「Teikyo Art Annual VOL3」①



ミニ企画展「Teikyo Art Annual VOL3」チラシ



ミニ企画展「Teikyo Art Annual VOL3」②

ミニ企画展「Teikyo Art Annual - ひとのかたち - 」					
出品目録					
番号	資料名	年代	数量	所蔵先	
前期展示					
1	空砲（守みどり）	1997	1	帝京大学	
2	水の国（藤原まどか）	1998	1	帝京大学	
3	ピュグマリオン（飯塚雅恵）	2002	1	帝京大学	
4	星の風（龍口経太）	2003	1	帝京大学	
5	空蟬 -utsusemi-（首根原（阿武）雅江）	2004	1	帝京大学	
6	そして世界は産声をあげた（島田沙菜美）	2016	1	帝京大学	
後期展示					
7	透明の色（鈴木裕斗）	2019	1	帝京大学	
8	時を売る人（沼田愛実）	2019	1	帝京大学	
9	花の女神エレシャーン〜界Ⅰ〜 楽園エルチャドラ〜界Ⅱ〜 常世アドナブトラ〜界Ⅲ〜	2019	3	帝京大学	
10	かくりみ（矢野佑貴）	2019	1	帝京大学	

ミニ企画展「狩野派から近代日本画へ」					
出品目録					
番号	資料名	作者	年代	数量	所蔵先
1	狩野正信「紙本墨画淡彩周茂叔愛蓮図」（写真）	狩野正信	15世紀	1	東京国立博物館
2	狩野探幽像（写真）	伝桃田柳栄	17世紀	1	京都国立博物館
3	狩野探幽「不二」	狩野探幽	17世紀後半	1	帝京大学総合博物館
4	狩野益信像（写真）	狩野美信	18世紀	1	東京国立博物館
5	狩野益信「山水花鳥絵巻」	狩野益信	17世紀後半	1	帝京大学総合博物館
6	フェノロサ肖像写真（写真）			1	『写真明治大正60年史』（1956） 国立国会図書館
7	狩野芳崖肖像写真（写真）			1	『国史肖像大成』（1941）国立国会図書館
8	狩野芳崖「悲母観音」（写真）	狩野芳崖	1888	1	東京芸術大学
9	東京美術学校（写真）			1	『東京美術学校一覽從大正2年至3年』（1913）国立国会図書館
10	岡倉天心肖像写真（写真）			1	茨城県立天心記念五浦美術館
11	橋本雅邦肖像写真（写真）			1	Wikipedia
12	橋本雅邦「龍虎図屏風」（写真）	橋本雅邦	1895	1	静嘉堂文庫美術館
13	横山大観肖像写真（写真）			1	『横山大観』（1954）国立国会図書館
14	横山大観「残月」	横山大観	1910	1	帝京大学総合博物館
15	下村観山肖像写真（写真）			1	『日本美術院史』（1944）国立国会図書館
16	下村観山「楊柳観音」	下村観山	19世紀後半 ～20世紀前半	1	帝京大学総合博物館

ミニ企画展「本草学と薬用植物」					
出品目録					
番号	資料名	作者	年代	数量	所蔵先
1 江戸の本草学					
1	『本草綱目』（写真）	李時珍	1578	1	国立国会図書館デジタルコレクション
2	李時珍像（写真）			1	Wikipedia
3	『訓蒙図彙』（写真）	中村楊斎	1666	1	国立国会図書館デジタルコレクション
4	中村楊斎像（写真）		江戸	1	『先哲像伝』（1922）国立国会図書館
5	『草木写生春秋之巻』	狩野重賢	17世紀	1	国立国会図書館デジタルコレクション
6	『大和本草』（写真）	貝原益軒	1709	1	国立国会図書館デジタルコレクション
7	貝原益軒像（写真）		江戸	1	『先哲像伝』（1922）国立国会図書館
8	『花彙』（写真）	小野蘭山、島田充房	1759	1	国立国会図書館デジタルコレクション
9	『蘭山翁画像』（写真）	谷文晁	1809	1	国立国会図書館デジタルコレクション
10	『物類品鑑』（写真）	平賀源内	1763	1	国立国会図書館デジタルコレクション
11	平賀源内像（写真）	栗原信充	江戸後期	1	『肖像集十』（江戸後期）国立国会図書館
12	『泰西本草名疏』（写真）	伊藤圭介	1829	1	国立国会図書館デジタルコレクション
13	伊藤圭介肖像写真（写真）		1891	1	『伊藤圭介先生ノ伝』（1927） 国立国会図書館
14	『本草図譜』（写真）	岩崎灌園	1830	1	国立国会図書館デジタルコレクション
15	岩崎灌園像（写真）		江戸	1	『医家先哲肖像集』（1936） 国立国会図書館
16	『本草綱目啓蒙図譜』（写真）	井口望之	19世紀	1	国立国会図書館デジタルコレクション
17	『草木図説』（写真）	飯沼慾斎	1856	1	国立国会図書館デジタルコレクション
18	飯沼慾斎像（写真）		江戸	1	『新訂草木図説』（1875） 帝京大学総合博物館
19	牧野富太郎（写真）		20世紀	1	『牧野植物学全集 第1巻』（1934） 国立国会図書館
20	『本草図譜』（複製版）	岩崎灌園	1980	1式	帝京大学メディアライブラリーセンター
21	『新訂草木図説』	飯沼慾斎	1875	1式	帝京大学メディアライブラリーセンター
22	『日本植物図説』	伊藤圭介	1874	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
23	『植学浅解』	小野職愨	1875	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
24	『植学訳箋』	小野職愨	1874	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
25	『増訂草木図説』	牧野富太郎	1907	1	帝京大学メディアライブラリーセンター

26	『日本植物図鑑』	牧野富太郎	1925	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
27	ムラサキ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
28	ウンシュウミカン(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
29	ウメ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
30	クズ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
31	コブシ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
32	モモ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
33	サフラン(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
34	シャクヤク(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
35	レンギョウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
36	コガネバナ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
37	ウコン(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
38	オニユリ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
39	ドクダミ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
40	トラゴマ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
41	ウツボグサ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
42	クララ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
43	サジオモダカ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
44	カワラヨモギ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
45	リンドウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
46	ミシマサイコ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
47	ベニバナ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
48	キキョウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
49	ショウガ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
50	ハス(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
2 植物図譜と実物でみる薬用植物					
番号	資料名	作者	年代	数量	所蔵先
51	李時珍『本草綱目』(写真)	李時珍	1578	1	国立国会図書館デジタルコレクション
52	ドドネウス『草木誌』(写真)	Rembertus Dodonaeus	1644	1	国立国会図書館デジタルコレクション
53	ヨンストン『動物誌』(写真)	Johannes Jonston	1649	1	国立国会図書館デジタルコレクション
54	ヴァイマン『薬用植物図譜』(写真)	Johann Wilhelm Weinmann	18世紀	1	国立国会図書館デジタルコレクション
55	ハウイトン『自然誌』(写真)	Maarten Houttuyn	1761-1785	1	国立国会図書館デジタルコレクション
56	岩崎灌園『本草図譜』(写真)	岩崎灌園	1828	1	国立国会図書館デジタルコレクション
57	飯沼慾斎『新訂草木図説』(写真)	飯沼慾斎	1876	1	国立国会図書館デジタルコレクション
58	マオウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
59	麻黄(マオウ)(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
60	帝京大学薬用植物園(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
61	サフラン(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
62	レンギョウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
63	アカヤジオウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
64	『Natuurlyke Historie of uitoerige beschryving der dieren, planten en mineraalen, volgens het samenstel van den heer Linnaeus (リンネ氏の体系による動物・植物・鉱物の詳細な記述)』(ハウイトン『自然誌』)	Maarten Houttuyn	1761-1785	1式	帝京大学メディアライブラリーセンター
65	『Siebold's Florilegium of Japanese Plants (シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション)』(ファクシミリ版)	Philipp Franz Balthasar von Siebold	1993	1式	帝京大学メディアライブラリーセンター
66	茶葉		1902	1	帝京大学薬用植物園
67	アマチャ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
68	一等大黄		1984	1	帝京大学薬用植物園
69	信州大黄		1970	1	帝京大学薬用植物園
70	甘草			1	帝京大学薬用植物園
71	東北甘草		1986	1	帝京大学薬用植物園
72	ウラルカンゾウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
73	スペインカンゾウ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
74	山梔子		1977	1	帝京大学薬用植物園
75	黄柏			1	帝京大学薬用植物園
76	クチナシ(実)(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
77	クチナシ(花)(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
78	キハダ(写真)		2017	1	帝京大学薬用植物園
79	沙参		1986	1	帝京大学薬用植物園
80	オタネニンジン		1986	1	帝京大学薬用植物園
81	竹節人參		1972	1	帝京大学薬用植物園
82	薬用人參		1979	1	帝京大学薬用植物園

ミニ企画展「森田安次展」出品目録					
番号	作品名	作者	制作年代	数量	所蔵
1	「大うみの」	森田安次	昭和	1	帝京大学書道研究所
2	木下利玄歌	森田安次	1954	1	帝京大学書道研究所
3	与謝蕪村句	森田安次	1956	1	帝京大学書道研究所
4	風の又三郎（複製）	森田安次	1942	1	帝京大学書道研究所
5	暁紅	森田安次	1957	1	帝京大学書道研究所
6	正岡子規 句	森田安次	1957	1	帝京大学書道研究所
7	ふるさと	森田安次	1956	1	帝京大学書道研究所
8	帰る雁	森田安次	1958	1	帝京大学書道研究所

ミニ企画展「シルクロードを掘る - 世界遺産アク・ベシム遺跡の調査 2019-」 出品目録					
番号	資料名	作者	年代	数量	所蔵先
1	空から見た世界遺産アク・ベシム（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
2	アク・ベシム遺跡全景（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
3	AKB13 区的全景写真（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		2	帝京大学総合博物館
4	南壁の断面の様子（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
5	第1シャプリスタンの東壁（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
6	AKB15 区的全景写真（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
7	「花の石敷き」と井戸状遺構（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
8	南壁の版築構造の様子（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
9	『The Report of the Joint Archaeological Research of Ak-Beshim Site in the Kyrgyz Republic, 2018』	Bakit AMANBAEVA (Institute of History and Cultural Heritage, National Academy of Sciences, Kyrgyz Republic) Kazuuya YAMAUCHI (Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University)	2019	1	帝京大学総合博物館
10	『国際シンポジウム シルクロードを掘る - いま蘇る、いにしへの道 -』（文化庁 東アジア芸術家・文化人等交流・協力事業）	帝京大学		2	帝京大学総合博物館
11	『シルクロードを掘る - いま蘇る、いにしへの道 - 資料集 2018』（文化庁 東アジア芸術家・文化人等交流・協力事業）	帝京大学	2019	1	帝京大学総合博物館
12	『帝京大学文化財研究所 研究報告 第17集』	帝京大学文化財研究所	2018	1	帝京大学総合博物館
13	『スイヤブ - 世界遺産アク・ベシム - 2017』（DVD+CD）	山内和也（帝京大学文化財研究所） バキット＝アマンバエヴァ （キルギス共和国国立科学アカデミー）	2019	2	帝京大学総合博物館
14	『帝京大学シルクロード学術調査団 調査研究報告 アク・ベシム（スイヤブ）2017』	帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所	2019	1	帝京大学総合博物館
15	『2017年度 シルクロード学研究会 報告集』	帝京大学シルクロード総合学術研究センター 帝京大学文化財研究所・公益財団法人山梨文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー	2017	1	帝京大学総合博物館
16	『キルギス共和国国立科学アカデミーと帝京大学文化財研究所によるキルギス共和国アク・ベシム遺跡の共同調査 2016』	キルギス共和国国立科学アカデミー歴史遺産研究所・帝京大学文化財研究所	2018	1	帝京大学総合博物館
17	フェルト製品			7	帝京大学総合博物館
18	カイコ			1	帝京大学総合博物館
19	大通りの路面の重なり（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
20	日干しレンガで造られた建物（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
21	大ガメを利用したパン焼き竈（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
22	調査区から出土した大量の瓦の破片（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
23	瓦の下から発見された「花の石敷き」（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
24	井戸状遺構内の土器と動物骨（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
25	ブドウ属の種実（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
26	メロンの種実（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		2	帝京大学総合博物館
27	スイカの種実（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
28	レンズマメの種実（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
29	コムギの種実（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
30	オオムギの種実（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
31	トリの動物骨（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
32	ネコの動物骨（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
33	イヌの動物骨（写真 + 実物資料）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
34	ウシの動物骨（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
35	カエルの動物骨（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
36	ウマの動物骨（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館
37	ヒツジの動物骨（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		2	帝京大学総合博物館
38	花の石敷き（写真）	帝京大学シルクロード学術調査団		1	帝京大学総合博物館

ミニ企画展「Teikyo Art Annual - なつのいろ -」出品目録					
番号	資料名	作者	年代	数量	所蔵先
1	土草草畑	山村龍太郎毅望	2002	1	帝京大学総合博物館
2	驟雨に滲む	高橋瑞稀	2017	1	帝京大学総合博物館
3	水際のひよこ	富川美和子	2001	1	帝京大学総合博物館
4	幸福幻想	大竹寛子	2006	1	帝京大学総合博物館
5	夏	加来万周	1997	1	帝京大学総合博物館

ミニ企画展「経済学の古典をみる」 出品目録						
番号	資料名	作者	年代	出版社	数量	所蔵先
1	実証された論文	ジョサイア・チャイルド	1681年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
2	政治算術	ウィリアム・ベティ	1699年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
3	道徳原理の研究	デイビット・ヒューム	1751年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
4	道徳感情論	アダム・スミス	1759年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
5	経済の原理	ジェームズ・スチュアート	1767年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
6	法課税に対する抗議	ジェレミー・ベンサム	1793年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
7	国富論	アダム・スミス	1800年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
8	人口論	トーマス・ロバート・マルサス	1806年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
9	マルサス氏への手紙	ジャン＝パティスト・セイ	1820年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
10	道徳及び立法諸原理序説	ジェレミー・ベンサム	1823年		2	帝京大学メディアライブラリーセンター
11	経済学原理	ジョン・スチュアート・ミル	1852年		1	帝京大学メディアライブラリーセンター
12	資本論	カール・マルクス	1867～1894年	Otto Meissner	4	帝京大学メディアライブラリーセンター
13	資本論	カール・マルクス	1872年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
14	資本論	カール・マルクス	1872年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
15	資本論	カール・マルクス	1875年	Librairie du Progrès	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
16	資本論	カール・マルクス	1883～1887年	Charles H. Kerr Publishing Company	3	帝京大学メディアライブラリーセンター
17	資本論	カール・マルクス	1883～1887年	William Glaisher, limited	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
18	資本論	カール・マルクス	1883～1887年	Swan Sonnenschein & Co. LTD	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
19	資本論	カール・マルクス	1885年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
20	資本論	カール・マルクス	1885年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
21	資本論	カール・マルクス	1887年	Swan Sonnenschein, Lowrey & Co	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
22	資本論	カール・マルクス	1887年	Swan Sonnenschein	2	帝京大学メディアライブラリーセンター
23	資本論	カール・マルクス	1889年	Swan Sonnenschein	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
24	資本論	カール・マルクス	1890年	THE HUMBOLDT PUBLISHING CO	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
25	資本論	カール・マルクス	1890年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
26	資本論	カール・マルクス	1891年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
27	資本論	カール・マルクス	1894年	Otto Meissner	2	帝京大学メディアライブラリーセンター
28	資本論	カール・マルクス	1899年	Karl Dietz Verlag Berlin	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
29	資本論	カール・マルクス	1903年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
30	資本論	カール・マルクス	1903年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
31	資本論	カール・マルクス	1904年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
32	資本論	カール・マルクス	1906年	The Modern Library	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
33	資本論	カール・マルクス	1909年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
34	資本論	カール・マルクス	1910年	Wereldbibliotheek	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
35	資本論	カール・マルクス	1914年	J.W.W Dietz Nachfolger	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
36	資本論	カール・マルクス	1920～1921年	Verlag J.H.W. Dietz Nachf. Bonn	2	帝京大学メディアライブラリーセンター
37	資本論	カール・マルクス	1922年	Otto Meissner	4	帝京大学メディアライブラリーセンター
38	資本論	カール・マルクス	1926～1929年	Verlag J.H.W. Dietz Nachf. Bonn	3	帝京大学メディアライブラリーセンター
39	資本論	カール・マルクス	1928年	George Allen & Unwin LTD	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
40	資本論	カール・マルクス	1928年	J.H.W Dietz Nachf	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
41	資本論	カール・マルクス	1929年	Alfred Kröner Verlag	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
42	資本論	カール・マルクス	1930年	J.M.dent & sons ltd	2	帝京大学メディアライブラリーセンター
43	資本論	カール・マルクス	1932年	Gustav Kiepenheuer Verlag	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
44	資本論	カール・マルクス	1932年	verlag für literatur und politik	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
45	資本論	カール・マルクス	1934年	Verlagsgenossenschaft	3	帝京大学メディアライブラリーセンター
46	資本論	カール・マルクス	1948～1969年	Les Éditions sociale	4	帝京大学メディアライブラリーセンター
47	資本論	カール・マルクス	1948年	Saraswati Library	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
48	資本論	カール・マルクス	1951～1959年	Książka i Wiedza	4	帝京大学メディアライブラリーセンター
49	資本論	カール・マルクス	1953年	Karl Dietz Verlag Berlin	2	帝京大学メディアライブラリーセンター
50	資本論	カール・マルクス	1957～1959年	Foreign Languages Publishing House	3	帝京大学メディアライブラリーセンター
51	資本論	カール・マルクス	1959年	Otto Meissner	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
52	資本論	カール・マルクス	1967年	極東書店出版社	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
53	資本論	カール・マルクス	1969年	極東書店出版社	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
54	ウィリアム・ベティ(写真)					Wikipedia

55	ジョサイア・チャイルド (写真)				Wikipedia
56	フランソワ・ケネー (写真)				Wikipedia
57	デイビット・ヒューム (写真)				Wikipedia
58	ジェームズ・ステュアート (写真)				Wikipedia
59	アダム・スミス(写真)				Wikipedia
60	ジェレミー・ベンサム (写真)				Wikipedia
61	トマス・ロバート・マル サス(写真)				Wikipedia
62	ジャン＝パティスト・セ イ(写真)				Wikipedia
63	デヴィット・リカード (写真)				Wikipedia
64	ジョン・スチュアート・ ミル(写真)				Wikipedia
65	カール・マルクス(写真)				Wikipedia
66	鈴木鴻一郎(写真)				帝京大学メディアライブラリーセンター (出典：鈴木鴻一郎著『資本論偏歴』)

ミニ企画展「Teikyo Art Annual VOL3」
出品目録

作品番号	作品名	作者	制作年代	数量	所蔵
1	旅	澁澤 星	2012	1点	帝京大学
2	暮れかぬる	西岡 悠妃	2014	1点	帝京大学
3	添う	水野 香菜	2014	1点	帝京大学
4	結	鹿間 麻衣	2015	1点	帝京大学
5	scavenge	金澤 隆	2013	1点	帝京大学
6	小焼けのドウ	木村 萌	2020	1点	帝京大学
7	それ	鈴木 萌恵子	2020	1点	帝京大学

(3) 授業展示

① 「心理学基礎演習Ⅰ」学修成果ミニ企画展

ひとは世界をどう感じてる？ - 心理学的アプローチ -

会 期 2019年7月24日(水)～12月2日(月)

主 催 心理学基礎演習Ⅰ

早川 友恵(文学部心理学科教授)担当クラス

入場者数 10,084名

概 要 文学部心理学科早川ゼミ(2年生)のクラス発表の一部。「錯視」を題材にしてヒトの特性を考える。



「心理学基礎演習Ⅰ」学修成果ミニ企画展①



「心理学基礎演習Ⅰ」学修成果ミニ企画展チラシ



「心理学基礎演習Ⅰ」学修成果ミニ企画展②

② “Designomics”, Gala and YAKUSHIMA. The Challenge

- 屋久杉流通への挑戦：デザインと経済 -

会 期 2019年9月17日(火)～9月28日(土)

主 催 演習Ⅰ

三竝康平(経済学部経営学科講師)担当クラス

入場者数 1,794名

概 要 経済学部三竝ゼミによる「屋久島活性化を目的とした経済学・経営学的考察」に関するパネル等の展示、および、GENETO主催の「建築家の椅子展」の思考過程などを三竝ゼミが中心に整理した展示。



“Designomics”, Gala and YAKUSHIMA. The Challenge
- 屋久杉流通への挑戦：デザインと経済 - ①



“Designomics”, Gala and YAKUSHIMA. The Challenge - 屋久杉流通への挑戦：デザインと経済 - チラシ



“Designomics”, Gala and YAKUSHIMA. The Challenge
- 屋久杉流通への挑戦：デザインと経済 - ②

③ 「アイドル」をつくろう：

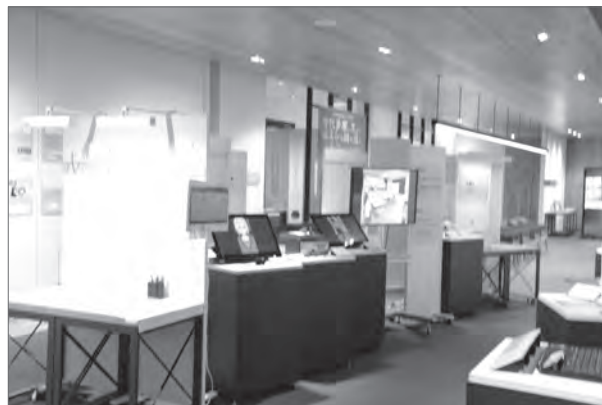
「アイドル」の型の変遷とニュータイプ

会 期 2019年12月18日(水)
～2020年1月14日(火)

主 催 メディアコンテンツ制作実習
田島悠来(文学部社会学科助教)担当クラス

入場者数 1,800名

概 要 「アイドル」＝人＝コンテンツの歴史や型を題材にして、メディアコンテンツ制作実習の学修成果を発表する展示。授業内において学生自らがグラフィックパネル・解説文を作成する。



「アイドル」をつくろう:「アイドル」の型の変遷とニュータイプ①



「アイドル」をつくろう:「アイドル」の型の変遷とニュータイプ
チラシ



「アイドル」をつくろう:「アイドル」の型の変遷とニュータイプ②

(4) クラブ展示

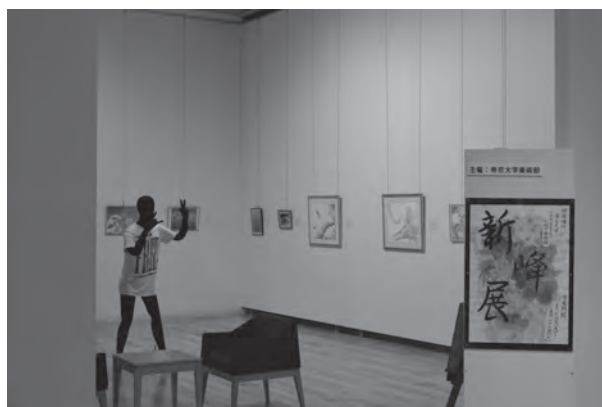
① 新峰展

会 期 2019年5月14日(火)～5月21日(火)

主 催 帝京大学美術部

入場者数 747名

概 要 帝京大学美術部が毎年春に実施している作品展。部員たちが制作した34作品を展示。



新峰展

② 帝京大学写真部 新人展

会 期 2019年6月17日(月)～6月24日(月)

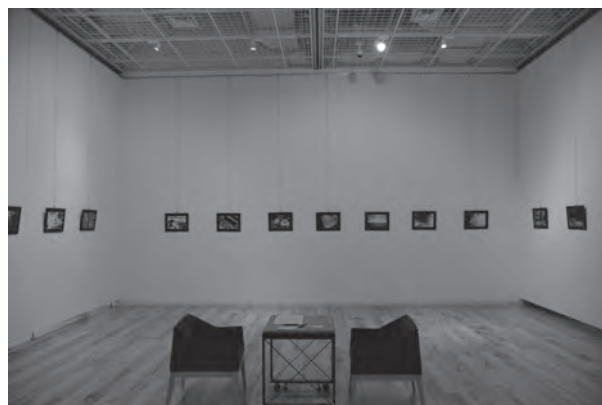
主 催 帝京大学写真部

入場者数 1,313名

概 要 帝京大学写真部が毎年実施している展示会。新入生の作品も含めた展示会。



帝京大学写真部
新人展 チラシ



帝京大学写真部 新人展

(5) 外部団体展示

① 第49回世界児童画展

会 期 2019年5月27日(月)～6月2日(日)

主 催 公益財団法人美育文化協会

入場者数 927名

概 要 1970年から実施されている児童画展。本館では多摩地区・山梨県内の入賞作品を展示。



第49回世界児童画展

(6) 常設展

① 帝京大学のあゆみ

イ 帝京 History

設置期間 通年で展示中

概 要 帝京大学の歴史を、原点の帝京商業学校(1931年創立)まで遡り紹介。

ロ 帝京 Now

a 強化指定クラブ

設置期間 通年で展示中

概 要 帝京大学強化指定クラブの紹介

b シルクロードを掘る

- 世界遺産アク・ベシム遺跡の調査 2018

設置期間 2019年1月4日(金)～6月14日(金)

概 要 帝京大学シルクロード学術調査団が実施したキルギス共和国アク・ベシム遺跡の調査の成果報告。

c ラグビーワールドカップ 2019 日本大会

出場選手紹介

設置期間 2019年11月25日(月)～

概 要 ラグビーワールドカップ2019に出場した帝京大学ラグビー部出身の日本代表選手を紹介。

② 多摩の歴史と自然

イ 多摩の小さな自然

設置期間 通年で展示

概 要 帝京大学周辺の自然環境を紹介。

ロ 発掘されたキャンパス内遺跡

設置期間 通年で展示

概 要 帝京大学八王子キャンパス内の遺跡を紹介。

ハ 江戸時代の大塚村

設置期間 通年で展示

概 要 帝京大学八王子キャンパス周辺の江戸時代の様子を紹介。



帝京大学のあゆみ



シルクロードを掘る
- 世界遺産アク・ベシム遺跡の調査 2018



ラグビーワールドカップ 2019
日本大会出場選手紹介

2 教育・公開事業

(1) 教育活動

① 帝京映画教室

16 ミリフィルムでみる名作アニメーションの世界 アニメーション監督特集・前期

主 催 帝京大学総合博物館
協 力 帝京大学文学部日本文化学科
フィルム貸出協力 東京都立多摩図書館
会 場 ACTrium (ソラティオスクエア 5 階)

第1回手塚治虫「鉄腕アトムー地球防衛軍」 「ジャングル大帝ー飢えたサバンナ」

実施日 2019年6月26日(水)
講 師 康村 諒(帝京大学文学部日本文化学科准教授)
来場者数 32名

第2回 藪下泰司「西遊記」

実施日 2019年7月10日(水)
講 師 康村 諒(帝京大学文学部日本文化学科准教授)
参加者数 39名

第3回 宮崎駿「魔女の宅急便」

実施日 2019年7月24日(水)
講 師 康村 諒(帝京大学文学部日本文化学科准教授)
参加者数 48名

② 帝京映画教室

16 ミリフィルムでみる名作アニメーションの世界 アニメーション監督特集・後期

主 催 帝京大学総合博物館
協 力 帝京大学文学部日本文化学科
フィルム貸出協力 東京都立多摩図書館
会 場 ACTrium (ソラティオスクエア 5 階)

第1回 高畑勲「太陽の王子ホルスの大冒険」

実施日 2019年9月23日(月・祝)
講 師 康村 諒(帝京大学文学部日本文化学科准教授)
参加者数 19名

第2回 手塚治虫「海底超特急マリン・エクスプレス」

実施日 2019年10月9日(水)
講 師 萩原 由加里(帝京大学文学部日本文化学科講師)
参加者数 17名

第3回 出崎統「冒険者たち ガンバと7匹のなかま」

実施日 2019年11月6日(水)
講 師 萩原 由加里(帝京大学文学部日本文化学科講師)
参加者数 17名



帝京映画教室 16 ミリフィルムでみる
名作アニメーションの世界 前期
チラシ



帝京映画教室 16 ミリフィルムでみる
名作アニメーションの世界 後期
チラシ



16 ミリフィルムでみる名作アニメーションの世界



16 ミリフィルムでみる名作アニメーションの世界
どこでも図書館

③ ミュージアムサイエンスラボ

「大学で科学のふしぎを体験しよう」

主 催 帝京大学総合博物館
 協 力 帝京大学医真菌研究センター
 帝京大学教育学部初等教育学科
 帝京大学文化財研究所
 ゲノム創薬研究所

テーマ1 昆虫学・民俗学

「カイコを育てて糸をとろう(全2回)」

講 師 松本 靖彦 6/15 担当
 (帝京大学医真菌研究センター研究員・
 明治薬科大学准教授)
 甲田 篤郎 8/3 担当
 (帝京大学総合博物館学芸員)

実施日時 2019年6月15日(土)、8月3日(土)
 参加人数 第1回:10組(21名)第2回:10組(22名)

テーマ2 微生物学・考古学

「縄文時代の納豆づくりの謎を探ろう(全2回)」

講 師 中山 誠二 7/20 担当
 (帝京大学文化財研究所客員教授・
 南アルプス市ふるさと伝承館館長)
 山田 剛 7/27 担当
 (帝京大学医真菌研究センター准教授)

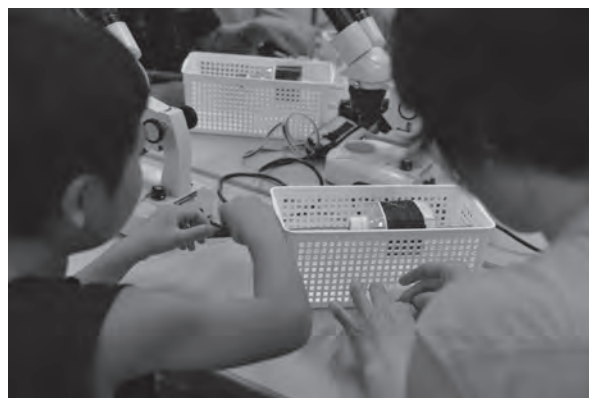
実施日時 2019年7月20日(土)、7月27日(土)
 参加人数 第1回:10組(18名)第2回:8組(15名)

テーマ3 分子生物学「DNAを肉眼で観察しよう」

講 師 山田 剛(帝京大学医真菌研究センター准教授)
 実施日時 2019年8月10日(土)
 参加人数 11組(24名)

テーマ4 鉱物学・光学「鉱物で万華鏡をつくろう」

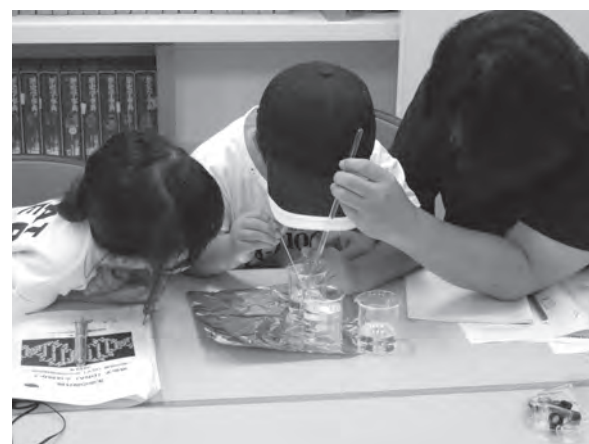
講 師 堀越 峰之(帝京大学総合博物館学芸員)
 実施日時 2019年8月17日(土)
 参加人数 第1回:9組(18名)第2回:10組(17名)



カイコを育てて糸をとろう



縄文時代の納豆づくりの謎を探ろう



DNAを肉眼で観察しよう



鉱物で万華鏡をつくろう



ミュージアムサイエンスラボ
 大学で科学のふしぎを体験しよう チラシ

④ ミュージアムセミナー

「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編

主催 帝京大学総合博物館
協力 帝京大学文学部史学科
(株)吉川弘文館

第1回「明治憲法と議会」

実施日 2020年1月25日(土)
講師 小山 俊樹(帝京大学文学部史学科教授)
参加者数 153名

第2回「満州事変から太平洋戦争へ」

実施日 2020年2月8日(土)
講師 戸部 良一
(元帝京大学文学部史学科教授・
防衛大学校名誉教授)

参加者数 215名

第3回「『戦後』と『平和』」

実施日 2020年2月29日(土)
→新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止
講師 浜井 和史
(帝京大学学修・研究支援センター准教授)



ミュージアムセミナー
「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編
第1回「明治憲法と議会」
小山 俊樹氏(帝京大学文学部史学科教授)



ミュージアムセミナー
「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編
第2回「満州事変から太平洋戦争へ」戸部 良一氏
(元帝京大学文学部史学科教授・防衛大学校名誉教授)

帝京大学総合博物館 ミュージアムセミナー

1冊のみの受講や併せての受講も可能です。お休みにご参加ください。

講 師：小山俊樹(帝京大学文学部史学科教授)

講 師：戸部良一(元帝京大学文学部史学科教授・防衛大学校名誉教授)

講 師：浜井和史(帝京大学学修・研究支援センター准教授)

帝京大学総合博物館 TUM
Teikyo University Museum

大学でまなぶ日本の歴史 近代・現代編 セミナー概要

2016年に、帝京大学文学部史学科の教員が中心となり、専任の文庫より「大学でまなぶ日本の歴史」を出版しました。本書は、大学で歴史を学ぶ学生に向けたテキストですが、日本史を学びたいという一般の方にも最適なものになっています。本セミナーは2017年度、2018年度に行われた第1回セミナーの続編となります。今回は執筆陣を講師に招いて、書籍形式では、現代を唯一の注目の内容をわかりやすくお話しします。日本史の基礎から最新の研究結果まで幅広くご紹介いたします。ご興味のある方は是非ご参加ください。

第1回 明治憲法と議会
第2回 満州事変から太平洋戦争へ
第3回 「戦後」と「平和」

FAX用 大学でまなぶ日本の歴史 申込書 非参加希望のセミナーを必ずチェックしてください。

お名前 フリガナ 電話

帝京大学総合博物館 TUM
Teikyo University Museum

ミュージアムセミナー 大学でまなぶ日本の歴史 チラシ

(2) 授業連携

① 博物館実習の受入れ

参加者数 4名（帝京大学文学部史学科3名、
聖徳大学通信教育部文学部文学科1名）

実習の目的 展示計画立案から展示の設営までを実践を通じて修得する。



博物館実習

■ 2019年度 帝京大学総合博物館 博物館実習 日程

実施日	午前の部	午後の部
8月19日(月)	9:30～9:50 開校式 10:00～12:00 ・帝京大学総合博物館の概要	13:00～16:00 施設見学
8月20日(火)	9:30～11:00 展示解説実習 11:00～12:40 資料整理実習	13:00～16:30 図書館・博物館連携展示制作 ・メディアラブリラリーセンター連携 展示準備のため企画に合わせ選書
8月21日(水)	9:30～12:00 展示制作実習① ・ポスター印刷、パネル作成	13:00～16:30 展示作実習② ・絵画へのライティング ・展示計画課題説明
9月24日(水) 〈欠席者補講〉	9:30～12:00 教育プログラムの立案① ・教育プログラム立案	13:00～16:30 教育プログラムの立案② ・プログラム発表 ・展示計画課題説明
10月9日(水)	9:30～12:00 展示作業の実際① ・企画展会場壁立て	13:00～16:30 展示作業の実際② ・借用資料の搬入の見学 ・資料借用の概要
10月10日(木)	9:30～12:00 展示作業の実際③ ・パネル等の設営	13:00～16:30 展示作業の実際④ ・照明計画の作成
10月11日(金)	9:30～12:00 展示作業の実際⑤ ・パネルへのライティング	13:00～16:30 展示作業の実際⑥ ・考古資料の展示
10月29日(火)	9:30～12:00 展示計画発表準備	13:00～16:00 展示計画発表会 16:00～16:10 閉校式

②授業利用・授業の支援

ライフデザイン演習を中心に展示や大学博物館の社会的役割について解説をおこなった。

また、要望に応じて授業の支援を実施した。



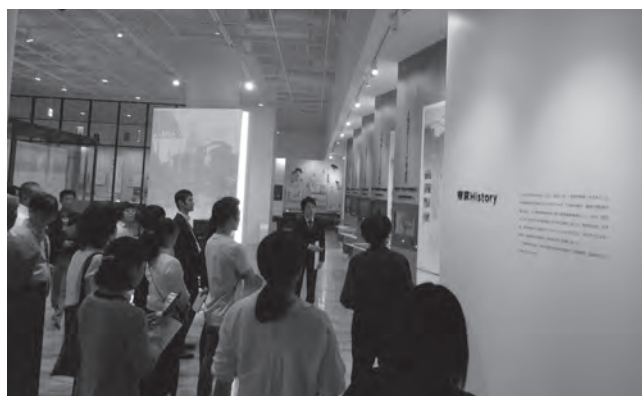
地理学演習での活用



美術史・文化遺産コースにて「建築体操」の実施

③ 外部団体の対応

他大学・他博物館・学会等の視察の受入れをおこなった。



文化財保存修復学会（2019年6月21日）



八王子市立松が谷中学校職場体験（2019年10月30日）

(3) 情報公開

① 印刷物

博物館利用案内リーフレット改訂版作成 3,000部

博物館利用案内リーフレット英語版作成 200部

博物館利用案内リーフレット中国語（簡体字）作成 200部

博物館利用案内リーフレット中国語（繁体字）作成 200部

博物館利用案内リーフレット中国語（ハングル）作成 200部



博物館利用案内
リーフレット 改訂版

② 広報活動

ホームページ、近隣公共施設、プレスリリース等にて情報発信を実施した。

③ 報道機関による取材

イ 新聞・雑誌掲載

- ・「キャンパス遺跡発見伝—古代多摩に生きたエミシの謎を追え—」紹介 2019年12月4日 産経新聞
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介「広報たまちいき」2019年12月 多摩信用金庫
- ・「武蔵陵墓地、なぜ八王子に」コメント 2019年4月25日 タウンニュース

ロ ウェブサイト

- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2019年10月15日 共同通信社
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2019年10月15日 共同通信 PR ワイヤー CNET JAPAN
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2019年10月15日 共同通信 PR ワイヤー 毎日新聞
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2018年10月15日 共同通信 PR ワイヤー ZDNet Japan
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2019年10月15日 共同通信 PR ワイヤー 高知新聞
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2019年10月15日 共同通信 PR ワイヤー SankeiBiz
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2019年10月15日 共同通信 PR ワイヤー zakzak by 夕刊フジ
- ・「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」紹介 2019年10月23日 共同通信社

3 資料管理・収集・調査事業

(1) 資料管理

① 博物館資料収蔵管理システムの運用

2017年度に導入したI.B.MUSEUM SaaS（早稲田システム開発株式会社）を活用して資料の整理を実施した。

② 貸出

- ・あかね画廊「守屋麻美展～私の奇妙な生物（こども）たち～」

会期：2019年11月10日～11月17日

貸出：「今日わ何してあそぼうかなあ（はやくママに会いたいな）」守屋麻美 1点

- ・東北歴史博物館 特別展「蝦夷 - 古代エミシと律令国家 -」

会期：2019年9月21日～11月24日

貸出：上っ原遺跡出土 赤彩球銅甕（複製）1点

- ・東京芸術大学上野キャンパス 沼田愛実氏 博士課程審査のため

会期：2020年1月29日～2月18日

貸出：「時を売る人」沼田愛実 1点

③ 資料の閲覧

寄贈を受けたいけばな関係資料について、殺菌・殺虫の目的で燻蒸処理を実施した。

(2) 収集

① 資料の寄贈

イ 鳥獣はく製 11体

寄贈者：須田 沖央（須田動物病院 院長）

概要：多摩地域でケガ等のため保護されるも回復に至らず死亡してしまった鳥獣を はく製にしたもの。

(3) 調査研究

イ 帝京大学メディアライブラリーセンター所蔵西洋古典籍の調査

帝京大学メディアライブラリーセンターが所蔵する西洋古典籍について、メディアライブラリーセンターと連携し調査を実施した。

4 他機関連携事業等

(1) 講師派遣

① 東京学芸大学博物館実習 I

実施日 2019年6月4日(火)

会場 東京学芸大学小金井キャンパス

派遣者 堀越 峰之(帝京大学総合博物館学芸員)

概要 東京学芸大学で博物館学芸員養成のための科目として開講されている「博物館実習 I」へ講師として派遣。

(2) 加入団体の運営への参加

① 全国大学史資料協議会東日本部会

就任役職 幹事(運営委員)

実施日 2018年5月~2020年春

概要 全国大学史資料協議会東日本部会の運営につき審議・執行する。

5 管理運営事業

① ミュージアムアシスタントの雇用

業務の補助を行ってもらうために、学芸員資格取得、又は学芸員資格課程を履修中の帝京大学学生・帝京大学大学院在籍者を「ミュージアムアシスタント」として雇用了。雇用者：8名

② 来館者数 10 万人突破

2019年6月15日(土)に開館(2015年9月14日(月))後の累計入館者数が10万人を突破した。10万人目の入館者は、科学体験講座ミュージアムサイエンスラボ「大学で科学の不思議を体験しよう-カイコを育てて糸をとうろ-」に参加された東京都小金井市の来館者。今村啓爾館長、鈴木稔副館長より記念品が贈呈された。



ミュージアムアシスタント募集チラシ



来館者数 10 万人目の来館者



当日のイベント参加者の集合写真

Ⅱ 事業報告
2020

1 展覧会事業

(1) 企画展

帝京大学総合博物館企画展

帝京大学理工学部創設 30 周年記念

理工学部のラボのなか！－コトワリとワザの探究－

① 実施概要

主催 帝京大学総合博物館 帝京大学理工学部
 会期 2020年10月3日(土)～2021年5月29日(土)

※当初予定7月18日(土)～2月27日(土)を新型コロナウイルス感染拡大の影響で日程変更の上、開催した。

※2021年4月28日(水)～5月29日(土)は、東京都への緊急事態宣言発令を受け、本学関係者のみ利用可とし、学外利用を休止した。

※休館日：日曜日、祝日、10月31日(土)、11月28日(土)、
 12月12日(土)、12月29日(火)～1月2日(土)、1月16日(土)、
 1月30日(土)、2月1日(月)、2月22日(月)、2月24日(水)、3月6日(土)

開館日数 179日

会場 帝京大学総合博物館企画展示室

入館者数 11,225名

企画構成 甲田篤郎 (帝京大学総合博物館 学芸員)

展示担当者

第1章	荒井 正之 (帝京大学理工学部長)
	甲田 篤郎 (帝京大学総合博物館 学芸員)
	橘田 梢 (帝京大学総合博物館 学芸員)
第2章	黒沢 良夫 (帝京大学理工学部機械・精密システム工学科 准教授)
	池俣 吉人 (帝京大学理工学部機械・精密システム工学科 講師)
	反町 浩二 (帝京大学理工学部機械・精密システム工学科 助手)
	簾内 将景 (帝京大学自動車技術センター 技術職員)
第3章	梶谷 正行 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 教授)
	内野 茂夫 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 教授)
	篠村 知子 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 教授)
	高橋 宣治 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 准教授)
	朝比奈 雅志 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 准教授)
	榎元 廣文 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 准教授)
	高山 優子 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 准教授)
	平澤 孝枝 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 准教授)
	宮本 皓司 (帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 講師)
第4章	蓮田 裕一 (帝京大学理工学部情報電子工学科 教授)
	近藤 直樹 (帝京大学理工学部情報電子工学科 准教授)
	山根 健 (帝京大学理工学部情報電子工学科 講師)
第5章	今井 道夫 (帝京大学理工学部航空宇宙工学科 教授)
	平本 隆 (帝京大学理工学部航空宇宙工学科 教授)
	河村 政昭 (帝京大学理工学部航空宇宙工学科 准教授)

資料提供	朝日航洋株式会社、伊藤丈晃ヴァイオリン工房、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、国土交通省、製品評価技術基盤機構バイオテクノロジーセンター、つくばチャレンジ実行委員会、帝京大学医真菌研究センター、名古屋大学生物機能開発利用研究センター、日本航空機操縦士協会、日本女子大学、福岡空港事務所
協力機関	IPG Automotive 株式会社、麻布成形株式会社、アルテアエンジニアリング、イグス株式会社、エイヴィエルジャパン株式会社、NOK 株式会社、NPO 法人 WRO Japan、NTN 株式会社、オーエスジー株式会社、オクノグローバルテック株式会社、オーゼットジャパン株式会社、株式会社アイ・エス・エー、株式会社アルファアピエーション、株式会社エッチ・ケー・エス、株式会社エフ・シー・シー、株式会社 WELDT00L、株式会社キノクニエンタープライズ、株式会社ザム・ジャパン、株式会社ショーワ、株式会社シンコウギヤ、株式会社大日光・エンジニアリング、株式会社ティン、株式会社デイトナ、株式会社テツカクリエート、株式会社デンソー、株式会社ティエムシー、株式会社東興ラヂエーター、株式会社ハイレックスコーポレーション、株式会社深井製作所、株式会社 VSN、株式会社ホンダテクノフォート、株式会社ミスミ、株式会社ミナミ技研、株式会社湯原製作所、株式会社ラストラダ販売、株式会社和光ケミカル、協永産業株式会社、協和工業株式会社、サウスコ・ジャパン株式会社、サンコーインダストリー株式会社、ZAN 株式会社、スクーテック ジャパン株式会社、住友電装株式会社、誠和工業株式会社、太平洋精工株式会社、大同工業株式会社、東京電機大学、東都工業株式会社、栃木精工株式会社、日信工業株式会社、日本アマチュア衛星通信協会（JAMSAY）、日本アマチュア無線連盟 栃木県支部、日本トムソン株式会社、ファクトリーギア株式会社、フェスティカサーキット、本田技研工業株式会社、マクセル株式会社スリオンテック事業本部、丸紅情報システムズ株式会社、身延山大学国際日蓮学研究所、有限会社 CanDoVISION、有限会社ビームス、渡辺金属株式会社

② 概要

ものごとの本質である理（コトワリ）を探究する理学的学問と、その結果を応用する工（ワザ）を探究する工学的学問を総合的に学ぶことのできる理工学部のラボ（研究室・実験室）のなかでは、毎日どのような研究が行われているのか。1989年の創設から30周年を迎える帝京大学理工学部の学術研究・学生生活の過去と現在を記録し、学生たちが教職員との協働のもとに実験・研究に励んだ成果を紹介した展覧会である。

学生たちがモノづくりにおける総合力を競うフォーミュラスタイルの小型レーシングカー、ミクロの世界を解明する実験機器たち、高度なロボット制御を競う世界大会出場ロボット、10周年を迎えた本学ヘリパイロットコースで多くの学生を育てたヘリコプター実機、2021年に宇宙へ向けて飛び立つ超小型衛星など、コトワリとワザの探究者たちが向き合い続ける研究対象の資料を通して、普段入ることのできない「ラボのなか」から生み出される、「面白い」研究成果の一端を社会に還元することを目的とした。

③ 展示構成

- 第1章 宇都宮の丘の上 豊郷台（とよさとだい）から世界を動かす
本展の概要を紹介するとともに、年表と資料から理工学部 30 年のあゆみを振り返った。
- 第2章 機械・精密システム工学科 ものづくりを支える。
機械工学は、機械を開発・設計・製造する学問であり、ものづくりの土台となっている。本章では、そのなかから歩行ロボットとヴァイオリンの振動・騒音に関する研究や帝京フォーミュラプロジェクトを紹介した。
- 第3章 バイオサイエンス学科 生き物の力で問題解決
生命の営みは、いろいろな化学反応がうまく絡み合っていて調和している集合体といえる。この奇跡ともいえる不思議を解き明かし、その力を活かそうとするのが同学科の研究テーマであり、微生物科学・植物科学・動物科学・食品科学の各分野研究を紹介した。
- 第4章 情報電子工学科 システムで人を繋ぐ
地道な技術を開発し、その技術をどのように活用することで人と人を繋ぎ、人類の幸せに貢献できるかについて日々考えた成果として、世界大会（WRO）出場ロボットや屋外自律移動ロボット、遺跡・遺物のデジタルコンテンツ化についての研究を紹介した。
- 第5章 航空宇宙工学科 空へ 宙へ
多くの学生を育てたヘリコプター実機（Robinson R22）から、その空飛ぶ仕組みと空飛ぶ夢を叶えるためのパイロット養成の道のり、2021年に宇宙へ飛び立つ超小型衛星 TeikyoSat-4（愛称：おおるり）からそのミッションと構造を紹介した。

④ 展示資料数 総出展件数 120 点

⑤ 関連事業

最新研究講座 理（コトワリ）と工（ワザ）の研究者たち

※全4回 YouTube「帝京大学総合総合博物館」チャンネルにてライブ配信を実施した。

第1回「帝京大学から宇宙へー学生が挑む超小型衛星開発ー」

日 時 2020年10月24日（土）14:00～15:15
会 場 S21 教室（帝京大学八王子キャンパス ソラティオスクエア2階）
講 師 河村 政昭（帝京大学理工学部航空宇宙工学科 准教授）
参加者 16名
視聴回数 28回（ユニーク視聴者数7人）

第2回「ヴァイオリンの構造と音色のしくみ」

日 時 2021年3月13日（土）14:00～15:15
会 場 S22 教室（帝京大学八王子キャンパス ソラティオスクエア2階）
講 師 黒沢 良夫（帝京大学理工学部機械・精密システム工学科 准教授）
参加者 23名
視聴回数 27回（ユニーク視聴者数5人）

第3回「自ら癒して継ぎ合わすー植物の傷の癒合ー」

日 時 2021年4月24日（土）14:00～15:15
会 場 S011 教室（帝京大学八王子キャンパス ソラティオスクエア地下1階）
講 師 朝比奈 雅志（帝京大学理工学部バイオサイエンス学科 准教授）
参加者 31名
視聴回数 19回（ユニーク視聴者数14人）

第4回「ロボットコンテスト世界大会への挑戦」

日 時 2021年5月29日（土）14:00～15:15
講 師 蓮田 裕一（帝京大学理工学部情報電子工学科）
視聴回数 41回（ユニーク視聴者数 24人）

※緊急事態宣言発令を受け対面講義中止、YouTubeを使ったライブ配信のみ実施した。

⑥ 印刷物

イ	チラシ	A4 (両面カラー)	10,000 部
ロ	ポスター	B2 (片面カラー)	50 部
ハ	展示図録	A4 (56 頁カラー)	1,000 部

⑦ 広報活動

駅ばりポスター・新聞広告に加え、展覧会情報を『朝日新聞』『日刊工業新聞』『下野新聞』などの新聞、『日経サイエンス』『東京人』『博物館研究』などの雑誌、インターネットメディアへ合計48件掲載いただいた。

イ 駅ばりポスターの掲出

京王線高幡不動駅・聖蹟桜ヶ丘駅・多摩センター駅構内ポスター板各1か所へ、
2021年4月1日(木)～5月26日(水)までB2企画展ポスターの掲出

ロ 新聞広告の掲載

『asacoco』(多摩エリア朝日新聞折り込みの地域新聞)2021年2月18日(木)掲載

ハ 帝京大学総合博物館 HP

展覧会ページの作成

ニ Web サイト・アプリへの掲載

共同通信 PR Wire、チラシミュージアム、インターネットミュージアム

ホ チラシ等の送付

近隣自治体、近隣公共施設、大学博物館、大学史編纂担当部署、新聞社、出版社



展覧会ポスター



展覧会開催チラシ



エントランス



第1章 豊郷台から世界を動かす - ①



第1章 豊郷台から世界を動かす - ②



第2章 ものづくりを支える - ①



第2章 ものづくりを支える - ②



第2章 ものづくりを支える - ③



第2章 ものづくりを支える - ④



第3章 生き物の力で問題解決 - ①



第3章 生き物の力で問題解決 - ②



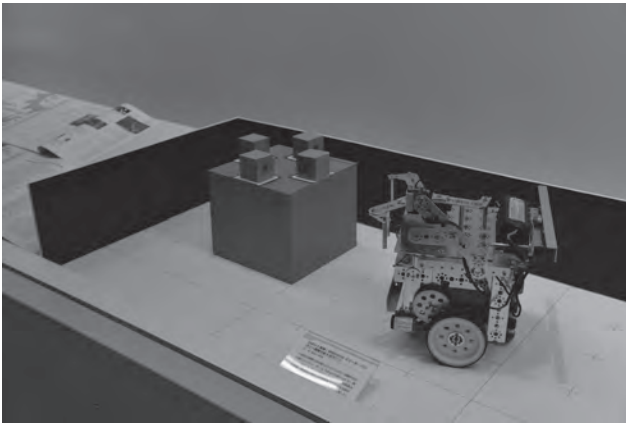
第3章 生き物の力で問題解決 - ③



第4章 システムで人を繋ぐ - ①



第4章 システムで人を繋ぐ - ②



第4章 システムで人を繋ぐ - ③



第4章 システムで人を繋ぐ - ④



第4章 システムで人を繋ぐ - ⑤



第5章 空へ 宙へ - ①



第5章 空へ 宙へ - ②



第5章 空へ 宙へ - ④



第5章 空へ 宙へ - ③



第5章 空へ 宙へ - ⑤



第5章 空へ 宙へ - ⑥



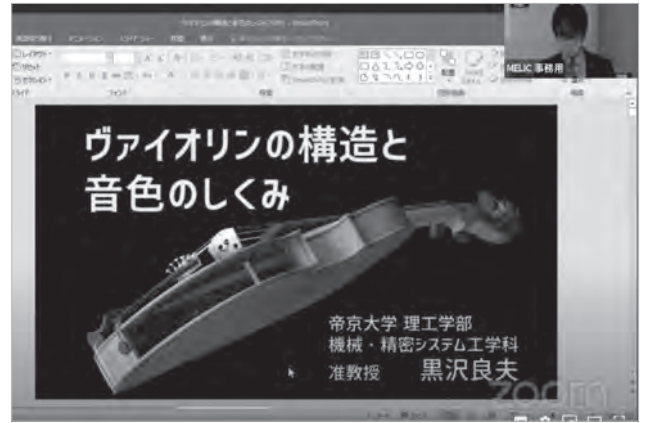
学部授業内 見学



帝京大学幼稚園 見学



第1回講座
「帝京大学から宇宙へー学生が挑む超小型衛星開発ー」
河村 政昭氏 (帝京大学理工学部航空宇宙工学科准教授)



第2回講座「ヴァイオリンの構造と音色のしくみ」
黒沢 良夫氏
(帝京大学理工学部機械・精密システム工学科准教授)



第3回講座「自ら癒して継ぎ合わすー植物の傷の癒合ー」
朝比奈 雅志氏
(帝京大学理工学部バイオサイエンス学科准教授)

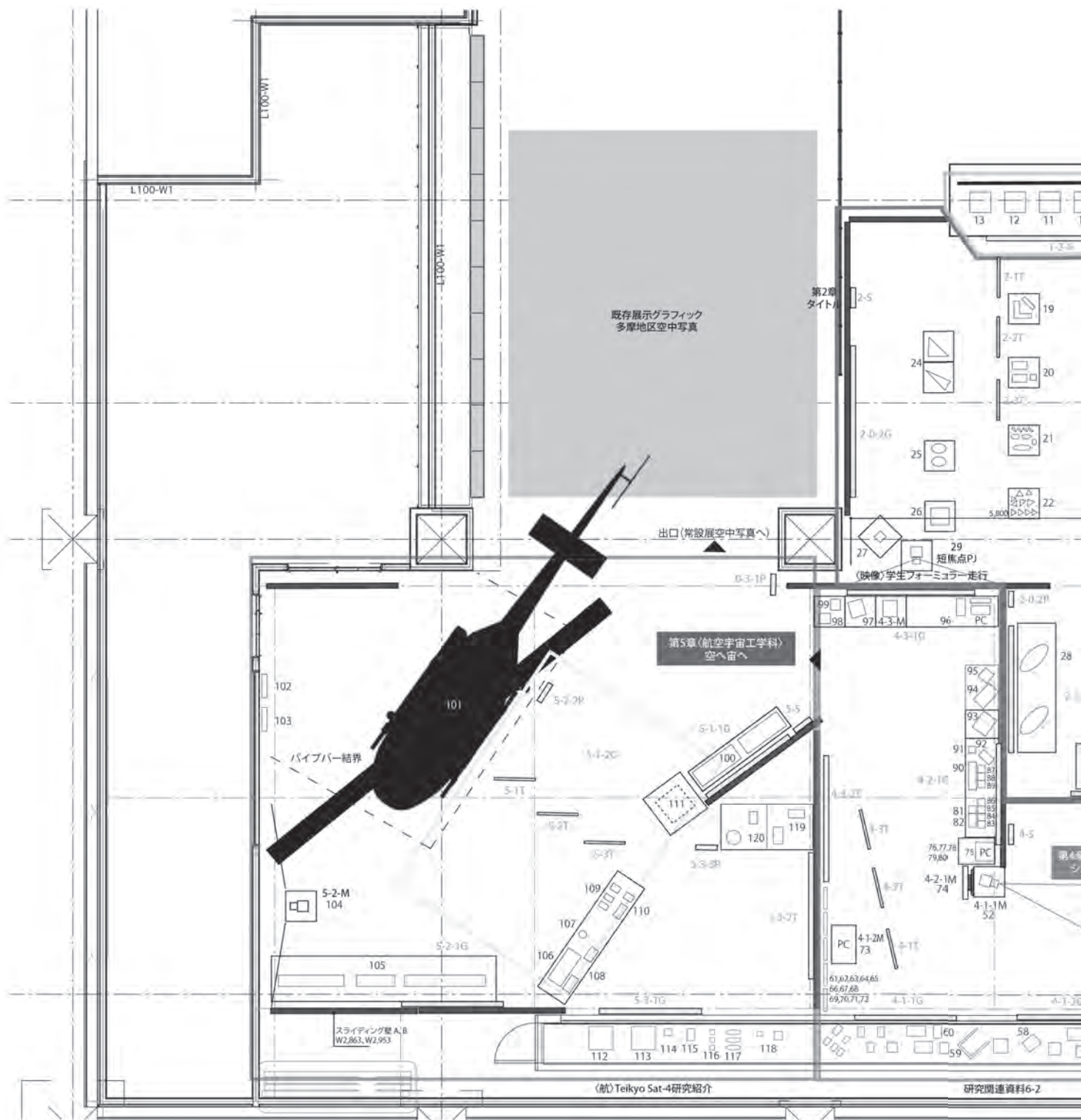


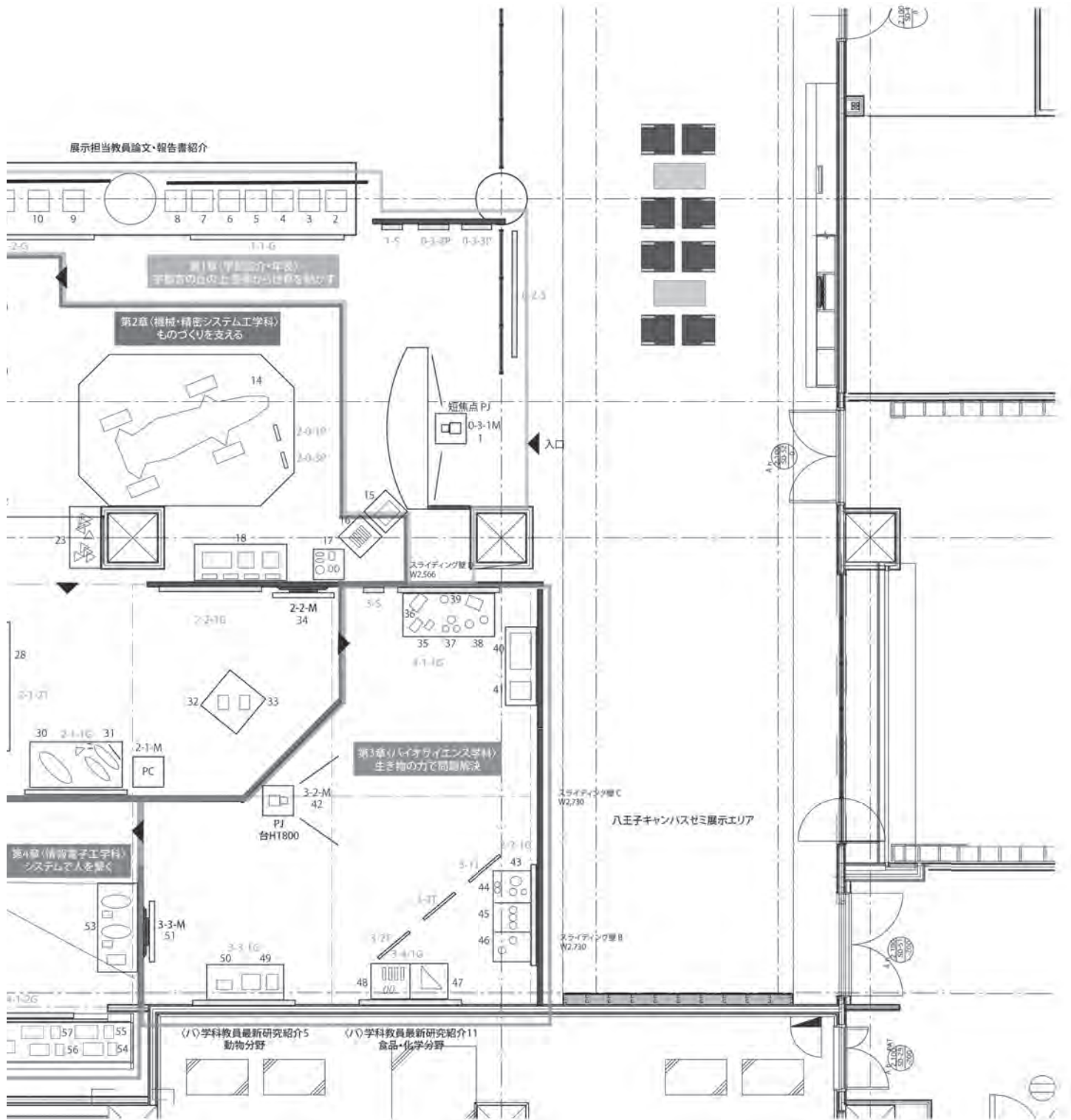
第4回講座「ロボットコンテスト世界大会への挑戦」
蓮田 裕一氏 (帝京大学理工学部情報電子工学科教授)

帝京大学総合博物館創設 30 周年記念 理工学部のラボのなか！－コトワリとワザの探究－
出品目録

1. 宇都宮の丘の上 豊崎台から世界を動かす				
番号	タイトル	年代	数量	所蔵
1	〈映像〉帝京大学 宇都宮キャンパス WebCM2020	2020年	1	帝京大学総合博物館
2	帝京大学 入学案内	1988年	1	帝京大学総合博物館
3	帝京大学理工学部入学試験募集要項	1988年	1	帝京大学総合博物館
4	帝京大学 入学案内	1989年	1	帝京大学総合博物館
5	THE TEIKYO NO.10	1989年	1	帝京大学総合博物館
6	THE TEIKYO NO.11	1989年	1	帝京大学総合博物館
7	平成16年度帝京大学大学院理工学研究科総合工学専攻博士課程（後期）入試概要	2003年	1	帝京大学総合博物館
8	帝京大学宇都宮キャンパス GUIDE BOOK 2021	2020年	1	帝京大学総合博物館
9	宇都宮よみうり「東春同時間校の3大学」	1988年	1	帝京大学総合博物館
10	下野新聞 1989年1月1日	1989年	1	帝京大学総合博物館
11	宇都宮よみうり 1989年1月3日	1989年	1	帝京大学総合博物館
12	栃本新聞	1989年	1	帝京大学総合博物館
13	広報うつつのみ 1117号	1989年	1	帝京大学総合博物館
2. 機械・精密システム工学科 ものづくりを変える				
番号	タイトル	年代	数量	所蔵
14	学生フォーミュラ (TFP-19)	2019年	1	帝京フォーミュラプロジェクト
15	インパクトアッテネータ		1	帝京フォーミュラプロジェクト
16	ペダル		4	帝京フォーミュラプロジェクト
17	アップライト、ハブ		6	帝京フォーミュラプロジェクト
18	静的審査書類 (Car No.82 Teikyo University Cost Report (2017)、Car No.60 Teikyo University Cost Report (2018)、Car No.30 Teikyo University Cost Report (2019))	2017~2019年	3	帝京フォーミュラプロジェクト
19	燃料タンク		2	帝京フォーミュラプロジェクト
20	サージタンク		2	帝京フォーミュラプロジェクト
21	インジェクターマウント		1	帝京フォーミュラプロジェクト
22	バルクラック		9	帝京フォーミュラプロジェクト
23	Aアーム		8	帝京フォーミュラプロジェクト
24	エキゾーストマニホールド		2	帝京フォーミュラプロジェクト
25	デフレンシャルユニット		2	帝京フォーミュラプロジェクト
26	冷却ユニット		1	帝京フォーミュラプロジェクト
27	ジャンプアップ装置 2位 トロフィー(2018年第16回大会)	2018年	1	帝京フォーミュラプロジェクト
28	フロントカウル		2	帝京フォーミュラプロジェクト
29	〈映像〉学生フォーミュラ走行	2018年	1	帝京フォーミュラプロジェクト
30	ヴァイオリン(工増製)		1	黒沢良夫研究室
31	ヴァイオリン(組み立てキット)		1	黒沢良夫研究室
32	13時間歩いた小型受動歩行ロボット		1	池俣吉人研究室
33	試作した小型受動歩行ロボット		1	池俣吉人研究室
34	〈映像〉人のように歩く受動歩行ロボット		1	池俣吉人研究室
3. バイオサイエンス学科 生き物の力で問題解決				
番号	タイトル	年製	数量	所蔵
35	小型アガロースゲル電気泳動システム“Mupid”		1	梶谷正行研究室
36	放射線検出計数管		1	梶谷正行研究室
37	超導心臓		1	梶谷正行研究室
38	遠心ローター		3	梶谷正行研究室
39	小型遠心機“チビタン”		1	梶谷正行研究室
40	ジャーファーマンター(微生物培養装置)		1	高橋宣治研究室
41	ロータリーエバポレーター		1	高橋宣治研究室
42	〈映像〉フタツノクンショウモの新群体形成		1	藤村知子研究室
43	フタツノクンショウモの模型		1	藤村知子研究室
44	フタツノクンショウモの模型・関連資料		4	藤村知子研究室
45	微細藻類の培養器具		3	藤村知子研究室
46	シロイヌナズナの殺菌器具		1	朝比奈雅志研究室
47	エアブラシ		1	榎元廣文研究室
48	イチゴの薄切切片		4	榎元廣文研究室
49	DSM-5 精神障害の診断・統計マニュアル	2014年	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
50	マウス飼育用ケージ		1	内野茂夫研究室
51	〈映像〉マウスのオープンフィールド試験		1	内野茂夫研究室
4. 情報電子工学科 システムで人を繋ぐ				
番号	タイトル	年代	数量	所蔵
52	〈映像〉WRO2019	2019年	1	蓮田裕一研究室
53	カビバラさん		2	蓮田裕一研究室
54	第1回ロボット技術教育シンポジウム予稿集	2016年	1	蓮田裕一研究室
55	第2回ロボット技術教育シンポジウム予稿集	2017年	1	蓮田裕一研究室
56	第3回ロボット技術教育シンポジウム予稿集	2018年	1	蓮田裕一研究室
57	第4回ロボット技術教育シンポジウム予稿集	2020年	1	蓮田裕一研究室

58	ロボット実機：WRO2019 ジェール・ハンガリー国際大会6位マシン	2019年	1	蓮田裕一研究室
59	Abstract「Investigation of the Accuracy of the Sensors used for Educational Robots and Effective Exemplification of the Use」		1	蓮田裕一研究室
60	Abstract「Design and Production of the Robot for WRO international Competition」		1	蓮田裕一研究室
61	沖永荘一学術文化奨励賞賞金・賞状 ROBO Lab 2020年3月27日受賞	2020年	1	蓮田裕一研究室
62	沖永荘一学術文化奨励賞賞金 蓮田研究室 2018年3月17日受賞	2018年	1	蓮田裕一研究室
63	沖永荘一学術文化奨励賞賞金 蓮田研究室 2019年3月17日受賞	2019年	1	蓮田裕一研究室
64	沖永荘一学術文化奨励賞賞金・賞状 蓮田研究室 2020年3月27日受賞	2020年	1	蓮田裕一研究室
65	沖永荘一学術文化奨励賞賞金・賞状 ROBO Lab 2018年3月17日受賞	2018年	1	蓮田裕一研究室
66	国際大会3位トロフィー・賞状 WRO2017 サンホセ・コスタリカ国際大会	2017年	1	蓮田裕一研究室
67	国際大会6位賞状 WRO2019 ハンガリー国際大会	2019年	1	蓮田裕一研究室
68	日本大会優勝トロフィー WRO Japan 2015 日本大会	2015年	1	蓮田裕一研究室
69	日本大会優勝トロフィー WRO Japan 2016 日本大会	2016年	1	蓮田裕一研究室
70	日本大会優勝トロフィー・賞状 WRO Japan 2017 日本大会	2017年	1	蓮田裕一研究室
71	うつのみや市民賞 メダル ROBO Lab 平成28年度	2017年	1	蓮田裕一研究室
72	うつのみや市民賞 賞状 ROBO Lab 平成30年度	2018年	1	蓮田裕一研究室
73	〈映像〉蓮田裕一研究室の研究力	2020年	1	蓮田裕一研究室
74	〈映像〉ロボットの見る世界	2019年	1	山根健研究室
75	つくばチャレンジ2019フライヤー	2019年	1	山根健研究室
76	ロボットナンバープレート 2015年	2015年	1	山根健研究室
77	ロボットナンバープレート 2016年	2016年	1	山根健研究室
78	ロボットナンバープレート 2017年	2017年	1	山根健研究室
79	ロボットナンバープレート 2018年	2018年	1	山根健研究室
80	ロボットナンバープレート 2019年	2019年	1	山根健研究室
81	本走行記録認定証 2017年	2017年	1	山根健研究室
82	本走行記録認定証 2019年	2019年	1	山根健研究室
83	つくばチャレンジ参加レポート集 2015年	2015年	1	山根健研究室
84	つくばチャレンジ参加レポート集 2016年	2016年	1	山根健研究室
85	つくばチャレンジ参加レポート集 2017年	2017年	1	山根健研究室
86	つくばチャレンジ参加レポート集 2019年	2019年	1	山根健研究室
87	「学生&企業研究発表会」予稿集 2014年	2014年	1	山根健研究室
88	「学生&企業研究発表会」予稿集 2015年	2015年	1	山根健研究室
89	「学生&企業研究発表会」予稿集 2016年	2016年	1	山根健研究室
90	賞状(第12回学生&企業研究発表会(2015年)、第13回学生&企業研究発表会(2016年))	2015~2016年	4	山根健研究室
91	RTK-GNSSのアンテナと受信機などユニット一式		1	山根健研究室
92	本プロジェクトの最初に作成したロボットのプロトタイプ		1	山根健研究室
93	屋外自律移動ロボットGenesis	2020年	1	山根健研究室
94	環境データ取得用の台車		1	山根健研究室
95	安全管理者の服装(安全ベスト+帽子)とオペレーターの帽子		1	山根健研究室
96	〈映像〉多視点ディスプレイで見るラオス仏像の3D		1	近藤直樹研究室
97	空撮用ドローン		1	近藤直樹研究室
98	日本情報考古学会第36回講演論文集	2016年	1	近藤直樹研究室
99	CAA2011アブストラクト集	2011年	1	近藤直樹研究室
5. 航空宇宙工学科 空へ宙へ				
番号	タイトル	年代	数量	所蔵
100	航空図(T.T.A.チャート東京/成田(2019年)、区分航空図 関東甲信越(2019年))	2019年	2	帝京大学理工学部航空宇宙工学科
101	ロビンソン R22(Robinson R22)		1	帝京大学理工学部航空宇宙工学科
102	R22 Beta II 仕様パネル		1	帝京大学理工学部航空宇宙工学科
103	R22 コクピット解放パネル		1	帝京大学理工学部航空宇宙工学科
104	〈映像〉ヘリコプター操縦実習		1	帝京大学理工学部航空宇宙工学科
105	R22メイン・ローター・ブレード(カット部分を含む)		1	帝京大学理工学部航空宇宙工学科
106	レオナルド・ダ・ヴィンチ 全絵画作品・素描集(1452年~1519年)	2007年	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
107	レオナルド・ダ・ヴィンチのエアリアル・スクリュウキット：エアロベース1/72		1	帝京大学理工学部航空宇宙工学科
108	鳥の飛行に関する手帳(トリノ国立図書館蔵・手帳の複製)	1979年	1	帝京大学メディアライブラリーセンター
109	微生物観測衛星「TeikyoSat-3」開発活動報告書	2016年	1	Teikyo University TeikyoSat Project
110	多目的宇宙観測利用実験衛星の開発 平成27年度~平成31年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究成果報告書	2020年	1	TeikyoSat-4プロジェクト
111	TeikyoSat-4 EFM	2020年	1	TeikyoSat-5プロジェクト
112	STM構体		1	TeikyoSat-4プロジェクト
113	UHF/VHF帯通信用アンテナEM		1	TeikyoSat-4プロジェクト
114	Main OBC基板EM		1	TeikyoSat-4プロジェクト
115	高速通信帯用パッチアンテナEM		1	TeikyoSat-4プロジェクト
116	姿勢制御用基板EM		3	TeikyoSat-4プロジェクト
117	姿勢制御用磁気トルカ 試作評価版		3	TeikyoSat-4プロジェクト
118	New OBS用電源1stバージョン		2	TeikyoSat-4プロジェクト
119	分解できる超精密ペーパークラフト「イブシロン」	2014年	1	帝京大学総合博物館
120	ミッションモジュール6BM		1	TeikyoSat-4プロジェクト





- 展示ケース・展示台
- グラフィックパネル・バナー

Scale: 1/100

図面名称： 全体平面図

(2) その他展覧会

① 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「経済学の古典をみる」

会 期 2020年3月19日(木)～9月13日(日)

主 催 帝京大学総合博物館

協 力 帝京大学メディアライブラリーセンター

概 要 メディアライブラリーセンターが所蔵する経済学の稀覯本を紹介。

入場者数 4,345名 ※うち2020年度分 4,175名



ミニ企画展「経済学の古典をみる」①



ミニ企画展「経済学の古典をみる」チラシ



ミニ企画展「経済学の古典をみる」②

② 帝京大学総合博物館 ミニ企画展

「Teikyo Art Annual VOL3」

会 期 2020年3月19日(木)～9月13日(日)

主 催 帝京大学総合博物館

概 要 所蔵する東京藝術大学卒業制作作品を中心に、現代の若手作家を紹介。

入場者数 4,345名 ※うち2020年度分 4,175名



ミニ企画展「Teikyo Art Annual VOL3」①



ミニ企画展「Teikyo Art Annual VOL3」チラシ



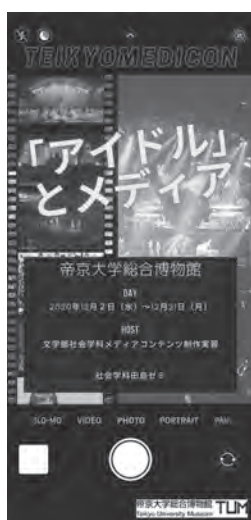
ミニ企画展「Teikyo Art Annual VOL3」②

③ 「アイドル」とメディア

会 期 2020年12月2日(水)～12月21日(月)
 主 催 帝京大学文学部社会学科
 「メディアコンテンツ制作実習」
 共 催 帝京大学文学部社会学科
 田島 悠来 講師 担当ゼミ
 概 要 社会学科2年生以上の学生が実習科目の一環として、「アイドル」＝人＝コンテンツの歴史や型を研究・調査し、それを踏まえて学生自身で新しいオリジナルな「アイドル」を生み出した成果を博物館にて展示という形で提示する。
 入場者数 1,018名



「アイドル」とメディア ①



「アイドル」とメディア
 チラシ



「アイドル」とメディア ②

(3) 常設展

① 帝京大学のあゆみ

イ 帝京 History

設置期間 通年で展示中
 概 要 帝京大学の歴史を、原点の帝京商業学校(1931年創立)まで遡り紹介。

ロ 帝京 Now

a 強化指定クラブ

設置期間 通年で展示中
 概 要 帝京大学強化指定クラブの紹介。

b ラグビーワールドカップ2019日本大会 出場選手紹介

設置期間 2019年11月25日(月)～
 概 要 ラグビーワールドカップ2019に出場した帝京大学ラグビー部出身の日本代表選手を紹介。



帝京大学のあゆみ



ラグビーワールドカップ2019日本大会出場選手 紹介

② 多摩の歴史と自然

イ 多摩の小さな自然

設置期間 通年で展示

概要 帝京大学周辺の自然環境を紹介。

ロ 発掘されたキャンパス内遺跡

設置期間 通年で展示

概要 帝京大学八王子キャンパス内の遺跡を紹介。

ハ 江戸時代の大塚村

設置期間 通年で展示

概要 帝京大学八王子キャンパス周辺の江戸時代の様子を紹介。

ニ 多摩の野生動物展示

設置期間 2020年3月21日(土)～9月13日(日)

概要 寄贈を受けた野生動物の剥製を展示。



発掘されたキャンパス内遺跡



多摩の野生動物 展示

2 教育・公開事業

(1) 授業連携

① 博物館実習の受入れ

実習の目的 展示計画立案から展示の設営までを実践を通じて修得する。 参加者数 3名

■ 2020年度 帝京大学総合博物館 博物館実習 日程

実施日	午前の部	午後の部
8月18日(火)	9:30~9:50 開校式 10:00~12:00 ・帝京大学総合博物館の概要	13:00~14:20 施設見学 14:45~16:30 展示解説実習①
8月19日(水)	9:30~12:00 展示解説実習② ・発表	13:00~16:30 展示計画制作実習
8月21日(金)	9:30~12:00 教育プログラムの立案① ・ワークシート作成-1	13:00~16:30 教育プログラムの立案② ・ワークシート作成-2
9月28日(月)	9:30~12:00 展示作業の実際① ・会場の準備-1	13:00~16:30 展示作業の実際② ・会場の準備-2
9月29日(火)	9:30~12:00 展示作業の実際③ ・パネル等の設営	13:00~16:30 展示作業の実際④ ・実物資料の展示
9月30日(水)	9:30~12:00 展示作業の実際⑤ ・照明計画の作成	13:00~16:30 展示作業の実際⑥ ・照明の設置
11月2日(月)	9:30~12:00 展示計画発表①	13:00~16:00 展示計画発表会② 16:00~16:10 閉校式



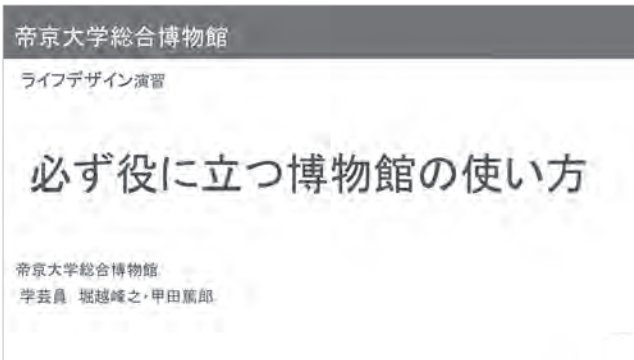
博物館実習①



博物館実習②

② 授業利用・授業の支援

ライフデザイン演習を中心に展示や大学博物館の社会的役割について解説をおこなった。
また、要望に応じて授業の支援を実施した。



「ライフデザイン演習」配付資料①



「ライフデザイン演習」配付資料②

③ 団体の対応

団体等の見学・視察の受入れをおこなった。



帝京大学幼稚園



オープンキャンパス

(2) 情報公開

① 印刷物

博物館利用案内リーフレット作成 7,000部



博物館利用案内リーフレット

② 広報活動

ホームページ、近隣公共施設、プレスリリース等にて情報発信を実施した。

③ 広告掲載

- ・ asacoco[アサココ] 2020年2月18日
- ・京王線 駅貼りポスター 2021年4月1日～5月26日(高幡不動駅、聖蹟桜ヶ丘駅、多摩センター駅)

④ 報道機関による取材

イ 新聞

・理工学部創設 30 周年記念 理工学部のラボのなか！－コトワリとワザの探究－ 紹介

- 下野新聞 2020年11月1日
- 日刊工業新聞 2020年11月13日

・「わたしのイチオシコレクション 関東のエミシ(蝦夷)」紹介

- 朝日新聞 2020年12月15日夕刊

ロ ウェブサイト

・理工学部創設 30 周年記念 理工学部のラボのなか！－コトワリとワザの探究－ 紹介

- チラシミュージアム 2020年10月3日～2021年5月29日
- KajiKen Diary 2020年10月4日
- 美術館・博物館・展覧会インターネットミュージアム 2020年10月19日
- 毎日新聞 2020年10月20日
- 朝日新聞 DIGITAL 2020年10月20日
- 共同通信 PR Wire 2020年10月20日
- ポータルフィールドニュース 2020年10月20日
- excite. ニュース 2020年10月20日
- SankeiBiz 2020年10月20日
- 河北新報 ONLINE NEWS 2020年10月20日
- JCAST トレンド 2020年10月20日
- CNET JAPAN 2020年10月20日
- 株式会社共同通信社 2020年10月20日
- NEWS Collect 2020年10月20日
- 岐阜新聞 Web 2020年10月20日
- zakzak by 夕刊フジ 2020年10月20日
- 沖縄タイムスプラス 2020年10月20日
- 新潟日報モア 2020年10月20日
- 秋田魁新報 2020年10月20日
- 福島民友新聞みんゆう net 2020年10月20日
- 茨城新聞クロスアイ 2020年10月20日
- AGARA 紀伊民報 2020年10月20日
- 宮崎日日新聞 2020年10月20日
- モデルプレス 2020年10月20日
- Rakuten infoseek News 2020年10月20日
- 下野新聞 2020年10月21日
- ICT 教育ニュース 2020年10月21日

八 雑誌・地域紙

・理工学部創設 30 周年記念 理工学部のラボのなか！－コトワリとワザの探究－ 紹介

asacoco[アサココ]第195号	2020年10月1日
asacoco[アサココ]第204号	2021年2月18日
asacoco[アサココ]第208号	2021年4月15日
広報たまちいき 2021年1月号	2021年1月1日
広報たまちいき 2021年4月号	2021年4月1日
Flair Vol.119	2020年11月1日
多摩の博物館さんぽ	2020年10月1日
博物館研究 令和2年11月号	2020年10月25日
博物館研究 令和2年12月号	2020年11月25日
博物館研究 令和3年1月号	2020年12月25日
博物館研究 令和3年2月号	2021年1月25日
博物館研究 令和3年3月号	2021年2月25日
博物館研究 令和3年4月号	2021年3月25日
博物館研究 令和3年5月号	2021年4月25日
もしもし No.1505	2020年11月27日
日経サイエンス 595号	2021年1月1日
東京人 2021年6月号	2021年6月3日

二 その他

・理工学部創設 30 周年記念 理工学部のラボのなか！－コトワリとワザの探究－ 紹介

宇都宮コミュニティ FM ミヤラジ	2020年10月10日
宇都宮コミュニティ FM ミヤラジ	2020年10月21日

(3) 学生参加

① 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、歴史、文化、現在に関する知られざる魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことを基にして広く社会に紹介するプロジェクトを開始した。

イ フリーマガジン『ミコタマ』創刊号の刊行

帝京大学総合博物館と本学学生が、多摩のヨコガオプロジェクトの一環として、多摩の自然、歴史、文化、現在を記録し発信するフリーマガジン「ミコタマ」を創刊。本誌は帝京大学総合博物館のバックアップのもと、本学学生が企画・取材・執筆・デザインを手がけた。

ロ 『ミコタマ』の展示



多摩のヨコガオ発見プロジェクト



『ミコタマ』
創刊号



『ミコタマ』の展示



多摩のヨコガオ発見
プロジェクト
メンバー募集チラシ

帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学総合博物館 TUM Tokyo University Museum

多摩の自然・歴史・文化・現在を記録し発信する

多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学総合博物館 新プロジェクト 学生メンバー募集!

詳しくは裏面をご覧ください。来子ラシは博物館でも配布しております。

帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、歴史、文化、現代に関する知られざる魅力を、帝京大学総合博物館が調査した事を基にして広く社会に紹介するプロジェクトです。

こんなことをする予定です

多摩の魅力を広くて博物館の館内ニュースレターと一緒に発信する機会も増えます

応募の条件

1.応募資格
・帝京大学・帝京大学附属高等学校に在籍する学生、大学卒業・修業中の方、大学院生・博士課程の方(在学中の方には別途規定があります)
・専業主婦となるので、そのことを理解した上で応募してください。
・活動費で対価を請求する旨は必ず募集内容に記載しております。

2.募集人数
3名程度

3.応募方法
帝京大学総合博物館窓口・WEBにて応募ください。

4.お問い合わせ先
帝京大学総合博物館 新プロジェクト担当
TEL:0426-32177
[お電話によるお問い合わせは、月曜～金曜日の9:00-17:00まで]

学部・専攻 不問です

帝京大学総合博物館 TUM

3 資料管理・収集・調査事業

(1) 資料管理

① 博物館資料収蔵管理システムの運用

2017 年度に導入した I.B.MUSEUM SaaS（早稲田システム開発株式会社）を活用して資料の整理を実施した。

② 貸出

・北上市博物館 特別展「蝦夷の赤い甕 - 最強の蝦夷は和賀川にいた -」

会 期 2020 年 11 月 1 日～2021 年 3 月 7 日

貸 出 上っ原遺跡出土 赤彩球銅甕 1 点

(2) 収集

① 資料の移管

イ 帝京大学広報関係資料

移管部署 帝京大学本部広報課

概 要 帝京大学本部広報課の倉庫に保管されていた、過去の入学案内、写真、VHS、8 ミリフィルム

ロ 三宅正太郎旧蔵資料

移管部署 帝京大学メディアライブラリーセンター

概 要 元帝京商業学校理事、元帝京大学理事、三宅正太郎が所蔵していたと思われる資料。
アルバム、手紙、書籍。

(3) 調査研究

① 2021 年度企画展の調査

イ 帝京商業学校関係調査

概 要 帝京大学の原点である帝京商業学校についての記述について、過去の新聞、書籍等を悉皆的に調査。

② 2022 年度企画展の調査

イ 政岡憲三展関係調査

概 要 萩原 由加里氏（日本文化学科）が所蔵する政岡憲三関係資料を調査。

③ コロナ禍での大学の記録撮影

概 要 コロナ禍の大学の記録を残すために写真を撮影し、デジタルデータで保管。

4 施設・他機関連携事業等

(1) 講師派遣

① 東京学芸大学博物館実習 I

会 場 帝京大学総合博物館からライブ配信

概 要 東京学芸大学で博物館学芸員養成のための科目として開講されている「博物館実習 I」へ講師として派遣。

第1回

実施日 2020年11月17日(火)

派遣者 堀越 峰之(帝京大学総合博物館学芸員)

テ ー マ 「帝京大学総合博物館の社会的役割と施設」

第2回

実施日 2020年11月24日(火)

派遣者 橘田 梢(帝京大学総合博物館学芸員)

テ ー マ 「大学博物館での教育活動」

第3回

実施日 2020年12月1日(火)

派遣者 甲田 篤郎(帝京大学総合博物館学芸員)

テ ー マ 「展覧会ができるまで」

(2) 加入団体の運営への参加

① 全国大学史資料協議会東日本部会

就任役職 幹事(運営委員)

実施日 2020年5月～2022年春

概 要 全国大学史資料協議会東日本部会の運営につき審議・執行する。

(3) 地域連携

① 「読書丸」復活プロジェクト

山東京伝(江戸時代の戯作者・浮世絵師)が営む店で販売されていたとされる、「読書丸」(効能、飲むと頭がすっきりする丸薬)を再現するプロジェクト。

コサカ薬局(多摩市)、帝京大学メディアライブラリーセンターと連携し、試作品を完成させた。



「読書丸」復活プロジェクト



「読書丸」

(4) 雑誌掲載

① 立教ディスプレイ-立教学院展示館年報

掲載雑誌 立教ディスプレイ-立教学院展示館年報 第6号 (2021.3)
 特集タイトル コロナ禍の大学アーカイブズ・博物館
 報告タイトル 「コロナ禍で大学博物館は社会に対して何を果たせるか-帝京大学総合博物館の1年とこれから-」
 執筆者 堀越 峰之 (帝京大学総合博物館学芸員)
 概要 学校法人立教学院が設置者の立教学院展示館の年報へ寄稿依頼を受け原稿を執筆。

② 東京都三多摩公立博物館協議会会報-ミュージアム多摩

掲載雑誌 東京都三多摩公立博物館協議会会報-ミュージアム多摩 No.42 (2021.3)
 特集タイトル コロナ禍の博物館
 報告タイトル 「コロナ禍における人々の学習する権利を保障するための活動」
 執筆者 橘田 梢 (帝京大学総合博物館学芸員)
 概要 加入団体の東京都三多摩公立博物館協議会より依頼を受け執筆。

③ 博物館雑誌

掲載雑誌 博物館研究 令和2年12月号
 報告タイトル 赤彩球胴甕
 執筆者 堀越 峰之 (帝京大学総合博物館学芸員)
 甲田 篤郎 (帝京大学総合博物館学芸員)
 橘田 梢 (帝京大学総合博物館学芸員)
 概要 日本博物館協会東京支部を代表して執筆。

(5) 帝京大学先端総合研究機構

① 第3回帝京大学研究交流シンポジウムへの参加

ポスタータイトル 日本における納豆の起源の解明と、その研究方法を追体験する学習プログラムの研究
 概要 帝京大学文化財研究所、帝京大学医真菌研究センター、帝京大学総合博物館が連携して実施した研究の成果を展示。



第3回帝京大学研究交流シンポジウムへの参加
 ポスター

(6) 帝京大学メディアライブラリーセンター連携

① 共読ライブラリーへの協力

概要 メディアライブラリーセンター、ACT 3において黒板書架への展示協力。

5 管理運営事業

① 博物館運営委員会の開催

2020年7月20日(月)、総合博物館セミナー室にて対面とオンラインを併用して実施。



2020年度
博物館運営委員会

② ミュージアムアシスタントの雇用

業務の補助を行ってもらうために、学芸員資格取得、又は学芸員資格課程を履修中の帝京大学在籍者を「ミュージアムアシスタント」として雇用した。雇用者：計9名

2020年度 帝京大学総合博物館ミュージアムアシスタント募集案内

帝京大学総合博物館

ミュージアム アシスタント 募集

応募締切 10/16 (金)

本気で学芸員を目指すあなた
博物館の仕事をお手伝いする
アシスタントを募集します

詳しくは裏面をご覧ください

帝京大学総合博物館 Teikyo University Museum TUM

2020年度 帝京大学総合博物館ミュージアムアシスタント募集案内

帝京大学総合博物館では、博物館の運営を補助していただくミュージアムアシスタントを募集します。学芸員の仕事を継承できるチャンスです。希望される方は下記募集要項を熟読の上、お申込みください。皆様のご応募をお待ちしております。

お仕事の一例

写真撮影補助 図録の校正 展示作業

募集要項 (熟読の上、お申込みください)

1. 職種	ミュージアムアシスタント
2. 勤務先	帝京大学総合博物館(東京都目黒区) 学芸員課(学芸員課)
3. 勤務時間	2020年9月1日(月)～2021年3月31日(水)まで(1日あたり約3時間) (休日は別途)
4. 勤務場所	帝京大学総合博物館
5. 雇用形態	帝京大学総合博物館での定額給付金
6. 雇用人数	定数不定
7. 募集期間	応募受付～2020年10月16日(金)まで(応募受付は随時)
8. 応募方法・時期	(1) 応募受付期間：2020年10月16日(金)～2020年10月17日(土)まで(応募受付は随時) (2) 応募受付時間：10月16日(金) 10:00～17:00、10月17日(土) 10:00～17:00 ※応募受付は随時受付となります。応募受付終了後は、応募受付終了時刻以降は受付できません。
9. 応募資格	募集要項を熟読の上、お申込みください。
10. 応募書類	以下の書類を全て添付の上、2020年10月16日(金)まで、帝京大学総合博物館(〒158-8501 東京都目黒区)に提出してください。 ① 帝京大学在籍証明書(在籍期間) ② 学芸員資格取得状況(学芸員資格取得済みの場合)
11. 応募書類	履歴書(写真貼付欄に貼付してください) ※履歴書に写真貼付欄がない場合は、貼付してください。 ※履歴書は写込みの応募書類には使用できません。必ず写しを提出してください。
12. 選考方法	書類審査を予定しております。詳細は別途お知らせいたします。 ※書類審査の結果、面接は別途お知らせいたします。
13. 応募締切	2020年10月16日(金) 17:00(当日)
14. 問い合わせ先	帝京大学総合博物館 ミュージアムアシスタント募集担当 〒158-8501 東京都目黒区 学芸員課(学芸員課) 03-5427-1111(内線) 1111
15. 募集要項表	〒158-8501 東京都目黒区 学芸員課(学芸員課) 03-5427-1111(内線) 1111

帝京大学総合博物館 Teikyo University Museum TUM

※応募書類、履歴書は必ず裏面に記載の住所、氏名、電話番号、Eメール、FAX、郵便番号を必ず記載してください。応募書類は必ず裏面に記載の住所、氏名、電話番号、Eメール、FAX、郵便番号を必ず記載してください。

お問い合わせ先：〒158-8501 東京都目黒区 学芸員課(学芸員課) 03-5427-1111(内線) 1111

お問い合わせ先：〒158-8501 東京都目黒区 学芸員課(学芸員課) 03-5427-1111(内線) 1111

お問い合わせ先：〒158-8501 東京都目黒区 学芸員課(学芸員課) 03-5427-1111(内線) 1111

ミュージアムアシスタント募集チラシ

III 資料

1 2019年度

《1》開館状況

(1) 開館期間 2019年4月1日(月)～2020年3月31日(火)

(2) 開館時間 9:00～17:00

(3) 休館日 日曜日、祝日、臨時休館日

(4) 月別開館日数(人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
総開館日数	24	22	27	27	28	25	24	25	23	21	20	14	280
平日	20	19	20	22	21	19	21	20	20	17	17	13	229
土曜日	4	3	4	4	5	4	2	3	3	3	3	1	39
日曜日	0	0	3	1	2	1	1	1	0	1	0	0	10
祝日	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2

(5) 月別入館者数(人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
総入館者数	2,451	2,474	3,403	3,681	3,111	2,379	3,043	3,122	2,180	1,747	874	354	28,819
平日	2,343	2,242	2,284	2,452	1,508	1,545	2,248	2,049	1,715	1,206	635	334	20,561
土曜日	108	232	579	780	273	208	412	991	465	349	239	20	4,656
日曜日	0	0	540	449	1,330	408	383	82	0	192	0	0	3,330
祝日	0	0	0	0	0	218	0	54	0	0	0	0	272

《2》展覧会

(1) 企画展

1			
帝京大学総合博物館企画展 キャンパス遺跡発見伝 - 古代多摩に生きたエミシの謎を追え -			
監修	会期	開催日数	入場者数
帝京大学文化財研究所	2019年10月15日(火) ～2020年2月29日(土)	96日	9,591名
関連イベント1			
エミシ研究講座			
テーマ	講師	実施日	参加者数
第1回 古代蝦夷社会の実像	八木 光則 (岩手大学平泉文化研究センター客員教授)	2019年10月26日(土)	58名
第2回 考古学からみた 武蔵国のエミシ	平野 修(公益財団法人山梨文化財研究所 考古第3室長・帝京大学非常勤講師)	2019年11月2日(土)	81名
第3回 東国と蝦夷政策	荒井 秀規(藤沢市役所郷土歴史課学芸員)	2019年11月9日(土)	76名
第4回 エミシの赤い土器 「赤彩球胴甕」を追う	杉本 良(北上市立博物館館長)	2019年11月30日(土)	81名
第5回 東国における 牛馬の考古学	植月 学(帝京大学文化財研究所准教授)	2019年12月14日(土)	92名

(2) その他展覧会 (主催については全て帝京大学総合博物館)

名 称	協 力	期 間	開館日数	入場者数
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「Teikyo Art Annual -ひとのかたち-」	—	2019年1月28日(月)～5月9日(木)	73日	5,688名
		※うち2019年度分 2019年4月1日(月)～5月9日(木)	27日	2,856名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「狩野派から近代日本画へ」	—	2019年1月28日(月)～5月20日(月)	82日	6,643名
		※うち2019年度分 2019年4月1日(月)～5月20日(月)	36日	3,811名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「本草学と薬用植物」	帝京大学薬学部 ・帝京大学メディア ライブラリー センター	2019年1月28日(月)～9月28日(土)	198日	20,291名
		※うち2019年度分 2019年4月1日(月)～9月28日(土)	152日	17,459名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「森田安次展」	帝京大学 書道研究所	2019年6月15日(土)～9月28日(土)	93日	11,260名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「シルクロードを掘る -世界遺産アク・バシム 遺跡の調査2019-」	帝京大学 シルクロード 学術調査団	2019年6月15日(土)～9月28日(土)	93日	11,260名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「Teikyo Art Annual -なつのいろ-」	—	2019年6月27日(木)～9月5日(木)	65日	7,170名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「経済学の古典をみる」	帝京大学メディア ライブラリー センター	2020年3月19日(木)～9月13日(日)	80日	4,345名
		※うち2019年度分 2020年3月19日(木)～3月31日(火)	8日	170名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「Teikyo Art Annual VOL 3」	—	2020年3月19日(木)～9月13日(日)	80日	4,345名
		※うち2019年度分 2020年3月19日(木)～3月31日(火)	8日	170名

(3) 授業展示

名 称	主 催	期 間	開館日数	入場者数
「心理学基礎演習Ⅰ」 学修成果ミニ企画展 ひとは世界をどう感じてる？ - 心理学的アプローチ -	心理学基礎演習Ⅰ 早川友恵 (文学部心理学科教授) 担当クラス	2019年7月24日(水) ～12月2日(月)	91日	10,084名
“Designomics”, Gala and YAKUSHIMA.The Challenge - 屋久杉流通への挑戦： デザインと経済 -	演習Ⅰ 三竝康平 (経済学部経営学科講師) 担当クラス	2019年9月17日(火) ～9月28日(土)	12日	1,794名
「アイドル」をつくろう： 「アイドル」の型の変遷と ニュータイプ	メディアコンテンツ制作実習 田島悠来 (文学部社会学科助教) 担当クラス	2019年12月18日(水) ～2020年1月14日(火)	19日	1,800名

(4) クラブ展示

名 称	主 催	期 間	開館日数	入場者数
新峰展	帝京大学美術部	2019年5月14日(火)～5月21日(火)	7日	747名
帝京大学写真部新人展	帝京大学写真部	2019年6月17日(月)～6月24日(月)	8日	1,313名

(5) 外部団体展示

名 称	主 催	期 間	開館日数	入場者数
第49回世界児童画展	公益財団法人 美育文化協会	2019年5月27日(月)～6月2日(日)	7日	927名

(6) 常設展

帝京大学のあゆみ

名 称	協 力	期 間
帝京 History	—	通年
帝京 Now	強化指定クラブ	通年
シルクロードを掘る - 世界遺産アク・バシム遺跡の調査 2018	帝京大学シルクロード 学術調査団	2019年1月4日(金)～6月14日(金)
ラグビーワールドカップ2019 日本大会 出場選手紹介	帝京大学ラグビー部 学生サポートセンター	2019年11月25日(月)～

多摩の歴史と自然

名 称	協 力	期 間
多摩の小さな自然	—	通年
発掘されたキャンパス内遺跡	帝京大学文化財研究所	通年
江戸時代の大塚村	帝京大学文学部史学科 帝京大学メディアライブラリーセンター	通年

(7) 講座等

1			
帝京映画教室 16ミリフィルムでみる名作アニメーションの世界 アニメーション監督特集・前期			
協 力		フィルム貸出協力	
帝京大学文学部日本文化学科		東京都立多摩図書館	
名 称	講 師	実 施 日	参加者数
第1回 手塚治虫 「鉄腕アトム－地球防衛軍」 「ジャングル大帝－飢えたサバンナ」	康村 諒（帝京大学文学部 日本文化学科准教授）	2019年6月26日（水）	32名
第2回 藪下泰司「西遊記」	康村 諒（帝京大学文学部 日本文化学科准教授）	2019年7月10日（水）	39名
第3回 宮崎駿「魔女の宅急便」	康村 諒（帝京大学文学部 日本文化学科准教授）	2019年7月24日（水）	48名

2			
帝京映画教室 16ミリフィルムでみる名作アニメーションの世界 アニメーション監督特集・後期			
協 力		フィルム貸出協力	
帝京大学文学部日本文化学科		東京都立多摩図書館	
名 称	講 師	実 施 日	参加者数
第1回 高畑勲 「太陽の王子ホルスの大冒険」	康村 諒（帝京大学文学部 日本文化学科准教授）	2019年9月23日（月）	19名
第2回 手塚治虫 「海底超特急マリリン・エクスプレス」	萩原 由加里（帝京大学文学部 日本文化学科講師）	2019年10月9日（水）	17名
第3回 出崎統 「冒険者たち ガンバと7匹のなかま」	萩原 由加里（帝京大学文学部 日本文化学科講師）	2019年11月6日（水）	17名

3			
ミュージアムサイエンスラボ「大学で科学のふしぎを体験しよう」			
協 力			
帝京大学医真菌研究センター	帝京大学文化財研究所	帝京大学教育学部初等教育学科	ゲノム創薬研究所
名 称	講 師	実 施 日	参加者数
カイコを育てて糸をとろう	松本 靖彦 (帝京大学医真菌研究センター研究員・ 明治薬科大学准教授)	2019年6月15日(土)	21名
	甲田 篤郎 (帝京大学総合博物館学芸員)	2019年8月3日(土)	22名
縄文時代の納豆づくりの謎を 探ろう	中山 誠二 (帝京大学文化財研究所客員教授・ 南アルプス市ふるさと伝承館館長)	2019年7月20日(土)	18名
	山田 剛 (帝京大学医真菌研究センター准教授)	2019年7月27日(土)	15名
DNAを肉眼で観察しよう	山田 剛 (帝京大学医真菌研究センター准教授)	2019年8月10日(土)	24名
鉱物で万華鏡をつくろう	堀越 峰之 (帝京大学総合博物館学芸員)	2019年8月17日(土) 10:00	18名
		2019年8月17日(土) 14:00	17名

4			
ミュージアムセミナー「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編			
協 力			
帝京大学文学部史学科		(株)吉川弘文館	
名 称	講 師	実 施 日	参加者数
第1回 明治憲法と議会	小山 俊樹 (帝京大学文学部史学科教授)	2020年1月25日(土)	153名
第2回 満州事変から太平洋戦争へ	戸部 良一 (元帝京大学文学部史学科教授・ 防衛大学校名誉教授)	2020年2月8日(土)	215名
第3回「戦後」と「平和」	浜井 和史 (帝京大学学修・研究支援センター 准教授)	2020年2月29日(土)	中止

《3》 授業利用

(1) 月別集計一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
合計	22	25	4	12	0	5	14	19	10	2	0	0	113
経済	2	2	1					1					6
国際経済	2	1						3					6
経営		1		1		4	3						9
観光経営		4		1			1	1					7
経済・経営・ 観光共通	1	1						1	1				4
法律	2	1											3
政治								1					1
日本文化													
史	4	4	2	3			2	4	1	1			21
社会	1	3				1		3	3	1			12
外国語	2	3		3			1		2				11
心理	1			2			1						4
教育文化	1						1						2
初等教育		3					2						5
教育学部 (再履修, 卒業研究等)	1												1
スポーツ 医療	1	2		1			2						6
人間文化	1												1
文・法・経 (再履修)								1					1
全学部									1				1
総合基礎	2			1				2					5
資格課程	1		1				1	1	1				5
文学研究科 日本史・文 化財学専攻								1	1				2

《4》 団体見学

(1) 月別集計一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
団体数	2	6	9	9	3	8	6	8	11	3	0	0	65

(2) 内訳

■ 4月

横浜創学館高等学校、神奈川県立氷取沢高等学校

■ 5月

大塚寿クラブ、NPO 法人トリニテ、国際 IC 日本協会、帝京第三高等学校、愛知県豊橋市立本郷中学校、帝京大学幼稚園

■ 6月

大府市立大府中学校、埼玉県山村学園、神奈川県相洋高等学校、桐陽高等学校、神奈川県立旭高等学校 保護者、静岡県富士見高等学校、文化財保存修復学会 プレイバント、埼玉県立入間向陽高等学校、浦和麗明高等学校 保護者

■ 7月

神奈川県立氷取沢高等学校、多摩丘陵の歴史を訪ねる会、文京学院大学女子高等学校、盈進学園東野高等学校、細田学園高等学校、東京都立拝島高等学校、八王子実践高等学校、パン工房うさぎとかめ、箕面チアリーディングクラブ SHINES・箕面自由学園チアリーディング部

■ 8月

八王子清流の会、水橋高等学校、私立大学図書館協会

■ 9月

高崎健康福祉大学高崎高等学校、東海大学教育支援センター、八王子第五中学校、豊南高等学校、多摩市立愛宕中学校、東京都立桜の丘学園、日本体育大学柏高等学校、進学業者対象キャンパス見学会

■ 10月

東京都立桜の丘学園、前橋育英高等学校、岩倉高等学校、群馬県立伊勢崎清明高等学校、帝京長岡高等学校、水戸啓明高等学校

■ 11月

日本体育大学荏原高等学校、横浜清風高等学校、日野多摩フォトロゲイニング 2019、帝京八王子中・高等学校、富山県立石動高等学校、向上高等学校、神奈川県立旭高等学校、佐久長聖高等学校

■ 12月

浦和学院高等学校、中央大学（博物館情報学・メディア論受講者）、越谷西高等学校吹奏楽部、国本女子高等学校吹奏楽部、豊南高等学校吹奏楽部、八王子実践高等学校吹奏楽部、昭和学院高等学校吹奏楽部、堀越高等学校吹奏楽部、三郷北高等学校吹奏楽部、学校法人帝京大学入職予定者職場見学会、インターンシップ学生見学会

■ 1月

明治大学、帝京大学文化財研究所友の会、帝京平成大学

《5》外部視察

(1) 月別集計一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
団体数	3	4	8	3	1	1	2	4	5	3	0	0	34

(2) 内訳

■ 4月

八王子市市民活動推進部学園都市文化課、トッパン・フォームズ株式会社、カリフォルニア大学リバーサイド校

■ 5月

水原大学校、東京富士美術館、金剛株式会社、埼玉県立蕨高等学校

■ 6月

絵本学会、義守大学、山手学院中学・高等学校、全日本空輸株式会社、日本図書館情報学会、オーストラリアグリフィス大学、文化財保存修復学会、法政大学総長室（大学史センター）

■ 7月

ダルマプルサダ大学、高等学校教員対象キャンパス見学会、タウンニュース社

■ 8月

摂南大学

■ 9月

明星ギャラリー

■ 10月

釜山外国語大学校、FM新潟 八王子キャンパス取材

■ 11月

青海大学(中国)、広東省教育機関訪問団(中国)、カレッジ・オブ・ザ・ロッキーズ、中央大学大学史資料課

■ 12月

公益財団法人前川財団、国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所・国連 UNHCR 協会、ラグビーワールドカップ2019 ラグビー部 OB 報告会、南カリフォルニア大学、野村不動産

■ 1月

国分寺市教育委員会(2回)、東北歴史博物館

2 2020 年度

《1》開館状況

(1) 開館期間 2020 年 4 月 1 日（水）～ 2021 年 3 月 31 日（水）

(2) 開館時間 9:00 ～ 17:00

(3) 休館日 日曜日、祝日、臨時休館日

(4) 月別開館日数（人）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合 計
総開館日数	3	0	17	23	20	20	26	22	23	21	19	23	217
平 日	3	0	17	23	20	20	22	19	20	19	15	21	199
土 曜 日	0	0	0	0	0	0	4	3	3	2	4	2	18
日曜日等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※新型コロナウイルス対策のため、2020 年 4 月 6 日から 2020 年 6 月 6 日まで臨時閉館。

(5) 月別入館者数（人）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合 計
総入館者数	60	0	558	1,176	1,613	1,304	2,109	1,203	1,328	731	871	1,486	12,439
平 日	60	0	558	1,176	595	554	1,507	1,064	1,124	695	730	880	8,943
土 曜 日	0	0	0	0	*546	0	147	139	204	36	141	144	1,357
日曜日等	0	0	0	0	*472	*750	*455	0	0	0	0	*462	2,139

※土曜日・日曜日等の閉館日入館者数はオープンキャンパス見学者数。*で表示。

《2》展覧会

(1) 企画展

帝京大学総合博物館企画展 帝京大学理工学部創設 30 周年記念 理工学部のラボのなか！－コトワリとワザの探究－			
主 催	会 期	開催日数	入 場 者 数
帝京大学総合博物館 帝京大学理工学部	2020 年 10 月 3 日（土） ～ 2021 年 5 月 29 日（土）	179 日	11,225 名
関連イベント ※2020 年度実施分			
最新研究講座 理（コトワリ）と工（ワザ）の研究者たち			
テ ー マ	講 師	実 施 日	参 加 者 数
帝京大学から宇宙へ － 学生が挑む超小型衛星開発 －	河村 政昭 (帝京大学理工学部 航空宇宙 工学科 准教授)	2020 年 10 月 24 日（土）	参加者 16 名 視聴回数 28 回 (ユニーク視聴者数 7 人)
ヴァイオリンの構造と 音色のしくみ	黒沢 良夫 (帝京大学理工学部 機械・精 密システム工学科 准教授)	2021 年 3 月 13 日（土）	参加者 23 名 視聴回数 27 回 (ユニーク視聴者数 5 人)
自ら癒して継ぎ合わす － 植物の傷の癒合 －	朝比奈 雅志 (帝京大学理工学部 バイオサイ エンス学科 准教授)	2021 年 4 月 24 日（土）	参加者 31 名 視聴回数 19 回 (ユニーク視聴者数 14 人)
ロボットコンテスト世界大会へ の挑戦	蓮田 裕一 (帝京大学理工学部 情報電子 工学科 教授)	2021 年 5 月 29 日（土）	視聴回数 41 回 (ユニーク視聴者数 24 人)

(2) その他展覧会 (主催については全て帝京大学総合博物館)

名 称	協 力	期 間	開館日数	入場者数
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「経済学の古典をみる」	帝京大学メディア ライブラリーセンター	2020年3月19日(木) ～9月13日(日)	80日	4,345名
		※うち2020年度分 2020年4月1日(水) ～9月13日(日)	72日	4,175名
帝京大学総合博物館 ミニ企画展 「Teikyo Art Annual VOL 3」	—	2020年3月19日(木) ～9月13日(日)	80日	4,345名
		※うち2020年度分 2020年4月1日(水) ～9月13日(日)	72日	4,175名

(3) 授業展示

名 称	主 催	期 間	開館日数	入場者数
「アイドル」とメディア	帝京大学文学部社会学科 「メディアコンテンツ制作実習」	2020年 12月2日(水) ～12月21日(月)	16日	1,018名
	共 催 帝京大学文学部社会学科 田島 悠来 講師 担当ゼミ			

(4) 常設展

① 帝京大学のあゆみ

名 称	協 力	期 間
帝京 History	—	通年
帝京 Now	強化指定クラブ	通年
ラグビーワールドカップ 2019 日本大会 出場選手紹介	帝京大学ラグビー部 学生サポートセンター	2019年11月25日(月)～

② 多摩の歴史と自然

名 称	協 力	期 間
多摩の小さな自然	—	通年
発掘されたキャンパス内遺跡	帝京大学文化財研究所	通年
江戸時代の大塚村	帝京大学文学部史学科 帝京大学メディアライブラリーセンター	通年

《3》 授業利用

(1) 月別集計一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
合計	0	0	17	15	0	0	10	10	11	2	0	0	65
経済			3	2			1		1	1			
国際経済			1					2	3				
経営			LMS 1	2			2						
観光経営			LMS 1	3			1			1			
法律			1										
政治									1				
史			1	2					1				
社会				1			1	4	4				
				LMS 1									
外国語			3	1			1		1				
心理							1						
初等教育			1				1						
教育学部 共通			1										
スポーツ 医療				2				2					
全学部 (再履修)			2										
総合基礎			2										
資格課程							2	2					
教職研究科				1									

《4》 団体見学

(1) 月別集計一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
団体数	0	0	0	0	1	1	5	1	2	0	3	2	15

(2) 内訳

■ 8月

教員免許更新講習

■ 9月

NPO 法人トリニテ生活介護グリーンハウス

■ 10月

帝京大学幼稚園(4回)、多摩市和田・東寺方コミュニティセンター運営委員会

■ 11月

広報主催キャンパス見学会

■ 12月

広報主催キャンパス見学会、帝京ベースボールジュニア

■ 2月

帝京大学幼稚園(2回)、社会福祉法人おおぞら やまばと

■ 3月

帝京大学新入事務職員キャンパス見学会、NPO 法人トリニテ生活介護グリーンハウス

《5》 外部視察

(1) 月別集計一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
団体数	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	3

(2) 内訳

■ 8月

放送大学

■ 9月

(株)クリネット

■ 1月

(株)ムラヤマ

3 組織 (2019年4月1日～2021年3月31日)

(1) 博物館スタッフ

①館長・副館長

役職	氏名	所属等
館長	今村 啓爾	文学部史学科 教授
副館長 ～2020年3月	鈴木 稔	文化財研究所 教授
副館長 2020年4月～	中山 京子	教育学部初等教育学科 教授

②専任職員 (八王子キャンパス事務部学術情報グループ所属)

役職	氏名	所属等
グループリーダー ～2020年3月	中嶋 康	メディアライブラリーセンター兼務
グループリーダー 2020年4月～	山下 智美	メディアライブラリーセンター兼務
チームリーダー	中満 恒子	メディアライブラリーセンター兼務
チームリーダー	川北 友美	メディアライブラリーセンター兼務
係員 (学芸員)	堀越 峰之	
係員 (学芸員)	甲田 篤郎	
係員 (学芸員)	橘田 梢	2020年8月～

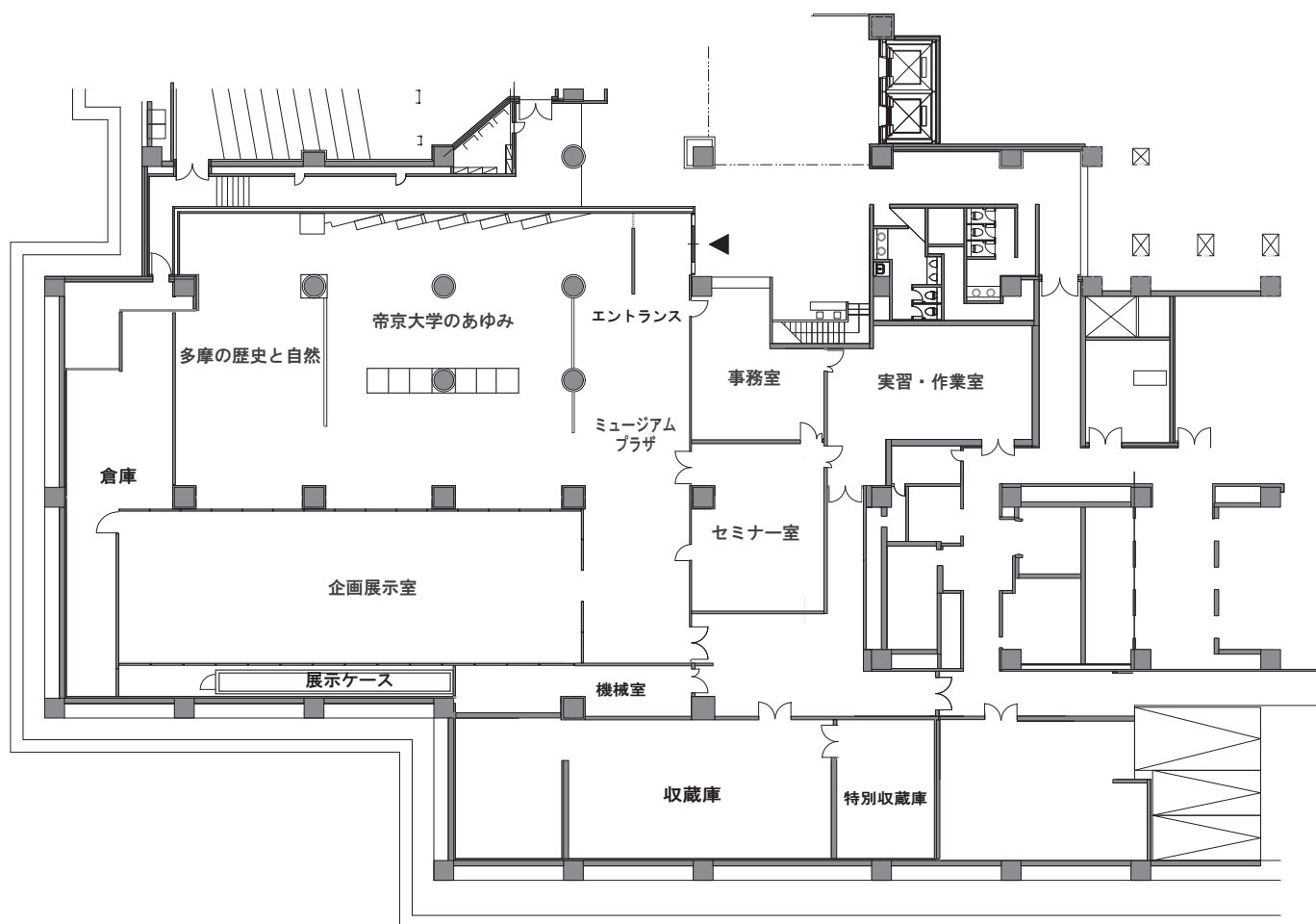
③非常勤職員

資格	氏名	勤務期間
ミュージアムアシスタント (学芸員有資格者)	菊池 耕晏	～2020年3月
ミュージアムアシスタント (学芸員有資格者)	後藤 健一郎	～2020年3月
ミュージアムアシスタント	福士 菜緒	～2020年3月
ミュージアムアシスタント	室岡 直樹	～2020年3月
ミュージアムアシスタント	坂本 隆	
ミュージアムアシスタント	深澤 貴志	
ミュージアムアシスタント	安藤 英子	2020年1月～
ミュージアムアシスタント	佐々木 嵩	2020年1月～
ミュージアムアシスタント	野田 凜	2020年1月～
ミュージアムアシスタント	松本 健吾	2020年1月～
ミュージアムアシスタント	山本 陸人	2020年1月～
ミュージアムアシスタント	金子 透也	2020年11月～
ミュージアムアシスタント	斎藤 裕哉	2020年11月～
パートタイマー	石川 純子	
パートタイマー	鈴木 洋子	

(2) 博物館運営委員

氏名	所属	委嘱期間
西澤 保	経済学部経済学科 教授	
天日 隆彦	法学部法律学科 教授	
萩原 由加里	文学部日本文化学科 講師	
岡部 昌幸	文学部史学科 教授	
高橋 裕史	外国語学部外国語学科 教授	2019年度
鷺尾 善典	教育学部教育文化学科 講師	
蛭間 栄介	医療技術学部スポーツ医療学科 教授	
萩原 治夫	医学部医学科解剖学講座 主任教授	
栗原 順一	薬学部薬学科 教授	2019年度
平本 隆	理工学部航空宇宙工学科 学科長	
嶺岸 勝文	福岡医療技術学部医療技術学科 教授	
劔重 依子	外国語学部外国語学科 准教授	2020年度
厚味 厳一	薬学部薬学科 教授	2020年度

4 施設概要



■帝京大学総合博物館の設備

所在地 東京都八王子市大塚359番地

敷地面積 1,430 m²

建築面積 1,430 m²

建物構造 帝京大学八王子キャンパス ソラティオスクエア（地上22階 地下2階）の地下1階

名 称	面 積
展 示 室	621 m ²
収 蔵 庫	220 m ²
事 務 室	56 m ²
セミナー室	67 m ²
倉 庫	98 m ²
実習・作業室	85 m ²
供用部他	283 m ²
合 計	1,430 m ²

IV 講座記録

■最新研究講座 カビと闘う研究者たち！

- 第1回 健康の質を高める抗菌アロマセラピー ……………安部 茂
第3回 遺伝子工学と水虫 ……………山田 剛
第4回 カイコを利用して新しい薬や食品をつくる ……………関水 和久

■シルクロードを旅する企画展講座

- 第2回 シルクロードの夢を旅した父と母 ……………平山 廉
第3回 シルクロード：平山郁夫の夢を共に歩く ……………前田 耕作

■エミシ研究講座

- 第1回 古代蝦夷社会の実像 ……………八木 光則
第2回 考古学からみた武蔵国のエミシ ……………平野 修
第3回 東国と蝦夷政策 ……………荒井 秀規
第4回 エミシの赤い土器『赤彩球胴甕』を追う ……………杉本 良
第5回 東国における牛馬の考古学 ……………植月 学

■「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編

- 第1回 明治憲法と議会 ……………小山 俊樹
第2回 満州事変から太平洋戦争へ ……………戸部 良一

最新研究講座 カビと闘う研究者たち！

第1回 健康の質を高める抗菌アロマセラピー

帝京大学医真菌研究センター名誉教授 安部 茂

《実施日 2018年8月4日（土）於 帝京大学総合博物館展示室》

今日は暑い中、8月もこのような時にお越しくださり、ありがとうございます。

私どもの医真菌研究センターがちょうど35周年で、それと併せた記念で総合博物館の企画展を開催しています。前回は、医真菌研究センターを立ち上げられました山口英世先生が医真菌学全体の話を読まれたので、過去にどのような活動をしてきたかということは分かっていたかと思いません。私は20年ぐらい前から、医真菌研究センターで抗菌マロマの研究をしています。特に抗菌アロマセラピーというのは、決して勉強するというものではなく、自分で楽しむというか、自分でやりながらその世界を知るものだと思っています。そういうところを、今回のお話の中でぜひ皆さんに分かっていただけたらと思います。

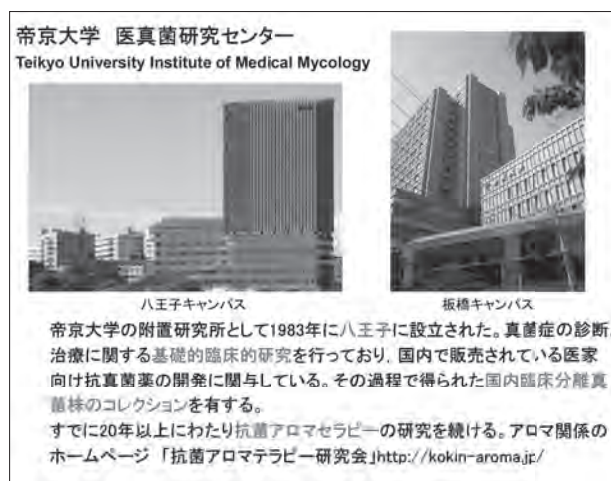
医真菌研究センターは帝京大学八王子キャンパスにあります。【図1】

初めて来られた方は大変だったと思います。夏の今が一番つらいときで、その次につらいのは冬ですけれども、風光明媚で、春と秋は素晴らしいところです。1983年に八王子につくられて、基本的にはカビの臨床株のコレクションをしています。アロマが好きの方は、すでに私達のホームページを見ていただいているかと思います。また、この話を聞いてアロマをやってみたいという方も、ぜひご覧ください。

はじめに

1985年という随分前ですけれども、私は薬学部出身で、ここで助教授をさせていただきました。1990年、今から約30年前に医学部の助教授になり、微生物の研究をしておりました。そして21世紀になって医真菌研究センターに本籍を移しまして、2004年から今年3月まで所長を務めました。今は、第4回にお話しされる関水先生に所長が代わっています。

山口英世先生は、日本の医真菌学をつくっていった祖と言える大先生です。1985年の時も山口先生のところにぜひ来てみないかと誘われて、医真菌研究センターに入らせていただきました。この時期からずっとカビを中心に研究をしまして、医学部に移ったのも、山口先生が医学部に移られましたので、来てくれということで移ったわけです。そういう意味で、先生は私より十四、五歳上の、常にご指導してくださいました、メンターという意味での医真菌学での私の先生です。さて、2001年に教授になると、かなり好きなことができる状況になりました。今は、例えばどこの学部でも大学でも、ア



【図1】

ロマをやっていたのでは教授や助教授、上には行かれません。どうしてかということ、「ブラックペアン」というテレビ番組もありましたが、今の制度として、インパクトファクターといって質の高い論文を出していかなければ教授にはなれません。しかし、それはそれとして、私は好きなことをやっていきたいということで、抗菌アロマセラピーの研究を始めました。その時の先生が、やはり私のメンターなのですが、井上重治先生です。残念ながら6年前に亡くなられてしまいました。井上先生がなされていたことに興味を持ちまして、いろいろなことを教えていただきながら研究してきたのが、2000年からのほぼ20年間です。

そんな中、単に抗菌アロマセラピーを研究するだけではなく、実際に人の役に立てるようなものをつくっていききたいということで、開発のプロジェクトチームを立ち上げました。そして、今日もいらっしゃっている仲間たちと一緒に、様々なものをつくってきました。話の中でも、いろいろな香りのもを提示させていただきますので、ぜひ最後までお聞きいただければと思います。

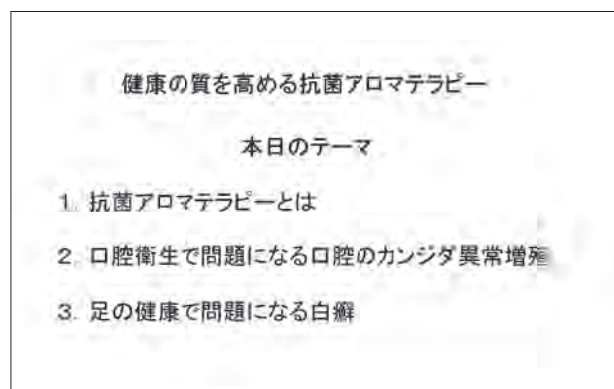
どうして私が抗菌アロマセラピーに魅せられたのかをお話します。アロマをやっている方は皆そう感じるかと思いますが、なぜ医学会や学会では皆これほどいいものを無視しているのだろう、少なくとも軽視されている状況があるのだろうと不思議になります。自分の僅かな力でもそのような状況を変えていきたいと思い、アロマセラピーの研究をしています。自然療法としても重要です。みなさまも、ある程度の年になると感じるかと思いますが、自然とのつながりなくしては健康で幸せな生活はできないのではないのでしょうか。香りは自然の恵みですので、そういう思いで研究しています。

ガットフォセは有名なアロマセラピーの先駆者で、彼がアロマセラピーを最初に始めたのは戦争中でした。薬がない時に、やけどなどをした兵士を治療するのに、ラベンダー油をつけたということです。私は、2003年ごろの話ですが、真夜中にラーメンを作っていて、熱湯を右手にかけて、やけどをしてしまいました。その時、これは水膨れになると思ったのですが、すぐにラベンダー油を塗布しました。そうしたら、何と痛みがすぐになくなって、40時間後でもこの程度で済みました。少し痕は残りましたが、自分でアロマの効果を体験して、ああ、これは本当に効果的だということを実感しました。

ただし、皆さんに絶対に気を付けていただきたいのは、特に子ども等のやけどです。もちろん冷やさなければ一番いけないのですが、どこまで深刻なのか分かりません。自分であれば、ある程度分かりますからいいのですけれども、子どもや他人のところで、アロマがいいからといってやるのは危険です。実際に、私の知り合いの子どもさんがやけどをしてしまって、ラベンダーで処置をしました。その時はよかったのですけれども、結果として、いろいろな処置が遅れてしまい、最終的にはラベンダーに対して強いアレルギーになってしまいました。そういうことがありますから、自分でコントロールできるような範囲内でやるということを頭に入れておいてください。

私は2000年まで、漢方生薬の研究をさせていただいて、生薬が、詳細なメカニズムは分からなくても効くということだけは分かっていました。こういう中で、実際にマウスの口腔カンジダ症モデルをつくり、そこにティートリーというものを塗ってみました。見ると分かるように、驚くアロマの効果、本当によく効きました。確かに効くのだということを確認しまして、その後いろいろな植物もやってみたいと思い、様々なハーブなども調べ、今はサンショウの栽培を中心に、抗菌活性などを研究しています。

では、抗菌アロマセラピーの話に入らせていただきます。**【表1】** テーマを3つに分けて、1つは、抗菌アロマセラピーとは一体どういうものなのか説明します。アロマセラピーとは香りを使ったセラピーで、健康の質を高めるものですが、それを抗菌というのは一体何なのかということ、1番でお話しします。理論を言ったからといって、実際に具体的な対象がないと面白くありませんので、2番では、口腔衛生の中で、今日もお年を召された方がいらっしゃるかと思えますけれども、特に口腔ケアが大事になってきますので、口腔のカンジダ菌の異常増殖に対する抗菌アロマセラピーのお話をさせていただきます。そして3番目としては、足の健康で問題になる白癬についてです。多くの人は自分は白癬になっていないと思っていますけれども、大体日本人で2,000万人、お年寄りだと半分以上の方が水虫に感染しています。そういう話とアロマがどういうものかということをお話していきたいと思えます。



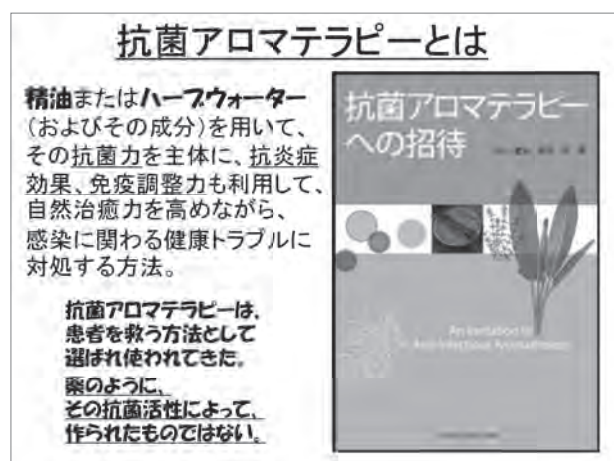
【表1】

抗菌アロマセラピーとは

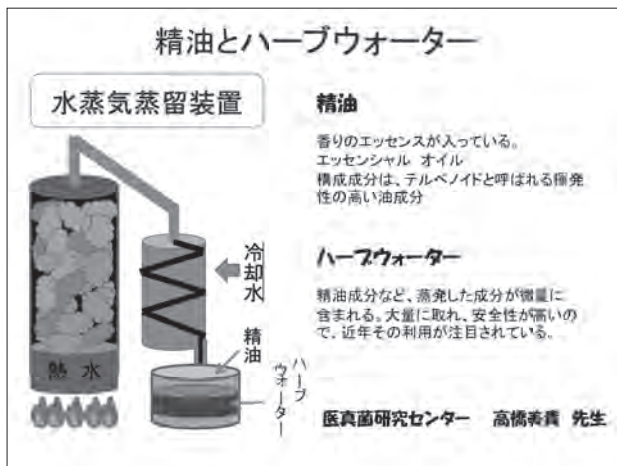
これは、先ほどの井上先生と一緒に書かせていただいた本です。**【図2】** 抗菌アロマセラピーとは何かということが書いてあります。

これから、精油やハーブウォーターとは一体何だということをお話しますが、要は、精油とは、芳香植物を水蒸気蒸留して取れた油成分で、普通の植物油とは違っていて、はるかに揮発性が高いものです。また、水蒸気蒸留で得られた蒸気がまた水になる液体をハーブウォーターといいます。抗菌アロマセラピーとは、精油またはハーブウォーターを用いて、その抗菌力を主体に、抗炎症効果、免疫調整力を利用して、自然治癒力を高めながら、感染に関係するような健康トラブルに対して処置する方法ということで定義させていただきます。

これらは、アロマセラピーの中では大きな分野としてずっと認められているものです。ただし、薬のように、その抗菌活性によってつくられたものではなく、長い生活歴史の中で見出されてきた伝統的なものです。どういう違いがあるかというと、例えばペニシリンや今の抗菌薬は、試験管の中で菌を殺すという、その活性で選んできたものです。そういうものは抗菌力が主体です。しかし、アロマ精油は結果として患



【図2】



【図3】

者さんが治ることで見出されてきたものですから、ほとんどは抗菌力だけではなく、抗炎症効果や、さらにそれを使うと、免疫調節力というか、特に感染によってストレスが高まったときに回復させる力がある。そういうものなのです。

では、精油とハーブウォーターとはどのようなものでしょうか。これは医真菌研究センターの高橋美貴先生が作られたスライドです。【図3】

ここに熱水抽出蒸気釜があります。これで熱水をポコポコやりまして、そこにハーブを入れます。そうすると蒸気がどんどん出てきます。蒸気が出ていくと、水蒸気と一緒にくっついて軽い成分も出てきます。それを冷却してできる液体が、上澄みのところに出てくる精油と下層のハーブウォーターです。精油のことを英語では、香りのエッセンスですからエッセンシャルオイルと呼びます。その構成成分はテルペノイドといわれる分子量が約 150 ~ 200 ぐらいの揮発性の高い物質です。また、ハーブウォーターは基本的には 99% 水で、水に溶けやすい精油成分が入ったものです。ハーブウォーターは大量に取れて安全性が高いので、近年その利用が注目されています。

ハーブウォーターの中で最も使われているのはバラのハーブウォーターです。【図4】



【図4】

では、一緒に研究している丸山奈保先生が手伝ってくださいますので、よろしければハーブウォーターを手などにつけて匂いをかいでみてください。これが今のハーブウォーターで、例えばスポーツの後などに使います。いい香りですね。ハーブウォーターの他に、バラといえば精油があって、精油の中で私が一番好きなのはバラの精油です。ちょっと高価なのが難ですが、ここに、ほんの一滴たらしたムエットという紙があるので、その香りをかいでみてください。こういうものはバラに限らず、いろいろなものできます。香りをかぐだけではなく、様々な使い方をして、感染や炎症性疾患に利用していくのが抗菌アロマセラピーの考え方です。もうこの部屋が全部バラの香りで満たされてきていますね。幸せな感じになります。

この香り成分には抗菌活性や抗炎症活性があるのだということ、丸山先生が論文にしています。感覚的には分かっていることも、実際にきちんとデータとして出すことが重要で、私たちはそういうことをやっています。

これは比較的小型の蒸留窯です。【図5】

実際に今日の話の中で何か抗菌アロマに接点を持ってほしいと思います。

ハーブウォーターは家庭でもできます。【図6】

今日は日本アロマ蒸留協会の河内先生と山下先生にも来ていただいていますので、後ほどお話を聞いてみてください。

どういうことかという、基本的にはこの蒸留器と全く同じ原理です。IH ヒーターで、下の水を熱しまして、そして上には様々なハーブを置いていくと、ポコポコと蒸気を出します。蒸気があがる上に氷を置いています。氷を入れると、ここがロート型の凸になっていて、蓋の下側に結露したものが下に垂れていき、ビーカーの中に液体がたまってハーブウォーターが得られます。その液体の香りや栄養素や機能性成分を見ていくわけです。

料理と似ていますが、料理を一步超えて、アロマというところで見ていくと、いろいろなことが分かってきます。感激する話は、年を取ったワンちゃんが、ドッグフードや何かも食べなくなってしまった時、この方法でお肉のハーブ



【図5】

ウォーターを作り、それをドッグフードに少しかけたら食べたという話です。ワンちゃんの衰えた食欲を香りが回復させたのですね。

アロマセラピーは100年近くの歴史があり、実際に名前が付けられる前を含めれば3,000年以上です。例を言いますと、漢方医薬でもアロマ成分が使われており、フランスでもそういう機能を使ったアロマセラピーが非常に盛んであったということです。

これはフランスのアロマ大全という本も参考にしながら、どのようなものがアロマセラピーで健康トラブルに使われるのかを示した一覧表です。【表2】

皮膚疾患、今日2番目にお話しします口腔消化器疾患、あとは呼吸器、循環器、泌尿器、生殖器、骨疾患などにも使われています。赤字(下線)でお示したものは微生物感染が関係しているもの、青字が炎症や免疫が関係しているものです。見ると、アロマセラピーが対象とする疾患には感染や炎症がかなり関わってきていることが分かるかと思えます。

その中でも、医真菌研究センターで私たちが研究している、真菌感染が関与するものです。【表3】真菌感染はアロマセラピーにとってちょうどいい対象です。といいますのは、私たちの生活と真菌は非常に深く関わってしまっていて、真菌感染は免疫力の弱い人達に様々な健康トラブルをひきおこします。免疫力の強い若者は深刻な真菌感染症にはなりません。私たちも50歳か60歳ぐらいまでは大丈夫です。しかし、人間の寿命が急激に延びています。そうすると、やはりいろいろな破綻が来るわけです。そこに真菌感染が関わってきて、白癬やカンジダ症なども出てきます。ここに書いてあるものは、命に関わることはめったにないので、香りで何とか制御ができればいいというところですよ。

実際に一番抗菌アロマが使えるトラブルを示しました。【図7】

フケだったり皮膚が赤くなったりする脂漏性湿疹はマラセチア感染が関係しています。元々カンジダ菌は消化管の中でずっと生きている菌です。体の抵抗力が弱くなり、ある年齢

皮膚疾患	白癬、にきび、ヘルペス、疥癬、脂漏性皮膚炎、虫さされ、乾癬、肌荒れ、あかざれ、熱傷、静脈瘤、妊婦腫、皮膚萎縮症、放射線障害
口腔消化器疾患	食中毒、寄生虫感染、肝炎、歯槽膿漏、口内炎(カンジダ症など)、歯痛、胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、腸カタル、消化不良、腹痛、車酔い、吐き気、便秘
呼吸器疾患	風邪、鼻炎、副鼻腔炎、気管炎、扁桃腺炎、喉頭炎、気管支炎、肺炎、喘息、アレルギー性鼻炎、気管支拡張症
循環器疾患	高血圧症、低血圧症、冠動脈不全、狭心症、不整脈
泌尿器疾患	膀胱炎、尿道炎、腎炎、前立腺肥大、腎結石、夜尿症
代謝疾患	甲状腺機能亢進症、高血圧症、糖尿病
神経疾患	片頭痛、パニック障害、うつ病、ノイローゼ、不安症、不眠症、痴呆、慢性疲労
性器疾患	膣炎(カンジダ症など)、コンジローム、インボテンツ、月経異常、月経痛、更年期障害
筋肉・骨疾患	関節リウマチ、関節炎、テニスエルボー、スライムズショルダー、打ち身、虫歯、捻挫、腰痛炎、坐骨神経痛、肩痛、首痛、足痛、腰痛

赤字：感染・炎症が関わるもの 青字：炎症・免疫が関わるもの (フランスアロマ大全より)

【表2】

皮膚疾患	白癬、にきび、ヘルペス、疥癬、脂漏性皮膚炎、虫さされ、乾癬、肌荒れ、あかざれ、熱傷、静脈瘤、妊婦腫、皮膚萎縮症、放射線障害
口腔消化器疾患	食中毒、寄生虫感染、肝炎、歯槽膿漏、口内炎(カンジダ症など)、歯痛、胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、腸カタル、消化不良、腹痛、車酔い、吐き気、便秘
呼吸器疾患	風邪、鼻炎、副鼻腔炎、気管炎、扁桃腺炎、喉頭炎、気管支炎、肺炎、喘息、アレルギー性鼻炎、気管支拡張症
循環器疾患	高血圧症、低血圧症、冠動脈不全、狭心症、不整脈
泌尿器疾患	膀胱炎、尿道炎、腎炎、前立腺肥大、腎結石、夜尿症
代謝疾患	甲状腺機能亢進症、高血圧症、糖尿病
神経疾患	片頭痛、パニック障害、うつ病、ノイローゼ、不安症、不眠症、痴呆、慢性疲労
性器疾患	膣炎(カンジダ症など)、コンジローム、インボテンツ、月経異常、月経痛、更年期障害
筋肉・骨疾患	関節リウマチ、関節炎、テニスエルボー、スライムズショルダー、打ち身、虫歯、捻挫、腰痛炎、坐骨神経痛、肩痛、首痛、足痛、腰痛

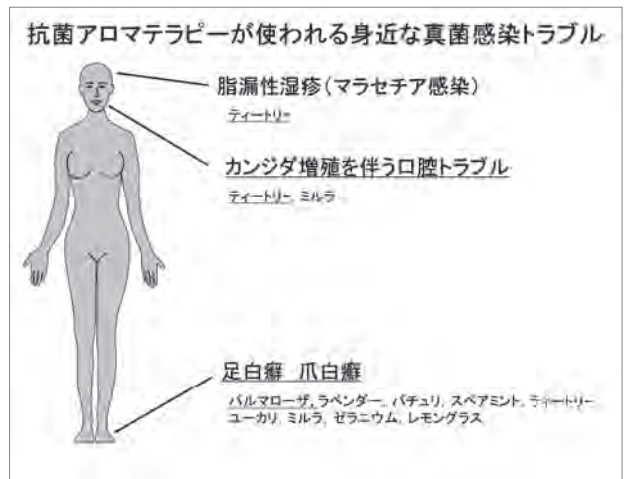
赤字：真菌感染が関わるもの 青字：炎症・免疫が関わるもの (フランスアロマ大全より)

【表3】

になってくると、唾液の出があまりよくなってきて、口の中が乾くなどして、口の中の菌の数が増えてきて、その中で特にカンジダ菌のようなものが増殖してしまいます。もう一つは足白癬、あるいは爪白癬も同じように出てきます。普通の薬とは違って、アロマというのは浸透力が非常に強いんです。後ほど申し上げますが、症状が表面に出てくる、疾患の感染部位が浅い体表面にある場合、奥まで入って効くことがアロマの効果の特徴です。



【図6】



【図7】

**年齢を重ねるとともに健康の質が低下する
カンジダの過剰増殖を伴う口腔トラブルの要因**

カンジダは、ほとんどすべてのヒトの消化管にいる。

カンジダを流し去る唾液の流れの滞留

口腔乾燥(シェーグレンなど)

滞留しやすい複雑な口腔内構造(齶歯、義歯装着、溝状舌など)

カンジダの粘膜表面への付着の促進

正常細菌叢の乱れ(広域抗生物質)

菌糸形誘導物質の存在(血清成分の漏出など、pHが6以上)

カンジダの増殖が亢進

糖尿病による高い糖濃度、病原性の強い株の侵入

粘膜に侵入後の排除能の低下

細胞性免疫の低下、粘膜の修復能の低下

【表4】

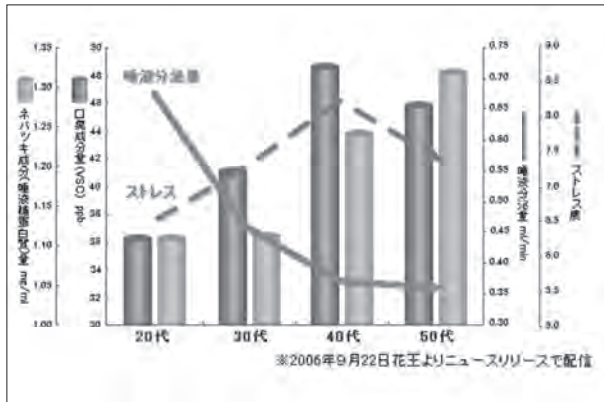
口腔衛生で問題になるカンジダ異常増殖

具体的な問題に入りたいと思います。口腔衛生で問題になる口腔のカンジダ異常増殖にターゲットをしばっていきま。カンジダ菌というものに、皆さんはあまり親近感を持っていないと思います。カンジダはほとんど、全ての人の消化管にいます。【表4】便をスワブで取って寒天の上で培養すると、四、五十歳を過ぎると二、三割の人から出てきます。ただ、出てこない人もいるのですが、もっと高感度の今のPCR法などで調べていくと、全員陽性になります。実際に感染したことが分かる皮膚テストなどをやると、皆がプラスになります。入っているということです。

元々カンジダ菌は昆虫の消化器官の中にいました。私たちが哺乳類として発生した頃、虫などを食べていたので、虫を食べるとおなかの中へ行って、おなかの中で特に37℃くらいの温度で発育できたのです。消化器官の中に潜んでいるのですが、年を取って40歳以上を過ぎると、唾液の流れが滞留してきたり、粘膜表面への付着が促進したりすることでカンジダの増殖が亢進します。特に糖尿病、あるいは抗生剤などをのみますと、すぐに10倍ぐらいいは増えてしまいます。排除能の低下でカンジダがどんどん増えてくるのです。

この図は花王のニュースリリースから出たものです。

【図8】



【図8】

20代、30代、40代の人々の唾液量を見てみますと、青い線の分泌量が0.65から0.35ぐらい、約半分減ってきます。実際にその年になってくると、出が悪くなっていると感じるかと思います。特に女性だと、病的に減ってくるシェーグレン症候群などで困っている方はたくさんいます。

また、入れ歯にして唾液が十分出でなくなると、カンジダがこのように付着します。【図9左】

さらに、このようになったこともあるかと思うのですが、これは口角炎です。【図9中央】

口角炎のこういうところが水っぽくなって、そのままにしておくと、ここが炎症を起こします。これがカンジダ性の口角炎です。さらに右図は食道カンジダ症といって、喉の飲み込みが何となくおかしくなってきます。【図9右】

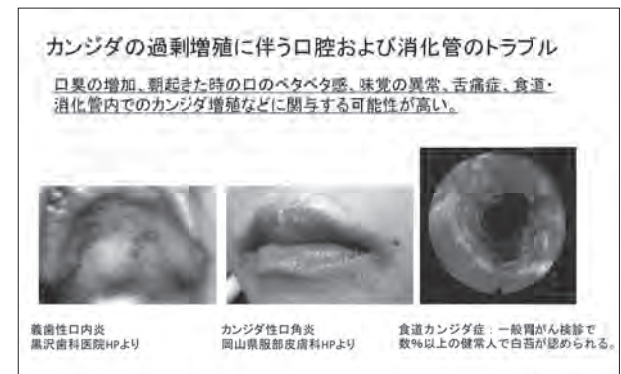
一般の健康人の胃がん検診で食道を調べると、大体数%の人はこのように斑点状にカンジダが見られます。そして口臭の増加、朝起きたときの口のベタベタ感、味覚の異常、さらには舌が痛い舌痛症、食道。このようなものはカンジダ増殖が関与する可能性が強いとされています。

これは東京医科歯科大学の高山かおる先生たちの研究です。【表5】

味覚障害は亜鉛が欠乏していることも多いのですが、これを見てください。この試験では、舌カンジダ症といって、外から白苔が見られたような人は別にして、一見、健康に見える人でも保菌者が200人中33人ですから、結構若い人でも15%ぐらいいはカンジダがいます。この中で味覚異常が24人、味がどうもよく分からないという人に対して抗真菌薬を使用しますと、その人たちの88%が治ったということです。カンジダが私たちの健康な生活レベルを低下させているということです。

これがカンジダ菌で、カンジダ菌の発育型は2つの形をとります。【図10】

バラバラになっているものが酵母で、条件さえ整うと、菌糸状になります。この2つの形をとることが、*Candida albicans*の大きな特徴です。*Candida albicans*がなぜこう



【図9】

味覚障害は抗真菌薬で改善できることが多い

	被験者数(名)	味覚異常	抗真菌薬で治療後の味覚異常の改善	
舌カンジダ症患者	18	17 (94%)	→ 5/7 (71%)	
健康者	200	保菌	33	24 (73%) → 7/8 (88%)
		検出されず	167	46 (28%)

東京歯科大・高山かおる(2007年)

口腔内にCandida spp.が定着すると味覚障害の原因となりうる。

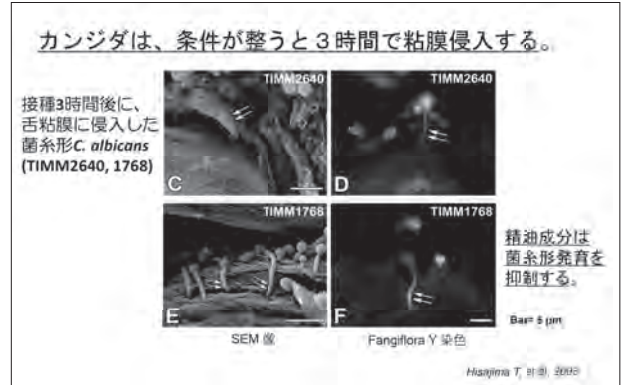
【表5】



【図10】

なのかという、先ほど申しましたように、昆虫のおなかの中で進化しました。皆さん方はぶどう酒をどのようにつかるかご存じですか。ぶどう酒は、ぶどうをそのまま取ってきて、今はもちろんたいてい入れるのですが、昔はそのまま若い乙女が足で踏んで、それでおいしいワインができることでした。どうしてかという、ぶどうには酵母がたくさんいます。酵母というのはカンジダのようなものも含んでいて、Saccharomyces というものですが、その酵母には手も足もないわけですから、ぶどうからぶどうへ、あるいは花から花へ、蜜から蜜へと移っていく手段が必要なわけです。それを行うのが虫たちで、虫たちは自分のおなかの中に入れて、別の花に行くことにより伝播していくのです。ですから、虫媒花といって、虫が花の受粉をするのはよくご存じだと思いますが、虫媒花だけではなく、このような微生物も同様に伝播していく生態系を昔からつくっていたのです。

消化管内の流れは、すごく急流なので、酵母形のカンジダはどこかの壁にくっついていなければいけない。腸の壁にくっつくときに、根ができるように菌糸形になります。ですから、非常に付着力が強い。このように2つの発育型をうまく自分自身で調節しながら長い間生きているのが、カンジダの特徴です。カンジダ菌の生態は非常に面白くて、今日は話すつもりではなかったのですが、Candida auris という、今、問題になっている菌を世界で初めて発見した佐藤先生がいらっしゃる。Candida auris は耳の中などにいるのですが、免疫力が弱った人に感染すると、薬に対して耐性が



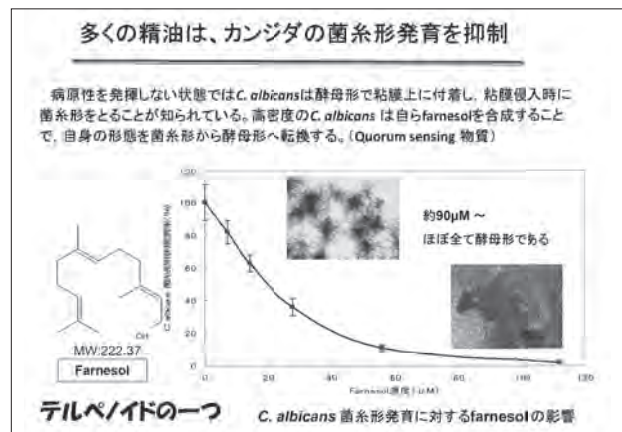
【図11】

できてしまうことで、世界中で大きな問題になっています。そういうことも私たちは研究しています。

カンジダ属につきまして、albicans に話を戻しますと、寝るときに歯を磨かないで口の中にカンジダがたくさんいると、大体3時間でカンジダが菌糸形の足を出してきます。【図11】これはマウスを使った実験で、マウスを寝かせていると、albicans は足を出していき、舌に入り込んでしまう。怖いですね。これを見ると、絶対に夜、寝る前には歯を磨こうという気になるかと思います。精油成分はカンジダが菌糸形になるのを阻止してくれます。今日は時間がないので話しませんが、植物の病原菌の80%はカビですから、カビに対する防御として、アロマの成分も十分に働いているものと考えられます。ほとんどの精油成分には抗カビ活性があります。

おもしろいことに、カンジダが自分自身で菌糸形を阻止する精油成分 (farnesol) を出すのです。【図12】

横軸は精油成分の濃度です。カンジダ菌の密度が高くなりますと、自分自身がこの精油成分を出して行って、バラバラになります。どういうことかという、例えば腸粘膜の上にカンジダ菌の集団ができたとき、そのまま菌糸形でどんどん粘膜内に入ってしまうと、その人間に危害を与えてしまいます。カンジダが人と共存するためには、ある程度のところになったら、もうここでいいということで、カンジダ



【図12】

口腔カンジダ症に対する抗真菌薬投与の問題点

治療上の問題点

カンジダ菌を完全に排除する治療は困難である。
長期的には、口腔カンジダ症の再発・薬剤耐性化がおこる。

抗真菌薬の問題点

薬剤の副作用、薬物相互作用が服用で投与できない場合がある。
使用するためには医師の処方箋が必要で、医療費が問題になる。
味覚的に良くない。

殺菌薬入りの咳嗽剤の問題点

口腔粘膜を障害し、しかも正常な微生物フローラを破壊する。

トラファル対処法としてのセルフケアの開発が求められている

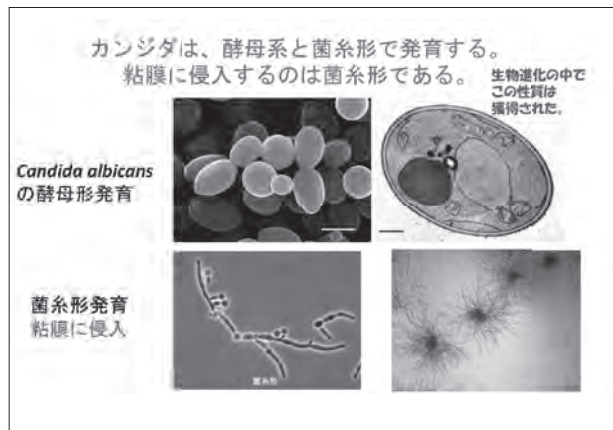
【表6】

はまたバラバラになって腸の別のところに移っていく。移った場所で、ある程度の数が増えると、ばらついていくという生活様式なのです。

口腔カンジダ症が問題だと言いました。【表6】抗真菌薬の投与だけでカンジダ症が解決するのであれば、研究の必要はありませんが、治療として抗真菌薬を投与していくと、再発や薬剤耐性化が起こってきます。特にカンジダは腸の中まで全部いるために、今の段階ではどんな薬でも完全に腸からなくすことはできません。また、抗真菌薬は、実際に処方してもらおうのは大変ですし、問題点もありますので、口の中の問題ではセルフケアとして抗真菌薬を使うことは、まずできません。このようなことから、セルフケアの1つとして精油を使った治療を考えたいわけです。



【図13】



【図14】

**カンジダによる口腔トラブルを
経口摂取で改善することがわかった成分**

植物精油

ミント類 ティートリー油など

アロマ・スパイス類

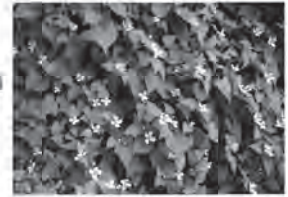
乾燥ドクダミ (デカン酸)
シナモン、ショウガ、クローブ

植物成分

低分子化ポリフェノールなど

ペプチド

ディフェンシン、プロタミン分解物などの活性ペプチド

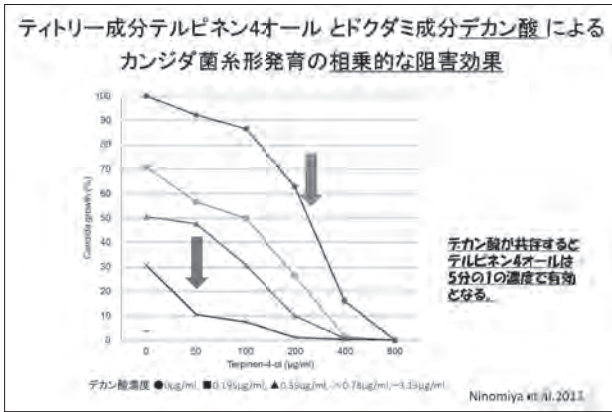


【図15】

以前から、ヒトでは経験的にティートリーがいいと言われていました。ティートリーの学名は *Melaleuca alternifolia* といいます。【図13】“*alternifolia*”は「交互に葉が出る」という意味です。“*alter*”は「別の」ということで、“*folia*”が葉っぱですから、ここを見てください。ポツ、ポツと葉が交互に出ているのが特徴の灌木です。ティートリーの香りです。アロマをやっている方はご存じかと思いますが、ティートリーは抗菌アロマではよく使われます。実際に3%~5%のティートリー油をスプレーでシュッとやりますと、口の中はかなり快適になります。例えばお年寄りで、特に寝たきりの人にはほとんどカンジダが大量にいますので、口が白いようなときには効果的だと言われていました。【図13】からマウスのモデルで、きちんと効いてくることが分かります。ただし、においをかいてももらうと分かりますが、化学薬品臭くてよい香りとは言えません。これが好きだという人は、アロマの妄信というか、よほど抗菌アロマが好きなんです。私は少し好きなのですが、普通の生活をしている人は嫌だと言います。特に体が弱っている人は、こういうものが嫌いなので、もっと使いやすく役に立つものをつくろうということになりました。2011年ごろの話です。

カンジダが、粘膜に侵入して病原性を発揮するのは、菌糸形発育によることが分かっています。その菌糸形発育を抑制する制御機構がカンジダの中にあります。【図14】一つはアデニルサイクラゼというシステム、もう一つはユビキチンを付加する系です。こういうものを制御することによって、アロマ成分は菌糸形発育から酵母形発育に変換することが分かっています。重要なのは、これらの制御物質の効果は、殺菌的濃度の100分の1ほどの低濃度でいいことです。すなわち100分の1ぐらいの濃度でも効いてくるという特徴があります。これをうまく使ってできるのではないかということです。また、実際のアロマの効果は、自然の中で選択されてきたものなので、漢方薬が皆そうであるのと同じように、単独の効果で効くというよりは、複合的に効いてきます。

そんな中で私たちが見つけた最大のことについてお話しします。【図15】道端に生えているドクダミ成分についての



【図16】

研究です。ドクダミは昔から日本でも皮膚疾患に使われてきました。乾燥ドクダミにしますと、あまりアロマとしてはいい香りはしないデカン酸ができて、特徴的な抗菌活性を持つことが分かりました。

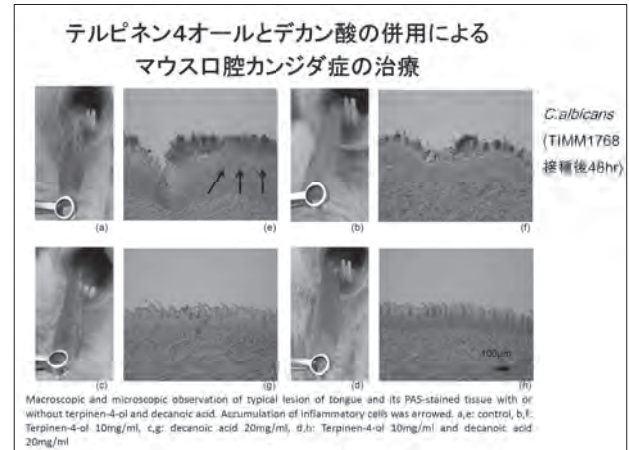
ドクダミ成分デカン酸と、ティートリー成分であるテルピネン4オールの併用効果を調べました。【図16】横軸はテルピネン4オールの濃度で、縦軸はカンジダの発育をどのくらい抑制するかを表しています。矢印で示したところが50%に抑制する濃度ですが、ティートリー成分だけだと250μg/ml 必要だったものが、デカン酸を入れると何と50μg/ml で、5分の1ぐらいの濃度でいいことを見つけたわけです。これを相乗的な効果といいます。組み合わせることによって強い抗菌効果が出てくるということです。

マウスの感染モデルシステムで効果を調べました。【図17】何もしないとき、この赤いものがカンジダ叢ですが、それに対して、この2つを合わせると、ほとんど菌がみられません。このように組み合わせると効果的なことが分かったわけです。

こういうところから、何かいい食品ができるはずだと、2012年からUHA味覚糖と一緒に、皆が使えるキャンディーの開発を始めました。【図18】今から1人1個ずつお配りしますので、なめてみてください。先ほどのティートリーぐらいの効果があります。シナモンについては(株)SBの方からの支援がありました。ハーブ・スパイス類を組み合わせると、吸収された分は効くのですが、早く活性がなくなるのに対して、ポリフェノール類を入れると、よりよく効くことを発見しました。これがデカン酸の構造です。

これは今日来ていらっしゃる羽山先生たちと一緒に開発したもので、有効成分をうまく組み合わせました。【図19】これだけの組成表を作るには1年では済まなかったのですが、形にすることができました。

アロマキャンディーをつくりまして、臨床試験もしました。これはA群とB群、プラセボ群(偽薬)とキャンディー群で試験した結果です。【図20】



【図17】

口腔カンジダ症の予防治療できるアロマキャンディーの開発

ハーブ・スパイス類
シナモン (シナミックアルデヒド)
シトラール、メントール

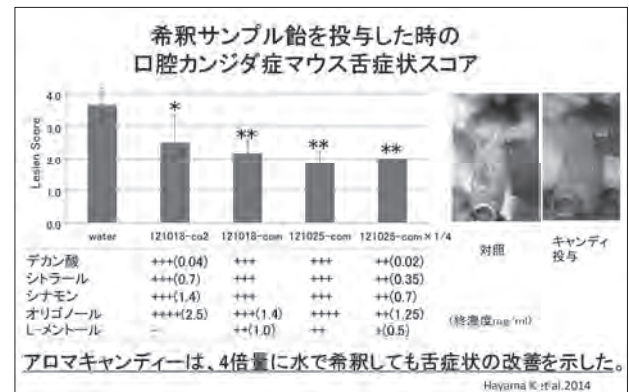
植物成分
ドクダミ成分中鎖脂肪酸のデカン酸、
オリゴノール (低分子化ポリフェノール)

これらの成分は*C. albicans*だけでなく、病原細菌に対しても活性を示しうる。また、抗炎症活性も示しうる。

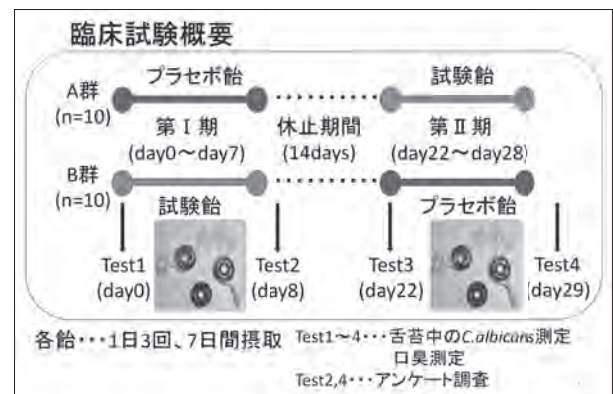
2013年よりUHA味覚糖社との共同研究

Designer of *Candida, Optalactin*

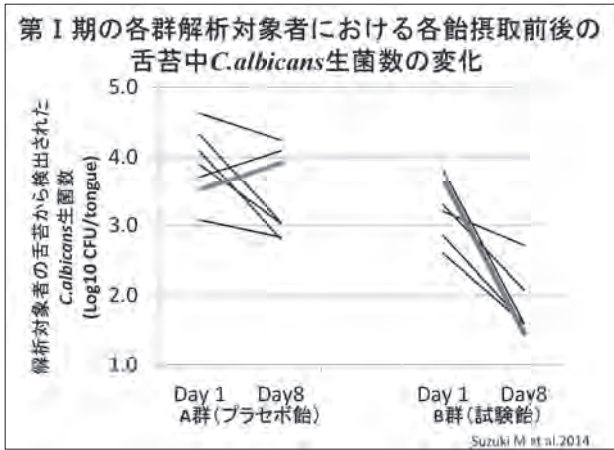
【図18】



【図19】



【図20】

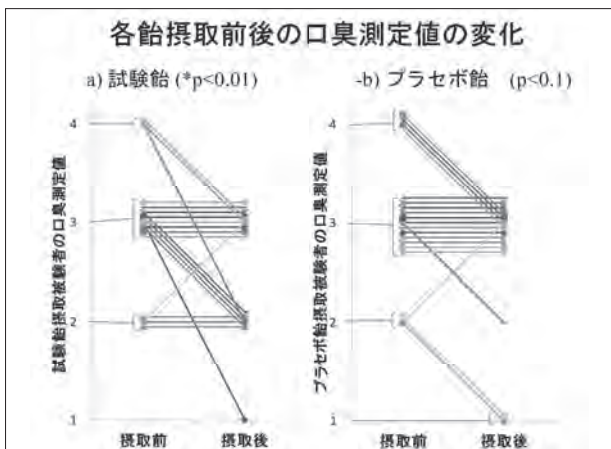


【図21】

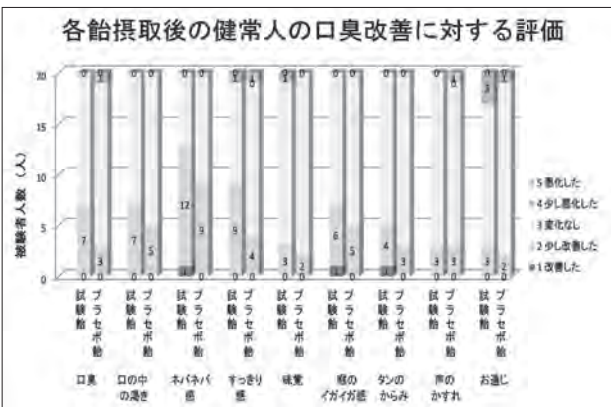
実際に口の中の *albicans* 数は減ったということですから。【図21】今キャンディーを配ってくださった鈴木先生たちの研究です。

口臭も変化します。【図22】結構人気があり、なめた後、非常に爽やかで、若い人はデートの前にいいと言っているようです。有意差があったのが、例えばネバネバ感と口臭がよくなったということです。【図23】

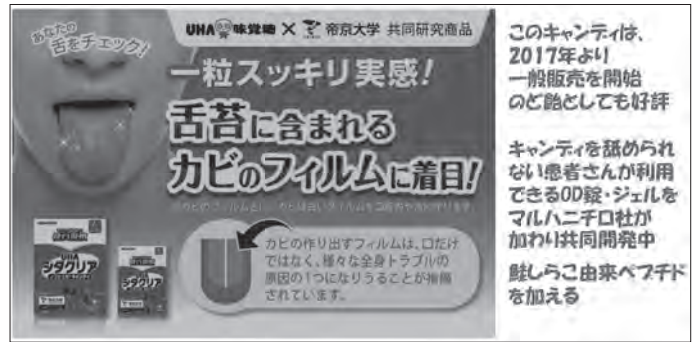
本来、ベッドの中において自分で口腔ケアができずカンジダで口の中が真っ白になるような人になめてもらいたかったのですけれども、とにかく飴がいいということでやりました。今はジェル、タブレットなども開発しています。【図24】



【図22】



【図23】



【図24】

高齢者になりますと、口のケアがなかなかできないのですが、ハーブウォーターやアロマキャンディでこのように効いてくるという一例です。【図25】

うがい薬も効くのですが、抗菌薬が入っていると粘膜の細胞が傷害を受けてしまいます。それに対して、このキャンディーは傷害が少ないところが特徴的です。【図26】

もし、キャンディーがなめられない場合、冷やした飴を1個、金づちでパチッと粉碎して、おちょこに入れ、水を注ぎ、箸の後ろでポンポンとやりますと、すぐに溶けます。【図27】これで十分に効果があるはずで。動物モデルで、このように溶かしても、有効性を示しています。

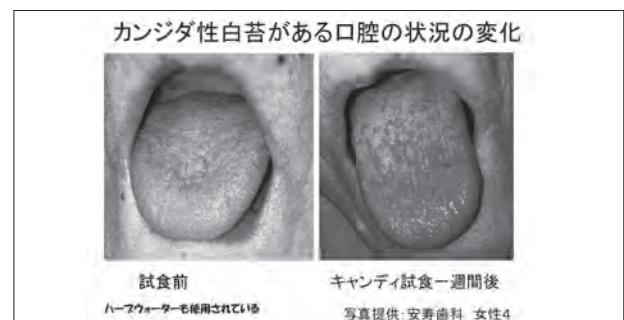
足の健康で問題になる白癬

次に、足の健康で問題になる白癬についてお話しします。グラフの横軸は年齢です。【図28】

女性よりも男性のほうが若干多いですが、このような形で爪白癬と足白癬を合わせると、高齢者では50%近くの方が白癬菌に感染しています。しかし、ほとんどの方に、自分が白癬患者であるという自覚がありません。

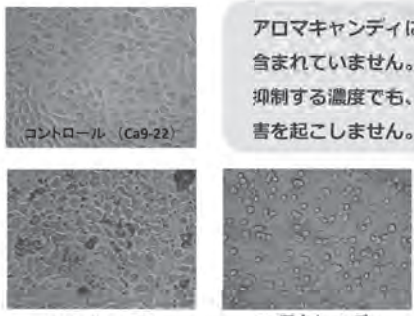
この写真は典型的な足白癬です。【図29】

糖尿病などでひどくなった場合ですけれども、この角質層が厚く、薬を塗っても中まで浸透しません。一般の塗り薬に対して、精油成分は分子量が200ぐらいと小さく、皮膚や爪の角質などに入りやすいのです。ユーカリがあります。これは2000年ころの過去のデータですけれども、ユーカリも効きますし、ティートリー、さらには今ある薬と一緒に組み合わせてもよく効きます。【図30】



【図25】

アロマキャンディは口腔粘膜由来細胞を傷害しにくい



アロマキャンディには、殺菌剤は含まれていません。カンジダ菌を抑制する濃度でも、粘膜細胞の傷害を起こしません。

塩化セチルピリジウム (CPC)

CPCは、薬用キャンディや、うがい液に配合されている殺菌剤です。CPCは、ヒトの粘膜細胞にも傷害活性を持つ欠点があります。

コントロール (Ca9-22)

アロマキャンディ 40倍希釈液

CPC配合キャンディ 40倍希釈液 (CPCは9.5µg/ml程度)

【図26】

キャンディを舐められない方には溶かしてシロップ

味覚型シタクリア キャンディ1粒 (2.7g)
ラップでぐるぐる巻きにして、上からカナヅチで叩いて砕く。(暖かい時には、冷蔵庫で冷やしておくと割れやすい)

砕いたキャンディを厚手のおちよこのような容器に入れ、大匙1杯の水を入れる。蓋の上部の平らな部分で、細粒をつぶしながら混ぜると、速やかに溶ける。

溶けたキャンディ液のほの甘くシロップのようです。少しずつ舐めて楽しめます。最初はミント系アロマの刺激がある。おちよこの底には、シナモン粉が残るので振りながら口に入れる。これをもっと滑めて舐めてもよい。舐めた後、しばらく舌の表面に残っている感じがすることあらかじめ知っていると案かない。

キャンディを溶かした液 固にあるのは1円玉

ジェルを開発中

【図27】

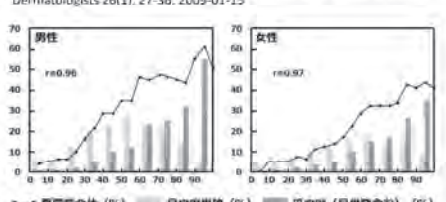
写真をお見せしましょう。パルマローザというイネ科の植物です。【図31】イネ科の植物の香りはなかなかよくて、水虫によく効くということで研究しています。井上先生が発見した方法ですが、42℃の温熱を20分かけると非常に効きやすく、精油の濃度を10分の1以下にできます。パルマローザの香りは、ゲラニオールだけではなく、スキットとして、なかなかいい感じです。精油としては値段が安く、足浴をするときにその点は重要です。

これは実験風景です。【図32】薬液の入った袋に足を入れて、42℃で15分ほど足浴をしました。このようにしますと菌が殺菌されます。足浴による菌の陰性化です。普通は塗り薬ではなかなか効かないのですが、このように効くという研究報告を出しています。

高齢者に白癬菌感染が多い

○我が国の患者数: 1,000万人~2,000万人?
・高齢者、女性で増加中...

足白癬・爪白癬の実態と潜在罹患率の大規模疫学調査 (Foot Check 2007)
日本臨床皮膚科医会雑誌 = Journal of the Japan Organization of Clinical Dermatologists 26(1), 27-36, 2009-01-15



問題点
9割ぐらいの患者が、治療のための努力をしていない。また、治療しても再発が多い。

■ 真菌性全体 (%) ■ 足白癬 (足併発含む) (%) ■ 爪白癬 (%)

【図28】

高齢者に多い角質増殖型の足白癬



厚い角質層に侵入した白癬菌まで薬剤が浸透しにくい。抗真菌薬が効きにくい。

多くの精油成分は白癬菌を殺菌する活性がある。
また、精油成分は分子量が小さいために、角質層に浸透しやすい。
分子量が100小さいと、10倍入りやすい。

【図29】


アロマ精油による白癬治療

- 足白癬患者50人にユーカリ(*Eucalyptus paniciflora*)の1%軟膏を2週間塗布して有効率100%(治癒80%、改善40%)、2ヶ月後も再発なし (Shahi et al. 2000)
- 158人の足白癬患者を3群にわけて25%、50%ティートリー(*Melaleuca alternifolia*)、プラセボの3群について1日2回、4週間塗布して菌陰性化率64%(50%ティートリー) (Satchell et al. 2002)
- 40人の爪白癬患者に5%ティートリー+2%ブテナフィンを16週間塗布して治癒率80%、再発なし (Syed et al. 1999)
- 爪白癬に対するアロマ軟膏の試み (香川ら 2004)



【図30】


足白癬に対するパルマローザを含む温湯足浴療法



- 足浴療法を選んだ理由**
外用する場合には、通常の塗布は作業として大きな負担がかかる。足浴は患者の負担が少ない。
- 温湯を選んだ理由**
42℃20分の温湯と併用すると精油濃度が低い条件で白癬菌を殺菌できる。
- パルマローザ精油を用いた理由**
パルマローザは、主成分はゲラニオールであり、殺菌力が強く、しかも抗炎症効果も高い。安全性、経済性から適切で、その香りも好まれる。

【図31】

パルマローザ油とテルピナフィンの湯浴による足白癬の治療研究



薬剤の節約と汚染防止のためにポリプロピレン袋中の薬液(200ml)に足を浸漬

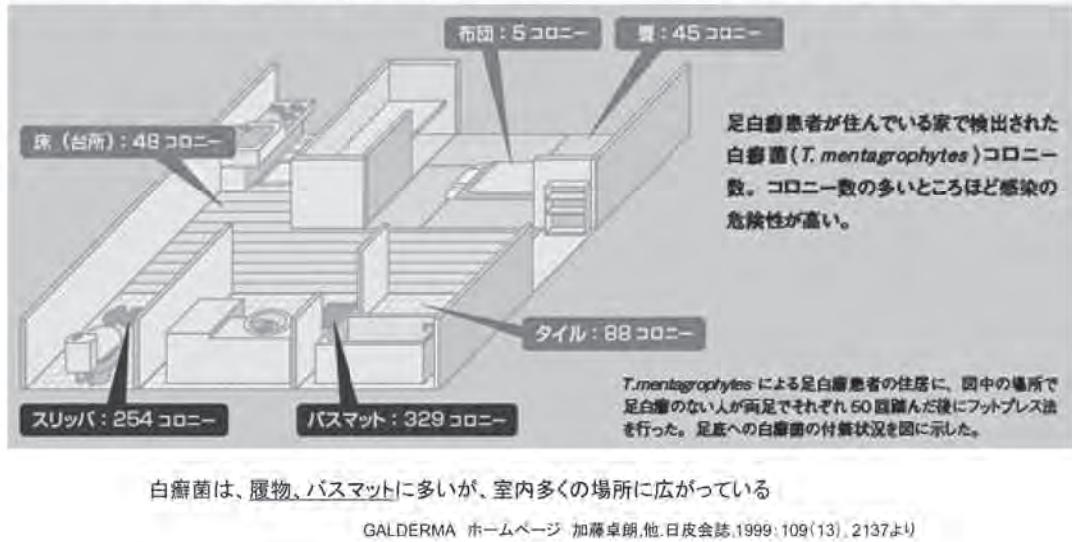
薬液: 10mlのエタノールに精油0.9g(40滴)を加え溶解し、それを200mlの水が入った袋に加える。(0.4%) 皮膚医の指導のもと、アロマセラピストが実施した。

足浴終了後、足底を大型寒天プレートにプレスした。寒天培地を27℃、2週間培養してコロニーを調べた。

Hattori N, Inoue S et al. 2009

【図32】

白癬菌の汚染部位からの感染防止をめざす



【図35】

2週間後にはきれいになりました。【図33】また、足のピーリング効果といって、角層がきれいになっていきます。強調したい点として、足浴の満足度が、試験のときに「よい」と「非常によい」と答えた人が70%ぐらいに達しました。足浴についてはこれからも研究していきたいと思っています。単に足だけではなく、夜よく眠れるという効果もありますので、この点でも面白いと思います。

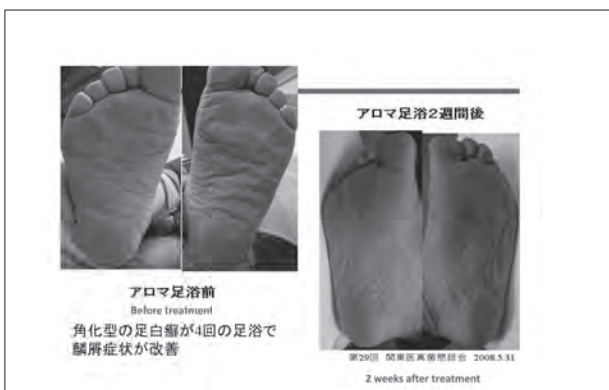
自分の爪を見て、このような形で白くなっていると爪白癬の疑いがあります。【図34】爪白癬のときはアロマ軟膏を塗ると、爪が生え替わるのと同じよくなっていくというデータを出しています。実際に抗真菌薬との併用効果もあると考えられます。特にお勧めしたいのですが、1日2回、このようにつけてこすっていくと、爪母という爪をつくところの血流がよくなって、爪の生え替わりがよくなるようです。データはありません。

もう一つ、アロマの使い方としては、直接皮膚に塗るのではなく、水虫を考えていったときに、部屋や靴の中の白癬菌を殺す使い方です。【図35】

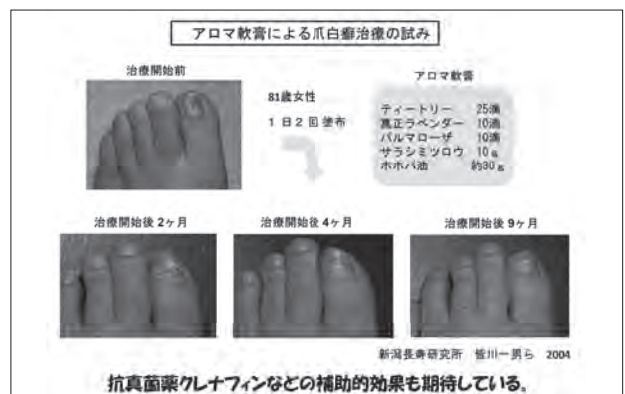
お風呂場のバスマットには329コロニーと書いていますけれども、これだけではなくて、スリッパの中や、このようなところにまん延しています。これを何とかできないかというところで研究をしていきました。

これは医真菌研究センターの石島早苗先生が中心になってやっている研究です。【図36】水虫患者の靴は少し汚いですが、接着テープでペタッとやって、菌、汚れを回収して培養しますと、白癬菌（水虫菌）が見えてきます。ビジネスシューズや、皆さんが履いているブーツでも、見えないだけで、水虫菌がいるということです。

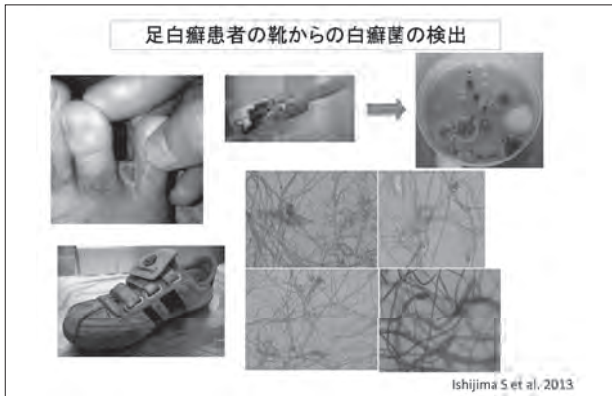
一番問題なのがこれです。【図37】アカなどに付着した白癬菌は200日放置しても生きていうことです。ですから、前年度水虫だったときの靴を履いていますと、翌年もその中には水虫菌が活着しているということです。それだけは意識してください。最高では数年間生きていう記録があります。水虫を治したと思っても、まだ菌は靴の中で活着しているということです。これも石島先生の研究ですが、私たちが靴の中をきれいにするにはどうしたらいいかを考えまし



【図33】



【図34】



【図36】

た。【図38】レモングラスという、トムヤンクンなどを作る食材料のハーブですが、その精油をこのように上に入れて一晩置いておくと、靴の中の滅菌ができます。白癬菌がなくなるだけではなく、殺菌ですから、靴の臭いも減っていくことを発見しました。実際に皆さんが普通にやるのであれば、ティッシュにレモングラス液を1滴。1滴は50μlで、1/20mlですが、それを垂らして蓋をして一晩置いておくと、菌がへります。もっと優れた方法を、インソールメーカーの(株)村井と開発し、商品化しています。

ビジネスシューズで実験しますと、菌量がこのように減っていくというデータがあります。【図39】

まとめ

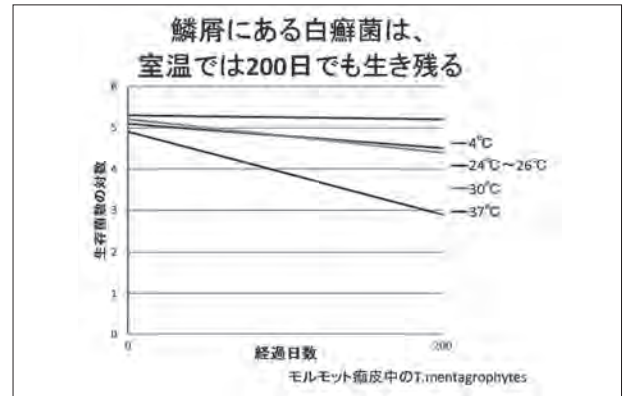
足の健康で問題になる白癬は、特に高齢者に多い足白癬の患者数は今、日本だけで2,000万人に達します。また、カンジダによる健康トラブルは非常に多くの方がかかえる問題です。そのような健康トラブルに対する抗菌アロマセラピーを研究していきたいと考えています。

皆さん、タイガーバームをご存じだと思います。あるいはネギを首に巻く。あれは、ユーカリ、Eucalyptusという成分で、既に100年以上にもわたってシンガポールなどで使われています。こちらはヴェイクス ヴェボラップです。これもユーカリの成分のものです。これらは抗菌アロマと言わないだけで、実際には抗菌アロマセラピーです。成分はカンフル、ハッカ油、ユーカリ油、メントール、チョウジ油で、皆、揮発成分、アロマ成分で、実際に非常によく効きます。こういうものから先に入られてもよいので、ぜひ皆さんにアロマの効果を体験・実感してほしいと思います。

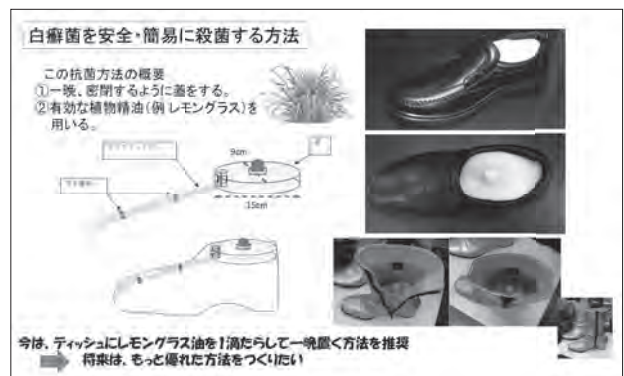
ホシムクドリという西洋のムクドリの仲間は、親が巣にハーブの枝を持ってきて、その枝で巣を作ります。【図40】そうすると健康な子どもができることが証明されています。

最初にお話ししました「抗菌アロマセラピー研究会」のホームページには、もう少しいろいろなことが書いてありますので、ぜひ抗菌アロマセラピーを経験していただけるきっかけになればと思います。

ご清聴ありがとうございました。



【図37】



【図38】



【図39】



【図40】

最新研究講座 カビと闘う研究者たち！

第3回 遺伝子工学と水虫

帝京大学医真菌研究センター准教授 山田 剛

<<実施日 2018年9月22日（土）於 帝京大学総合博物館展示室>>

水虫は、皮膚糸状菌、これは真菌の一種、カビです。水虫は皮膚の表面の角質という一番表層の部分に感染しています。その感染によって起こる感染症です。【図1】

今日は水虫という言葉を使いますが、ヒトで起こる水虫の原因になっている菌は、大体7割以上が *Trichophyton rubrum*（トリコフィトン・ルブルム）という名前の菌で、ほとんどはこれです。その次に、*Trichophyton mentagrophytes*（トリコフィトン・メンタグロフィテス）というのが、大体1～2割ぐらいです。ほぼ9割以上、この2つの菌が水虫を引き起こしています。ちょっと難しい名前ですが。

7割以上ということから分かると思うのですが、*Trichophyton rubrum* は非常にヒトが好きな水虫で、水虫の中にも、ヒトが好きな水虫もいれば、動物が好きな水虫もいれば、土が好きな水虫もいます。われわれ人間にとって一番大敵なのは、この *Trichophyton rubrum* で、ほとんどは、*T.rubrum* が水虫を引き起こしています。

これは2番目に多い *Trichophyton mentagrophytes* という水虫の写真です。【図2】

ペトリ皿を用いて培地で培養しますと、このような白い菌糸がひろがっていきます。白いですね。菌の表面には胞子が付いていて、それが振動などで揺れたりすると胞子が舞います。皆さんの例えば足や体に付いているものも振動などで落ちてしまい、家庭内汚染が起こることになります。

これは顕微鏡写真ですが、このような感じで菌糸が見えていて、粒々したものが、目には見えませんが、胞子です。

これは電子顕微鏡を使って水虫の細胞の中を写したものですけれども、こういう感じで、いろいろな構造物が見えます。

そこで、ここが一番、皆さん、多分興味があるかもしれないですけれども、患者数が今最も多い白癬、これは日本の話ですけれども、間違えなく足白癬、足の水虫です。【図3】

日本では大体5人に1人が足の水虫をもっているといわれ

ています。さらに、足から爪へと水虫は広がっていくのですが、大体10人に1人は爪の水虫だと推定されています。ただ、患者さんはほとんど気付いていない、もしくは気付いていても治療をあまり十分に行わないので、今のところ全く減る傾向がないのです。

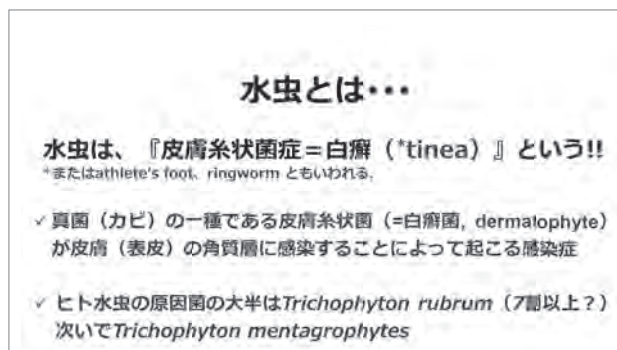
特に、高齢者施設や共同作業施設、例えば銭湯やプールなどで、水虫は問題になります。対策が必要になっているのですが、あまり人の生き死に関係ないため、軽視されているというのが実際のところなのです。

ただ、2週間ぐらい前に、私は糖尿病患者の人工透析室における水虫の調査の依頼を受けて下見に行ったのですが、糖尿病患者の方は非常に水虫の患者が多いようです。上記のように、水虫は軽視されているわけですが、糖尿病の患者さんは体の抵抗力がすごく落ちるので、感染症を引き起こすことにつながり、ひどい状況になりかねません。そこに水虫が関係しているのではないかと、私は思っています。

5人に1人は水虫だといわれている足白癬、大きく分けるとタイプが3つ。こういう方は多分、たくさんいらっしゃると思うのですが、まず指の間、これを趾間型といいます。粒々の水泡ができる小水疱型もあります。もしくはカサカサ、角質増殖型と時々いわれますけれども、これは区別がなかなか難しいところがありますが、こういうタイプの足の水虫もあります。それから、必ず足に水虫がいると最終的に爪に水虫は広がっていくので、大体足の水虫と爪の水虫の両方を持っている人は、結構な割合にいると思います。

一応、日本では2,000万人、水虫の人がいるといわれています。非常に湿度が日本は高いので、とにかく患者が多いといわれています。

基本的には、水虫が足にくっついて、すぐ洗えば感染はしないのですが、やはり年齢とともに抵抗力が落ちてくるの



【図1】



【図2】

現在、患者数が最も多い白癬は足白癬!!

わが国では、足白癬は約5人に1人、爪白癬は10人に1人存在するとも推定されており、その多くは患者自身が気づいていないか、あるいは気づいていても不十分な治療しか受けていないと考えられている。

✓白癬は高齢者施設および共同作業施設で多く、対策が必要とされているが、生死に関わることがほぼないので軽視されている。

【図3】

で、感染はしやすくなっていきます。先ほどもお話がありましたけれども、そういう感じです。

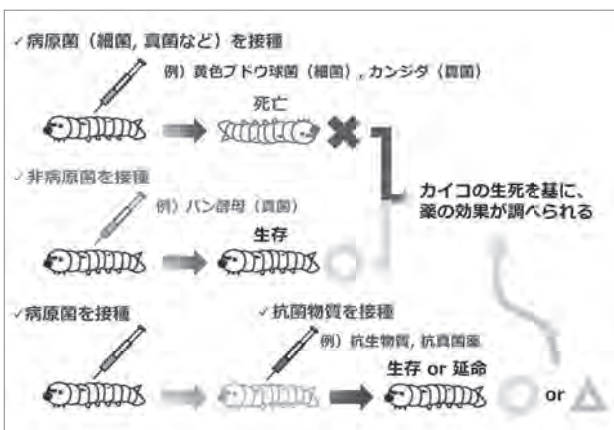
この水虫、実際、治療薬というのはいくつかありますが、実は爪の水虫は、なかなか治りません。足の水虫はきちんと薬を塗り続ければ治る方向にいくのですが、爪はなかなか難しいのが現状で、爪の水虫にならないためにも、足の水虫に気を付けるということが言えるのではないかと思います。

ここまでずっと一般家庭の水虫の状況をお見せしてきたのですが、「遺伝子工学と水虫」というタイトルにもあるように、われわれは、やはり水虫の新しい薬を作るのが目標です。

ここから、遺伝子工学、遺伝子組換え技術と置き換えますが、新しい水虫薬の開発を目指して、今取り組んでいることを紹介したいと思います。取り組んでいることとして、カイコ、あのお蚕さま、このカイコと、後で出てきますけれども、遺伝子組換え技術を用いて作った水虫を活用して、新しい水虫薬の開発につなげていけないかということで、研究をしています。

ではまず、どうして水虫に全く関係ないカイコを使う必要があるかと。創薬、薬を作ることにおける実験動物の必要性ということがあります。薬を作る場合、これはやむを得ないのですが、安全性等、それから治療効果を確認するために、必ず動物実験を行う必要が出てきます。

通常、動物実験ですとネズミを使うことが多いと思います。もしかすると、そういうイメージを持たれている方もいらっしゃると思います。では、これをネズミではなくカイコに換えるのはどうしてなのかというと、やはりネズミというのは、ここが一番大事なのですけれども、動物倫理の問題が



【図4】

カイコに水虫を接種すると…



【図5】

非常に大きい。それから、ネズミを飼うための費用もすごくかかります。それから、その他、動物実験の手技もちょっと煩雑な印象を受けます。

それに比べると、このカイコは倫理的な問題が非常に少ない。それから飼育コストが非常に安い。それから実験自体も容易に行えるということで、ネズミではなくカイコを実験動物に見立てて、カイコを使って薬の効果を見られるのではないかと。ということで、水虫の薬を探すために、カイコをネズミの代わりに用いて、薬の評価系を作ることをわれわれは行ってきました。

実験動物を使って薬の評価をするときは、実際に病原菌をネズミに感染させて、感染モデルというものを作ります。その感染モデルですが、次の講演会でお話があるかもしれないですけれども、カイコをネズミに見立てて作られた病原菌の感染モデルが実際にいくつかあります。

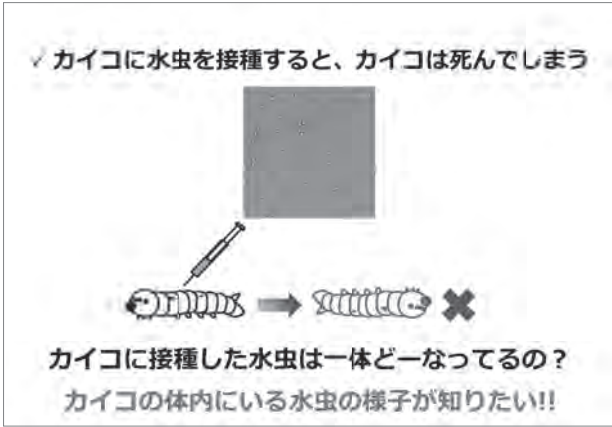
では、カイコ感染モデルとは具体的にどういうものかを説明します。【図4】

例えば病原菌、黄色ブドウ球菌やカンジダ菌、これは真菌ですけれども、カイコにこれらの病原菌を注射します。そうすると、当然カイコは死んでしまう。ところが、逆にパンを作るときに使う酵母菌、これは一応、無害といわれているのですが、このような病原菌でないものをカイコに注射すると、カイコはずっと生きています。

では、実際に病原菌をカイコに注射した後、病気を治すための抗生物質、例えば抗生物質、カビを殺すための抗真菌薬、こういうものを注射するとどうなるかといいますと、延命効果が見られたり、もしくはカイコが死なずに生存し続けたりすることが分かっています。したがって、このような「カイコの生き死に」を基準にカイコをネズミに見立てた薬の評価系を作ることができるのです。

では実際に、カイコに水虫を接種したらどうなるのかということで、培地の表面にたくさん生えている水虫の表面に粒々の胞子がたくさんあるのですが、この胞子をカイコに注射します。【図5左】

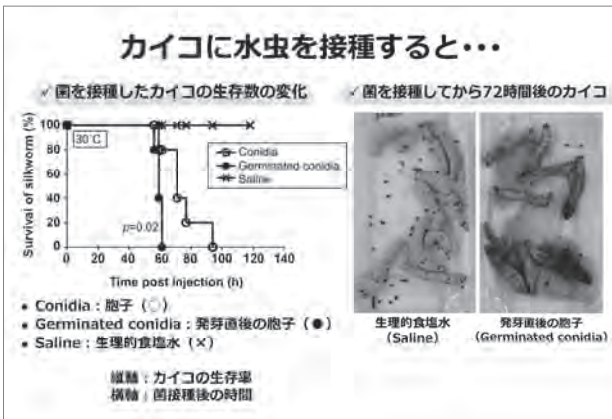
比較対象として、われわれの体の塩分濃度と同じ生理的食塩水をカイコに注射すると、72時間後も普通にカイコは生きています。ところが、水虫の胞子を少し発芽させた状態で注射しますと、72時間後の時点でカイコは全滅してしまっ



【図6】



【図9】



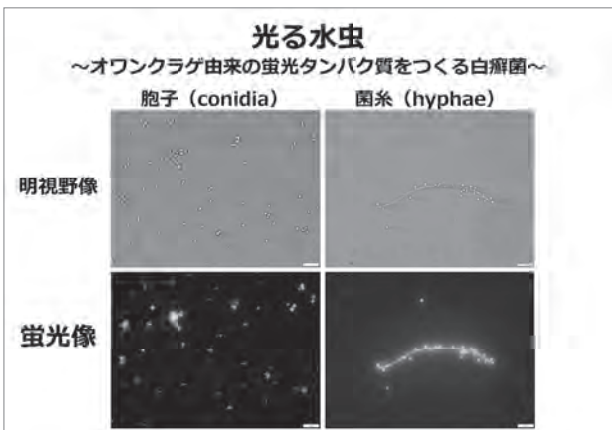
【図7】

ています。【図6、図7右】

具体的にこちらにグラフを用意しました。【図7左】

×が生理的食塩水、カイクは注射した後もずっと生きています。ところが発芽させた直後の胞子や未発芽の胞子を注射した場合、注射してから100時間以内にカイクは全て死んでしまうことが分かりました。ということから、カイクに水虫を接種する、注射するとカイクは死んでしまいます。

では、水虫はカイクの中で一体どうなっているのだろうかということで、カイクの体内にいる水虫の様子を知りたいと思いますよね。【図7右】先ほどフロアから、実際に皮膚を採って水虫がいるかどうか顕微鏡で確かめたけれども、はっきり分からなかったというご意見がありました。確かに非常に見



【図8】

づらいので、このカイクの体内にいる水虫がどうなっているのか、それを視覚的に見ることができるようになります。

そのために、これは全然関係ないのですが、オワンクラゲを利用することにしました。ここで初めて遺伝子組換え技術というものが関わってくるのですが、オワンクラゲは緑色蛍光タンパク質というものを作ります。この蛍光タンパク質を単離した下村脩先生は2008年にノーベル化学賞をもらっています。この遺伝子組換え技術を用いると、オワンクラゲが作っている緑色蛍光タンパク質を水虫の中で作らせることができます。【図8】

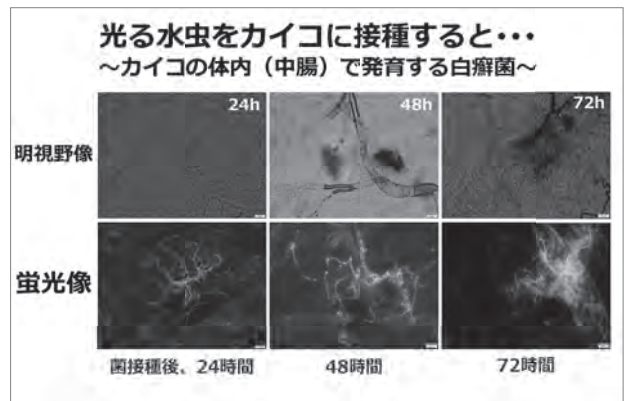
こちらは胞子、そしてこれは先ほどの菌糸です。【図8】弱い紫外線を当ててやると、胞子も蛍光の緑色を発し、菌糸も緑色になります。このような光る水虫を使って、カイクの体内でどのようなことが起こっているか調べました。

この光る水虫をカイクに注射します。【図9】

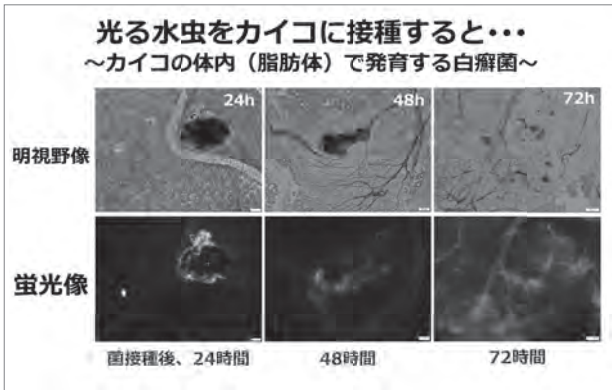
するとどうなるかというと、注射後24時間、48時間、72時間と、腸の中でどんどん水虫が成長を続けていく様子を観察できます。そして、最終的に72時間のところでカイクは死んでしまいます。【図10】

このように、遺伝子組換え技術を用いることで、見づらかった菌糸の発育状態をはっきり確認することができるようになります。

こちらは同じく、カイクの体内の皮膚に近い脂肪体というものがあるのですが、こちらでも光る水虫は、注射した後どんどん発育を続けていって、72時間になると非常に広範囲にわたって菌糸が広がっていき、最後にはカイクは死んでし



【図10】



【図11】

まいります。【図11】

このようにして、水虫が実際にカイコの中でどのように発育するのか見ることができるようになりました。

では、実際に水虫を接種したカイコに、今使われている水虫薬を投与するとどうなるのか試してみました。水虫薬として使用したのは、ドラッグストアで水虫薬をもし手に取ることがあったら見ていただきたいのですが、テルビナフィンという世界で最も有名な水虫薬で、日本で売られている市販の水虫薬にも含まれているものです。【図12】それからイトラコナゾールという、ちょっと言いづらい名前ですけれども。この2種類の水虫薬を、水虫をカイコに注射した後、さらに注射すると、延命するか？ もしくは死亡するか？

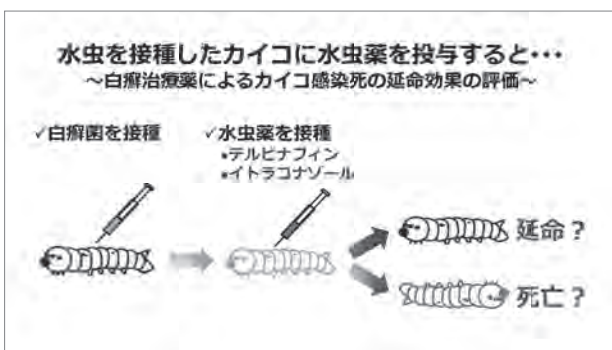
結果を【図13】に示します。

水虫の孢子を注射したカイコの腸と体液中に水虫薬を注射しました。×は生理的食塩水を注射した場合で、注射後ずっとカイコは生きています。この○印、ここは先ほど水虫を注射した後、生理的食塩水を注射した場合で、こちらは大体80時間以内に全てのカイコが死んでしまうことが分かりました。ところが、イトラコナゾールやテルビナフィンという水虫薬をカイコに注射してやると、延命効果が見られました。非常に明確なのですけれども、120時間ぐらいまで生きることが分かりました。つまりカイコをベースに、もしかすると水虫薬として使うことができるような化合物の水虫に対する効果を見ることができないのではないかということが、この実験で明らかになりました。

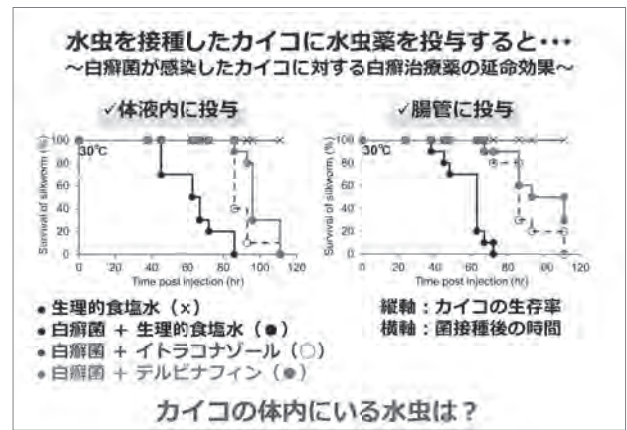
では実際、カイコの中にある水虫はどうなっているか。

【図14】

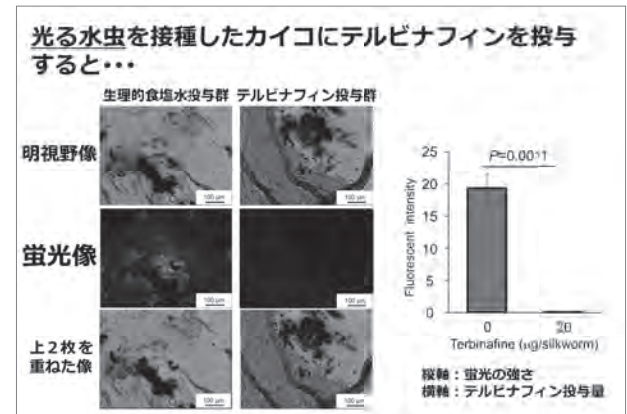
先ほどの光る水虫を注射したカイコに、最も有名な水虫薬、



【図12】



【図13】



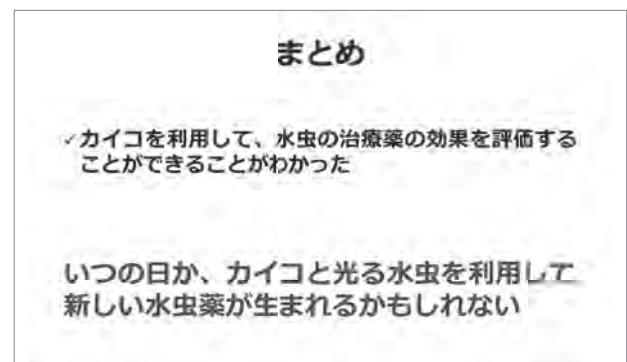
【図14】

テルビナフィンを接種しました。そうすると、こちらは生理的食塩水群、こちらがテルビナフィンを実際に投与した群ですけれども、生理的食塩水群は蛍光が見えると思いますが、菌糸がわっと広がっているのが分かります。ところが、水虫薬を投与してやると、蛍光が全く見えない、つまり菌糸が全然育たなくなりました。したがって、このテルビナフィンが実際にカイコの中の水虫に作用して、水虫をやっつけているということが言えます。

最後のまとめになります。【図15】

カイコを利用して、水虫の治療薬の効果を評価することができるようになりました。いつの日か、カイコと光る水虫を利用して、新しい水虫薬が生まれるかもしれないということが言えると思います。

今日の講演はここまでです。どうもありがとうございました。



【図15】

最新研究講座 カビと闘う研究者たち！
第4回 カイコを利用して新しい薬や食品をつくる

帝京大学医真菌研究センター所長・帝京大学医療技術学部スポーツ医療学科教授
(現 帝京大学薬学部寄付講座カイコ創薬学講座特任教授) 関水 和久

<<実施日 2018年9月22日(土) 於 帝京大学総合博物館展示室>>

はじめに

カイコは長い養蚕業の歴史の中で絹を作るために品種や飼育方法が確立されてきた昆虫です。私はこのカイコを、ヒトの代替実験動物と見なして、新しい薬や食品を作る、という研究をしています。今回はその内容をご紹介します。

カイコの写真をお見せしましょう。【図1】 気持ちが悪いという方はしばらくの間、目を伏せてください。フランスの哲学者のパスカルは400年前に、「人は考える葦である。」と言いました。私は「ヒトは這い回るカイコである」と言いたいと思います。これを聞いた皆さんは、そんなことはない、カイコとヒトはかけ離れている、と思われるかもしれませんが。しかしながら、今一度、生物としてのヒトとカイコでは何が違うのかを考えてみてください。我々人間がカイコに向かって「君たちは虫けらで、我々よりは下等なのだ」と断言することはできるのでしょうか？ 今日私は皆さんに、「ヒトにあってカイコにないものが何か分かりますか？」と質問させていただきます。それは「人間性だ」とおっしゃる方がおられるかもしれませんが。随分自信のある方でいらっしゃいますね。よくよく考えてみると、ヒトにあってカイコにないものを挙げるのはそう簡単ではないことに気づかれると思います。

この絵はちょっとグロテスクなので、気持ちが悪いという方はスライドを見ずに、話を聞くだけで結構です。【図2】

これはカイコと人の体の中を漫画化して描いたものです。これまでに、このような図をご覧になった方はいらっしゃらないと思います。根本的に生物としてのカイコとヒトの体はよく共通しているのです。両者とも、口から食べ物を取り、消化管で分解して栄養分を吸収します。この経路は動物である以上、ヒトもカイコも同じです。カイコは桑の葉が自分の餌だということを、大脳の機能を使って判断しているのです。ですからカイコにも脳があるのです。カイコは、桑以外の植物は食べません。桑の葉を感知するのは感覚器官の働きです。また、カイコは動きますから、もちろん筋肉があります。また、神経系も、腎臓も肝臓もあります。ヒトと同じ機能を有する臓器がカイコにもあるのです。

ヒトにあってカイコにはないものが実際にはあります。カイコのような昆虫の血液は赤血球がないので赤くありません。昆虫を殺してハサミで切ると、透明な血液が出てきます。蚊に刺されたときに、蚊をつぶすと赤い血が出てきますが、あれはご自分の血です。本来、昆虫の血は無色透明です。そこには赤血球がないのですが、白血球はあります。白血球やマクロファージのような、免疫を担当する細胞があるのです。赤血球がないので、赤血球に感染するマラリアの研究をカイコでやることはできませんが、白血球の研究はできるのです。

それ以外に、ヒトの血液にあってカイコにないものとして抗体があります。皆さんには、「免疫」について、あらためて考えていただきたいと思います。よく知られた免疫現象に、はしかになった子どもは二度とはしかにかからない、というのがあります。はしかのウイルスが一度体内に入るとウ

ヒトは這い回るカイコである



【図1】

カイコとヒトの共通器官



【図2】

ウイルスに対する抗体ができて、次にウイルスが入ってきたときに、その抗体がウイルスに結合して、ウイルスを不活性化してしまうのです。抗体は免疫グロブリンと呼ばれるタンパク質です。

現代では、免疫の概念はもう少し広範に捉えられています。私たちを取り巻く環境には、ウイルスや細菌、真菌がたくさんいて、私たちを狙っています。それらは総称して病原体と呼ばれます。私は医真菌センターにおりますので、特に真菌について強調させていただきたいと思います。カビは真菌の代表格です。カビなどのいろいろな真菌が我々の周りにはたくさんいるわけです。ヒトは病原体からどのようにして自らの体を守っているのだろうか、という質問に答えるのが免疫学です。カイコも含めて昆虫は病原体がたくさんいる環境で暮らしてわけですから、感染防御というのは昆虫においても大切なはずで、先に述べたように、ヒトには抗体という武器がありますが、昆虫を含めた無脊椎動物には抗体がありません。抗体を作るための遺伝子がないのです。ところが昆虫は地球上で最も繁栄している生物だと考えられています。したがって、抗体を持たない昆虫は、別の機構で感染に対して対処しているのに違いありません。

どのようにして昆虫が病原体による感染から体を守っているのかについては、長い間、理解されていませんでした。今から10年ほど前にノーベル賞の対象になった研究により、その謎が解明されたのです。昆虫には、自然免疫という、体に侵入してきた病原体に対して、それまで感染した経験がなくても、これは外敵だと見なして排除するシステムがあることが分かってきました。これによって、昆虫も魚もヒトも、植物も、病原体による感染から身を守っています。これが自然免疫です。自然免疫のメカニズムは動物の間で大変よく共通していることが分かってきています。

ヒトにあってカイコにないものとして、骨があります。カイコという、くによくにやした動物には骨がないのです。ですから、骨粗しょう症のモデルをカイコで作ってみなさいと言われても、それはできないのです。

ヒトは皆、いろいろな病気で苦しみます。がん、糖尿病、肝臓病、あるいは感染症とか、いろいろな病気があります。そういうものは、原理的に必ずカイコでモデルを作ることができるはずで、というのは、その対象になるヒトの臓器がカイコにもあるわけですから。カイコでひとたび病気のモデルができれば、それを治療する、あるいは、病気にならないような医薬品、あるいは食品、を開発することが可能となります。皆さんは、何か健康にいいものを食べようと思いますが、そういう健康に良いという食品の評価も、カイコを使ってできるのではないかと、そう考えて私は研究をしています。

「カイコ創薬」とは

カイコをモデル動物として見立てて、これを使って創薬することを私は「カイコ創薬」として提唱しています。私は「カイコ創薬」を学会で提案しているのですが、おかげさまで、あまり評判は良くありません（一同笑）。今まで誰も「カイ



【図3】

コ創薬」を考えたことがなかったからです。カイコも糖尿病になるという発表を学会でしますと、「そんなことは、にわかには信じ難い」という、励ましの言葉を頂戴します（一同笑）。これについては後でお話したいと思います。

「カイコ創薬」は、これまでの創薬で問題となっている、コストと倫理的な問題を解決すると私は考えています。

【図3】 ヒトに効く薬を作る創薬においては、モデル動物による実験が必要です。人を使った実験は、薬の開発の最後の段階の臨床実験で行います。その前にモデル動物を使った実験をします。一般にはネズミやネコ、イヌ、などの哺乳動物を実験動物として使います。ただし、哺乳動物を使う実験には問題が2つあります。一つはコスト、もう一つが倫理的な問題です。コストというのは製薬会社にとって大変重要な問題です。皆さんがいらっしゃるこの部屋をネズミの実験室にしつらえるとすると、どれぐらいお金がかかると思いますか。軽く見積もって1億円はかかるのです。え？と思われる方がおられるかもしれません。どうしてそんなにお金がかかるのでしょうか。

動物実験の結果が認められるためには、一定の条件や環境が満足されなければならないのです。そうでなければ動物実験として正式に認められないのです。例えばSPFといわれる基準があります。そこで暮らしているネズミは、一流ホテル以上の環境下にあります。私どももそういう設備を持って大学で実験をしています。まず恒温恒湿であることは当たり前です。それから、いろいろなウイルスや細菌や真菌に動物が感染してはなりません。飼育室にはフィルターで滅菌した空気を送り込む必要があります。さらに滅菌した食餌が与えられます。そして昼と夜の区別が必要です。電灯が決まった時間に着くように設計する必要があります。このような条件で動物を飼育するためには、大変なお金がかかります。実際に1匹のマウスをそういう環境で1年間飼うと、最低でも1万円はかかります。そして、どのような小さな実験でも100匹以上のマウスを使いますから、ひとたび実験をやろうと思ったら100万円の出費を覚悟しなければなりません。大学のようなところでは、現実的に実施することは大変です。

このコストの問題を、カイコが解決してくれるのです。私が試算するところによると、およそ100分の1のコストで済

みます。市販のカイコの卵を入手することができます。これは養蚕業のおかげなのです。日本は100年前では、外貨の第一獲得産業はITでも自動車でも電化製品でもなく、何と養蚕業だったのです。ここ八王子では、皆さんもご存じだと思いますが、カイコが盛んに飼われていました。カイコを飼う方法に関して、日本は世界の中で突出した技術を持っています。残念ながら養蚕業は斜陽に続く斜陽で、カイコを飼っている農家は非常に少なくなっています。それでも、今も日本には養蚕業があります。養蚕業がある限り、私たち研究者は卵を入手することができるのです。研究目的でカイコに桑の葉を与えることは却ってお金がかかるのですが、今では人工餌が使えるので、恒温インキュベーターがあれば、一年中いつでもカイコを1,000匹単位で飼うことができます。それににかかるコストは、マウスなどの哺乳動物を飼育することに比べれば、桁違いに安いのです。

それからもう一つ忘れてならないのは倫理的な問題です。マウスなどの哺乳動物を使う実験に対しては、動物愛護団体からの非難が起きます。ネコやイヌを飼っている方からすれば、かわいい生き物を、製薬会社が1,000匹単位で実験に供していることに対して、非難が起きます。これは動物愛護の視点から起こる問題で、現在では医薬品の開発にブレーキをかけるほどになっています。以前は、ネズミのマークの付いた車が走り回っていて、帝京大学の動物舎にネズミを提供してくださる業者さんがいました。今そういう車は走り回っていません。理由は愛護団体からの襲撃を回避するためです。これは今、世界中で問題になっています。動物を運んでいる車を何も襲撃しなくてもいいではないかと思うのですけれども、実際にはそういう問題が起っています。動物舎の存在を大学としては秘密にしないと、動物愛護会の方が押し入ってきて、大変なことになるということが実際に起こったとのことでした。

この点、女性は大変カイコに残酷です。私は昆虫少年だったので、昆虫の幼虫を大事に、育てていました。カイコの命とマウスの命では違うと言われても、ちょっと納得できない点もあるのですが、6,000年間の養蚕業の歴史の中で、カイコから絹を採るのは残酷な産業だからやめなさいと女性から

言われたことはないのです。ちなみに繭を採るとき、結構残酷なことになるのをご存じですか。繭の中のサナギは外側からは見えないのですけれども、繭を釜の中に入れてゆで、それから絹糸を紡ぐのです。紡いでいる間は繭が回転して、最後に出てくるのはゆで上がったサナギです。それを箸でつまんで食べてしまうのです。これは昆虫少年にとってはちょっと問題だと思うのですが、カイコを使うことにより、動物愛護の視点からの倫理的問題の発生を回避することになるので、カイコは今後の医学・薬学の分野での実験動物として大変重要な位置を占めるようになると思います。

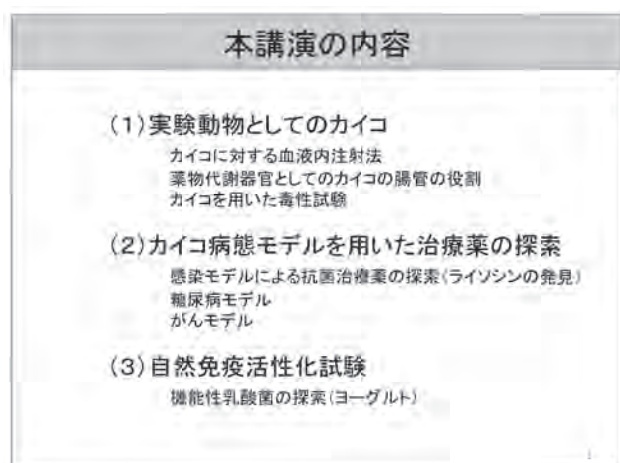
「カイコ創薬」というのをやっているのは、世界中で私たちの研究室だけです。他の研究者が「カイコ創薬」に注目しない理由はいくつか考えられます。最も大きな理由は、欧米の研究者はカイコを見たことがない、という点です。欧米には養蚕業がありませんので、欧米の研究者に私たちの論文を見せると、「こんな動物が世の中にいるのか」という返事が返ってきます。中国、タイあるいはインドでは現在もなお養蚕業が盛んです。しかしながらそれらの国では新規の医薬品の開発をしようとか、ましてや新しい健康食品を評価する、などという研究に注目が集まりません。その点、日本は「カイコ創薬」が発展する上で、特別な位置にあると私は考えています。日本では大学の多くの農学部で養蚕学教室があって、100年以上前からずっとカイコの研究しています。しかしながら、研究はただ一点、絹の生産に集中しています。どのようにしたらよい絹を作れるかということが問題となっています。絹の生産に貢献することを目的としない研究には、研究費が下りないという事情があります。私自身、研究費の獲得には大変苦労しています。我ながらなかなかいい研究だと思うのですが、にわかには信じられない、と言われて研究費の申請がはねられてしまうのです。

「カイコ創薬」にとって最も深刻な課題は、ヒトやマウスなどの哺乳動物と同じ結果がカイコで得られるのだろうかということです。私の話を聞いた最後に、カイコはなかなかいいのではないかと感じていただければ、私の話がうまくいったということになります。

今日の私の話の内容のまとめを【図4】に示しました。まず最初に私は、実験動物としてカイコをどのように使うかについて、お話ししたいと思います。それから、カイコの病態モデルを用いて治療薬を探索することについて説明します。実際に私たちは、ライソシンという新規の抗生物質を「カイコ創薬」によって発見しました。この抗生物質は、MRSAと呼ばれる、多剤耐性の黄色ブドウ球菌に効くのです。ライソシンはもう少しすればヒトの臨床試験が行われるにまで到達した、抗生物質です。今日は、それをどのようにして見つけたかということについて、お話ししたいと思います。

さらにカイコは糖尿病やがんになることも、お話しします。これらのヒトを苦しめる病気のモデルをカイコで構築し、それを治療する薬を見つけてヒトの臨床に応用する、それが「カイコ創薬」です。

それから最後に、自然免疫活性化試験についてお話ししま



【図4】

す。先ほど申したように、ヒトとカイコは共通の自然免疫システムを持っています。ヒトを含む哺乳動物や高等動物は、抗体を介した免疫システムを持っています。これは獲得免疫と呼ばれます。一度、はしかのウイルスが入ってきた経験をすると、それを認識して次の感染にかからなくなる、という意味で、この名前が付けられています。それに対して、獲得しなくても生まれながらにしてこれは外敵だと体が認識できるシステムのことを自然免疫といいます。この自然免疫のメカニズムはカイコとヒトで共通していることが近年の研究から明らかにされています。そうであれば、カイコの自然免疫を活性化させるものは、ヒトの自然免疫を活性化させるに違いありません。この考え方に基づいて私たちは、いろいろな食品を検索しました。その結果、乳酸菌に強いカイコの自然免疫を活性化するものがあることが分かってきました。カイコを使って、いろいろな乳酸菌のうち、どれがいいかということの評価すれば、その乳酸菌で作ったヨーグルトが売れるんじゃないか？これが私の目論見でした。それを実行するために私はゲノム創薬研究所というベンチャー会社を設立し、大学での研究成果を世に出すという試みをしています。ゲノム創薬研究所は、カイコを用いて自然免疫を活性化する乳酸菌で発酵させた食品を、機能的食品として事業化することを狙っています。そのことについても最後にお話ししたいと思います。

実験動物としてのカイコの有用性

最初に実験動物としてのカイコについて説明させていただきます。カイコというのは、恒温器を使えば、1年中飼育することができます。たくさんのカイコの世話をするのは大変ですが、昆虫少年にとっては大変楽しい仕事です。

カイコの卵を1万匹個買って育てると、1万匹の幼虫になるのです。これは昆虫少年だった私にとっては大変な驚きでした。1万匹のアゲハの卵を1万匹のアゲハにできたらということを考えるだけでも、昆虫少年にとっては夢のようです。実際にはいくら虫好きでも、そういうことはできないのです。まず1万匹のアゲハ蝶の卵を集めることは、昆虫少年がどんなに頑張ってもできません。さらに、飼っているうちに、病気などいろいろ問題が起こってどんどん死んでいくのです。皆さん、昆虫を飼われた経験のある方はお分かりだと思いますが、10匹の卵を10匹の成虫にするのは大変なことです。ところがカイコは、これは日本の養蚕業の技術のおかげですが、そのための技術が確立されていて、きちんと世話とエサをやりさえすれば、確実に1万匹の卵を1万匹の幼虫にすることができるのです。

昆虫少年だった私は、幼稚園の園児だった時から昆虫の幼虫を扱うことは慣れていたのですが、いざカイコを使って実験するという段階になって、様々な問題に突き当たりました。まず最初は、カイコにどうやって薬を与えるのか、という問題でした。一般にマウスに薬を投与する場合には、注射器で血液の中に薬の液を注射します。ところが、カイコの血液はどこにあって、どうしたらうまくカイコの血液の中に薬液が注射できるかが問題でした。その解決に何年もかかりました。



【図5】

なぜこのような一見初歩的なことについて問題解決が長引いたかといいますと、そういう研究をやっている人がほかにいなかったのです。つまり、カイコを使って薬を評価できるのではないかということにチャレンジした人がいなかったのです。私に問題解決法を教えてくれる人がいなかったのです。こういう場面が、研究者にとっては、自分で創意工夫ができる最高のチャンスです。

注射した薬の液がカイコのどこに行ったかを確かめるために、私は、赤インクを注射することを思いつきました。【図5】カイコを仰向けにすると、胸と思われる部分に板状の構造があります。そこに、グッと注射針を入れれば、カイコの体内に薬液が入るだろうと思ったのですが、これは間違いでした。実際にやってみると、ほとんどの赤インクが腸管の中に入ってしまった。カイコでは、腸の周りに血液があって、開放血管系という構造を取っており、血管があるわけではないのです。腸の周りに血液がある空間があって、その外側に皮膚があるという構造を持っています。ですから、腸と皮膚の間の層に注射針を差し込めれば血液内注射ができるはずなのですが、これが大変難しいのです。それで、いろいろ場所を変えて赤インクの注射を試してみました。

【図6】は、カイコの背中から注射針を入れているところです。注射針の先を皮膚にそって進め、皮下に差し込みます。



【図6】

カイク腸管の摘出



【図7】

血液内注射がうまくいくと、血液の中に赤いインクが広がっていくのが分かります。そうすると直ぐに、カイクの足の先が赤くなります。これで赤インクが血液の中に確かに入ったことが分かります。この、赤インクを使えば、血液内注射方法を確立できる、ということに気が付くのに、なんと1年以上かかりました。研究では、後で分かってみれば簡単なことにひっかかり、時間をかけてしまうことが度々あります。これがうまくいったときの喜びは大きく、それがうれしくて研究をやっているようなものです。

カイクにおける薬物の体内動態

【図7】は、私がカイクの解剖をしているところです。カイクも動物ですので、内臓があって、いろいろな病気の対象になるような臓器があります。その中で腸管というのは大変重要な臓器です。後でお話できると思うのですが、カイクでは腸と肝臓が一緒になっているのです。ヒトには腸管から吸収された薬は門脈を通して肝臓に運ばれます。そこで代謝を受けます。肝臓で代謝を受けた後、全身に回っていくわけです。薬の体内での変化の過程は、体内動態と呼ばれます。この薬の体内動態について、もう少し説明させてください。

血液の中に病原菌が現れてくる段階は敗血症と呼ばれます。敗血症という病気は大変重篤で、直ちに治療しないと患者さんは亡くなってしまいます。ところが、患者さんが治療効果のある抗生物質を飲むと、敗血症であってもすぐ病気が治ってしまいます。ただし、ここには大変不思議なことが起きていることに気付いてください。

飲んだ抗生物質は消化管から、すなわち腸から吸収されて血液に出てこなければ作用することはできません。腸から吸収されて門脈まで行きますと、今度は肝臓をくぐり抜けるのです。もし抗生物質が肝臓で分解されてしまえば、薬にはならないのです。効く薬は、肝臓をくぐり抜けて、それから全身に回っていくわけです。この過程は薬の体内動態と呼ばれます。体内動態に問題がある化合物は、薬にはならないのです。どんなに試験管の中で効率よく菌を殺す抗生物質であっても、腸管から吸収されなければ、それは飲み薬にならないのです。また、肝臓で直ぐに代謝されてしまえば薬にはなり

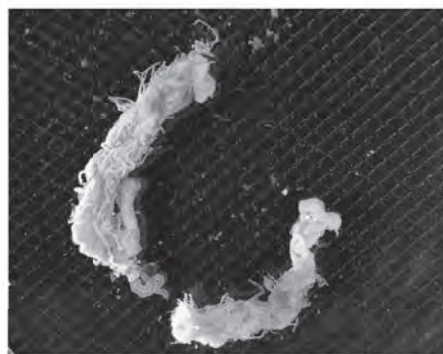
ません。また、せっかく血液に出てきても、血液から直ちに排泄されてしまえば薬としての意味がありません。

良い体内動態を示すことは、薬としては絶対必要な要件です。試験管内で優れた成績を示した薬の候補について、それが効く薬であるかを調べるためには、動物実験が必要です。イヌやネコを殺さなければいけない理由は、医薬品の開発においては、安全性の問題がありますが、その前に、その薬が到達すべきところに安定して到達するかどうかを、実験動物を使って調べる必要があります。最後にはヒトで調べることになります。これまで、カイクは薬の体内動態を調べる役には立たないと思われていたのですが、実は、カイクというのは哺乳動物と薬の体内動態という点において、非常によく一致した結果を示すのです。

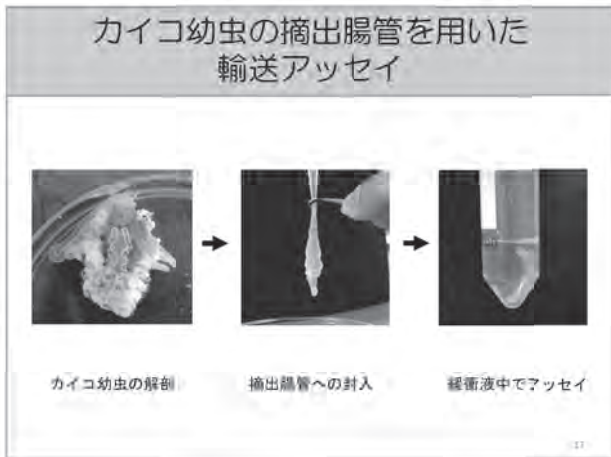
カイクは大型の昆虫ですので、解剖して中の様子を観察したり、臓器を摘出して実験に使うことが容易にできます。薬の体内動態を研究する上に、腸は大変重要な臓器です。しかしながら、私が「カイク創薬」の研究を始めた頃は、私はカイクの解剖について全く理解しておらず、どれがカイクの腸なのか、という点にさえ答えることができませんでした。カイクの頭を切って、ピンセットで腸内の内容物を引っ張り出すと、透明の膜の内側に黒い、カイクの食べ物が見えます。最初私はこの透明の膜が腸であると思ったのです。それは間違いでした。実はカイクの腸は、この透明膜の外側にあるのです。内部を引きずり出した後のカイクをさらによく見てみると、黄色い構造体が残っていて、これがカイクの腸だったのです。この管をピンセットで引っ張ると、腸管が採れてきます。【図8】に、生理食塩水中に取り出した2つの腸管が示されています。飲んで服用した薬が腸管から吸収されるかどうかは、その薬が飲み薬として効くかどうかを決定的づけます。腸管から吸収されなければ、全部便になって出てしまいますから効くはずがありません。それを、カイクを使って判定することができることが分かったのです。これは、カイクを実験動物として使って「カイク創薬」ができる、と私が確信した重要な契機となりました。

取り出したカイクの腸管の一方を糸で縛ると、袋になります。その中に薬液を封じ込め、生理食塩水の中に漬けてお

カイク腸管の摘出



【図8】



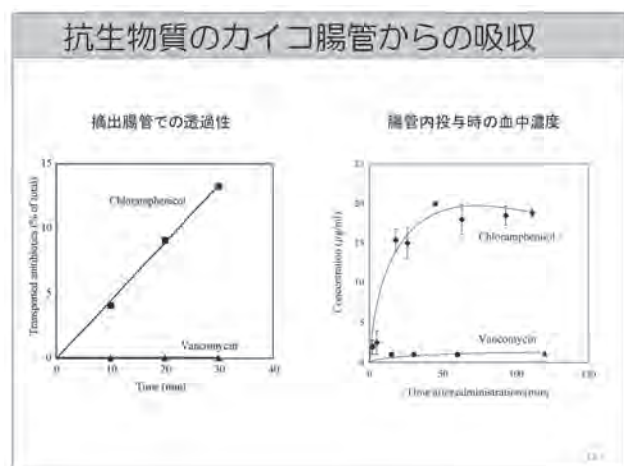
【図9】

きます。もしその薬が腸から吸収されるのであれば、薬は袋の中から外に出てきます。薬が閉じ込まれたままで中に留まっているのならば、その薬は腸から吸収されないこととなります。このような薬は、カイコでは飲み薬にはならないわけです。

【図9】

クロラムフェニコールとバンコマイシンは、それぞれヒトの感染症患者に使われる薬です。クロラムフェニコールという抗生物質はヒトが飲んで効くのですが、バンコマイシンという薬は飲み薬としては使えません。注射でないと使えないのです。これは、ヒトの腸管からバンコマイシンは吸収されないからなのです。カイコの腸管を使って、袋に詰めたそれぞれの抗生物質がどれくらい外に出てきたかを調べてみました。【図10】左図の横軸は時間を示しています。クロラムフェニコールは急激に出てきます。つまり、このクロラムフェニコールという抗生物質は、カイコの腸管を通過するのです。ところが、バンコマイシンは全く出てきません。

腸管透過性の実験を生きたカイコですることができます。生きたカイコの腸の中にクロラムフェニコールを注射器で注入後、カイコの血液を採取し、クロラムフェニコールの濃度



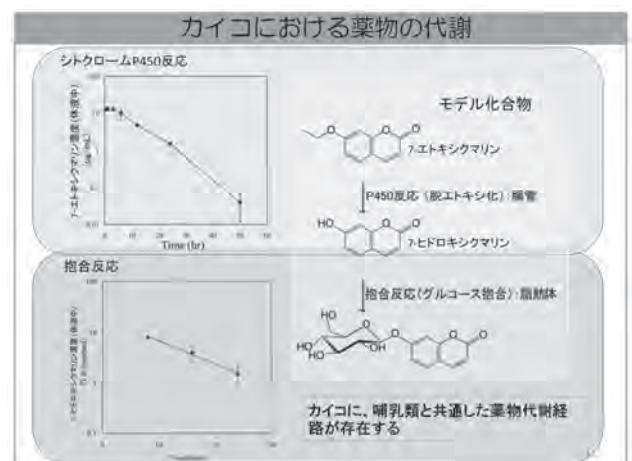
【図10】

を図ります。すると【図10】右図に示すように、腸管内からクロラムフェニコールが血液に出てくるのが分かりました。一方、バンコマイシンの場合は出てきませんでした。これらの結果は、クロラムフェニコールは腸管を通過するが、バンコマイシンは通過しないことが、カイコの抽出腸管を使った試験管内での実験【図10左】と、生きたカイコを使った【図10右】二つの実験で示されたのです。これはこれら二つの抗生物質について、腸管を通過するか否かが、カイコとヒトで一致していることを意味しています。さらに言えば、ヒトで経口で効く薬と効かない薬が、カイコでも効く・効かないが同じということなのです。

この実験をいろいろな医薬品でやってみました。カイコで経口で効くもの・効かないものを、この実験系で見ると、ヒトの結果と一致します。ですから、カイコといってもなかなかばかにできないというか、私は小さい時からばかにした覚えはありませんが、薬の経口投与での効果の有無はカイコとヒトで一致した実験結果を示すのです。

エトキシマリンという、薬の体内動態を研究するときモデル化合物として扱われる化合物があります。この化合物には、糖が付され排出されます。この化合物の代謝経路はヒトを含めた哺乳動物ではよく分かっているのですが、これがカイコでもヒトと同じ経路で代謝されることが分かりました。外来薬物の代謝の役割を果たすのはヒトでは肝臓ですが、カイコはそれがどれなのか、これまで明らかになってはいませんでした。

【図11】従来、カイコを含む昆虫には脂肪体という臓器がありそれが肝臓の機能を担っていると考えられてきました。哺乳動物の肝臓には、シトクロム P450 という外来薬物の代謝を担う酵素がありますが、それが昆虫のどこにあるのか、はっきりしていませんでした。エトキシマリンの代謝物がカイコの血液に出てくるのが分かりましたので、どこかで反応が起きていることは確かでした。私はまず最初に、脂肪体でのエトキシマリンを基質とする P450 の活性を調べたのですが、全く反応が見出されませんでした。最後に行き着いたのが腸でした。腸のホモジネートに、活性があった



【図11】

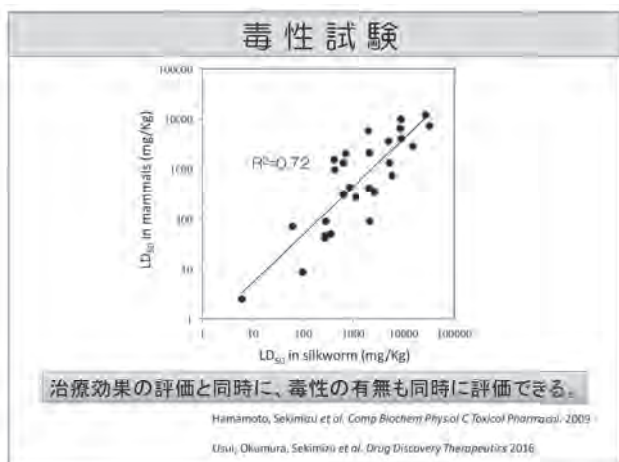
のです。結果がわかってから後で考えてみれば、カイコの腸に薬物代謝を担う P450 の活性があるというのは合理的です。哺乳動物では経口投与された外来薬物は、腸管から吸収されて門脈を経て肝臓に行き、そこで代謝され、さらに体中の血液に回ります。カイコでは最初の段階、すなわち肝臓と腸が一緒になっていると考えればよいのです。つまり、門脈・肝臓が腸と合体したのがカイコであるとすればよく説明ができます。カイコでは門脈と肝臓が独立しておらず、腸管に代謝機能があり、その周りを血液が占めていると考えられます。このような形態は開放血管系と呼ばれます。開放血管系をもつ無脊椎動物では、腸管に外来薬物の代謝機能があると考えられます。

毒性試験の代替動物としてのカイコ

カイコは、薬の候補化合物の毒性試験をする動物として役立つと思われる。毒性試験というのは、哺乳動物ではかなり残酷な実験です。私もマウスを使ってやったことがありますが、最初はかわいそうだと思うのですが、慣れてくるとその感情が麻痺してしまいます。マウスを 100 匹並べて、それを 10 匹ずつ分けて薬を注射して、死ぬか生きるかというのを判定するわけです。この死ぬか生きるかというのは、とにかく殺すのですから、動物愛護の観点から大いに問題となることです。

私は、毒性実験をカイコでやってみました。毒性試験では、試験薬物がどれぐらいの量で動物を殺すかという指標を、LD₅₀ で表します。すなわち、50%の動物を殺す量です。これを求めることは、薬の候補化合物を評価する上で大変重要です。薬の開発だけでなく、化粧品などの日常使われる化合物においても重要です。これらの化合物に毒性があると困るので、動物を使って LD₅₀ を求めているのです。そのときにマウスを殺すのではなく、カイコを使ったらどうなるかを調べてみました。

【図12】は、様々な化合物のカイコとマウス・ラットに対する LD₅₀ 値を比較した結果です。横軸はカイコ、縦軸はマウス・ラットに対する LD₅₀ 値です。1、10、100、1,000mg/



【図12】

kg で示されています。ひとつひとつの点がそれぞれの化合物に対応しています。この結果は、カイコに対する LD₅₀ 値と、マウスあるいはラットに対する LD₅₀ 値が相関していることを意味しています。したがって、哺乳動物を使わなくても、カイコで化合物の LD₅₀ 値を知ることができるのです。

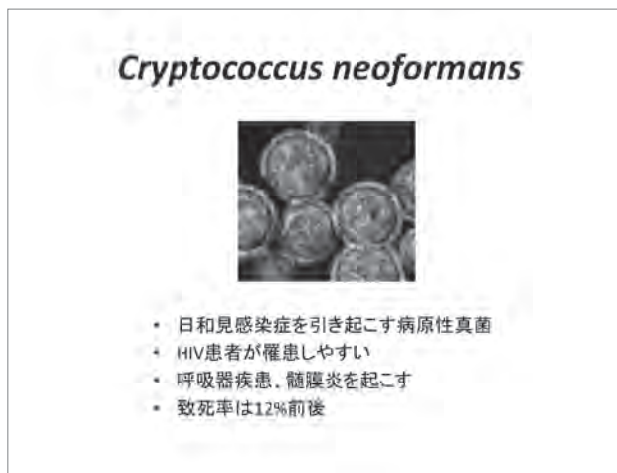
今日では、特に化粧品の毒性試験に対して国際的に規制が厳しくなっています。化粧品に含まれる多くの化合物の中にひとつでも、哺乳動物を使った試験に供された物質が含まれている場合には、その製品が販売禁止となっているヨーロッパの国があります。このような状況では、新しい化粧品を開発する化粧品会社は困ってしまいます。化粧品は人間で試してみ、それで問題があったらやめましょうと、そういう方法しか取れませんから、新しい化粧品はなかなか開発できないことになっています。そのときに、カイコを使って試したら良いのでは、という提案を私はさせていただきたいと思います。

カイコの感染モデルを用いた抗生物質の探索

ここまで私は、いろいろな化合物が体に入ってきたときの運命や、毒性について、哺乳動物を使わなくてもカイコで知ることができるということをお話ししてきました。この話の信憑性をどうしたら確認できるでしょうか。もしこれが本当であれば、カイコを使って新しい薬が開発できるに違いないと私は考えました。新しい薬を発見できるのであれば、それは人類の健康増進に多大なる貢献をすることになります。それを「カイコ創薬」で実証できれば、哺乳動物の代わりにカイコを利用できるという私の提案を皆さんが受け入れてくださることになるでしょう。そこで私は、カイコを実験動物として、治療効果を指標にした新しい抗生物質を探索することにいたしました。その結果、ライソシンという新しい抗生物質を実際に発見することができました。今日はその話をさせていただきます。

病気を起こす病原菌には、コレラ菌、黄色ブドウ球菌、ペスト菌など、いろいろな種類があります。「コレラ菌をカイコに注射したらどうなりますか」という質問に皆さんは回答できますか？これまで、細菌学の歴史の中で、この質問に回答を得ようとした研究者はいなかったようです。これまではコレラ菌のようなヒトに病気を起こす細菌が昆虫を殺すことはないと言われてきたのです。ところが実際に実験をやってみると、コレラ菌でカイコは一日もたないうちに殺されてしまうのです。この現象はどのように説明されるべきでしょうか？コレラ菌の病原性はカイコでも見られるということになります。

コレラ菌を注射したらカイコはコレラになるのかという点に対しては、甚だ疑問があります。カイコはコレラ菌の注射によって下痢をするのではないのです。皆さんは、日和見感染症という言葉をご存じですか？健康人、つまり元気なヒトに対しては病気を起こさないが、非常に免疫力が低下すると感染すると重篤な病気を起こす、こういう病気を日和見感染症と呼ばれます。ヒトに感染する全ての日和見感染症菌はカイコに注射すると、カイコを殺すことが分かりました。そ

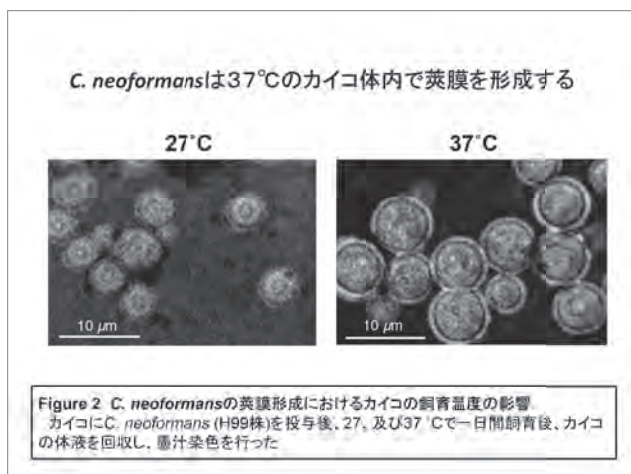


【図13】

の中に黄色ブドウ球菌や緑膿菌などがあります。これらの細菌による日和見感染症は、病院内で起こり、院内感染と言って社会的問題となっています。特にいろいろな抗生物質に耐性となった、多剤耐性菌による日和見感染症は、現代医療が克服すべき重要な課題です。

【図13】に示した、Cryptococcus neoformansという真菌も、ヒトに対する日和見感染症を引き起こします。HIV患者がかかりやすいと書いてありますが、免疫力が低下するとこの真菌による日和見感染症が起こります。【図14】にこの真菌によるカイコの感染死に対する温度の効果が示されています。この真菌は37℃では非常によくカイコを殺すけれども、27℃では殺さないのです。この原因を探ってみました。その結果【図15】に示すように、この病原性真菌は27℃と37℃で形態が違うことが判明しました。ヒトに対するこの菌の病原性は、37℃での形態では高く、27℃での形態では低いことが分かっているのですが、その点がカイコでも当てはまることがわかりました。

真菌による感染症は、抗真菌薬を使って治療するわけです。【図16】に示すように、Amphotericin Bという抗真菌薬がCryptococcus neoformans感染症に使われます。一方



【図15】

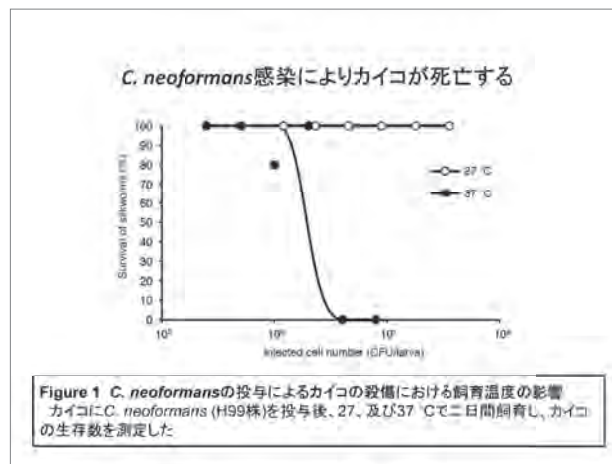


Figure 1 C. neoformansの投与によるカイコの殺傷における飼育温度の影響
カイコにC. neoformans (H99株)を投与後、27、及び37℃で二日間飼育し、カイコの生存数を測定した

【図14】

Micafunginという抗真菌薬は、この真菌による感染症には効果がないとされています。カイコでも Micafungin は効かないのです。ED₅₀というのは、どれぐらいの量で治療されるかを示す数字です。ここに示したのはカイコでの結果ですが、ヒトで効くものはカイコで効いて、ヒトで効かないものはカイコでも効かないという結果が出ています。

MRSA という多剤耐性の黄色ブドウ球菌による日和見感染症が問題となっています。黄色ブドウ球菌というのは、傷口に膿ができたときに、その中にたくさんいる菌で、私たちの環境に普通に存在しています。この菌が抗生物質に耐性になると大変な問題を起こします。今から10年ほど前ですが、このMRSAに対する治療薬を、カイコを使って探してみようと思いは立ちました。

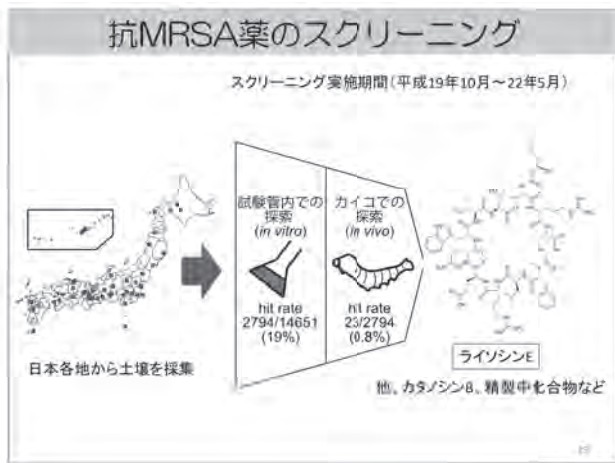
私たちは、まず日本の各地から土を採集しました。土の中にはいろいろな抗生物質生産菌がいることが知られています。土の中には様々な細菌が暮らしていますが、彼らはお互いに闘って生存しています。生存戦略は熾烈をきわめています。それぞれがピストル、弓矢、刀とか、中にはミサイルを持っている者もいるようです。長い地球上での進化の歴史において、土の中ではたくさんの細菌がお互いに闘いを繰り返して今日に至っているわけです。その武器を私たち人間が横

抗真菌薬のカイコへの投与によるC. neoformans感染の治療

Antifungal agents	ED ₅₀ (µg g ⁻¹ of larva)	MIC (µg ml ⁻¹)
Amphotericin B	14 ± 10	4 ± 2
Flucytosine	6 ± 1	21 ± 7
Fluconazole	2 ± 1	7 ± 6
Ketoconazole	19 ± 2	0.1 ± 0.1
Micafungin	>125	>100

Table 1 C. neoformansに対する抗真菌薬のカイコ感染の治療効果
カイコにC. neoformansを投与後、各種抗真菌薬を投与し、37℃で二日間飼育し、カイコの生存数を測定した。ED₅₀: カイコの半数を生存させるために必要な抗真菌薬の投与量、MIC: in vitroにおける最小増殖阻止濃度

【図16】



【図17】

取りして、抗生物質として感染治療薬として使おうというわけです。世界中の製薬会社が土から細菌を集めて抗生物質生産菌を探しています。これを私たちがもやろうと思立ちました。カイコを使って抗生物質の治療効果を評価する、という新しい研究が始まりました。

研究を始めた当時は、私は多くの先輩や友人から、そのような研究はやめたほうが良いと言われました。皆さんはご存じでしょうか？ 現在、日本の大手の製薬会社は、抗生物質の開発から撤退しており、抗生物質の研究をやっていないということ。これは抗生物質の研究をやる必要がなくなったからではなく、外国の製薬メーカーとの競争に勝てなくなってしまったからなのです。これはどうしてかという、新しい抗生物質を見つけ出すことが非常に困難になってきたからです。製薬企業は莫大な予算を投下しなければ新しい抗生物質は発見できないと考えています。これは大学教員の私にとってはショックな話でした。というのは、大学の薬学部での細菌学の授業を受け持っていました。抗生物質の講義で学生さんに対して、抗生物質は諸君の将来の研究対象ではありませんと言うわけにはいきませんでした。それで私は抗生物質の開発を自分でやってみるという決意をしたのです。私はその当時、カイコを使えばこれまでのマウスを使った実験に比べ、予算は100分の1で済むことを知っていましたから、何

とかなるのではないかと考えたのです。

【図17】に、私たちが実際にやったことが示されています。日本の各地から土を集め、14,000株以上の細菌を集め、それで試験管の中で効く抗生物質を生産するかを調べました。そのような菌は多数見つかりました。およそ3,000株が抗生物質生産菌でした。その中から、カイコの黄色ブドウ球菌感染モデルで、治療効果を示すものを探したところ、23個が引っ掛かってきました。そしてこの23個の抗生物質の構造を決めた結果、【図18】に示した構造が出てきました。これをライソシンと名付けたのです。簡単にできたようですが、実はここまで来るのに5年以上の時間がかかりました。逆にポジティブに言えば、たった5年間で新しい、病気に効く抗生物質を発見できたのです。

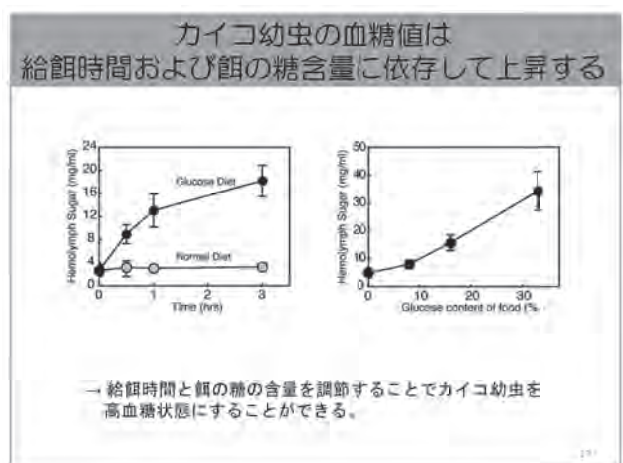
私たちのライソシンの発見のニュースは日経新聞の1面に取り上げられました【図18】。1996年のファイザーのザイボックス以来の抗生物質としての発見であるとの評価を受けました。そのようなことが私たちのような大学の研究室でできたのは、「カイコに聞いた」からなのです。

カイコの糖尿病モデル、がんモデル

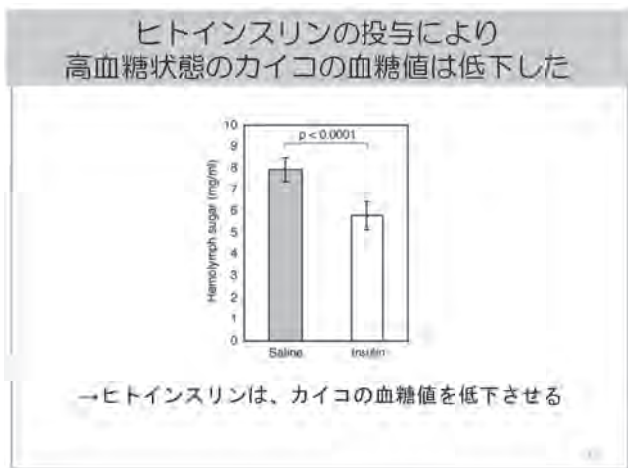
次にカイコの糖尿病モデルについてお話したいと思います。カイコが糖尿病になるなんてことがあるのか、と思われるかもしれませんが、カイコは5,000年間の養蚕業の歴史の中で、お菓子やケーキを食べたことはなく、常に桑の葉だけが与えられてきました。もしカイコの餌の中に砂糖を入れたらどうなるか。答えは、ヒトと同様、急激に血糖値が上がるのです。【図19】をご覧ください。Normal Dietというのは普通の餌のことです。その餌にGlucoseという糖を添加すると、カイコの血中の糖濃度、すなわち血糖値が上がります。これを続けているとどうなるかという、カイコは成長が止まります。ですからカイコにとっても、お菓子の食べ過ぎは毒なのです。成長が止まったカイコをどのようにして治療するか、皆さん、お分かりですか？ インスリンは、ヒトの急性糖尿病患者に使う薬です。インスリンでカイコの糖尿病も治



【図18】



【図19】



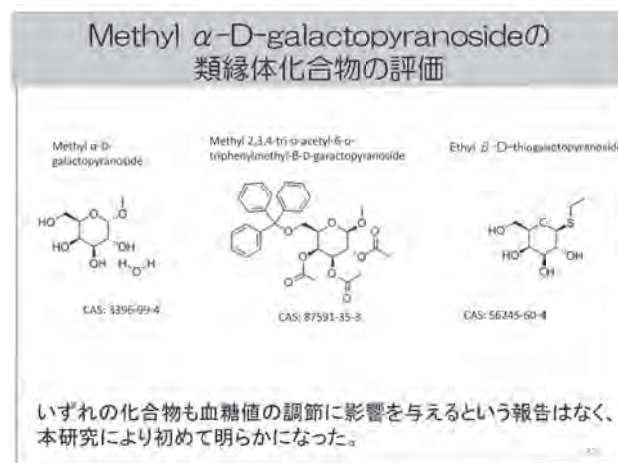
【図20】

るのではないかと。私は最初にその話を学生から聞いたとき、やめなさいと言いました。インシュリンのような哺乳動物のホルモンが昆虫に効くはずがないだろうと思ったのです。

ところが、その学生は私の忠告を聞かずに強引に実験をやりました。その結果、【図20】に示すように、インスリンを高血糖状態のカイコに注射するとカイコの血糖値が下がったのです。これを見た時私は驚きました。そして、「やはり思ったとおりになったね」と申しました。大学の教授というのは、そういう商売なのです（一同笑）。

この結果は、カイコの糖尿病モデルを使って糖尿病の薬を検索できることを意味しています。それで私たちは、この系を使って薬を探索しました。その例を【図21】に示します。これまでに血糖値効果作用について報告のない、新しい化合物がいくつか見つかりました。私はこの中に、将来ヒトの糖尿病の患者さんにとって福音となる薬があることを期待しています。

それから、がんの話をしていきましょう。がんの薬を見つけることは、現代の医療において最も重要な課題です。カイコはがんにならないんじゃないか、とおっしゃる方もおられると思います。がんにはいろいろあります。Ras という遺伝子に変異するとがんになるということがヒトや哺乳動物では知られています。カイコにも Ras 遺伝子があります。この Ras 遺伝子に変異が入った遺伝子をカイコに導入することができるのです。それを遺伝子操作といいます。遺伝子操作によって人為的にがんになるカイコを作ることができるのです。変異 Ras 遺伝子を持つカイコは死んでしまいます。ソラフェニブという薬は、ヒトの Ras の遺伝子変異による発がんを治療するのに使います。この薬を、変異が入った Ras 遺伝子を導入するとカイコは死んでしまいますが、ソラフェニブを注射するとそのカイコの変異体が生存できるのです。すなわち、ソラフェニブという薬は、カイコの Ras 発がんに対して治療効果を示したのです。



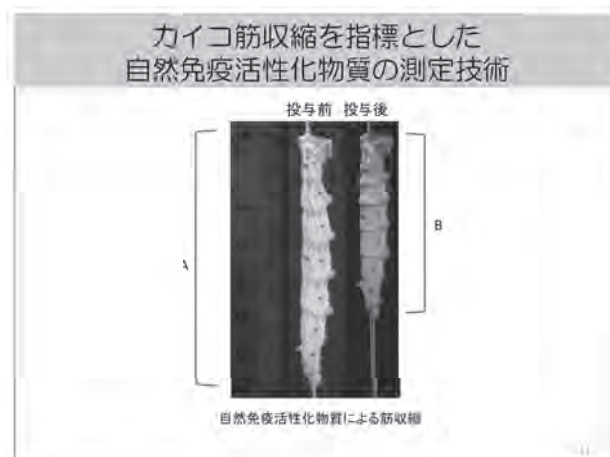
【図21】

カイコを用いた自然免疫の研究

最後に、自然免疫というお話をします。皆さんはご自分の免疫が落ちてきたのではないかと感じることはありませんよね。もし感じたとしたら、それはかなり深刻な問題なのです。免疫が活性化された状態と、不活性化状態というのは、哺乳動物の間ではなかなか外から見えませんし、自分でも分からないのです。ところがカイコでは明確に免疫が活性化されていると分かる現象があります。それは筋肉収縮なのです。

クワガタムシを採集するとき木々の根元を足で蹴った経験のある方はいらっしゃいませんか？クワガタムシがパラパラと木の上から落ちてくるのを傘で集めるのです。足で木の根元を蹴ると、クワガタムシが振動に耐え切れなくて手を離すと思っている方がおられるかもしれませんが、それは間違えです。ますます強く木の枝にしがみついて、足で蹴ったぐらいでは落ちてこないのです。実はクワガタムシは驚くと筋肉が麻痺するのです。そして死んだふりをするわけです。それは防御行動で、神経系からの環境情報の入力によって起こる現象です。私たちは、この筋肉の麻痺が免疫系からの入力でも起こるということを見出し、学会誌に論文で発表しました。ですから、これは免疫学の研究なのです。免疫活性化物質を昆虫に与えると、筋肉が徐々に収縮します。このメカニズムは免疫学的現象だということを私たちは見出したのです。

【図22】



【図22】



【図23】

様々な乳酸菌の自然免疫促進活性（カイコによる評価）

Samples	Origin	Identity	Activity (U/mg)
11/19-B1	Kiwifruit	<i>Lactococcus lactis</i>	105 ± 5 (n=7)
11/28-C3	Kiwifruit	ND (Not determined)	77
10/30-2	Earthworm	<i>Lactococcus lactis</i>	45 ± 32 (n=2)
9/10#5	Slug	<i>Lactococcus lactis</i>	33
12/4-A12	Wild leaf	ND	28
11/21-F1	Wild fruit	ND	23
12/3-C11	Wild leaf	ND	7.1
11/28-C8	Apple	ND	2.2
11/22-B7	Wild fruit	ND	2.0
10/29-10	Earthworm	<i>Enterococcus casseliflavus</i>	0.83
11/27-D5	Soil	ND	0.45
12/3-B11	Pineapple	ND	<0.30
A	Yogurt	<i>Streptococcus thermophilus</i>	43 ± 20 (n=2)
B	Yogurt	<i>Lactobacillus bulgaricus</i>	29
C	Yogurt drink	<i>Lactobacillus bulgaricus</i>	24
D	Yogurt	<i>Lactobacillus casei</i>	18 ± 2 (n=2)
E	Yogurt drink	<i>Lactococcus lactis</i>	17

【図24】

【図23】の写真は、実際にカイコの筋肉収縮実験を行なっている光景です。10匹のカイコの筋肉標本が下がり下がっています。一度に10～20匹のカイコの標本を作成し、同時に実験することができます。

この方法の産業上の応用として、食品中の免疫活性化物質の検出が考えられます。先にも言いましたように、自然免疫のシステムはカイコのような昆虫とヒトを含めた哺乳動物では共通していることが分かっています。カイコの筋肉を収縮させる自然免疫活性化因子は、ヒトの自然免疫を活性化するはずで。しばらく研究を続けていると、乳酸菌の中に高い活性を示すものがあることが分かってきました。しかも乳酸菌の中でも、105という高い活性を示すものから、0.3以下と活性が低いものいろいろあるのです。市販のヨーグルトの乳酸菌を調べてみると、殆どが50以下でした。

【図24】

中でも、*Lactococcus lactis*というキウイの皮に付いていた乳酸菌は、105units/mgという高い活性を示しました。私たちはこの乳酸菌を使ってヨーグルトを作ってみました。そうしたら、なかなかおいしかったのです。この乳酸菌がキウイから採れたということは、宣伝には好都合でした。どこで採取されたのか、というのは単に感覚の問題で、菌の良し悪しには関係のないことなのですが、この乳酸菌は、11月19日に、たくさんの乳酸菌を並べた時に、B行第1列にある菌として実験ノートに、11/19-B1と記載したので、その後もこの菌を11/19-B1菌として、呼ぶようになったのです。よくこの菌の名前の由来を聞かれますが、深い意味はなく、単純な理由です（一同笑）。【図25】

乳酸菌11/19-B1株を用いたヨーグルト

研Q室のヨーグルト

夢や希望をつなぐ、研究成果が活かされた
なみらかでおいしいヨーグルト!

乳酸菌11/19-B1株使用

東北協同乳業とのコラボレーション

NEWS RELEASE

平成27年4月10日

報道関係 各位

東京大学と東北協同乳業の協働
夢や希望をつなぐ、研究成果が活かされた
「研Q室のヨーグルト85g」
4月17日から販売開始のお知らせ

東京大学と東北協同乳業株式会社は協働で、東京大学理学部理学系研究科の清水和久教授が開発した、自然免疫活性化因子の多い「乳酸菌11/19-B1株」(注1)を活用し、健康増進生乳を70%以上使用して商品化した「研Q室のヨーグルト85g」を4月17日から全国に向けて発売(注2)します。

この取り組みは、東日本大震災で被災した福島県の復興推進を支援し、福島県の酪農・畜産と地域の人の絆の維持に役立てたいとのために、東京大学理学部理学系研究科の清水和久教授と東北協同乳業が協働し、2013年2月から取組を開始し、商品化したものです。

清水和久教授は「研究成果を活かし、福島に新たな価値をもたらすことで、福島の酪農・畜産の復興と福島県産品の信頼維持に貢献したいとの思いを込めている」とコメントしています。

また、東京大学社会連携部は、「研Q室のヨーグルト85g」を、研究成果が活かされた製品として販売することにより、復興に向けた取り組みを推進します。4月17日に販売を開始するオンラインストアの他に、東京大学本郷、駒場、池田、白百合キャンパス内にある、東京大学消費生活協同組合売店と、東京大学理学部附属売店、UTカフェにて限定販売を実施します。

今後、東京大学と東北協同乳業は、研究成果を活かした製品開発を「研Q室シリーズ」として続け、被災地復興の取り組み、シンボルとして展開していく予定です。

【図25】

乳酸菌 11/19-B1 は東北協同乳業（現 酪王協同乳業）という乳業会社が最初に事業化乳酸菌としての評価をしてくださいました。なぜ新しい乳酸菌によるヨーグルトの生産に東北の企業が応じてくれたのか、最初は分からなかったのです。ところが、立派な理由がありまして、このヨーグルトは東日本大震災の震災復興ヨーグルトになったのです。東日本大震災直後、福島の牛乳は放射能で汚染されているのではないかと、東京の奥さん方が買ってくれなかったのです。放射能で汚染されていることはないことを、いくら試験で実証しても受け入れてもらえなかったのです。これは風評被害です。牛乳をヨーグルトにすると今度は問題にされませんでした。ヨーグルトについて、原料の牛乳はどこから入手したのかとは聞かれなかったとのこと。このヨーグルトは、悪しき風評被害から福島の牛乳を守ることになりました。復興支援の仕方として、ボランティアで現地に行くということもありますが、非常に重要なのは、やはり現地の産業を活性化することです。そういう機会はなかなかないのですが、この場合は大変うまくいったと思います。この会社は、11/19-B1 ヨーグルトで復興庁から表彰を受けました。さらに東京大学が、「研Q室のヨーグルト」というブランド名で学内の売店で販売しています。さらに、あともう少ししたら、今年の10月1日月曜日に、コカコーラ社から、11/19-B1 入りの発酵乳を使用した、「ヨーグルスタンド B1 乳酸菌」を全国で発売します。ぜひ皆さんも召し上がってください。

最後に

これまで、カイコの実験動物としての有用性についてお話ししてきました。最後にこれまでの私たちの研究を支えてくださった、株式会社ゲノム創薬研究所、東京大学、並びに、帝京大学の関係者の皆様に心から感謝いたして、私の話を閉じさせていただきます。

今日のご清聴どうもありがとうございました。

シルクロードを旅する企画展講座

第2回 シルクロードの夢を旅した父と母

平山郁夫シルクロード美術館理事長 平山 廉

《実施日 2018年10月27日（土）於 帝京大学八王子キャンパス 小ホール》

私は、父の職業とは全く違って、大学で古生物学——古い生物学を教えています。分かりやすく言えば、恐竜やマンモスについて授業をしたり、地方に行きって発掘調査をしたりしています。そのきっかけは、両親に恐竜の絵が出ているような本を買ってもらったことです。両親は、皆さんがご存じのように、シルクロードを旅して、父は絵を描いて、母はそれをサポートするというように、二人三脚で仕事をしてきたわけです。この帝京大学の総合博物館にもシルクロードにちなんだいろいろな美術品、あるいは両親の写真などもありますけれども、今日は、長男である私から見た両親の素顔を皆さんにお伝えできたらいいかなと思っています。

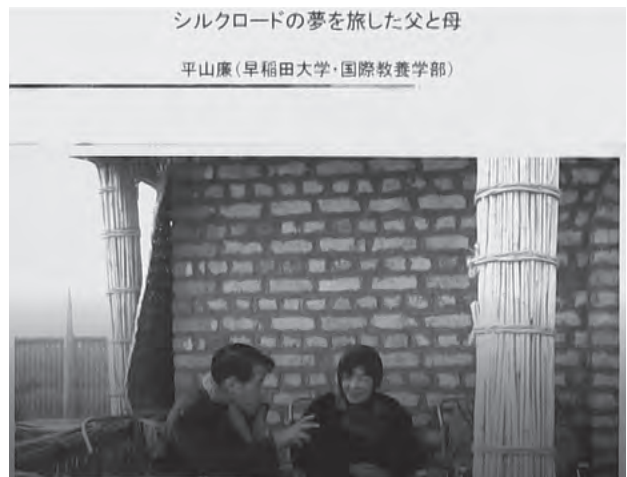
1枚目のスライドですが、左が父で右が母です。【写真1】これはイラクで1970年代に撮られた写真です。2人ともまだ本当に若いですね。このころのイラクは本当に平和で、内政的にはなかなか、独裁体制だったりいろいろあったのでしようけれども、とにかくまだ当時は平和で、外国人が普通に旅行できる状態でした。しかし、父が旅してきた中近東、アフガニスタンなども、今は大変治安が悪い状態になっています。それから最近だとシリアですよ。中には、例えばシリアのパルミナ遺跡のように、遺跡ごと本当に完膚なきまでに破壊されてしまったなどというものもあります。今から見ると、父が描いたスケッチであるとか母が撮った写真というのは非常に貴重な資料になるのではないかと思います。

僕も父の小さいころを見ているわけではないのですが、いろいろ聞いていたものですから、父の生い立ちを簡単にご紹介したいと思います。

これが、僕が知っている限り、父の一番古い写真です。【写真2】恐らく小学校時代の写真で、当時の水着を着ているのです。父は、実は水泳が非常に得意で、中学時代は当時の中学生の日本記録を持っていたらしいです。だから、周りからは「オリンピック代表選手になれるから」というので、いぶ期待されたらしいのですけれども、父はやはり絵の道に進みたいということで、水泳のほうは途中でやめてしまったと聞いています。



【写真2】



【写真1】

それから、これは修道中学に行ったときの写真です。【写真3】父は後列、後ろの真ん中にいます。中学・高校と広島県の修道中学・修道高校に在籍していました。これは1943年、父が13歳のときの写真ですが、ご存じの方も多と思いますけれども、2年後に広島で被ばくして、同級生の4割ぐらゐがそのときに亡くなってしまったと聞いています。

父は幸運にも助かったのですが、当時、戦時中ですから、中学生の勤労奉仕ということで、三菱の兵器工場に働いていたということです。もちろん8月で夏休みだったということもあると思います。父の話によると、B29が飛んできて、空襲警報は鳴ったのだけれども、何か飛んできて、落下傘を落とすのを見ていた、と言うのです。

落下傘がぱつと、「あれ？ 爆弾を落とさないのに何で落下傘を落とすんだらうな」と思って、それが爆心地から2キロほどの所だったのです。地下壕（ごう）があるわけですから、地下壕にいる自分の同級生に、「おい、何か落下傘が落ちてきたぞ」と言い、地下壕に入ってドアを閉めたときにドカンと来たのだそうです。



【写真3】

だから、爆風や熱線の直撃は受けなかったのです。ただ、ドアを通して何か後ろからフラッシュをたかれたような、そういう衝撃・感触はあったということです。それで、はっと思ってドアを開けて外に出ると、もう火がついて、広島は一面燃えに燃え盛っていたという状態だったのですが、とにもかくにも爆心地で直撃を免れたということです。ただ、放射線の後遺症というのは残って、その後もだいぶ白血球が少なくなったりして、苦労したと聞いています。

それから、これは数少ない家族写真ですが【写真4】、父は後ろの右側に立っています。父の向かって左隣は平山吉雄さんです。今は尾道市になっていますけれども、郷里の瀬戸田には父の記念美術館である平山郁夫美術館ができています。吉雄伯父さんは、朝日生命に勤められた後、定年後に平山郁夫美術館の初代館長になられています。手前の大人の方は父のお父さん・お母さんで、私のおじいちゃん・おばあちゃんになるわけです。真ん中にある小さな子供さん、男の子が、平山郁夫美術館の現在の館長の平山助成さんということです。

この後、さらにもう一人、妹の嘉久恵さんが生まれて、父は全部で8人兄弟だったのです。さらに、1歳にならずに亡くなった男の兄弟がいて、実際に生まれたのは9人ですけれども、大人に育ったのは8人ということです。父は9年前に亡くなったのですが、お兄さんの吉雄伯父さんも含めて、残りの兄弟7人は皆さんまだ健在でお元気でいらっやいます。ということで、兄弟が多くてにぎやかでいいなということですが、私もいろいろ親戚で顔を合わせると、やたらに数が多いので、なかなか名前が覚えられなくて大変だったのを覚えています。

ちなみに、私の母のほうは5人兄弟で、戦時中に1人亡くなり4人になったのですけれども、父は自分の兄弟が多いのが恥ずかしくて、母が「うちの5人兄弟だ」と言ったら、「うちも5人だ」と言って、結婚式になって見たら数が多い、合わない。「いや、実は8人兄弟なんだ」と、結婚式のときまで本当のことを言わなかったらしいです。

それから、これは父が東京藝大に進んで絵を描き始めて、まだ20歳ぐらいのころの絵です。【写真5】このころはま



【写真5】



【写真4】

だシルクロードなどというテーマは見つかってなくて、こういう人物の絵を描いたり、あとは東北や北海道などの地方に結構行って、農村などの風景を描いたり、いろいろなものを描いていたようです。

それから、こちらは東京藝大に入って、これも数少ないのですけれども、手前の真ん中が父の師匠である前田青邨先生です。【写真6】前田先生も日本画の大家でいらっやいます。父と母が後列に立っています。

これが1953年、父が東京藝大の助手になった直後のころの写真かと思います。ちなみに、母は今でもこのころのことをすごくよく覚えていて、「私のほうが成績もいいし絵もうまかったのに、なぜか前田先生は私を助手に残してくれなかった。それで私の人生設計は狂っちゃった」みたいなことを今でも結構言っています。

前田青邨先生の本名は、実は前田廉造とおっしゃるのですが、前田先生は1955年に文化勲章を受章されているのですが、私は次の年の1956年1月3日に生まれました。そうしたら、「平山君、君の息子さんに私の字を1字あげよう」ということで、それで今、私の名前は「廉」という名前になっているということです。僕も前田先生が亡くなるまで、北鎌倉のおうちに毎年お年始でごあいさつに行ったのを覚えています。前田先生はもうだいぶお年で、なかなか起き上がる体力もない感じでしたけれども、布団の中に入った状態で絵をまだ描かれているという、そんな感じでした。奥さまは非常に元気で、「いやあ、いらっやい」というような感じでいろいろ対応していただいたのを覚えています。



【写真6】



【写真7】

これは1953年、藝大の助手時代です。【写真7】まだこのときは結婚していません。母からすると、「何でこの人が助手に採られたんだ」という感じで思っていたようです。ただ、母に言わせると、父は広島から出てきたのはいいのですけれども、お父さん——私のおじいちゃんが全く仕事を失って収入もないものですから、田舎から全く仕送りもなく、食べるのも非常に困っていたらしいのです。母のうちは代々木にあるのですけれども、そこは空襲で焼け残ったのです。それで、大学の授業が終わると、母よりも先に母の実家である代々木のうちに上がり込んでご飯をごちそうになったり、母のお父さん——私のおじいちゃんとマージャンを打ったり、そんなことをずっと何年もやっていたそうです。母のお父さんであるおじいちゃんは松山常次郎さんという方なのですが、あるとき「郁夫君、君はどうだ？ けじめをつける気はあるのか」などと言われて、それで母と結婚することになったふうに聞いています。

これが1955年、結婚式です。【写真8】ちなみに、母のほうが5歳上です。というのも、戦前、東京藝大は女性が入れなかったのですけれども、戦後になって女性の入学が認められるようになったということで、母は女子美、今の女子美術大学に一回入っていたのですが、そこを辞めて東京藝大を受け直して入ったので、父よりも年が5歳上だったということなのです。だから、当時の母からすると、父は随分幼い



【写真8】



【写真9】

というか子供に見えたらしいです。

翌1956年に私が生まれたということです。【写真9】ただ、私が生まれてすぐに広島の実家のほうに、5歳近くになるまでおじいちゃん・おばあちゃんのところに預けられていたので、両親の記憶は実はあまりないのです。

これは私が6歳のときの写真【写真10】で、妹の弥生と一緒に写っていますけれども、あまり浮かない顔をしています。実は母がすごく怖かったのです。母は怒ると本当に怖い人で、今はもう92歳ですからだいぶ丸くなりましたけれども、怒ると父も一緒に怒られていました。誰かが悪いことをすると、連帯責任でみんな怒られるということでした。これもそうです。【写真11】【写真12】母はなかなか厳しい顔をしていますよね。



【写真10】

【写真11】

【写真12】





【写真13】

私が小学生のとき、奈良の法隆寺の壁画を復元するという
ことで、これは覚えています。【写真13】今、実家は鎌倉
ですけれども、鎌倉に引っ越す前は都内板橋区の成増とい
うところに家があったのですが、そこは玄関をいってすぐ左
手が畳の間のアトリエになっていたので、学校から帰って
くると、父がそこで絵を描いているのがよく見えました。一度
だけですけれども、父が描いている絵に傷をつけてしまった粗
相があったのです。絵描きだから当たり前ですが、父は時間
さえあれば本当にいつも絵を描いているという印象でした。

それから、これは左側が奈良の薬師寺の高田好胤先生です。
【写真14】私も中学2年、3年のころに高田好胤先生にお
会いしたことがあって、このころ父と会って意気投合したと
聞いています。高田先生からは、「廉君は、もし勉強が嫌だ
ったら薬師寺に来たらどうだ」と言われたのですけれども、「頭
を丸めて坊主になるのはちょっとな」と思って、「だったら、
ちょっと勉強を頑張ったほうがいいかな」と思って、受験勉
強を少し頑張ったという記憶があります。今から思うと、お
寺になるのも良かったかなと思うのですけれども。



【写真14】



【写真15】

こちらが、もうだいふたっていますが、58歳のときで
す。【写真15】雑誌の『AERA』の表紙になったときの
写真です。何しろ父は、僕が小学校のころにはもう名前が
売れて、だから、僕が一番やりにくかったのは学校の美術の
時間です。当然美術の先生もうちの父の名前を知っているわ
けですよね。それで、僕の顔を見ると父の話などを始めるの
で、分かりやすく言えばやりにくいというか、それで「絵描き
だけはやめよう」と思ったのを覚えています。

両親からも「絵描きになれ」とか「芸術家になれ」とか
言われたことは一度もなかったもので、それは非常にありが
たいと思っています。それどころか、ご存じの方も多いかと思
いますが、東京藝大は現役で入るのは非常に難しいところ
で、5浪も6浪も7浪もする人がいらっしやると聞いていま
すけれども、「廉君、藝大だけは受けないで」と言われたこ
ともあります。そんなに浪人されたら大変だと思ったので
しょうね。

これは1991年、パリのギメ美術館で父の特別展が開
かれたときの写真です。【写真16、17】

【写真16】



【写真17】





【写真 20】

それから、これが21世紀になってからの中国でスケッチをしているときの写真です。【写真18】

これは2003年だったでしょうか、金婚式のときの写真です。【写真 19】

これは本当に最後の晩年の写真ですけれども、2008年、鎌倉の自宅でハナという名前をつけた犬との記念写真です。【写真 20】 父も母も本当に動物が好きで、ネコは飼ったことはないですが、僕が子供のころから犬やいろいろな鳥を飼ったりしていました。犬は本当に最後までずっと飼っていました。

それから、これは2003年、まだ僕が早稲田に来る前で、早稲田に来る前は僕も帝京大学にいたのですけれども、そのときのお正月のものです。【写真21】 母の誕生日が1月2日なものですから、必ず母の誕生日をやるのです。ところが父は6月で、誰もよく分からないときなので、父の誕生日は実はあまりちゃんと祝ったことがないのですけれども、「ついでお父さん、おめでとう」などと適当なことを言ってしていました。

【写真 21】



【写真 19】

【写真 18】



これは2003年、早稲田に移る前の年ですけれども、一緒に中国を訪問したときの写真です。【写真22】 中国でSARSと鳥インフルエンザがはやっていて、それから小泉首相が靖国神社へ行ったりして、日中関係が非常に冷え込んでいったときです。そういうときには、父は経団連というか、経済界の人と一緒に連れて、中国のパイプを少しつなげなければいけないというので、そういうこともやっていたのです。そのときに付いて行ったときの写真です。

それから、これは私が早稲田へ移って、手前の左側の方が当時の早稲田の総長の白井先生です。【写真23】 父の右側がその前総長の奥島先生ですけれども、母に聞くと、「何かうまいものを食べさせろ」と言ってきて、鎌倉山というところにおいしいローストビーフを食べさせる店があるのですが、そこで食事会をしたときの写真



【写真 22】



【写真 25】



【写真 23】

です。私と、後ろの左にいる家内の東子もご相伴にあずかせていただきました。

これは、私が早稲田に来て、2005年にイタリアのベニスの国際大学に派遣されて、英語で授業をやっていたのですが、そのときベニスに両親が来てくれたときの写真です。【写真 24】私の髪形がひどいですが、イタリアということもあるので、なかなか床屋に行けなかったのです。

【写真 24】



【写真 26】

それから、これは2006年、広島とは別に山梨県の北杜市に平山郁夫シルクロード美術館があって、帝京大学とは提携をさせていただいているのですが、平山郁夫シルクロード美術館の落成式をやったときの写真です。【写真 25】

父の左側の非常にハンサムな方が王毅さんです。当時は日本大使だったのですけれども、今は中国の外務大臣をされて、かなりの切れ者という感じの方です。こちらは父が王毅さんと話をしているところです。【写真 26】王毅さんは元々公安警察の出身の方だと聞いていますけれども、目つきが非常に鋭い方ですね。でも、日本語も日本人と全く同じようにしゃべるし、本当に優秀な方です。

こちらが2007年、お正月に鎌倉の自宅に集まったときの写真です。【写真 27】

【写真 27】





【写真 29】

こうやって見ると、父もだいぶふけてきたかなという感じです。2008年7月にパーティーで乾杯をしているところです。【写真 29】

僕の隣に立っている方は唐家璇さんといって、王毅さんの前に中国の外務大臣をされていた方です。父が初めて中国に行ったときは唐家璇さんに通訳をしていただいたということです。唐家璇さんも非常に優秀な方で、日本語も本当にお上手だし、英語もフランス語もおできになると。本人に言わせると、「一番得意なのはフランス語なんです」とおっしゃっていましたが、こうやって見ると中国の政治家はなかなか優秀な方が多いなと感じます。



【写真 28】

それから、父が恐らく外国に行った最後になったと思うのですけれども、2008年の4月に北京で特別展をしたときの模様です。今こちらに立っているのが僕の家内の母です。【写真 28】

これもそうですね。これは当時の北京の日本大使と一緒に撮った写真です。【写真 30】

それから、父はシルクロードの中でも特に中国へは一番たくさん行って、僕が知っている限りでは130回以上行っています。その中でも敦煌ですね。敦煌はいろいろな意味で父のシルクロードの旅の中でも非常に重要で、一つは、父がライフワークにしたことに、絵を描くこと以外に、遺跡の保存・修復ということが父の晩年の仕事の中で大きなテーマでしたが、遺跡の保存・修復を始めるきっかけになったのが敦煌でした。これは昭和63年ですから、1988年に行ったときの写真です。【写真 31】

【写真 31】

【写真 30】





【写真 32】

ちなみに、父が初めて敦煌に行ったのは1979年です。そのときは、私や広島の親戚なども大挙付いて行ったのですが、父はその足で敦煌まで足を伸ばして、初めて敦煌の遺跡を見て非常に感激して、これは何とか保護しなければいけないと思ったそうです。

それで、94年、当時は竹下首相ですね。

【写真 32】竹下総理大臣にもお出ましいただいて、ここで日本政府が敦煌の遺跡の修復・保存にお金を出しましょうということになったわけです。これは敦煌の、普通は入れない遺跡の中を竹下首相と一緒に見学しているところです。

【写真 33】

それから、もちろんこういう模写、スケッチをしています。

【写真 34】



【写真 34】

実は、僕は敦煌にはこれまで一度も行ったことがなかったのです。ところが、今年の7月の終わりから8月、今私が理事長をしている平山郁夫シルクロード美術館の特別展を敦煌の研究院でやるということで、初めて行ってきました。これがそのときの開幕式の入り口に貼ってあったパネルです。

【写真 35】

【写真 35】



【写真 36】



私の右隣には、現在の敦煌研究院の院長をされている王さん——ワンさんという方です。【写真 36】ちなみにワンさんは、父が東京藝大の学長だったときに日本に留学されて、勉強されたことがあるということです。大体、敦煌の関係者の皆さんは父のことをすごく覚えていて、大変な恩人だということを口々におっしゃっていました。



【写真 37】

それから、これが敦煌のシンボルともいえる莫高窟という遺跡の入り口です。【写真 37】

この遺跡の前で父をしのぶセレモニーをしていたいただきました。これは莫高窟の前で関係者が記念写真を撮ったところです。【写真 38】

【写真 38】



【写真 39】

こちらは中国の陳さんという方です。【写真 39】

美術関係のイベントを手掛ける黄山美術社という民間会社で社長をされています。この陳社長が非常に頑張ってください、今回の特別展が実現したというところが大きいです。

それから、敦煌の特別展が終わると、来月は北京にまたこの展覧会が巡回してきます。さらにその後2020年まで、全部で中国国内6カ所の巡回展を回していくという予定まで組んでいただいています。

これはこの特別展の開幕式のセレモニーです。【写真 40】このときも300人ぐらい来られました。ちなみに、父が訪れていた当時は、敦煌は本当に閑散とした寂しいところだったのですけれども、今は年間200万人のお客さんが来る一大観光地になっているということです。観光収入が本当にすごいので、敦煌市民の平均年収が中国の中でも際だって高いそうです。

【写真 40】



【写真 41】

最初にこの敦煌研究院の王院長がお話をしてくださいました。【写真 41】

次に、現在の駐中国大使である横井さんがお話をされました。【写真 42】

ちなみに横井さんは中国語がべらべらで、通訳が悪いと自分で勝手に中国語をしゃべってしまうという方です。

これが特別展の入り口です。【写真 43】

先ほどお見せしたような写真もパネルにして並べてあります。【写真 44】

この特別展は、絵はほとんどないのです。【写真 45】

こういうちょっとした簡単な水彩画のようなものが数点あるだけで、ほとんどは両親が集めた中近東関係の美術品がメインです。【写真 46】

ただ、中国のものは含まれていません。ちなみに、これはアフガニスタンからの出土品ということです。アフガニスタンの現状を考えると、今現在こうやって国外にあったほ



【写真 44】

うが、美術品にとっては恐らく良かったのではないかと思います。アフガニスタンにも国立の博物館・美術館はあるのですけれども、とにかく略奪されたり破壊されたりして、とてもではないですが美術品を保管できるような状況にないと聞いています。

【写真 42】



【写真 45】



【写真 43】



【写真 46】



これもそうですね。【写真 47】それから、こういうネックレスや陶器などです。【写真 48】

今、全部でおよそ 300 点、敦煌で展示させてもらっています。これも非常に面白い動物の形をした陶器です。【写真 49】

それから、莫高窟の前で父の追悼セレモニーをやったのですが、ここでもいろいろな関係者の方にあいさつをしていただきました。【写真 50】

皆さんの後ろに石碑が建っているのですが、これは、父が敦煌でこういうことをやって非常に助かった、恩義に感じている、というようなことが書いてあるのですが、その前で写真を撮っているところです。【写真 51】

敦煌の莫高窟の近くに鳴沙山——砂が鳴く山という地名があるのですけれども、ここは、実は今やはり一大観光地になっていて、1日1万人来ているということです。【写真 52】

ここが面白いのは、砂丘が続いているのですが、砂丘の中に一度も水がなくなったことがないという池があって、そのほとりに寺があります。【写真 53】

【写真 48】



【写真 49】



【写真 47】

これが鳴沙山の一つのシンボルです。お客さんは、小さいアリのようですけれども、これはみんな人間で、上まで登って、おしりに何か板のようなものを敷いて滑り下りてくるということです。【写真 54】

母は足をけがしてしまったので、この8月のセレモニーには参加できなかったのですが、帰ってから母にこの話をしたら、父もこの鳴沙山の砂山に、砂丘に登ったのだそうです。

【写真 50】



【写真 51】





【写真 52】

お尻で滑らなければいけないのに、何を思ったか、駆け下りてこようとしたのです。そうしたら、途中で砂に足を取られて、頭からくるくる回転しながら落ちてきて、周りが、けがをするのではないかと、冷や冷やしたと。頭から転がりながら数十メートル落ちたのだそうです。それで母にまたすごく怒られたそうです。「あなた、何やってるの。けがするじゃない」とすごく怒られたそうです。

【写真 53】



【写真 54】



それから、これは分かりますか。
【写真 55】 これはラクダです。ラクダが200頭ぐらいいると聞いたのですが、そんなものではなかったです。「これは一体何頭いるのか」と言ったら、「1,000頭いる」と言うのです。ラクダがみんな、もちろんお客さんを乗せているのです。お客さんを乗せたラクダが1,000頭というのは、世界広しといえども、多分ほかにはないのではないでしょうか。こんなすごい観光地になっています。こんな感じで、ラクダもなかなか楽ではないようで、ここで働かされて、大体数年で死んでしまうそうです。非常に過酷な労働をさせられていると聞いています。よく見ると、こぶがしなびてしまって倒れてしまっているラクダも結構いました。**【写真 56】**

お話は以上になります。少し時間がございますので、よろしければ質疑応答をしたいと思います。ご清聴をありがとうございました。

【写真 55】



【写真 56】



シルクロードを旅する企画展講座

第3回 シルクロード：平山郁夫の夢を共に歩く

和光大学名誉教授・東京藝術大学客員教授・帝京大学客員教授 前田 耕作

《実施日 2018年11月24日（土）於 帝京大学八王子キャンパス S011 教室》

シルクロードに託した夢と希望－平山郁夫の歩いた道

初めてここへ来させていただきまして、素晴らしい丘の上にこんな立派な大学があるとは思っていませんでした。

私は今は東京藝術大学と帝京大学の客員教授ということで、随分歳を取りましたけれども、なお老いにむちを打ってまだ働いています。何かのお役に立てばと思っていますが、私がこういう世界にそもそも関わるようになったのは、ほんの偶然の機会でした。私は1933年の生まれですから、今は85歳ということになります。第2次世界戦争が1945年に終わったとき、日本は惨たんたる状況で、何も希望がないという時代でした。そのときに青春を迎えようとしていたわけですから、まず新たな第一歩を踏み出すために「何をなすべきか」ということから一つ一つ考えなければいけないという時代でした。

そのころ若者の娯楽というのは2つしかないのです。1つは映画、1つはスポーツです。スポーツといっても、皮のグラブなどは存在しませんでしたから、母が自分の帯芯を素材にミシンで縫ったグラブをキャッチボールに使ったという時代でした。でも白球を追う楽しさはなにものにも替えがたいものでした。

もう一つは映画です。若者の心を誘ったのは映画で、授業もそこそこに映画館にはずっと通いました。そのときに若者は2つに分かれたのです。アメリカ映画派とヨーロッパ映画派と分かれています。アメリカは活劇です。西部劇が盛んだった頃で、あのころの名画がつつぎと上映されていました。私たちは西部劇ファンをアメリカ派と呼んでいました。アメリカ派をやった人たちは英語にもやはり夢中になるのです。ですから、マリリン・モンローが歌えば、それをみんなが英語できちんとうまく歌えるということです。やがてその人たちは、戦後日本の若者を支援しようというので、フルブライトの奨学金というのがもらえるようになると、多くの若者はそれでアメリカへ留学することになりました。

私はアメリカ派ではなくてヨーロッパ派でした。ヨーロッパ派はフランス語なのです。ドイツは戦争の敗戦国で、日本と共に戦った国ですから、当時はドイツ語は全くはやらないということで、ドイツ語になかなか学生が集まりません。ところが、フランス語のほうはフランス映画がたくさん入ってきましたから、『外人部隊』や『モロッコ』、『商船テナシチー』など、そのころ評判の名画を見たわけですから、それが深くシャンソンとフランス語に関心をもつ切掛となりました。

私はフランス語派です。フランス語派は、フランス映画と

いうのは大体恋愛物が中心ですから、フランス語派はおおかたいいわゆる軟派です。アメリカの活劇のほうは硬派で、学生はとりわけきちんとヨーロッパ派とアメリカ派の2派に分かれ競い合ったものなのです。そのうちアメリカ派にはフルブライトの奨学金で留学の機会が大きく開かれることになりませんが、フランス派はなかなか厳しい道を歩かねばなりません。当時日仏会館(Maison Franco-Japonaise)というのがあって、もちろん今でもありますが、これは渋沢栄一がフランス語教育を推進させようと尽力しつづけた、いわばヨーロッパへの花道であったわけですが、ここが戦後ヨーロッパへの窓口の役割を果たしてくれました。そのころ留学といっても飛行機で行くわけではないのです。横浜からスエズ運河を通り地中海に出てマルセイユに向かうフランスの定期郵船(Messageries Maritimes)が若者たちのヨーロッパへの夢をのせ運行していました。

フランスはご存じのようにハノイを中心としたベトナムを植民地としていましたから、それを守るためにマルセイユからずっと来て、東南アジアを回って、そして日本の横浜が終点とする定期便を周航させていたのです。

このようなことが戦後の私たちの青春時代であったわけですが、国内の復興も進むにつれ、日本もそろそろ海外に出ていろいろな仕事をしなければいけないということで、いろいろな大学が学術調査団を形成して海外へと出ていったのです。

そうした雰囲気の中、考古学に関していえば、これまで、つまり戦前、海外で大きな仕事をしてきた大学というのは日本では2つしかなかったのです。それは東京大学と京都大学ですが、ところが、両大学ともその主たるフィールドは満洲と中国の東北部にあって、そこを拠点として調査・研究活動をやっていたわけですから、当然、戦後それらを全部失ってしまったということで、考古学の活動の場がなくなってしまったのです。当時国内では、考古学者たちはもう一度日本の原点というものを捉え直そうと、みんなが登呂遺跡を掘りに行ったということで、登呂遺跡の発掘というのが、そういった意味では戦後日本の考古学を復活させていく一つの大きな基点となったのですが、そこしかフィールドがなかったともいえましょう。

ところが、1950年代の終わり、それから60年代に近づくと、戦争が終わって15年たちますから、日本もだんだんと国力を回復してくるのです。1955年、私が学生のときにトヨタ自動車の100年史の編さんを手伝ったことがあるのでよく分かるのですが、トヨタ自動車がまったく破産の寸前にまで追い込まれてしまうのです。明日解散するかどうかという

ほどひどいところへ追い込まれます。ところが、56年に朝鮮戦争が始まって、特殊需要でトラックが必要だということで、トヨタ自動車は一気に力を吹き返し、現在のトヨタ自動車があるのです。当時はそのくらい日本の経済は惨たんたるものだったので、学問の領域とてさしたる違いはなかったのです。

それでも、大学ではやはりアジアの文化に立ち向かうべきだということになって、東京大学はイランとイラクを核とした地域、いわばメソポタミアを中心としたアジアの西方域を主としたフィールドにし、その辺は今でも続いています。京都大学はもともと中国での仏教遺跡の調査研究をやってきたわけですから、だから仏教の伝播の領域ということで、ガンダーラ文化圏で調査発掘を始めます。

私は名古屋大学の出身なので、名古屋大学は東西二大学の真ん中にありますので、その間でなんとかフィールドを見つけ出せないか、難渋しました。当時に、大学には『東西の考古学』という立派な本をお書きになった岡崎敬先生がおられて、私達を指導して下さい、「これからはシルクロードだ。シルクロードをやらなければ駄目だ」と檄を飛ばされました。

京都大学には当時、梅村忠夫先生、皆さんはご存じだと思いますが、がおられ、新しい生態的な文明観の発表をなさって、世間をあっと言わせた方ですが、われわれが最もやらなければいけない地域というのはアジアのこの真ん中の乾燥地帯の調査・研究である、と発言なさっています。

実際の世界史を動かしてきた原動力になっているところはどこかというふうにと考えると、少なくとも古い時代までは、つまり移動しなければ食べられない人たち、つまり高所アジアにあって、高い山のふもとにあって、しかも乾燥地帯であり、そして自分たちがそこに定住していたのでは食べられない、だから移動して食べていくという民族が世界史を動かしてきたし、同時にこれがあらゆる戦争の元ではなかったか、ということです。

このように言われると、思い出されることは、匈奴やフン族などです。アッティラの率いるフン族は、ご存じのようにオーストリアまで領地を広げました。ドナウ河のちょうど真ん中のところに拠点を張って、そしてローマを脅かし続けたという、そういう移動民族が世界史をかく乱していく非常に大きな動力になった、ここのところをわれわれは歴史の中できちんと位置付けてこなかった、ここのところをやりましょう、と提唱されて、大きな衝撃を呼びました。

こうした提言もあり、乾燥地帯における特に重要なものとして小麦の発生の調査がありました。小麦はどこで発生したのか。ヨーロッパの文化にも、中国の麵の文化にも決定的な大きな影響を及ぼした小麦はいつどこで発生したのか、が追求されはじめました。私たちが調査に行くと、下を向いて黙々と歩いている日本人に出会いますが、その方は大概が京都大学の農学部の実験員でした。木原均先生以来のフィールドの学風が受け継がれているのでしょうか。

では私たちはどこへ赴けばいいのだろうか。岡崎先生にシルクロードという示唆を頂いたのですが、シルクロードのどこから始めればいいのでしょうか。議論を重ねました。1963年という年になりますが、たまたま名古屋大学の工学部の山

岳部がヒンドゥクシュへの登山を計画しているという情報が入り、ならばアフガニスタンの仏教遺跡の調査隊も同時に加わったらどうか、と話しが進み、その年の終わりに、『名古屋大学アフガニスタン学術調査団』が結成されました。翌1964年が、玄奘三蔵さんが求法の旅を終え都に帰られ、仏典の新訳の大事業を果たされたのち亡くなってからちょうど1,300年の時期に当たるということで、名古屋大学としては、この玄奘さんの足跡をきちんとたどることを一つの課題として大学の学術的なミッションを送り出そうということになったのです。

京都大学からは苦情がもれてきました。「われわれはガンダーラから始めているけれども、アフガニスタンでも仏跡調査をおこなっており、人の座敷に土足で上がり込むとは」と言われていたと聞きました。私たちも若かったので、「学問研究に縄張りなどないだろう」ということで、「協働するときは協働すべきだし、お互いに励まし合ってやればいいのではないですか」ということで怯みませんでした。

そのときに名古屋大学として、まず一番必要としていたのは、調査団の派遣費用の調達でした。地元の財界につてを求め駆け回りました。当時まだ存命されていた大谷探検隊の橋本超さんに応援の言葉をいただいたり、地元の新聞社、中日新聞や名古屋タイムズ社にも記事を書いてもらったりして頑張りましたが、いちばん大きな力となったのは奈良の薬師寺の支援でした。

しかもたまたま、「玄奘三蔵さんが訪れた仏跡の学術調査ならば応援しましょう」という大僧正が現れました。これが薬師寺の当時の管主で橋本凝胤というお坊さんです。皆さんは薬師寺といえば高田好胤さんのほうをご存知かとおもいますが、好胤さんの師匠が橋本凝胤さんなのです。私も若いころ、薬師寺で「唯識論」というのを凝胤さんが論じられていて、毎朝5時から6時までがその講義の時間で、友人だった安田映胤さんと共にそれに出た覚えがあります。そうしたいろいろなご縁もあって、薬師寺が立ち上がって下さったのです。後に申し上げます平山郁夫先生が晩年に薬師寺の玄奘堂に『大唐壁画』という大作を納められるのも、なにかのご縁なのでしょう。

薬師寺はそもそも法相宗です。法相の元は慈恩大師といって、玄奘三蔵さんのお弟子さんで、窺基という方だったので、その人が法相宗の元祖なのです。だから、日本の法相は薬師寺も法隆寺も興福寺もそうだったのですが、非常に力があつたのです。南都六大寺の中の大体半分は法相で非常に大きな力を持っていた時代でした。

この法相の流れを汲む学匠でもあつた凝胤さんはまた型破りな奔放な発想ができるお坊さんでもあつたのです。日本国民がご飯を食べられないという時期が、1945年に戦争が終わって数年続き、アメリカからララ物資をもらったりして、いろいろなものをも寄せ集めて辛うじて生きていた時代です。そのときに凝胤さんが放つ有名な言葉があるのです。「国民が食べられないときに仏様は単なる礼拝・鑑賞の対象であつていいのか。薬師三尊を売って救済しよう」と。おそらく国が国民を食べさせられない時期、檄を飛ばされたので

しょう。そのときに手を挙げたのは、アメリカのフリーギア美術館。そのとき提示された金額は、当時の日本の国家予算に匹敵するものでした。もちろん薬師三尊が売られることはなかったのですが、そういう稟とした気概の持ち主で、奔放な発想のできる人でした。名古屋大学隊が「玄奘さんの足跡をたどる調査をなさるのであれば、ぜひ支援しましょう」と立ち上がってくれました。そしてみずから財界に呼びかけられ2,500万円ほどのお金を集めてくださいました。その当時の2,500万という、ちょっとしたお金です。これで大学の調査団の財政的基礎はできあがったのです。

つぎは隊員の構成ですが、自薦他薦ありましたが、凝胤さんのお弟子さんで、当時大学の印度哲学科で学んでいた安田映胤さんはもちろんですが、私は当時フランスの現代哲学に夢中でしたので手を挙げませんでした。ところが当時美学・美術史の主任教官柏瀬清一郎助教授から「君はかならず参加して欲しい」といわれ、やむなく参加を決意しました。私が指名されたのは、現地での交渉にフランス語が必要であったこともあったからでしょう。フランス映画にうつつを抜かしたおかげです。当時アフガニスタンで、交渉相手に出てくるのは大体次官級の人たちで、「ここへは行っていいよ」「ここは駄目だね」「ここは立ち入ってもいいけれども、調査は駄目だよ」というやりとりをするのですが、その人たちは全部フランス語なのです。皆さんは不思議に思われると思いますが、これはアフガニスタンという国が近代文化として一歩踏み出すときに、どこの国をモデルにしたのかということと関係があるのです。

1920年代のことですが、当時世界をリードしたのはイギリスなのです。ところが、イギリスとアフガニスタンは、三次にわたる戦争が行われるほど仲が悪かったのです。だからアフガニスタンは近代化のモデルに英国を選ばなかったのです。では、どこをモデルにするのか、アフガニスタンは3つの国をモデルにするということを決めました。1つはトルコです。なぜかという、イスラムの国でありながら、唯一植民地化を免れた国だからです。当然ですよ。もう一つは日本です。小さいけれども、つまり大国ロシアを打ち破った国だからです。アフガニスタンはロシアと国境を接し、その圧力につねに悩まされてきました。わが国も接していますが、そのロシアに勝ち、そして見事に近代化を成し遂げた国だということ。

もう一つはフランスです。なんといってもこちらは文化です。文化に関しては自由な国であるというので、そのときにフランスの学校制度をアフガニスタンに引き入れました。だから、政府のメンバーの多くの人たちがリセの出身なのです。ですから、みなフランス語なのです。英語ではありません。今はもちろん変わりましたが、英語ができなければ何もできないという時代になりましたけれども、そのころはそうではなかったのです。

ところが、私たちの調査団には英語ができてフランス語ができる者がいなかったのです。私が調査団に参加する動機はまさしく〈神の賜物〉でした。

1964年初夏、あのころは羽田から飛行機に乗って行くの

ですが、今のようにノンストップというわけにいきませんから、幾つかのところに止まっていくのです。まず最初に香港に止まります。香港で、多くの乗客が入れ替わります。日本人はそのころ外貨が切迫していましたから、外国へ出掛ける人はほんのわずかで、乗客のほとんどが欧米人です。香港、バンコクへと飛んでいくと、だんだんとヨーロッパの人たちが増えてきます。僕たちは日本から座っていったから一番いいところに座っているのですが、ヨーロッパ人たちは「その席を譲らせなさい」と乗務員にいわせるのです。僕たちは若くて血気盛んでしたから、「譲らない」と言って大げんかをして、スチュワードを大いに困らせたということがありましたね。そういう時代です。

ようやくアフガニスタンの首都カブールに着いて、私たちの行動計画についてアフガニスタン政府との交渉が始まったわけですが、これがなんと、私たちが考えていたよりもはるかに難しい条件があったのです。当時、私たちは荷物をアフガニスタンに持ち込むのに必ずパッキングリストといって、パンツも一枚一枚目方を量って、「下着何枚、何グラム」というふうに書きこんだリストをアフガニスタン側に提出しなければいけなかったのです。きちんと書き提出しました。ほとんどすべてが認可されましたが、1項だけ通関で引っ掛かりました。それは登山隊がキャンプで使用するために用意した塩でした。アフガニスタンの状況が分からないので塩を持っていったのです。ところが当時アフガニスタンは自国の岩塩を保護するために、国外からの塩の持ち込みを国禁としていたのです。そんな情報を事前にキャッチできなかったので通関で引っ掛かってしまったのです。通関手続きを済ますまでにはほぼ半月交渉を重ねました。

しかし通関の交渉ではフランス語は通じません。係り官たちはダリー語といってペルシア語の方言を使いますから、私は十分理解できないのです。私が一番若かったので交渉係ですから、やりましたけれども、なかなか通じないのです。だから「ファルダー」を連発されました。「ファルダー」とは「あした」ということです。明日また出直せということでしょう。「ファルダー、ファルダー」の連発で追い返し続けます。仕方がないので、ダリー語を習うほかないというので、ダリー語を必死になって学び、片言でやりとりをして、やっと塩の通関ができれば、今度は「どこで調査をするのだ」という話になって、仏教遺跡調査班はバーミヤン遺跡の調査・撮影とその北方地域の踏査と説明し了解を得ましたが、登山班はワツハン渓谷に入り、無名峰に登頂すると伝え、こちらは禁断のワツハン谷に入るので、改めて検討するということが即答が得られませんでした。こちらに許可が出なければ隊は活動を開始することはできません。

そこでときの駐アフガニスタン日本大使、真崎秀樹さんに助力を仰ぎました。真崎さんは傑出した人物でした。アフガニスタンに金の卵のように紛れ込んだ大使です。お年を召された方のご存知と思いますが、二・二六事件の黒幕と噂された真崎甚三郎大将の息子さんです。だから、昭和天皇とは非常に近い関係にあられた人で、この方が、「日本の調査隊が折角ここまで来てくれたのを無にするわけにはいかん」と

言われて、さまざまな智慧を授けて下さいました。

真崎さんは大使として海外に赴任されたのはアフガニスタン一国だけなのです。定年で日本へ帰国されたあと、終生昭和天皇の通訳をなさいました。昭和天皇行幸の記録をご覧になると、その背後で頭のはげたおじさんがいて、ぼそぼそなか言っておられるのが真崎さんです。生涯昭和天皇に付き添われた傑物だと。僕も若かったのですが、この方と出会うことになり、真崎さんと亡くなられるまでお付き合いできたことが、深い感慨とともに思い出されます。

ある日、大使館より電話があり、出向きますと真崎大使から「今日、大使館がアフガニスタンの大臣・閣僚を呼んだパーティーを行う。そのときに僕が〈あれ〉というから、その方々からイエスをもらいなさい」ということを伺い、私は書類を持って閣僚のイエスを取って回ったのです。それで初めて調査団が動き始めました。私にとって忘れ難い出会いとドラマがあったのです。

私が書類をもって閣僚たちのサインをもらっている間パーティーが行われているわけです。もちろんご馳走はキャバブ(羊の焼き肉)、イスラムですからお酒は飲みませんので、ほかの飲み物を口にしながらひたすらお喋りをするのですが、その間ずっと間を持たせるのが音楽で、これは欠かすことはできません。ひたすら日本の音楽をかけ続けて下さったのが川崎一等書記官でした。その一等書記官が選んだ曲が美空ひばりなのです。美空ひばりが歌い続けている間に書類のサインをもらう、そんな外交の一場面でした。面白いサプライズがいっぱいの時代だったと思い返されます。1964年7月のことです。

平山郁夫先生がアフガニスタンへ初めておいでになったのは65年ですから、1年違いで現地でお逢いできませんでした。それがとても残念に思われます。

1973年、平山先生が東京藝術大学の学長をされていましたが、それからもう一度学長をされています。国立大学で2度同じところの学長をなさるといことはほとんど前例がないわけで、平山先生が初めてでしたけれども、そのころ平山先生は「いまわれわれがなすべきことは何だ?」というようなことを私たちの世代に語りかけておられました。

そのころ先生は「私にとってシルクロードというものを最も強く意識させてくれた遺跡は2つだ。これが私の今の原動力です」とおっしゃっていました。この2つというのは何かというと、アフガニスタンのパーミヤンと、もう一つは中国の敦煌です。

平山先生が敦煌に行かれた70年代は、ご存じのように中国は文化大革命の最中で、敦煌でも破壊が起こっていて、文革のときに壊されたという遺跡の一部が今でも残っていますが、そういう破壊の時代でした。だから、敦煌をどうしても修復しなければいけないと思われたのは、敦煌の前には白河という川が流れていますが、その川は暴れ川で鉄砲水が流れ出て、そのたびに敦煌は危機に瀕して、がけは崩れ放題という状態だったからです。この人類共通の宝を何とか保護できないのか、先生の想いはつのるばかりでした。

一方で、この大きな事業には日本が国家として、国として

中国とともに支援する体勢を創り出すことが必要ではないか、と先生は考えられたのです。当時、日本の総理大臣は竹下登さんで、ご存じのように、竹下首相は「日本は経済的なことで世界をバックアップする力ができてきた。しかしこれだけでは日本は決して世界の尊敬を得られない。やはり文化の支援というものとセットになることが必要である」という想いを抱いておられました。歴代の首相がつねに念頭に置くべき姿勢です。それで竹下首相は、それを実現するには、日本の国民の税金が投下されているユネスコという国際機関を活用しようと思われ、その窓口として日本信託基金というものを出されました。こうしてわが国が国連機関を通じて文化支援・貢献を推進する体勢が整えられたのです。「文化遺産の保護・修復を通じて世界に貢献する」という平山郁夫の終生の課題が日本政府の政治理念と交叉する歴史的瞬間が近づきつつあったのです。

行動に敏捷な平山先生は竹下首相に「とにかく現場を見てほしい!」と言って、竹下首相を現場に連れてゆかれます。そして「多様な文化交流の結実でもある敦煌は、日本のある意味で文化の原点でもあるといえます」。とすればこの崩壊寸前の「敦煌を救うことは、われわれが学んだ文化を守ることでもあります。日本の古代文化というのは、敦煌の壁画を抜きにしては考えられません」と熱く説かれました。

敦煌に行くとそのエピソードは今も語り草で、「平山先生の努力によるあの3億があって、今の敦煌があります」と。人びとは平山郁夫先生の献身を忘れていないのです。

こうした歴史もあって、今年の8月に平山郁夫展を、「平山郁夫のシルクロード世界」というテーマをもって敦煌でやりましょうということになったのです。敦煌博物館の前庭で開催されたオープニングは盛大でした。中国の人たちがそれぞれに平山先生がいかに敦煌に尽くしてくれたのかということそれぞれの観点から語りました。私たちはそれを聞き、彼らがどれほど深く日本の好意を受け取っているか、を知りました。

敦煌研究院の幹部の多くは東京藝術大学の留学生です。なぜかという、平山先生が学長のとき、平山奨学金の制度をつくり、若い敦煌の研究者を東京藝術大学に招き、文化財の保存修復を学ぶ機会を与えたからです。敦煌研究院は、いまや世界に確たる地歩を占め、シルクロード文化の発信基地となっていますが、院長(当時)の王旭東さんは、平山奨学金で藝大に学んだ人です。こうした文化の種の播き方は、平山先生のような慧眼と深い誠意の持ち主でなければできなかった事柄だろうと思います。

その後パーミヤンの問題が起ります。ご存じのように、2001年の3月にあの有名な大仏がタリバンによって爆破されてしまいます。爆破前にタリバンが爆破の予告をしたとき、当時ユネスコの親善大使であった先生は大使として可能なあらゆる手立てを摸索し、爆破を阻止するため力を尽くされました。メトロポリタン博物館長、大英博物館館長、それからルーブル博物館長らに呼び掛けて、戦時を楯とする「文化の破壊」をやめるべきだと世界的なアピールをなされたのです。

それにもかかわらず大仏破壊を阻止することはできませんでした。ご存じかも知れませんが、タリバンはいったんは爆破を思いとどまったのです。しかしタリバンにはいろいろな派閥があり、ついに意見の一致をみるに至らず、爆破に及んだのです。タリバンは21世紀の初頭に〈大仏爆破〉をおこなったことで、世界史に消え去ることない歴史的な汚名をとどめることになりました。

アフガニスタンで内戦が続けば、これからさらに文化財の破壊やその流出が続くに違いない、戦争は必ず文化財を犠牲にする、そうすれば、文化財の多くが国外に流出するにちがいない。やがては日本にも流れ着くだろう、そのときどうすれば良いのか、平山先生は一つの決断をなさいました。戦火を避けて、あるいは戦火の中で掠奪されて流れるものは、それは単なる物ではなくて、文化財の難民として捉え直し、迎え保護すべきではないかと。戦時下の流出文化財をこう掴まえないと、文化財難民保護日本委員会というものを設置、発足させました。アフガニスタンで永年活躍したアメリカの考古学者ナンシー・デュプリーはパキスタンに同様な組織(通称 SPACH) をすでに発足させていました。

先生は私財を投じてこれらの文化財難民の保護に乗り出されました。先生は一つだけ方針を示されたのです。流出したものが骨董品として商品化されて流通すれば、それは盗掘をおおることになりますから、できません。しかしせかくお金をかけてここまで運ばれてきたものなので、ここまでにかかった費用については払います、というのが日本委員会の原則だったのです。それで110点が収容されることになり、修復の必要なものには保護の手が差しのべられました。

そのうちいくつかの坐仏を描いた壁画片が流れ着きました。私たちがかつて調査した石窟から剥ぎ取られたものもありました。すると先生から呼ばれ「これはどこの壁画ですかね?」「これはバーミヤンのK窟と呼ばれる石窟の壁画です」「じゃあ、これ、保護しなければいけないね」ということで先生が全部止めて下さり、文化財難民として登録して下さいました。しかし保護の期間中も、荒々しく剥ぎ取られた壁画片は放置すればいっそう傷んでいきますから、今度は東京藝術大学の修復をお願いして修復しました。これら保護された文化財のすべては2016年、東京国立博物館で《黄金のアフガニスタン》展が開催された折り、全品アフガニスタンに返却されました。私たちはそのときバーミヤンの有名な天井壁画も復元し、東京藝術大学美術館に展示し、流出文化財全品のカタログを作成し、アフガニスタンの代表に手渡しました。こうして修理され返却された文化財は今カールの国立博物館に行くと、そのままのかたちで博物館に陳列されているということです。平山先生はすでに他界された後のことですが、こうした仕事の基礎はすべて平山郁夫先生が築かれたものだったのです。

それからもう一つ触れておきたいことがあります。平山先生は文化遺産というものを守っていくためには、結局しよせんは人の善意、あるいは関係機関の微力に頼るということでは持続性を担保できないということで、国がみずから文化財の保護・活用に積極的にかかわってゆける新たな組織を官民

合意の上で生み出せないか、と意見をめぐらされ、さまざまなかたちで当時の政党の方々に働き掛けました。これは超党派でなければ意味がないと判断され、超党派の議員連盟に働き掛けて、超党派の立法として法制化できないかと先生は提言されました。この先生の提案にみんなびっくりし、最初は「そんなことできる?」という雰囲気でしたが、いろいろ知恵を絞る人がいて、「できなくはない」ということになり、「よし、やりましょう」というふうになり、議員たちに決心させた最後の先生の説得の名文句が伝えられています。「私たちが創ろうとしている組織は、国家予算をたくさんこの部分に位置付けてくれと言っているわけではありません。自衛隊が使っている戦闘機の尾翼の片方の部分に当たる予算を、日本の国際貢献が評価されるうえで不可欠な文化遺産保護のため活動する組織の創出に下さい」と。議員の方々はみな衝撃をうけ、「分かりました。やりましょう!」ということになり、超党派の議員の賛同をえて、小泉内閣の提案する最後の議員立法として議会で承認をえたそうです。そこから生まれたのが、立法化後、《文化遺産国際協力コンソーシアム》と名付けられる組織でした。東京文化財研究所がキー・ステーションとなり、平山先生が最初の会長に就任されました。それから2年会長を務められたのですが、病に罹られ、会長を副会長だった上智大学の石澤良昭さんに譲られ、時わずかにして世を去られました。私は平山先生のもとで過ごした副会長職のまま残り、いくたびも国際会議を開催し、内部改革もしながらそれから10年を過ごしました。

「もう世代交代しましょう」ということで、石澤と前田が退き、前の文化庁長官の青柳正規さんに今は会長を務めていただいております。

さてこれから映像を見ながら平山郁夫先生の歩みを皆さんと一緒に見たいと思うのです。

この写真【図1】の真ん中に眼鏡を掛けて坐っておられるのは平山先生の恩師前田青郵先生です。一番左で両手をついて模写画をみつめている人が若き平山郁夫です。ご存じのように、法隆寺が焼け、その焼損した壁画の模写が求められたときの模様です。いま「焼損」といいましたが、あれは「焼失」といいません。壁画は失われてはおらず、薄れながらも残っ



【図1】



【図2】

ているので、だから「焼損」という表現を使うのです。ちょうど来年2019年が、焼損した壁画の70周年ということで、法隆寺さんもいろいろな行事を考えておられるようですが、これはその当時、藝大が立ち上がって、「何とか法隆寺の壁画を後世に残す模写を全学挙げてやりましょう」と声を挙げられたのが前田青邨さんだったのです。前田青邨さんがみなさんの指揮を執られたわけです。

高松塚の壁画が見つかったときも、前田青邨さんが最初に日本画家として呼ばれて入りました。青邨先生は非常に率直な先生だったので、「いやあ、意外に日本の壁画はちっぽけだね」と口走って周囲の者を驚かせたと聞いています。平山先生によると、第一声はそうだったんだ、とおっしゃっていましたので、事実そうなのでしょう。日本の残存する壁画の規模からいえば立派でも、世界中の壁画に比ぶれば、ちっぽけなものだったに違いありません。

これは、平山先生が模写に挑んでおられる姿です。【図2】この模写は現在も残って見ることができます。こんなに若かったのですね。若いころの先生に特別な親近感を私は抱いていますが、それはなぜかという、先生は藝大でフランス語を選択されています。藝大でも教養で外国語をやらなければいけないのですが、語学が好きでない絵描きさんが多いなか、平山先生はフランス語に格別の関心がありました。はじめ5人がフランス語を習っていたのですが、途中で4人消えてしまって、結局、平山先生が残って教師と一対一になってしまったから逃げられなかったのだ、ということをおっしゃっていました。そのときに先生がフランス語のエチュード、字を書いておられて、いろいろな文章を残されているのですが、その綴りが実にきれいです。そういう綺麗な横文字を書くことができた人は2人います。一人は南方熊楠で、もう一人は斎藤實という、朝鮮総督府長官をやられた海軍の軍人です。この人、斎藤実の記念館が水沢にあります。そこに行くと、彼のノートが残されているのですが、その英語の綴りが実にきれいなんです。次は南方熊楠。「その次は平山郁夫だ」と私は言っているのですが、先生はそのぐらいきれいな綴り字を書かれました。先生のフランス語のノートが残っています。先生の生まれた瀬戸の生口島の博物館には先生のノートが展示されていますから行かれた時には是非見て頂きたいと思います。



【図3】

先生はそのことで若い頃非常に助けられたことがありました。貧乏画家として食べられないとき、たまたま「ぜひ家へ日本画を教えにきてくれ」といつてきたのがフランスの大使館であったということです。先生は非常に貧乏な長屋に住んでおられて、当時結婚されていたわけですが、まったくの貧乏暮らしです。ところが週末になると、その長屋に素晴らしい車がいつも横付けになるので、長屋中が、「一体うちの長屋にそんなやつがいるのか」ということになり、「へえ平山か」と、こういうふうに言われていた時代があったそうです。フランス語が身を助けたわけです。またこの長屋でやくぎの男が亡くなったとき、その男のお葬式が出せず非常に困ったときに、平山先生が率先して、長屋を代表して読経しお葬式を出したという話を『ぶれない』というエッセーの中で先生は書いておられます。晩年になってもよくおっしゃっていました。「私は貧乏で少しも怖くない。貧乏を十分に経験している。何を失っても私に悔いはない」ということを絶えずおっしゃっていて、心に残る言葉でした。

この写真【図3】は、ご存じのように、唐招提寺です。

唐招提寺の金堂の列柱の前でスケッチをされているところです。東京藝術大学は奈良に宿舍をもっていて毎年学生を奈良に連れてゆくそうですが、そこを基点にして勉強されていた、そういう時代の先生の姿ですね。

これは東京国立博物館が所蔵している鎌倉時代に描かれた玄奘三蔵求法の旅姿です。【図4】平山先生も憧れをもって眺めていた絵だったでしょう。



「玄奘三蔵像」
東京国立博物館所蔵

【図4】



【図5】

先生は仏教伝来【図5】を1959年の院展に出されて、これが賞を得て、シルクロード画家平山郁夫が生まれるのですから。

それまではどうだったのかというと、先生はいろいろな絵を描いていますが、生まれ故郷の瀬戸内の風景画などが非常に多いのです。恐らくそういうものを描き続けていたら、先生は、非常に平凡な風景画家として生涯を終えたのかもしれないでしょう。絵描きとして試行錯誤のはて、玄奘三蔵に出会い心にとめ、仏教に関するものを読み深めていくうち、閃いたのが〈仏教伝来〉の逸事だったのでしょうか。その募る思いを乗せて、《仏教伝来図》が構想され、生まれ出たのでしょうか。この絵に凝視するといくつものことが見えてきます。

まず、画面の中心に黒い馬と白い馬の二頭が描かれています。これは仏僧の往来を示すもので、とりわけ白馬がひととき印象的です。この画想の背後には、一つは白馬寺の伝説があります。最初に中国に経典をもたらしたのは迦葉摩騰というお坊さんですが白馬に乗って経を持ってきたと伝えられています。その由緒を受けて、洛陽に白馬寺がつくられたというのです。これはつまり、中国におけるいわば記念碑な出来事だったわけです。黒い馬は、恐らく玄奘さんが実際に乗った馬ではないかと思われるものです。するとこの画面には伝説の馬と事実の馬とが重ね描かれていると捉えることができます。

そして、鳥が飛んでいます。先生は鳥も好きだったと伺っていましたが、描かれた鳥を数えてみると、5羽です。この5という数字は〈五天竺〉を意味していると思います。天竺といえば、いわゆる古くより伝わる「五天竺図」を思い浮かべましょう。

もう一つ、画面の下方に犬が描かれています。先生が描きこんだ犬です。先生は犬好きで、生涯犬を飼っておられましたが、それをポツと入れたわけではないのです。実は宗教画の中に描かれた犬というのは特別に重要な意味をもっていたのです。何かというと、その宗教のいわば忠実な守り手、一種の忠実性の象徴なのです。

ソグド人というと、サマルカンドを中心としたシルクロードの中心的な商人ですが、その人たちがながきにわたる商売



【図6】

を終える年齢になると、みな落ち着き場所を求め、そこで生涯を閉じます。多くのソグド人が昔の長安の都の郊外にお墓をつくりました。その石棺に死者を葬る場面が描かれて残っていますが、その葬送の場面に犬が描かれています。この犬は死を鑑別する役割を果たすのです。それは死者がゾロアスター教徒であった示唆でもあるのです。

だから、犬が描かれていたらその寓意に注意をはらわないといけないのです。宗教は異なっても、描かれた犬はさまざまな内意の運び手であることを忘れてはなりません。

現在、池袋のオリент博物館で「シルクロード新世紀展」が開催されていますが、そこにソグド人の石棺が出陳されています。行かれたら、犬がどこにいるのか、その場面をぜひ見ていただきたいと思います。

さて平山先生の画家として歩みを大きく転回させた《仏教伝来図》以降、先生の仏教への恩念の深まりが始まってゆきます。

これは釈尊の「入涅槃」を描いたものです。【図6】先生は『入涅槃幻想』と名付けておられます。〈幻想〉とされたのは、自分の生との距離を意識されているからです。この絵に描きこまれた鳥たちはこの絵では魂を象徴しています。涅槃に入るということは、つまりどういうことかということ、ありのままの姿でずっと永遠に釈尊が生き続けるという意味でもあるのです。だから、釈尊は寂滅といって、静かな、いわゆる悟りの最も開かれた頂上において、そのままの状態が維持されているのです。

釈尊は、紀元前4世紀に実在したとすれば、われわれの生きている時代とは随分長い時間の経過があるわけです。人類は釈尊が永遠に涅槃のままでは、われわれの未来はどうなるのかという不安を抱きます。新しい仏の到来というものを考え出さなければいけないのではないか、それで考え出されたのが未来の仏様、つまり弥勒という仏さまです。弥勒の登場は涅槃がなければならないのです。

お釈迦様は亡くなって、亡くなったら、ご存じのように荼毘（だび）に付して骨を舍利に分けていきます。そして分舍利してあちこちに塔を建てていくわけです。最後には舍利はそれほどたくさんないので、舍利と称して、衣のかけらや歯



【図7】

など、いろいろなストーリーを付けて聖なる遺物として守り続けるわけです。しかし何百年もたつと、釈尊の後、実際に歩かれたインドの中ではなくて、外側に仏教が広まっていったときに、もっと新しい自分たちの仏の到来というものが求められていきます。それで生み出されたのが弥勒仏です。だから、弥勒に対する経典というのは、2世紀を下ってからしか存在しません。インドでは作られなかったということです。それをこれまでの経典の中に組み入れていく工夫がおこなわれました。それはお釈迦様から「次はよろしくね」というふうに頼まれて、「しかるべき儀式を終えて」バトンが渡されたというふうに経典に書かれます。実際どこで、どのようになされたかについてはほとんど謎です。しかし2世紀以降にしか弥勒に関する経典も像もないとすれば、ここのところ、1～2世紀には恐らくそういう新しい未来像を必要とするなにか大きな気運のようなものが生まれたというふうに考えることができます。

その秘密を解き明かそうというのが、今、私たちのやろうとしているプロジェクトです。どういうプロセスで未来は出現するのか。12月13日に日経ホールでやる国際シンポジウムの中で、少しそういう考え方のモデルを出してみようと思います。

私たちは弥勒というと、大体、太秦の広隆寺の宝冠をかぶった宝冠弥勒を思い起こすでしょう。東京国立博物館の中には法隆寺館がありますが、そこに展示されている半跏思惟像の大きなもの7～8体は全部弥勒菩薩と表示されています。

そもそも日本は、まず仏像がどのような形で入ってきたのかというと、蘇我氏が受け入れるのですが、蘇我が受け取った最初の仏像は弥勒仏なのです。だから、日本の仏像は弥勒から始まったといっても過言ではありません。そういう意味でも日本は弥勒の問題を解き明かすのに最も適した国だといえましょう。

話を元に戻しますと、平山先生はさらに仏教世界を深めるという画業を続けられます。《建立金剛心図》【図7】の釈尊の右の手を見てください。右の手を大地に着けておられますね。

釈尊は菩提樹の下で長い瞑想に入られますが、さまざまな妄想の去来に悩まされながらも、思念の果てに、大地の神



【図8】

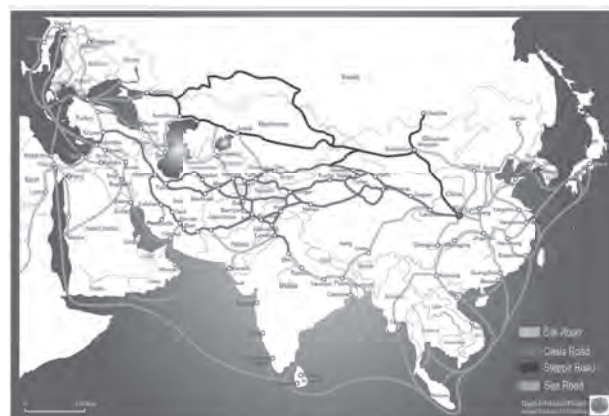
の助けもえ、ついに悟りを開かれるという、その劇的瞬間を描いたものです。降魔成道といわれる場面です。1963年に院展に出されたものです。自分の内面における仏教の追究と、玄奘三蔵の西域行への追念という、この2つの動機が、いよいよ平山先生をシルクロードへ駆り立てていくことになるのです。【図8】

64年になると、ご存じのように東京オリンピックが開催されます。内側の充実はやがて外に向けてエネルギーが溢れ出す機運を醸成します。平山先生のシルクロードへ向けての第一歩は内と外との高まりを一身に引き受けた形で踏み出されていくのです。

いま中国のシルクロードを行くと、玄奘さんの歩いた道に沿って、玄奘さんがあの笈（おい）を背負って歩いている姿が石像で据えてあります。いま玄奘三蔵さんの道をたどるツアーというのがあって、その道しるべとしてその像が置かれているのだそうです。自転車で辿る人もいれば、歩いて行く者もいるということです。

敦煌も今は中国の人たちが1日2万人も訪れるそうです。ということは、中国の人たちが今ようやくそういう旧跡・仏跡を回り始めているということです。だから敦煌などに行くのは大変です。中国の人たちは長蛇の列をなして見物に何時間も並ぶのです。中国の一般の人たちの生活が向上して、文化への関心が非常に高まっているのです。

このシルクロード地図を見て下さい。【図9】これはわが国の国立情報学研究所が作成したものです。



【図9】資料：国立情報学研究所



【図10】

シルクロードはご存じのように複数の道で、多様な道なので、多様な文化が交流し合う道です。一元的な文化など存在しない、ということがシルクロードから私たちが学んだことなのです。

シルクロードを世界遺産にしようという運動が起こりましたが、このきっかけを創られたのも平山先生でした。シルクロードを世界遺産化すれば、国境を接する国々は手を結ばざるを得ませんね。そして人類共通の遺産として、かつてのシルクロードのように人びとが国境を越えて往来するようになれば、自然と国際協調というもの生まれ、平和の種を確実に中央アジアに播くことになるだろう、というのがその主意でした。この提案はユネスコがおこなったものですが、そもその発想は平山先生です。シルクロードの世界遺産化とその登録の仕方に格別の用語が使われました。「トランスナショナル」という言葉です。ナショナルではなく、ナショナルのトランス、つまり国境を超えるということが基本の理念とされたのです。ここでも平山先生のシルクロード体験が実を結んだのです。

シルクロードの起点をどこにするのか、長安の都を出て河西回廊を通って敦煌に至るその筋道に異論はないが、そもそも張騫の寄与ぬきでシルクロードは考えられないと、漢中の張騫の墓も取り込まれることになりました。中国に行かれた方が多くおられると思いますが、張騫の墓に行かれた方はほとんどいないと思います。漢中とって、西安をちょっと南



【図11】

へ下るところにあるというのですが、日本の東洋学者たちで、そこにある土丘を張騫の墓だと断定した人は誰もいません。

では、それでもなぜ張騫の墓なのかということですが、張騫ゆかりの地であることに違いないとしても、現在石垣で囲まれた土丘を張騫の墓と断定できる確たる証拠はあるのでしょうか。日本でまず張騫の研究で最も重要な仕事をしたのは桑原隲蔵という京都大学の先生で、「張騫の遠征」という名作があります。ところが、桑原隲蔵先生たちは、張騫が埋められた一番重要な丘はどこかということに言及されていないのです。墓稜といっても、それがお墓かどうか分からないということです。しかし中国は、清朝の時代にその証拠を得たと言って、そこを張騫の墓と認定しています。もちろんシルクロードはさらに東西に広がっています。いま帝京大学が発掘をおこなっているキルギスのアク・ベシム、スイヤブという所ですが、そこを含めた地域までを第1回の登録にしようという提案されました。それにカザフスタンも加わり、中国とキルギスとカザフスタンの3国が手を結んで、文字通りトランスナショナルな形で登録が認定されました。こうした経過を見ても、シルクロードというものが今日でもいかに大きな意味をもっているかが判りましょう。

シルクロードの世界遺産登録のための第1回の国際会議が西安で開催されたときのことで、私と帝京大学の山内和也先生と一緒に出席し、まず最初に驚いたのは、会場で最初に提示されたシルクロードの地図でした。私たちが日ごろシルクロード地図で見慣れた極東アジアの日本と西方のローマが見えないのです。それで私たちが真っ先に手を挙げて、「なぜここから東の奈良がないのですか」と中国に聞きました。そこから大激論になり、会議を中断し、引き続き、中国と日本が別室にいて議論を交わすということになり、3時間激論をかわしました。

そのとき僕たちが示したのがこれです。【図10】「これは中学校の教科書の付属として使われているものですが、見てください。日本では小学校から、既に奈良から洛陽、長安、そしてローマまでの道をシルクロードとした地図を使っています。日本では、これがシルクロードという認識です。中国は洛陽から東側はシルクロードとして認めないのですか」というのが激論の元だったのですが、国際会議というのはそういうもので、そういう認識のずれといつも戦っていなければ国際会議は成就しないということです。本会議に戻ると、中央アジアの人たちは、「わかった。日本に同意だ」ということで、奈良とローマを地図に加えた地図で論議を進めることとなりました。中国との議論で学ぶことや知ることのできたことも多くありました。

これは1971年にイラクを訪問されたときの平山郁夫先生と奥さまの美知子さんです。【図11】奥さまは、絵描きでもあるし非常に優れた版画家でもあるのですが、若いときに平山先生のサポートをし続けるという覚悟を決められたと聞いております。先生のスケッチブックは膨大で、いずれも素晴らしいスケッチブックですが、あのスケッチブックは、奥さまの平山美知子の心構えと支援なくてはできなかったものです。それに行動の日記、メモは全部奥さまがつけられ

たと伺っています。また、先生が描いている現場の写真も全部奥さまが撮られ、記録に残すことを徹底してやられたということです。だからこそ私たちは先生の没後、それを見ることが出来るわけです。

今日の展覧会場〔帝京大学総合博物館〕でこの写真【図12】をご覧になったかと思いますが、これは、アフガニスタンでの先生の姿です。土で作った土台のようなものがあり、その上にちょっと粗っぽい編み方の織物が敷いてあります。これが茶店なのです。お茶をチャイ、家をハナ、といいます。ここはパーミヤンとカーブルのちょうど中間にあるゴルバンドという街のチャイ・ハナではないかと思いません。ここは何年行っても全く変わりません。今だとだんだんと店が変わっていくのですが、アフガニスタンのお店はそうではなく、ほとんど昔のままの店がそのまま残っているところがアフガニスタンの面白さですが、先生は腰を下ろせば必ずスケッチをなさるということで、興味深い重要な一ショットですね。

これは1965年、先生がパーミヤンですぐ画帳を開いて、スケッチを始められたときの姿です。【図13】何をスケッチされたのでしょうか。こちらはパーミヤンの丘の上でスケッチされる先生です。視線の彼方にはあの高さ55メートルの大仏様があったにちがいません。55メートルというと、日本のものを比較すると、京都駅をちょっと出たところに東寺がありますね、弘法大師がおつくりになったあの東寺の五重塔の基壇の部分から水煙の一番上までが55メートルです。

もう一つのほうは東の大仏ですが、38メートルで、こちらは薬師寺の西塔と同じ高さです。見上げると非常に高いのですが、この二体の大仏は礫岩の岩を彫り抜いて作られたものです。7世紀にここに立たれた玄奘さんは、まずこちら西の大仏を先にご覧になってから、東の大仏に向かわれます。そして東の大仏は釈迦の大仏と記述されています。ところが最初にご覧になった西の大仏は「石の大きな仏像だ」とのみ書いておられるのです。なぜ仏名を明かされなかったのか残念ですが、私たちはこれを弥勒仏だと考えています。

なぜならば、ここ西大仏の仏龕の天井には壁画が残っていて、先生もこれを描かれています。この天井画の大半は剥



【図13】

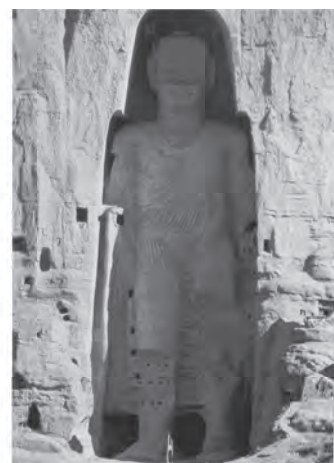
がれ落ちていますが、僅かに残る龍華樹の断片から「兜率天上の弥勒菩薩」、まだこの地上に降りてこられる前、兜率天におられた菩薩が描かれていたと思われるからです。すると地上に立つ大仏は兜率天から下生された弥勒仏ということになります。

パーミヤンというのは不思議なところで、弥勒の仏様がたくさんいるところ。人類の未来を担った弥勒にとっては、アフガニスタンのパーミヤンというところはとても重要な場所であったということです。残された壁画の中に阿弥陀浄土図はありません。これが大きな特徴です。阿弥陀様というのはガンダーラから東で、ガンダーラより西に阿弥陀さまはいないのです。西はほとんど弥勒です。ということは、つまり弥勒はガンダーラより西で生まれたということを意味しています。

そういった意味では、パーミヤンは弥勒が現れるいちばん西の端の地ということになります。〈西方浄土〉とはこのことではないかと思われるほどです。その浄土の西の端に、まるで記念碑のように巨像が建立されたのではないかと。玄奘さんよりも1世紀半も先にガンダーラに來られた法顕というお坊さんがいますが、法顕さんの記録によると、中国を離れ、高い山々を越え、現在のパキスタンの北方、スワートという深い谷へと下りて來られた所に弥勒の大像があったと記されています。こちらは木で造られていていましたが、やはり巨仏でした。「これは何の記念か」と訊ねたところ、これは仏



【図12】



【図14】



【図15】

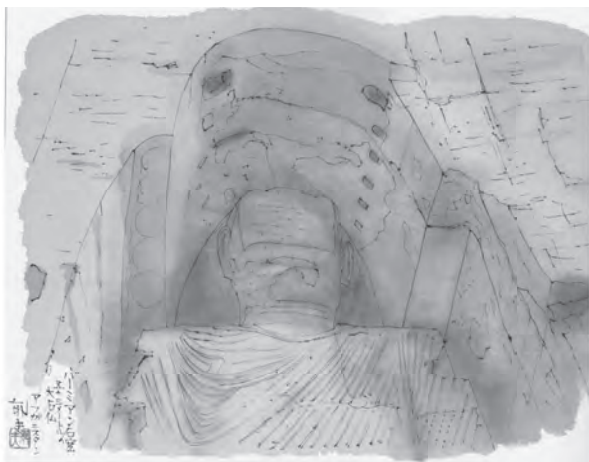
教がインドに発し、ガンダーラから北へ向かって、山を越え中国に入っていった、その仏教の流れを記念するものであるという答えであったと記されています。いずれにせよ弥勒の大仏は新たな世界の命運を担う仏の誕生を象徴するものだったのです。

先生の描かれた大仏と実際の大仏の違いがおわかりになるでしょうか。これが写真の捉えた大仏です。【図14】

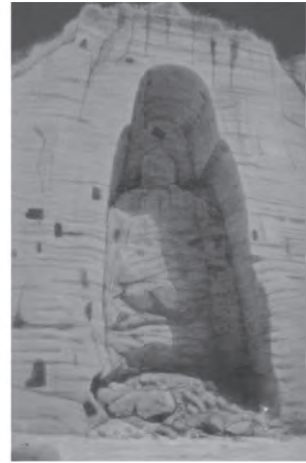
どこが先生の作為でしょうか、先生は足下に青を、グリーン草の帯を描き入れられています。【図15】グリーンはパーミヤンにとって春の訪れを象徴する希望の色です。パー



【図16】



【図17】



破壊後の西大仏 (2003年)

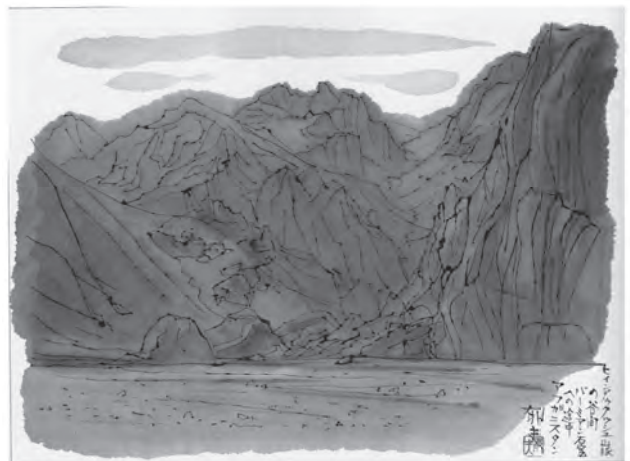
【図18】

ミヤンは標高 2500 メートルの高所乾燥地ですから、大仏の足元にグリーンはありません。しかし先生はこの褐色の大地に緑を入れることによって、先生の希望を表現されているのではないのでしょうか。

これはその下描きで、平山技法で、キュッキュッキュッと角度をつけていくのが平山先生独自の筆法ですね。

【図16・17】

両大仏とも残念ながら顔面が削り落とされていますが、8世紀の終わりごろイスラムがやってきて削り取ったといわれていますが、私はそういう意見をとりません。私は仏教徒が自らやったという説です。8世紀末から9世紀にかけて、パーミヤンもイスラム化します。でもパーミヤンの人たちはそれまでは敬虔な仏教徒です。彼らは生き抜くためにはイスラムの偶像破壊の教説も受け入れなければなりません。このジレンマの中で、パーミヤンの人びとは、イスラムへの恭順をどこかで表現しなければいけません。そのために仏像の生命でもある目鼻を削る決断をし、それらを削り落とします。とても丁寧に削って、下唇の上のところでその作業を終えています。ただ破壊するだけなら一気に落としてしまったほうがずっと早いのですが、実に丁寧に削りとしています。その丁寧さこそ、彼らが仏教徒であったしるしです。顔面を削ることによって彼らは生き延び、仏像の呼び名も、西の大きい像を「お父さん」、東の小さい像を「お母さん」と変え、つまり世俗のストーリーへと転換させたのです。仏教のストー



【図19】

リーからつまり家族のストーリーに変えることによってイスラムの世紀を生き抜いていたわけです。

こうした知恵も含めてイスラムはそれを許容してきたのです。にもかかわらず、なぜ21世紀の初頭に大仏を破壊したのでしょうか。【図18】多くのイスラム国が反対したにもかかわらず、大仏を爆破し、その貴重な文化遺産をことごとく破壊したのは、もうひとつの隠された動機があったのです。それはシーア派とスンニー派の宗教対立です。パーミヤンのイスラム教徒はシーア派です。シーアはイランの系統です。タリバンたちの中核はパシュトゥー民族ですが、その人たちはスンニー派です。ですから、パーミヤンでは、大仏も爆破されましたが、村民も多く殺されたのです。パーミヤンに行くとき新しい殉教者の墓というのがあちこちにありま。そのときやってきたタリバンたちの犠牲になった人びとのものです。

話は変わりますが、先生のこだわりのことです。平山先生のパーミヤンの呼称はつねに「パーミアン」です。これは先生たちの世代が受けた英国教育の賜物です。英国は古くから「パーミアン」という表現を使っています。その流れを引いているのでしょうか。古くには「パーミヤーナ」という言葉で表現されたので、「パーミヤーン」という言葉は残っています。今は「パーミヤン」と言う人と、「パーミヤーン」と「ヤーン」をのぼす人とがいます。「ヤーン」と伸ばしているのは研究者が多いですが、私はのぼさず「パーミヤン」を常用します。それは何かというと、元々はサンスクリット(梵語)で「パーミヤーナ」と言ったので、その音を踏襲しているのでしょうか。実際は土地の人はどう言っているのかというと、「パミヤン」と言っています。すると先生の「パーミアン」は聴き取ったままを表記されているともいえますね。

大仏の天頂部には、儀式に使われたと考えられる穴が空いています。下方で大仏を礼拝している人たちに向かって散華をするために設えた空間と思われる。日本の散華の花びらはいま皆紙で作っていますが、薬師寺で使う散華の花をたくさんもらって、この空間からまいてみました。ひらひらと舞うように落ちるのだらうと思っていましたが、大仏が消えさせたせいか、一気に壁沿いに流れ出てあっという間に消え去りました。生花であったらまた異なった落ち方をしたかもしれませんね。

これはもちろんアフガニスタンにおける先生のスケッチです。【図19】

カーブル大学の一室を借り、土地の人に「あなたは何族ですか」とお聞きになり、「タジクです」、「ハザーラです」、「パシュトゥーンです」と答える、それを記録にとどめて描かれたものです。【図20・21】

これは非常に素晴らしいタッチでつかまえておられると思いますが、「木陰で憩うアフガニスタンの老人」と書き入れておられます。【図22】顔と手にその生活の奥行きが表れています。

これはアフガニスタンの少女。【図23】少女のときはチャドルはかぶりません。外へ出て、学校へ行き、6年ぐらいになるとチャドルをかぶるということになるのですが、この少



【図20】



【図21】



【図22】



【図23】



【図 24】

女はまだスカーフです。

先生の旅はアフガニスタンだけではなかったのです。カンボジアが非常に危ないといわれたときに早速行かれて、そしてかならずスケッチをされました。そしてスケッチをされるとすぐに行動を起こされます。上智大学の石澤先生から伺ったことですが、石澤さんも、若いときからフランス語を学び、カンボジアはフランス領であったわけですから、フランス語ができなければカンボジアの文化を理解することはできないと勉強されていたそうですが、先生は石澤がその専門だということで、カンボジアのアンコールの遺跡保存を積極的にやるべきだ、支援する、お金も工面する、というふうに言われたそうです。現在のしずか大学は、石澤先生を中心に大学を挙げて遺跡の保存と共に人材の育成に努められています。文化遺産の保護事業というものの重要性を先生は実際の遺跡に向き合いながら認識され、それをオール・ジャパンの課題として立ち向かう必要を痛感されたのです。アンコールの保存もその意味では平山郁夫なしには考えられないということです。これはアンコールでの先生の姿です。【図 24・25】

これは敦煌です。【図 26・27】 最初に行かれたころの若いときの敦煌で、本当に夢中になって、図版の上でしか見られなかった仏像や壁画を現場でご覧になって、どうしてもこれを守らなければいけないという決意を固められたのだらうと思いますが、今は本当に見事に保護されています。

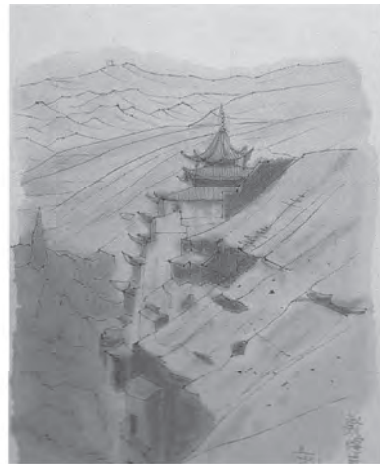
ただ、観光客があまりにも多くて、ベネチアに匹敵するほ



【図 25】



【図 26】



【図 27】

ど多くの人びとが押しかけていて、もう窟に入れることはできないという状況が生まれています。現在、全窟に炭素の測定器が入れてあり、遠隔操作で研究院の中にきちんとモニターされています。炭素量がある一定の基準を超えたときにすぐ窟を閉めます。大体 400 窟ほどが管理されています。今日 10 窟閉めても、あと 10 窟は開けましょう、というふうにして、炭素量がそこに蓄積されて、壁面が傷つかないようにつねに観察されているということです。

これ【図 28】は、第 259 窟でスケッチされている先生の姿です。先にも触れました先生のさまざまな貢献があっ



【図 28】

たればこそ、東京藝術大学でおこなわれた展覧会で有名な第57窟の再現が可能となったのです。この窟には平山先生が「敦煌の最も美しき菩薩」と言われた菩薩が描かれています。その菩薩の窟をそっくり再現できたのです。

そのおりに敦煌と大きな議論になったのは、石窟の奥壁の仏龕のなかに仏像が置かれているのですが、その仏像の頭部の扱いをめぐることでした。頭部は何百年もの間に補修に補修を重ねていて、最終的には清朝のときにすっかり作り変えられたそうです。そこで「この窟は唐代に造られたものだから、仏頭も唐の仏像をモデルにして付け変えたらどうだろう」と藝大が提案し、騒然たる議論になったと聞きました。しかし議論をしているうちに、「やってみる価値はあるのではないか」ということで、もちろん敦煌は世界遺産ですから、それに触ることはできませんが、藝大でなら実現できるということになり、宮廻正明先生が中心になって実現しました。宮廻先生はその独自の優れた複製技術をスーパー・クローンと命名されています。藝大はそれに伝統的な手業、模写をする技術、着色の技術というものが傳承されているので、それを加えていくと、素晴らしい復元ができます。焼損した法隆寺の壁画もそうですが、失われたパーミヤンの太陽神の壁画もこの技術によって甦ったのです。

時間が限られていますので、これで最後としますが、この写真【図29】は1984年の薬師寺における「玄奘三蔵院伽藍」の起工式の模様です。2000年、つまり21世紀の幕開けとともに閉館される玄奘三蔵院に先生はこれから16年かけて壁画を描かれるのですが、いま壁面にみえる壁画はその最初の下書きです。下方にラクダの群れが描かれていますが、完成した壁面にはこのラクダの姿がみえません。聖なる山、須弥山を主尊とする正面の大壁画により超越的な聖所感をもたらす工夫からだったのでしょうか。下絵はその葛藤の経緯を記録するもので重要な意味もっています。

向かって左側で合掌している方がときの管主 高田好胤さんです。この人には私たちも若いころ大変お世話になりましたが、弁舌も際立っていましたが、アイデアも多彩で素晴らしい実行力のある人でした。古寺をもっと広く多くの人びとに開放する必要があると終生努められた方です。写経もその一つでした。私がパーミヤンで行動を共にした学僧安田映胤さんの着想だったと聞きますが、その推進役を努めたのが好胤さんでした。般若心経をひたすらに写す写経行を広げること、薬師寺は講堂の復活、金堂の再建を実現してゆくのです。私は薬師寺につぎは経堂、経典を納める蔵を造ってくださいと申し上げたことがあります。そこにシルクロードに関する最も重要な書籍を集めてほしいという希望があったからです。なぜならば、かつてシルクロードを駆け抜け、研究した日本の多くの優れた学者や学徒が世を去っていくのですが、ほとんどその所蔵本が散逸してしまっているからです。その貴重な知的財産の流出を止めるには、シルクロード文庫といったものを創設し、知的財産を蓄積し、次世代に手渡してゆく仕掛けが必要なのです。できたらここ帝京大学が中心になってシルクロードに関する知的遺産を受け止め、新たな人間学の発信の拠点になって欲しいと願っています。



【図29】

この間、日本のシルクロード学の草分け的存在であった有名な加藤九祚先生が94歳で亡くなられましたが、先生の所蔵本で、最も重要なシルクロードに関するほとんどの本が散逸してしまいました。残念というほかありません。今、神田の古本屋へ行っても、シルクロードの重要な本で、しかし高いので買えなく何年も見つめ続けてきた本のほとんどがありません。全部中国の人が買って帰ったということです。日本ではシルクロードの文化を世界に先だって重要視し、研究を重ね、積み上げてきた知的財産、文化的な財産を失いつつあるというのが現状です。

これは2000年12月31日、テレビでも放映されましたが、薬師寺玄奘三蔵院の壁面に最後の筆を入れられる場面です。「入魂開眼法要」という儀式です。【図30】

須弥山を中心に据えて、その横のところがパーミヤンで、最後のところはインドのナーランダーです。玄奘三蔵さんが勉学の仕上げをなさったところでした。現在でもインドのナーランダーに行くと、インド人のガイドは「ここが玄奘さんの寝泊まりされたところですよ」と指をさして言うのですが、これは全く当てになりませんけれども、その住居を訪れた中世の人の記録が残っています。それによれば、玄奘さんのいた部屋の壁には、その居住の証として、靴と箆の絵が描かれていたということです。インド人は箆を使いませんので、玄奘さんが箆を使われたことがことのほか珍しく思われたでしょうね。



【図30】



【図31】

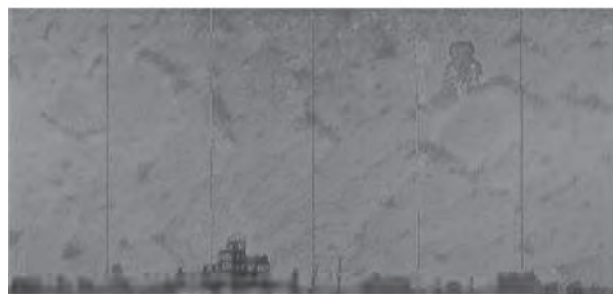
さて、平山先生のもう一つの原点は、なんと言っても広島ですね。【図31】広島といえば原爆ドームですが、先生は広島の被爆者であるにもかかわらず、原爆に関してはほとんど何も描かれてこなかったのです。日本では丸木さん夫妻がいて、『原爆の図』を描いて、あの阿鼻叫喚のすさまじい原爆図を残されましたが、平山先生は、被爆者であって、長くそこにおられたにもかかわらず、原爆の図は描かれていません。

【図32】ここに原爆ドームがあり、このところに平和記念館が造られています、設計は丹下健三です。当時平和記念館の建設に応募した建築家が5名いました。そのうちの4名は、昔どおりの街の筋で記念館を設計しましたが、丹下健三は、人為的な直線上に原爆ドームがのぞめる位置に記念館を据えたのです。原爆ドームと平和記念館が直線上に並び、戦争の悲劇と平和の意志の象徴とを直線上に並置するというのが丹下健三の着眼で、その鮮明な意志の表現によって丹下案が通ったのです。

あるとき被爆された人に聞いたことですが、「人間というのは非常に意欲的なもので、原爆を投下されて、ひと月もたたないうちに焼け野原にビアホールができ、人が集まり、ビールを飲むというようなことが実際にあった。そういうことも含めて人間にはどんな場合でも溢れる意欲というものがあるということ、原爆被害を論ずる場合にもそういう観点をに入れて論じてほしい」と。

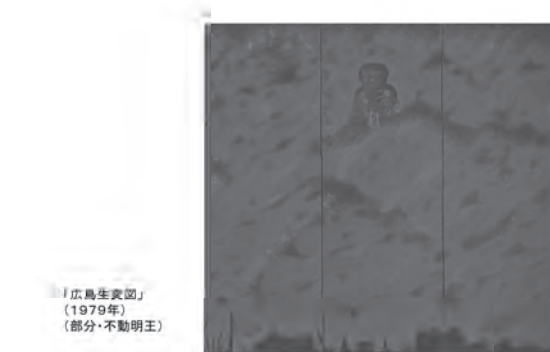


【図32】



「広島生変図」(1979年)

【図33】



【図34】

平山先生は1979年になって、シルクロード画家として既に名を成してから《生変図》というのに挑まれました。数少ない原爆の絵の1つです。【図33】ここを見てください。「生変」、つまり生まれ変わるといことです。何によって生まれ変わるか。ここに【図33 右上方】不動明王が描かれていますね。【図34】「不動明王を介して原爆の火炎の中から新たな生を生ま出すことができる、未曾有の惨害であったにもかかわらず、われわれは不動明王の力を介して生き変わることができる、という鮮烈な意味が込められています。

超越的な全く新たな生が、希望というものをもたらすことができるという境地に達せられたときに初めて原爆図を描くことができたのだと思います。これは平山先生の絵画の中でも非常に晦渋なものひとつです。不動明王を描き込むことなくして原爆図は描けなかったということ、平山先生の深い思想と鮮烈な意志が伝わってきます。

これは、先生がシルクロードを世界遺産にしなければと2002年の西安宣言をなされたときのお姿です。シルクロードの世界遺産登録への歩みがこの宣言で始まるのです。【図35・36・37】

その登録の仕方は、先にも申しましたが、特別の用語が使われました。国域を超える登録、つまりトランスナショナル・ノミネーションです。そして包括的登録です。1つだけではないですよ、全部つながりのあるものとして登録するのですよ、つまりシリアル・ノミネーションということです。

文化遺産の継承も、ここでは当然国域を超えて一緒に働かなければいけないので、その協働作業から平和構築のための基礎が生まれるに違いないというのが平山先生の基本的な考え方だったわけです。この考え方が引き継がれることを願わ



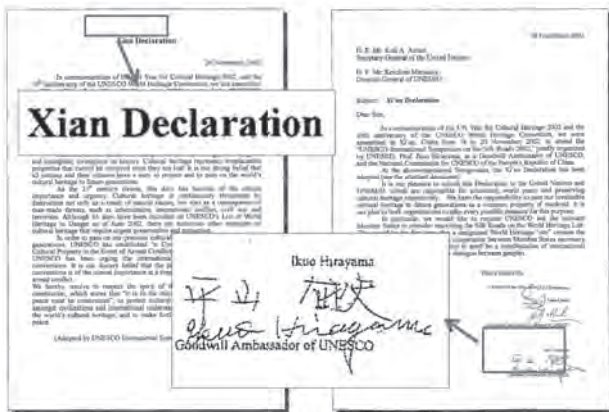
【図35】



西安宣言 シンポジウムの写真

【図36】

西安宣言と平山書簡



【図37】

ないではられません。

シルクロードを世界遺産として認定する第38回の世界大会のときのことですが、【図38】珍しいことが起こったのです。キルギスの代表が立ち上がり「この登録に関しては、特別に日本の協力に感謝する。それなくして、われわれの世界遺産登録はなかった」と満場の席で発言したのです。キルギスは帝京大学に考古発掘の場を開いている大切な国の1つですが、それに先立ちいま申し上げたような前史があったということを理解していただきたいと思います。

山梨の北杜市にある平山郁夫シルクロード美術館



【図39】

【図39】にもぜひお越し願いたいのですが、平山先生は、この自作のほか、いわば平山コレクションというものを築いてこられました。いま中国を巡回しているのは、「平山郁夫のシルクロード世界」ですが、それはどういうまなざしでシルクロードというものを平山郁夫は眺め続けてきたのか、を世界に問う中身の展覧会で、世界的に大きな評価を受けています。

特にそのコレクションの中でもヨーロッパで大きな注目を浴びたのは、先生が集められたコインなのです。

金貨、銀貨、銅貨と3種ありますね。特にシルクロードで通用したコインの大半は穴が開いていません。穴が開いているのは、これは何らかの格好で中国の系統なのです。穴が開いてない通貨の範囲がどの範囲にあったのかということも重要ですが、今までは考古学的にも文献的にも系統をたどることができなかった、その王朝の姿がコインによって一部見いだすことができるというので、平山郁夫シルクロードコインの収集は非常に有名なのです。大英博物館でも一度この蒐集コインをめぐって学会が開かれたこともありましたが、そのおりにも高い評価を受けました。そういうコインも今回展示されていますので、じっくりご覧になっていただきたいと思います。

今、中国を巡回しています出品物の中心は仏像ですが、敦煌ではその前の一ケースに非常に面白い像を陳列しました。ギリシアとローマとパルティアのものです。異なった3つの世界がそのワンケースの中に出会っているのです。本当に文化の出会い、シルクロードの現場のどよめきが聞こえるような、そういう展示がワンケースの中に収まっています。そういう逸品が出せるのも、平山郁夫コレクションの非常に大きな魅力です。ほんの一部しか出ていませんが、だんだんとこれからここ帝京大学総合博物館でこうした展開をしていただけるといいなと思います。



【図38】第38回世界遺産委員会キルギス代表団

これは2002年5月、もう中は破壊され何もありませんが、焼け焦げたカブルの博物館に先生が真っ先に駆けつけられたときの写真です。【図40】2002年の5月のことです。真ん中の白い髪の毛の長身の方が館長のマースーディさんです。私たちの永い友人であります。

これは東のほうの大仏が彫られた崖です。【図41】実に美しい景観です。手前に見える家並みはバザールで、その背後にバーミヤン川が流れています。ここはヒンドウクシュとコーエ・パバという4,000メートル級の山々に囲まれたオアシスで、これら全体が文化的景観として世界遺産に登録されました。川の向こうが畑地です。畑には春になると色とりどりの花が咲いて、地面を多様な敷物に変えます。この色彩の変化もまた文化遺産の中の1つで、バッファゾーンとして保護されています。

最後にもうひとつ美しい話をしましょう。最初に建てられた大仏さまは、東の大仏ですが、真っ暗な夜空になりますと、この大仏の真上に北極星が現れます。ああ、この不動の星を眺め、当時の人はこの星の真下に最初の大仏を刻むことに決めたにちがいない、と私は瞑想しました。日本で言うと、妙見星ということになるのでしょうかけれども、その星のもとに大仏が建立されたとなると、バーミヤンの大仏にぐっと親しみが湧いてきます。

これは掘り出されたばかりの大きなジャガイモを持ち上げる子どもたちの写真【図42】ですが、バーミヤンというところは、ああいう狭い谷なので多くはできませんが、ジャガイモが名産です。でも、ジャガイモというのは元々南米のものでですから、輸入品ですよ。これはつまり南米からペルシアにもちこまれ、ついでペルシアからアフガニスタンへともちこまれものだと伝えられています。バーミヤンは特に高地で乾燥地なので、イモの質が非常に高く、したがって高価で取引されます。だから、こんな立派なジャガイモはこの人たちの口には入らないのです。村の人たちはクズイモで頑張るということです。

これでおおかたの映像は皆さんにお見せしました。アフガニスタンの仏教遺跡をもっとたくさんお見せしたかったのですが、これはまた次の機会に、ということにさせていただきます。



【図40】



【図41】



【図42】

※追記

2021年8月、アフガニスタンはふたたびタリバンが政権を握り、いま混乱のさなかにあります。〈銃とムチ〉で国を治めることはできません。私たちがまなざしをこの国に対して注ぎつづけることこそ、人びとの心の糧となるにちがいません。

※本稿に掲載した平山郁夫先生に関する資料は、すべて平山郁夫シルクロード美術館に所蔵されているものをお借りいたしました。(編集・発行者より)

エミシ研究講座

第1回 古代蝦夷社会の実像

岩手大学平泉文化研究センター客員教授 八木 光則

《実施日 2019年10月26日(土) 於 帝京大学ソラティオスクエア S 011教室》

はじめに

今日は「古代蝦夷社会の実像」ということでお話をさせていただくわけですが、蝦夷という漢字、画面のほうには漢字と平仮名が書いてありますけれども、平仮名がなければ皆さんは普通何とお読みになるでしょうか。多分「えぞ」と読まれると思います。蝦夷というのは、江戸時代には、一般的には北海道に住むアイヌのことを言っていました。そして、北海道のことは蝦夷地と言いました。北海道という地名については、今年でちょうど150年になるでしょうか、明治2年に北海道という名称が付けられました。それまでは蝦夷地と言われていました。いずれにしても、この字を当てて「えぞ」と読んでいたこととなります。江戸時代もそうですけれども、明治、大正、戦後もしばらくは、みんな「えぞ」と読んでいました。

ところが、だんだん歴史の研究が進んでくると、昔は「えみし」と読んでいたのではないかという説が一般的になってきたわけです。現在いわれているのは、古代においては「えみし」と呼び、中世になってから「えぞ」と呼ぶのだということです。基本的にはそういう違いが一般化しつつあります。今日は、古代のことを扱いますので、「えみし」という読み方で進めたいと思っています。

今日お話しする内容として、2つのテーマを掲げました。1つ目は、蝦夷社会というものが成立する前の東北地方とはどういう地域だったのかということをお話します。

2つ目に、蝦夷社会の成立についてお話します。蝦夷社会というのは、実は1つではありません。複数の文化を持った、実態が複雑なものが蝦夷社会です。大きく分けると南部と北部に分かれます。そこで、南部蝦夷社会、北部蝦夷社会ということで分けてお話をします。その中でも特に蝦夷として特徴ある文化がみられるのは北部蝦夷社会です。今日、展示でご覧になったと思いますが、赤い土器が出るのは北部蝦夷社会です。そういうことについてお話します。

もう1つは、今、展示している赤い土器が、東北から関東へやってきた人たちによって作られたのだという展示内容になっておりますけれども、蝦夷社会が成立する過程において、関東の果たした役割は何なのか、関東との交流はどうだったのか、そのようなことについてお話をしたいと思っています。蝦夷社会の中でも、どちらかというと始まりの部分を中心にお話をしたいと思います。

1 東北南部の古墳時代

【資料：本誌150ページに掲載】

まず、蝦夷社会ができる前の東北南部はどうだったかということから始めます。蝦夷社会が成立する前の時期というのは古墳時代になります。東北地方は南と北にわかれていました。南の地域、今の県域で言いますと、福島・山形・宮城県となりますが、その地域は前方後円墳が造られた地域です。ご存じのように大阪の伝仁徳天皇陵に代表されるような前方後円墳が造られたわけです。あそこまで大きくはないのですが、百数十メートル規模の前方後円墳も造られたりしています。前方後円墳体制という、日本列島、南は九州の鹿児島まで、北は福島・宮城のあたりまでに、日本列島の大半を支配した大和王権、実際には大和王権も絶対的な力を持っているわけではなくて、各地の有力者のネットワーク、連合によって成り立っていたのが古墳時代だといわれています。そのネットワークの中に東北の南部は入っていたのです。しかし、古墳時代の後期、世紀で言うと6世紀ぐらいになりますが、その頃になりますと、仙台平野、今の仙台市のあたりから北になると、前方後円墳が造られなくなってしまいます。そこに大きな画期があります。

お手元の資料1ページ(本誌150ページ)にもありますが、東北地方の前方後円墳を時代順に並べたものです。大きく左ははじめに前期・中期・後期と書いてあります。前期は、この時代でも古い段階ですけれども、宮城県、山形県、福島県では、大体こういう前方後円墳が各地で造られていました。大きいのは仙台平野、今の仙台市にあるような百数十メートルの大きな古墳が造られました。それから、福島県の会津のほうです。そういう形で、各地で造られていました。

ところが、中期に入るあたりで白くなってしまいます。なぜか造られなくなってしまいます。関東や近畿地方のほうは継続してあるのですが、東北地方は空白の時代になります。この原因についてはいろいろ考えられると思いますが、1つには気候の寒冷化があります。古墳時代というのは全般的に寒い時期といわれ、古墳寒冷期と呼ばれています。そういうことが影響して農業生産があまりうまくいかない。それによって、古墳を造るだけの地域の力というものが衰退したと考えられます。

それが、中期の終わりぐらいから復活し始めます。ただし、前のように大きい古墳ではなくて、小さくなってきます。特に下の四角の前方部が小さくなっていきます。帆立貝のようなので、帆立貝式古墳と言ったりします。前方部で死者を送るための葬儀を行うのですが、大きいとそれだけ大きな葬儀が

行われますし、小さくなると葬儀が小さくなってしまいます。古墳自体が小さくなる、前方部も小さくなるということで、前期、古い時代にみられたような活力は下がってしまっている時期になります。それでも一応各地に造られます。

岩手県に1つだけ角塚という古墳が造られたのもこの時期です。規模は小さいのですが、一番北のほうに、今まで宮城県が限界だったのが、岩手県にも造られます。

その後、だんだん空白が北のほうから増えていきます。古墳時代の後期は6世紀を中心とする時期ですが、このあたりで仙台平野でもなくなってしまいます。あるのは仙台より南、宮城県の南部です。宮城県南部というのは、福島県から北に流れる阿武隈川という川があります。その川の河口部分にはこういう古墳がありますが、それより北は6世紀の時期にはなくなってしまおうというのが大きなポイントになります。

先ほど言いましたが、この時代は古墳寒冷期です。縄文時代以降、最大の寒冷期で、期間も長いものでした。古墳寒冷期の特徴は、もちろん寒い。低温です。低温ですけれども、雨も多い。そして、雨が多いと洪水が起きます。今年も台風が日本列島をだいぶ襲いまして、各地で大きな被害を出していますが、そういう洪水が起きて、農業には不適な気候になります。おそらく東北北部で最もこういう現象が深刻に出たのだらうと思います。

2 東北北部～北海道中央部の古墳時代併行期

【資料：本誌151ページに掲載】

お手元の資料2ページ（本誌151ページ）気候変動の図は模式的に書いたものですが、弥生時代も寒い時期です。ただ、少し暖かくなるような時期もあって、寒暖の差が繰り返してくるような不安定な寒冷期です。全般的には寒いのですけれども、不安定な時期でした。それが古墳時代になりますと、ずっと寒いのです。皆さん方もそうだと思いますが、1日～2日寒くても、大して感じませんよね。それが1週間～10日続く。暑さもそうです。続くことが、大きなダメージを与えます。そういうことで、この時代を古墳寒冷期と呼んでいます。

その後、古代の飛鳥時代、奈良時代、あるいは平安時代になると暖かくなります。平安時代の後半になると少し落ち着くのですが、また鎌倉時代になると温暖気候になります。そして、また寒くなります。江戸時代の後半には小氷期と呼ばれる気候になります。この時期には全国的に各地で飢饉（ききん）が頻発したりします。そういうのは、こういう寒冷の気候も影響しているということになります。

そういう寒冷の時期に、人々はどのような生活をしていたのでしょうか。縄文時代以来ずっと日本列島で一般的な住居の形態は竪穴住居でした。竪穴住居を造って、そこにある程度の期間定住するというのが普通でした。しかし、この寒冷期の東北北部あるいは北海道では、住居がなくなります。それは定住ができなくなってきたためです。遊動生活にならざるを得なかったのです。

遊動生活とは何かというと、遊び歩いているわけではない

ですね。遊牧民の「遊」のイメージですが、狩猟のために獲物を求めて各地を転々として回る、テント生活をするような生活です。そういうものによって変わっていったと考えられます。ですから、農耕も行われなかったのです。

続縄文時代というのは、字のとおり縄文時代が続いた時代です。本州や四国、九州では、縄文時代の次には弥生時代、古墳時代と続いていきます。稲作、あるいは鉄の道具が使われ始めるとか、そういう時代が変わっていきませんが、北海道はそういうものがない。弥生時代になっても水田を作ることにはなかったし、鉄の道具も作られることはなかったということで、続縄文時代という独特の時代区分になっています。その地域で作られた続縄文土器のスライドを後でおみせします。そういう北海道に特徴的な文化要素が東北北部にも入ってきた。

遊動生活だったとお話ししましたが、居住の跡が少しみつかっています。資料2ページの下図面をご覧ください。左側が岩手県の岩泉という町、盛岡よりも少し東、太平洋側のほうに行った、北上山地という山の中にある地域です。そこに豊岡Ⅴという遺跡があります。2～3メートルぐらいの円形の住居のようなくぼみが発掘されました。真ん中に火をたいた炉の跡がみえます。3メートルぐらいの規模は竪穴住居としては小形の部類です。ほとんどは4～5メートル、あるいはもっと大きいのは、10メートル近くのものもあります。豊岡のものは非常に小形です。また、多くの竪穴住居には柱の穴があるのですが、ここには柱の穴はありません。ですから、これに屋根をかけるにあたって、おそらく細い簡単な斜めの柱、垂木のようなものであったと考えられます。このような例は数多くはありません。

もう1つ、札幌のK135という遺跡です。そこでは、五角形で結ぶことのできる柱の穴がみつかりました。形は正五角形ではありませんが、そのように柱が並んでみられます。これが5本柱のテントだらうと考えられます。まわりにみえる赤いものは何かというと、炉の跡です。この中にはいろいろな動物の骨、鳥の骨なども入っています。ですから、寝たりするのはテントの中、それから食事を作ったりするのは屋外の炉のところで、その横で食事をしていただけです。

テントですから、おそらく毛皮の幕を張っていたのでしょう。細い木を5本くらい担いで、毛皮を持って、移動をしながら狩猟などを行っていたのだと考えられます。そういう世界は、どちらかというと縄文時代よりも前の旧石器時代に戻ったような生活形態です。

3ページ（本誌152ページ）の右上の図は、黒曜石の石器です。ご存じのように真っ黒く、ガラス質の、割りとシャープな石器です。そういう石器が入ってきます。北海道には十勝のほうに黒曜石の大きな産地があります。ですから、縄文時代から、道内は比較的黒曜石を使った石器が多いのです。ところが、東北地方はあまり大きな産地がないので、普通は頁岩（けつがん）と呼ばれる別の種類の石を使って石器を作っていました。そういう地域で、なぜか黒曜石がよく使われるようになってきます。

黒曜石の石器は、一つ一つは刃の部分が丸くなっています

ね。これらは毛皮の革をなめす、皮なめしの道具として、油脂をかき取るスクレーパーとして使われたのではないかとされています。各地から結構出ています。

次に墓についてお話しします。土壙墓（どこうぼ）というものがあります。これは何かというと、円あるいは楕円形に穴を掘ります。深さは浅いと20～30センチメートル、深いと1メートルを超えるようなものもありますが、そういう穴を掘ってお墓にする、それを土壙墓と言います。この時代、住居はみつからないのですけれども、お墓だけはみつかるのです。

墓は東北北部も北海道も同じような形でした。しかし、細部では少し違ってきます。3ページ下の図は、北海道と東北北部を比較した図です。北海道が左側、右側が東北北部です。似たようなお墓ですが、一番古い段階では、北海道は丸く、底に施設は造っていません。東北北部では少し楕円になっていて、底に小さな穴が2つあります。これは何かというと、柱を立てるための穴です。おそらく墓標を両側に立てていたと思われます。そういう墓標を立てるという風習は、江戸時代のアイヌの墓でも残されています。ただ、1本です。

次の段階には、脇に穴を掘って、土器を2つ重ねて納めるようになります。2つの土器を、ふたをするように納めたものです。供物として何かを中に入れていたのだと思われます。ただ、北海道はそういうことをしていません。その後の時期も土器を2つ並べている。この段階も、北海道ではあまりそこまでやっていない。

このように、同じ土壙墓ですけれども細かくみると若干違います。東北北部と北海道では造り方が少し違うわけです。ですから、例えば、北海道の人が津軽海峡を渡って北部にやって来て、そこで亡くなって葬られたのではなくて、もともと東北北部にいた人が亡くなったときに、この地域で埋葬されたのだらうと考えられます。そういう意味では、北海道の人たちは、北海道から東北北部にどんどん人が移って来たという説がありますが、どうもそうではないらしいということが比較してみると分かります。

この時代は古墳時代になっていますから、土器には基本的には文様が付きません。縄文時代や関東の弥生時代は文様が付いたりしますが、古墳時代になると文様はほとんど付きません。ところが、北海道の続縄文土器というのが東北にも影響を及ぼして、文様がある土器が作られました。東北の人が作ったのだらうと思われます。

東北北部は北からの影響が強いようにみえますが、南のほうからもいくつかのものが入っています。その例が鉄製品です。3ページ中央の図は、鉄でできた鎌です。今の鎌とは形が少し違いますが、下の部分が刃になっています。さびが付いていますので、表面がざらざらしてみえます。鉄の道具というのは、当然自分たちで生産するわけではなくて、南の社会から持ち込まれたもので、毛皮との交易をして、こういうものを手に入れていたと考えられます。

このように、東北北部は南からの物の流通はありますが、どちらかというと北との交流が顕著にみえます。ですから古墳文化の中に東北北部を入れずに、二者択一的に続縄文文化

ということも言われています。ですが、人がどんどん入れ替わって文化のはざまのようにとらえるのではなく、古くからそこに住んでいた人々を主体的に捉える見方は歴史の視点として大事にしていきたいと思っています。

3 蝦夷社会の成立

【資料：本誌153ページに掲載】

古墳時代、南部では前方後円墳のネットワークの中に入っていました。しかし、6世紀の終わり頃になると、仙台平野から北はそれから外れていきました。北部では、遊動生活という独特の生活形態でした。そういう前提を基に、これから蝦夷社会の成立という2番目のテーマに入っていきます。前段階で南と北での違いは次の時代にも引き継がれ、南部蝦夷社会と北部蝦夷社会に分かれます。

まず、蝦夷というのはいつ頃から登場してくるのかということです。『日本書紀』などにいろいろなことが書いてあって、古い時代から蝦夷という言葉が出てきます。ただ、古い時代の記述は、後から脚色されたものではないかといわれています。はっきりと確証が持てる記録は、飛鳥時代が始まる頃です。敏達天皇という天皇がいたのですが、581年、6世紀の終わりぐらいです。そのあたりで、蝦夷の首領であった綾糟（あやかす）という人が都に行きます。飛鳥の都に行くと、「私たち蝦夷は、天皇に服属します」という宣誓をします。非常に演出じみた儀礼が記録されていますが、そういう服属儀礼を行っています。

同じような時期、8年後になりますけれども、天皇が代わって、崇峻天皇になったときに、蝦夷との国境の策定が行われました。国境を策定したとは書いておらず、「国境を見る」という形です。役人が派遣されて、国境を見ると書かれているのですが、ただ見に行っただけではなくて、国境をそこで決めてくるという意味だと解釈されていますので、このあたりに国境が定まる。二つの年代は非常に近いですよ。6世紀の終わりぐらいです。

6世紀の終わりぐらいというと、聖徳太子が摂政になるのが593年ですから、それに近い時期です。その頃に、蝦夷との関係がはっきりと記録で確認されるようになってくるのです。おそらくこのときに、蝦夷という概念が、中央政府、大和王権のほうにも出来上がってきたと考えられます。ですから、6世紀の終わりぐらいが、蝦夷概念が確立した時期だといえます。蝦夷という民族が確立したのではないですよ。概念、あくまでも頭で考えたもの、政策が確立したということです。

その頃、阿武隈川下流域、宮城県の南側です。前方後円墳が残るあたりです。そこで国造が任命されます。任命は、地元の有力首長が王権側から、この地域を支配してもいいよというお墨付きのようなものです。その代わり、ただ任命されるだけではなくて、王権側のほうにもそれなりの見返りを納めなければなりません。そういう見返り、賦貢を納めることができない首長は国造には任命されないわけです。阿武隈川下流域までは任命されるのですが、それより北、仙台から北

は任命されていません。ということは、任命される条件を備えていなかったということです。つまり、中央に納めるものがきちんとできなかつたということになると思います。国造の任命地域は、古墳時代後期の前方後円墳の地域とも重なっています。つまり、前方後円墳を造るだけの力がなかった、中央へ賦貢を納めるだけの力がなかったのが、仙台平野から北の地域ということです。そして、国境の策定も同時期ということで、この頃が一つの大きな時代の転換期になります。

4 ページ（本誌 153 ページ）の地図は、蝦夷の国境をどこに定めたのかというものです。もちろん当時の地図は残っていません。残っていないのですが、国造が任命された範囲というのは、この線から南です。佐渡も任命されているのですが、福島県の会津も任命されていません。前方後円墳もこの線を境に南のほうだけでしか造られていません。

ですから、この線から北が全部蝦夷社会です。北ははっきり決まっています。全体の地域性からみますと、もう一方の太い線を境に、また別の社会がありました。それを私は南部蝦夷社会と北部蝦夷社会ということで分けています。

北海道は、東半分のほうはよく分からないのです。オホーツク海の沿岸、網走とか、あちらのほうにはオホーツク文化という別の文化が登場するのですが、内陸部などは、実はよく分かっていません。分かっているのは札幌のあたりまでです。当時は、渡嶋、ワタリシマあるいはトノシマと呼ばれていました。北海道独特の時代区分で、擦文（きつもん）社会というものが生まれるのですが、この地域を含めて、これが蝦夷の地域ということになります。非常に広い地域です。ですから、当然文化も違う、住んでいる人たちも違うということになります。

一言で蝦夷と言っても、いろいろな要素がこの中に含まれているということです。あくまでも蝦夷というのは、中央が作った、一つの政治的な概念です。民族や生活、風俗などの違いで分けられたのではなく、あくまでも王権との政治的距離で分けたと考えられます。ここが今日の大きなポイントの1つになります。

王権側は、国境を決めました。国境を決めて、お互いに平和共存しましょうということでは決してありません。今度は、王権側は何をするかということ、自らの支配領域を北へ広げようとしています。

4 ページ（本誌 153 ページ）中央の図は宮城県を中心とした部分を拡大しています。阿武隈川の流域よりも北の地域から仙台、大崎市のあたりです。図が大きいのであまりイメージがないかもしれませんが、宮城県の真ん中あたりだと考えてください。そういう地域に関東からの人たちがどんどん入ってきます。

図にマークしたのは、関東系の土器が出土したところです。関東の土器と東北の土器というのは、作り方が違います。ですから、その特徴で、関東的なものか、あるいは地元のものかということが分かるのですが、赤丸にしたのが古いものですが、これは8世紀ですから、奈良時代ということで新しくなります。いずれにしても、この地域に集中して、関

東系の土器がみられます。人の移動もありますし、あるいは、ものの移動もあります。そういうことによって、この地域に人がどんどん入ってきます。

おそらく王権側、中央の指示があると思います。もう1つは、関東地方も広いのですけれども、最初は房総のあたり、あるいは常陸のあたりが一番近そうな感じですが、そのあたりからどんどん入ってきます。彼らにとっては、中央の指示・命令だけではなくて、自分たちにもメリットがあるから行ったのだらうと思います。そういう形でどんどん人が入ってきます。

そういう中で、青い四角がありますが、そこに国の役所ができています。人を送り込んだり、あるいは、中央の施設を造ったりして、この地域を国家側、王権側の支配領域に組み込んでいくという政策が打ち出されていきます。

4 北部蝦夷社会の形成

【資料：本誌153ページに掲載】

南部の蝦夷社会は、だんだん内国化していくわけです。しかし、北部蝦夷社会は、別の動きをします。先ほどもお話ししましたように、6世紀の終わりぐらい～7世紀の前葉までは遊動生活でした。その後どうなるかということ、竪穴住居を造ります。竪穴住居を造るというのは、一定期間の定住をするということです。おそらく農耕も始まったのだと思います。そして、末期古墳と呼ばれる、蝦夷の墓という意味もありますけれども、そういう独特のお墓も造られるようになりました。そういう意味では、独自の文化です。今までの古墳時代併行の時期とは違う、あるいは南部とも違う独特の北部蝦夷社会を形成していくというように変わっていきます。時期は、6世紀の終わり～7世紀の初めぐらいまでです。蝦夷概念の確立とほぼ同じ時期ですが、そういう変化が北部でも起き始めるということになります。

北部の動きの中で特に注目されるのが、胆沢地域と三八地域です。胆沢というのは岩手県の南の部分です。今で言うと奥州市のあたりです。三八というのは、八戸あるいは三戸という地域がありますが、合わせて三八と地元では言いますが、八戸地域と言ったほうが分かりやすいかもしれません。特にこの2つの地域で古代集落が成立します。その前の時期は、先ほども言いましたように、東北部は基本的に竪穴住居を造っていませんが、この2地域だけはそれ以前の集落が一時期、あるいは細々と営まれていましたが、6世紀の終わりぐらいから増え始め、古代集落が成立していきます。岩手県の南側と青森県の東側ですから、距離的には結構離れています。150キロメートルぐらい離れているでしょう。

この2つの地域で始まるわけですが、実は両方とも同じ形で始まったわけではありません。そこがポイントです。まず、南のほうの胆沢町の竪穴住居は、長い煙道を持つカマドがあります。カマドというのは、煮炊きをするための施設です。火を燃やしたときに、煙をどう処理するか、住居の外にトンネルを掘ります。長いと2メートルぐらいのものもありますが、普通は1～1メートル50センチぐらいですが、そ

う長いトンネルを掘って、外に煙を出す。それを長煙道のカマドと言います。そういうものが胆沢地域ででき始めます。それと一緒に、カマドの焚口（たきぐち）、脇のほうから火をたくのですが、焚口のほうに天井の石として長い石を架けるわけです。後で写真をおみせします。そういう「長礫横架」のタイプが多いのです。

もう1つの三八地域、八戸のほうではどうかというと、ほぼ全てに煙道がない、あるいは非常に短いものです。ですから、2地域とも同じ時期に竪穴住居を造り始めるわけですが、タイプが違うものになっています。

5ページ（本誌154ページ）右下の上の図は八戸の根城という中世の遺跡の一部を発掘したところ、古代初期の竪穴住居跡がいくつも確認されました。方形で6本柱、北側の中央にカマドが造られています。当時はドーム型になっていたのですが、上の部分が崩れてしまいました。ここで火をたくのですが、小さい穴から煙を出します。長い煙道を持たないタイプの住居です。

その下に岩手県の金ケ崎と書いてありますが、これは胆沢の地域です。この地域では、カマド本体からずっと外へ伸びるトンネル式の煙道を持ちます。その先からで煙が出ます。それと一緒に、長い石、川原石ですけれども、そういうものをここに使います。カマドの脇に石があり、この両方に架けるようにして、カマドの焚口を造る。こういうタイプは古い段階、初期の集落をみていくと、胆沢地域に多いのです。

左下の図は八戸の別の集落です。一軒一軒の四角いものが竪穴住居です。このようにたくさん造られました。おそらく2時期か3時期ぐらいにわかれると思いますが、1軒だけではなくて、何軒も集まって集落を造るという形になっています。

その上のグラフは説明しないとなかなか分かりにくいのですが、左側が煙道の形状の地域別変化です。左側の三八から右の胆沢まで順番に棒グラフが並んでいます。それぞれの地域が7世紀の前葉と中葉、2本ずつセットにしています。7世紀の初めと中ごろでどういふ変化があるのかということのを比較しようということで、2本ずつ並べています。

胆沢ですが、赤い部分、これは長い煙道ですが、7世紀の前葉は多くて、青い部分、無煙道や短煙道が僅かにあります。中葉になると、全部赤くなります。一方、三八のほうは、古い段階のものは全部青です。7世紀の中頃になると、少し赤いものが増えてきますが、やはり青いものが多いです。三八と胆沢では両極端な形で出てきています。

それぞれの中間地域はどうかというと、何となくお互いが混ざり合っているような形ですが、岩手～胆沢の北上盆地は赤が多い形ですね。逆に二戸、九戸という岩手県の北部ですが、例えば二戸ですと青いものが、7世紀の半ばになると赤に変わってきます。そのように変化しています。

いずれにしても、胆沢と三八では、タイプが違うということが、これではっきり分かるだろうと思います。

右側のグラフは、焚口上部の礫（れき）の使用で、長い礫を渡していたかどうかです。青い部分が、長い礫を使っている割合です。胆沢のほうをみていきますと、大体半分ぐらい

が青い部分になります。7世紀中葉になると、少し増えます。三八のほうは、初めのほうは赤しかありません。長い礫を使うものはない。それが7世紀の半ばになると増えてきます。長礫横架というのは、長い礫を横に架けるといふ意味で使っています。そのほかにも、長い礫ではなくて、丸い石を3つくらい並べて造る場合も出てきます。こういう形で、青い部分が出てきます。ですから、南の影響をだんだん北のほうも受けてきたということです。いずれにしても、最初の段階では、胆沢と三八では違うのだということがこのグラフでお分かりになると思います。

5 いわゆる末期古墳の築造

【資料：本誌155ページに掲載】

住居のお話をしましたが、次はお墓の話です。いわゆる末期古墳というものが造られます。末期古墳というのは、古墳文化とは少し意味合いが違いますよという含みがある言葉です。それが適切かどうかはまだ議論があるので、ここでは「いわゆる」を付けています。基本的には蝦夷の墓という意味です。

末期古墳には2種類あります。1つは、長方形の土壇です。正面からみた写真では長方形にみえにくいのですが、2メートルぐらいの長さの長方形になっています。そして、周りに溝を掘ります。溝を掘って、その掘り上げた土をこの上に盛ります。ですから、死者を埋葬した後に、円墳にするという形です。こういうのが土壇型と呼ばれます。もう一つは、川原石（礫）を積んで、で埋葬施設の櫛（かく）を造るということで、礫櫛型（れきかくがた）とというものがあります。

末期古墳を大きく分けると、この2つに分類できます。両者とも、家の長か村の長の墓ではないかといわれています。先ほど蝦夷の墓ということも言いましたけれども、全員が葬られるのではなくて、やはりその中で特定の人が葬られたと考えられています。それは住居の数に比べて古墳の数が少ないからです。それが1つありますし、さらに副葬されるものが、みんながみんな持てるようなものではないということで、特定の人、おそらくは家の長のような人たちが葬られたと考えられているわけです。

今私たちの家族というのは大体核家族のイメージですが、当時は家族というのは20～30人で一家族だったと考えられます。竪穴住居も1軒に住むのではなくて、何軒かにわかれて住むような大家族の社会だったと考えられますが、その大きい家族の長がここに葬られたと考えられています。

そういう末期古墳が造られた地域は、6ページ（本誌155ページ）上の図の赤い線から北です。この赤い線は、先ほど言いました、北部蝦夷社会のラインと一致します。南部蝦夷社会には末期古墳はありません。そして、北海道も札幌のあたり、先ほどここに線がありましたけれども、このあたりまでです。なぜか北海道の渡島半島のあたりが抜けています。面白い現象だと思います。

八戸のあたりから苦小牧まで、今フェリーが通っていますけれども、そういうルートを通して末期古墳の造り方が伝

わっていったと考えられます。古代からそのようなルートがあったわけです。あるいは日本海側から奥尻島を經由して石狩湾に入って行くというルートも想像できますが、両地域の末期古墳の時期をみると、八世紀後半以降新しい段階で伝播のルートであった可能性があります。

末期古墳の土壌型ですが、図の左側は盛岡の上田蝦夷森古墳群です。右側は青森県の八戸の北においらせ町というのがあります。奥入瀬の溪流で有名ですが、その下流域のまちなです。その阿光坊というところで発掘された古墳です。両方も同じ縮尺です。

埋葬するところは、同じような大きさですね。ただ、周りの溝が、上田はかなり細くて、小さい。ですから、円墳にしてもかなり小型の円墳です。阿光坊はかなりたくさん土量が出ますから、高く造ったのでしょう。いずれにしても、埋葬部は長方形ですが、ただ土の中に死者を埋葬するのではなくて、板でちゃんと囲って、底にも板を敷いたのだらうと思います。コーナーが丸いところは、今の棺（ひつぎ）のように長方形にはできませんよね。ですから、コーナーのところは立て板を使って処理していたのだらうと思われる。

阿光坊は隅がかなりカクツとなっています。横板できちんと周りを囲むことができたのでしょう。もう1つ、手前側が張り出していますよね。上田は張り出しがないので、阿光坊は長方形にさらに張り出しが付きます。だんだん手前側に浅くなっています。これは、関東あるいは東北南部の前方後円墳の横穴式石室、横穴式石室の場合は死者を埋葬する玄室になっていて、その入口は羨道（せんどう）と呼ばれます。それを模したもので、意識したものではないかと考えられます。上田は北上盆地にあり、阿光坊は八戸に近いです。ですから、先ほど胆沢と三八は違うと言いましたが、この古墳でも少し形が違いそうだとことが分かります。

北上市に岩崎古墳群があります。お手元の資料には載せておりませんが、今のところ考えられる中では一番古い古墳の一つです。この古墳には、同じように長方形の埋葬施設があって、その周りに馬蹄形（ばていけい）の溝を掘ります。そして、墳丘を造っています。この古墳を紹介したのは、古墳の周りを含めて黒曜石がたくさん出てきました。小さく割ったものも含めて、ばらばらとまかれていました。先ほど、黒曜石というのは、蝦夷社会が成立する前のときに皮なめしに使ったと言いました。つまり、そういう道具はこの時期はほとんど必要ない時期ですが、黒曜石をわざわざ調達してきて、墓の周りにまくという行為を行ったわけです。そういう意味では、前段階の名残を色濃くとどめているということで、ここに挙げたものです。

このような古墳が造られ始めたのは、もともとこの地域にあったものが変化してできたのではなくて、関東からの影響を受けて造られたものだという説が、近年、出されるようになってきました。だんだんそれが有力視されるようになってきています。

そういう関東からの影響をどれだけ受けているのか。ほかの部分で確認してみたいということで、7ページ（本誌156ページ）の下に土器を挙げています。先ほど土器の作り方が関東

と東北では違うというお話をしました。東北北部の岩手県から青森県にかけての土器の図ですけども、この中で本当に関東に近い土器というのは、左上の3点ぐらいです。関東系土器（はじぎ）と言いますが、この3点ぐらいです。どこで出たかという、盛岡の台太郎遺跡というところから出てきたものです。2番と3番は、中も外も赤く塗ったものです。

ほかの土器は、東北北部の本当の地元の土器ではないものです。口が真っすぐ上に立つタイプが多い。こういうものは、もともと東北北部にはありませんでした。口が真っすぐ上に立つ関東的なものですが、内面を黒くしています。関東のほうは、基本的に内面を黒くしないので、東北のやり方です。中を黒くするために、丁寧に磨くわけです。ただ粘土をこねて焼くだけでは表面がザラザラしています。それを丁寧に、目地をつぶすようにして磨いていきます。そういうミガキをするというのも東北北部の特徴です。これらには全部そういうミガキがあります。

ですから、形は少し口が上に立つので関東的な要素を残していますが、基本的には地元で作った土器です。かなり現地でアレンジされています。「類関東系土器」と聞き慣れない言葉ですが、そういう意味があります。左上の3点も地元で作った可能性があるかもしれませんが、あるいは持ち込まれたものかもしれませんが、関東に近いものは少ない。ですから、関東の人が直接東北北部に多くやって来て、土器を作ったり、あるいは、大量に直接持ち込んだりしたということになります。つまり、人はあまり大きく動いていないということになります。

6 北部蝦夷社会の成立

【資料：本誌157ページに掲載】

まとめになりますけれども、北部蝦夷社会というのは、竪穴住居が造られて、古代集落が開始され、末期古墳が造られる。末期古墳が造られて、家の長あるいは村の長という階層社会が生まれてきた。そういうことで特徴づけられます。

その成立にあたっては、関東からの影響が大きかったと考えられます。竪穴住居の形というもの、四角く地面を掘って、カマドを付ける造り方が入ってきたと考えられます。竪穴住居は縄文時代からあったわけですから、遊動生活をしてきた東北北部ですが、カマド以外の竪穴住居の造り方は知っていました。ただ途絶えてからもう数百年も経っています。ですから、新たにカマドを取り入れた造り方を学んだのは、おそらく関東からの影響だと考えられます。あるいは、東北の南部、福島のあたりからの影響だと考えられます。

ただ、そのとき、先ほど胆沢と三八のあたりでは、住居の造り方が違うと言いました。煙道が長かったり、短かったり、違うわけです。ですから、影響を受けたもともとこの地域というのは、両地域で違うのではないかと思います。三八、八戸のほうに影響を与えたのはどこかということ、どうやら茨城県の南、あるいは、千葉県の北のあたり、霞ヶ浦を中心とするあたりではないかと最近いわれるようになってきました。今日ご紹介しませんでしたけれども、その地域でも地下を

掘って土墳墓のようにしている古墳があります。そういうものが共通していることなどから、影響を受けたと言われるようになりました。

一方、胆沢のほうは、先ほど長い礫がみられると言いました。カマドに長い礫を架けていたと。そういうやり方は、今確認できるのは、福島県の南部あたりから栃木県にかけてです。栃木県の真ん中あたりでしょうか。ここらあたりで確認できます。

ですから、竪穴住居を造るに当たっては、そういう別々の地域から影響を受けたと考えられます。おそらく古墳なども、そういう形で影響を受けたのだらうと思います。ただし、移民などの大規模な人の動きというのは、あまり想定できません。近年蝦夷というのは、もともと地元には人間ではなくて、古墳寒冷期にみんないなくなってしまう。寒くてみんな死んでしまった。その後、関東中部地方から大挙して人が移住して、蝦夷社会を造ったのだと言う説が出てきました。しかし、それはどうかと思います。

土器も、先ほどみたように、向こうからやって来た人が造った土器なら、もっとはっきり元の関東中部地方の特徴が現れていいはずですが。それが出ていないということは、やはりそういうことは考えにくい。そして、古墳寒冷期の中で多くの人が死に絶えたということはないだらうと思います。

関東からの影響ルートをお話して終わりにしたいと思えます。8ページ(本誌157ページ)の図のようにいくつかのルートが考えられます。まず、太平洋ルート、青の線です。青の線は、先ほども言いましたが、上総中央部から常陸の南、現在の茨城県と千葉県の県境、霞ヶ浦のあたりから、太平洋沿岸ルートを通して、途中おそらくどこかに寄港したと思えますけれども、八戸のあたり、三八、青森県の東側に入っていると考えられます。これが1つのルートです。

次は内陸のルートです。内陸のルートは2つ考えられるのではないかと思います。1つは、①と書いています。①は西側の線で、濃い緑のラインです。下野、栃木県のあたりから、胆沢のあたりに入って行って、それがだんだんと北のほうまで影響を及ぼしたというルートを想定しています。

内陸ルートの②は、黄緑のラインです。実は帝京大学がある南武蔵のあたりからだと考えています。礫槲型、石を積んだ古墳ですが、その原型はどこにあるのかというと、日野市とか府中市のあたりが想定されています。7ページに戻りますが、府中市の古墳と北上市と花巻市の末期古墳の例が並べてあります。類似した形になっていることで、府中市あるいは日野市、あるいはあきる野市、この多摩地域の古墳と、北上盆地の礫槲型はよく似ているということが指摘されるようになってきました。それで内陸ルート②、黄緑のルートが想定されるということです。

そのほかに、今回は全く触れませんでしたけれども、阿倍比羅夫が日本海を北上して、北海道まで行ったということがいわれています。おそらく出発点は新潟のあたりで、そこから渡って行って、鱒田(あぎた)というのがありますが、これは今の秋田です。鱒田が秋田になった。そして、次に淳代(ぬしろ)があります。今の能代は、能力の「能」を書きま

すけれども、当時はさんずいの「淳」という字です。それから、津軽のほうに寄って、さらに北海道へ行ったと。おそらく石狩湾に入っていったと考えられます。そのほかに、北海道に渡る八戸のあたりから苫小牧に行くルートもあります。一部枝わかれて、函館のほうに行くルートもあったようです。

日本海ルートはともかく、蝦夷社会の成立に当たっては、関東からの影響というものがかなり強くあったのだらうと考えられます。ただ、関東地方のいくつかの発信源については、類例をもっと集めて、確実にしなければいけません。今、そういう研究がだんだんみえ始めてきているという段階です。これからもう少ししっかり検証して、地域の特定もしっかりしていかなければいけないと考えているところです。

ご清聴ありがとうございました。

***** 帝京大学総合博物館 エミシ研究講座 ***** 2019.10.26 *****

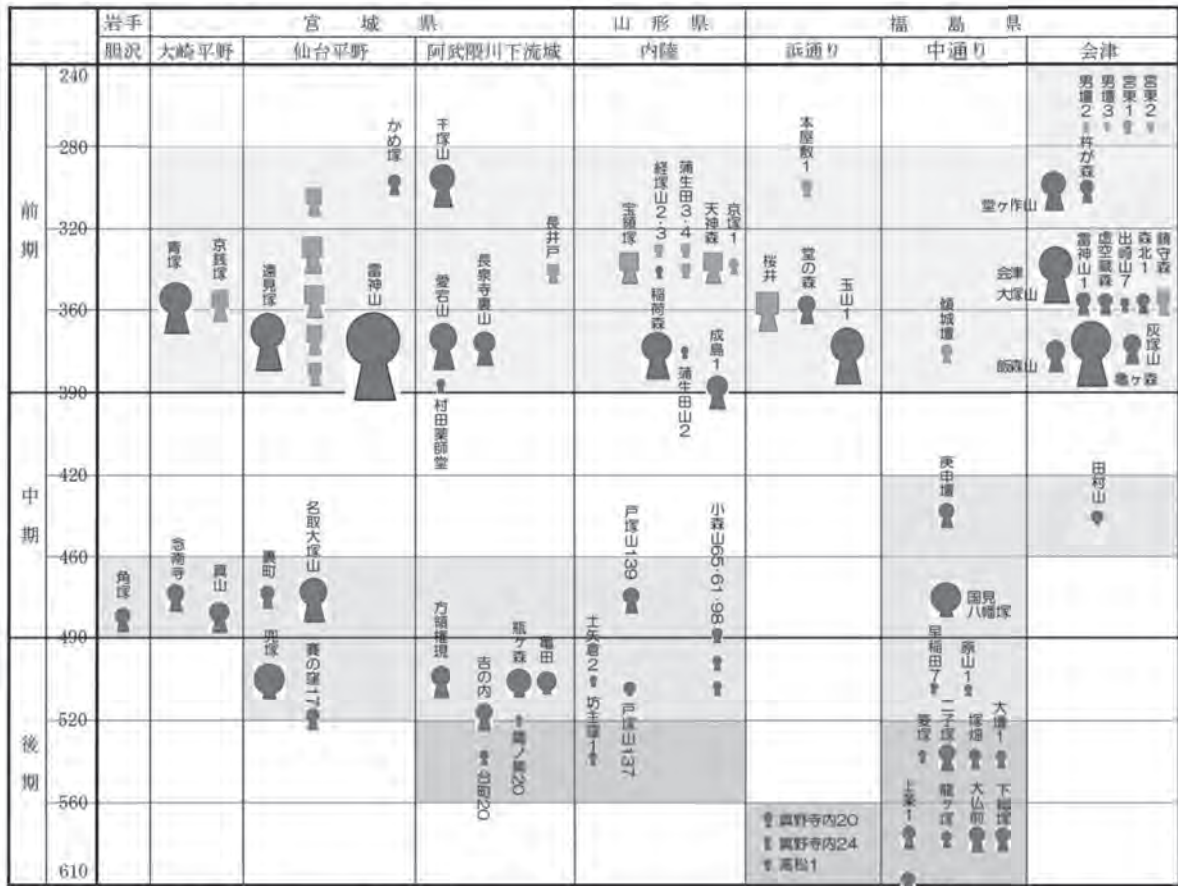
えみし 古代蝦夷社会の実像

***** 八木 光則 *****

1 蝦夷社会成立前の東北地方

(1) 東北南部の古墳時代

1) 東北地方の前方後円墳



※数字はおおよその西暦年。10年単位の誤差あり。

東北地方の前方後円墳・前方後方墳 (『前方後円墳集成 東北・関東編』山川出版をもとに作図)

- ・ 東北地方南部（福島・山形・宮城県）は前方後円墳体制のネットワークの中にいた。
- ・ 古墳時代後期（6世紀）、仙台平野以北で前方後円墳の築造が停止。

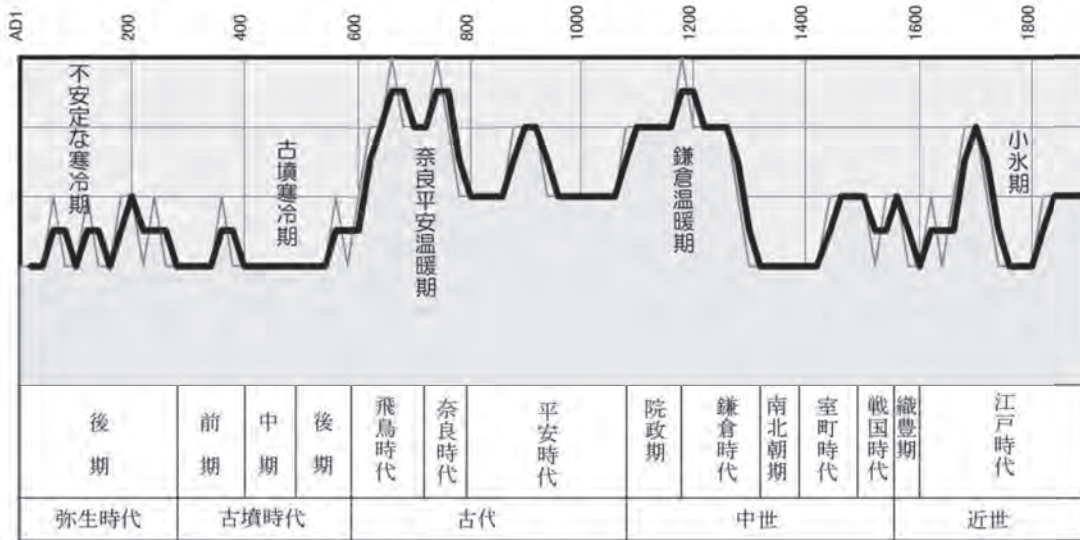
2) 前方後円墳の北限

- ・ 前期（4世紀） 大崎平野 青塚古墳（旧古川市）
- ・ 中期（5世紀） 胆沢扇状地 角塚古墳（旧胆沢町）
- ・ 後期（6世紀） 阿武隈川下流域

(2) 東北北部～北海道央の古墳時代

1) 古墳寒冷期

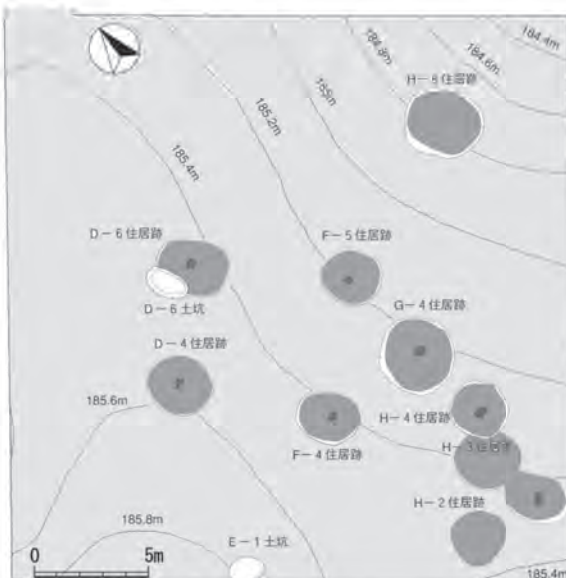
- ・ 縄文時代以降、最大の古墳寒冷期。
- ・ 低温・多雨・洪水で、農業には不適な気候、特に東北北部で深刻。



尾瀬ヶ原泥炭層の花粉分析による気候変動

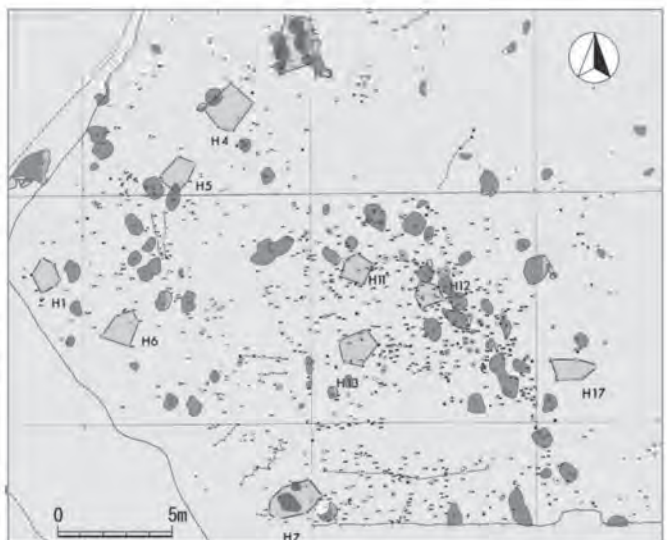
2) 遊動生活

- ・ 竪穴住居跡はつくられず、遊動生活が主体。したがって農耕も行われなかった。
- ・ 土器は東北北部では土師器を主体に「続縄文」土器や黒曜石製石器が入る。
- ・ 北海道では「続縄文」土器が主体となっていた。
- ・ 土壌墓は、東北北部と北海道では細部に相違があり、両地域で葬法が異なる。



岩泉町豊岡V遺跡の竪穴

それぞれの竪穴の中央に炉があり、小形住居か。検出された数少ない住居遺構で、一般的に痕跡を残さないテント状住居であった。遊動生活を物語る。

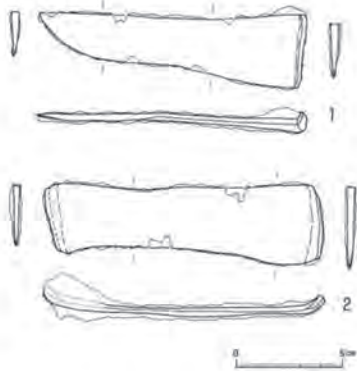


札幌市K135遺跡VII層のテント様柱穴

5本柱で1張のテントを建てた。20張ほどが確認されている。まわりには魚骨や獣骨が含まれる焼土ブロックがたくさんみられ、繰り返し食糧を焼いたり煮たりしたことがわかる。

3) 狩猟と加工

- ・ 石器は黒曜石製のスクレイパー（皮なめし
の脂掻き取り）が多くみられ、皮製
品の製造が行われた。
- ・ 黒曜石は北海道では一般的な石材。しか
し東北で使われることは少なく、黒曜
石を意識して使用している。
- ・ 東北北部の鉄器は鎌・斧・刀子などの農
具や工具が多い。
- ・ 刀などの武器類は7世紀以降になって普
及。
- ・ 鉄製の鎌や斧が墳墓に副葬される



鉄鎌

東北北部の鉄器は鎌・斧・刀子などの農具や工具が多
く、刀などの武器類は7世紀以降になって入ってくる。
(盛岡市永福寺山遺跡出土-4世紀)

4) 墳墓

- ・ 円～楕円形の縄文時代来の土壙墓。
- ・ 規模や副葬品に大きな差がないので、
特定階層の墓ではなく、家族の墓とみ
られる。

4～6世紀の墳墓

円～楕円形の屈葬の土壙墓。北海
道と東北北部は、同じ時期でも土器の
埋納などに違いがある。
土壙内部に木柵を組み、遺体を埋
葬した例もみられる。



黒曜石製スクレイパー

使用痕分析などからも皮なめしに使われたことが確認
されている。北海道から宮城県大崎市まで広く分布。



2 蝦夷社会の成立

(1) 南部蝦夷社会

1) 蝦夷概念の確立

- ・ 敏達天皇 10(581)年、蝦夷の首領^{あやかし}綾糟らの服属儀礼
- ・ 崇峻天皇 2(589)年、蝦夷との国境策定。
- ・ この頃阿武隈川下流域まで国造任命。
- ・ 国造任命地域は古墳時代後期の前方後円墳の地域と重なり、国境策定ともほぼ同時期。

2) 蝦夷への位置づけ

- ・ 古墳時代から東国や畿内との結びつき。
- ・ 農耕定住社会は東国と変わらず。
- ・ 首長の経済基盤の衰退により国造任命外として蝦夷に位置づけられた。(国造は王権への「調賦」が基本的職責)

- ・ 国境外へ国家・東国勢力の進出⇒仙台平野への東国移民の開始。
- ・ 次第に内国化。

＜蝦夷は民族や生活、風俗などの違いで分けられたのではなく、王権との政治的距離によってつくられた概念＞

仙台平野に計画的に造られた集落

関東系土器や無～短煙道カマドをもつ集合集落や柵で囲む柵囲集落が造られ、後に城柵や国府・郡家などの造営につながっていく。



(2) 北部蝦夷社会の形成

- ・ 6世紀末～7世紀前葉に遊動生活を脱し、竪穴住居による定住生活へ移行、いわゆる末期古墳も築かれ、独自の文化をもつ北部蝦夷社会を形成。

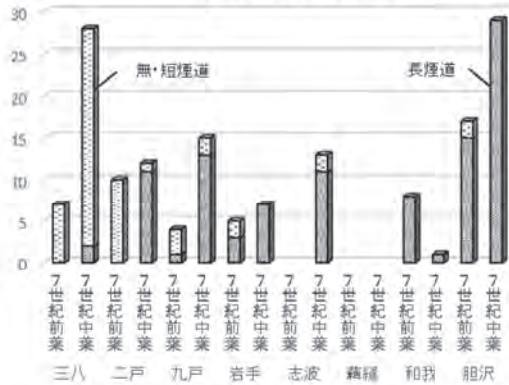
1) 集落の成立

- ・ 胆沢地域(岩手県内陸南部)は古墳時代前期から定住社会。古墳時代後期頃(6世紀前葉)から定住集落が減少、消滅。6世紀末から定住集落を再開。
- ・ 胆沢の竪穴住居は長煙道カマドで、焚口の天井部に長い礫を架けるタイプが多い。
- ・ 馬淵川下流域(青森県東南部、以下「三八」と表記)では限られたではほぼすべてが無～短

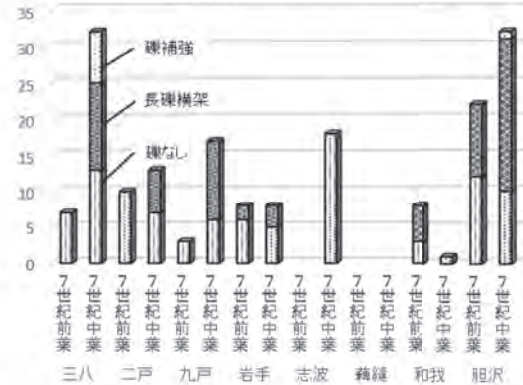
煙道カマド、天井部の長い礫は7世紀中葉になって導入、普及。

- ・ 胆沢と三八を両極にして、北上盆地は胆沢に準じ、三八の馬淵川上流域や岩手県北は三八に類似したカマド構造。中間に位置する北上川上流部の盛岡北部（後世の岩手郡域）は両者の中間的様相。
- ・ 胆沢と三八とは、カマド構造に別地域の影響を受けた可能性。
- ・ 無～短煙道カマドは広く関東地方で見られるもので、関連地域の特定は困難。
- ・ 胆沢の焚口の長い礫は、6世紀後半の福島県舞台、徳定遺跡、栃木県高林遺跡などに類例。

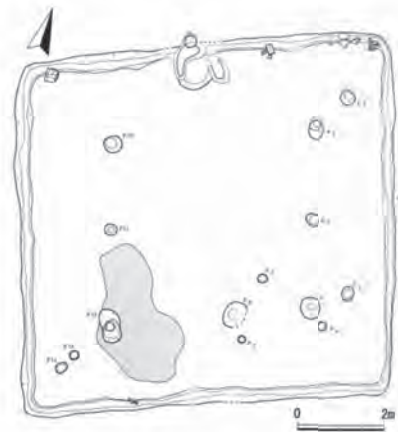
煙道形状の地域別変化



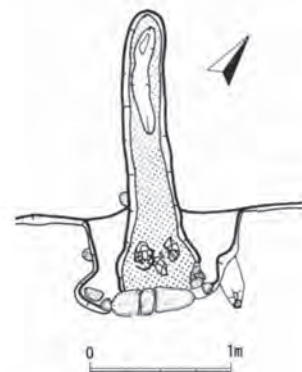
竈焚口上部の礫使用の地域別変化



左: 青森県八戸市田面木平(1)遺跡の7世紀集落
(宇部則保 2007『古代東北部社会の地域間交流』『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館 図6)



右上: 八戸市根城遺跡東構地区 SI95 住居跡



右下: 岩手県金ヶ崎町上餅田遺跡 7号住居跡

(3) いわゆる末期古墳の築造

1) 主体部の2類型

- ・末期古墳は長方形土壇の土壇型と川原石で造る礫塚型に分類。
- ・両者とも家長～村長クラスの墳墓。

2) 土壇型

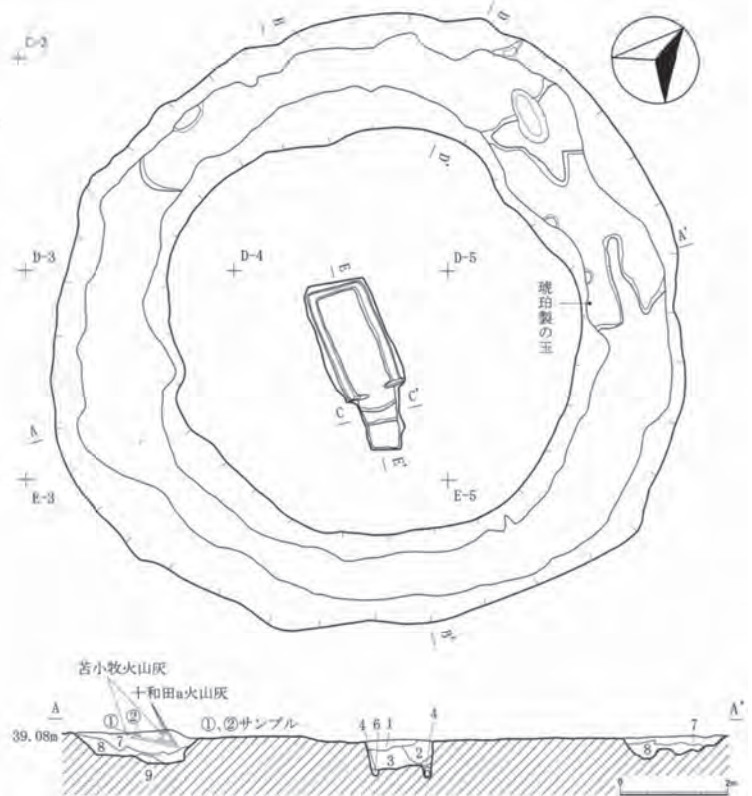
- ・土壇型は6世紀末～7世紀前葉に胆沢地域に近い北上市岩崎古墳群で開始（三八地域のおいらせ町阿光坊古墳群はやや遅れて開始か）。
- ・岩崎では壙底四周に隅丸で短辺が弧状の楕円形に近い溝をめぐらす。
- ・壙底の溝は木槨側板を据えるための溝。ただし層断面で側板痕跡の認められない例が多数を占め、木の皮のような脆弱で朽ちやすい素材か。
- ・岩崎では黒曜石の搔器や剥片が多数出土し、前段階の遺風を残す。
- ・前段階の屈葬土壇墓から関東地方などからの影響を受け、墳丘と伸展葬構造へ変化。
- ・阿光坊では長方形の短辺側が張り出す形状で、横穴式石室の影響を受けたもの。
- ・7世紀中葉には三陸や北海道石狩低地帯に波及。9世紀～10世紀まで築造。



いわゆる末期古墳の分布



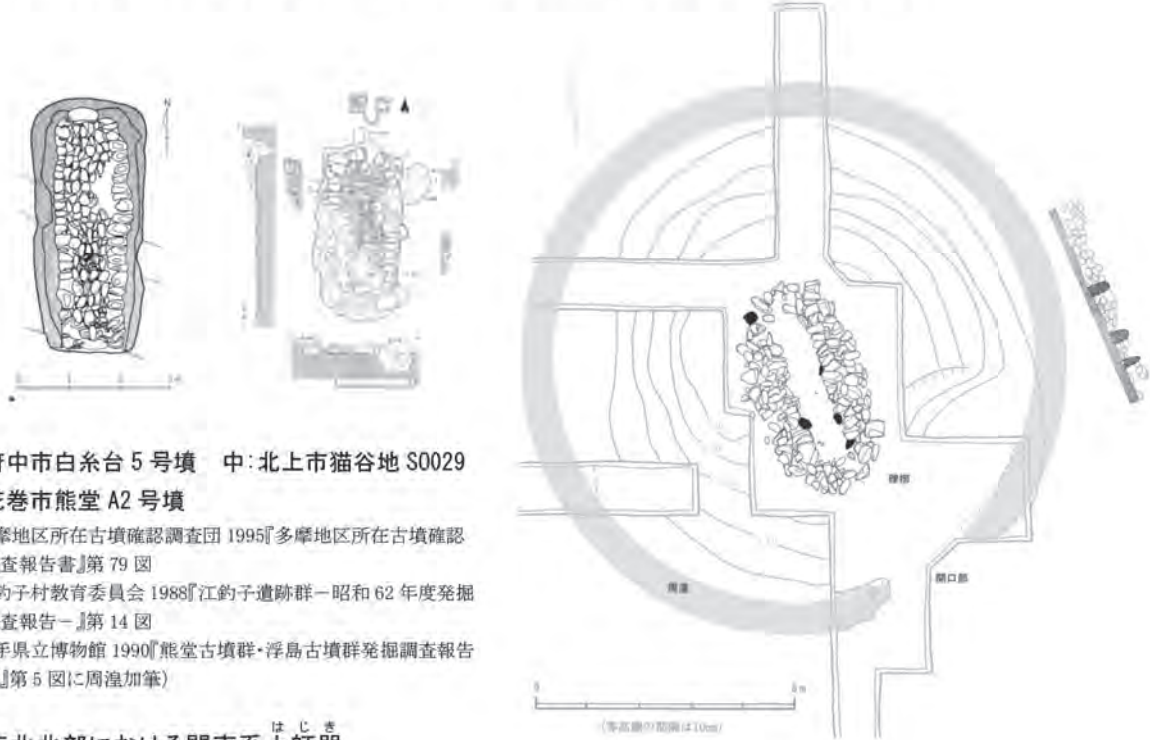
左:岩手県盛岡市上田蝦夷森1号墳



左:青森県おいらせ町阿光坊古墳群A6号墳

3) 礫槲型

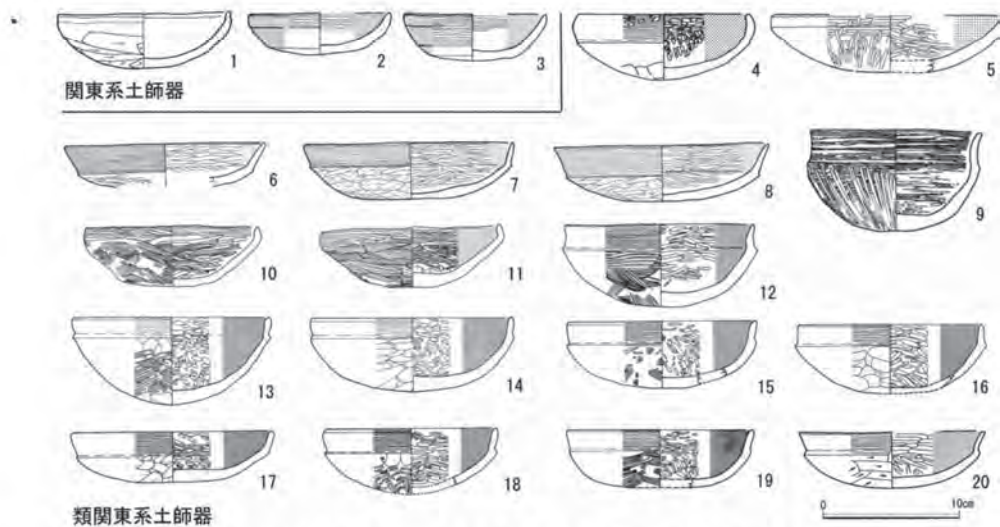
- ・ 礫槲型は北上盆地に分布し、確実な時期は7世紀前半～8世紀中葉(副葬品の土器が少なく、鉄器の年代による)。
- ・ 土壙型とほぼ同時期(やや遅れるか)に開始。
- ・ 関東地方(特に南武蔵-東京都多摩地域)と仙台市で堅穴内に礫を積み上げる類例あり。
(林正之 2015「東北部『末期古墳』の再検討」『古代』第137号)
- ・ 北上盆地では堅穴を伴うものは僅か(猫谷地 S0029)で、直截的な影響ではない。



左:府中市白糸台5号墳 中:北上市猫谷地 S0029
右:花巻市熊堂 A2号墳

(多摩地区所在古墳確認調査団 1995『多摩地区所在古墳確認調査報告書』第79図
(江釣子村教育委員会 1988『江釣子遺跡群-昭和62年度発掘調査報告-』第14図
(岩手県立博物館 1990『熊堂古墳群・浮島古墳群発掘調査報告書』第5図に周滄加筆)

(4) 東北北部における関東系土師器 はじき



関東系土師器

類関東系土師器

- 1 盛岡市台太郎遺跡RA580住居跡 2・3 同RA235住居跡 4 奥州市膳性遺跡E-7住居跡 5 二戸市駒焼場IVA-1住居跡
6~8 八戸市丹後平古墳16号墳 9 おいらせ町ふくべ(3)遺跡10号住居跡 10-11 久慈市中長内遺跡RA526住居跡
12 同上野山遺跡8J21住居跡 13~19 二戸市長瀬B遺跡Ea12住居跡 20 台太郎遺跡RA180住居跡
(4-7世紀前葉 1・5-7世紀中葉 2・3・6~20-7世紀後葉 時期は共伴する在地の土器から判断)

- ・ 東北北部における関東系土師器は僅少。
- ・ 在地系ではない器形は、多くがミガキ調整と内黒処理されており、仙台平野などを經由して在地化が進んでいる（「類関東系土師器」と仮称）。
- ・ 土器でみると移民や大規模な移住は想定することができない。

(5) 北部蝦夷社会成立と関東からの影響

- ・ 北部蝦夷社会成立は、竪穴住居による古代集落の開始、末期古墳による階層社会の成立で特徴付けられる。
- ・ その成立にあたっては関東からの影響が大。
- ・ ただし移民などの大規模な人の動きは慎重に考えなければならない。

関東からの影響ルート

- ・ 太平洋ルートは常総中央部から三八地域へ無～短煙道カマドと張り出しをもつ土壙型末期古墳（6世紀末～7世紀前葉）
- ・ 内陸ルート①は陸奥南部～下野から胆沢地域へ焚口に長礫横架のカマドと土壙型末期古墳（6世紀末～7世紀前葉）
- ・ 内陸ルート②は南武蔵から胆沢～志波へ礫槌型末期古墳（7世紀前半）
- ・ 日本海側は阿倍比羅夫の通ったルート（7世紀中葉）
- ・ 三八から北海道石狩低地帯へ竪穴住居と土師器技法（7世紀後葉）

* 発信源については広範囲に検証する必要あり。



エミシ研究講座

第2回 考古学からみた武蔵国のエミシ

公益財団法人山梨文化財研究所考古第3室長・帝京大学非常勤講師 平野 修

<<実施日 2019年11月2日(土) 於 帝京大学ソラティオスクエア S 011教室>>

今回のテーマで、総合博物館で企画展示をやっていただけるといことで、私のように実際に発掘した者にとっては、非常に光栄で、ありがたくて、嬉しくて仕方がないという状況でした。私の拙い研究を一生懸命若い学芸員たちが咀嚼して、どのように遺跡の状況を描いたらいいのかと質問されたのですが、私に聞かれても分からないとずっと言っていました。彼らなりに一生懸命考え、このようなイラストになりました。こういう姿の村があったのかなと思いを巡らしていただければありがたいと思います。【図1】

私が実際に帝京大学の八王子キャンパスの発掘調査に携わったのは、四半世紀前ぐらいになります。まだ30代の、ばりばりの若造で、財団法人山梨文化財研究所というところに勤務しておりました。実はこの研究所は帝京大学の出資でできた財団でございます。その関係で、「今度、大学で発掘をやれ」と、当時の総長であった沖永荘一先生から言われまして、「帝京大学八王子校地内遺跡発掘調査団」なる調査組織を作り発掘調査に携わったわけです。

つい数年前、帝京大学が創立50周年を迎えるということで、新たに大学構内をリニューアルすることになり、いくつかの校舎を取り壊して、その下にまだ残っている遺跡の調査を公益財団法人山梨文化財研究所および帝京大学文化財研究所としてずっと行ってきました。そういった25年近く前から行ってきた調査の成果をまとめていった結果、このような東北地方の人たちが、この多摩丘陵にいたことが分かってきました。それを今回、皆さんにいかに分かりやすくお伝えし

ようかと思ひ立ち、この展示を試みたわけです。

そういった前置きがありますが、今日、皆様にお配りした資料の内容につきましては、お見せするスライドにほぼ載っています。文字が小さくて見えないという方もいるかと思いますが、私も老眼で見えませんが、一応参考までにしていただければありがたいと思います。中には資料には載っていないスライドもございます。今朝起きて、もう一度スライドの内容を見直して、「このスライドが足りない」というものが数枚ありまして、それにつきましてはご了承いただきたいと思ひます。

では、本題に入っていきたいと思ひます。前回、八木先生の研究講座に出られた方もいらっしゃるかと思ひますが、八木先生は、東北地方の地域社会の成り立ちが、それほど特殊なものではなくて成立して、本州の人たちとそれほど変わらないような状況だったとお話しされたと思ひます。蝦夷(えみし)と呼ばれているのも、地域や生活、風土が特別ではなくて、単に当時の政治支配者、大和王権との政治的な距離によって、支配が及んでいなかったために、支配者側からそう呼んで、彼らを位置づけたという話もあったと思ひます。

日本の古代国家は、皇帝が真ん中において、北狄、西戎、南蛮、東夷という中国の“中華思想”に倣って、天皇がいる中心の北側には蝦夷がいて、南側には倭人がいるという日本型中華思想をつくりあげました。そういう人たちがいるということで、天皇の徳に従う形で彼らを服属させて、天皇自体が彼らを教え導くという考え方で。

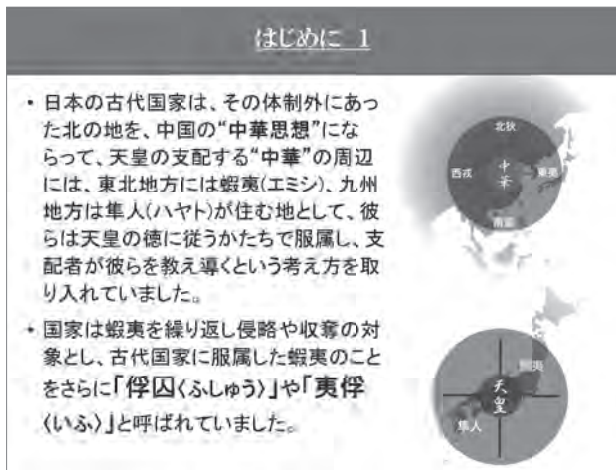
古代国家は、蝦夷を自分たちの領域に入れるために、侵略を繰り返して、収奪の対象にしようとしてきました。その中で古代国家に服属した彼らのことを「俘囚(ふしゅう)」あるいは「夷俘(いふ)」と呼ぶようになりました。【図2】

しかしながら、東北地方というのは、あらゆる自然資源において非常に素晴らしい地域ですので、交易の対象として、本州にはない昆布、アザラシの皮などを入手するために交易相手としたり、あるいは、中国の皇帝のところまで連れて行って、「われわれもあなたと同じように、こういう異民族を支配しているのです」と主張して外交手段にも使っていました。

そういう状況の中で、今回私が注目しておりますのは、8世紀後葉の奈良時代の終わりから9世紀の初めの平安時代の初めにかけての出来事です。それは、律令制国家がこの時期、新たに、今まで



【図1】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図2】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

自分たちの支配領域に入ってこなかった地域を制圧するために、大規模な軍事行動を起こすこととなります。その軍事行動で、延暦20年(西暦801年)に、坂上田村麻呂によって、現在の奥州市、大リーグにいる大谷翔平選手の出身地でもある奥州市ですが、そこあたりまで制圧したということが記録には残っています。

その後、幾たびかの争いもあったのですが、最終的には弘仁2年(西暦811年)に、文室綿麻呂(ふんやのわたまる)という人が現在の青森県八戸市あたりまで制圧したという記録が残っています。そういう状況のことを、文献史学の歴史学者の先生たちは、実に38年間にわたって戦争状態であったということで、「東北三十八年戦争」と呼んでいます。

阿豆流為(あてるい)と母礼(もれ)という蝦夷の首長的な存在である2人が、朝廷軍と戦って、1回目は勝つのですが、その後、朝廷軍の波状攻撃によって結局敗北し、801年に坂上田村麻呂によって制圧されてしまいます。

801年に制圧されるわけですが、その拠点となる施設が造られています。そういう場所を城柵(じょうさく)と呼んでいます。当時の奥州市は胆沢(いさわ)と呼ばれていましたが、ここに「胆沢城」という城柵が造られることとなります。城柵には軍事的な支配組織である鎮守府という機関を置いて、このエリアの統治をしていました。その後、律令国家は領域を徐々に広げていって、最終的には、太平洋側だと現在の岩手県盛岡まで城柵が造られることとなります。

胆沢城は、坂上田村麻呂が築城して、これを造っている状況を見て、阿豆流為と母礼は、「もう駄目だ...降伏しよう。」と決めたといわれています。現在、この遺跡は国指定史跡になりまして、史跡整備事業が行われています。中心施設である正殿など、いろいろな建物がありますが、築地堀(つじべい)の一部が現在、出来上がっておりまして、興味のある方は一度行ってみたらどうかと思います。

太平洋側最北端の城柵、志波城が盛岡市にあります。志波城も国指定史跡になっていて、資料にみられるような整備がされています。これはできたばかりの頃の写真なので非常にきれいです。今はこういう史跡を活用してマスコットキャラクターの「しわまるくん」を作って、皆さんが来るのをお待ちしておりますということです。

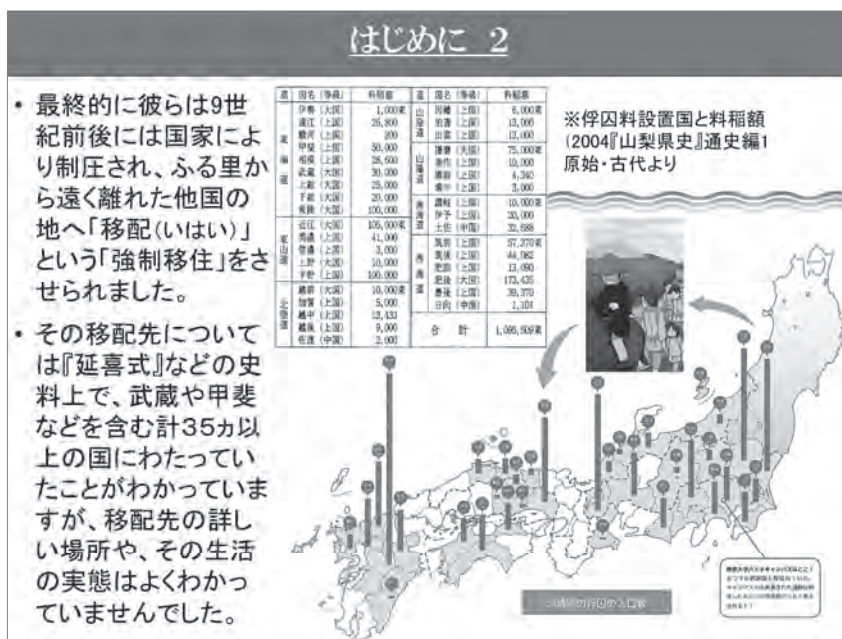
さて、志波城については、盛岡市内を流れる雫石川という、非常に美しい川ですが、その洪水によって、ほんの10年程度で廃城してしまうという状況が記録にも残っていますし、発掘調査でもその洪水痕跡が確認されています。

そして最後の城柵ということで、盛岡より少し南寄りのところに、徳丹城(とくだんじょう)が造られますが、律令制国家による城柵の建設はこれで終了することになります。

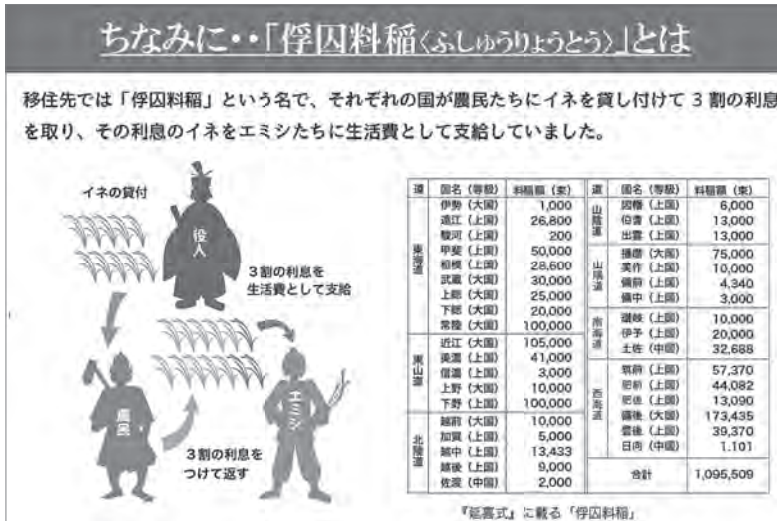
この徳丹城では非常に興味深い出土遺物があります。それは「冑(かぶと)」です。鉄製のものもありますが、これは木製です。木製の漆塗り、非常に美しく、丹念に作り上げられています。甲冑(かっちゅう)を木で作っていたのです。しかもこれが出土したのは井戸です。なぜ井戸から甲冑が……。多分戦争が終わって、平和になって、「水を汲む桶がないぞ」ということで、井戸のつるべとして転用していたことが、この城内で行われていたことが分かります。徳丹城を見に行くと展示されていますので、こちらも一度行ってみると面白いのではないかと思います。

城柵は、単に兵隊さんがいるだけではなくて、この周辺の人たちの動向を偵察したり、あるいは、調略といって、日本の戦国時代でもよく行われた、寝返りをさせるということもやっていました。実際に戦で捕虜になったりするのですが、そういう人たちが、「俘囚」や「夷俘」と呼ばれて、ふるさとの東北の地から遠く離れた、ほかの国へ「移配(いはい)」されていきました。簡単に言えば「強制移住」がされたわけです。

これは展示パネルを使わせてもらっていますが、【図3】



【図3】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図4】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

図上で色が変わっているところに、全てそういう人たちが送
り込まれたのです。

この表は「俘囚料稻(りょうとう)」といって、俘囚を送
り込んだ国々が、彼らを生活させるために計上した予算額が
書かれています。【図4】

当時はイネが税金の対象になっていたので、1,000 束とか
2,500 束というふうに書かれています。当時は出挙(すいこ)
といって、貸し付けた稲穂の量の数倍の利息を取って、それ
をそれぞれの予算として計上していたのです。伊勢、遠江、
駿河など、ここに記されている国々には、確実に彼らがいた
ということが分かります。

当然ながら、この表に載っている武蔵国にもいたことにな
ります。東海道の武蔵は2万8,600 束です。東海道諸国の中
で一番多いのが常陸国です。陸奥国と接しているということ
で、10 万束と桁が違うのですが、武蔵国も2万8,600 束です。
実は私がおります山梨(甲斐)では、小さい国にもかかわら
ず5 万束という記録が載っていますので、武蔵国より大勢来
ていたのかなということも想像されます。とにかく最低全国



【図5】

の35カ所に、彼らが強制移動させられていたことが文献上では分かっていた。

そうした状況で、帝京大学八王子キャンパス内にある遺跡である上原遺跡と竜ヶ峰遺跡で、彼らの存在が垣間見えてきました。これは1997年当時の発掘写真です。【図5】

発掘スタッフしか写っておりませんが、こういう発掘調査を行ったわけです。発掘調査を行った成果をこれから皆さんにご覧いただいて、武蔵国に強制移住させられた蝦夷がどのような状況だったのかをお話しさせていただきます。

奈良時代末～平安時代の初頭にかけては、律令制という政治体制でした。その頃の武蔵国について、簡単に見ていきたいと思います。

【図6】

当時、日本列島は東海道、南海道、東山道とか、よく街道で聞くような名前だと思いますけれども、この頃は、広域行政ブロックの「道制」をとっていました。東海道という太平洋側エリア、東山道という内陸部、東の海道、東の山道というような行政ブロックを持っていました。その中に武蔵国はありました。かつては東山道に属していましたが、後に東海道の編入されます。私がいる甲斐国も東海道に属してはいますが、「こんな内陸なのに、東山道じゃないの?」という感じがするのですが、道としての当時の国道、「官道」といいますが、これが通っているか、通っていないかで所属が決まっていた。山梨の場合は、どうしても海沿いルートで来て、現在の御殿場あたりから山中湖へ抜けるルートが当時の官道でしたので、このような内陸にありながらも、山梨(甲斐国)は東海道に属してはいました。

少し話がそれてしまいましたが、東海道の中でとにかく武蔵国は21郡を有する大きな国でした。帝京大学八王子キャンパスがある多摩地域は広いエリアを有するわけですが、ここが武蔵国多磨郡です。当時の県庁に当たる国府が、現在の府中市、東京競馬場のすぐ近く、大國魂神社の周辺にありました。ここが当時の武蔵国の中心でした。しかし、北のほうは、ほとんど埼玉県であり、南は川崎市、あるいは、横浜市都筑区あたり、一部は神奈川県エリアも含んでいて、非常に広い範囲の国であったこととなります。

そして741年に聖武天皇が仏教による国家鎮護のため、日本各地に建立を命じた国分寺は、国府のすぐ近くにあり。現在の国分寺市にありまして、大方国分寺というのは、国府の近くにつくられるのが全国的な状況です。

また、国府の周辺には、それを支えた街並みが広がっています。考古学では国府関連遺跡といいますが、府中市がきめ細かい発掘調査を1970年代ぐらいから始めていて、街並みの状況が明らかになっています。国分寺につきましても、

【図6】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

国分寺市教育委員会が発掘調査を進めており、全国でも屈指の大寺院であったということが分かっています。また、多摩丘陵は、「横山」ということで『万葉集』にも出てきますけれども、景観的にも立地的にも優れた場所です。

当時、東山道武蔵路という官道が国府域の西側を南北方向に通っていました。先ほど言ったように、武蔵国がもともと東

山道に属していた当時の主要な交通路です。実際に発掘調査では、両側に側溝をもつ道路の幅が12メートルの、現在でいう高規格道路の規模の道でした。現代の高速道路に匹敵するような規模を持つ道路が、直線的に伸びていたのです。これが現在の群馬県太田市あたりまで延びていたということです。その近くに国府が存在していたのです。

これは八王子キャンパスの位置を示した簡単な地図です。【図7】多摩丘陵上の一画にこの大学があり、多摩丘陵上に、上っ原遺跡あるいは竜ヶ峰遺跡が存在したということになります。

この写真は総合博物館から提供していただいて載せたものです。【図8】

昭和40年、帝京大学の八王子キャンパスが開校されたのですが、そのときの写真だそうです。すごいですよね。いつも学生に見せるのですが、「当時はこうだったんだよ」と言うと、みんなびっくりして見えています。ここにわずかに校舎が見えます。こんなところに大学があったと。誰が分かるのだろうかというような写真ですが、おそらく古代もそれほど変わらない状況だったのではないかと思います。こういうところに村をつくって、何らかの生業をしていたのだろうということで、いつも参考に皆さんにお見せしています。

八王子キャンパス周辺には、もちろん素晴らしい古代遺跡がごぞいます。

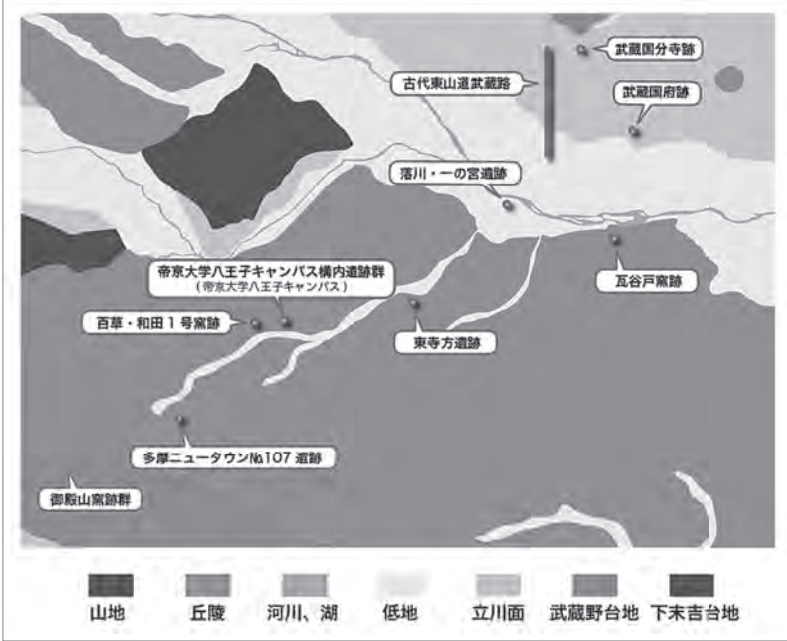


【図7】



【図8】

帝京大学八王子キャンパス周辺の古代遺跡



【図9】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図10】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図11】

これも博物館のパネルですが、非常に分かりやすく作っていますので利用させてもらっています。【図9】

こういう位置関係になります。多摩川があって、左岸側に国府と国分寺があって、多摩川を挟んだ大栗川沿いには、多摩市の東寺方遺跡、稲城市の瓦谷戸、これは窯跡になります。国府や国分寺に瓦を焼いて供給していました。そしてなんとといっても、扇の要の位置にあるのが落川・一の宮遺跡。多摩丘陵を治める要になった遺跡ではないかとも私は考えていますが、非常に大規模な集落遺跡です。

百草・和田1号窯跡が帝京大学の八王子キャンパスのエリア内にあったといわれています。後で出てきますが、この地域は須恵器という焼き物の産地でもあります。南多摩窯跡群という窯跡があるのですが、その一面に属している須恵器を焼いた窯です。

これもパネルからいただいた図で、先ほどの百草・和田です。【図10】本館の西方になります。このあたりを削ったときに壊してしまったようですが、こういう須恵器が出ています。これは形状的には、8世紀の前葉の頃、お寺で使う仏器のようなものではないかと思えます。そういう焼き物を焼いていました。さらに、八王子市鎌水の窯業地帯の中の御殿山窯跡群は、平安時代になってからその生産が非常に活発化する窯でもあります。このような焼き物、須恵器などを焼いています。

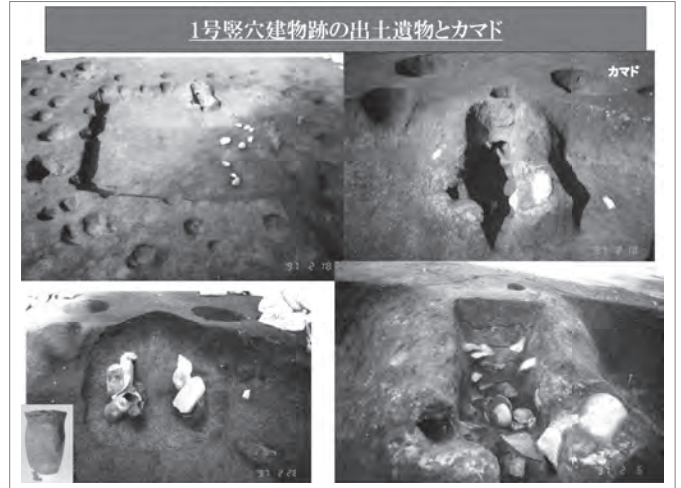
多摩丘陵の中に入っていきますと、多摩ニュータウンNo.107遺跡があります。多摩ニュータウンを造成するときに、東京都の埋蔵文化財センターが調査してきたのですが、東京都埋蔵文化財センターは遺跡名を番号で呼んでいますので、No.107と呼んでいます。そこを掘ったら、写真が悪くて申し訳ないのですが、木製の皿がたくさん出土しています。それらには官人の焼印が押されています。「官」ということなので、お役所に配給するような木製の皿だと思います。

あとは、瓦谷戸窯跡、現在の稲城市にあります。これはすごい窯です。国分寺あるいは国府で使った瓦を供給した遺跡です。

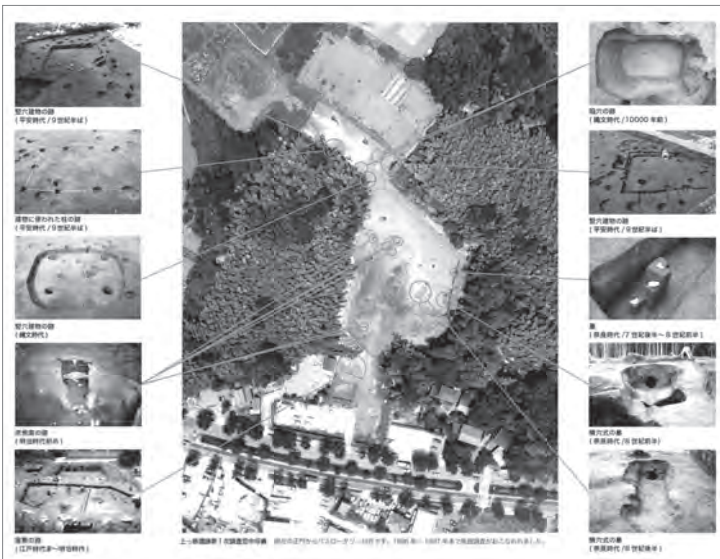
次に、この写真は現在の整備された大学の上空からの写真です。【図11】それに遺跡がどのように広がっていたかというのを示したものです。皆さんが今いるのがこの建物です。この東方のエリアが上っ原遺跡になります。そしてその北側、現在、帝京大学小学校になっているエリアが竜ヶ峰遺跡です。また、上っ原遺跡との境界に大塚日向遺跡というのがありますが、ここは八王子市域になり、八王子市のエリアでは大塚日向遺跡と呼んでいます。実はこの遺跡は上っ原遺跡の丘陵と同一丘陵に存



【図12】



【図15】



【図13】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

在しているのですが、それぞれ八王子市と多摩市では違う名前を付けているので、ややこしいのですけれども、私が発掘した多摩市側の上っ原遺跡は同じ遺跡だと考えています。このように、ほぼ大学施設全体に遺跡が広がっていることが分かっています。

これは私の研究の発端となった上っ原遺跡の写真です。

【図12】 1997年6月に、調布飛行場から、当時はドローン

がありませんから、実機のセスナを飛ばして、上空から撮った航空写真です。貴重です。1回飛ばすとウン十万円かかるという、当時としては高額なお金をかけて撮った写真です。

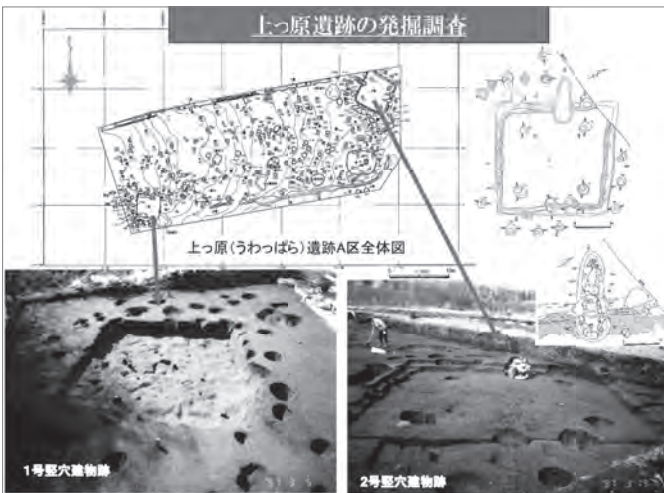
遺跡のすぐ横に見える道が野猿街道です。そしてさらにその横に見えるのが大栗川です。下へ行くと多摩川に合流します。

次に、細かくて申し訳ないですが、上っ原遺跡の拡大写真です。【図13】また展示室でじっくり見ていただきたいと思いますが、先ほどと方向が違いますが、下側が野猿街道になります。右に行けば聖蹟桜ヶ丘になります。遺跡は丘陵上とその斜面、さらに野猿街道沿いの低地部分まで展開しておりました。

当時としては、大学構内に百草・和田1号窯跡があるので、「斜面地に窯が出るんじゃないか」ということで、多摩市教育委員会のほうからも注意するように言われて、調査に当たりました。私たちが調査した、この斜面地では須恵器窯は出なかったのですが、横穴墓、斜面のところを真っすぐに横穴を掘って、防空壕のように掘っているお墓が3基見つかりました。横穴墓というと、7世紀とか、6世紀とか、少し古い段階のものかなと考えていたのですが、実際に出土した土器を見ますと、8世紀前半の横穴墓だったので、これも他地域と違うなという感じがしました。奈良時代の横穴墓の他にはL字墓というお墓も見つかりました。

古いところでは、4,500年前の縄文時代中期の竪穴建物が、丘陵頂上部分の平坦な部分の縁辺部で見つかりました。それと同じ面でも、今回問題となる平安時代、9世紀半ばぐらいの竪穴建物が2棟見つかりました。1号、2号竪穴建物ということで、平坦部の両端で見つかりました。【図14】

もう少し古いところでは、4,500年前の竪穴建物のほかに、縄文時代前期というさらに古い、動物を獲るための陥穴が見つかりました。多摩丘陵を掘ると、こういう陥穴がいっぱい出てきます。丘陵を降りた一番低いところでは、江戸時代末～明治段階の民家の跡が見つかりました。陶磁器の茶わんや徳利などの日常雑器がたくさん出土しました。さらに同じ斜面地では明治時代に炭焼を行っていた窯跡も見つかり



【図14】



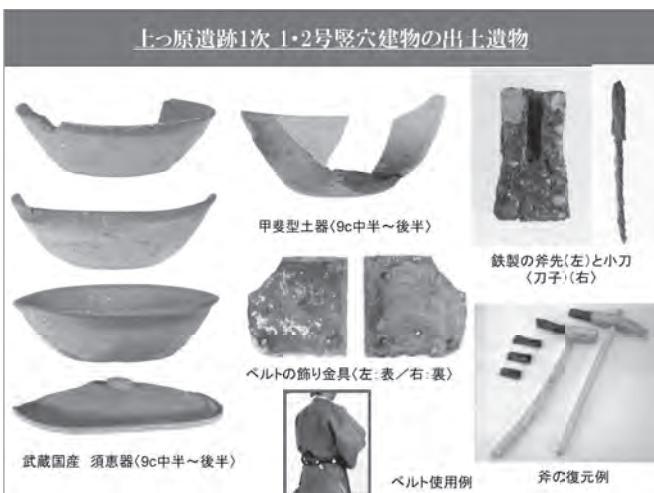
【図16】



【図17】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

います。このように大学構内の土地は、縄文時代から古墳時代、奈良時代、平安時代、江戸時代、明治時代、そして現代はソラティオタワーが建っておりますけれども、様々な土地利用が繰り返し行われてきたのです。

ようやく発掘成果に入っていきたいと思います。これは最初に1997年に見つかった上っ原遺跡の第1回目の調査、第1次調査になりますが、2号竪穴建物です。【図15】私はずっと山梨で平安時代の集落遺跡をたくさん掘ってきました。そ



【図18】

れまでも四百数十軒という竪穴建物が検出された大集落遺跡も掘ってきました。山梨の竪穴建物の状況は、大方把握していたのですが、掘ってみると次のような状況になっていました。【図16】

一辺が6メートルクラスの、比較的大きい、四角い家です。当時、奈良時代末～平安時代にかけての一般的な建物の大きさは、1辺が4メートル前後です。これは6メートルクラスなので、少し大きめの竪穴建物です。これは煮炊きのためのカマドです。このようにきれいに石で組んだ状態で見つかりました。山梨では石組みでこのような施設を造るのは当たり前だったので「なんだ、東京に来て山梨と変わらない状況だな」と当時は思っていました。

しかし、少し違和感がありました。それは火をたいて、その煙を出すための煙突の部分でした。ここから最終的に煙が出るのですが、「やけに煙突が長い」というのが最初に実感としてありました。【図17】当時は東北地方の状況を知らなかったもので、「ちょっと珍しいな」という感じでした。あとは、このウシの骨です。この建物から土器とともに混じって出土しました。ウシの骨といっても歯が中心ですが、こういうものが一緒に混じって出てきました。

それまで私はウマの歯しか見たことがなかったのでウマの歯かなと思っていましたが、ウシの歯でした。ウシの歯は、一見するとウマの歯と似ているので、私は専門家ではなかったので分かりませんでした。これにつきましては、また後で問題を投げたいと思います。

あと出土した土器は、一番左側の列は、武蔵国産で、南多摩窯跡群で焼いた須恵器です。【図18】こういうものがぼつぼつ出てきて、「これは当たり前だな」と思いました。甲斐型土器と書いてありますが、これは私が山梨で掘っていると当たり前に出土する土器です。甲斐国、山梨特有の土器です。これが出てきました。「あれ？」と思っていたのですが、ちょうど土器の年代がよく分かりましたので、9世紀の半ば～後半にかけての土器だということが分かりました。

これは役人が付けるベルトの飾金具の一部です。2つ写っていますけれども、実際は1つです。裏・表の写真なので、実際は1点しか出土していません。飾金具は本来たくさん付いているのですが、そのうちの1つが出てきて、「おや？ こんな山あいなのに、役人に関係した人が関わっていたのかな」と思いました。

これは鉄製の斧先です。本来は木の柄にソケット状に差し込んで使う斧です。私は斧というのはそれほど出したことがありません。「ここでも斧が出るな」ということで、斧を使っているの、木工とか伐採とか、そういうことをこれで行っていたのかなと思いました。

そして須恵器の年代ですが、武蔵国産須恵器について非常に精緻な研究が進んでいます。【図19】先ほど見ていただいた須恵器の状況を見ていきますと、私が甲斐型土器で考えていた年代とほぼ一致します。竪穴建物の年代は9世紀半ば～後半のあたりなのではないかというこ

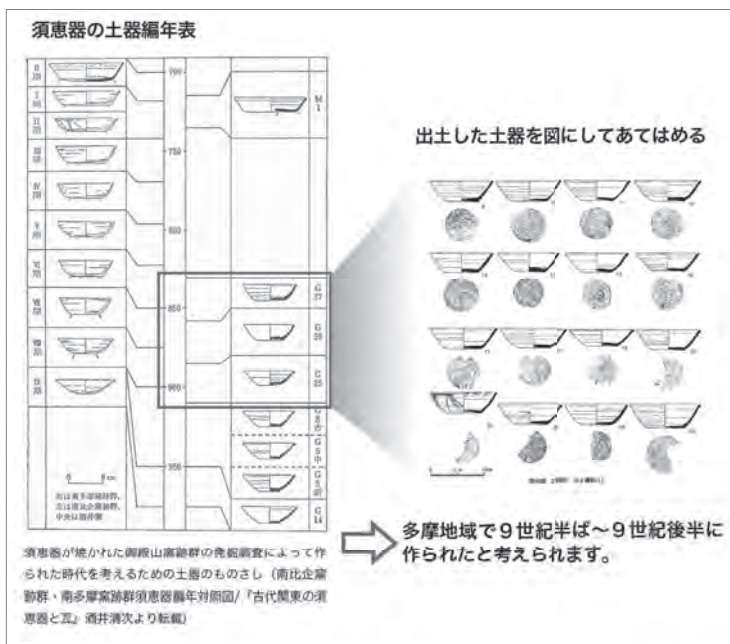
とがはっきりしまして、平安時代のもになります。

これは少し古い時期のものですが、大体この地域を掘ると【図20】のような土師器が出土するのではないかなど当時は思っていました。それが実際にどうだったかという、【図21】のような土器ばかりでした。皆さん、違いが分かりますか。「お茶わん、似ているじゃないか！」と思う方もおられるかと思いますが、われわれは「あれ？ 武蔵国で出るのは土師器の感じと全然違うぞ」と思ったのです。

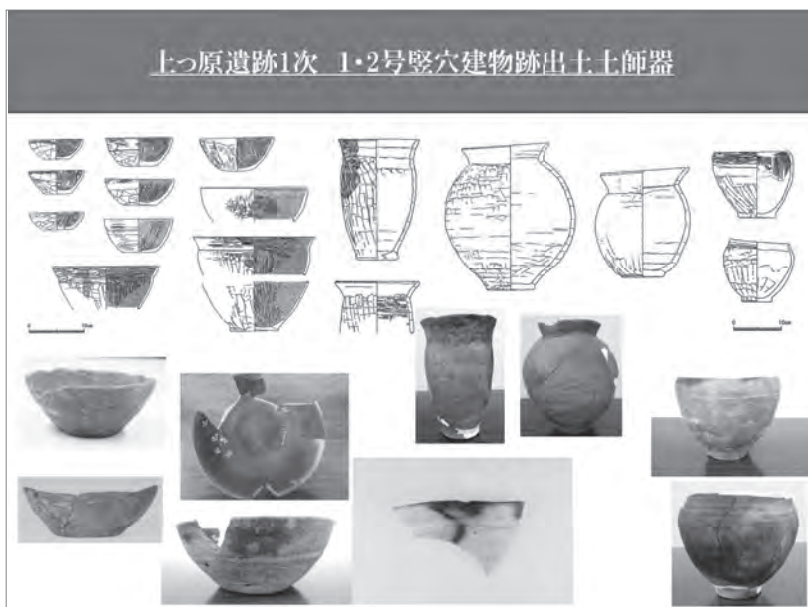
器の内面はテカテカと光って、黒光りしている器です。これは煮炊きするための甕（かめ）ですが、平安時代になると、もっとすっきりしています。これは前代の、いわゆる古墳時代の土器のような古い感じの作りをした甕で、粘土紐を巻き上げて作っていくのですが、それがそのままぼこぼこ残っているような作りで、「ちょっと違うな」と感じたわけです。

その中で、極めつけだったのがこれでした。【図22】いわゆる赤彩球胴甕（せきさいきゅうどうがめ）です。私は通称「赤ガメ」と呼んでいます。土器に赤く塗るという行為は、縄文時代・弥生時代からあるのですが、私が一番不思議に感じたのは、土器の形です。これを見て、考古学をやっている人間だと、「これは古墳時代の土器じゃないの？」というタイプの形をしています。しかし、出てくるものは平安時代の須恵器ばかりです。なぜこういう甕が出てくるのかということで、当時、多摩市教育委員会の担当者の方に聞いてみたら、「これは伝世品じゃないか」と言われました。そのときは、私も勉強不足なので、それを鵜呑みにして、取りあえずその場は過ぎてしまいましたが、ずっとノドに骨が引っかかったような違和感がありました。

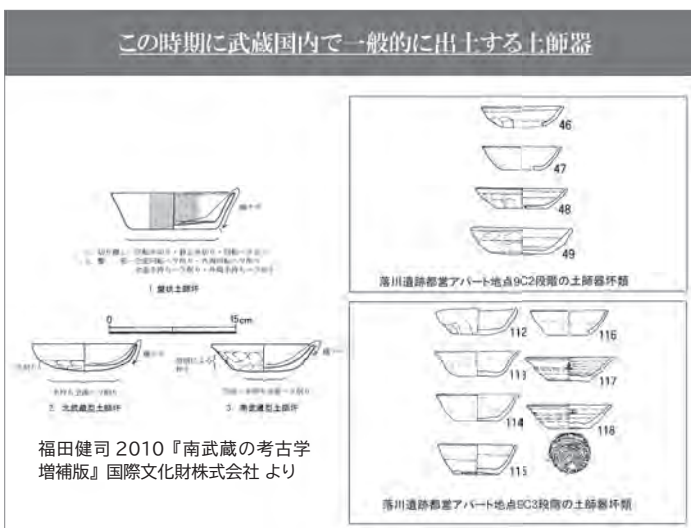
結局、現場が終了して、通常、すぐ発掘



【図19】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図21】



【図20】



【図22】

赤彩球胴甕の故郷はどこか？

- ・この土器の故郷は、現在の岩手県北上市や花巻市を中心とする、当時「和賀(わか)・稗賀(ひえぬき)」と呼ばれた地域でした。
- ・赤彩球胴甕は、8世紀中葉に成立し、9世紀前葉に終焉を迎えます。
- ・赤彩球胴甕は、末期古墳から出土することが多いことから集団のシンボル、アイデンティティ、結束を示す土器であると考えられています。

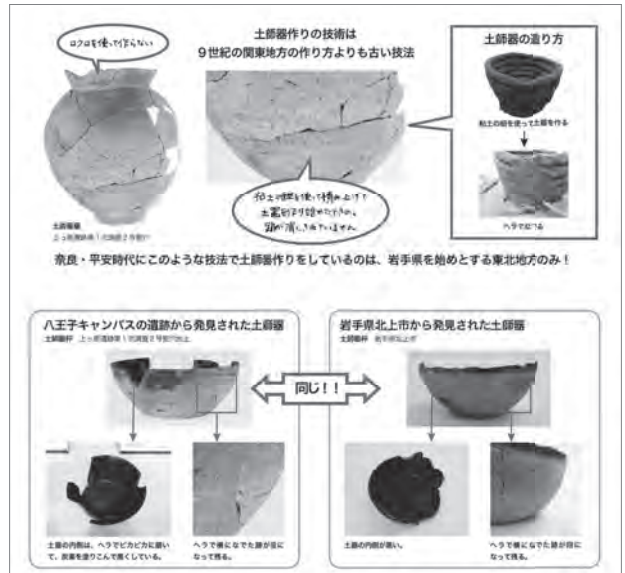
【図23】

調査報告書を発掘者が作らなければいけないのですが、山梨県に戻って、山梨県内の発掘が非常に忙しくて10年近く経ってしまい、多摩市教育委員会から、「報告書はどうになりましたか?」、「報告書はできましたか?」という連絡が入るようになり、これは真剣に取り組みなければいけないと思い、報告書作りにはげみました。

すると、この土器、赤ガメのルーツは、現在の岩手県北上市、あるいは、宮澤賢治で有名な花巻市を中心とする、当時、和賀(わか)あるいは稗賀(ひえぬき)と呼ばれていた地域で主に出土している土器だったことが分かったのです。

【図23】そこで初めて「東北」という概念が私の頭の中で芽生えたのです。

赤彩球胴甕は、第4回の研究講座でお話する北上市の杉本さんが、また詳しくお話ししてくれると思いますけれども、赤ガメにつきましては、北上市では8世紀中葉、奈良時代の中頃に成立して、9世紀前葉、平安時代の最初の頃に作られなくなるという大きな流れがあります。そういう中で見られた土器ですが、9世紀前葉で消えたということにずっと引かかっていた。あの須恵器は9世紀半ばから後葉で、それと同じ時期だとすると、「あれ?」となります。地元で作られなくなってからなのに、どうして赤ガメはあるのだろうという単純な疑問もありましたが、取りあえずルーツはここにたどれるだろうということで、いろいろ考えてき



【図24】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

たわけです。赤彩球胴甕は、北上市エリアではよく出るのでありますが、その周辺も見えていきますと、三陸沿岸地域でもぼつぼつと出ていますし、あと盛岡市や三八という三沢あるいは八戸市エリアでも、このようなタイプの赤彩球胴甕が出ます。日本海側では全く出ません。太平洋側エリアの、せいぜい八戸あたりまでに分布していることが分かっています。それにつきましては、後日の研究講座、杉本さんのお話でもっと明らかになると思います。

要するに、上つ原遺跡で出土した土器群の特徴は、これも学芸員さんがよく作ってくれたなと思いましたが、どう考えても9世紀の関東地方の土器の作りとは違うのだということを示したものです。【図24】粘土紐をこのように巻き上げて作り上げていくのですが、この時代のもは、もっとスマートに、表面を削ったりするタイプのものです。形自体も全

赤彩球胴甕の土を分析する (土器の胎土分析)

八王子キャンパスから発見された赤彩球胴甕は、どこで作られたものでしょうか。この疑問を解明するために土器の(胎)土を分析しました。土器は、天然の粘土を採取して作られます。粘土は、地域によって含まれている鉱物や粘土の量らさなどが違います。このことから、土器そのものの粘土土、土器が発見された遺跡の河などの砂を比べることで、土器がどこで作られたかを明らかにするためのヒントが得られます。

今回は土器を切断し、厚みを0.03mmまで薄くし、それを高倍率用のプレパラートで作り、それを、偏光顕微鏡の偏光装置を使って観察します。鉱物の種類や量、土の粒子をじっくり観察します。

その結果、八王子キャンパスから発見された赤彩球胴甕に使われている土は、岩手県の北上川や和賀川のものではなく、キャンパス付近を流れる多摩川や入間川の砂と似ている事が分かりました。このことから、キャンパスから発見された赤彩球胴甕は、土器をつくる技術を持ったエミシが多摩の土を使って作ったと考えられます。つまり、エミシが多摩に来ていたのです。



【図25】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

然違います。

あと特徴的なのが、内面が黒くなっている、いわゆる黒色土器とわれわれは呼んでいますけれども、黒くする前に、土器の表面を磨いているのですが、土まんじゅうのように表面をピカピカにしてから、土器を焼くときに器の中にワラ材などを一緒に入れて焼き上げると、炭素が付着して中が自然に黒くなるといわれています。そういう土器があるわけです。平安時代の関東地方では見られない古墳時代の土器のような作りのもの、あるいは内面が黒色処理されたものを、9世紀になっても作り続けたのは岩手県内です。赤ガメ以外の土師器類も東北系の作りをした土器群がたくさん出土していてその状況が分かったわけです。

では、赤彩球胴甕は北上市から直接持ち込まれたものなのかということで、土器の胎土分析をしました。【図25】土器は粘土単一で作っているのではなく、いろいろな混ぜ物を入れます。砂を入れたり、いろいろな混和材を入れて作りますが、地域によって土質が異なっていて、花崗岩が多い土地ではそれが粘土の中に入っています。土器を薄く切って分析しました。中に入っている粒子を、顕微鏡を使って、非常にアナログな研究方法ですが、このような分析をした結果、赤ガメは関東の土を使っていることが判明しました。岩手県北上市で出る粘土ではなくて、こちらの関東地方の粘土で作られていることが分かりました。ということは、上っ原遺跡から出土した赤ガメは、こちらの材料、武蔵国の材料で作ったことになります。

次に、赤く塗られた成分、いろいろな顔料があるのですが、鉱物性のもの、あるいは、バクテリア系のものがあるらしいです。いわゆるベンガラですが、これを電子顕微鏡という装置で調べてみると、植物性のベンガラであることが分かりま

した。【図26】パイプ状のものが見えるらしいです。上っ原遺跡から出土した赤ガメの顔料の成分を調べたら、バクテリア、動物性のプランクトンが出たということ、比較試料として岩手県の北上市内から出た赤ガメの顔料を観察・分析したところ、鉱物性のベンガラを使っていることが分かりました。そういうことから、直接持ち込まれたのではなくて、武蔵国で赤ガメが作られたということが分かりました。

何が言えるかというと、向こうのものが直接こちらに入ってきているということではなく、向こうの人がこちらに来て、出先で土器を作ったという考え方ができるわけです。この作り方、仕上がり、形は、どう考えても東北地方でこれを作っている人がここに来ないと作れないと考えました。要するに、ものは東北の直接のものではないけれども、そうした技術を持った人間が来ていることは確かだろうということで、そういうことから東北の人たちがこの地にいたと言えるのではないかと考えました。

私もこれが見つかって、東北の土器だということが分かり、上っ原遺跡以外でもこうした土器が出ているかもしれないと思い、国の研究費を申請したところ、何とか通りましたので、平成27年～29年の3年間にわたって調べました。ところが、赤ガメは東北以南では、まだ上っ原遺跡だけで、ここしか出土していません。なぜか。これがずっと不思議でならないのですけれども、同じような土器文化が直接伝わっているところはほかにはないということです。

さらにこれを考えていきたいと思って、翌年、次の科研費の申請をしたのですが、落とされてしまいました。公費での研究は止まってしまいましたが、今後私費でも全国津々浦々、彼らが強制移住されたところを調べていきたいと思っています。

赤彩球胴甕の土を分析する(赤彩の分析)

八王子キャンパスから発見された赤彩球胴甕の赤は何で塗られているのでしょうか。日本では縄文時代から土器や、建具、建物を彩るために赤色顔料を使いました。その種類はいろいろありますが、多く用いられたのは酸化鉄が主成分の「ベンガラ」です。ベンガラは、鉱物由来のもの、バクテリア由来の「パイプ状ベンガラ」があります。パイプ状ベンガラは顕微鏡であるとパイプ状の粒子が重なっていることが特徴です。

そこで、東北と八王子キャンパスで発見された赤彩球胴甕の表面を電子顕微鏡を使って観察し、どちらのベンガラが使われているかを調査しました。その結果、東北の土器は鉱物性のベンガラの可能性が高く、八王子キャンパスのものはパイプ状ベンガラ使っている事が分かりました。では、その材料はどこで手に入れたのでしょうか。調査を進めると、なんと八王子キャンパスの跡地からパイプ状ベンガラを発見しました。この事から、八王子キャンパスで発見された赤彩球胴甕は、多摩で作られた可能性が高まったのです。

原料の異なる2種類のベンガラがある……

赤根沢の赤岩

A 植物性のベンガラ
青森県青森市赤根沢の赤岩
(写真提供：今別助)

B バクテリア由来のベンガラ
(パイプ状ベンガラ)

キャンパスから発見された赤彩球胴甕の分析

土器を走査型電子顕微鏡で分析

電子顕微鏡の例 (帝京大学国史館研究センター)

キャンパスから発見された赤彩球胴甕

動物性プランクトンのベンガラを確認!
走査型電子顕微鏡 (SEM) で撮影されたパイプ状ベンガラ

A 岩手県北上市内の遺跡から発見された赤彩球胴甕は、植物性のベンガラを使っている可能性が高い。

立花町遺跡出土赤彩球胴甕のベンガラ (SEM)

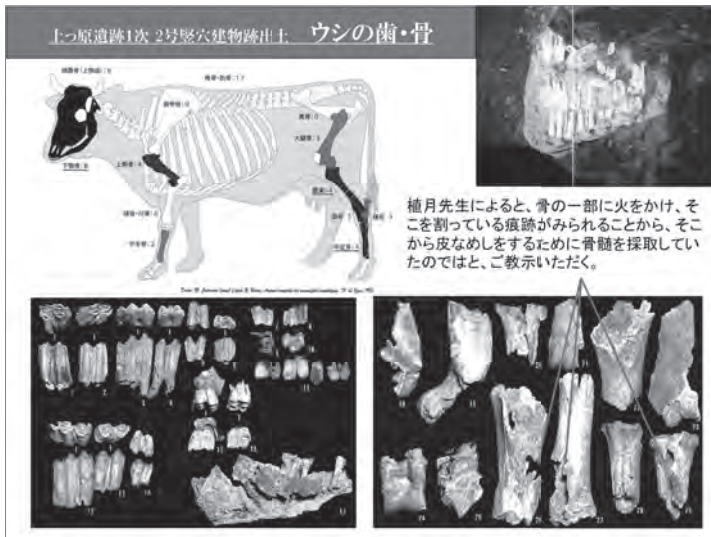
江野子古墳群八幡出土赤彩球胴甕のベンガラ (SEM)

B 赤い土器に使われているベンガラは、八王子キャンパスの近くで採られたバクテリア由来のものを使っている可能性がある。

八王子キャンパスのドブからバクテリア由来のベンガラを発見!

走査型電子顕微鏡でパイプ状のベンガラを確認

【図26】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図27】

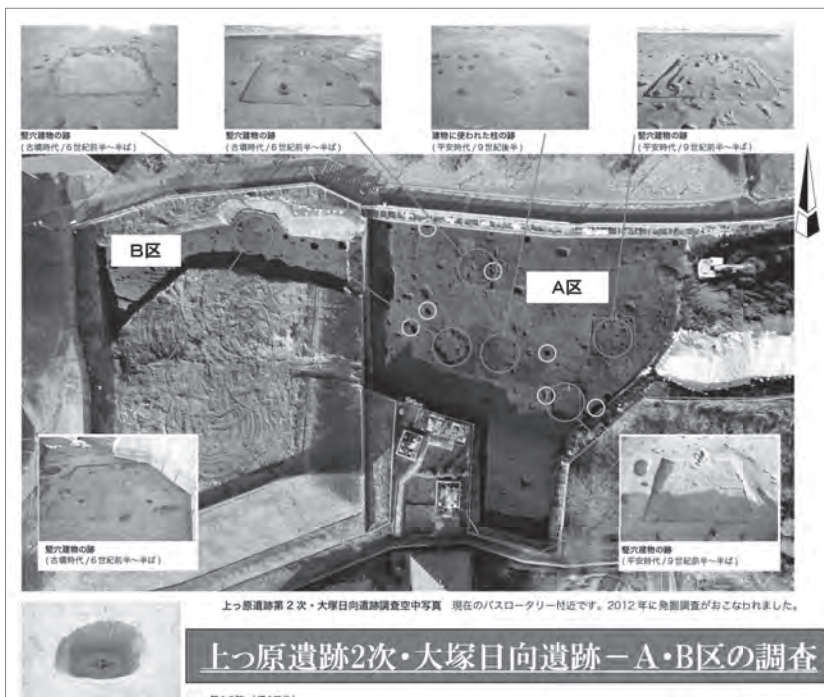
もう1つの問題は、ウシの存在です。先ほど上っ原遺跡からウシの歯と骨が出土していることを紹介しました。こちらの図は肉の部位ではありません。【図27】骨の部位の図です。トーンがかかっているところが、上っ原遺跡から出てきた部位です。頭の部分といっても、歯しか出ておりませんが、下顎の骨が出ています。あとは、前足のすね、肩の部分、後ろ足の片方の部分ということで、現在、帝京大学文化財研究所准教授の動物考古学者である植月学先生に分析してもらったのですが、こちらが歯で、これが足の骨となります。

植月先生はあらゆる動物の骨を分析しており、骨がどういう状態であるのかを分析してくれました。植月先生は、「平野さん、足の骨のこのあたりの一面が局部的に熱、火を受けているよ」と言うのです。火であぶり熱を加えて、その部分を割って骨髓を抽出しているのではないかと言っていました。では、骨髓を抽出してどうするのか。「これはよく皮なめしに使うんですね」と言うのです。そういうことで、単に食べたのではなくて、人為的に、そういうものを抽出しようという意図があって割ったのだと指摘されました。これにつきましては、また後で問題が出てきます。

そうこうしているうちに、大学から、また新しい建物を建てるから発掘して欲しいという要請がありまして、2012年に上っ原遺跡の続きを発掘調査しました。【図28】第1次調査の場所より、ずっと西方になるのですが、ここでも上っ原遺跡第1次と同じような時期の竪穴建物が2棟検出しています。他にも6世紀あるいは7世紀の竪穴建物も検出していますし、縄文時代の陥穴も検出しています。かなり広いエリアを掘ったのですが、平安時代に関わるものは4号、3号の2棟だけです。

これはSB3号竪穴建物です。やはり出土しているのは、内面を黒色処理した土師器と、地元産の武蔵国の須恵器です。出土遺物自体の出土が少なかったためこれだけしかないのですが、あとはカマドです。ここがカマドで三角形に竪穴の外に煙突が伸びていますが、これも第1次の2号竪穴建物と同じように、石をしっかりと組んで造り上げて、しかも、長い煙突を掘っているということです。こちらの関東の同時期の竪穴建物には見られないような造りの竪穴構造をしています。

これはSB4号竪穴建物です。これも大きいタイプで、1辺が6メートルある中型規模の竪穴です。だいぶ崩れてしまっていますが、カマドの部分は石を使っていて、外に煙突が伸びているタイプです。だいぶ傷んでいますが、黒く内面が処理された土師器と、武蔵産の須恵器が出土し、本来の武蔵産の甕の破片も出土しています。非常にすっきりした土器で武蔵型甕と呼んでいます。武蔵関係



【図28】帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図29】

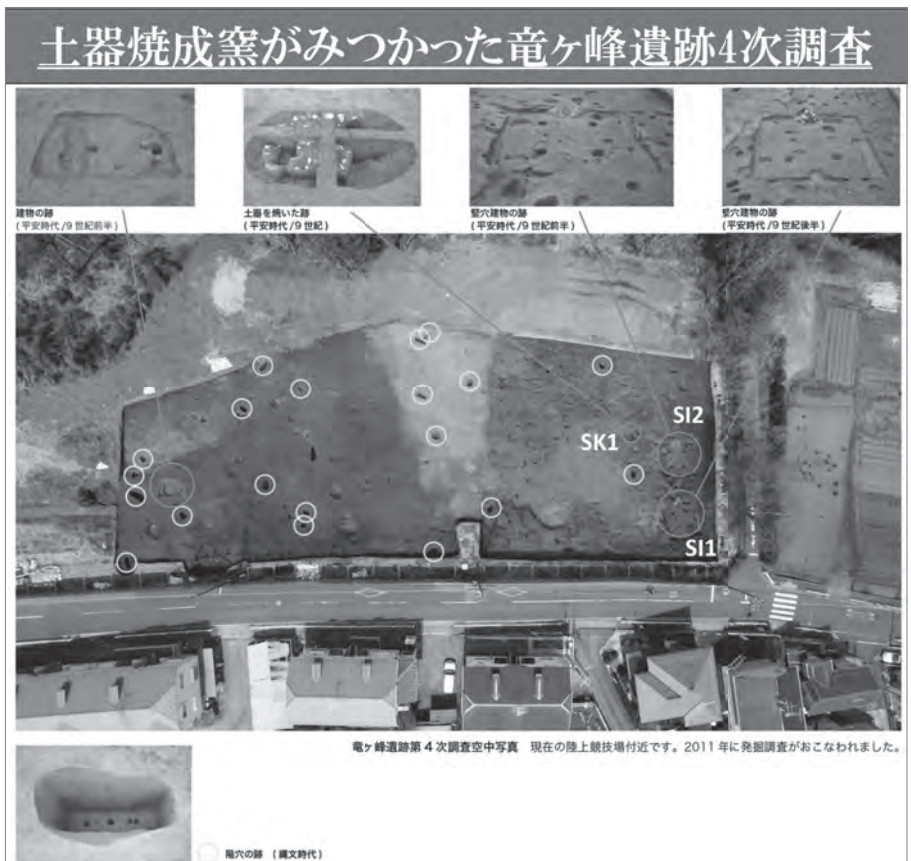
の土師器の甕は、唯一これだけです。こういうものが出て、やはり東北色の強い遺物群が出ているということになります。

先ほどの第1次調査と第2次調査の竪穴建物は、このような位置関係になります。【図29】それぞれ2棟が1つになるような感じもします。まだ調査していない部分もありますので、そちらにも展開している可能性もあります。

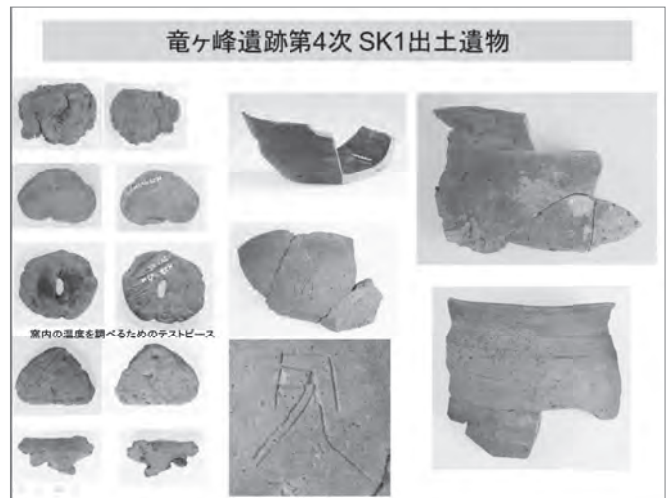
次に、2011年には竜ヶ峰遺跡の調査をしました。【図30】上っ原遺跡の北側にあり、違う丘陵になります。約3,000平方メートルという広さがあるのですが、調査をしていても、全く建物跡が出てこない。黄色い丸は、みんな縄文時代の陥穴です。ようやく東の端で2棟、平安時代の竪穴建物が見つかりました。やはり9世紀前半～9世紀後半ぐらいに当たる竪穴建物です。両方とも6メートルクラスで、上っ原遺跡とほぼ同一規模の竪穴建物がここでも2棟見つかった状況です。

竜ヶ峰遺跡の調査で特筆されるのは、後で詳しく述べますが、土器を焼いた窯が見つかったことです。これがSI2という竪穴建物からほんの少し離れたところから見つかりました。【図31】最初は黒い土の中に、土が焼けて赤く変色する「焼土」がたくさん混じていたのですが、何かなという事で調査していきまいた。ここに何が埋まっているのかということで、土手を残しながら少しずつ掘っていきますと、このように細かい土器片がパラパラ出てくる状況で、最終的にはこのような穴になってしまいました。火を炊いて祭りでもしていたのかなという事で、発掘調査報告書には書いてしまいました。

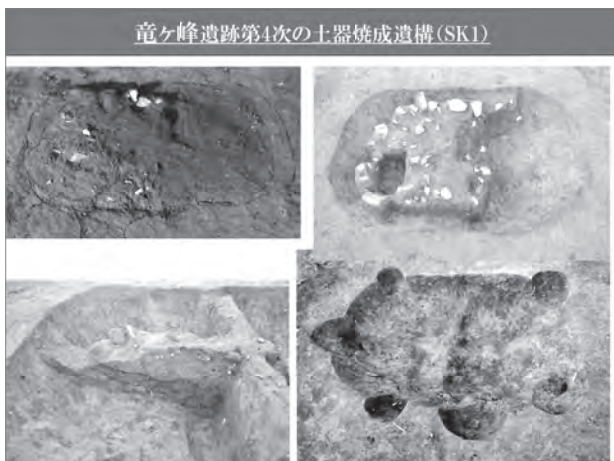
その後、研究を続けていく間に分かったことは、出土していた遺物はすべて東北系土器です。【図32】黒く処理された



【図30】帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



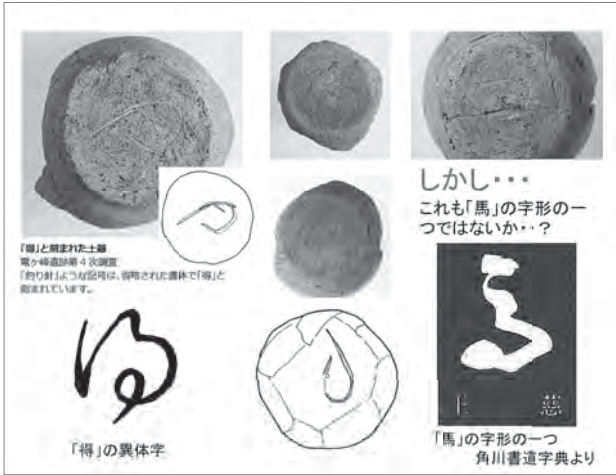
【図32】



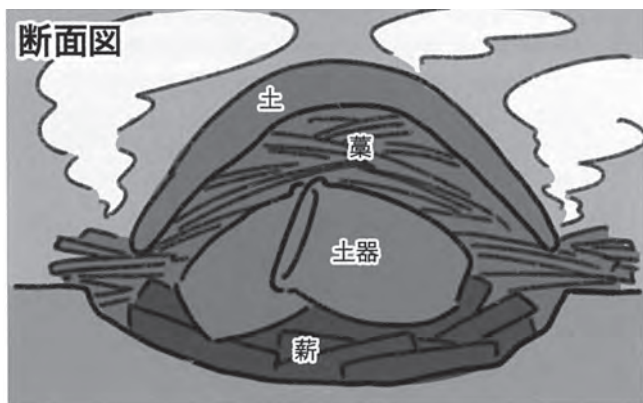
【図31】



【図32 (参考)】

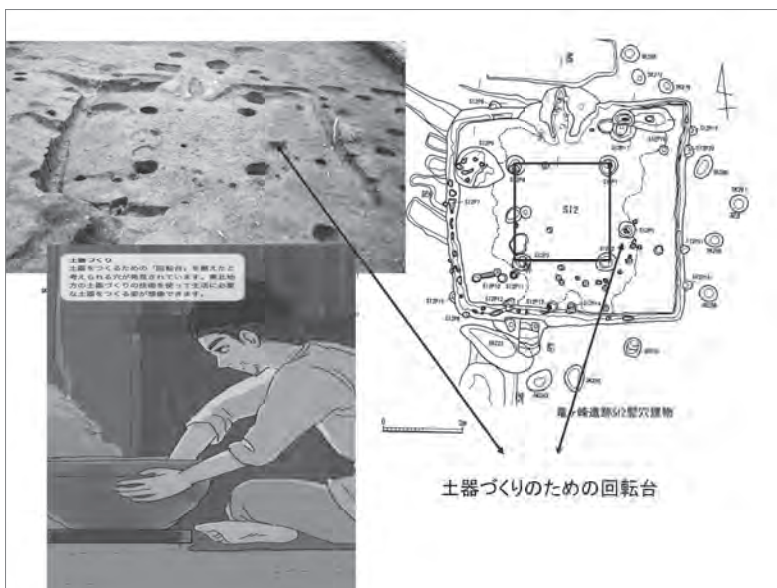


【図32 (参考)】



【図33】久保田正寿 1989『土器の焼成=土師器の焼成実験』を参考作成

り、粘土紐の成形が残っています。あとは、このように強く火を受けた関係で赤く焼けてばらばらになっています。この土器は刻書土器といいますが、今のところ文字なのか、絵画なのか、何とも理解できません。東北系土器の、坏(つき)に描かれています。



【図34】帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

こちらは粘土の塊が焼けているのですが、最初はこれを見て、銭を模した土製品と思っていたものです。他にもおにぎり状ものや、つまんでギュッとしたような粘土の塊など、何とも理解しがたい状況でした。これが銭の代わりであれば、やはりお祭りに関わるものかもしれないということで、お祭りに関わる施設ということで、発掘調査報告書には書いてしまいました。

しかし、実は陶芸の専門家に聞きますと、これは窯の熱を見るときを試し焼きをするためのテストピースではないかと指摘されました。ギュッと粘土をつまんで、入れて、どのぐらいに焼き上がるかを見るための試しの粘土片だということです。ということは、この穴は土器を焼くための窯だったと考えた方が良さそうです。窯の場合の構造は次のように考えられます。【図34】登り窯のような立派な窯ではなく、地面に掘り込み穴を掘って、そこに焼き上げるための製品を燃料と一緒にくべます。縄文土器はオープンエアの野焼きで焼かれましたけれども、この窯はちゃんと穴の上を覆うわけです。それがワラ材だったり灰状の泥だったりしますが、今も東南アジアではこの方法で土器を焼いています。「覆い焼き」とも呼んでいます、おそらくこうやり方で焼いていたのだと思います。

窯の形状については、調べていくと、赤ガメの産地である北上市にも、このような窯がいっぱい出ていたことが分かりました。竪穴建物の周辺に点在するような形も、竜ヶ峰遺跡と非常に似ています。いろいろなタイプのもがありますが、これらはすべて土器を焼いたときの残骸(破片)です。こういう状況で土器を焼いていたのだらうということで、図を示しておきました。赤ガメの土器片は出てこなかったのですが、ほかの東北系の甕や坏などの器を、竜ヶ峰遺跡で焼いていた、作っていたことも分かりました。

そして竜ヶ峰遺跡の竪穴建物の構造をもう少し詳しく見ていきますと、こういう建物がありました。【図34】この4つの大きな穴は、屋根を支えるための大黒柱が4本立っていたのですが、その間に見えるS12P5と書いてある穴については、

調査するとき穴を半分だけ掘って断面を調べたところ、真ん中に小さな穴がもっと深く入っていました。今考えてみると、土器を作る時に使う回転台の軸を据えつけていたのではないかと思います。粘土紐を巻き上げ土器を作る時は、回転させなければなりません。現在のロクロのように勢いよく回すのではなく、少しずつ回転させながら粘土紐を積み上げていきますので、こういう回転台が必要であったと思います。その名称は考古学では「ロクロピット」と呼んでいますけれども、こういうターンテーブルのような回転台を据えつけて、家の中で土器を作っていたのではないかと考えています。

以上のような様々な成果があったのですが、これら遺構・遺物、見つかったもの

の特徴をまとめてみましょう。【図35・36】

9世紀中葉と後葉の2つの時期に大きく分けることができ、竪穴建物が6棟、掘立柱建物が2棟ということで、非常に建物数は少ないですが、その中でも竜ヶ峰遺跡の土器を焼いた窯、土器焼成遺構も検出されています。

そして、竪穴建物の中から出てくる土器は、東北系の土器が主体であって、武蔵国産の土師器は少ないが、須恵器はみんな武蔵国産のもので、甲斐型土器も、胎土分析をやっても、地元の山梨の粘土を使ったものが直接入り込んできていることが分かります。ということは、甲斐国にいた人間がここに来ているかもしれません。いずれにしても、基本的に土師器の主体は東北系のものが占めていると言えるのではないかと思います。

東北系土器の他、上っ原遺跡の2号竪穴では土器や役人が付けるベルトに付ける帯飾りが、上っ原遺跡の1号竪穴では鉄斧という金属製品も見つかっています。あとは、遺跡の存続時期が極めて短いことです。それも9世紀のごく短い間に限定されていることが特徴です。多くの集落は何回も人の出入りが見られるのですが、この場合はこれっきりです。縄文時代以来です。そういう特徴があります。

次に、作られた竪穴建物の規模ですが、小さいわけでもない、大きいわけでもない。中型規模の一般的な、周りの状況と比べると比較的大きい建物であるということが言えます。竪穴建物の造りからすると、竪穴の外に長く伸びる煙突を持つカマド、私は「長煙道型」と呼んでおりますが、こういうタイプのものが見られると言えます。

こういう特徴を私は研究の1つの手がかりとして、周辺の遺跡を調べていきました。【図37】

カマドの構造と黒色土器。これは彼らの存在を示す有力な手がかりになるだろうと思います。実際に東北地方では、9世紀代の竪穴建物のカマドは「長煙道型」



【図35】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より



【図36】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

これら発掘調査成果から、彼らを探す手がかりとしたのが・・・
竪穴建物カマド構造と黒色土器

①遺構—9世紀以降の竪穴壁外に長く伸びる長煙道型の長煙道型カマドを有する竪穴建物の有無。↓
長煙道型カマドは、東北地方の奈良・平安時代の竪穴建物には当たり前前にみられるもの。

<p>上っ原遺跡で発見された 煙道の長いカマド</p> <p>カマド 上っ原遺跡 1次調査 1号竪穴建物跡 煙道が長い！</p>	<p>東北の遺跡で発見された 煙道の長いカマド</p> <p>カマド 千本遺跡 写真提供：(公財) 岩手県文化振興 推進文化財センター</p>	<p>平安時代に東北地方の主流だった煙を出すためのトンネルが長いカマド。発見された建物跡は東北地方の特徴を持っている！！</p>
--	---	--

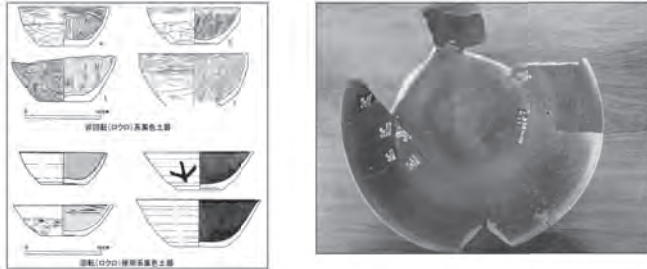
【図37】

帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

②8世紀後から9世紀前後にかけて列島各地で登場してくる非回転(ロクロ)ないし回転(ロクロ)成形土器の器内面に、丁寧なヘラミガキと炭素吸着による黒色処理を施した黒色土器の存在の有無。



この土器は東北地方では古墳時代以来、平安時代になっても一貫してつくられていた土器。



【図38】

タイプのものが一般的です。しかも、石で周りを組んでいます。こういう竪穴建物の上屋構造はどうなっているかという、参考として志波城で検出された竪穴を復元した事例を挙げておきました。いずれにしる長い煙突を持つ竪穴建物が東北地方では一般的であるということです。

一方、関東地方では、9世紀段階になると、このようにほとんど煙突が伸びません。おそらく煮炊きする対象物の違いが関係するのではないかと思います。煙突が長いと高温を保つことができるそうです。煮炊きする対象物の違いが関東と東北であったのではないかと思います。それも研究していかなければいけないと思います。関東地方では9世紀になると、ほとんど外に伸びない、すぐ煙突の上に煙を出すのに近い煙道、私は「短煙道型」と呼んでおりますけれども、そう

いうものが一般的です。しかし、上っ原遺跡と竜ヶ峰遺跡はそうではないということになります。

黒色土器は、内面が非常にきれいに磨かれて、黒く処理されているということで、これも東北地方では古墳時代以来ずっと作られているということです。【図38・39】関東地方は古墳時代にも若干作られていましたが、いったん途切れて、再登場してくるのが9世紀前後の平安時代頃です。それがどういうことを意味しているのか今まで分らなかったのですが、私は、強制移住させられた彼らがこの黒色土器づくりに関与していたのではないかと考えています。これも東北の技術を使っていると断言してもいいのではないかと思います。

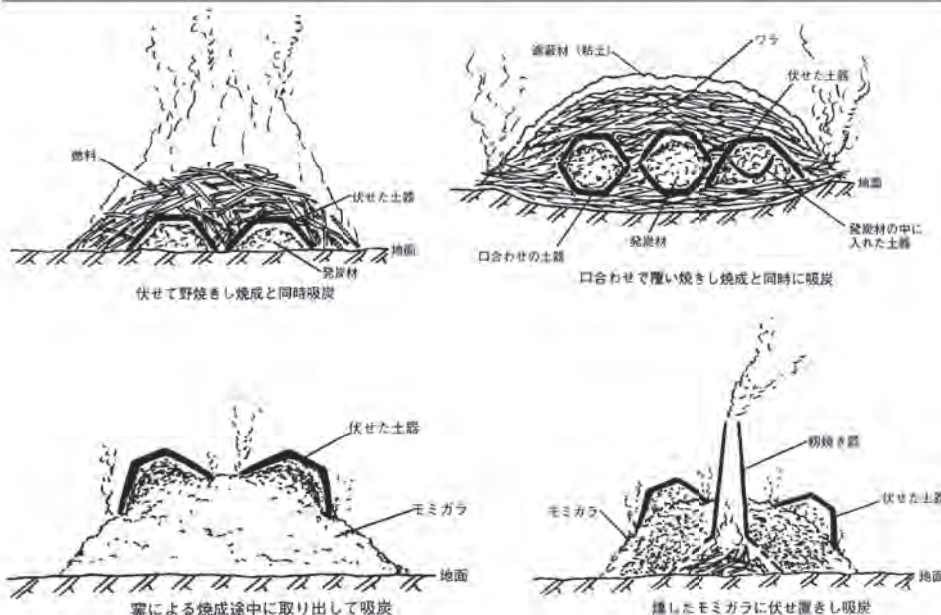
そういう状況で、とにかく周辺の遺跡を調べていきました。

まず目を付けたのが、多摩丘陵の要の位置にある落川・一の宮遺跡です。【図40】落川・一の宮遺跡の成果は多岐にわたります。不思議な文様をもつ瓦や、おそらく渡来系の人たちが作ったとされる当時のアイロンで、「火熨斗(ひのし)」と呼んでいますが、こういうものも出ています。もう少し時代が下りますと、武士が使った刀に取り付けられる鐔(つば)や鍬(はばき)など刀の金具も見つかっています。あとは、ウマとウシに関する痕跡です。特に鉄の焼印です。ウマには自分たちの所有を示すために、かわいそうだけれども、焼印でしるしを付けるわけです。そういう鉄製品も残っています。あとは、ウシをコントロールするための鼻環という道具も出ています。さらに、遺構としては、落川・一の宮遺跡でもウシやウマの骨を伴う土坑という穴が検出されています。

実際にウマをコントロールするための轡(くつわ)も出ていたということで、非常に重要な遺跡です。

私は、とにかく竪穴建物で煙道の長いものはないかと探していきました。すると、結構ありました。【図41】しかも、その時期は9世紀の初めぐらい～10世紀代にかけてで、9世紀の前半～中葉にピークが見られます。落川・一の宮遺跡では長い期間にわたって竪穴建物が何百軒と検出されているのですが、この時期に限って長い煙道を持つ竪穴建物が見つかっていません。おそらく上っ原遺跡と同じように、東北地方の人たちが来ていたのではないかと考

【参考】考えられる土器への炭素吸着方法



【図39】桜岡正信 2005「黒色土器づくり」『世界の土器づくり』同成社より

落川・一の宮遺跡

落川・一の宮遺跡は、多摩丘陵地の起点に位置する古墳時代～中世まで連続的に続く巨大集落遺跡！



落川・一の宮遺跡
(写真提供：東京都教育庁)
多摩川によって造られた平地に古墳時代前期(4世紀末)から鎌倉時代末まで(14世紀初頭)まで継続して集落が営まれました。

地域の権力者



お宝に使われたと考えられる瓦
(所蔵：東京都教育庁)
この軒丸瓦(刺菱状単弁蓮華文)と軒平瓦(半角状中心部均整蓮華文)は、落川・一の宮遺跡に住んでいた地域の権力者が立体的なお宝に使われた瓦と考えられます。

渡来人の足跡



青銅のアイロン
(火梨斗/所蔵：東京都教育庁)
青銅で作られたアイロン。日本国内で発見されることはほとんど無く、朝鮮半島から多く発見されることから、朝鮮半島から来た渡来人が持ってきたものと考えられます。

東国武士団の痕跡



弓矢のやりり
(鉄鏃/所蔵：東京都教育庁)
東国武士団の出現と強い関係があることが考えられます。



刀の一部(左から髭、脇、足金物)



鉄を作っていた
製鉄の一部
(羽口/所蔵：東京都教育庁)
鉄を作り、馬具を造っていた可能性がります。



江戸時代の製冶の様子
(人偶劇家田島/1690年/写真提供：国立国会図書館デジタルアーカイブより)

馬と牛に関する痕跡



馬の押す犁頭
(鉄印/所蔵：東京都教育庁)



馬の轡の骨
(落川・一の宮遺跡/写真提供：東京都教育庁)



馬の轡(所蔵：東京都教育庁)

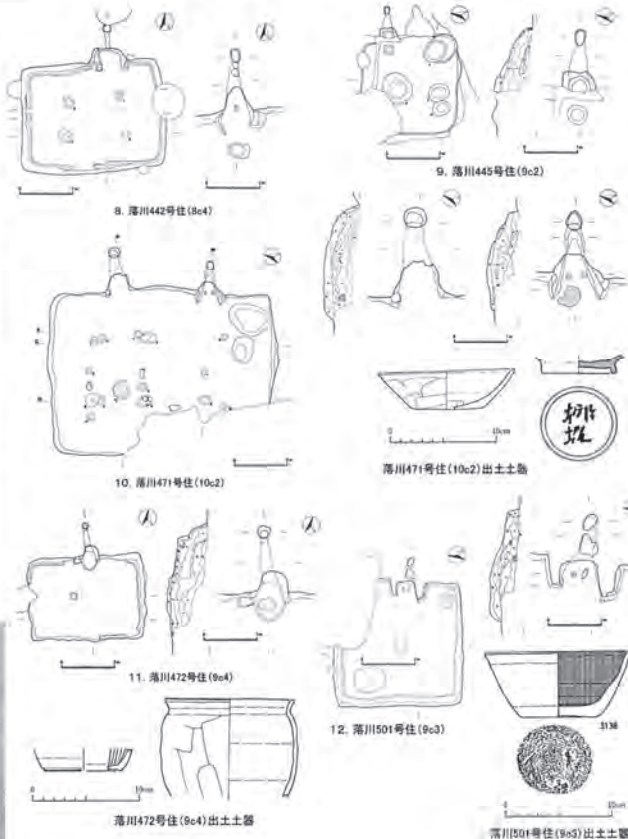
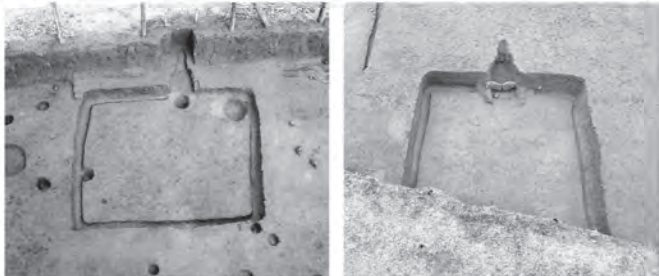
【図40】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

落川・一の宮遺跡

図25 落川・一の宮遺跡の長煙道カマドをもつ竪穴建物一覧図②

表1 落川・一の宮遺跡における第21～31段階における長煙道カマドをもつ竪穴建物

時期	第21段階	第22段階	第23段階	第24段階	第25段階	第26段階	第27段階	第28段階	第29段階	第30段階	第31段階	備考	文献	
竪穴No.	80-4	80-5	80-1	80-2	80-3	80-4	80-5	100-1	100-2	100-3	100-4			
1	185													
2	267													
3	344													
4	403													
5	420													
6	429													
7	434													
8	442	●											日野市落川遺跡調査会 1994『落川遺跡1遺構編 第二分冊』	
9	445													
10	471													
11	472													
12	501													
13	505													
14	519	●												
15	539													
16	C-33													
17	C-43													C-43と重複
18	C-49												C-43と重複	
19	C-53													
20	C-61													
21	C-68													
22	C-79												落川・一の宮遺跡(日野3-2-7号線)調査会 2017『落川・一の宮遺跡Ⅱ古代編 第二分冊 遺構編』	
23	C-87													
24	C-111													
25	D-17													
26	D-18													
27	D-35													
28	D-141													
29	D-157													
30	F-5													F-5と重複
31	F-6													F-5と重複



【図41】 平野修編 2017『武蔵と甲斐における倭国・夷住痕跡』『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開シンポジウム「倭国・夷住」とよばれたエミシの移配と東国社会-強制移住させられたエミシはどこに居たのか?そして何をしていたのか?』帝京大学文化財研究所より

多摩ニュータウン遺跡群

【多摩ニュータウン遺跡群の長煙道カマド型穴建物】

遺跡No./遺構名	8C-4	8C末 ~9C初	9C-1	9C-2	9C-3	9C-4	9C末 ~10C初	10C-1	10C-2	10C-3	10C-4	11C	備考	文献
No.243・244遺跡 8号住					●								町田市小山所古, 沖積層から埋没跡面 地に立地。	東京都埋蔵文化財センター2004『多摩 ニュータウン遺跡 No.243・244遺跡』東 京都埋蔵文化財センター調査報告第 153集
No.304遺跡 3号住												●	八王子市清水所在, 大塚川上流山麓 斜面に立地, 扇形(ロウロ)台地と見 られるピットあり, 土質構成も異なり。	東京都埋蔵文化財センター1992『多摩 ニュータウン遺跡 平成3年』東京都埋 蔵文化財センター調査報告第15集
388・389・434遺跡 3号住				←→									八王子市松木所在, 河原段丘上に立地, 東北面と思われる土師器窯・小型土 土, 深さ約は90?25段層	東京都埋蔵文化財センター1987『多摩 ニュータウン遺跡 昭和60年度』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第8集
388・389・434遺跡 9号住				←→									八王子市松木所在, 河原段丘上に立地, 扇形埋没跡あり	東京都埋蔵文化財センター1987『多摩 ニュータウン遺跡 昭和60年度』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第8集
No.426遺跡 13号住								●					八王子市堀之内所在, 堤川中流域左岸の丘 麓埋没跡あり	東京都埋蔵文化財センター1987『多摩 ニュータウン遺跡 昭和60年度』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第8集
No.426遺跡 18号住								●					八王子市堀之内所在, 堤川中流域左岸の丘 麓埋没跡あり	東京都埋蔵文化財センター1987『多摩 ニュータウン遺跡 昭和60年度』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第8集
No.436遺跡 12号住			←→										出土土器少なく詳細な時期は不明だが, 報告では9世紀代と想定	東京都埋蔵文化財センター2009『多摩 ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財 センター調査報告第104集
No.450遺跡 116号住						●							多摩市北田所在, 堤川中流域左岸に立地, 扇 形埋没跡あり	東京都埋蔵文化財センター1987『多摩 ニュータウン遺跡 昭和60年度』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第8集
No.450遺跡 118号住						●							多摩市北田所在, 堤川中流域左岸に立地, 扇 形埋没跡あり	東京都埋蔵文化財センター1987『多摩 ニュータウン遺跡 昭和60年度』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第8集
No.769遺跡 13号住					●								多摩市北田所在, 堤川中流域左岸に立地, 扇 形埋没跡あり	東京都埋蔵文化財センター1987『多摩 ニュータウン遺跡 昭和60年度』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第8集
No.939遺跡 K8号住								●					町田市小山所古, 堤川中流域左岸の丘 麓埋没跡から扇形にかけて立地。	東京都埋蔵文化財センター2002『多摩 ニュータウン遺跡 No.939遺跡 Ⅱ』東京 都埋蔵文化財センター調査報告第81集

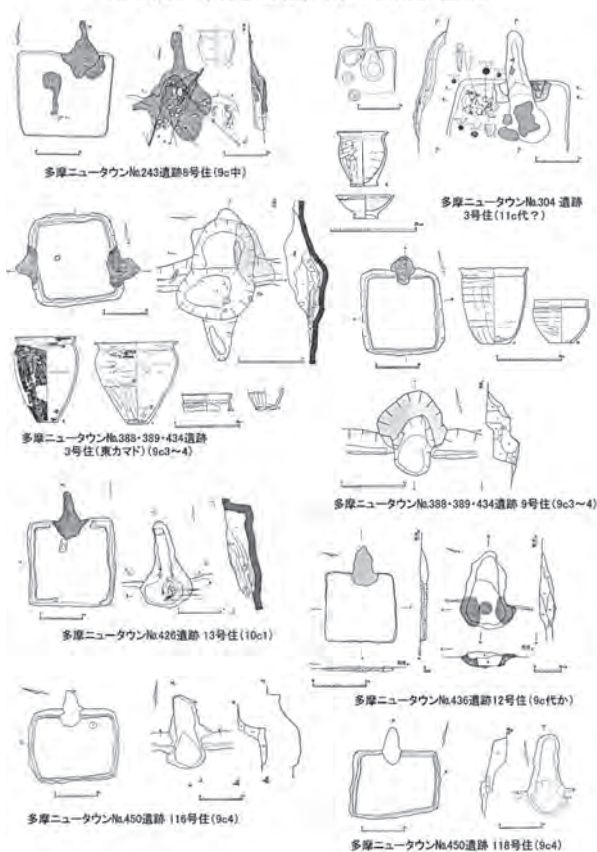
【東北系と思われる土器が出土している長煙道カマドではない堅穴建物もしくは遺跡】

遺跡No./遺構名	8C-4	8C末 ~9C初	9C-1	9C-2	9C-3	9C-4	9C末 ~10C初	10C-1	10C-2	10C-3	10C-4	11C	備考	文献
No.101遺跡 13号住						●							八王子市堀之内所在, 段丘斜面地に立 地, 小型窯	東京都埋蔵文化財センター1981『多摩 ニュータウン遺跡 昭和55年』東京都埋 蔵文化財センター調査報告第1集
No.419遺跡 7号住					●								八王子市堀之内所在, 段丘面に立地, 扇 形埋没跡あり, 土師器・小型窯 黒色土器多量, 小型窯	東京都埋蔵文化財センター1981『多摩 ニュータウン遺跡 昭和55年』東京都埋 蔵文化財センター調査報告第1集
No.424遺跡 1号住								●?					八王子市堀之内所在, 段丘面に立地, 扇 形埋没跡あり, 黒色土器多量	東京都埋蔵文化財センター1979『多摩 ニュータウン遺跡 昭和54年』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第4集
No.939遺跡 K9号住								←→					町田市小山所古, 堤川中流域左岸の丘 麓埋没跡から扇形にかけて立地, 黒 色土器多量	東京都埋蔵文化財センター2002『多摩 ニュータウン遺跡 No.939遺跡 Ⅱ』東京 都埋蔵文化財センター調査報告第81集
No.939遺跡 K15号住								←→					町田市小山所古, 堤川中流域左岸の丘 麓埋没跡から扇形にかけて立地, 黒 色土器多量	東京都埋蔵文化財センター2002『多摩 ニュータウン遺跡 No.939遺跡 Ⅱ』東京 都埋蔵文化財センター調査報告第81集
No.939遺跡 K29号住								←→					町田市小山所古, 堤川中流域左岸の丘 麓埋没跡から扇形にかけて立地, 黒 色土器多量	東京都埋蔵文化財センター2002『多摩 ニュータウン遺跡 No.939遺跡 Ⅱ』東京 都埋蔵文化財センター調査報告第81集
No.960遺跡 6号住												●		
No.960遺跡 7号住												●		
No.960遺跡 12号住												●		
No.960遺跡 20号住												●		
No.960遺跡 21号住												●		
No.960遺跡 遺構外												●		
													町田市小山所古, 堤川中流域左岸の北 西から南東に向かう斜面地に立地, 内面ミガク草葉色土, 黒色土器多量	東京都埋蔵文化財センター2002『多摩 ニュータウン遺跡 No.960遺跡』東京都 埋蔵文化財センター調査報告第103集

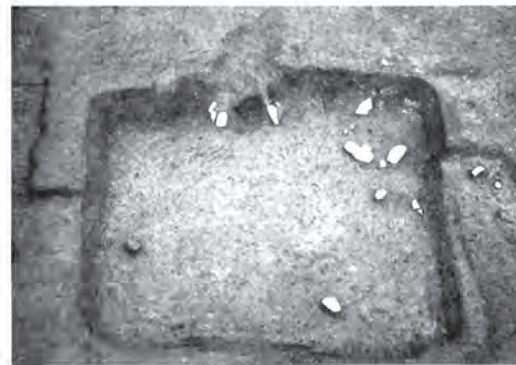
表2 多摩ニュータウン遺跡群一覧表

【図42】 平野修編 2017「武蔵と甲斐における倭因・夷俘痕跡」『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開シンポジウム「倭因・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会 - 強制移住させられたエミシはどこに居たのか?そして何をしていたのか?』帝京大学文化財研究所より

図30 多摩ニュータウン遺跡群の長煙道カマド型穴建物一覧①



多摩ニュータウンNo.304遺跡3住



多摩ニュータウンNo.436遺跡B区17号b住

【図43】 平野修編 2017「武蔵と甲斐における倭因・夷俘痕跡」『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開シンポジウム「倭因・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会 - 強制移住させられたエミシはどこに居たのか?そして何をしていたのか?』帝京大学文化財研究所より

えました。

次に多摩ニュータウン遺跡群です。【図42・43】丘陵状の中の遺跡を調べていったのですが、少なからずありました。やはり出てくるのは9世紀代です。9世紀代によく見られることも、多摩丘陵内の遺跡の状況です。

もう1つ、武蔵国関連遺跡と武蔵国分寺関連遺跡を調べてみました。

国府関連遺跡では非常に多くの竪穴建物が調査されています。しかし、典型的な「長煙道型」カマドをもつ竪穴建物は、ほとんど見られませんでした。「長いのかな?」という感じのものが数棟ある程度で、何とも言いえない状況でした。黒色土器も9世紀の末～10世紀前半に多少見られましたが、武蔵国府周辺の竪穴建物につきましては、それほど目立った状況は見られませんでした。

一方で、武蔵国分寺周辺に展開する集落遺跡がありますが、私は武蔵台東遺跡というところを調べてみました。【図44】

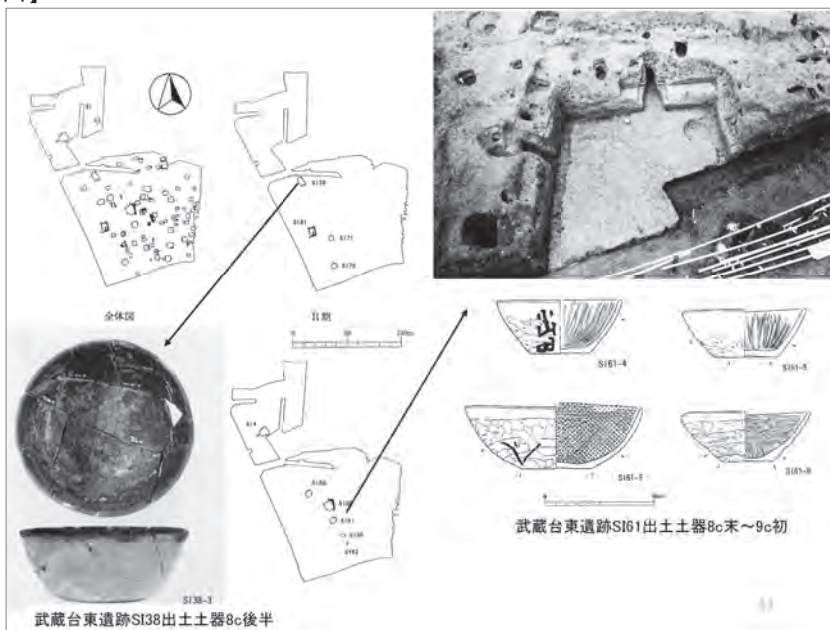
数は多くはありませんが、典型的なものがありました。しかも面白いのは、これは甲斐型土器の実測図ですが、こういうものを一緒に伴っていました。【図45】 どういう因果関係があるのか分かりませんが、武蔵国分寺周辺では、東北の人たちの存在を少なからず見ることができたということです。

では、武蔵国の北部の状況はどうか。われわれはこの地域のことを北武蔵と呼んでおりますが、いわゆる埼玉県域の状況を少し調べてみました。その中でも、埼玉県の児玉郡上里町にある中堀遺跡はすごい遺跡で、北の「落川・一の宮遺跡」と言っても過言ではありません。【図46】

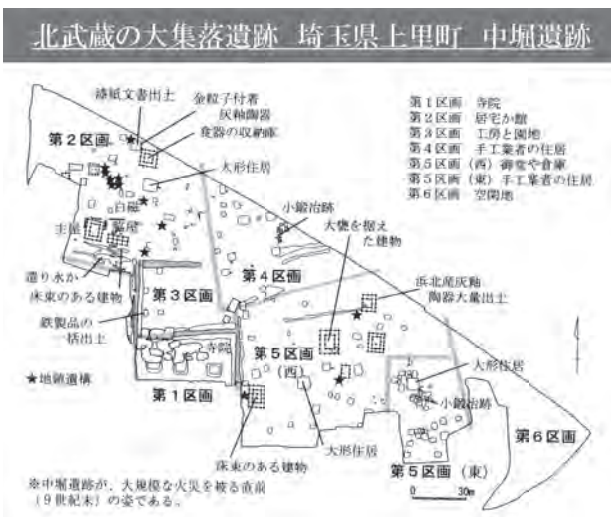
この遺跡は9世紀になって突然登場する遺跡です。その中には寺院があったり、大きな建物があっ



【図44】



【図45】



【図46】

中堀遺跡第V期(9c4)の各区画の性格(田中広明 2003『地方豪族と古代の官人-考古学が解く古代社会の権力構造-』KASHIWA 学術ライブラリー 01 柏書房を改編)

たり、鍛冶工房があったりして、多彩な内容を持つ遺跡です。

【図47】

中堀遺跡でもやはり9世紀代を中心に、10世紀第4四半期段階まで、私が対象とするような竪穴建物が存在していたことが分かりました。

北武蔵の地域については、次回、荒井秀規さんが国の蝦夷政策について文献を紐解いてお話しすると思いますが、北武蔵の場合、彼らが北武蔵地域にいたという内容が記載された文献があります。そういうこともありますので、中堀遺跡の長い煙道を持つ竪穴建物については、ほぼ彼らのものと考えていいだろうと考えています。

また、近年、私の研究が終わった年に見つかった出土資料ですが、熊谷市の宮下遺跡で見つかった墨書土器です。墨で文字が書かれた資料があるのですが、ここに書いてありますように、「狄(てき)」にながしと。獣偏に火と書いて「テキ」と読みます。「狄」とは、東北の蝦夷のことを表している文字です。「狄」は、日本海側の蝦夷だというイメージもあるのですが、文献史学の先生のお話によると、太平洋側でも胆沢城が奥州市にあります、それよりも北側の蝦夷と日本海側の蝦夷についても、同じ「狄」と表現するそうです。この土器は、8世紀後半ぐらいの須恵器片ですが、薄くて見にくいのですが、それをなぞったものがこれです。おそらく嶋(しま)だと思えますが、「狄嶋」、これは人名だと思えます。これの誰々というような呼び方をしているのだと思えます。これが熊谷市の宮下遺跡から出土しています。

もう一つ、これは山梨の事例です。これは私が調査した宮ノ前遺跡というところの事例です。これも「狄」と書かれた墨書土器です。これは9世紀後葉の黒色土器です。土器を裏

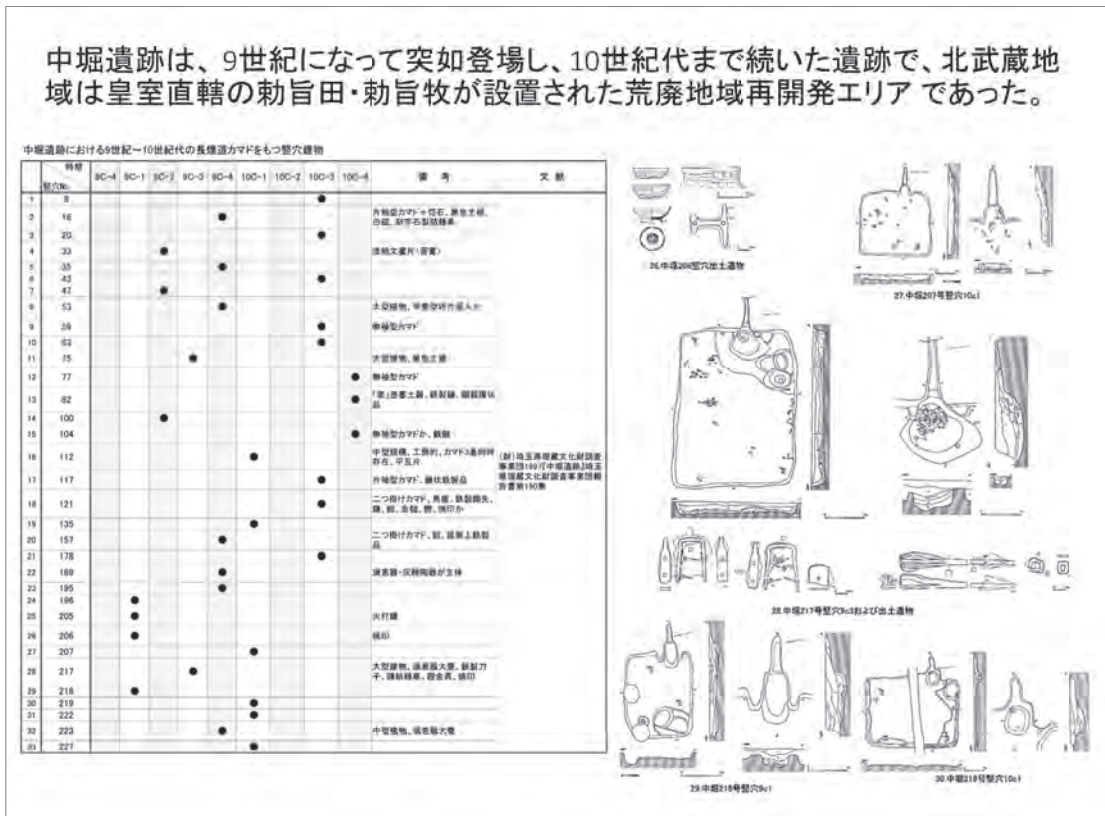
返すと黒いです。

こういう資料に出てきてもらえると、彼らの存在が分かってくるのではないかと思います、なかなか出てきてくれないところが悲しいところです。今後の発掘調査に期待したいと思います。【図48】

以上の発掘調査成果から考古学から見た武蔵における移配時期の傾向ということで見えていきますと、武蔵国の場合は俘囚・夷俘の痕跡は、北武蔵では9世紀前葉段階、南武蔵では9世紀の第三四半期、中葉以降に顕著に見られるといえると思います。【図49】その後、どうなったか。10世紀の後葉段階まで、数は少なくなりますけれども続いていく状況があります。9世紀前葉あるいは10世紀後葉になってくると、移配第1世代がやってきて、その第2、第3世代の人たちがいたということも考えていかなければいけないと思います。

文献史学では、関東以南への陸奥・出羽、太平洋側と日本海側の蝦夷の移配は、先ほど見たように、胆沢が制圧されたときに非常に大規模に行われたとされています。征夷と書いていますが、最後に制圧されたのは弘仁2年(西暦811年)なので、そのときにも大規模に強制移住が行われたのだと思います。今回、こうした考古学的検討で、武蔵で確認された俘囚・夷俘の痕跡も、ほぼこの時期に対応する可能性が高いと思います。

では、考古学から見た移配地としての武蔵国の特質を考えておきたいと思います。【図50】武蔵国は、貢馬国(こうばのくに)、朝廷へウマを貢ぐ国でもあったということで、皇室直轄の牧場である勅旨牧(ちよくしまき)や後院牧(ごいんのまき)があるのですが、そういう特別な牧場が設置された地域です。さらに、それ以外にも、最初にも述べたように、



【図47】 平野修編 2017「武蔵と甲斐における俘囚・夷俘痕跡」『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開シンポジウム「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会 - 強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？』帝京大学文化財研究所より

考古学からみた武蔵における移配時期の傾向

- ・ 文献史学では、関東以南への陸奥・出羽の蝦夷の移配は、胆沢の蝦夷に対して国家側が初めて勝利した延暦13年(794)の第二次胆沢制圧時以降に本格化したとされ、最後の征討とされる弘仁2年(811)段階にも大規模に実施されたと考えられています。
- ・ 考古学的検討でも上記に対応する時期のエミシの痕跡が顕著にみられ、さらにそれ以後の10世紀後葉ぐらいまで彼らの痕跡が少なからず認められることは、その時期に移配されたエミシが土着化して、その末裔たちが活動していたとも考えることができるでしょう。

【図49】

南多摩窯跡群のように、武蔵国内には南に南多摩窯跡群があって、埼玉県に入って東金子、南比企、末野窯跡といった須恵器を焼いた窯がいくつもある須恵器の一大生産エリアでした。そういうところに、彼らの足跡が色濃く見えるといえると思います。

武蔵国の牧だけを限定して見ますと、武蔵国の中には、石川、小川、由比、立野という4つの勅旨牧がありました。【図51】『延喜式』の中に武蔵国ということで、この4つの牧の存在が記載されています。これを展示でも図示していただきましたが、帝京大学八王子キャンパス周辺については、「小野牧」などの牧があったと推定されています。当時の牧は、ウマだけでなく、ウシも飼っていました。武蔵国は、主要な牧場が点在していたという特質を持ったエリアであるということになります。

そういうことを裏付けるような状況が、最初に周辺の遺跡でご紹介しました稲城市の瓦谷戸窯跡群の中のB号窯の中に見られます。このようなウマの絵が描かれているのです。壁を削って、刻んで描かれたものですが、ウマの絵が描かれています。これをどのように考えたらいいのか、いろいろ捉え方はあると思います。火とウマというのは非常に関係性があるという考え方もあります。もう1つは、多摩川周辺に牧場、ウマが放たれている場所があって、よく見るとちゃんとウマのたてがみも表現しています。一方は非常に稚拙な感じを受けますが、もう一方のウマについては結構観察しているのではないかと思います。そういうウマの存在が身近にあったと言えるのではないかと思います。

北武蔵についても、文字が小さくて申し訳ないですけども、『延喜式』の中に、諸国の馬

- ・ 以上のように、帝京大学八王子キャンパス構内遺跡群の他に、9世紀以降に長煙道カマドをもつ竪穴建物や黒色土器をもつ遺跡は、武蔵国内でもいくつか確認することができましたが、上っ原遺跡のように赤彩球胴甕を含む明確な東北系土師器を含む遺跡は、みられませんでした・・・
- ・ こうした状況をどのように考えたらいいのか・・・

【図48】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

考古学からみた武蔵国

古代の武蔵国は、朝廷へウマを献上する貢馬国(こうばのくに)であり、ウマやウシを生産・飼育をした「御牧(みまき)」や「後院牧(ごいんのまき)」という「牧場」が数多く置かれていました。

さらに朝鮮半島から渡来した須恵器を焼いた末野・南比企・東金子・南多摩という四つの大きな窯業地帯が知られています。特に埼玉県比企郡鳩山町を中心に展開した南比企窯跡群は、6世紀初め頃より渡来人による須恵器工人集落が形成されるようになり、須恵器の生産地として栄えはじめます。

そして7世紀後半には、その技術と窯を転用して当時の最先端技術であった瓦の生産を手掛けるようになり、瓦の量産体制を確立して、武蔵国内の初期寺院に瓦を供給しました。

やがて8世紀中頃に奈良時代最大の国家プロジェクトであった国分寺の建立が始まると、鳩山窯跡群は、武蔵国分寺の瓦を大量に生産し、武蔵国最大の国分寺瓦生産地となりました。

ちなみに国府が置かれた古代の多摩郡にも、多摩丘陵地帯に9世紀代から操業が拡大する南多摩窯跡群があります。

【図50】 田中広明 2003『地方豪族と古代の官人 - 考古学が解く古代社会の権力構造 - KASHIWA 学術ライブラリー 01 柏書房を改編

牧については多摩郡内には、石川牧・小川牧・由比牧・立野牧の4ヶ所の勅旨牧(御牧)があった他、現在の帝京大学八王子キャンパス周辺には、陽成上皇の後院牧から後に勅旨牧となった「小野牧」があったとされています(『政事要略』承平元年(931))。

【図51】 帝京大学総合博物館『古代多摩に生きたエミシの謎を追え』より

牛牧というものがあります。その中には、桧前馬牧（ひのくまのばぼく）、「石田牧」というのがあります。後に朱雀院という後院の所有となる秩父牧があるのですが、そういう牧もありますし、先ほどご紹介した末野窯跡や吉井窯といった須恵器窯も一緒に存在する地域です。

そういう中で、先ほどご紹介した中堀遺跡でも、落川遺跡で出てきたようなウマに押す焼印が出土しています。1つは「令」で、あと一つは石です。「石田」、石だと思えますが、中堀遺跡からは両方出土しています。ということは、中堀遺跡が、石田牧と、後の朱雀院となる、文献上では出てきませんけれども、秩父牧に関わる管理をしていたのではないということも考えられます。そういう場所に東北の人たちが、より多く送り込まれているのではないかと思います。

先ほど落川遺跡でもウシが出ているということをお話ししましたけれども、本日、実際に調査をされた福田健司さんが来ていらっしゃいますが、福田さんが著しました『土器編年と集落構造』という書物の中で非常に面白い指摘をされています。落川遺跡では、図で示したような状況で骨が出ているのですが、この土坑からは頭部あるいはいくつかの部位の骨が欠落したウシが出土していると指摘されています。上っ原遺跡では、ちょうどここに出ていない部位の頭の部分や肩の部分が出ているということで、想像をたくましくすれば、解体したウシの部位を、上っ原遺跡の集落に持ち込んで、それぞれの遺跡で皮なめしや、ほかの皮革製品にウシを利用していったと言えるのではないかと指摘をいただいています。

今後、考えていかなければならない問題ですが、特に落川

遺跡からは、このような磨石（すりいし）という、非常に表面が擦れた、平べったい石器が出土しています。この道具は一体何なのかということで、福田さんもこれについて一生懸命調べたところ、やはり皮なめしではないかということに仰っています。この写真は私の友人の堤さんという方で、八ヶ岳で旧石器時代をよく研究している方ですが、そこで知り合いからイノシシの皮をいただいで、実際にこういう石器で皮の裏に付いている油分をこそげ取るという作業をしている写真です。多分こういうことに使った石器ではないかということで、ウシの骨やウマの骨が出ている落川遺跡でも、このような石器が大量に出ていることから、実際にそこで何をどうしていたのかを考える上では、重要な遺物の1つになるだろうと思います。

長々としゃべってきましたけれども、結局、帝京大学八王子キャンパスの遺跡群にいたエミシたちは何をしていたのだろうかということになります。【図52】状況証拠から考えるしかありませんが、第1に、ウマやウシの世話に携わっていたのだろうということです。そしてもう1つは、それに関わる皮なめし、皮革製品の生産に携わっていたのだろうということです。さらに竜ヶ峰遺跡の土師器窯の存在から、土器作りを行っていたということです。赤ガメをどこで作っていたかはまだ分かっていません。

もう1つ、あれほど広大な発掘調査の範囲の中で、たった2棟ぐらいしか出てこない状況は一体何を物語っているのだろうかということです。現在考えていることは、ウマあるいはウシに供給する餌と関わるのではないかとということです。つまり、ウマやウシには雑穀類の麦などを与える必要があるだろうということで、焼畑を行っていたのではないかと考えています。特に多摩丘陵は

黒ボクという、真っ黒な黒土が堆積しています。私も作業ズボンで黒ボク土に膝を着いて発掘作業をすると、洗濯をしても黒いシミが取れないぐらいの、いい黒ボク土があります。こういう黒ボク土は焼畑をしないと形成されません。焼畑も、ウマやウシに関わることで行っていたのではないかと今は想像しています。

最後に、もう一度発掘調査について考えてみますと、【表1】考古学から東北蝦夷、特に俘囚や夷俘と呼ばれた人たちの痕跡を関東各地で調べたわけですが、その結果、遺構・遺物で明確な痕跡を示したのは上っ原遺跡だけでした。三十八年戦争時に、投降したり、捕虜になったりして俘囚や



【図52】

夷俘と呼ばれていたのですが、彼らは捕まっ
てすぐに他国へ強制移住されたのではなくて、
いったん胆沢城か志波城に一定期間、観察保護
のような状況で留め置きにされたそうで、その
後、各地へ強制移住、移配されていたと文献
史学の先生から教えていただきました。彼らに
ついては、どういう基準で「武蔵へ行け」とか、
「甲斐へ行け」となったのかよく分かりませ
んが、文献史学から示されている移配の目的は、
蝦夷の勢力分断と、罰、処罰、見せしめが中心
であったといわれています。

そうであれば、赤ガメという土器は、和賀地
域の集団にとっては、精神的なシンボルの土器
であったはずで、蝦夷勢力の分断や懲罰が目的
であれば、そういう土器を持っていれば、また
反乱の危険性があるとして、禁止されるはずだ
と思います。しかし、なぜか上つ原遺跡では、精神的なシン
ボルの赤ガメが出土しました。普通に考えれば、そういった
土器の生産もできなかったのではないかと考えられるわけ
です。

そのようなことを考えると、帝京大学のエリアにいた俘囚・
夷俘は、他の同じ俘囚・夷俘とは少し違っていたのではない
かと考えられます。【表2】

どういう意味かという、移配された俘囚・夷俘の中でも、
国家側にかなり信頼されていた集団ではなかったのかと考
えられるわけです。ある一定期間、城柵の中に留め置かれ、保
護観察の状況で彼らを観察し、「こいつらだったら大丈夫だ
ろう」ということで送り込まれたのではないかと思うのです。
特に牛馬の飼育あるいはそれに関連した皮革製品、ほかに武
蔵国では牛馬の乳を利用してチーズ作りも行っていました。
古代のチーズを都に送っていたのです。皮革製品だけでなく、
乳搾り、搾乳というのは非常に難しい技術といわれています。
私は一度もやったことがありませんが、非常に特殊な技術で
あるということで、牛馬の飼育に長けた人たちで、さらに皮
革生産や土器生産にも長けた人たちだったと思うのです。

そして土器生産については、南多摩窯跡群が9世紀に入
ると急成長します。彼らの存在なしには急成長はしなかったの
ではないかと私はひそかに思っています。考古学的に立証す
ることはなかなかできないのですが、そういう各エリアに
いた特殊技能を持った東北の人たちを、それなりに適正な場所
に送っていたのではないかと考えられます。さらに、ここに
いた俘囚・夷俘の人たちは、単なる一般の人ではなくて、各
エリアの仕事を総括する「俘囚長」というような人物がいた
有力な集団だったのではないかと思っています。役人が付け
るような帯金具が出土しているのも、俘囚長であるがゆえに
地元の役人とのつながりがあったのではないかと私は考えて
います。

時間を考えずに話してしまいましたが、以上で私の話を終
わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。なお、
この成果は、科研費の助成を受けた研究成果の一部でござい
ます。拙い話でしたが、ありがとうございました。

- 先に述べたように、武蔵国では明確な東北系遺構・遺物は、上つ原遺跡や竜ヶ峰遺跡のみでした(注:今後の新たな発掘調査みづかる可能性はあります)。
- このことは文献史学から示された移配目的である蝦夷勢力の分断や懲罰であれば、「赤彩球胴甕」という和賀地域集団の精神的支柱のような土器を異国の地では持てなかつただろうし、土器も作ることはできなかつたと思われま
- 三十八年戦争当時、投降したり捕虜となった「俘囚」や「夷俘」は、いったん陸奥・出羽国内の城柵内にしばらく留め置かれて、国家側の観察の後、他国や国内の城柵管理エリアへ移配されたといわれています。

【表1】

- 以上のことから、帝京大学八王子キャンパス構内遺跡群にいたエミシ集団は、国家側から、かなり高い信用・信頼を得ていた集団であったのではないでしょうか。
- 帯金具の出土は、地元官人との接触がうかがえることから、他の移配されたエミシ集団を統率するような、「俘囚長」や「夷俘長」といったエミシの有力者がいた集団であったとも推測されます。

【表2】



以上、ご静聴
ありがとうございました。

なお、本報告は、JSPS 科研費JP15K02987の
助成を受けた研究成果の一部です。

エミシ研究講座 第3回 東国と蝦夷政策

藤沢市役所郷土歴史課学芸員 荒井 秀規

≪実施日 2019年11月9日(土) 於 帝京大学ソラティオスクエア S012教室≫

はじめに

実は、私は特段、蝦夷(えみし)を専門に研究してはいません。今、私の著書(『<関東>の覚醒』2017、吉川弘文館)を紹介していただきましたが、東国の古代史を広く研究しています。そのなかで、東国に送り込まれたというか、連れてこられた蝦夷について、触れたことがあります。また、前回ご報告があった平野修さん(帝京大学文化財研究所)とは長年お付き合いさせて戴いているので、その関係から何か話さないということと呼ばれたわけです。

会場を見渡しますと、日本大学の武廣亮平(たけひろりょうへい)先生がいらっしゃいます。蝦夷をご専門に研究している方です。後で質問が出たら先生へ振りたいと思います。

では、しばらくお付き合いください。

みなさん、今回の展示をもうご覧になったかと思います。この企画展の発端はレジュメに写真を載せた赤彩球胴甕(せきさいきゅうどうがめ)です。この土器は、蝦夷の地で作られた土器と同じ形態で作られています。それが、この帝京大学の八王子キャンパスの「上っ原遺跡」から出土しました。



【写真1】上っ原遺跡『赤彩球胴甕』

赤く塗られた土器ですが、東北・岩手県の和賀川流域あたりを中心とする土器です。こちらに持ち込まれたものではありません。胎土分析によれば、こちら多摩の土で作った土器です。持ってこられた、あるいは、東北へ戦争に行き行って戦利品代わりに持ってきた、あるいは捕虜にした蝦夷がこちらに来たときに、自分たちが使っていた土器を持ってきた、というようなものではなくて、八王子のこの地で作られた土器です。その際にわざわざ東北の形式のものを作っているということは、作り手が東北から来た人、つまりは蝦夷の人だということを示しています。

そこで、「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」というタイトルの展示会になっています。私も先ほど拝見して、とても興味深い展示でした。

私は文献史学を専門としています。今回の講座は全部で5

回あります。顔ぶれを拝見すると4人は考古学の先生方です。残りの私1人が文献なので、きょうは文献史料から話をしなさいということだと思いますので、その趣旨でいきたいと思っています。

考古学的検討の詳細は、この企画の元にもなった帝京大学の文化財研究所と、山梨県考古学協会がシンポジウムを以前に行い、『「俘囚(ふしゅう)・夷俘(いふ)」とよばれたエミシの移配と東国社会』という報告書(2017)も出ています。

あるいは、きょうもお越しになっていますが、福田健司さん(元東京都教育委員会)が、最近『多摩考古』49号(2019)にお書きになった『土器から何が分かるのか?』、落川・一の宮遺跡の土器編年』でもこの土器を取り上げていますので、考古学的側面はこれらを参考にいただければと思います。

では、レジュメの「はじめに」を御覧下さい。「上っ原遺跡」です。帝京大学キャンパスの土地から出た土器が赤彩球胴甕、赤く塗られた丸みを帯びた甕です。下のほうが欠損していますので、実際にはもう少し長く大きなものです。

これと同形のものが北上川流域でも出ていて、展示されてもいます。これは東北地方固有の土器で、一方「上っ原遺跡」は9世紀の第2から第4四半世紀、西暦でいうと825年から900年ぐらいまでの間の遺跡です。ちょうどこの少し前に、律令国家と東北の「東北38年戦争(774~811)」があり、その戦争で捕虜とされたり、降伏した蝦夷が強制的にこちらに移住させられて、作った土器だと考えられています。

レジュメの最後に年表を上げました。ヤマト王権から律令政府に展開する過程の中で、版図を広げて、北へと進出していきます。これは東北から見れば、侵略を受ける形になります。結果として、ヤマト王権が東北を服属させていく流れとなります。

年表【194ページ参照】で540年~658年が『日本書紀』の記事です。そして下って、794年までが奈良時代です。平安遷都があり、以降は平安時代です。まさに近畿のヤマト勢力、律令政府と東北勢力との争いです。宝亀5年(774)7月に「蝦夷の叛乱」とありますが、反乱といってもこれはヤマト王権側から見た表現です。桃生城を襲撃したとあります。そして、811年、弘仁2年までを「東北38年戦争」という呼び方をしています。これは歴史学用語で、史料にこの言葉が出てくるわけではありません。

811年、弘仁2年、閏(うるう)12月11日に、この年に活躍した東北に遠征した将軍の中で一番有名なのは坂上田村麻呂だと思いますが、その後を継いだ陸奥・出羽按察使(あぜち)の文室綿麻呂(ふんやのわたまろ)が勝利宣言をし

す。実際に勝ったかどうかは際どいところですが、「宝亀五年より当年に至る、すべて卅八歳（さんじゅうはっさい）」、38年もかかってようやく勝ったと宣言します。

「東北38年戦争」、史料には「すべて卅八歳」とありますが、年表さかのぼってみれば、もっと前の『日本書紀』段階から争いがありました。

こうした中で、結果としてヤマト王権、律令政府側が勝利を収めて、東北の人たちはその傘下に入ります。その過程で、中央に連れてこられ、各地に分配・移配された人々を「俘囚」といいます。その一部が、武蔵の地にも来て、この土器を作ったわけです。

そこに至る過程を、文献史学ではどのようなことが言われているのかを見ていきます。

1 夷俘と俘囚

1-1 蝦夷・夷俘・俘囚をめぐる

蝦夷はアイヌ人だという説も昔はありました。今はそういう考え方はほとんどされていません。要するにヤマト側から見て、自分たちの勢力の外にいる東北の人々のことをひっくり返して蝦夷という表現を使っています。ですからその中には、アイヌ系の人もいればアイヌ系でない人もいます。体制側から見て自分たちの体制の埒外（らちがい）にいる東北の人々を蝦夷と呼んでいます。

その蝦夷の中で一部、ヤマト王権側の傘下に入った人々を、夷俘や俘囚といいます。律令国家に帰属した蝦夷です。

実は、「夷俘」と「俘囚」の区別は難しいです。これをさらりと説明できる人はいないと思います。幾つか説を挙げました。

古く大塚徳郎さんは、服属の度合いを増していくと、蝦夷

が夷俘になり、俘囚になると言われました。一方、新野直吉さんや伊藤循さんは、史料上言葉は分かれるが、実質、差はないとしています。

大井晴男さんは、文化的差異で、アイヌ系と非アイヌ系の違いとしますが、史料から文化的差異は抽出できませんので、これは無理かなと思います。

そのほか、【表1】の中にまとめました。

関口明さんは、まずは服属時期の差で、7世紀末から8世紀初頭に服属して、ヤマト王権側から君子部（きみこべ）という姓をもらいます。キミコ部は君子の部と書いたり、公の子の部と書いたり、いろいろな字で書きます。君子部、これはヤマト王権の大王権に服属した君の子の部姓で、そういう名字を与えられた。それが、8世紀初頭以降は、勢力基盤の地名をもらい、地名+キミ（君・公）姓となります。この変化を服属時期の差としました。

「関口（旧）」と書いてあるように、関口さんは後に考えを改めて、最近では支配系統の差だと、考え方をえています。郡に編成されないものを俘囚だと言います。一方、夷俘は郡制の中において、中には郡司という郡の役人になっている者もいます。そうして律令の地方支配の末端として機能しているのが夷俘であるとしています。

吉沢幹夫さんは、俘囚は妻子親族の小規模程度で、それに対して夷俘は部族的な集会で、集団構成の単位の差である、としています。

それから平川南さんは、初見の時期が違うことから、年代差があるとします。今はこの平川説がポピュラーだと思います。俘囚の初見は神亀2年（725）で、帰降して移配された蝦夷です。それに対して夷俘の初見はもっと後の天平宝字2年（758）ですから、30年くらい後になります。それが延暦

【表1】夷俘と俘囚をめぐる所説

	俘囚（浮囚）	夷俘
関口 明（旧） 服属時期の差	七世紀末～八世紀初頭に服属 君子部姓	八世紀初頭以後の服属 「勢力基盤地名+君（公）」姓
関口 明（新） 支配系統の差	郡に編成されない 俘囚郷はある	郡司職に就く者もある 郡制 律令制の地方支配の末端
吉沢幹夫 集団構成単位の差	妻子親族制度	部族的集団 首長層は郡司に任命
平川 南 時期的変化がある	初見は神亀二年（725） 帰降して移配された蝦夷 吉弥候部姓 （夷俘より下位）	初見は天平宝字二年（758） 「俘囚」と帰降して在地で旧来の支配関係を認められたエミシを包括して「夷俘」 延暦十年（791）代～ ①俘囚+帰降した「蝦夷」 ②俘囚以外の帰降「蝦夷」「夷」 弘仁二年（811）～ 夷俘も移配
古垣 玲 地縁的結合の有無 ⇒部族的結合の有無	吉弥候部姓 個人単位・親族単位	①「本拠地地名+君（公）」姓 ② 八世紀～俘囚も含む総称 身分呼称ではない
轡田克史 土地との関わり	土地との繋がりが ない 移配	在地の人間関係を保持

10年代以降(791～)は、「夷俘」の俘は「俘囚」の俘と同じですから、夷俘は従来の夷俘と俘囚の両方を合わせる場合もあるのだとしています。

史料を並べると、確かにこういうことは言えるのですが、イレギュラーな史料もありますから、一筋縄ではいきません。

それから古垣玲さんは、吉弥候部(きみこべ)は個人単位、親族単位の小規模で、一方、夷俘については、もう少し大規模で本拠地プラス地名だとしています。古垣さん自体も新旧の説があり、最初は地縁的結合と言っていたのですが、部族的結合と少しニュアンスを変えています。

轡田克史(くつわだかつし)さんは土地との関わりです。土地との関わりがないのが俘囚で、夷俘は在地の人間関係を保持しているとしています。

これらは、それぞれ合っていると思います。合っているのですが、それだけでは説明できない部分があります。

以上諸説については、最近、法政大学の永田一(はじめ)さんの「日本古代の国家と蝦夷・俘囚」という博士論文が、活字本とはなっていませんが、インターネットで法政大学のホームページからダウンロードして読めます。煩雑な研究史をまとめています。大ざっぱにいうならば、蝦夷と帰降した蝦夷の違いがある。帰降した蝦夷、ヤマト王権に下った蝦夷は俘囚と俘囚以外とがある。一方、夷俘は蝦夷と俘囚の総称である。そして延暦10年代になると変化する。これは平川説に依拠していますが、そんなことを論じています。

非常にややこしくなりますので、一般的にこの件は、文字にする時に、夷俘と蝦夷を「俘囚」でまとめたり、あるいは「エミシ」という片仮名を使って、相違を明確に示さないようにすることが行われます。

きょうの話もそのようになりますが、そうとはいえ、史料に記される表記にのっとって見ていきたいと思います。

そして、幸いなことにというか、この問題の土器は9世紀の土器なので、夷俘と蝦夷の区別が判然としない段階の土器です。そこで、これが夷俘の土器か俘囚の土器かというよりも、広い意味で蝦夷の土器ですという表現を使っても間違いではありません。

1-2 史料に見る「夷俘」と「俘囚」

さて、史料を見ていきます。

【史料1】では、陸奥国の上治郡、「うえはりぐん」と読むのか、「伊治」(これはり)の誤りとするか問題があるのですが、大領外従五位下(げじゅごいのげ)伊治公皆麻呂(あざまろ)

という人が律令国家に反しました。この人は郡司ですから、律令国家の体制内にむしろ支配層にいた人ですが、当時の陸奥地方のトップだった按察使従四位下(じゅしいのげ)紀朝臣広純を殺します。皆麻呂は「もとこれ夷俘の種なり」とありますので、夷俘から律令制下に服属して郡の官人になった段階で、夷俘の身分ではなくなっています。

皆麻呂は、夷俘から律令国家の内部の内民へ転化しています。一般にこの流れは認められるところです。蝦夷から夷俘・俘囚になって一般公民へと内民化します。この流れを内民化政策といいます。一般公民は「調庸の民」や公戸と呼ばれます。調庸の民は何かというと、調と庸は税ですね。税を出す民です。それが一般公民です。

【史料1】

『続日本紀』宝龜十一年(780)三月丁亥(22日)条

陸奥国上治郡〔此治(これはり)郡?〕大領外従五位下伊治公皆麻呂(これはりのきみあざまろ)反す。徒衆を率いて、按察使(あぜち)参議従四位下紀朝臣広純を伊治城に殺せり。(中略)伊治皆麻呂は、本是れ夷俘の種なり。初め事に縁りて嫌ふこと有れども、皆麻呂怨(うらみ)を匿(かく)して、陽(いつわ)りて媚(こび)事(つか)ふ。広純甚だ信用して、殊に意に介さず。又、牡鹿郡大領道嶋奈楯、毎に皆麻呂を凌侮(りようぶ)し、夷俘を以て遇(あしら)ふ。皆麻呂深く銜(ふく)めり。(後略)

【史料2】は、延暦2年(783)です。坂東諸国、いわゆる関東地方に命じて、「蛮夷が華をみだすこと、いにしえよりあり」、この華は中華で、蝦夷以外の中央政権下に服属していることをいうのですが、中央を乱すことがある。「干戈をとるにあらずは、何ぞ民の害を除かん」、これは戦うしかないと言っています。

そして、漢文典籍の引用があって、それと同様に前王、これは桓武天皇の前の光仁天皇ですが、光仁の時代も兵を用いた。ところが最近、夷俘が暴れ回ってまた国境を失ったと言って、坂東に徴発命令が出ています。夷俘はここでは征夷の対象になっています。坂東諸国、関東から、兵や物資が徴発されます。ヤマト王権、律令国家から見ると、関東地方は、兵力や物資の供給源でした。関東の人たちは、九州へ防人として派遣されたり、あるいは東北へ兵士として戦争に動員されたりしました。対蝦夷戦争、対東北戦争に動員されたのは、専ら坂東諸国の人たちです。

永田 一 「日本古代の国家と蝦夷・俘囚」2016(博論、法政大学学術機関リポジトリWeb)

(蝦夷
帰降した蝦夷 (俘囚
俘囚以外 ……吉沢・平川・古垣・轡田
夷俘 (蝦夷と俘囚の総称 ……吉沢・平川・古垣・轡田
延暦十年代に変化(俘囚と異なる帰降蝦夷及び「夷) ……平川・永田

【史料2】

『続日本紀』延暦二年(783)四月乙丑(19日)条

坂東諸国に勅して曰く、「蛮夷夏(か)〔中華〕を猾(みだ)すこと、古(いにしへ)より有り。干戈を資(と)るに非らずは、何ぞ民の害を除かん。是に知りぬ、徂征(そせい)〔討伐〕を有苗(ようびょう)〔南方蕃族〕に加へ、薄伐(はくばつ)〔討伐〕を獯鬻(けんいん)〔北方蕃族〕に奮(ふる)へる。前の王〔光仁帝〕の兵(いくさ)を用ゐること、良(まこと)に以(ゆゑ)有るなり。自頃(このごろ)、夷俘猖狂(しやうきやう)〔暴虐〕にして、辺垂(へんすい)〔国境〕守(まもり)を失ふ。事、已(や)むことを獲ずして、頻(しき)りに軍旅を動す。遂に坂東の境をして調発に疲れしめ(後略)。

漢米公隱賀(うかめのきみおんが)、俘囚吉弥侯部荒嶋(きみこべのあらしま)等を朝堂院に饗す。阿波蘇・隱賀に並びに爵第一等を授く。荒嶋に外従五位下(後略)。

簡単にいうと、ヤマト王権のほうから兵力が東北へ戦争に行つて、東北で降参した人々、「帰降蝦夷」といいますが、あるいは戦いの結果捕虜にした人たちを俘囚として最初は中央に連れてきます。そして朝廷で、これは中国でも行いますが、戦いによって負かした部族を都に連れてきて、皇帝の前にさらします。さらした後に中国では殺してしまいます。日本は原則殺さない。この違いがあります。

殺さないで労力として二次利用するのが日本の例です。そのため各地に移配します。

2 俘囚(夷俘)の移配

2-1 『延喜式』の俘囚料稻

移配先ですが、『延喜式』という平安時代の法令集の中に、どこにどれくらいの夷俘や俘囚がいたのか、人口が推測できる史料があります。それが【表2】です。

諸国に移配した夷俘や俘囚を養うための経費の稲となりますが、その経費を予算計上するのですが、どの国にどれだけ年間の予算計上があるかというのがこの表です。この稲を「俘囚料稻」や「夷俘料稻」といいます。空白がある国は、『延喜式』には記載がありませんが、別の史料から夷俘や俘囚がいたことが分かる国です。

例えば、伊勢国は、大と書いてあるのは、国の等級が大国、中国、上国、下国とあり大国だということです。大国と上国を中心に35国に俘囚料稻が予算措置されています。伊勢は年間1,000束で少ないです。太字になっているのは関東地方

【史料3】では、明らかに夷俘と俘囚を区別していることが分かります。陸奥の夷俘が2人、3人目は俘囚吉弥侯部とあり、夷俘2人と俘囚の吉弥侯部1人を明らかに区別しています。位を与えているのですが、夷俘には爵位を与えて、俘囚には位階を与えています。夷俘と俘囚が明らかに区別されています。吉弥侯部姓というのは、公民となっても俘囚の吉弥侯部という姓(かばね)は存続します。一部はのちに上野や下野姓に変わっていく例もありますが、身分が公民になっても吉弥侯部は残っていきます。

【史料3】

『日本後紀』逸文(『類聚国史』一九〇俘囚)延暦十一年(792)十一月甲寅(3日)条

陸奥の夷俘爾散南公阿波蘇(にさなのきみあわそ)・宇

【表2】『延喜式』の俘囚料稻………大国・上国を中心に35国/合計1,095,509束/推定4549.8人

国名 等級	俘囚料稻	俘囚料稻/ 全出挙稲	推定 俘囚人口	国名 等級	俘囚料稻	俘囚料稻/ 全出挙稲	推定 俘囚人口	国名 等級	俘囚料稻	俘囚料稻/ 全出挙稲	推定 俘囚人口
和泉下				上野大	10000束	1.1%	41人	備後上			
摂津上				下野上	100000束	11.4%	416人	安芸上			
伊勢大	1000束	0.1%	4人	越前大	10000束	1.0%	41人	周防上			
尾張上				加賀上	5000束	0.7%	20人	讃岐上	10000束	1.1%	41人
遠江上	△26800束	3.5%	111人	越中上	13433束	1.6%	55人	伊予上	20000束	2.5%	83人
駿河上	200束	0.0%	0.8人	越後上	9000束	1.1%	37人	阿波上			
甲斐上	50000束	8.5%	208人	佐渡中	2000束	1.2%	8人	土佐中	32688束	6.2%	136人
相模上	28600束	3.3%	119人	丹波上				筑前上	57370束	7.3%	239人
武蔵大	30000束	2.6%	125人	因幡上	6000束	0.8%	25人	筑後上	44082束	7.1%	183人
上総大	25000束	2.3%	104人	伯耆上	13000束	2.0%	54人	肥前上	13090束	1.9%	54人
下総大	20000束	1.9%	83人	出雲上	13000束	1.9%	54人	肥後大	173435束	11.0%	722人
常陸大	100000束	5.4%	416人	播磨大	75000束	6.1%	312人	豊前上			
近江大	105000束	8.7%	437人	美作上	10000束	1.3%	41人	豊後上	39370束	5.3%	164人
美濃上	41000束	4.7%	170人	備前上	4340束	0.5%	18人	日向中	*1101束	0.3%	4人
信濃上	3000束	0.3%	12人	備中上	3000束	0.4%	12人				

※斜体は佐伯部配置国

- (1) 下向井龍彦 2009『<日本の歴史7> 武士の成長と院政』講談社の掲載表を参考に作成改定。太字は<関東>と甲斐。
- (2) 国名のみは『延喜式』では俘囚料稻が計上されていないが、六国史の記事や俘囚郷の存在から俘囚の移配が確認できる国(下向井は俘囚墓と推定される萩市の見島ジューコンボ古墳群の存在から長門国を加えているがここでは省く)。
- (3) 人口は下向井による俘囚料稻からの推計。*日向国の俘囚料稻は承和14年に17600束削減されている。△遠江国は夷俘料。

と甲斐です。武蔵は3万束です。常陸は10万束。それから上野が1万、下野が10万です。下野と常陸が多いのは、陸奥国と接しているからです。対東北戦争においては最前線なので、量が一番多くなってしまいます。九州に比べて、肥後、今の熊本県ですが17万。こども多いです。

【史料4】を見てください。『延喜式』の主税式諸国本稻条の武蔵国です。武蔵国でいうと、1年間の予算措置はこうだと決められています。武蔵国の正税と公廩（くがい）、各々40万束。正税は一般経費、公廩は人件費だと思ってください。武蔵国の国分寺に年間5万束、薬師寺料が4万2,000束、俘囚料は3万束となっています。3万束を全部使うのではなく、3万束を出挙（すいこ）に出します。農民に貸し与えて3割の利子を取ります。9,000束になりますが、それを俘囚料として俘囚のために使います。武蔵国全体の出挙稻から見ると、3万束は2.6%に当たります。常陸は5.4%ですから、全体の20分の1は俘囚のために予算を割いています。

【史料4】

『延喜式』主税式諸国本稻条・武蔵国

武蔵国正税、公廩各卅万束。国分寺料五万束、薬師寺料四万二千束、梵釈四王料七千七百束、文殊会料二千束、薬分料一万束、修理池溝料四万束、救急料十二万束、悲田料四千五百束、俘囚料三万束、勅旨繫御餼馬秣料二千廿束、神埼牧牛直五千五百卅四束、

この出挙稻でどれだけの俘囚を1年間面倒を見られるのかを計算したのが推定俘囚人口になります。いろいろな計算のやり方があり、一例として下向井龍彦さんの算出方法を使っています。下向井さんは、1人の経費が1年間に稻約244束という計算です。そこで、244で全体の俘囚料稻を割ってあげれば、その国の俘囚の推定人口が出ます。武蔵は下向井さんの計算でいうと、俘囚が125人いたことになりませんが、別の計算式をあてはめ、もつと増えて、400人ぐらいだという人もいます。

越中は1万3,433束です。また九州でも、割り切れない数字が並んでいます。何らかの基準から既に変化した段階のものです。特に、日向は1,101束です。これはかなり減っています。実は、日向国は承和14年（847）に1万7,600束を減らしたことが記録に残っています。なぜ減らしたかという、俘囚が死んだからだと記録されています（『続日本後紀』）。俘囚の多いところには俘囚料稻が多くなり、俘囚が減ってしまえば減ります。

単純に推定人数を全部足すと、4,549.8人になります。これだけの俘囚が全国にいたということですが、これは『延喜式』にいたある時期の数値であり、もっとたくさんいた時期があったと思います。『延喜式』の稻数は、結果として定着したある段階の数字と捉えればよいと思います。

その中で、武蔵国には、この表の計算上は1年間に125人の夷俘・俘囚がいました。そのうちの誰かがこの土器を作っ

た可能性があるわけです。

さて、次の【史料5】も『延喜式』です。俘囚料稻は出挙します。農民に貸し出して、その3割の利子を取ります。それを俘囚の資養に充てて、3年分の蓄え以外は正税に編入することになっていますから、無制限に蓄えていくのではなく、余剰分は一般財政に入れていくということです。

史料5 『延喜式』主税式俘囚料条

凡（およ）そ俘囚料稻は、三年の儲を置くの外、正税に混合せよ。

この俘囚料稻の制度がいつできたのかが問題です。表に示したのは『延喜式』です。式とは、律令法令の運用細則ですが、まとめたものが3つあります。年代順に『弘仁式』、『貞観式』、『延喜式』です。『延喜式』は『弘仁式』と『貞観式』を集成して、それにその後の式を加えたものです。『貞観式』は残っていませんが、『弘仁式』は一部残っています。ところが、その『弘仁式』の主税式諸国本稻条には俘囚料稻はどこの国にも計上されていません。ということは、『弘仁式』が成立した弘仁十一年（820）俘囚料稻はなかったことになります。『貞観式』までに成立し、『延喜式』へと引き継がれていったと考えられます。

従って、9世紀の中半あたりまでに、俘囚が諸国に移配されて、その資養のための予算が計上されたことになります。

そして、先にお話ししたとおり、承和十四年（847）には日向国の俘囚料稻が減額されていますから、上限と下限を切れば、820年以降847年以前に、俘囚料稻が成立したことになります。この時期は、後での話のポイントになります。「東北38年戦争」が終わったあと、ちょうど「上つ原遺跡」の時代にあたるわけです。

また、全国的に俘囚が散在していることが分かります。全国に蝦夷がこれだけ配置された、強制移住させられたということです。

2-2 俘囚郷・夷俘郷・俘囚田

そのほか、もう少し具体的な分布が分かるのは、俘囚郷と夷俘郷です。郷は、1郷50戸が基本です。国の下に郡があり、郡の下に郷があります。50戸といっても、今の小家族でなく大家族の50戸ですが、それを郷と呼びます。普通は所在する地名が付くのですが、とくに俘囚郷とされる郷が4つあります。上野国に3つ。碓氷（うすい）郡俘囚郷（群馬県榛名町？）、多胡（たこ）郡俘囚郷（同旧吉井町？。現在は高崎市内）、緑野（みどの）郡俘囚郷（同藤岡市？）です。そして周防国、山口県にも吉敷（よしき）郡に俘囚郷があります。山口市内といわれています。

また、播磨国、兵庫県や岡山県辺りになりますが、賀茂郡の夷俘郷、賀古郡の夷俘郷、美嚙（みのう）郡の夷俘郷があり、これらは残念ながら現在のどこか分かりません。

これらの地には俘囚や夷俘が、強制的に移住させられた蝦

夷の人たちが集団でいたことが分かります。上野国の多胡郡は、渡来人でつくられた郡だと考えられますので、渡来人と蝦夷とが同じ郡内にいたということになります。

夷俘の配置と渡来人の配置は同じ場所であることが多いことが指摘されています。つまり、律令国家から見れば、渡来人も蝦夷も、内民化するためには訓練、言葉を教えたり、生活様式を変えたりさせなければいけませんから、そうした特別な施設というか人員配置が必要です。その意味では、渡来系の人たちも蝦夷系の人たちに対しても同じような感覚を律令体制側は持っていたのでしょう。

後で話しますが、山梨県でいうと、甲斐国の巨麻郡の巨麻は高句麗系です。前回の平野さんのお話にあったかもしれませんが、武蔵の蝦夷はもしかするとこの巨麻郡からやってきた蝦夷で、一度、巨麻郡に配置された後に、こちらへ移住して来たともいわれています。

巨麻郡も渡来系と蝦夷が重層的になっている部分です。内民化させるための教育センターのようなものが、ある程度場所が決まって置かれていた可能性があります。

さて、もう一つ、俘囚田というものがあります。俘囚田から上がった田租、利益を、俘囚のために使うことになっていました。その俘囚田が、置かれた国が3国だけ分かっています。上総・下総と備後です。上総に8町、下総に5町、備後

に10町です。これは延喜14年(914)の太政官符(『政事要略』)から分かる数値なので、以前は他の国にもあったかもしれませんが、数字はもっと多かっただろうと思います。また、後でお話するのですが、上総と下総に俘囚田があることを覚えておいてください。

2-3 俘囚の移配記事

さて、平安時代の史料から蝦夷の置かれた国・郡・郷を見ましたが、次に俘囚の移配記事を確認していきましょう。【表3】です。

1番から16番まであり、史料に「夷俘」と書かれているものは6番です。その他は「俘囚」となっています。

最初は神亀2年(725)ですから、奈良時代の初めのほうです。この前年、神亀元年に、「海道蝦夷」、常陸国の東海道側から東北のほうへと続く太平洋沿岸にいる蝦夷のことで、反乱を起こしています。そのときの帰降者や捕虜だろうと思います。その人たちは平城京に連れてこられて、閏正月4日ですから、正月の儀式に捕虜として参列させられたはず。その後、分配するのです。先ほども言ったとおり、中国だとこれを処断してしまいます。日本では原則それはありません。殺さないで、伊予に144人、筑紫は九州全体を指

【表3】俘囚の移配記事

	年・月・日	移配前	移配後	人数	理由	出典
1	神亀2年(725) 閏正月4日	(陸奥)	伊予 筑紫 和泉監	144 578 15	(俘囚) 神亀元年の反乱「海道蝦夷」の帰降者や捕虜か。正月拝賀儀に参列後移配された。	続日本紀
2	天平10年(738)	陸奥	摂津職⇒筑後	115 62	(俘囚) 天平9年の出羽路開削に伴う帰降者か⇒東国防人と西国警備を交替	天平10年駿河国正税帳 天平10年筑後国正税帳
3	宝亀7年(776) 9月13日	陸奥	大宰管内諸国	395	(俘囚)	続日本紀
4	宝亀7年(776) 11月29日	出羽	大宰管内と讃岐 諸司及び参議以上に賤として班賜する	358 78	(俘囚) 宝亀6年の桃生城を侵略した「海道蝦夷」や宝亀7年5月「出羽国志波村賊叛逆」に関わる帰降者や捕虜か →防人か	続日本紀
5	延暦14年(795) 5月10日	陸奥	日向	66	俘囚吉弥侯部真麻呂を殺害した俘囚大伴部阿豆良等妻子親族を配流	類聚国史
6	延暦17年(798) 6月21日以前	(陸奥)	相模・武蔵・常陸・上野・下野・出雲★		「帰降夷俘」移配の初見 時服・禄物を毎年支給	類聚国史
7	延暦18年(799) 12月16日	陸奥	土佐	4	(俘囚) 野心改まらず賊地と往還	日本後紀
8	延暦19年(800) 3月1日	(陸奥)	出雲★	60余	(俘囚) / 陸奥の俘囚の移配の終見 <★出雲で弘仁五年(814)俘囚の乱あり>	類聚国史 (類聚国史)
9	延暦24年(805) 10月23日	播磨	多嶺嶋	10	(俘囚) 野心改まらず	日本後紀
10	大同元年(806) 10月3日	近江	大宰府	640	夷俘を防人にあてる	類聚国史
11	弘仁11年(820) 6月11日	因幡	土佐	6	(俘囚) 百姓の牛馬を盗む	類聚国史
12	弘仁14年(823) 5月5日	甲斐	伊豆	13	賊首吉弥侯部井出磨等老少男女13人配流	類聚国史
13	天長8年(831) 2月9日	甲斐	駿河		俘囚吉弥侯部三氣麻呂・吉弥侯部草手の二烟を「駿河国に附貢す。魚塩に便なり」	類聚国史
14	天長9年(832) 12月20日	伊予	阿波	5	(俘囚) 情願にしたがう	類聚国史
15	貞観11年(869) 12月5日	諸国	大宰府		要所に分番させ新羅海賊に備える(俘囚・夷俘・俘夷の表記が混用)	日本三代実録 類聚三代格
16	寛平7年(895) 3月13日	諸国	博多警固所	50	新羅凶賊に備えるため夷俘50人を増員	類聚三代格

しますが、九州に 578 人、大阪の和泉に 15 人移配しています。

それから、天平 10 年 (738) には、陸奥から摂津を經由して筑後国に俘囚が 115 人、移動させられています。【史料 6】の天平 10 年「駿河国正税帳」です。天平 10 年に、駿河国、静岡県で正税 (田租) を何に使ったのかという書き上げ帳です。その中に「陸奥国より摂津職へ送る俘囚の部領使相模国余綾 (よろぎ) 団大毅 (たいき)」とあります。これは陸奥から摂津まで、俘囚を引率した部領使や俘囚に、駿河国通過中の食料を配った記録です。俘囚が何人通ったかという、115 人とあります。彼らが東北から静岡県を通過して大阪、摂津まで連れていかれたわけです。途中の国々が食料を与えています。〔余綾団大毅の引率は駿河国府まで〕

【史料6】天平十年 (738) 「駿河国正税帳」

從_一陸奥国_一送_一摂津職_一俘囚部領使相模国余綾団
大毅大初位下丈部小山上_一口_一從_一口_一
三郡別一日食為単陸日_上三_口從_三口_一
俘囚部領大住団少毅大初位下当麻部国勝_上一_口從_一口_一
三郡別一日食為単陸日_上三_口從_三口_一
当国俘囚部領使史生從八位上岸田朝臣継手_上一_口從_一口_一
三郡別一日食為単陸日_上三_口從_三口_一
俘囚部領安倍団少毅從八位上有度部黒背_上一_口從_一口_一三
郡別一日食為単陸日_上三_口從_三口_一
(中略)
從_一陸奥国_一送_一摂津職_一俘囚壹伯壹拾伍人部_從六_郡
別半日食為單參伯肆拾伍日_從

そして同じ年の天平 10 年、筑後国、福岡県の正税帳には、俘囚 62 人に稲を支給したという記事がありますから、115 人のうち少なくとも 62 人は、摂津の大阪湾から瀬戸内海を船で九州まで連れていかれたことが分かります。

何のために九州まで連れていかれた。この時の事情は分かりません。天平 10 年には東国の防人が停止されています。関東地方から九州へ行った防人がこの年は停止されて帰っている年です。その代わりに、俘囚が九州へ連れていかれます。先にみた神亀 2 年にも、筑紫に 578 人が連れていかれています。

3 番の宝龜 7 年 (776) にも、大宰府管内、九州諸国に 395 人連れていかれています。4 番も宝龜 7 年です。大宰府と讃岐に 358 人連れていかれます。この年は何かというと、前年の宝龜 6 年に「東北 38 年戦争」の発端となった蝦夷の桃生城攻撃があります。その戦いの捕虜や帰降者だと思われていますが、彼らが九州まで連れていかれた理由は、まさに防人として動員されたのだろうと考えられます。

こうして見ていくと、表の 10 番【史料 7】で、大同元年 (806) にも近江国の俘囚が大宰府まで連れていかれています。この時は、それを防人に充てることが史料に書かれています。名称としては、防人というかどうか分かりませんが、防人と同様の役割を与えられたということです。

【史料7】

『日本後紀』逸文 (『類聚国史』一九〇俘囚) 大同元年 (806) 十月壬戌 (3 日) 条

勅すらく、「夷俘の徒、化を慕ひ内属す。要害の地に居かば、不虞 (ふぐ) に備うるに足る。宜しく近江国に在る夷俘六百四十人を大宰府に遷し置きて、防人と為すべし。国毎に、掾 (じょう) 已上一人を、其の事に専当せよ。驅使 (労働徴発)・勘当 (法の適用) は平民と同じくすること勿 (なか) れ。情を量り宜に随ひ、野心を忤 (みだ) さざれ。禄物・衣服、公粮・口田の類は、男女を問はず、一に前格く延暦 20 年格かゝに依れ。但し、防人の粮は終に口、永 (とこしえ) に口分田を給ふは、前の防人の乗田 (余剩田) 等を以て給へ。其れ去んぬる年置く所の防人四百十一人は、皆宜しく停廢すべし」と。

注目すべきは 6 番【史料 8】です。延暦 17 年 (798) に陸奥から相模、武蔵、常陸、上野、下野と出雲に「帰降夷俘」が移配されたとあります。陸奥国と接している坂東の各国に移配されています。これが、陸奥国以外に配置された、夷俘という表現が出てくる初見記事になります。夷俘はこれらの国に移配されて、食料や衣服を与えられています。

出雲は少し突飛です。なぜ出雲なのか、いろいろ考えがあります。延暦 19 年 (800) にも出雲に移配されています。表の 8 番です。出雲の俘囚は弘仁 5 年 (814) に反乱を起こしています。実はこの時期に出雲の地が対外的にどのような役割を与えられているかという、渤海や新羅に対しての最前線となります。ですから、恐らく出雲に移配された夷俘も、九州の防人と同様に海岸警備の役割が与えられていたのだろうと思います。

【史料8】

『日本後紀』逸文 (『類聚国史』一九〇俘囚) 延暦十七年 (798) 六月己亥 (21 日) 条

勅すらく、「相模・武蔵・常陸・上野・下野・出雲等国の帰降せる夷俘、徳沢を是れ憑 (たの) む。宜しく毎に撫恤 (ぶじゅつ) を加へ、帰望無からしむべし。時服・禄物は年毎に給へ。其の資粮罄絶 (けいぜつ) せば、事須 (すべか) らく優恤すべし。時節の饗賜等の類に及べば、宜しく国司に命じて且つは行ひ、且つは申すべし。自余の須いる所は先に申して後に行へ。

以下、12 番と 13 番は甲斐国が出てきます。後でまた触れますので注意しておいてください。12 番【史料 9】では、甲斐国から反乱を起こした賊首吉弥侯部のなにかしら男女 13 人が、伊豆国に流刑になっています。それから 13 番の天長 8 年 (831) には、これはいい意味で、甲斐から駿河に移動しています。その理由は「駿河国に附貫す。魚塩に便なり」(『類聚国史』) とあります。恐らくこの俘囚は漁業や塩業に

長けていた、そこで駿河国側がその技術を求めて、再配置されたのだらうと思います。武力に限らず、こうした職能を持っていることが、移配の理由になります。

【史料9】

『日本後紀』逸文(『類聚国史』八七配流)弘仁十四年(823)五月戊午(5日)条

甲斐国の賊主吉弥侯部井出麻呂等、大少の男女十三人、悉く伊豆国に配流す。

蝦夷の移配については、もっとさかのぼった時期から行われています。

『日本書紀』の景行天皇の時代の史料にもそうしたことが見えています。簡単に触れておきます。【史料10】です。史実かどうかはさておき、このとき伊勢神宮にやはり蝦夷がいました。捕虜として連れて来られたのでしょうか、それが騒いでしょうがないので、伊勢神宮のそばに置くのはまかりならんということになり、播磨、讃岐、伊予、安芸、阿波などに再配置し、彼らは今(『日本書紀』の編纂時)、この5国の佐伯部の先祖だとあります。

【史料10】

『日本書紀』景行天皇五十一年八月壬子(4日)条

是に、〔伊勢〕神宮に献れる所の蝦夷等、昼夜喧譁(なりとよ)きて、出入に礼(あや)無し。時に倭姫命(やまとひめのみこと)曰く「是の蝦夷等は、真宮に近づくべからず」とのたまふ。則ち朝庭に進上す。仍りて、御諸山(みもろやま)の傍(かたわら)に安置せしむ。未だ幾時(いくばく)を経ずして、悉に神山の樹を伐り、隣里(さと)に叫び呼ばひて、人民を脅(おびやか)す。天皇聞しめして、群卿に詔して曰く「其の神山の傍に置く蝦夷は、是本より獸心有り。中国(うちつくに)に住ましめ難し。故に其の情願に随ひて、邦畿(くに)之外(とつくに)に班(あか)ちつかはせ」とのたまふ。是れ今、播磨・讃岐・伊予・安芸・阿波、凡(すべ)て五国の佐伯部の祖(おや)なり。

佐伯部は、蝦夷系となります。安芸国に佐伯郡という郡もあり、俘囚・夷俘の配置の前をさかのぼって、ヤマト王権は降伏した蝦夷をあちこちに移配しています。伝承的な部分もありますので、これは紹介までで止めますが、播磨、讃岐、伊予、安芸、阿波も俘囚や夷俘の配置国になっていますから、伝統的に受け入れる素地があったことは確認できます。

さて、俘囚や夷俘の対策としてどこに移したかを話しました。その目的をもう少し細かく見ていきましょう。

3 律令国家の俘囚(夷俘)対策

3-1 俘囚移配の目的

なぜ彼らは移配されなければならなかったのか、律令国家は何を俘囚に求めたのかということです。

俘囚の「囚」は囚人の「囚」ですから、簡単にいうと、そもそも虜です。捕虜を連れてくるということです。そして中央で、ある意味戦利品としてさらす行為が行われるのは事実ですが、日本の場合、それほど単純なことではありません。

蝦夷勢力を分散させるとか、あるいは中華思想、これは、大帝国主義は中国が持っていて、日本は小帝国主義といって、大帝国には勝てないけれども日本列島の内部で日本型の小中華主義を持つというイデオロギーがあります。

それには、展示会場に解説図もありましたが、四方に蕃族がいて、真ん中に中華すなわちヤマト王権があるというのが日本の中華主義なので、蝦夷はその蕃族になります。その蕃族を中央に連れてきて順化させるという行為は、中華思想の一つの具現化です。そして内民化政策を取って彼らと内民を混在させます。律令国家は北方へ版図を広げていきます。そこで税を取ったり、労働力を取ったりしなければなりませんから、一般の公民と蝦夷とを同化させるやり方を取るわけです。

そうすると、北からは蝦夷を中央へ連れていきます。一方、東国あたりからは柵戸といって、一般公民や犯罪による処分もあるのですが、逆に公民を北へと送り込みます。そうして人々を同一化させていくわけです。ただ、東北へ送り込まれた柵戸の人数が俘囚より多過ぎますので、行った数と来た数を、同数に調整してはしません。ただ、関東の人が東北へ行って、東北の人が関東から近畿へ来たということが、この時代に意図的に行われているわけです。

そして先ほども触れましたが、中国では献捷(けんしょう)儀礼といって、捕虜は皇帝御覧のあとで、公開処刑してしまいますが、日本では原則的に処刑しないで、かといって連れてきた者をいつまでも都に置くわけにもいきませんから、地方に分配するという説もあります。最近の河原梓水(あずみ)さんの説です。

そして、殖産があります。蝦夷は、土器生産や馬の飼育、訓練に長けています。そして漁業や山林業。それから、先ほど魚塩の技術により甲斐から駿河へ移動した俘囚がいた話をしました。漁業、山林業、製塩業などの技術を持っていますから、その技術を殖産興業的にあちこちに分配させたという考え方もあります。

どれか一つということではなく、色々な要素が複合的、あるいはケース・バイ・ケースで行われたのが蝦夷の移配になります。

ただ、流れていいうならば、奈良時代は西国警備に防人的に使ったのが最初だらうと思います。これは戦争の捕虜や投降者を懲罰的に警護役にあてたり、あるいは、貴族階級の賤民(せんみん)として、つまり奴婢(ぬひ)として使うこともしています(【表3】の4番)。

それから常陸国の鹿島神宮には賤民が非常に多いのです

が、その賤民も出所は恐らく蝦夷です。ヤマト王権や律令国家が東北征伐、東北へと進んでいくときのイデオロギー的な神様は、武神である鹿島神宮の神です。従って降伏した者、捕虜にした者を鹿島神宮に寄進し神賤とすることが行われました。福島県から宮城県にかけては、鹿島神宮の分祀社が多く分布しています。それも征服していった、押さえていった土地に、鹿島の神を灌頂して、そこを律令国家の祭祀の中に取り込んでいった結果になります。

それが蝦夷移配のはじめです。懲罰的な意味があったのですが、平安時代になると、二次的な移配や先ほど言った職能活用の移配などが見られてきます。蝦夷の新たな移配が始まって、特に東北戦争の中で律令国家側が多大な捕虜を取りますので、それが二次的に配置されたのが平安期の移配の特色です。そして、その面倒を見ないといけませんから、俘囚料稲が設置されていったという流れになります。

武芸的才能の防人としての軍事利用がもともとでありました。そして内民化して、いつまでも蝦夷や夷俘だということではなく、公民と同一化させて、調庸の民として再編成していくという形を取りました。これは実際にはなかなかうまくいっていないようですが、少なくとも律令国家側はそういう流れの政策を立てています。

レジュメに俘囚移配の目的として大別して2つをあげました。まず、(1)として、「武力利用、防人・西国警護」の史料を幾つかあげました。『続日本後紀』に「弓馬の戦闘は夷獠(いりょう)の生習なり」(承和4年2月8日条)とあります。弓矢、馬の戦いは、蝦夷の持って生まれた才能であり「平民(一般公民)の十にしてその一にかなわない」ともあります。承和4年(837)の太政官符でも「弓馬の戦闘は夷狄(いてき)の長ずるところ。平民の数、十にしてその一にかなわず」。貞観11年(869)官符もそうです。「一をもって千に当たる」という一騎当千、蝦夷1人で、一般公民1,000人の力がある。こうした評価をしていますから、まさに防人や西国警備にはもってこいなのです。

さきほど見た【史料7】の大同元年(806)の『日本後紀』逸文では、なぜ「夷俘」を内地に置くのかというと、「要害の地において、不慮に備えるためだ」としています。近江国の夷俘640人を大宰府に移して防人とするのとおり、彼らには兵力が期待されていました。

3-2 俘囚から「調庸の民」へ

その一方で、内民化政策で公民化して「調庸の民」にしなればいけないというのが、俘囚移配の目的の(2)「公民化……調庸の民へ」です。

蝦夷は俘囚となり、王民、公民になるという方向で進んでいきます。最初、彼らは調庸の民ではありません。【史料11】に「俘囚の名を除きて調庸の民となる」とあります。逆に言えば、俘囚の名が付いていると調庸の民にはなれません。すなわち、税負担をしないということです。

【史料11】

『続日本紀』神護景雲三年(769)十一月己丑(25日)条

陸奥国牡鹿(おじか)郡の俘囚外少初位上勅七等大伴部押人言さく、「伝へ聞かば『押人等は本是れ紀伊国名草郡片岡里の人なり。昔者(むかし)、先祖大伴部直が夷を征(う)ちし時、小田郡嶋田村に到りて居りき。其の後、子孫夷の為に虜(とりこ)にせられて、代(よ)を歴(へ)て俘と為れり』ときく。幸に聖朝運を撫(ふ)し、神武辺を威(い)すに頼りて、彼の虜庭(りよてい)を抜けて、久しく化民(けみん)〔→俘囚〕と為る。望む請ふらくは、俘囚の名を除きて、調庸の民と為らむことを」とまうす。これを許す。

この『続日本紀』の【史料11】神護景雲3年(769)と次の【史料12】宝亀元年(770)の記事は、間違えて俘囚に組み込まれた人たちを元に戻す内容ですが、彼らが望んでいるのは「俘囚の名を除いて、調庸の民」となることです。変な言い方ですが、俘囚をやめて税を払いたいと言っているのです。中華思想でいえば、俘囚は慈愛する対象になりますから、税は取りません。逆に、一般公民化すると税を払うのです。どちらがいいのでしょうか。一般公民となれば、税を払うが、その見返りとして地位・権限、あるいは官人となる可能性を保障されます。俘囚のままだと、差別される存在だけれども、税は免除される形になります。

【史料12】

『続日本紀』宝亀元年(770)四月癸巳(朔日)条

陸奥国の黒川・賀美等一十郡の俘囚三千九百廿人言して曰はく「己等の父祖、本是れ王民なり。而(しか)れども夷の為に略せられて、遂に賤隸〔捕虜〕と成る。今、既に敵を殺して帰降し、子孫は蕃息す。伏して願はくは「俘囚の名を除きて、調庸の貢を輸(いた)さむことを」といふ。これを許す。

【史料13】の延暦17年(798)太政官符もそうです。「俘囚の調庸をゆるすこと」、免除することを命じています。

延暦年間以降、俘囚から調庸を取ろうとするのですが、やはり取れないのです。

「大宰府の解を得るにいわく」「所管する諸国の解にいわく」、大宰府管内の国からこういう申請がありました。「くだんの俘囚ら、常に旧俗を存し、昔の陸奥にいたときの古い形態をいまだに持っていて、「いまだ野心を改めず、狩漁をなりわいとし、養蚕を知らず」、狩りや漁業で養蚕、蚕を飼うことを知らない。蚕を飼うのは先進技術です。「しかのみならず、居住定まらず、浮遊すること雲のごとし。調庸をはたるに至らば山野に逃散す」、税を取ろうとしても逃げてしまふ。どうしたらいいか」という申請を大宰府が中央政府にするわけです。結果として、俘囚となった本人(正身)は税を免除して、子ども(蕃息)の代になったら取りなさいと言っているのが、この太政官符の内容です。

【史料13】

『類聚三代格』延暦十七年(798)四月十六日太政官符

太政官符

応に俘囚の調庸を免(ゆる)すべきの事

右、大宰府の解を得るに倂(いわ)く「所管する諸国の解に倂く『件の俘囚等、恒に旧俗を存し、未だ野心を改めず。狩漁を業(なりわひ)とし、養蚕を知らず。加以(しかのみならず)、居住定らず、浮遊すること雲の如し。調庸を徴(はた)るに至らば、山野に逃散す。未進〔税の中央への進上〕の累は、職此之由(もととしてこれによる)。望み請ふらくは、正身を徴ることを免(ゆる)し、蕃息に至りて始めて課役を徴らんことを。然らば則ち、俘囚漸(ようや)く華の俗を習ひ、国司永(とこしえ)に後の煩(うれ)ひを絶つ』者。府〔大宰府〕、覆検を加ふるに、陳(のぶ)る所、理(ことわり)有り。謹しんで官裁を請ふ」者。大納言従三位神王(みわおう)宣す、「勅を奉(うけたまは)るに、請に依れ」者。諸国も此に准(なぞら)へよ。

延暦十七年四月十六日

このころ、調庸の徴収は困難で、俘囚本人は免除して、子孫から徴収しようと変わっていきます。このことは後の【史料14】も結果として同じです。陸奥国の遠田郡の人たちですが、「己らいまだ田夷(でんい)の姓を脱せず、長く子孫の恥だ」と。蝦夷と呼ばれているのは、田夷の姓が付いているのは恥だから、公民としてほしい。今までもらっていた禄も要りません、長く課役を奉りますと言います。アメとムチで、一般公民化するけれども、それなら税を取る、ただし他の夷俘も同様に課税したいので、その勧誘のために「一身」つまりその人本人一代は免除する、ということです。

【史料14】

『日本後紀』弘仁三年(812)九月戊午(3日)条

陸奥国遠田郡人勳七等竹城公金弓等三百九十六人言わく「己等未だ田夷の姓を脱せず、永に子孫の恥を貽(のこ)す。伏して請ふらくは本姓を改めて公民と為り、禄を給ふことを停められ、永く課役を奉らんことを」者。勅すらく「可なり。唯し卒(にわ)かに課役に従はば、遺類〔他の夷俘〕に勸むるに難あり。宜しく、一身の役を免すべし」。(後略)

また、【史料15】では、常陸国の俘囚が帰化して二〇年たっているから、編戸民となり課役に従事したいと自ら申し出たのを常陸国衙が中央に進上しています。このときも特例として恐らく一代限りの課役が免除されたのですが、基本的には公民になると税がかかります。

【史料15】

『日本後紀』逸文(『類聚国史』一九〇俘囚)弘仁十三年(822)九月癸丑(26日)条

常陸国言さく、「俘囚吉弥侯部小槻麻呂云ふ『己等(おのれら)朝化に帰してより、廿箇年を経て、漸(ようや)く皇風に染(し)み、兼ねて活計することを得たり。伏して望むらくは、編戸の民と為りて、永えに課役に従はんことを』者(てへり)」と。勅すらく、「夫れ化を仰ぐの情(こころ)、信(まこと)に愍(あわれ)む可き有り。宜しく公戸に附するを聴(ゆる)し、課役を科すこと莫(な)かるべし」と。

しかし、俘囚の公民化すなわち、調庸の民への転換はなかなか困難でもありました。

【史料16】は、陸奥国の俘囚が蝦夷の賊地と行ったり来たり不穏な動きがあるので、土佐国に流すという措置です。

【史料16】

『日本後紀』延暦十八年(799)十二月乙酉(16日)条

陸奥国言さく、「俘囚吉弥侯部黒田・妻吉弥侯部田苺女、吉弥侯部都保呂・妻吉弥侯部留志女等、未だ野心を改めず、賊地に往還す」と。因りて身を禁じて進送し、土佐国に配す。

そして【史料17】では、夷俘はオオカミの性格をいまだに改めない。「夷狄を招いて中央に入れる」のはなぜかという、「野俗を変じて風化になびかせるためだ」と言っています。中華思想のイデオロギーがもろに出ています。移配は野蛮な未開部族を王民として教養するためだということです。甲斐国の夷俘についてであることが留意点です。

【史料17】

『日本後紀』逸文(『類聚国史』一九〇俘囚)延暦十九年(800)五月己未(22日)条

甲斐国言さく、「夷俘等、狼性未だ改めず、野心馴し難し。或は百姓を陵突し、婦女を奸略し、或は牛馬を掠め取り、意に任せて乗用す。朝憲に非(あら)ざるよりは、暴を懲(とが)すこと能はず」と。勅すらく、「夫れ夷狄を招きて、以て中州に入るは、野俗を変じて、以て風化に靡(なび)かしめんが為なり。豈(あ)に彼の情に任せて、此の良民を損はんや。宜しく国司懇々と教諭し、若(も)し猶改めざれば、法に依りて科処すべし。凡そ厥(そ)の夷を置く諸国も亦(また)同じく此に准へよ」と。

3-3 移配された俘囚の待遇

次に移配された俘囚の待遇を見ていきます。衣食住は支給してはいます。無理やり連れてこられていますから、保護

がないと自活できません。調庸は免除です。後には取ろうとするのですが、いろいろあった結果、本人は免除して子どもの代から取ることになります。また、【史料18】にあるように、延暦20年(801)以前は、口分田は与えられていませんでした。口分田を持つというのは公民の一つの特権です。延暦20年になって、律令国家が対東北戦争に完全に勝利したことを認識する段階になってくると、口分田の班給をしますが、それも最初の6年は田租を免除しています。

【史料18】

『日本後紀』逸文(『類聚国史』一九〇俘囚)弘仁七年(816)十月辛丑(10日)条

勅すらく、「延暦廿年の格に云ふ『荒服の徒、末だ風俗に練れず。狎(な)れ馴(な)るるの間田租を収めず。其の徴収の限は、後の詔を待て』者。今夷俘等、帰化して年久しく、漸(ようや)く華風に染まる。宜しく口分田を授け、六年已上を経れば、従いて田租を収むべし」と。

このような税制の免除処置は、在地であつれきをいろいろ生むと思います。渡来人と一般的な倭人との関係もそうですが、渡来人も蝦夷も税制免除の優遇を受けています。その際、同じ地域に、一般的な班田農民がいた場合にどう思つかは、なかなか難しいところです。彼らには税がない。むしろ彼らを養っているのは、日本人、倭人の税です。当然あつれきあるはずですが、史料になかなか出てきません。蝦夷や渡来人の一部をまとめて移配するのは、一つにはそうした倭人との衝突を避ける意味もあると思います。俘囚郷は完全にそうです。1カ所に集めておいたほうが、お互いにとって安全なのです。言葉も通じませんし、対立もありますから、やはりいろいろ問題が出てくると思います。それはまた後で触れます。

3-4「夷俘」の初見と移配

時間もなくなってきました。すでに触れてもいますので、はしょっていきます。

【史料19】の『続日本紀』天平宝字2年(758)の記事が、「夷俘」の初見です。新来の夷俘は陸奥国内に配置し、投降しないエミシに対して防御します。「夷を以て夷を制す」です。

【史料19】

『続日本紀』天平宝字二年(758)六月辛亥(11日)条

陸奥国言さく、「去年八月以来、帰降する夷俘、男女惣て一千六百九十余人なり。或は本土離れ、皇化に帰慕し、或は身を戦場に涉りて、賊と怨(うらみ)を結ぶ。惣て是れ新来にして、良(まこと)に未だ安堵せず。亦、夷の性は狼心にして、猶予して疑多し。望む請ふらくは、天平十年閏七月十四日勅に准へて、種子を量り給ひ、田を佃ることを得さしめ、永(とこしえ)に王民と為し、以て辺軍に充てむことを」、これを許す。と

ついで、すでにみた【史料8】の『日本後紀』逸文の延暦17年(798)の記事では、相模・武蔵・常陸・上野・下野・出雲に夷俘を配したとあり、食料を配るとあります。最初に俘囚を配置していたのは専ら西国で、防人の代わりや西国警備に充てていましたが、この段階になると、関東にも配置していることが分かります。武蔵にも配されています。そして出雲にも移配されているのはすでにお話ししたとおりです。「俘囚」ではなく「夷俘」としては、陸奥国以外への移配の初見です。

その二年後、【史料20】は、征夷大將軍以下長い肩書きがありますが、坂上田村麻呂に命じて「諸国の夷俘を檢校(けんぎょう)せよ」、監督せよという意味です。この段階で既に諸国に、夷俘が配されていることが分かります。

【史料20】

『日本後紀』逸文(『類聚国史』一九〇俘囚)延暦十九年(800)十一月庚子(6日)条

征夷大將軍近衛權中將陸奥出羽按察使從四位上兼行陸奥守鎮守府將軍坂上大宿祢田村麻呂を遣して、諸国の夷俘を檢校せしむ。

そして【史料21】『日本後紀』の弘仁2年(811)の記事。弘仁2年になると方針が変わってきます。「東北38年戦争」が終わった段階です。夷俘は中国(なかつくに)、中央に配置せよとあります。「その(帰降した)蝦夷は請うによりて中国に移配せよ」です。ただし俘囚は、「本土」すなわち陸奥及び出羽国に置けと。ここで「夷俘」と「俘囚」の扱いが変わってきます。この辺が「夷俘」と「俘囚」の差異が分からなくなるところです。区別しているときと区別していないときがあるのです。また「新獲の夷」、新たに獲得した蝦夷は「速やかに中央に送れ」と言っています。この「新獲の夷」と「夷俘」と「俘囚」との関係がどうなのかは、考え方がいろいろあります。

煩雑になりますので、これ以上は触れません。

【史料21】

『日本後紀』弘仁二年(811)十月甲戌(13日)条

征夷將軍參議正四位上行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂等に勅して曰わく、「今月五日奏状を省るに、新獲(ごんかく)し稍や多くして、帰降少なからず。將軍の経略、士卒の戦功、此に於いて知りぬ。其の蝦夷は、請に依りて、須らく中国(なかつくに)〔陸奥・出羽以外〕に移配すべし。唯し、俘囚は、便宜を思量して、本土〔陸奥・出羽〕に安置せん。勉めて教諭を加へ、騷擾(そうじょう)を致さしむること勿(なか)れ。又新獲の夷、將軍等の奏に依りて、宜しく早かに進上すべし。但し、人数巨多(こた)にして、路次堪え難し。其の強壯の者は歩行せしめ、羸弱(るいじやく)の者には馬を給へ。

【表4】東北38年戦争<宝亀五年～弘仁二年)>終結後の俘囚・夷俘政策

	年・月・日	内容	出典
1	弘仁2年(811)2月8日	諸国に居住する夷に対し、子供の代まで公根を支給することを定める	日本後紀
2	弘仁2年(811)3月11日	諸国に俘囚計帳(課役台帳)を進上させる⇒課役促進	日本後紀
3	弘仁3年(812)6月2日	諸国に夷俘長を置く	日本後紀
4	弘仁3年(812)9月3日	陸奥国遠田郡の田夷396人を公民とし、課役は特に一代を免ず→【史料14】	日本後紀
5	弘仁4年(813)2月25日	俘囚を公民同様に賑給(災害時の救済)の対象とする	日本後紀
6	弘仁4年(813)11月21日	播磨・備前・備中・筑前・筑後・肥前・肥後・豊前の国々の夷俘専当国司を定める	類聚国史
7	弘仁4年(813)11月24日	諸国の介以上一人を夷俘専当国司に定める	類聚国史
8	弘仁5年(814)12月1日	「官人百姓」が「帰降夷俘」を「夷俘」と呼ぶことを禁じ、姓名または官位で呼ぶことを定める	日本後紀
9	弘仁6年(815)正月15日	摂津・美濃・丹波・播磨等の国の夷俘で、五品の者の節会への参加を許す	日本後紀
10	弘仁7年(816)10月10日	延暦二十年より留保していた口分田の田租について、口分田班給後、六年以上経つた夷俘から田租を徴収することを定める【史料18】	類聚国史
11	弘仁8年(817)9月10日	常陸国の申請により前年に定めた夷俘の田租徴収を免除することを許す	類聚国史
12	弘仁11年(830)～	諸国俘囚料稲(夷俘料稲)の成立⇒陸奥・出羽経費負担の軽減、諸国分担	延喜式
13	承和14年(847)7月4日	日向国の俘囚に死者が多く生存者が少ないので俘囚禄料稲17600束を削減する	続後紀

3-5「上つ原遺跡」の時代

【表4】は、「東北38年戦争」が終わった後の対俘囚・蝦夷政策です。いよいよ「上つ原遺跡」の時代になります。

表の1番からいきます。弘仁2年(811)、諸国に居住する蝦夷に対し、子どもの代まで食料を支給する。孫の代になったら食料を支給しない。調庸は子どもの代から取る。世代ごとに時間差をかけながらも、一般公民化させていきます。

2番も弘仁2年で、俘囚計帳を作らせています。計帳というのは税の台帳です。税をきちんと取ろうと考えています。

3番は翌弘仁3年で、夷俘長、夷俘のリーダーをきちんと設けなさい。

4番は、【史料14】です。すでに触れました。

5番は、弘仁4年(813)、災害に遭ったときに、今までで公民だけ援助して、夷俘は対象になっていなかったのですが、「民夷(みんい)を論ぜず」という言葉のように、今後は公民も夷俘も一緒に救済をします。地震などのときです。

6番、7番も弘仁4年で、国ごとに国司は何人もいるのですが、夷俘対策の担当の国司を決めてきちんとやりなさいと言っています。責任を明確にします。

8番は弘仁5年(814)、帰降した夷俘を「夷俘」と呼ぶことを禁じ姓名または官位で呼ぶことにする。ですから、差別するなということです。

9番は弘仁6年で、夷俘の五位のものに正月節会への参加を認めます。

10番、弘仁7年、とうとう、延暦20年(801)から留保していた口分田の田租を口分田から徴収し始めます。先にみた【史料18】です。

そして、12番と13番、弘仁11年(820)以降承和14年(847)に、先ほど話した俘囚料稲を全国に設けるようになります。それ以前は、陸奥と出羽の経費負担が多かったので、諸国で分担したのだという考え方でいいと思います。

4 東国の俘囚(夷俘)

4-1 俘囚の反乱

最後に東国の俘囚をもう一度確認して終わりにしたいと思います。先ほどお話ししましたように、延暦17年(798)以前に、相模・武蔵・常陸・上野・下野に夷俘が配されていたことが確認され、税制その他を優遇するのですが、地元ではやはり騒動が起きます。それがちょうど「上つ原遺跡」の時代です。

【史料9】の『日本後紀』逸文の弘仁14年(823)の記事では、甲斐国の賊主吉弥侯部ら一族が、何か反体制的なことをして、伊豆国に流されています。【史料17】には、甲斐の蝦夷の狼藉が記されています。

そして、「房総の俘囚」、千葉県、房総半島に俘囚が反乱を多く起こします。

嘉祥元年(842)には、上総国より丸子廻毛(まるこのつむじ)という人が反逆したことが、報告されました。政府は、上総・下総・相模など5国、この5国のうち残りの2国には武蔵と、もう一つは安房か下野のどちらか、恐らく下野でしょう。その5国に討伐を命じています。そして上総国より、反逆した俘囚57人を斬獲したのだという報告が出てきます(『続日本後紀』)。

貞観12年(870)にも、上総国の放火、強盗する俘囚の捕縛と懐柔が命ぜられています(『日本三代実録』以下典拠明記なしも同じ)。それより先、貞観9年(867)には上総国に檢非違使(けびいし)を置いて警備に当たれということを命じています。不穏な動きが広がっていたのです。

貞観17年(875)には、下総国で大規模な俘囚の反乱が起きます。下総国守からの報告によると、官寺を焼き、良民を殺害する。この官寺とは下総国分寺もしくは定額寺(国分寺に次ぐ官寺)になります。これに対して政府は、武蔵・上総・常陸・下野の兵士各国300人を征討に動員します。俘囚は逃げて、最後は下野で討伐されます。下総から下野へ逃げるといことは、彼らは陸奥へ帰らなかったのかもしれませんが。その途中下野で戦闘があって、かなり討ち取られてしまったという報告が出てきます。

元慶2年(878)、一時期、出羽国の秋田城を蝦夷側が完全に勢力下に置く「元慶の反乱」という大きな蝦夷の反乱があります。

元慶7年(883)には、上総国の俘囚がまた反乱します。こういうことが繰り返されています。

先ほどとりあげた、俘囚田が上総と下総にあるというのは、上総と下総には俘囚が多かったということです。そして、国司たちがうまくコントロールができなくて、反乱に至ったのでしょうか。

では、武蔵国はどうだったか。「上つ原遺跡」の時代ですが、当時のこととして、承和12年(845)6月に武蔵権守、翌年2月に武蔵守となった丹墾門成(たじいのかどなり)という人がいます。亡くなったときに伝記が残されていて(『日本文徳実録』仁寿3年)、その中に、自分が赴任した845年当時の武蔵国は、広いけれども「盗賊が千に充つ」とあります。非常に治安が悪かったのです。

貞観3年(861)には、武蔵国には検非違使を郡ごとに置いています。普通、国ごとに検非違使を置くのですが、史料には武蔵は「群盗山に満つ」とありますが、特に治安が悪かったので、郡ごとに置きなさい。この時代が、この土器(赤彩球胴壺)の時代に当たりますので、そのような情勢のなかで、どう考えるかということも必要かと思えます。

まとめになりますが、「上つ原遺跡」の蝦夷は9世紀の半ば前後に、東北戦争で帰降あるいは捕虜となった夷俘が、武蔵国の所在郡である多磨郡に配置されたと考えられます。その移配理由や人口、武蔵国の治安悪化の中で、国府に敵対したのか。あるいは従順だったのか。その辺は何とも分かりません。

「上つ原遺跡」では、帯飾りという役人のベルトのバックルが出ていますので、もしかすると、体制側にも取り込まれて、官位をもらっていた俘囚や夷俘が、「上つ原遺跡」周辺にいた可能性もあります。

帰順した蝦夷は、レジュメに幾つか史料をあげましたが、

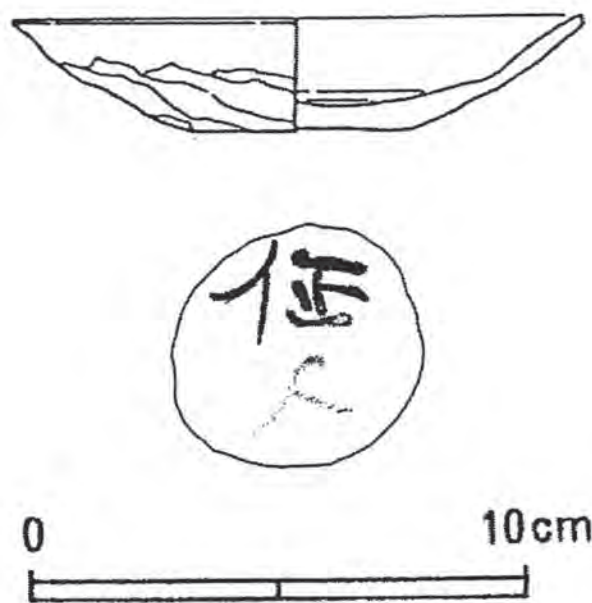
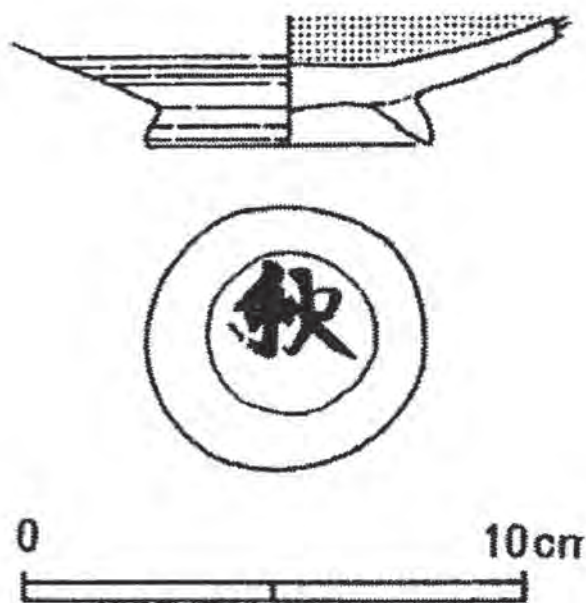
天長6年(829)の記録(以下『類聚国史』)に尾張国の俘囚は「野心聞かず、孝行既に著し」、また越中国の俘囚は「皇化に染まり、志は良民と同じ」で仲間の俘囚を教え諭して、礼儀もあるとあります。さらにその前年天長5年になりますが、肥前国の吉弥候部の人には「皇風に染まって、教令には従順で、平民と志が同じで、公役にもついている」きちんと公の労働にもついていると記録されています。また、節会に参加することも認められた例があります(【表4】の9番)。

敵対する反律令的な蝦夷と、律令国家に従順にして内民化した蝦夷とに、この時代はだんだん分かれて行きます。果たして、武蔵の蝦夷はどちらだったのでしょうか。赤彩球胴壺の存在ともども、検討の余地があるところです。ちなみに武蔵国に俘囚の反乱の記録はありません。

4-2 墨書土器と木簡

また、前回、平野さんがお話したと思うのですが、「上つ原遺跡」から甲斐型土器の坏(つき)が出ていたことが注目されます。甲斐の蝦夷が二次的にこちら、武蔵に配置されたのではないかという理解があります。甲斐国巨麻郡は渡来系の郡ですが、東北系の長煙道かまどや、墨書土器などがかなり出ています。つまり、巨麻郡が渡来人と移配された蝦夷の集住地であって、そこから二次的に「上つ原遺跡」へ来た可能性があるのではないかということ、多分お話しされていると思いますが、大いにあり得ることだと思います。すでにお話したように、甲斐に移配された蝦夷は、技能を評価される者もいれば、狼藉をはたらく者、伊豆に流された者もいました。武蔵への二次的移配があったなら、その理由は何なのでしょう。

また、甲斐の蝦夷の存在を示すものとして、山梨県韮崎市の宮ノ前遺跡からは「狄」という字の墨書土器が出土しています。夷狄の「狄」です。報告書(韮崎市遺跡調査会『宮ノ前遺跡 本文編・図版編』1992)では「秋」とされています



が、平野さんが「秋」ではなく「狄」だと指摘しました。「秋」の字とされている墨書土器が全国で、私がざっと数えただけで20ぐらいあります。もう一度よく見るならば、「狄」がほかにも出てくるのかもしれませんが。

展示会場にもありましたが、埼玉県熊谷市の宮下遺跡でも「狄口」の墨書土器が出ています。このような例が増えていくと、研究は進展していくのでしょうか。

また、木簡もあげておきます。新潟市の的場(まとば)遺跡では「狄食(てきしょく)」と書かれた木簡が出ています。夷狄(狄は日本海側の蝦夷)の食事という意味で、陸奥・出羽・越後の国司は、蝦夷を順化させるために、「饗給(きょうきゅう)、食料を与えて宴会をやって、面倒をみて懐柔しなさい」という決まりがあります(養老職員令大国歌)。それから秋田県大仙市の払田柵(ほったのさく)には、「狄藻」とある木簡があります。東北特産の昆布のようなものでしょうか。

最後に宮ノ前遺跡の墨書土器をもう一つ、「征人」と書かれています。東北戦争関係といわれているものです。宮ノ前遺跡は、巨麻郡の郡家関連遺跡で、牧との関係も指摘されています。蝦夷は馬を操るのがうまいので、牧と蝦夷というのも一つの検討テーマになると思います。

蕪崎市には、甘利山・甘利沢などの地名があり、中世には甘利荘、古代では巨麻郡余部(あまるべ)郷であったと考えられています。いかにも二次的に移配されたような余部郷に宮ノ前遺跡が所在するのも注目すべきかと思います。

ちょうど時間になりました。私の話は以上です。駆け足になりましたので分かりづらかったかもしれませんが、史料は全部読み下してありますので、後でまたご覧になっていただければと思います。ご清聴、ありがとうございました。

【参考文献】

- 伊藤 循 1996 古代国家の蝦夷支配(鈴木靖民編『古代蝦夷の支配と交流』名著出版)
- 大井晴男 2005 「俘囚」について『日本歴史』690
- 大塚徳郎 1969 蝦夷服属の類型的考察(『平安初期政治史研究』吉川弘文館)
- 河原梓水 2008 『俘囚』身分の成立過程『続日本紀研究』373
- 轡田克史 2007 蝦夷・夷俘の表記とその変化『新潟史学』58
- 熊谷公男 2007 蝦夷移配策の変質とその意義(熊田亮介・八木光則編『九世紀の蝦夷社会』高志書院)
- 佐々木虔一 2016 上総・下総地方の俘囚の反乱と情報伝達『千葉史学』68
- 下向井龍彦 2009 『日本の歴史7 武士の成長と院政』講談社
- 鈴木拓也 2008 『蝦夷と東北戦争』(戦争の日本史3)吉川弘文館
- 関口 明 1987 八、九世紀における移配蝦夷の支配『日本歴史』357
- 〃 2003 八、九世紀における移配蝦夷の支配(『古代東北の蝦夷と北海道』吉川弘文館)
- 武廣亮平 1994 エミシの移配と律令国家 千葉歴史学会編『古代国家と東国社会』高科書店)
- 〃 2017 古代のエミシ移配政策とその展開
専修大学社会知性開発研究センター『古代東ユーラシア研究センター年報』3
- 永田 一 2016 日本古代の国家と蝦夷・俘囚(博論. 法政大学学術機関リポジトリ Web)
- 〃 2019 俘囚の移配(佐々木虔一ほか編『日本古代の輸送と道路』八木書店)
- 中村光一 1988 俘囚料の設置をめぐって『延喜式研究』創刊号
- 新野直吉 1984 古代俘囚論『日本歴史』438
- 平川 南 1987 俘囚と夷俘(青木和夫先生還暦記念会編『日本古代の政治と文化』吉川弘文館)
- 平野 修 2013 東京都多摩市上っ原(うわっばら)遺跡(多摩市No.1遺跡)出土の東北系土器について『東京考古』31
- 〃 2015 日本古代俘囚の移配に関する考古学的考察『山梨県考古学協会誌』23
- 〃 2017 蕪崎市宮ノ前遺跡出土の『狄』と記した墨書土器『山梨県考古学協会誌』25
- 福田健司 2019 『土器から何が分かるのか?』、落川・一の宮遺跡の土器編年『多摩考古』49
- 古垣 玲 2008 俘囚身分の成立『国史談話会雑誌』49
- 淵沢智幸 2004 九世紀陸奥国の蝦夷・俘囚移配『日本史研究』508
- 宮原武夫 2014 房総の俘囚の反乱(『古代東国の調庸と農民』岩田書院、初出は1980)
- 山口成己 2012 見島古墳群と俘囚『やまぐち学の構築』8
- 山梨県考古学協会 2017 『「俘囚(ふしゅう)・夷俘(いふ)」とよばれたエミシの移配と東国社会』
- 吉沢幹夫 1978 俘囚長についての試論『東北歴史資料館研究紀要』4

【年表】蝦夷（東北勢力）と〔ヤマト王権～律令政府〕の戦い

540	欽明元年	3月	蝦夷・隼人が帰化する
581	敏達10年	閏2月	蝦夷数千人が辺境を攻める
637	舒明9年	この年	蝦夷叛乱、上毛野君形名を将軍として派遣するも敗退
642	皇極元年	9月21日	越の蝦夷数千人が内附される
		10月21日	蝦夷を宮廷で饗応
647	大化3年	この年	淳足柵を設置
648	大化4年	この年	磐船柵を設置
658	斉明4年		阿倍野比羅夫の蝦夷征討～660年まで <以上『日本書紀』>
708	和銅元年	9月28日	越国に出羽郡を建てる
709	和銅2年	3月5日	蝦夷の蜂起、征討軍派遣。出羽柵が前線基地。
712	和銅5年	9月23日	出羽国の建国
		10月1日	陸奥国より最上・置賜郡を出羽国へ編入
714	和銅7年		東国民の出羽・陸奥移植が盛んになる～719年
720	養老4年	9月28日	陸奥国の蝦夷叛乱、按察使上毛野広人を殺害、翌年まで征討軍派遣
721	養老5年	8月19日	出羽国を陸奥按察使の管轄とする
722	養老6年	8月29日	諸国から柵戸1000人を陸奥国鎮所（多賀城の前身か）に配す
724	神亀元年	3月25日	陸奥の蝦夷が叛乱、国司殺害、征討軍派遣
			大野東人が多賀城を築く（多賀城碑）
725	神亀2年	閏1月4日	陸奥国の俘囚を伊予・筑紫・和泉に移配する
733	天平5年	12月26日	出羽柵を秋田村高清水岡に遷す（秋田城の始め）
737	天平9年	1月22日	持節大使藤原麻呂と鎮守府将軍大野東人が、多賀城・出羽柵間の連絡路を建設する
757	天平勝宝9年	7月5日	藤原朝狩を陸奥守とする
758	天平宝字2年	12月8日	桃生城・小勝柵を造る
762	天平宝字6年	12月1日	藤原朝狩、多賀城を修造し、多賀城碑を建てる
764	天平宝字8年		藤原仲麻呂の乱、朝狩処刑
767	神護景雲元年	10月15日	伊治城が完成する
774	宝亀5年	7月25日	蝦夷の叛乱、桃生城襲撃 <東北38年戦争の始まり>
777	宝亀8年	5月27日	陸奥守紀広純を按察使とする、一旦は鎮静化する
778	宝亀9年	6月25日	一旦は平定、伊治公皆麻呂に外従五位下を授く
780	宝亀11年	3月22日	伊治公皆麻呂の乱、広純殺害される、多賀城焼亡
		8月23日	秋田城放棄の計画
784	延暦3年	2月28日	大伴家持を持節征東将軍として派遣、翌年死亡
789	延暦8年	3月9日	多賀城に軍備集結
		6月3日	征東大使紀古佐美、阿弭流為と決戦し、大敗北、征討軍解散
794	延暦13年	6月22日	征夷大将軍大伴弟麻呂・副将軍坂上田村麻呂の勝利
		10月28日	平安遷都
797	延暦16年	11月15日	田村麻呂、征夷大将軍になる
798	延暦17年	6月21日	夷俘移配初見（相模・武蔵・常陸・上野・下野・出雲）
800	延暦19年	11月6日	田村麻呂が諸国に移配する夷俘を検校する
801	延暦20年	2月14日	田村麻呂が出征、勝利する。10月28日凱旋帰京
802	延暦21年	1月9日	胆沢城を造り始める。鎮守府が多賀城より遷る。
		4月15日	阿弭流為・母礼ら投降、8月13日河内国で処刑
804	延暦23年	11月22日	秋田城、城制から郡制へ移行
805	延暦24年	12月7日	藤原緒嗣と菅野真道の徳政論争（軍事と造都の停止）
811	弘仁2年	5月23日	田村麻呂没
		閏12月11日	陸奥出羽按察使文室綿麻呂の蝦夷征討勝利の奏上<東北38年戦争終了> 「宝亀五年より当年に至る、惣べて卅八歳、辺寇屢動き、 警口〔護〕絶ゆること無し」（『日本後紀』）

エミシ研究講座

第4回 エミシの赤い土器『赤彩球胴甕』を追う

北上市立博物館館長 杉本 良

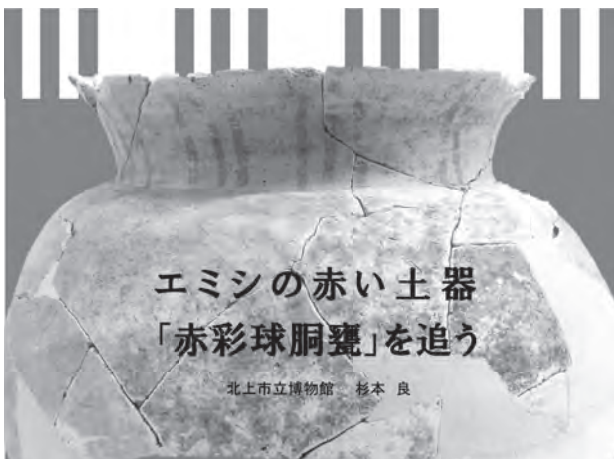
《実施日 2019年11月30日(土) 於 帝京大学ソラティオスクエア地下2階小ホール》

1. 赤彩球胴甕の故郷 北上盆地

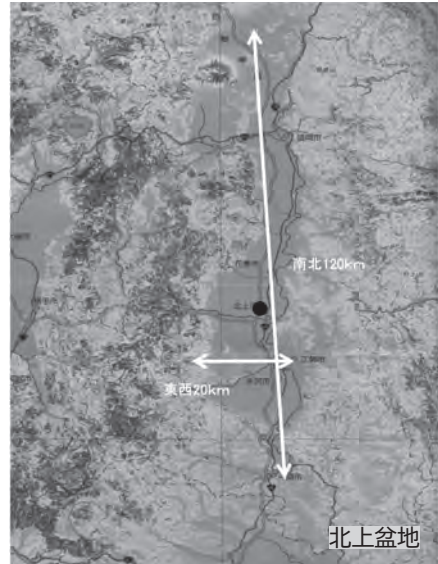
赤彩球胴甕(せきさいきゅうどうがめ)というものが、帝京大学キャンパスの発掘の際に出てきました。今回の特別展で、赤彩球胴甕は蝦夷(えみし)がここにいたという証拠になりたいへん重要な遺物であることがお分かりいただけたと思います。赤彩球胴甕が一番出土しているのは岩手県北上市という場所です。この場所で出土することがどういう意味を持つかということをお話させていただきます。これが終わった後に、展示会場に行き、土器を改めて見ていただくと、ああ、そういう価値があるのかというのが分かると思います。

それは、単に東北の土器が八王子に、多摩丘陵にやってきたという価値だけではありません。随分遠くからやってきたこと、それはそれで重要なのですが、なぜはるばる遠くまでこの甕がやってきたのか。この甕は現地で作ったのかかもしれませんが、明らかにこの特別な甕を知っていた人しか作れないので、なぜ蝦夷がはるばるやってきたのか。そしてこの多摩丘陵に家を作って、そこで赤彩球胴甕を作った。このことは、実は単純に人が遠くからやってきただけではない意味を持っていることを知っていただきたくて、話させていただきますと思います。

ここに、どかんと大きく派手に、皆さんに赤を強調しようと思って、赤々な背景に土器を置きました。【図1】これを赤彩球胴甕と呼んでいます。赤彩、つまり赤く塗られた胴体の部分が、すごく丸々して大きく膨らんだ土師器(はじき)です。土師器は古墳時代からずっと使っているので、土師器が赤く塗られて甕の格好をしていたら、広い意味では赤彩球胴甕といっているのですが、ここでは、狭い意味で、8世紀後半の奈良時代のころに、岩手県北上盆地辺りを中心に、こういう球胴、大きく丸々した甕に、単に赤く塗るだけではな



【図1】



【図2】

く文様を付けている土師器の甕を、赤彩球胴甕と呼ばさせていただきます。

赤彩球胴甕の故郷である北上盆地という場所です。どういふ場所なのか。皆さん、仙台ぐらいまでは何となくイメージできるかもしれませんが。仙台より北は、みんな北海道まであいまいな感じだと思います。ここが仙台のある仙台平野ですが、そこから北に大崎平野という広い平野があります。それより北の丘陵地帯を越えた細長い平野が北上盆地です。北上盆地は、北の岩手町のほうから流れてくる北上川という東北で一番大きな川の中流の部分にあたります。大体、南北120キロ、東西20キロの細長い、盆地というよりも川べりの平野のような感じです【図2】。南側より斜め上方から見た感じですが、こちら側に北上山地、こちら側に奥羽山脈があり、北上川に沿ってずっと細長い盆地があるのが分かると思います。皆さん、北上盆地の場所は大体イメージできたでしょうか。東京からたいへん遠い場所です。そこに、赤彩球胴甕の中心があったわけです。

2. 赤彩球胴甕の時代

赤彩球胴甕の時代は、日本の歴史では奈良時代後半から平安時代前半にあたります。奈良時代といえば平城京、奈良に都が置かれた時代です。東大寺のような巨大寺院が造られていた時代だったわけです。その時代、東北地方は、現在の多賀城市に平城京の出先機関である多賀城という役所が置かれて、太平洋側が管理されていました。ところが、東北地方太平洋側といっても宮城県北部くらいまで、実は岩手県から

北の方は管理されていなかったのです。ですから、北上市がある辺りは多賀城の管轄外でした。

この写真は多賀城碑という碑です。これは古い写真ですが、今でもこの状況で多賀城跡で見られるようになってきました。多賀城碑は、江戸時代にすごく有名だったので、いろいろなものに登場してきます。有名などころでは、松尾芭蕉が「つぼのいしぶみ」といって紹介しています。実はこの碑は、本物説、偽物説、いろいろあったのですが、現在は本物ということに落ち着いています。ちょうど多賀城があった時代に造られた碑で、多賀城は西暦724年、神亀元年に造られ、そして天平宝字6年、西暦762年にこの碑を造った。西暦762年、奈良時代のまただ中です。建碑した人は藤原仲麻呂の四男である朝狩という人で、多賀城を修築したときにそれを記念して造ったのです。その後、藤原仲麻呂の乱の際に朝狩は殺されてしまいます。このときに仲麻呂は、中国的なことを意識して、北蝦政策を重視し多賀城も整備して、より北への力を強めようとした途中で頓挫してしまいました。

重要なのは、最初に前文で多賀城というのはどういうものか紹介していることです。先ほど私が北上市はこういうものだと紹介したように、どこの場所にあるか伝えるのが一番重要です。どこにあるかというときに、いろいろな方向からこちらというのが一番いいのです。まず、平城京から1,500里離れています。当然、中心の、自分がいるべき平城京からこれくらい離れている。蝦夷国の境から120里。常陸国の境から412里。下野国の境から74里。そして靺鞨国から離れること3,000里と書いています。遠いところを固めて、くっついているところ、自分の国と接しているところを紹介するわけです。

つまり、多賀城は陸奥国です。南の境は常陸の国、現在の茨城県です。茨城の境。そして下野の国は栃木です。では、蝦夷国の境から120里、これは何かです。蝦夷国なんて律令制の国にないですね。いろいろな説があるからこれで決まりというわけではないですが、南の境が常陸と下野であれば、これは恐らく北の境です。当時の里数は大体533.5メートルとできるので、120里は64キロとして考えると、多賀城から岩手県境くらいがちょうど境としてぴったりです。まさに今の岩手県境が多賀城との距離、蝦夷国の国境ラインだったといってもいいかもしれません。ただし、それはあくまでも8世紀の中ごろの、朝狩や中央の貴族たちが解釈している意識です。

3. 蝦夷の墳墓 末期古墳とは

では、多賀城碑が造られたころの蝦夷国はどういう状態か。いわゆる律令の国の名前がないということは、律令国家の中に、つまり平城京の支配下に入っていないということでした。奈良時代、この地域では古墳を造っていました。岩手県においては、いわゆる古墳と呼ばれるもの、果たして古墳といっているのかどうか分かりませんが、古墳といえば古墳時代のものを指すのでしょうけれども、一応、末期古墳とも呼ばれる、末期というのも嫌な言い方ですが、そういう古墳がたくさんありました。では、古墳時代の古墳かという、仁

徳天皇陵が造られていたような前方後円墳を中心とする古墳時代の古墳ではありません。ただ、仁徳天皇陵が造られた前方後円墳最盛期に造られた古墳が、岩手県にも1個だけあります。胆沢町というところで、現在は奥州市になっていますが、角塚という前方後円墳が造られています。前方後円墳といっても、方墳部分が非常に小さいので、帆立貝式古墳に近い形ではあります。岩手県唯一の古墳時代の古墳といってもいいものです。

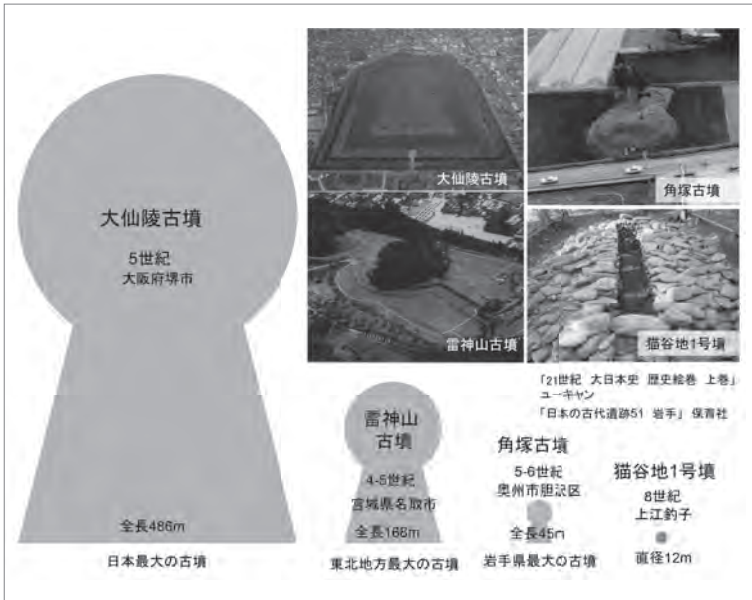
これは東北地方における前方後円墳、後方墳も含めての分布です。まさに「日本のthe古墳」というべき前方後円墳は、阿武隈川流域は密にあるのですが、ここから上のほう、仙台平野や大崎平野のほうに入ってくると、あまりなくて、ぼつぼつとなります。そして岩手県の北上盆地の辺りにぼつんと1個だけ角塚が出現しています。

岩手県に古墳がないわけではありません。これが角塚です。ここに前方墳があり、後円墳がここにあり。前方後円墳といえば前方後円墳、帆立貝式古墳といえば帆立貝式になる感じですが、こういう古墳がきちんと存在しています。掘ると、葺石（ふきいし）といわれる、古墳の周りに表面に石をふいたものが見つかりますので、これも日本の古墳の定義にぴったりと当てはまる古墳です。埴輪も出ます。円筒埴輪です。形象埴輪も出てくる。イノシシもそろっているし、人物埴輪もある。完璧に日本の古墳というセオリーどおりのものが見つかります。

これは高崎、保渡田の古墳です。保渡田の古墳に比べると貧弱ですけれども、前方後円墳の時代といわれた日本の古墳時代の前方後円墳と同じものが、岩手県の胆沢の北上盆地まで入ってきていた。

こういう古墳が急に日本全国からなくなるのは、基本的には仏教が入ってきて、古墳を中心とする権威付けがなくなるからです。そうすると、岩手県のほうはどうなってしまうかという問題です。先ほど言いましたとおり、前方後円墳の分布は、ここに角塚が突出して入ってくるのですが、ここが限界ラインで、この後急に古墳そのものが南に引っ込んでいきます。その間どうなっているかという、この北方地域には、赤丸が付いているのですが、こういう古墳がずっと造られ続けていくのです。ただ、これはもう日本の古墳というよりも、単なる盛り土をした墳丘の古墳、墳丘墓のような墳墓であることは間違いのないのですが、そういうものがずっと残ります。残っているといいいいのか、新たに発明されたといっているのか分かりませんが、北海道から北東北のほうにずっと分布するわけです。

これも前回の八木さんの話であったかもしれませんが、これら北の古墳は末期古墳と呼ばれ、主体部の造り方から古墳が大きく2種類に分かれます。基本的には周りに溝を巡らした円墳で、主体部が土坑タイプと、石を積むタイプがあります。そして場所によっては、和同開珎と呼ばれる奈良時代に作られた錢も見つかります。こういうことから、年代が奈良時代になっても、古墳をずっと造っていたことが分かります。奈良時代の日本は、仏教が普及して古墳はもう造っていない時代ですが、こういう時代に、円墳ですが古墳を



【図3】

造っていた人たちがいたわけです。大きさを見ても、小さくて、直径12メートルくらいです。【図3】非常に小さい円墳でした。それより大きい古墳は全然見つかりません。小さいものばかり、円墳で造られました。そして造られた時代は基本的に奈良時代が中心ですので、日本の古墳時代という解釈をする墳墓ではありません。ですから、古墳と呼ばれると誤解を持ってしまいます。誤解を招きやすい名称ではあると思っています。

多賀城碑に書かれていたこの時代、蝦夷国は古墳を造っていました。そしてその古墳を造っていた人たちは誰かという、いわゆる蝦夷と呼ばれていた人です。あくまでも



【図4】北上市教育委員会

南の朝狩のような中央政府の人は、多賀城よりも120里離れた地の北のほうの国を、中央の政府には属さない蝦夷国であると言っていました。これは『清水寺縁起絵巻』です。これから話しますが、坂上田村麻呂は蝦夷と戦った有名な將軍です。その軍隊のほうは、このように、よろいかぶとの立派な姿に描かれています。こちらが蝦夷軍ですが、蝦夷軍は馬にも乗らないで猿みたいな格好になっています。これがいわゆる中央の人たちが考えた蝦夷で、非常に野蛮で未開の人たちという解釈でした。

4. 考古学の成果からみた蝦夷とは

本当にこんな野蛮な人物だったかどうかを古墳の出土品を通じて見ていきます。先ほど見た蝦夷の古墳を発掘するといろいろなものが見つかります。これは鉄で作られた刀です。【図4】片手で握

るタイプの幅広の刀が多いです。これは展示もしてありますが、馬を操作するための、くつわです。【図5】そしてこういう金環類【図6】、あとは勾玉(まがたま)類【図7】やガラス玉類などが古墳の中から見つかります。これは金層ガラス玉といって、中央アジアのほうで作られた特別な作り方をした玉で、こういうものが古墳の中から見つかります。あとはこういう土器類。土器類は、多賀城支配地域の土器とほとんど変わりません。

古墳を造った蝦夷の住居跡も見つかります。基本的には竪穴(たてあな)住居跡で、かまどを持っていて、柱が立っています。関東地方以西の人たちも、同じような竪穴でかまどを持つ住居に住んでいました。

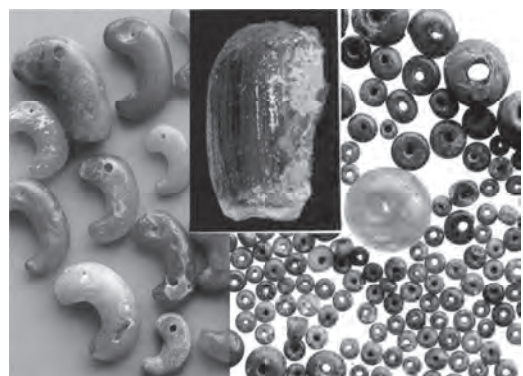
こういう農耕具も見つかります。鎌やくわ先が見つかりますので、農業もしていました。【図8】蝦夷といっていま



【図6】北上市教育委員会



【図5】北上市教育委員会



【図7】北上市教育委員会



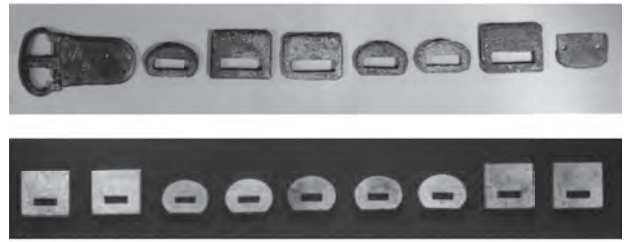
【図8】北上市教育委員会



【図9】北上市教育委員会

すが、農耕もするのです。違う暮らしをしていた蝦夷もいるかもしれませんが、古墳を造った人は、こういう普通の暮らしをしていたと思います。

また、こちらは古墳から見つかった錫（スズ）で作られた釧（くしろ）【図9】、腕輪です。これもいろいろな説がありますが、日本で採れないから沿海州のほうから持ってきたのではないかとという人もいます。錫製品の分布を見ると、北海道の道央地帯を突き抜けて、北上川の流れをずっと来る、基本的なラインはこういう分布の仕方をしています。かなり広域的な交流があったのではないかと考えられます。こういう交流の中で、現在まで遺物としては残らない、いろいろな物品が南のほうに送られました。アザラシやクロテンの



【図10】北上市教育委員会



【図11】北上市教育委員会

毛皮やワシの羽など、琥珀は久慈で採れます。あとは昆布類です。こういうものが蝦夷たちの交流を通じて南にもたらされていったのではないかと考えられます。

当然、来たらお返しを渡さなければ交流になりませんし、取引になりませんから、南のものも来るわけです。これは蝦夷の古墳から見つかるのですが、銚帯（かたい）金具と呼ばれるベルト飾りです。【図10】中央政府の人たちは、これを帯、ベルトに付けて身分を表していたと思います。また、先ほどの和同開珎【図11】もそうです。中央の平城京で使われていたものです。

蝦夷は北のほうですから、農業をやるにしてもそれほど生産力が高くなかったのではないかと思います。むしろ、北の物品をうまく渡しながら、南の人たちと交流して、いろいろな物を代わりに受け取っていた。【図12】そういう広域的な交流の担い手として、北上盆地の蝦夷は存在していたのだらうと思います。当然、自立的に生活していた蝦夷もそれぞれいると思いますが、どちらかという、北上盆地の蝦夷は南



【図12】北上市立博物館 2017『北上市立博物館常設展示解説図録 きたかみの歴史』より

の出入り口のようなところにいましたので、特にこういうことを盛んにやっていたのではないかと考えられます。

もう少し詳しく蝦夷の造っていた墳墓、古墳を見ていきたいと思えます。末期古墳とも呼ばれる墳墓の分布を見ると、北上川と馬淵川という川が太平洋に伸びています。ここに分水嶺があって、こちらに流れます。北上川はこちらに流れます。ここのラインにずっと古墳があって、海を越えて北海道の道央地点の部分だけに古墳が今のところ見つかっています。ところどころ、秋田や三陸側にも散らばるのですが、分布の固いラインはこういうラインです。八戸から千歳に渡海することになり、大体の人は日本海側を通ったのではないかとこののですが、なかなか証拠がうまく出てきません。確かに須恵器を見ると、平安時代になるとこのラインができてくるのですが、古墳を見る限り、どうもこちらのラインになってしまうのです。これは今後、いろいろ調べていかなければいけません、こういうラインで蝦夷と古墳が分布しています。

少し色合いが変わった緑色のマークが付いていますが、これも古墳群です。赤いマークの古墳が、主体部が土坑のもの、そして緑のマークが付いているのが、主体部が石室のもので。そして1個だけ三角形が付いていますが、これは両方混じった古墳が見つかる場所です。

これが石室、いわゆる石を積んで主体部を造ったものです。



北上市江釣子古墳群猫谷地支群1号墳

【図13】



山田町房の沢古墳群

【図14】

【図13】真ん中のへこんだところに遺体を納めたところがあります。これは北上市の江釣子古墳群の中の主体部です。河原石を積んで造るのですが、よく見ると、この主体部を囲っているところは、小口積みといって長い石の狭いほうを見せるように積んでいるのが分かります。そして、手前のほうに大きな石でふさぐように石を置いて、奥壁にあたる場所に大きな石を1個どんと置いています。

これが単に穴を掘っただけの古墳です。【図14】これは山田町といって、沿岸部の古墳です。石を引いただけの古墳も見つかります。【図15】これは北海道の古墳です。【図16】主体部が分からなくなっていました。復元しています。

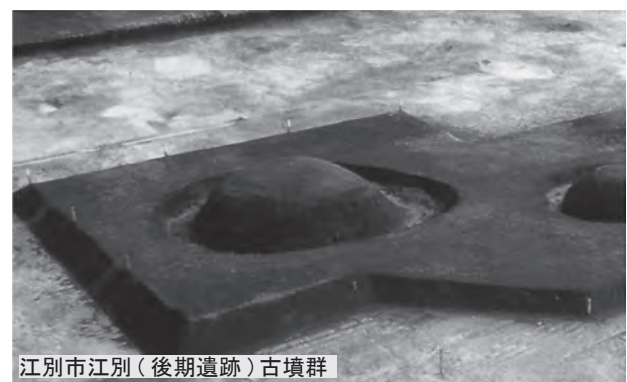
古墳の規模は、先ほど見た江釣子古墳が12メートルと言いましたが、大体10メートル前後の円墳がほとんどで、方墳もなければ前方後円墳もなく、円墳しかありません。つまり、古墳の規模が変わらなくて、ばらばらと固まって、同じような大きさの古墳しかありません。恐らく、蝦夷の中には絶対的な権力者がいなかったのではないかと思います。関東の群集墳を掘ると、どんと一つ明確に大きな古墳があって、その周りにばらばら小さいものがある、また大きなものがぼんとあり、ばらばらある。ある程度大きな権力者が存在することを古墳がうまく示してくれているのですが、蝦夷の古墳を掘る限り、ほぼ同じ大きさの円墳で、副葬品も大して変わりません。絶対的な権力、いわゆる王という存在がなかったのではないかと考えられます。

そして、古墳群単位で比較すれば、埋葬墳墓形態に違いが出ています。穴、積み石、積み石と穴と一緒に存在する。同じ蝦夷といわれながら、その中でなぜか知らないけれども



矢巾町藤沢狄森古墳群3号墳

【図15】



江別市江別(後期遺跡)古墳群

【図16】

明確に違いがあります。私も北上市で江釣子古墳を随分発掘しましたが、主体部が土坑のものはありません。馬の墓だけはなぜか穴で埋めていましたが、人の墓は全部積み石で造っています。逆に、土坑が主体部とする古墳群では、石室を造った古墳はありません。明らかに、古墳群を造っていた集団間に違いがあることは間違いないです。

そして、皆さんもぱっと見て分かると思いますが、【図17】石で造ったタイプの古墳は、ここにしかありません。北海道にはないです。ここは何かというと北上盆地です。北上盆地の中には積み石タイプの古墳以外はありません。では、積み石タイプの古墳しかないかというと、そうではなくて、同じ北上盆地でありながら、穴の中に人を入れるタイプもあります。

どうしてこういう複雑なことが起きてしまうのでしょうか。これは先ほどの江釣子古墳です。

【図18】この石で積んだタイプの古墳のルーツと

いうか元は何かというと、関東地方でもたくさん見つかる横穴式石室と呼ばれる古墳の石室が退化、変形したものであることは間違いないです。手前を石でふさいでいますが、本当は入口だった横穴式石室の残骸です。ここで区切るのは、恐らく、石室の中を分ける玄室や、羨道（せんどう）を分けるようなタイプの石の痕跡があり、奥に鏡石のようにどんと石が1個あります。これは、横穴式石室のように追葬したりするためのものではなく、大きさは一人分しかありません。ここに人を1人入れたら、もうスペースはない。横穴式石室の格好をしながら、竪穴式石室のように上から人を納めて、埋めて円墳にしていたに違いありません。このルーツは、恐らく関東もしくは長野県側にあるのではないかとこの人もいるのですが、その辺りはいろいろ検討の必要があります。

いずれにせよ、この特殊な石室を持つ蝦夷の古墳は、北上盆地の中でしか見つかりません。北上市の江釣子古墳群、盛岡市の太田蝦夷森古墳、花巻市の熊堂古墳も、北上盆地の中にあるものです。逆に土坑墓タイプといって、穴に人を放り込んで、木の枠か何かで造っていくタイプも北上盆地内から見つかっています。これは北上市から見つかっていますが、



【図18】江釣子古墳



【図17】

江釣子古墳群ではないところから見つかっています。このように、横穴式石室から変形したと考えられる積み石タイプの古墳群は、非常に特殊な立地をしています。ただし、先ほど言った朝狩が造った多賀城碑の蝦夷国という範囲内に入っています。ですから、この古墳は、南の要素が非常に強いながらも、なぜか北上盆地内に存在する特殊な蝦夷集団のものとも見てもいいです。こちらの人たちは少し違うのではないかと。そして、埋葬する施設に地域差があるということは、恐らく蝦夷集団間に何らかの違いが存在していた。なぜ存在していたかは分かりません。主体部を土坑とする古墳群も、盛り土、周溝を持っているのは、南の古墳に影響を受けたことは間違いないのですが、主体部分、人を埋めるところを穴で掘るのは、縄文文化からの継続と考えられます。

古墳群を造っていた集団を仮に蝦夷の集団というか、そういう集団が何カ所かあったわけですが、その集団間でも、当然にして何らかのトラブルが起きるはずで、王の存在は基本的にそういうトラブルを解決していく絶対的な裁定権者というものだと思います。しかし、そういう人がいないときは、恐らく話し合いをするのでしようけれども、話し合いで解決しなければ、やはり小規模な戦いで決着をつけるのでしよう。恐らく先ほど見たたくさんの古墳群の中で、北上盆地や同地域にいた集団は、話し合いで解決がつかなければ、小競り合いをして物事を解決していたのではないかと思います。絶対的に、最終的に相手をやっつけるまではしなかったかもしれませんが、いずれ決着はつけなければいけないわけですから、蝦夷は日常茶飯事で結構戦いをしていたのではないかと。戦争とはいわないけれども、戦的なことをしていた。つまり戦い慣れしていたと私は思っています。

また、蝦夷たちと南の多賀城の官人たちとは、多少の小競り合いはあったかもしれませんが、宮城県大崎平野北部・北上盆地南部を緩衝地帯として直接ぶつかることは基本的にはあまりなく、お互いに交流していたようです。



【図19】北上市立博物館 2017『北上市立博物館常設展示解説図録 きたかみの歴史』より

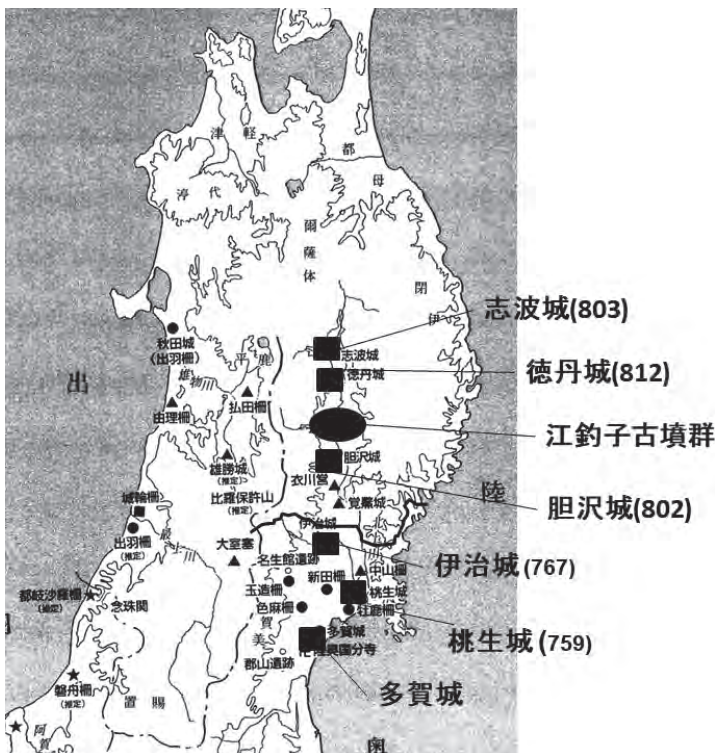
5. 陸奥国38年戦争

宝亀5(774)年~弘仁2(811)年

その後、陸奥国38年戦争ともいわれる非常に大きな戦いが、奈良時代の終わりに発生します。宝亀5年から弘仁2年まで続き、38年間ということ、ずっと戦い続けたわけではないのですが、これが有名な蝦夷戦争になります。時代はちょうど奈良時代の終わりから平安時代にかけてです。この戦いは、よくいわれるのは、光仁・桓武朝という天皇期、実際にはもう少し前から起きています。むしろ、先ほど見た朝狩が多賀城を修復したりし始めるころから起きています。中国政府に倣って、北の地域を征することで日本の政府の権威を高めていくことが目的だったと思います。

特に光仁・桓武朝になって、それが明確に表れてきます。光仁・桓武朝というのは、皆さんご存じだと思いますが、仲麻呂の乱や孝謙天皇、道鏡の後に、天武天皇系から天智系に移っていきます。これが光仁天皇です。つまりここに天武から天智系への系統の移動があります。恐らくこういうことを含めて、光仁と桓武は、より日本の権威を高めていく必要があったため、大きなことをやります。桓武朝で行われますが、一つは征夷で、対外的な政策をやっていきます。そしてもう一つが遷都で、平城京からどこかに移動していこうという作戦です。そういう事業を行って、より自分の、天智系の天皇の権威を高めていこうとしたのではないかと考えられます。

そのため始まったのが、陸奥国38年戦争です。強力に推進していったのは2人の天皇ですが、実際に終わるのは嵯峨



【図20】近つ飛鳥博物館 1997『「あつれき」と「交流」』を改編



【図21】

天皇になってからです。名前の由来は、最後の征夷大將軍である文室綿麻呂が、「宝龜5年から当年に至るまでの38年間……」という『日本後紀』に書かれた文章で、陸奥国38年戦争とも呼ばれています。

さて、この長い戦いの前半で、大崎平野の北である現在の栗原市にあたる場所、北上盆地の入口のようなところに、伊治城と書いてあり、「これはりじょう」と読むのが文献では正しいとなっていますが、この役所を置いて、より北に権力を進めたいこうと動いていくわけです。【図20】多賀城碑といえば、蝦夷国境に接しているようなところになります。当然、蝦夷たちと南の人たちは、実は交流をしていますので、蝦夷たちも伊治城を置いたのはよく分かっているわけです。また、桃生城という城も置きます。この役所を置くのは、蝦夷たちに対する宣戦布告ではないのですが、明らかにおまえたちのほうに行くぞということを示すものです。

今は、宮城県研究者によって多賀城を中心として大崎平野の南側の外郭ラインにたくさんの城柵官衙（かんが）を置いているのが調査されていて、このラインを多賀城の防衛ラインとも呼んでいます。【図21】この周辺の蝦夷たちを説得したり、いろいろなことをするために役所を置いたのですが、このラインを越えて伊治城や桃生城が置かれていくのです。恐らく蝦夷たちもこのラインまでは認識して、良いでしょうという感じでお互いに思っていたのかもしれませんが、明らかにこのラインを越えてくる2つの城柵に対して、当然北の蝦夷たちは知らないわけがなく、知っているわけですから、なぜあのようなところに造るのだという感じになってきたと思います。それが北への進出の意図ではないかというのが分かってくると、戦いが起きてしまうのです。

桃生城と伊治城を造ります。774年、海道の蝦夷がまず桃生城を攻撃し始めて、38年戦争が始まります。【表1】そしていろいろな鎮圧軍をどんどん出していきます。一番大きな戦いとして、780年に、伊治公皆麻呂が陸奥の按察使（あざち）

である紀広純を殺して、陸奥国の支配の中心である多賀城に火をつけてしまいます。蝦夷が陸奥国の多賀城に火をつけて燃やしてしまうというのは、西でいえば、大陸からの異民族が大宰府に火をつけて燃やしてしまうようなものですから、ものすごい大事件です。

伊治公皆麻呂は、もともとは蝦夷出身で、それが中央政府に仕えていて、北への進出を手伝っていたという話もあります。国家を揺るがす大事件であったため、今までは陸奥の按察使という身分で対応させていたのを、征東將軍という身分にして、紀古佐美という將軍を任じて、第1回征討軍を送ります。これはいわゆる特別將軍になりますから、あらゆる物資を徴収して、動かして、東日本全域でいろいろな物品を招集して、戦いに挑みます。

ここにアテルイ、モレと書いてありますが、北上盆地の蝦夷といわれている者です。この蝦夷と戦って、紀古佐美軍はぼろくそに負けてしまうという事態が起きます。これはとんでもない状態になってきたということで、ついに大伴弟麻呂と坂上田村麻呂を使って、征夷將軍、征夷大將軍でもいいのですが、初めてこの名称が出てきます。中央政府は徹底的にやるしかないということで、どんどんエスカレートしたことが、よく分かります。そして第2次征討を行って、最後に坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命して、また戦っていく。この蝦夷戦争のために、茨城県や福島県の沿岸部、太平洋側には、ものすごい製鉄遺構群が造られて、コンビナートです。そういうものを動員して、この北上盆地の蝦夷に対して戦いを挑みます。国家財政を傾けて戦ったと思います。

歴史上では、坂上田村麻呂が征夷大將軍に任じられて、胆沢城という役所、北上盆地に初めて中央政府の役所をつくることに成功して、アテルイ、モレも降伏してきた。さらに北上盆地の一番北の端、今の盛岡市のところに志波城を造り、やっと北上盆地を中央政府の支配下に置いたと考えています。桓武天皇は征討作戦の中止を命令します。これは後でま

陸奥国38年戦争関係年表

西暦	和号	即位天皇	主な出来事	律令国家側の代表者	反乱軍の首謀者
774年	宝龜2年	光仁天皇	海道の蝦夷による桃生城の攻撃	大伴駿河麻呂 陸奥按察使	(海道の蝦夷)
775・6年	宝龜6・7年		陸奥国・羽羽国軍が胆沢方面へ出兵・敗北		
778年	宝龜9年		反乱軍を鎮圧	紀広純 陸奥按察使	
780年	宝龜11年		伊治公皆麻呂の乱が起こる	紀広純・道嶋大橋	伊治公皆麻呂
788・9年	延暦7・8年	桓武天皇	第1回征討作戦	紀古佐美 征東將軍	アテルイ・モレ
794年	延暦13年		第2回征討作戦	大伴弟麻呂・坂上田村麻呂	征夷將軍
797年	延暦16年		坂上田村麻呂が征夷大將軍に任命		
801年	延暦20年		第3回征討作戦開始	坂上田村麻呂 征夷大將軍	
802年	延暦21年		胆沢城の築城を開始、阿呂流為・母礼が降伏	坂上田村麻呂	アテルイ・モレ
803年	延暦22年		志波城の築城を開始	坂上田村麻呂	
805年	延暦24年		桓武天皇が征討作戦の中止を命令		
810年	弘仁元年	嵯峨天皇	薬子の変での活躍により綿麻呂を東北へ派遣		
811年	弘仁2年		文室綿麻呂が蝦夷軍を制圧・軍を解散	文室綿麻呂 征夷將軍	
811年	弘仁2年		志波城の移築を要請	文室綿麻呂	
812・13年	弘仁3・4年		徳丹城を築城	文室綿麻呂	

【表1】
地底の森
ミュージアム『陸奥国
大戦争時代』より

た話します。その後、文室綿麻呂が征夷大將軍に任じられて、さらに北への進出を、志波城を起点に行います。

すごく大きな軍勢に対して、北上盆地内の蝦夷は1,000人ぐらいの軍隊しかなかったかもしれません。なぜ30年間も戦いを続けられたのかという問題もあります。東北地方でこういう話をすると、『アテルイ』という漫画映画を上映して、われらの英雄アテルイという感じで盛り上がります。私は出身が群馬県で、今は北上に住んでいるのですが、こういうことを言うのは大体岩手県でも南のほうの人たちが多いです。なぜなら、アテルイは胆沢の蝦夷ということで、胆沢は今の奥州市、胆沢城が造られた辺りの地域のようですが、果たしてそうなのか、考えてみたいと思います。

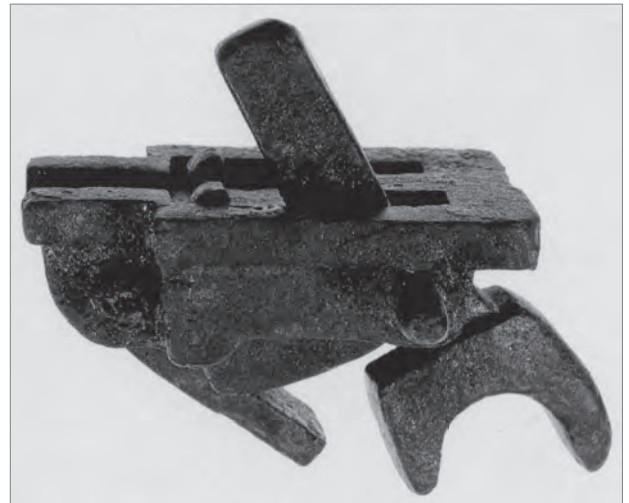
先ず、蝦夷の戦い方というものを主に古墳から見つかったもので考えてみましょうこれは馬具です。【図22】古墳からもたくさん見つかる馬具です。このことから蝦夷は馬それも騎乗をよくしていたことが分かります。

蝦夷の武器、先ほど見た刀、特に蕨手（わらびて）刀は蝦夷の刀で有名です。この蕨手刀のルーツは長野県、群馬県辺りではないかといわれています。古い蕨手刀は柄の部分が刃に対して真っすぐです。このように刃の部分が「く」の字に曲がって、握るところがこうなるのを、北の蕨手刀といいます。なぜこのような変化が起きてくるかという、いわゆる馬上刀、馬から振り下ろす際に、下のほうに対して物打ちの当たりをよくする、この部分がよく当たるようにするために曲がってきたのではないかと。また、切るという能力を高め、湾刀の日本刀のルーツもここにあるのではないかと。人もいますが、その話は置いておいて、ここでは馬上刀と解釈しましょう。そして非常に殺傷能力の高い弓矢が見つかっています。

こういうことから考えて、蝦夷は非常に馬上戦が得意だったことが分かっています。先ほど言いましたが、江釣子古墳群では、基本的には積み石タイプの石室に人を葬っていますが、穴で葬った場所が何カ所か見つかります。恐らく馬を葬っていたようです。他の動物を葬った跡は見られないのですが、なぜか馬だけは自分たちがいる古墳群の中に葬るのです。それほど馬を愛用していたというか、大切にしていたことが分かります。



【図22】北上市教育委員会



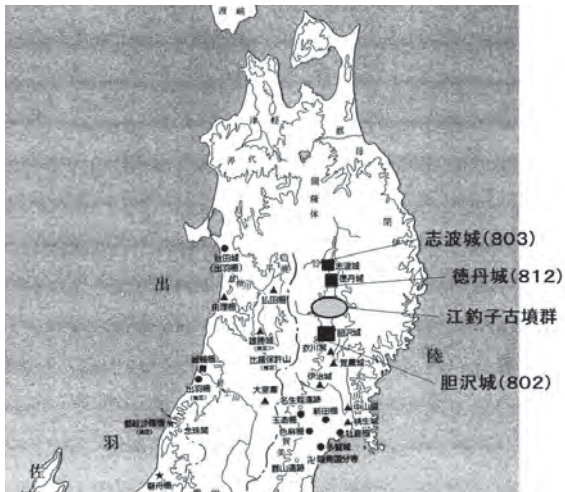
【図23】宮城県大崎市伊治城跡出土弩機

その人たちがどのような戦い方をしていたのかを想像すると、先ほどの【図19】のイラストのようではないか。書いた人がイメージしたのは、匈奴の騎士です。匈奴を皆さんご存じですか。匈奴は、中国の黄河流域の漢帝国、中華の地域の北、万里の長城の北にいた遊牧民です。そういう人たちは、騎上で弓矢を発射します。騎射ですね。そして刀は、手綱を操作しながらでも振れるように、片手で握って、それほど刃は長くなくて幅広で、片手で振り回したときにスポンと飛んでいかないように、先がストッパーのように大きくなっています。

末期古墳群を造っていた蝦夷は農耕もしていましたから、大陸の遊牧民のようなものではありません。私はどちらかというと、農耕をしているけれども遊牧的な牧畜もしていたハイブリッドな人たちだったのではないかと考えています。北上盆地は農業の生産力がそれほど高くありません。今でも、夏少し気温が低いと米が不作になりますので、稲作農耕には決して適地ではありません。当時の生産量はもっと低かったと思います。むしろ北方の交流品などを使った経済、そして馬を使った経済、馬の取引もしたでしょう。そして、先ほどもしましたが、日常茶飯事で馬に乗って小競り合いをしていたのではないかと思います。

このように日常、馬を使って小競り合いなどで暮らしていた人たちは、戦いにも慣れていました。中央政権側も、馬で戦う人に対抗するために、これは伊治城から見つかったものですが、いわゆる弩（ど）と呼ばれる武器、一種のボーガンです。【図23】これは発射装置で弩機と呼ばれる部品、日本で一つしか見つかっていないはずですが、こういう弩を使って戦います。弩は中国から入ってきた武器ですが、中原の農耕民が騎乗で走る遊牧民と戦うために、動く敵を狙いやすくなっています。こういう武器を駆使して、馬で戦ってくる蝦夷に対抗していたのではないかと考えられます。

先ほど言いましたように、蝦夷には絶対的な王は存在していません。みんな、ある部族間に存在していて、ばらばらの蝦夷たちが、組織だった征討軍というか中央の政府と戦って、果たして勝ったのかどうかはいろいろ問題があると思います。いずれにせよ、38年間戦ってきたことは間違いありません。



【図24】近つ飛鳥博物館 1997『「あつれき」と「交流」』を改編

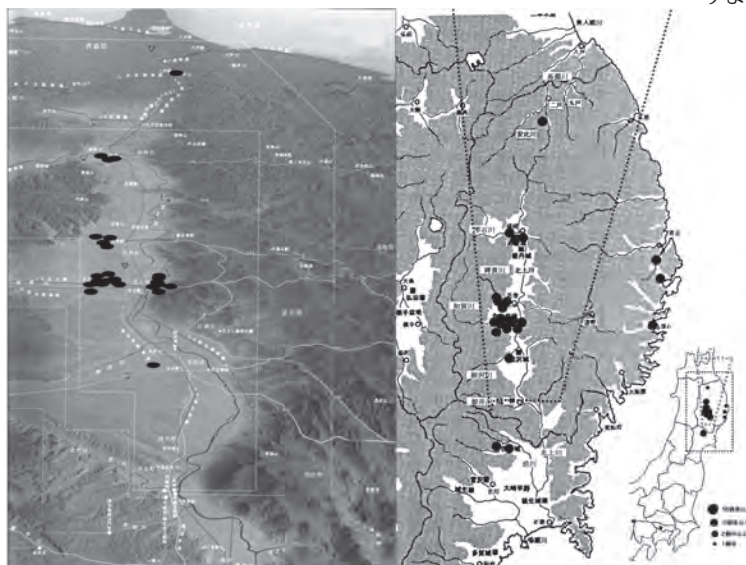
そして 38 年戦争の終わりには、胆沢城が造られ、志波城が造られます。これに合わせて江釣子古墳群など、末期古墳群が北上盆地の中からなくなってきます。【図24】

さて、こう考えたときに、胆沢城が造られたことによって、蝦夷が全部いなくなってしまうのか。展示してあるように、蝦夷たちが全員関東のほうに、まるで捕虜のように送られて、全部いなくなってしまうのかという問題があります。

蝦夷の征討に関しては徳政相論が行われました。桓武天皇の前で、このまま征夷をやっているのか、このまま遷都の事業を進めているのかという相論です。遷都と同じぐらい、征夷つまり北上盆地の蝦夷に対する戦いは、財政力を要したわけです。その結果、坂上田村麻呂は再び征夷大將軍となって行こうとしたのですが、征夷は中止になりました。つまり征夷は完成していませんでした。

6. 赤彩球胴甕とは

こういう時代的背景の中で、赤彩球胴甕とはどういうものなのかを見ていきたいと思います。決して生活用具という面での器ではない意味が実はあります。



【図26】



【図25】北上市教育委員会

これが典型的な赤彩球胴甕といわれるものです。【図25】赤彩、赤く塗っていて、球胴、丸まった甕形（かめがた）土器、口縁部の口径が大きいので、壺というより甕といったほうがいいですね。赤彩される甕は、関東地方においても古墳時代にあることはあります。ところが、この甕は、奈良時代の後半のもので、さらに口縁部に縦方向の棒状条線の赤彩も施されています。関東地方ではまず見つからない甕です。私も関東でやっていた人間ですから、東北でこれを見たとき、最初は古墳時代のものと思っていたのですが、なぜこれが奈良時代の土器と一緒に出てくるのか、非常に違和感を覚えました。それが調べる、研究の始めでした。

(1) 分布の特色

赤彩球胴甕は面白い分布をしています。実は奈良時代、日本全国に赤く塗られた土師器が存在しています。でも、ほとんど坏（つき）と呼ばれるお皿やお椀のようなものに赤く塗るだけで、甕に赤く塗るものはありません。まして赤彩の文様までつける特殊な甕は北上盆地辺りにしかありません。【図26】【図27】この東北地方全部から出るのではなく、岩手県の、それもこの中央部の北上盆地のところに中心があって、なぜか宮城県の大崎平野というか北側のほうにぽつんと中心があり、ぽつぽつと出てきて、なぜか東京にぽつんとあります。これは変な出方ですね。また、北上盆地の中でもこ

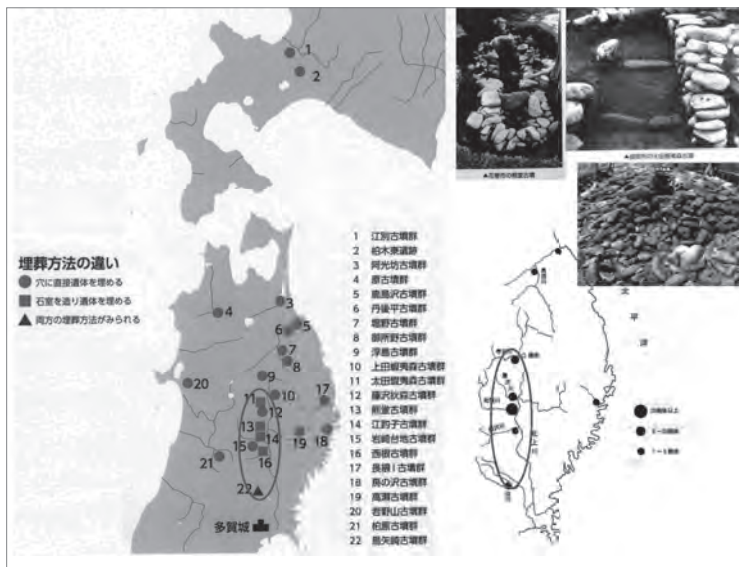


【図27】

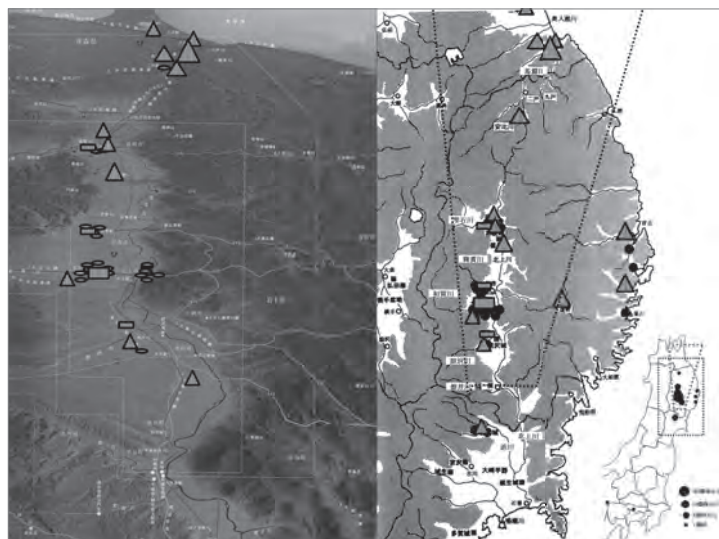


【図28】

こちら北に多いです。ここからは少ないです。ここは奥州市と呼ばれて、北上盆地の南側になります。アテルイがいたのはこの辺りといわれています。ここからは2遺跡から1個づつぐらいしか見つからないのですが、一関やこの辺り、アテルイの友達だったモレは前沢だというのですが、前沢は何



【図29】



【図30】

も見つからないですし、この時代の遺跡も見つからないので、この南側はかなり空白になっています。

なぜこのようになるのでしょうか。蝦夷の時代の家の跡も、特に南側はほとんどありません。分布は北上盆地の中でも北側のほうに偏っています。でも、北上盆地を離れた大崎平野の北側の部分、蝦夷との境のところになぜか少し集中しています。また、北のほうにぼつんとあります。ぼつんとしているのは一戸町から出ています。ここは北上川と逆に北に流れて八戸市から太平洋側に注ぐ馬淵川中流域です。胴部に真っ赤に塗っていて、棒状の文様を入れて、口唇部に赤い線を入れて引いています。一戸町は今、縄文の御所野遺跡で世界遺産を目指しているので、縄文時代にはすごく関心があるのですが、実はこの土器はとても重要な土器です。本当であればきちんと指定文化財にしてほしいぐらい重要です。

このように分布図を作り、土器を並べると、異常にここに、うじゃうじゃとたくさん並んでいます。これが北上市のあるところで、この北上川に支流が何本か奥羽山脈のほうから入ってきます。川が入るのです。そして、ここは雫石川という川です。これは盛岡のほうです。これは豊沢川で、宮沢賢治で有名ですが、花巻の辺りです。これは和賀川で北上市があるところです。そして胆沢川があり、この付け根の辺りに胆沢城が造られます。そして宮城県の方に迫川があり、そこに赤彩球胴甕の集中が見られます。圧倒的に和賀川の下流域にもものすごい量が見つかります。この時代の集落を掘れば必ず破片がぼろぼろ見付き、たくさんありますが、他のところへ行くとだんだん少なくなってきて、南のほうへ行くとほとんどまれになります。

ですから、この赤彩球胴甕は、蝦夷が必ず使っていたものではありません。古墳がずっとありましたが、あの人たちが全員使っていたわけではありません。使っていたのは和賀川流域、ここに江釣子古墳群というすごく大きな、先ほどの積み石の古墳群がありますが、その関係する人たちしか使っていないくらい、非常に限られた、限定バージョンの土器です。

これは北上市立博物館で常設展示されている赤彩土器です。【図28】見ていただければと思いますが、赤彩土器にはいろいろなものがあります。これは球胴甕ではなく坏ではないかという人がいますが、そのとおりです。これは高坏ですから、違うのです。なぜこういう土器があるかは、もう少し後で話したいと思います。基本的にはこういうものです。たくさん見つかります。

そして分布図を作っていて私も気が付いたのですが、この分布図と一致するものがあります。これです。【図29】【図30】この緑の四角とこの赤彩球胴甕の分布はすごく似ていませんか。そして迫川の、ここにも三角形で何かありますね。何かというと、両方の埋葬、石室も造るし穴も掘る、両方の石室が混ざっている古墳群です。この分布から見れば、赤彩球胴甕の分布と石室を造る蝦夷の墳墓は一致しま

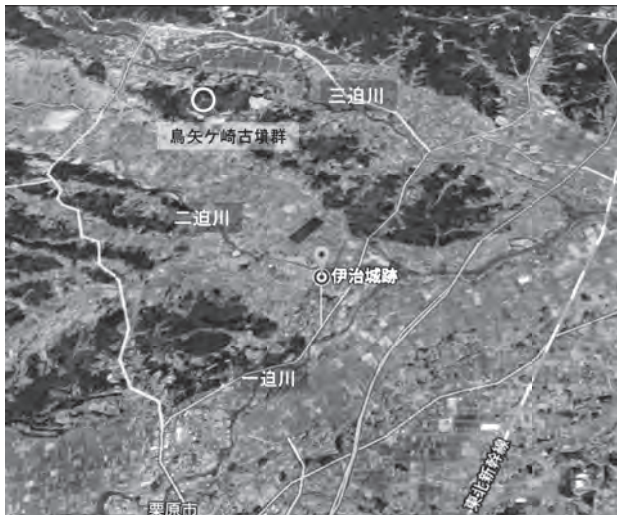


【図31】

す。そして、赤彩球胴甕が一番たくさん分布している和賀川流域にある江釣子古墳群という国指定史跡の北上の遺跡ですが、実は積み石タイプの古墳の中では最大の規模を誇る古墳です。他の、上にある花巻の熊堂古墳群にしても、太田蝦夷森古墳群にしても、江釣子古墳群に比べたら規模は小さいです。つまり、古墳群の規模と赤彩球胴甕の分布の量が一致します。そういうところから見ると、この石室を造っていた蝦夷と赤彩球胴甕の集団は、基本的には一致することが分かってきます。

この四角のマークでは、石室が見つかっています。石室で古墳を造るのがこの胆沢川の北側に唯一あるのですが、ここには赤彩球胴甕が見つからない場合があります。これはまれです。なぜこういうことが起きるのか、今後の課題だと私は思っています。一戸で見つかった馬淵川沿い唯一の赤彩球胴甕も特殊です。こういう特殊な出方がなぜ生じるのか、蝦夷に関する重要な問題があると私は思っています。恐らく文室綿麻呂が最後に志波城から北へ進出しようとした途中で中止になった痕跡ではないかと見ています。少し後で話しますが、このように分布に非常に差がありながら、何らかの意味を持つのが赤彩球胴甕の在り方です。

まず、赤彩球胴甕を持つ古墳を見ていきます。これは北上の江釣子古墳群の分布です。【図31】和賀川が奥羽山脈のほ



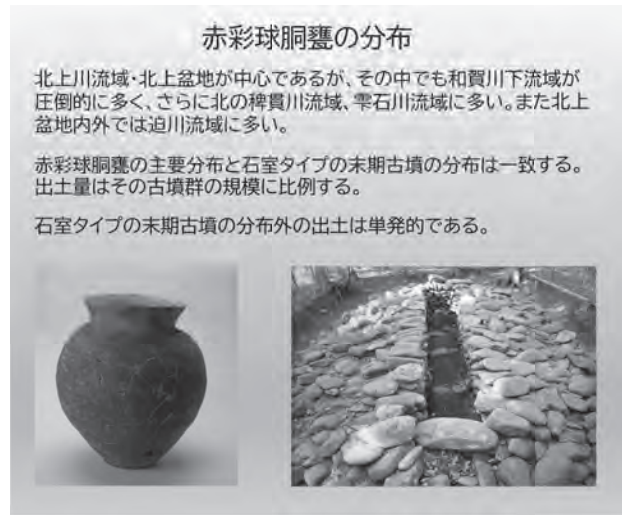
【図32】

うからずっと流れてきて、北上川に合流していくところでは、古墳群が見つかって 100 以上の石室タイプの古墳が分布しています。国指定になっています。ここに東北縦貫道が通っています。そしてこの分布から一つ外れた部分が大崎平野です。ここに鳥矢ヶ崎古墳群があります。この古墳群は変な古墳群で、積み石タイプの石室を造っている古墳もあれば、土坑墓、穴を掘っただけの穴も混じった、2種類が混じった変わった古墳です。これがある地域から赤彩球胴甕が見つかります。この鳥矢ヶ崎古墳群のすぐ近くに、先ほどからずっと話してきた伊治城があります。【図32】これも変な感じですね。北の蝦夷の古墳群と南の進出地点である伊治城が同じような場所にある。そこに赤彩球胴甕がたくさん見つかる、北上盆地以外に唯一たくさん出る場所です。

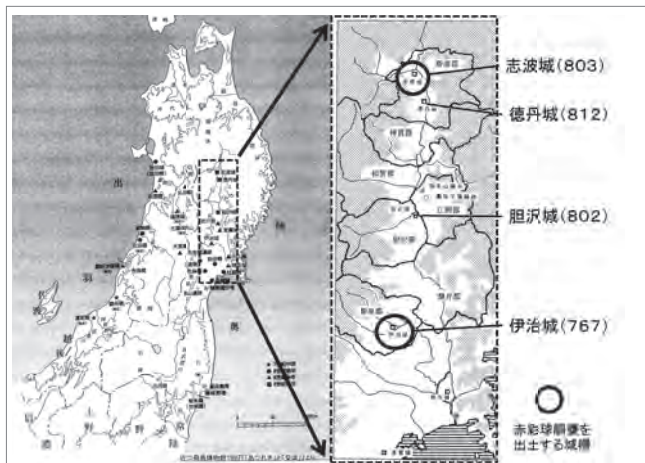
赤彩球胴甕の分布は【図33】、北上川流域、北上盆地が中心ですが、その中でも和賀川下流域に圧倒的に多いです。さらに北の豊沢川と雫石川流域に多い。また、北上盆地では迫川流域に多い。これが先ほど言った大崎平野北側の伊治城のところでは、赤彩球胴甕の主要分布と石室タイプの末期古墳群の分布は一致します。そして出土量はその古墳群の規模に比例します。規模の大きい石室タイプの古墳群は、ものすごくたくさん赤彩球胴甕を持っています。石室タイプの末期古墳の分布外の出土は単発的です。つまり石室タイプの古墳を持たない古墳群地域以外から出てくる赤彩球胴甕は単発的、1個とかそういうレベルしか出てこないという特色があります。

(2) 年代の特色

次に、年代的な特色を見ていきたいと思います。赤彩球胴甕は非常に限られた時期しか出てきません。土器編年、土器の尺度で物差しをいろいろつくるのですが、それを見ると、赤彩球胴甕が出てくるのは本当にこの時期だけです。年代でいくと、750年から850年の間、8世紀後半から9世紀前半くらいで赤彩球胴甕はなくなります。出てきて、なくなる。非常に限られた時期しかありません。分布も限られていれば、



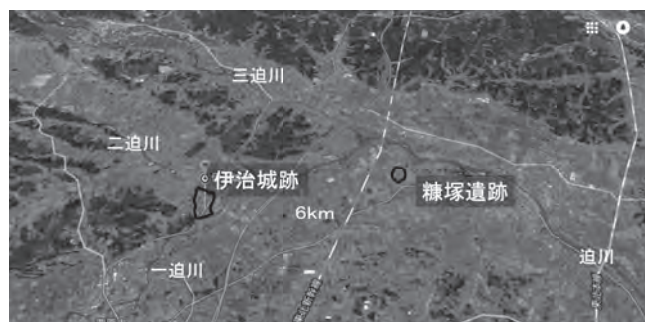
【図33】



【図35】近つ飛鳥博物館 1997『「あつれき」と「交流」』を改編

ある年代も限られています。では、この年代がどのような時代だったか見てみたいと思います。この時代は面白いです。先ほどの年表と同じに見ていきます。ちょうど8世紀後半の774年、まさに海道の蝦夷が桃生城の攻撃を始めたのが8世紀後半です。そしてそれが終わってくるのは、811年、この辺りです。嵯峨天皇の時期、文室綿麻呂が志波城において軍を解散します。この年代と、赤彩球胴甕がものすごくたくさん出る最盛期とは全く一致するのです。なぜこういうことが起きるのか分かりませんが、全く一致します。この後、赤彩球胴甕が急速になくなります。まさに、この戦いに負けた蝦夷が南に送られていくのはいい格好となるのですが、実は徳丹城を造った年代はこの辺りです。これは9世紀の初頭です。赤彩球胴甕の継続期間は9世紀の前半まで続くので、赤彩球胴甕の集団は残っています。結構大きく残っています。ですから負けて移動は、私はおかしな感じがします。

そして伊治城を見ていきます。先ほど見たとおり、鳥矢ヶ崎古墳群といわれる大崎平野北側で唯一、赤彩球胴甕の集中がある地域のちょうどその場所に一致するように、伊治城が造られています。【図34】これが伊治城です。ここに糠塚遺跡があります。ここが面白い遺跡で、6キロぐらいいか離れていません。伊治城からも赤彩球胴甕の破片が見つかるのですが、糠塚遺跡からは、たくさんの住居跡から赤彩球胴甕が見つかります。胴を塗って、口に棒状の文様を付けていく典型的な赤彩球胴甕です。これを持つ集落が伊治城を造っている時期とそれほど変わらない時期なのに、ここに大きな集落を持ってられる。本当は敵対関係のはずですが、なぜか



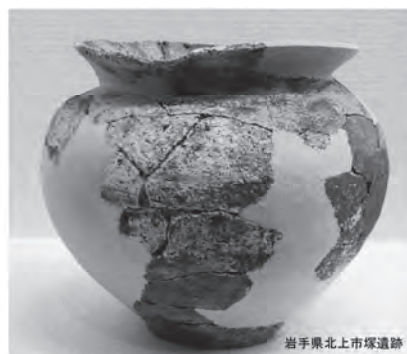
【図34】

こういうことが起きてくるのです。また、伊治城の兵站基地である玉造柵の擬定地である宮沢遺跡から見つかっております。伊治城、糠塚遺跡、宮沢遺跡という政府の北方進出拠点に赤彩球胴甕が深く関わっています。

そして、政府の出先機関である城柵から赤彩球胴甕が出てくる遺跡が、伊治城、宮沢遺跡の他にも一つあります。それは志波城です。【図35】志波城は坂上田村麻呂が胆沢城を造った後に、さらに北方へ進出するために、北上盆地の最北端に近いところに造った城柵です。ここからも赤彩球胴甕が見つかります。ここが志波城です。北側に雫石川が流れていて、この氾濫によって壊れるので徳丹城に引っ越したというのが文献に書かれた説です。実際、城柵の北側は川で削られていて、その可能性もありますが、それ以前に恐らく北方への蝦夷征夷が中止になったのもあると思います。築地堀に櫓も造っています。まさに、いざというときの戦いに備えるための役所でもありました。そしてこの志波城は非常に大きな城柵です。多賀城よりも大きいぐらい、むしろ恐らく北のほうに造られた最大級の城柵だと思います。その城柵の中心部の政庁の周りに、非常に広い外郭があります。ここに竪穴の住居跡がたくさん見つかります。この竪穴住居跡は、復元するとこのように役所の周りに竪穴がたくさんあります。この城柵は、恐らく真ん中の家に、どのような人がいたかはありますが、たくさんの方がいました。その中から赤彩球胴甕が見つかります。城柵という中央政府がさらに北に進出しようというお城の中に、なぜか赤彩球胴甕を持った人がたくさんいます。

つまり、赤彩球胴甕の年代は、大体8世紀後半から9世紀前半までで、陸奥国38年戦争の年代と大体重なっています。北上盆地に城柵が設置されても、赤彩球胴甕が使われます。赤彩球胴甕が出土する城柵は、伊治城と志波城という、北へ進出するための目的で設置された城柵です。伊治城は多賀城の防衛ラインという城柵の範囲外に造って、より北に進出するために造った城柵です。志波城は何のために造ったかという、さらに征夷を継続して、さらに北方の蝦夷たちと戦うために造った城柵です。大崎平野の一番北に造った城柵と、北上盆地の一番北に造った城柵の中に、赤彩球胴甕が出てきます。

赤彩球胴甕はなぜ出現したかという問題については、北へ進出しようとする京政権、奈良や京の都にいた人たちの進



【図36】

出の意図を感じて、こういう一つの土器を作って何らかのまとまりをしようとしたのではないかと考えられます。どうしてそういうことをしたかという、先ほど言いましたとおり、蝦夷はばらばらな存在だったのです。各集団間でばらばらで、小競り合いをしていた。そういう集団が、ある程度まとまりを持ったときにどういうことが起きるかという、先ほど大陸の遊牧民匈奴の例を出しましたが、ユーラシア大陸全土を支配したモンゴル帝国はもともとばらばらな遊牧民たちがまとまった結果、非常に大きな帝国をつくりました。それに似たようなことが起きたのではないかと思います。赤彩球胴甕という一つの象徴を元に、ばらばらだった集団がある程度まとまりを持って、集団で中央政府に対抗していく。その結果、モンゴル帝国ではないにしても、騎馬戦闘集団的なものが出て、中央政府はなかなか征夷ができなかったのではないかと考えます。

7. 赤彩球胴甕の成立

それを証明するために、赤彩球胴甕がどのようにして出現したかを調べてみました。赤彩球胴甕が8世紀の後半に現れるのであれば、このところには何か前兆があるのではないかと。つまり、原(プロト)赤彩球胴甕、赤彩球胴甕の元になるものがないといけないのではないかと考えるのです。なぜなら、日本の同じ時期にはそういうものがないのですから、持ってこられないのですから、中で作られていると考えれば、古い

時代になると実は、古墳時代の残骸のようなべた塗りで赤く塗る甕は古い段階にもあります。

このほか、赤彩球胴甕を結ぶこのラインも空白で何もつかめていなかったのですが、最近、この空白を埋める非常に面白いものが見つかっています。これは北上の塚遺跡から見つかっています。【図36】少し見づらいですが、単純な赤彩ではありません。下を赤く塗り、中間部に矢印マークのようなものをべたべた付けて、上には棒状の線を入れるのですが、複雑な入れ方をしています。ここは口唇部です。これが裏側になります。口の内部です。こういう変な文様を付けた土器が見つかります。ただし同じものは1個もありません。これしかないです。これは沿岸部でも見つかって、夏本遺跡で見つかっています。【図37】見た目は一瞬、普通の赤彩球胴甕に見えるのですが、実は文様を見ると、内側にこういう変な文様を入れています。これも赤彩球胴甕というには文様が変な感じですが、これは盛岡で見つかっています。【図38】やはり赤彩するのですが、赤く塗らないで、格子のように文様を入れます。

こういう土器群は、赤彩球胴甕と一緒に並べていました。【図39】高坏に付けられた複雑な文様、私が調べ始めたころは、赤彩球胴甕の垂流型でこういうものもたまに作ったのだと思っていたのですが、出土して共伴する土器をよく調べると、全部、赤彩球胴甕よりも古い段階で作られています。一



【図37】



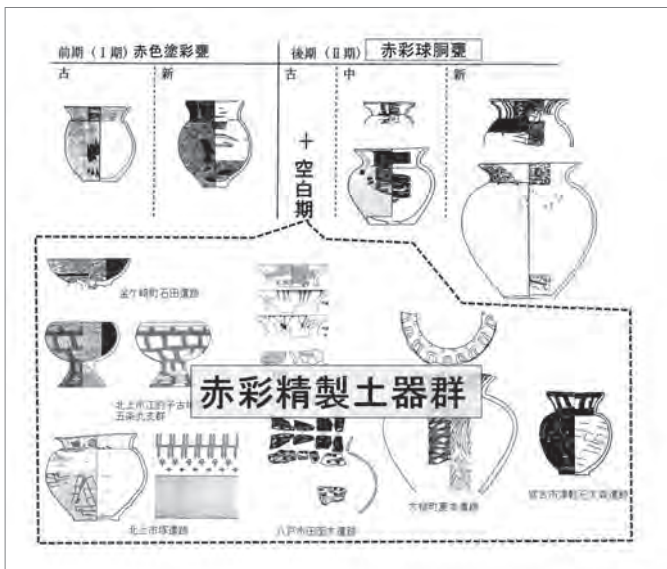
【図39】



【図38】



【図40】岩手県胆沢郡金ヶ崎町石田遺跡



【図41】

段階古い段階です。これは金ヶ崎町の土器です。【図40】金ヶ崎は北上の南にある町です。これは四つ足です。四つ足で体部に横線を赤彩している。こういうものを見て、一つとして同じものがない、レアなものです。これが年代的に全部赤彩球胴甕よりも古い段階で出てきています。恐らく、こういう独特な文様、1個しかない文様を付けて、そして四つ足の土器で、普通の使い方をしていたのではない、何か術的な儀式用土器が、赤彩球胴甕が分布しないような八戸や夏本のこういうところや、宮古などからも出てきます。

どういことかという、恐らくこの土器は、各蝦夷集団、ばらばらの蝦夷集団の中で、祭祀(さいし)的、呪術的な、特別な用途として使われていた少数の人、呪術者かもしれませんが、そういう人たちが作った道具で、各集団にばらばらと複雑な赤彩文様を持つ土器が存在していた。それも甕が多いのですが、甕に限らず高坏にもあった。こういうばらばらな土器群を、私は仮に赤彩球胴甕と分けるために赤彩精製土器群と名付けています。【図41】この赤彩精製土器群が、年代的なこの空白期を埋めるものと考えています。つまり、ばらばらだった蝦夷間の交流、祭祀

【表2】

赤彩球胴甕と赤彩精製土器との違い	
・ 年代の違い	赤彩精製土器は7世紀から8世紀 赤彩球胴甕は8世紀後半から9世紀前半
・ 分布の違い	赤彩精製土器は蝦夷末期古墳分布と重なるように広く分布 赤彩球胴甕は蝦夷末期古墳のうち石室タイプの分布と重なる
・ 出土状況の違い	赤彩精製土器は一集落の1個ぐらいのレアな存在 赤彩球胴甕は一集落に複数
・ 文様の違い	赤彩精製土器は同じ文様が無い1点もの 赤彩球胴甕は様式化している

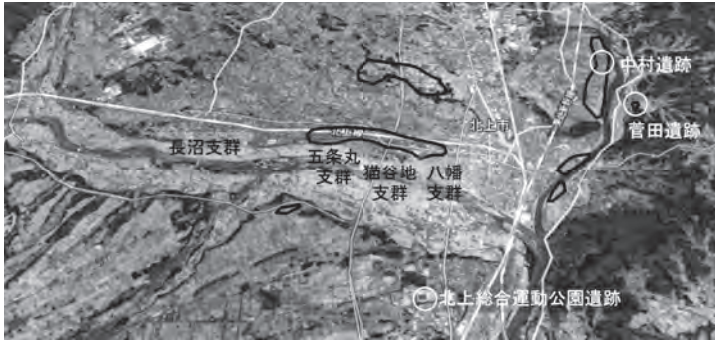
の部分に、ある共通の複雑でばらばらなレアな土器を一つの様式化した土器にして、それを一つのまとまりの象徴として持った集団がいた。それが恐らく、石室を造る古墳群を造っていた蝦夷たち、彼らがそのようにしたのだと思います。

そして集中したこの時期に、なぜこのようなことをしたかという、それは先ほど言った南側の京政権、いわゆる平城京の政権における北への進出に対抗するためだったと考えています。なぜなら、北上盆地もそうです。石室タイプを造った人たちは、南に直接接する場所の蝦夷だからです。そしてまとまっていく動きがこれです。

では、なぜわざわざこういうことをしたのか。赤彩精製土器や蝦夷たちのお祭りの道具の土器を使ったのかです。恐らく、こういう土器を使うことによって、北上盆地だけではなく、こういうもので祭祀をしていた広い範囲の蝦夷たちをある程度巻き込んでいったのではないかと。われわれはこの赤彩土器という祭りの土器を象徴として使っていますと示すことによって、周りの蝦夷たちからも、ある程度賛同や援助を得るために、より強く打ち出していった。それが赤彩球胴甕ではないかと考えています。北東北太平洋岸の広い地域にこういう赤彩精製土器が出現する後に、赤彩球胴甕が特に石室タイプの古墳群を持つ蝦夷たちに作られ、城柵が造られても、まだ集団を維持していく。なぜか伊治城の近くの赤彩球胴甕は特別ですが、この出現も伊治城という最初の一步です。中央政府の一步に対する場所に赤彩球胴甕が出てくるのは、戦いと赤彩球胴甕に何らかの関係があることを示しているのではないかと思います。

まとめますと、【表2】赤彩球胴甕と赤彩精製土器群との違いは、まず年代です。赤彩精製土器は7世紀から8世紀にかけて、赤彩球胴甕は8世紀後半から9世紀前半に入ってくる。そして分布の違いも、赤彩精製土器は、蝦夷末期古墳群の分布と重なるように広い範囲で分布します。赤彩球胴甕は、蝦夷末期古墳群のうち石室タイプのもので分布が重なる。出土状況の違いは、赤彩精製土器は1集落に1個ぐらいしかないレアな存在。赤彩球胴甕は1集落に複数存在します。そして文様は、赤彩精製土器はいろいろなタイプの文様があって、同じ文様はほとんどない。赤彩球胴甕は様式化して、ほとんど共通する文様を持っています。

恐らくこの動きから見ても、より広い範囲の中で、石室タイプの古墳にも赤彩精製土器は出ますので、赤彩球胴甕の出現は、広範囲にあった蝦夷の祭祀用土器である赤彩精製土器を使っていた集団の中で石室タイプを持つ古墳群の蝦夷たちだけが、これを様式化した文様にして広く行き渡らせて分布させている。分布する場所については、古墳がある場所と唯一伊治城という38年戦争の取っ掛かりのところに強く分布してくる。こういうところから見て、赤彩精製土器から赤彩球胴甕の動きは、陸奥国38年戦争に非常にリンクした動きと考えて間違いないと思います。



【図42】

では、なぜこの赤彩精製土器が表れてきたかという、赤彩精製土器、赤彩球胴甕の一つ前の段階です。複雑ないろいろな文様を持つ赤い土器です。私はこう考えているのですが、7～8世紀の北方の土師器によく表れるのですが、こういう櫛描（くしがき）の文様を入れた甕や、線を入れた文様の土器が表れます。8世紀の中ごろと書いてありますが、北日本で結構見つかってきます。恐らくこの土器は、北海道などの続縄文文化とある程度関係しているのではないかと考えています。そう考えると、北海道の人たちと南の土師器文化とが接触して出現してきたのが、赤彩精製土器と呼ぶ、北東北太平洋側に分布する独特な土器だったのでしょう。

8. 赤彩球胴甕の終焉

最後に赤彩球胴甕の終わりを考えていきます。実は、ここに江釣子古墳群があって、これが和賀川です。【図42】北上川が流れていて、この部分に非常にたくさん赤彩球胴甕を出す集落が分布してくるのですが、城柵が造られたころより後の赤彩球胴甕が見つかっています。これが北上市の菅田遺跡から見つかっている終わりのころの赤彩球胴甕です。【図43】文様を付けているのですが、口縁内面の棒状赤彩文様はすごく雑になります。そしてこの土器には墨書土器を伴いますし、土師器もほとんどろくろで作られています。ろくろの技術は北上では城柵が造られた後に土師器で使われるようになります。これから見ると、城柵が

北上盆地に造られた後も、赤彩球胴甕が使われたことが分かります。これは北上の中村遺跡から見つかっています。これは須恵器の製作の叩き成形技法を使って作られた赤彩球胴甕です。後から入ってきた須恵器の技術と赤彩球胴甕が合体したのも出てきます。こういうところから見ても、北上盆地に城柵が造られた後も、赤彩球胴甕が使われていたことが分かります。

7世紀後半から8世紀前半にかけて、古墳時代の全面赤彩土師器、北海道の続縄文土器や擦文土器の影響を受けた種々の赤彩精製土器が北東北太平洋側の各地にありました。横穴式石室の影響を強く受けた末期古墳、江釣子古墳群のような石室タイプのものを造営していた岩手県北上盆地中央部の和賀川流域の集団は、8世紀後半に、これを大きく胴の張る赤彩球胴甕の土器に様式化した文様を施した赤彩精製土器にまとめる。これが赤彩球胴甕といわれるものです。ですから、帝京大学に出てきているのも赤彩球胴甕なので、この系統になるわけです。その成立の年代は、伊治城周辺の出土から見ても、767年の伊治城造営から始まる京政権、いわゆる平城京の人たちの北上盆地方面への進出に対する動きだったとみて間違いありません。そして9世紀の第2四半期の早い段階に、赤彩球胴甕は終わりを迎えます。これも成立の背景と同様に、802年の胆沢城の造営、803年の志波城の造営、そして811年の北上盆地北半に、和賀郡、稗貫郡、斯波郡という郡を置きます。こういう動きと一致しており、812年の徳丹城の設置により北上盆地が京政権に組み入れられた動きと関連していると考えられます。しかし、それが直接の原因でなかったのは、城柵が造られても、赤彩球胴甕を持つ大きな集落が残っていること

【表3】

ま と め

①7世紀後半から8世紀前半にかけ、北東北の各地域に北海道の続縄文土器～擦文土器の影響を受けた種々の赤彩精製土器があった。横穴式石室の影響を強く受けた末期古墳（積石石室タイプ、江釣子古墳群型石室）を造営していた岩手県北上盆地中央部和賀川流域の集団は、8世紀後半に大きく胴の張る球胴甕形土器に様式化した文様を施す赤彩精製土器にまとめる、これが「赤彩球胴甕」である。

②成立の年代、伊治城跡周辺から出土などから、767年の伊治城造営から始まる京政権（律令政権）の北上盆地方面へ進出の動きに関連すると考えられる。

③9世紀第2四半期の早い段階に赤彩球胴甕は終焉を迎える。これも成立の背景と同様に、802年胆沢城造営、803年志波城造営、811年の北上盆地北半の和賀（和賀川流域）、稗貫（稗貫川流域）、斯波（雫石川流域）の3郡設置、812年徳丹城の設置らによる北上盆地が京政権組織の組み入れられた動きと関連していると考えられる。しかし、それが直接要因でなかった。城柵設置後も30年近く（ほぼ1世代分）は赤彩球胴甕を保持し続けていることは、この集団が、京政権下に組み入れられ、さらに一部が関東甲信等に移配した後も、崩壊しなかったことを示している。



北上市菅田遺跡

【図43】

で分かります。城柵設置後30年、ほぼ1世代分ですが、赤彩球胴甕を保持していた集団がずっと大きな集落をつくっていくのです。その後、一部が関東に移配された後も、城柵が造られた結果、文献によっては大幅に蝦夷が移配されて蝦夷社会は崩壊したという人もいますが、そういうことはなかったことは赤彩球胴甕が残っていることから、間違いないとみていいと思います。【表3】

9. 上っ原遺跡の赤彩球胴甕について

最後に上っ原遺跡の赤彩球胴甕について、私の目から見たらどのような感じに見えるかをお話したいと思います。

これが今展示してある赤彩球胴甕です。【図44】胴をべた塗りの赤にして、棒状の赤い文様を入れて、口唇部に文様を入れる。丸を入れてあるのも、ときたま見掛けます。印象は全く赤彩球胴甕ですが、文様の付け方がかなり粗いです。先ほど見た最終段階の北上盆地で見られた菅田遺跡に見られる赤彩球胴甕と同じように粗い作りということは、赤彩球胴甕でも終わりのほうになります。ただ、口唇部をきちんと面取りするところは、むしろ古い様相ですが、こういうのはきちんとやっているの、かなり赤彩球胴甕をよく知っている人間でなければ作れません。ですので、赤彩顔料の分析の結果、少し変わった赤彩顔料を使っているところから見て、この多摩丘陵で作られたことは間違いのないので、持ってきたのではなく、知っている人間がやったことになります。口唇部の面取りが重要で、こういうところは赤彩球胴甕によくあるものです。共伴している土器も、甕の口縁部がきちんと立ち上がったり、非ろくろでありながら平底風にして内面を吸炭させ黒くして、磨きを丁寧にかけるのも、北上盆地の9世紀の初頭くらいの土器によく見られるものです。ここは沈線を省略している、退化している形になるかもしれませんが、これも9世紀の第1四半期に多いです。この土器がもし北上盆地を掘って出てきたら、何の疑いもなく大体9世紀前半ぐらいの土器としてしまいます。

そういうことから、上っ原遺跡の赤彩球胴甕は確かに赤彩球胴甕なので、陸奥国38年戦争に関わった北上盆地の人たちが関連する人でないと作れない土器です。そして伴っている土器も、私から見ても北上盆地から出てくる9世紀初頭くらいの土器として間違いのないので、恐らくここに来た人は、北上盆地の生活様式を変えないで、赤彩球胴甕を作ることも許されてここにいた蝦夷の集団です。この赤彩球胴甕がもっとたくさん関東地方から見つかるのであれば、大規模な移配で、中央政府の指示のもとに蝦夷をこちらの南関東まで移住させてきたものになるかもしれませんが、帝京大学の平野先生なども、多くの土師器研究者を動員して関東地方で探したようですが、いまだにこれしか見つからない、上っ原遺跡しか見つからないということは、ここにやってきた人は果たして強制的に移住させられた人なのか、それとも、むしろある特殊な技術、職能を持ってこちらに来て、そういう職能を生かしたことをしていたのか、いろいろ考えなければいけない問題だと思います。

最後に、帝京大学で見つかった赤彩球胴甕は大変貴重な史



【図44】東京都多摩市上っ原遺跡

料です。単に東北の人がここに来たという問題ではなく、陸奥国38年戦争など、蝦夷と当時の中央政府の戦いの中で、非常に重要な意味を持った土器です。それがここにやってきているということは、いろいろ考えなければいけない問題ですし、文献から考えた蝦夷の移配の問題も考え直さなければいけないところもあるのではないかと考えます。

以上で私の話を終わりにします。長い時間、ありがとうございました。

エミシ研究講座

第5回 東国における牛馬の考古学

帝京大学文化財研究所准教授 植月 学

≪実施日 2019年12月14日(土) 於 帝京大学ソラティオスクエア S011教室≫

連続講座の最後の回に、このようにマニアックなテーマで良いのか分かりませんが、私は動物考古学を専門にしています。連続でご参加いただいている方が多いと思いますが、今までのオーソドックスな考古学の先生方と比べると、少し毛色の違う骨の話が中心になります。どうか最後まで帰らずにお付き合いいただければと思います。

初めにいただいたお題が、武蔵の話題でということでした。私は山梨や長野の資料はよく見えていますし、もともと千葉で学生をやっていたので、千葉の資料も結構見ているのですが、残念ながら武蔵の史料にあまり縁がありませんでした。唯一とっていいのが、今回も展示されている上つ原遺跡か

ら出た牛です。馬のことは結構研究してきたつもりですが、この遺跡をきっかけに牛のことを調べ始めたという思い入れはあります。ですから、きょうは上つ原遺跡の謎ということで、なぜあそこで牛が出たのか、そして牛はどのような使われ方をしたのかを中心にご紹介したいと思います。

内容ですが、動物考古学、要するに遺跡から出てきた牛や馬の骨から、関東あるいは山梨を含めた東国で牛馬がどのように使われてきたのかを見ていきます。時代は古代に絞ってお話します。その上で、上つ原遺跡のあの牛はどのように使われたのか、展示に絡めて私の考えを説明します。

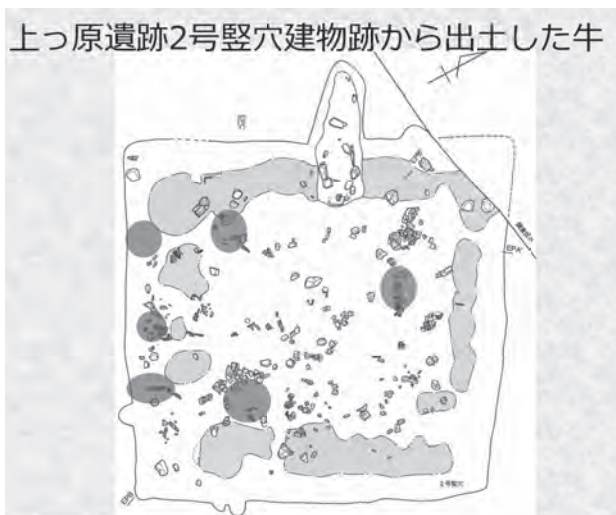
上つ原遺跡から出土した牛

まず、展示もご覧になっていると思いますが、上つ原遺跡から出土した牛について簡単に概要をご説明して、最後に謎解きをしたいと思います。【図1】この講座の第2回で平野さんが簡単に説明されているかもしれませんが、少し変わった遺構でして、9世紀半ばの竪穴(たてあな)建物跡から、多量の炭化材、焼けた柱が出土しています。土器も焼けています。それから牛の骨が、赤く印を付けた場所から出ています。調査者の平野さんは、竪穴を廃絶するに当たって、火を入れて、儀礼を兼ねてこの牛も消費されたのだろうと、報告書の中では書かれています。私も、このような状況を伺って、そうかもしれないと当初は思っていました。ただ、実際に牛の骨を預かって細かく見ていくうちに、そういう解釈は成り立たないと考えるに至りました。その理由は後で詳しくご説明します。

疑問点が幾つかあります。一つは、なぜ牛がということですか。私はどちらかというときまで馬のを中心に研究していましたし、東日本は馬のイメージが強かったのです。しかし、この遺跡は牛しか出ていません。4個体分の牛の骨が出ています。比較的高齢の牛が2個体、もう少し若い牛が2個体です。今にして思うと非常に不勉強だったのですが、馬ではなくなぜ牛なのだろうというのが、最初の素朴な疑問でした。

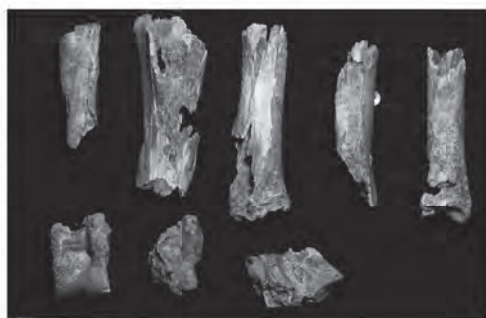
もう一つは、牛の骨が焼けている点です。【図2】これは先ほど言ったように、竪穴建物跡自体に火を入れたような痕跡があるので、不思議ではありません。しかし、その焼け方が不自然という疑問がありました。

それから、スーパーのお肉売り場のようなこの図が後で出てきます。【図3】部位組成とありますが、牛の体のいろいろな部位が全て出ているわけではない。黒く網掛けをしたところはたくさん出て、グレーのところは幾らか出ていて、白



【図1】

疑問点①



【図2】

いところは全然出ていません。なぜこのように偏るのかというのが、もう一つの当初の疑問でした。これらの疑問を後半で解いていきます。

上つ原遺跡の牛を巡る疑問が以上のように3つありました。まず、なぜ牛かについて。これは単に私が不勉強だっただけで、上つ原遺跡を調べる前は、きちんと牛について調べていませんでした。この調査をきっかけに、実際のところ、古代の東国で牛がどのくらい出ているのか調べ始めたところ、今までの自分の考えは間違っていたことがよく分かりました。

1. 東国古代の牛馬 西の牛、東の馬？

西の牛、東の馬。どうですか、みなさんはこういうイメージをお持ちでしょうか。動物や家畜に関心がある人だと、あるいはこういうイメージを持たれているかもしれません。西日本が牛の世界、東日本は馬の世界。そのイメージ自体は別に間違いではなくて、実際にこちらの明治時代の統計に現れています。【図4】左が明治10年、右は少し後で明治19年です。似たような時期の明治時代に統計を取って、各地で牛と馬がどれくらい飼われているかという図です。

馬の多い地域、牛の多い地域。黒が馬で、白が牛です。ご覧になって、傾向としてはいかがですか。大体同じような傾向が出ていますが、確かに西日本は牛の世界、東は馬の世界、これを見るとそのとおりです。やや飛んで、九州の特に南のほう、熊本、鹿児島、宮崎辺りは馬が多いですが、大ざっぱに言って、西日本は牛、中部、関東、東北は馬です。こういうイメージにいまだに引きずられていて、何となく東は馬、西は牛というわれわれの今のイメージがつくられています。ところが、実は歴史をさかのぼっていくと、どうもそうではないということが考古学的に分かってきました。

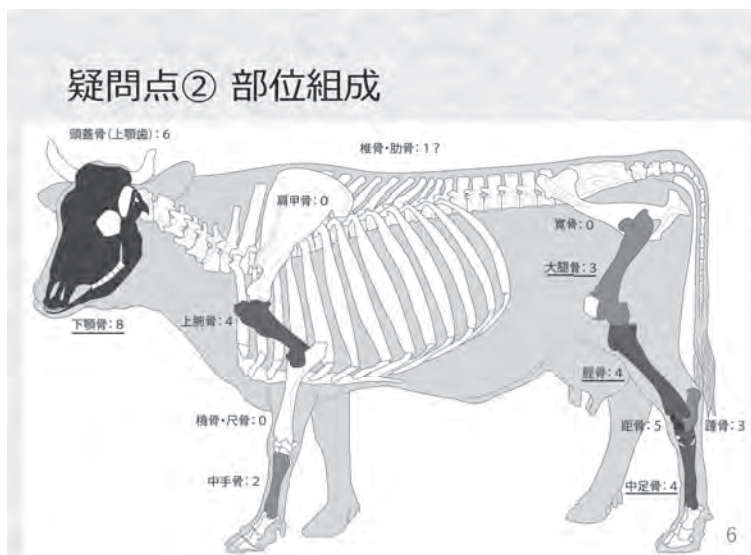
小さい表で恐縮ですが、古代、奈良・平安時代から、中世、鎌倉・室町辺りの東国の遺跡を取り上げて、山梨、長野、群馬、それから東京、埼玉の武蔵地域、それから千葉、静岡、神奈川辺りで、牛馬が比較的多く出ている遺跡を幾つか引いてき

東国の牛馬比の変化

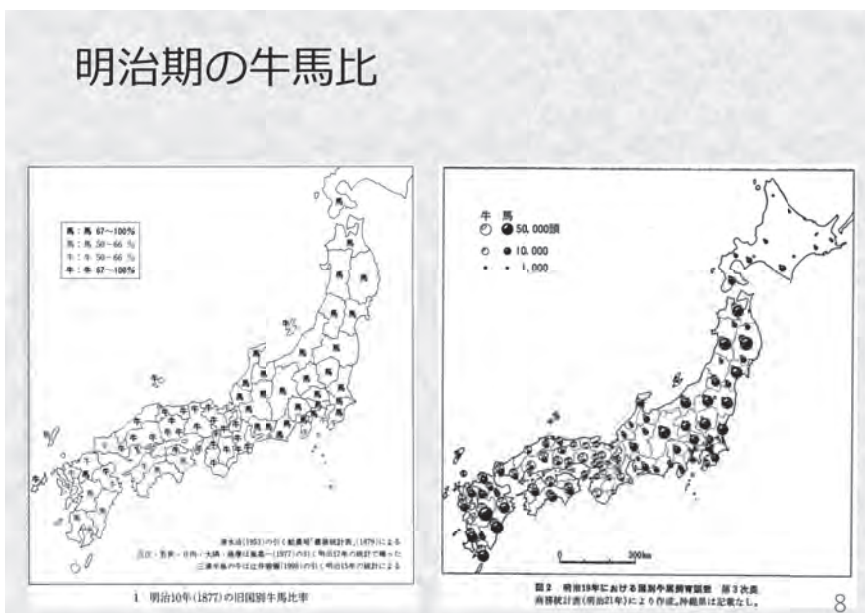
- 牛が多いのはいずれも古代
- 中世は一樣に少ない
- 古代の中にも牛の少ない遺跡

旧国名	遺跡名	時代	ウマ	
			ウマ	ウシ
甲斐	百々	平安	61%	39%
	大師東丹保	鎌倉	87%	13%
	二本柳	平安後期～鎌倉	94%	6%
信濃	風代遺跡群	古代	56%	44%
	松原	古代	77%	23%
	榑ノ井	中世	98%	2%
	池畑遺跡	古代	47%	53%
上野	三ツ寺I	8c末～9c	69%	31%
	田端	6c中頃	92%	8%
	国分寺中興	奈良～平安	38%	62%
		中世	97%	3%
		古墳	15%	85%
	日高	平安	66%	34%
	熊野堂II	中世	89%	11%
下東西	平安前期	92%	8%	
武蔵	元総社明神	奈良末～平安	85%	15%
	大久保A	平安	100%	0%
	有馬桑里	室町	94%	6%
	白井二位屋	平安前期?	94%	6%
	城北	奈良～平安	90%	10%
	根切	7c後～10c初	90%	10%
	伊興	古墳後期	92%	8%
	上つ原	古墳後期～奈良	100%	0%
	落川・一ノ宮	古墳～平安	72%	28%
	鬼塚	平安	0%	100%
下総	谷津貝塚	古代	93%	7%
	印内台	古墳後期～奈良	50%	50%
	伊場	7c末～8c	3%	97%
遠江	伊場	中近世	81%	19%
	四ノ宮下郷	古代	0%	100%
相模	伊場	主に7c末～9c	62%	38%
	四ノ宮下郷	奈良～平安	94%	6%

【表1】



【図3】



【図4】



【図5】

て、骨の数が牛と馬でどれくらいの比率で出ているかを調べた表です。【表1】

そうすると、傾向として幾つか見えるのですが、どうでしょう。まずこの表で、水色で塗ってあるのが中世以降の遺跡です。【表1 斜体・塗りつぶし部分】白抜きが古代の遺跡です。それから黄色く網掛けをしたのが大体牛が3割以上出ている遺跡です。【表1 太字部分】比較的牛が多い遺跡になります。全体的には牛が多い遺跡はそれほど多くないですが、水色と黄色を比べたときに関係が読み取れます。水色と黄色、どうでしょう。重ならないですね。つまり、中世の遺跡で牛を多く出す遺跡はないということです。牛が多いのはいずれも古代で、黄色は全部古代の遺跡です。中世は一様に牛が少ないのです。

もう少し細かく見ると、古代の中にも牛が少ない遺跡があります。古代の遺跡はみんな牛が多いというわけではありませんが、どうも古代の遺跡の中に牛は比較的多い遺跡が存在するようだと分かってきました。

つまり、奈良から平安時代にかけては、東国では牛が結構飼われていました。では、古代の牛は何のために飼われていたのだろうかというのが、次の図です。【図5】

黄色く塗ってあるのは蘇を貢納していた国です。古代の土器にも蘇という文字は書かれています。墨で書かれた蘇という文字が見えますが、これは蘇を入れて都に納めたのではな



【図6】

いかといわれる小型の壺です。蘇というのは牛の話ですから何となく想像がつくでしょう。要するに乳製品です。製法を見ると、牛乳を煎じて、固形化させたものとされています。発酵させるとは書いてありません。黄色く塗ってある国は、毎年ではないですが、何カ国か当番が決まっています、順番に蘇を作って、都に納めなさいと定められていました。これを見ると東北、九州を除くかなりの広い範囲で蘇を納めていました。東国もぼつちり入っています。東国にも当然牛がいたわけです。

さらにもう一つ、これは『延喜式』という平安時代の規定から引いてきました。他にも牛に関連して都に納める品として、牛の皮があります。赤く点を落としてあるのは、牛の皮を納めると決められていた国です。こちらは国が偏っていて、特に東国に結構集中しているのが分かります。他には官牛牧があります。牛の牧場、公営牧場のようなものですが、馬の牧場もあるし、牛の牧場と書かれたものもありますが、その牛の牧場が置かれた12カ国のうち、5カ国は東国に属します。

実はこのように文献だけを見ても、古代の東国に牛がたくさん飼われていたはずだという証拠は幾らでもありました。牛の牧場をつくって、乳製品を生産して、あるいは牛の皮を取って、都に納めていた。それが広く関東で行われていました。牛の骨が古代に多く出土するのは当然でした。実はよく調べると、考古学的にもきちんと裏付けられていたことになります。

これは奈良時代の長屋王の屋敷から出てきた木簡です。【図6】牛乳を煎じる人に対して、米を支給しますという札です。こちらは牛乳を持参した人に米を支給したという給料明細のようなものです。長屋王の邸宅にも牛乳を持ってくる人がいたり、あるいは、牛乳を煮詰める人がいたことが分かります。蘇はあのような小さなつぼに入れて、納めると決められていた量も大した量ではありません。当時の蘇は、都で一部の貴族が口にする非常に高級な薬のような、あるいは非常に栄養価のあるぜいたく品でした。そういうものを納めるために、東国で牛を飼っていたことが分かってきました。

次の疑問ですが、先ほど見たように、中世になると軒並み牛がいなくなります。ゼロではないですが、中世、鎌倉や室町の遺跡を掘ると、東国では牛はあまり出てこなくなってしまう。なぜだと思いますか。自分なりの考えをヒントとして出していますが、東国武士団といって、平安の後半ぐらから、東国ではだんだん武士団が力を持つようになりました。同時に、先ほどの地図で見たような各国から中央に物を納めさせるという律令制は、だんだん緩んできます。

東国では支配者が次第に武士団に代わっていく中で、恐らく社会の構造も変わってきた。新しく東国を支配した武士団にとって、牛と馬を比べたときに、馬の方が使いやすかった、便利だったのではないかというのが私の考えです。馬は平時は農耕にも使えますし、戦となればこのように活躍します。一方で、律令制が崩れてきて、蘇を納めなさいとか牛の皮を納めなさいという制度がだんだん緩んでくると、牛を飼う必要性が薄れていきます。これが理由だと思っています。

もう一つ、最近いろいろな本を読んでいて考えるのは、環



【図7】

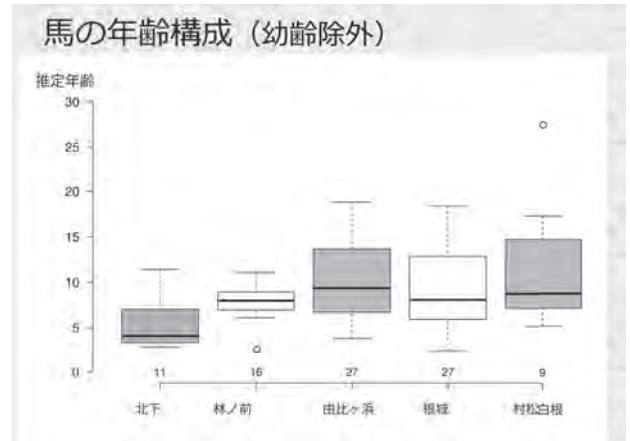
境風土的に、牛と馬の適正が異なるのではないかという点です。馬はもともと、草原地帯からやってきた寒い乾燥地帯の生き物です。牛はもう少し暖かく湿潤なほうから来ている生き物です。東日本と西日本の環境の差を考えたときに、馬のほうが東日本の風土に適していたことは、もしかしたらあるのかもしれません。

馬糞も牛糞も堆肥に使うのですが、馬糞のほうが熱を発すると読んだことがあります。牛はそうではありません。そうすると熱を発する馬糞のほうが、比較的寒い東国から東北ではより有効だったのではないかと。逆に暖かい西日本のほうでは、牛のほうが便利だったと思います。そういう風土的なものも関係しているのかなと最近思い始めています。

武士団が力を握ってきて、武士団にとってどちらかというより有利な家畜。そうすると西日本にも牛がいるではないかと思われるかもしれません。これは戦国時代の記録ですが、【図7】西日本の武士は馬乗りが下手だったと宣教師が書いています。それから東日本は、ご存じのように武田騎馬隊というように、騎馬戦に優れていました。西の武士は、どちらかというより馬乗りが下手で、むしろ船だと書いている記録もあります。東国の武士団にとっては、馬が非常に有効な家畜でした。西のほうは、農耕にも牛、それから戦の馬というよりは船、そういうことが考えられるのかもしれない。いずれにしても、古代には牛が相当程度飼われていたけれども、中世になると東国では飼われなくなります。これは考古学的にも裏付けられています。



【図8】



【図9】

2. 短命だった？ 古代の牛馬 歯は語る

2番目の話ですが、これも最近牛や馬の骨を見ていて分かってきたことがあります。特に古代においては、牛や馬は非常に短命だったことです。飼育技術がまずくて早く死んでしまうという話ではありません。かなり人為的に起きていることです。

そもそもどのように調べるか。馬の場合は、この下顎のレントゲン写真のように非常に長い歯を持っています。【図8】右が生えただけで4歳くらいの馬の歯ですが、大体10センチ近くあります。それが固い草を毎日食べているうちにどんどん歯がすり減って左の10歳くらいになると、これくらい短くなります。もっと食べ続けたら、歯がなくなってしまうのではないかと。なので、大体20歳くらいで、もちろんもう少し長生きするものもいると思いますが、死んでしまいます。逆に言うと、歯の高さを調べると、大体年齢が推定できるという便利な式を作った人がいますので、それを元にいろいろな遺跡で歯の長さを測って、年齢を推定する作業をずっとやってまいりました。

図が一例ですが、遺跡によってこれほど違います。【図9】まず、幼齡除外と書いてあります。幼齡というのは、人間と同じで、子どものころは乳歯が生えています。そこで、乳歯が生えているような2歳以下の馬を除いてあります。縦が推定年齢です。この幅の真ん中の棒が中央値です。箱は、主要な年齢がこの辺にまとまっているということです。上下の棒が最小から最大の範囲です。千葉県市川市の北下遺跡は古代です。林ノ前遺跡は青森県の平安時代の遺跡です。由比ヶ浜遺跡は鎌倉の鎌倉時代の遺跡です。根城跡は青森県で、戦国時代です。村松白根遺跡は茨城の中世の遺跡です。

北下遺跡は下総国府、国分寺のすぐ近くにある遺跡ですが、非常に若いのが分かります。若くてしかも幅が狭く、4歳前後、4から7～8歳に集中しています。後で紹介する青森の林ノ前も、非常に年齢が絞られています。5歳から10歳の間で、非常に狭い範囲で死んでいるものが多いです。次の中世の遺跡は割と分散しています。古代の馬は早く死んでしまって、中世になると寿命が延びた。

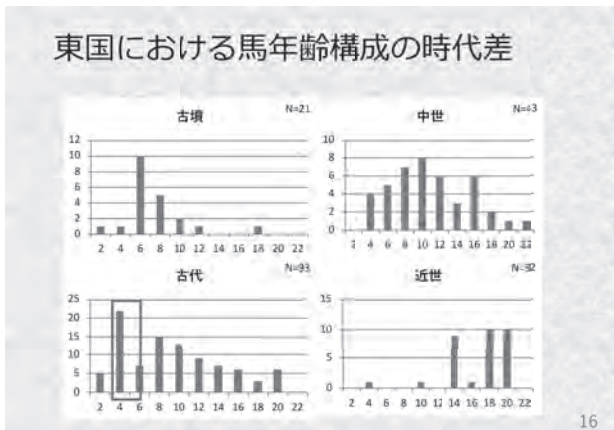
次の図はもう少しいろいろな遺跡を合わせて、古墳、古代、中世、近世まで調べたものです。【図10】Nは調べた個体数です。古墳は少ないですが、古代は93個体を調べて、ここに長野、山梨、群馬、千葉も入ります。東国の古代、奈良～平安時代の遺跡を調べました。

先ほどの北下もそうでしたが、やはり4歳くらいにピークがあります。4歳というのは、人間でいうと大学生とか、まだこれからというくらいの年齢です。逆に病気でばたばた死ぬには元気過ぎる年齢です。4歳くらいが一番元気なときにばたばた死ぬのは、非常に不自然です。これが大きな謎です。何の情報もなくこの図を見ると、時代とともに年齢が上がっている、つまり飼育技術がものすごく改良したように見えてしまうかもしれません。

ただ、考古学の場合は、コンテキスト、出土した文脈も大事です。その馬の骨はどのような場所から出ているのか。実は古墳時代のデータは、ほとんどが古墳の周りの周溝という溝や、あるいは古墳の周りに掘られた馬のお墓から出てきています。恐らくこれは、権力者が亡くなったときに、殉葬といって王様のために立派な馬をいけにえにしたのです。そうすると、やはりよぼよぼの馬を埋めはしないとします。まだ比較的若い見栄えのいいものを埋めたので、こういう偏った年齢になったのでしょう。

逆に極端に高齢なのは近世、江戸時代です。近世での32個体のほとんどは群馬県の農村の跡です。馬捨て場、塚のようなものがあり、その塚に全身が埋められていたものです。これは文献からも分かるのですが、近世の農村には馬捨て場があって、牛でも馬でも死ぬと、そこに持って行って捨てる、というか埋葬します。食べたりはしないで、全身がそのまま埋まっています。農村の人にとっては死体は忌むべきもので、馬捨て場に持って行くのです。これが18や20歳くらいで、恐らくこれは馬の寿命です。これくらいまでは生きる。江戸時代の農村の場合には、恐らく天寿を全うしていたということです。古墳は、天寿ではなく途中で人が屠殺する。では、古代はどうかというと、4歳という自然史は稀な年齢でばたばたと死んでいるので、これは人がつぶしていると考えるのが自然です。

こういうことを言うと、そんなひどいことをする訳がないと反論されることがあります。でも、このいびつな構成を見



【図10】

選抜の年齢 『延喜式』より

- 〔左馬寮式御牧条〕
簡鬃齒四歳已上可堪用者、調良。明年八月、附牧監等貢上。若不中貢者、便充驛傳馬。【信濃國不在此限。】若有貢卻、混合正稅。
- 〔兵部省式諸国馬牛牧条〕
右、諸牧馬五六歳、牛四五歳、毎年進左右馬寮。
- 〔主稅寮式〕
凡諸國牧馬不堪貢進者、申官貢卻、混雜皮直。

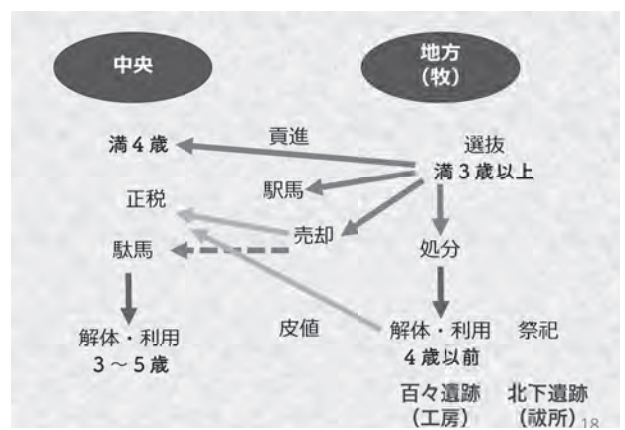
【図11】

る限り、そうとしか考えられないのです。日本人が牛や馬を殺すなんて。家族として大事に飼っていたのに。それは近世のイメージです。古代はそういう面で非常に違う世界があることが分かってきました。

中世は10歳くらいにピークがあります。これも自然に10歳でばたばた死ぬのか疑問ではあるのですが、よく分かりません。つぶす年齢が古代とは違っていったのか、あるいは戦乱で死んだのか。いずれにしても古代とは少し違う在り方です。

古代が4歳くらいでばたばた死んでいるというデータを元に、文献を見直してみると、4歳くらいというのはどういう年齢なのか。ここでも『延喜式』から引いてきました。【図11】『延喜式』もそうですし、これは『養老令』という奈良時代の法令にも、厩牧令（くもくりょう）という牛馬に関する規定に大体同じようなことが書かれています。4歳までつなぎ飼いで、用に足るもの、要するに優秀なものは調教しなさい、翌年に都に貢上しなさいとあります。この選抜の時期がまさに4歳くらいなのです。この場合の4歳というのは数えの4歳で、満3歳ということになります。その次に、都に貢ぐに値しないものは駟馬にしなさい。地元で駟馬として使う。その他、売却するものがあれば、税に合わせて納めなさいと書いてあります。売却ということが出てきます。それから別の条にも、馬は5～6歳、牛は4～5歳で、毎年、左右の馬寮という中央の馬や牛をつかさどる役所に納めなさいと書いてあります。

それから別のところで、諸国の牧馬で中央に貢ぐに堪えないものは、売却して皮の値と混ぜてということが書いてあり



【図12】

ます。やはりあまり優秀でないものは売ってしまう。皮の値、要するに皮の価格が出てきますが、つぶして皮にするものがあつたと見えています。

つまり、馬や牛の良しあしを選別するのが、大体3歳くらいになります。これを踏まえて先ほどの図を見ると、ぴったり合います。先ほどの文献で選抜しなさいと言われていた時期に、たくさんの馬が死んでいます。したがって、文献を見るとそうははっきりとは書いていませんが、4歳で駄目なものはつぶして皮にしなさいと。遺跡からの出方を見ると、中にはそういう馬もいたと言っていると思います。

ただし、以上は馬の多くが4歳で屠殺されていたことを示す訳ではありません。そういうつぶした馬を集めてきて皮を取ったり、加工した工房のような遺跡が調査対象となっている場合が多いのです。中には当然もっと長生きした馬もたくさんいると思いますが、村や牧で死んだ馬は調査対象にかかりにくいのだと思います。まとめて処分したような遺跡では骨がまとまっているので非常に大量に出てくる。そういう遺跡が調査された結果、こういう偏った年齢になっているのだと思います。

模式化した割には非常に複雑で分かりにくい図ですけども、順番に見ていきます。【図12】地方では山梨や長野辺りに牧があります。御牧(みまき)という勅使牧で、この近くにも小野牧という牧がありました。そういう牧場では3歳くらいになったら選抜をして、都に納める優秀なもの、その次のランクで駄馬にするもの、さらにその下のランクは売却というように分かれていた。この辺は文献でも分かるのですが、実際には、例えば中央の奈良の遺跡を見ると、例えば藤原京で駄馬にされた馬もいます。そういう駄馬に使われたらしき馬も、みんな3歳から5歳くらいで亡くなっています。ですから、あまり優秀でない馬も都に連れていかれる。これは奈良文化財研究所の山崎さんが書いているのですが、地方から荷物を積ませて、駄馬として持ってきて、都でつぶしてしまう。悲しい話ですが、そうとしか考えられないのです。

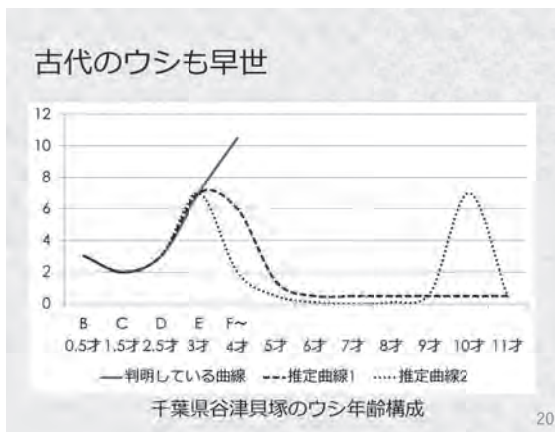
地方でも、中には処分される馬がいる。処分したものを解体したり、皮を取ったりというのが、4歳くらいでばたばたと出てくる理由ではないか。例えば、山梨県の百々遺跡は大量の牛や馬が出ています。恐らくこれは、こういう馬を解体

して加工した場所です。先ほど皮を売ってお金を納めなさいとありました。逆に言うと、解体された牛や馬がいる。こういうマニアックな話を珍しく『読売新聞』で取り上げてくれました。古代の馬は結構若くしてつぶされていた場合があります。その皮を売って、武器にしたり馬具にしたりということが想定されます。

きょうは牛の話がメインになりますが、牛はどうなのか。どうも牛も若くして亡くなっている場合が多いことが分かってきました。あまり分かりやすいグラフではありませんが、千葉県谷津貝塚という古代の大きな集落です。そこから牛が結構出てきて、その年齢を調べました。【図13】牛の場合は馬のような便利な年齢推定式がないものですから、どのように年齢を見るかという、歯の生え替わりです。子どもの歯と大人の歯の生え替わりを見ます。人間でも小学生くらいでみんな生え替わりますね。ですから、生え替わった後は残念ながら分かりません。牛の場合も、4歳くらいまではかなり正確に分かります。子どもの歯が幾らか残っているので分かります。実際に分かったのはこの赤い線です。そこから先は分からないので、大雑把に考えられるパターンを示しました。何が言いたいかというと、この判明しているカーブから見て、どう見ても4歳くらいまでに主要な部分があるということです。全体の数から見て、4歳以降でもっと上がっていくのはあり得ないということです。0.5歳くらいで死んでいるのもいるし、1.5歳で死んでいるのもいるし、2.5歳もいます。この中で見る限りでは、3歳くらいでも結構いる。4歳以上は分からない。そこで落ちるのか、高齢にも別のピークがあるのか、それは分かりません。少なくともかなりの部分が3歳くらいまでに死んでいます。

牛を使うことを考えると、あまり合理的ではないですね。牛の場合は、先ほども言ったように、雌であれば牛乳が取れます。牛乳を取ると考えると、3歳でつぶしてしまうのはどう考えても合理的ではありません。雄も雌も、例えば耕作に使うとか、運搬にも使えます。そういうことを考えると、もう少し長く飼っていたほうが合理的なはずですが、さっさと屠殺してしまう。そこに何のメリットがあるのだろう。考えられる用途は何でしょう。牛乳を取る、耕作に使う、運搬に使う。他に牛の用途ということで次の文献を見ましょう。

先ほどの遺跡データは主に奈良時代の遺跡です。奈良時代



【図13】

文献に残る牛肉食

- 大地主神が田をつくる日に牛の宍(肉)を農民に食べさせたのを知った御歳神が怒って蝗を田に放ち、稲を枯れさせた。大地主神は怒りを解くために牛の宍を田の溝口に供えるなどした。
(『古語拾遺』大同2(807)年)
- 摂津国の家長公が聖武朝に毎年牛一頭を殺し漢神に供えたが、地獄に落ちた。牛たちに膾にすると責められたが、生前に方生していたおかげで甦る。
(『日本霊異記』中巻第5話 9世紀初め)
- 伊勢ほか7国の百姓が牛を殺して漢神を祭るのを禁止
(『続日本紀』延暦10(791)年9月16日条)
- 聖武天皇の代に平城京より越前に出かけた檜曾嶋という人物が閻羅王の使いの鬼に追われ、家で2頭の牛で饗応して死を免れた
(『日本霊異記』中巻第24話 9世紀初め)

【図14】

の人が若い牛をどんどんつぶして食べていた。さすがに遺跡のデータだけでそこまで断言する勇気はないのですが、そういう目でいろいろな文献史の方の本を読んでいると、平林章仁先生が『神々と肉食の古代史』という本の中で、古代の文献を元に、以下のようにやはり結構牛肉食をしていたと書かれていて非常に心強かったです。【図 14】

『古語拾遺』や『日本霊異記』など、これらは仏教説話集です。実話ではなく仏教の教えを説くためのエピソードが書いてあります。その内容を見ると、最初の話は非常に複雑で、文献史学の中でも結構解釈が分かれています。農民が牛の肉を食べた。そこで怒った神様がイナゴを田んぼに放ったと書かれています。すると、一方では、これは牛肉を食べることは非常に汚らしいということを示していると解釈する人もいます。それに対して、いや、そうではないという人もいます。その後怒りを解くために牛の肉を田んぼに溝口に供えている。肉を食べると怒っているのになぜその汚らしいものを神様に供えたのかという疑問です。そのように見ると、牛の肉を食べたことに対する怒りではないのではないか。牛の肉を食べるということは、汚らしいわけではなくて、神様に供えているのだから、牛の肉自体はごちそうだという意識が反映されているのではないかと考えます。

次はもっと分かりやすく、摂津国の富豪が毎年牛1頭を殺して、漢神という、当時流行していた外来の神様に供えていました。やがて富豪が地獄に落ちると、彼に殺された牛たちが、地獄で閻魔(えんま)様に、こいつは毎年われわれを殺したとんでもないやつだと責め立てるわけです。膾(なます)にしてくださいと閻魔様に訴える。仕返しに膾にしると言われているのですから、逆にいうと富豪が牛を膾にしていたということです。つまり富豪が毎年漢神に供える膾にして、自分も食べていたのだろうという解釈です。

これらは、奈良時代から平安の前期くらいまでに、実話で

はないにせよ、牛を食べることが富豪の間で行われていた、むしろごちそうだったことを反映しているのではないかと。神様に供えるものですから、どう見ても、汚らしいという意識であればこういう話にはならないと思います。

次は『続日本紀』なので、実際にあったことです。伊勢国ほか7カ国の百姓が、漢神に牛を殺して供えるのを禁止した。これは解釈としては、貴重な労働力である牛を殺すのを禁じたという解釈になっています。これもやはり神様に牛を供えています。汚らしいものを神様に供えるのはおかしいということで、これも当時の意識としては、牛はごちそうだったという理解になります。

最後も、同様の説話です。『日本霊異記』で、ある人が死ぬ番になったということで、閻魔様の使いの鬼が迎えに来たけれども、うちに鬼を連れて行って牛を2頭つぶして接待して、別の人に代えてもらった。当然実話ではありませんが、ここにもやはり牛はごちそうという意識が反映されています。

どうも平安前期頃までは牛を食べることがそれほど汚らしいという意識ではなくて、むしろ神に供えるようなごちそうだった。膾の話のように神様に供えるといいつ、自分で食べている節もある。牛自体が貴重な動物ですから、ぜいたく品ではあるのでしょうけれども、汚らしいという意識はあまり見て取れません。きょうはそこまで立ち入る余裕がありませんが、肉食がタブーとなるのはどうもこの後ではないかと思えます。だんだん穢れ意識が発生してきて、中世の史料になると、牛や馬を食べるのは穢らわしいとか、日本人が忌み嫌うという宣教師の証言も出てきます。ただ、そういった意識は古代にはまだなさそうです。

実際、奈良時代の遺跡から、すでに見たように若い牛がたくさん出てくる。そのころ牛を食べるのが、富豪レベルの間では流行していた。食べてしまうのであれば若い牛をつ

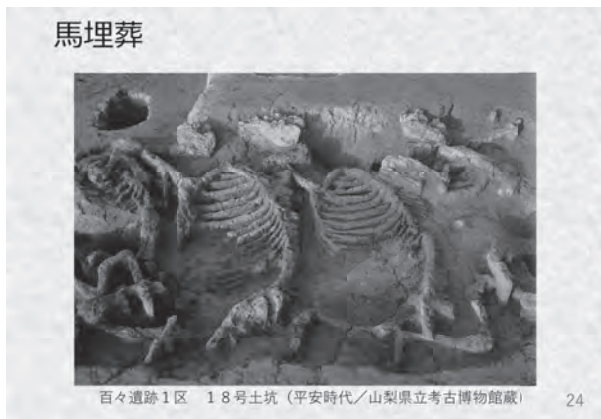
ぶしたほうが合理的です。もうこれ以上大きくならないのにタタ飯を食べさせてもしょうがないので、早くつぶしてしまうのが年齢構成から見えてきたことになります。

3. 埋葬？解体？祭り？ 部位組成から見る

3番目の話に入ります。上っ原遺跡では牛の体の部位に偏りがありました。では、他の遺跡では部位組成はどうなっているのか調べたことがありますので、それを紹介します。それらは果たして埋葬なのか。あるいは解体して



【図 17】



【図15】

食べたのか。祭りのために使ったのかということについて、部位組成、体のパーツの偏りから見ていきます。

まず、牛と馬の比較ですが、山梨県に百々遺跡という平安時代の大集落があります。中部横断道をつくるというので、道路幅だけ細長く調査しています。この小さく見える四角は全て竪穴建物なので、非常に多数の建物が出ています。山梨屈指の大集落です。「ひゃくひゃく」と書いて「どうどう」と読みます。かつて私の上司だった平川南先生という古代史の大家の先生がいらっしゃいますが、どうどうというのは馬のひづめの音で、馬がどうどうと駆けてくる音だと。そういう解釈もあるし、水がどうどうと流れるという解釈もあります。

もう一つ、この大集落で特筆すべきなのは、牛馬が大量に出土したことです。牛と馬が半々ぐらい出ています。面白いのは、山梨県では馬は古墳時代以来連綿と出てくるのですが、牛はこの百々遺跡が見つかるまで全然出ていないのです。牛自体は群馬で古墳時代後期に出ていますが、馬には遅れるものの古墳時代には多分到来しています。しかし、少なくとも山梨県ではこれ以前には1例もありません。全くいなかったかどうかは分かりませんが、あまり飼っていなかったようです。

それが突如として、9世紀くらいに始まる大きな集落が作られます。そこで、唐突に大量の牛が飼われ始めます。村自体、非常に計画的なおいがします。そこで牛を飼いなさいというのは、自然発生ではなく何か意味があって飼いはじめるとかなと思います。馬を飼っていれば当然牛が出るというわけではないと思います。例えば牛乳にしてもそうですし、恐らく新しく牛を飼う技術、加工する技術を持った人を一緒に連れてきて、ここで大々的に飼いはじめたと考えています。その背景には、牛の皮を納めるとか、乳製品、蘇を納めることがあったのかもかもしれません。

もう一つ面白いのは、主に出土する区域が分かれています。この辺りで牛が集中しています。しかも頭ばかりです。馬はどうかというと、特に集中しているのはこちらです。全然違う区域です。馬のほうは、もちろんばらばらになって出てくるものもたくさんあるのですが、幾つか埋葬が見つかります。多いというほどではありませんが、馬を丸々埋めたような穴が5つほど出てきています。牛は一切なくて、ただひ



【図16】

たすら頭が集まっています。これはその中でも一番有名な、恐らく全国で唯一ではないかという、平安時代の馬を4頭並べて埋めた遺構です。【図15】埋葬なのか厳密には分かりません。お墓なのか儀礼的なものなのか。4頭同時に自然に亡くなるのは考えにくいので、単純なお墓ではないだろうという気はします。何せ全国で1例しかないの、よく分からない遺構です。

いずれにしても、馬の全身を埋めたものが幾つか見ついている一方で、牛はこのように頭だけが埋まった跡が見つかります。【図16】実際には残りが悪くて、骨は溶けてしまっています。固い歯しか残っていないので、本当に頭だけだったのかと言われると、実は自信はありません。ただ、この歯と一部顎の骨が残っているのが、一部の区域に集中して出てきています。非常に不自然です。100パーセントの自信はないですが、牛の頭を集めてきて、1カ所で何かやっている。すぐに祭祀(さいし)といわれますが、やはり祭祀のような気がします。

一度調べたことがあるのは、馬や牛の埋葬はどれくらいあるのか。全国を調べるのは大変なので大して調べていませんが、群馬、長野、山梨辺り、要するに古代に牧がたくさん置かれた馬産地を調べました。その結果、古墳から江戸まで時代は様々ですが、連綿として馬の埋葬はそこそこ見つかりました。【図17】29遺跡、98遺構です。

ところが、牛は全然ありません。ずっと報告書を見ていると、馬があれだけ埋葬されていて、牛も出ているのに、牛の埋葬はほとんどありません。見た中では群馬県のこれが唯一です。【図18】しかも時代も近世から近代と新しいです。こういう牛の全身が4つの遺構から出ています。もう一つこの遺跡が面白いのは、これだけ骨が残っているのに頭がないものが同時に3つ見つかっています。明らかに埋めたときには頭がなかったことになります。

それはなぜか。松井章先生という方が広島県の中世の有名な草戸千軒という遺跡で似た例を報告されています。明らかに頭がない牛が埋められていて、前脚と後ろ脚が不自然な形で束ねられています。解釈としては縛った上で頭を落とすか、あるいは頭を落とした後に縛って埋めたのか。明らかに頭を取っています。

同時に、牛の頭というのは、古代以来、井戸に頭を投げ込

んだり、あるいは水田のあぜのところに穴を掘って、牛の頭を埋める例が幾つか知られています。私も驚いたのですが、新しい例では、山梨では江戸時代、関西などの地域によっては昭和まで、干ばつのときに滝つぼのところに牛を連れて行って、首をすんとんと落として、雨ごいのために滝つぼに投げ入れる民俗例がありました。時代が違うので、直接それと結び付けていいかわかりませんが、そのように頭を使った何

らかの儀礼を行った後に、頭以外を埋めているという解釈もできると思います。この群馬の例も、頭を祭祀に使った後に埋めたという解釈もできます。

ついでにもう一つ、古代と違って面白いのは、頭を切っただけで、祭祀に使ったとしても、体は一切、手を付けていないことです。明らかに食べていません。だから、牛をそうして殺すことがあっても食べていないというのが、近世の遺跡と、先ほど見た若い牛をつぶして食べていそうな古代の違いとして、一方では見えてきます。

また古代に戻って、牛の部位組成の話に入ります。非常に珍しい例ですが、大阪で分かりやすい例が出ています。【図19】7世紀前半です。土坑の中に意図的に牛の四肢骨、脚の骨を順番に組んで納めている例があります。ここまでくるとさすがに、ただ投げ入れた単なるごみではないと言えると思います。何らかの意図を持って、順番に埋めています。したがって、この場合は明らかに牛が解体されています。四肢骨だけなので、ばらした上で、その骨を意図的に並べています。これは解体したことが明らかで、その後恐らく祭祀的に用いている例として、非常に珍しい例ですが、分かりやすい例です。

その部位組成を見ると、図のようになります。【図20】最初に見た上っ原とは似ているようで少し違います。残っている部位はいかがですか。比較のお肉が付いていそうな部位ですね。皆さん誤解しているのですが、牛や馬のここは膝ではなくて、人間でいうと手首や足首です。この長い骨は脚のほうですが、肉は付いていません。肉が付いていない部位は入っていません。そこが上っ原と違います。そう考えると、この祭祀というのは、肉の付いている部位を埋めていて、恐らく肉が付いたまま埋めているわけではなくて、肉を食べた

四肢骨を用いた祭祀

- 大阪府長原遺跡
7世紀前半
(久保1999)



写真5 SP6001牛骨出土状況(東から)

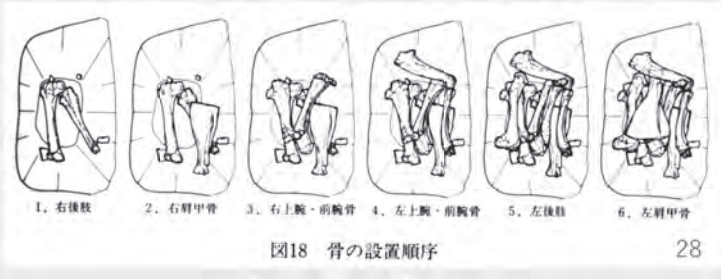


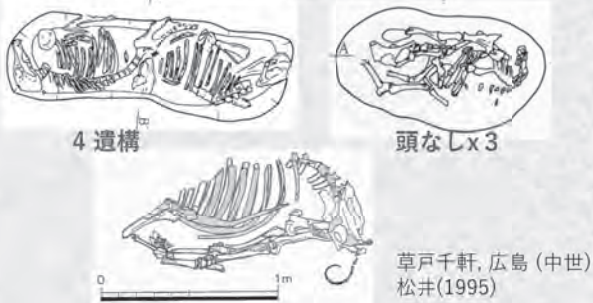
図18 骨の設置順序

28

【図19】

少ない牛埋葬

- 1 遺跡 (群馬白井二位屋。近世～近代)



【図18】

日野市落川・一の宮遺跡

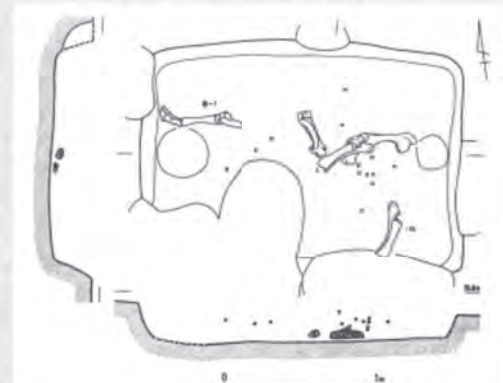
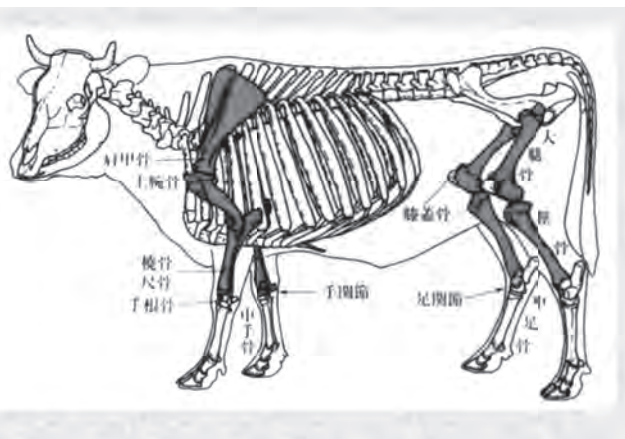


図54 牛骨出土土坑

福田2017 33

【図24】



【図20】

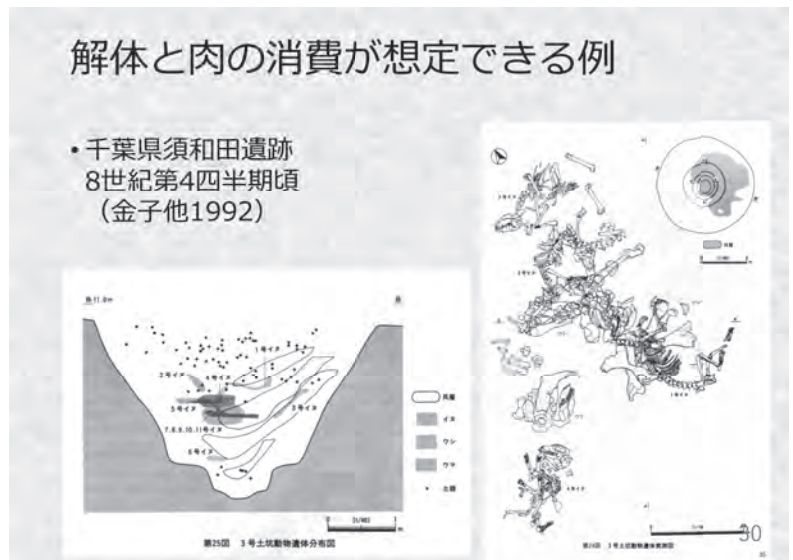
後にきちんと埋めていると考えるのが自然ではないかと思えます。これは祭祀的だし、ばらしているし、お肉も多分食べた上で、祭祀をやっている例です。

東国だと、千葉県市川市で8世紀第4四半期の大きな特殊土坑や氷室といわれている鉢状の大きな穴から、いろいろな動物が出ています。【図21】馬、牛、犬や貝殻などが出ました。貝層があって、犬が5頭くらいいて、牛と馬がその中に少し入っています。大きな穴にがさがさといろいろな食べ物を捨てているように見えますが、犬は全身が入っています。だから、丁寧な埋葬には見えませんが、ばらしているわけでもありません。ただ、牛のほうは先ほどの大阪の例と似ています。お肉の付いている部位だけがでてきています。【図22】

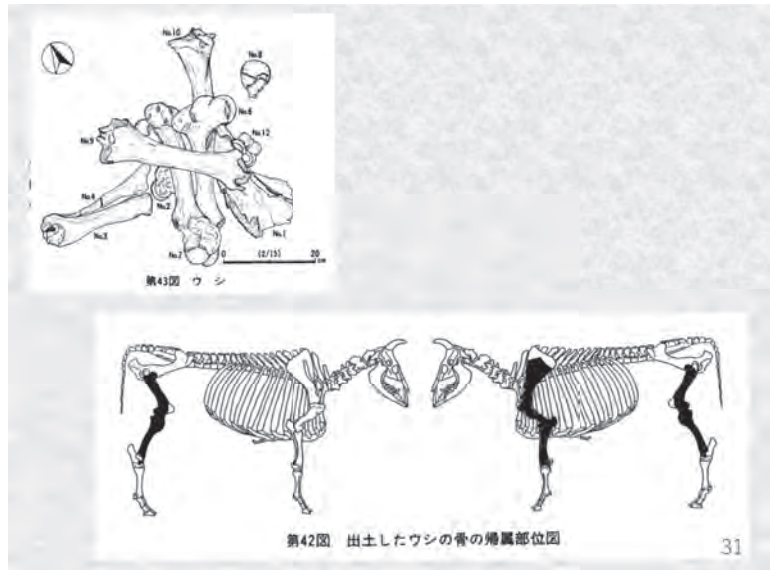
一方で、これも同じような時期の群馬県田端遺跡で、8世紀くらいだったと思います。【図23】共通性が結構あります。大きな土坑から牛の骨が出ています。ただこの場合は、先ほどと少し違って、むしろ上っ原に似ている気がします。末端の骨が入っています。手の甲、足の甲、頭が入っていて、太ももや肩などお肉が付いているような部位は欠落しています。

それと、きょうは福田健司さんがいらっしますが、上っ原と関係するのではないかとおっしゃっています、日野と多摩にまたがる落川・一の宮遺跡の例です。【図24】福田さんは、ここでばらして上っ原に持ってきているという考察をされています。展示にもありますが、この辺一带は小野牧の指定地になっていますから、その牧に関わる人たちが暮らした集落で、当然、牧で飼われてつぶした牛をこうして解体することもあったでしょう。

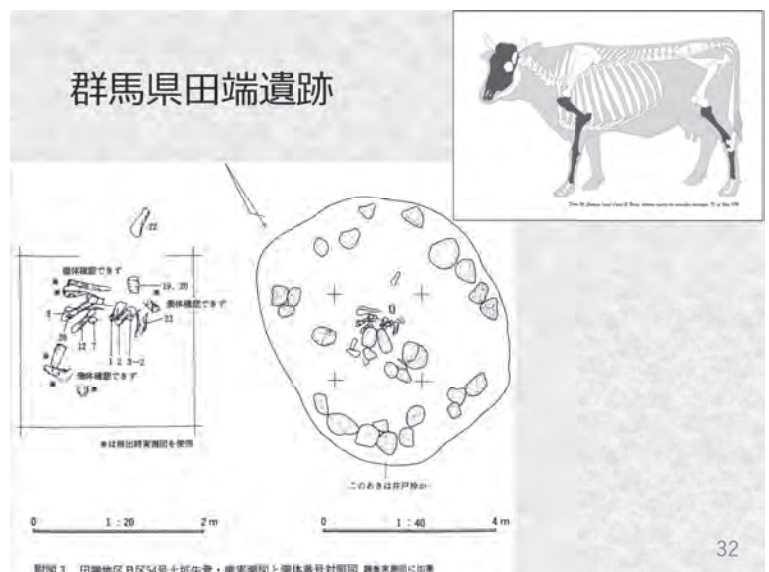
特に面白いのは、福田さんが書かれている中で、磨痕石という石器が非常にたくさん出てきています。この用途が不明だったのですが、鹿革などをなめすのに使うのではないかと書かれています。皮というのは、皮をむいたらそのまま使えるわけではなくて、裏には脂肪分などが付いていますので、それを放っておくと腐敗して使えなくなります。徹底的に油を取って、分解できるたんぱくを分解して、安定した状態にしないと革として使えません。そこで、なめすという作業が必要になります。その裏に付いている脂肪分をこそぎ取るのにこういう石が、実際に実験でも確かめられて非常に有効です。似たような石が上っ原の近くの落川・一の宮でたくさん出ています。これは非常に面白い成果だと思えます。実際に牛を解体した痕跡と、皮をなめすための道具らしきものが大量に出てきている



【図21】



【図22】



【図23】

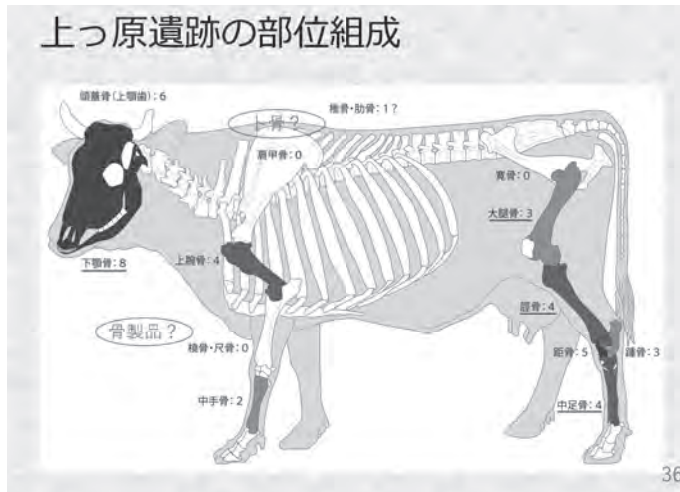
訳です。

4. 骨を「読む」死後の利用

骨を「読む」ということで、さらに専門的な領域に入っていきます。骨自体をしつこく観察して、何が見えるのか。特に、先ほど来出ている、解体して死んだ後、どのように利用するのか、上っ原遺跡で読み取った結果をご紹介します。

改めて上っ原遺跡の部位組成を見ると、図のようになっています。【図 25】末端の肉が全然付いていない部位がある一方で、通常なら残るはずの腰の骨や肩の骨などがありません。肋骨（ろっこつ）や背骨は割ともろいです。決して残りのいい遺跡ではないので、消えてしまったという解釈も成り立ちます。しかし、他の四肢骨が残っているのに腰の骨や肩の骨がないのは不自然です。橈骨（とうこつ）というは人間でいうと前腕の骨です。これも出ていないのは不思議です。これは割に真っすぐな骨で、骨製品として使う例があります。輪切りにして、刀の一部する例があるので、もしかしたら別途、素材として抜かれているのかもしれませんが。他の部位が4つとか2つとか出てきて、この部位だけゼロというのは不自然なので、そのように考えます。

頭と下顎も出ています。末端を含めたこういう部位を持ってきて何をするのかです。ポイントは、最初に見たように焼けているということです。写真にも載せましたが、多くの部位が焼けています。【図 26】悲しいくらい残りが悪くて、触っているとぼろぼろ崩れてしまう、非常にやりにくい遺跡



【図25】



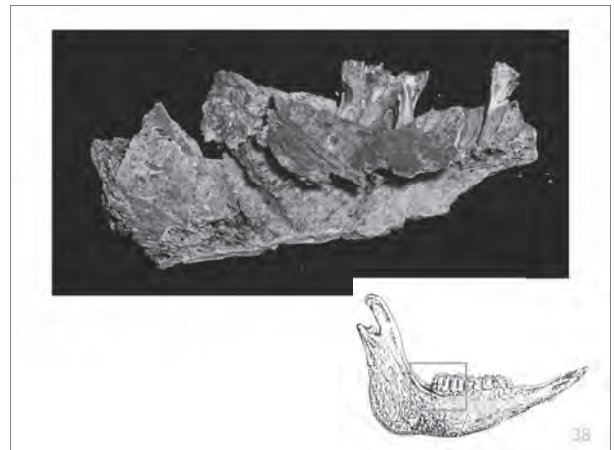
【図26】

でしたが、頑張って観察すると、焼けているのはどうも全部ではなくて一部です。写真の辺の枯れ木のようにになっているのが強く焼けているところですが、変色してもろい。全体がもろいのですが、特にもろくなっています。逆に端の関節部分は焼けていません。骨の真ん中辺りが焼けています。あるいは手首などの細かい骨がありますが、そういう骨もそれほど焼けていません。長い骨も、真ん中辺りから焼けています。

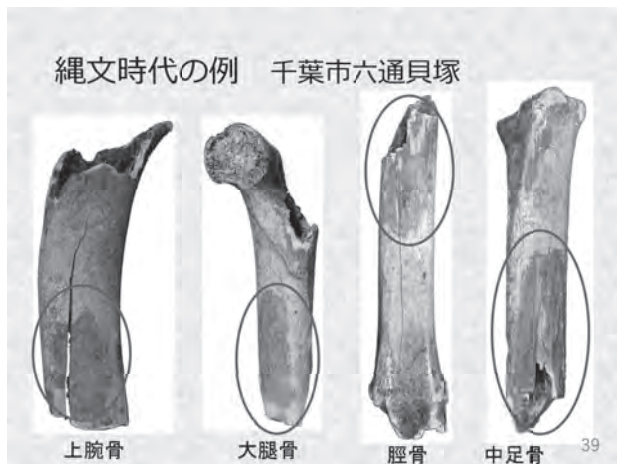
報告書では家自体が火入れをし、儀礼的に焼いたとされています。だから中から出てきた牛の骨が焼けているのは当たり前ではないかと当時は思ったのですが、もし単に骨をばいっと投げ入れて、全体に火をかけたら、一部焼けるのは不自然です。しかも全部、同じ辺りが焼けています。これはおかしいです。写真は下顎の一部です。【図 27】牛の下顎の歯が少し残っていて、下側が焼けています。多分ここから下は、焼いた後に割れて、なくなったのです。

焼けている部位は、私が古代の牛や馬だけ見ていたら、多分何とも思わなかったかもしれません。たまたま気付いたのは、それ以前、縄文の貝塚から出てくる骨で似たような例を見たことがあったからです。これは千葉県の縄文時代晩期の貝塚で出たシカの四肢骨です。【図 28】茶色く変色して、劣化して、枯れ木のようにになっています。これは熱を受けたことによって、変色し、もろくなったものです。これも全部、関節部分ではなく骨の真ん中辺りです。真ん中が焼けて、そこで割れています。

なぜ骨を焼くのか。焼くというより骨をあぶる感じです。最初は調理が思い浮かぶと思いますが、調理するのに骨自体をあぶる必要はないです。肉が付いたままあぶっていたら、こういう変な焼け方はしません。これは明らかに骨になった状態で、その真ん中をあぶっています。なぜあぶるのか。あぶったことによって、もろくなっています。そこで割れているので、割るためにあぶっているようです。骨を割って何がうれしいのかという話です。先ほど触れたように道具の素材にも骨を使います。でもそのために割るとしたら、劣化させては使えません。だから骨自体が目的ではありません。というところまでいくと、この骨の中には何があるか。「骨髓バンク」の骨髓が入っています。縄文人は骨髓を食べるために割っています。焼けていなくても、縄文のイノシシやシカの骨はほぼ 100 パーセント割れています。縄文人



【図27】



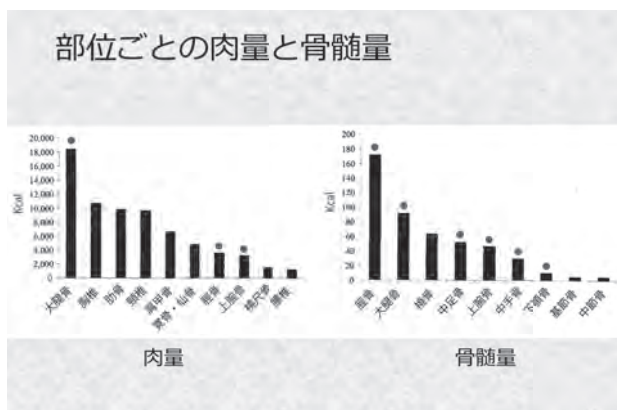
【図 28】

はみんな徹底的に骨髓まで食べています。

では、平安人は骨髓を食べるために牛の骨を持ってきて割るだろうか。あり得ないことではないですが、イメージできないですね。では、平安の人がなぜ骨髓を取ったのかはひとまず置いておいて、先にこれを見ましょう。【図 29】日本でこういう特異な研究をやっている人がいないので、アメリカの例です。アメリカのオジロジカ、鹿ですから牛ではないですが、似たような動物です。いろいろな部位の中で、肉がどれくらい付いているか。例えば太ももの骨に付いている肉の量が一番多い、そういうグラフです。こちらは骨髓、要するにその太ももの骨やこの骨の中にどれくらいの骨髓が含まれているかのグラフです。シカのデータですが、牛も似たような構造なので、それほど大きくは違わないと想定しています。

上っ原で出た部位がグラフ上の点です。もちろん肉の付いている部位も入っていますが、真ん中より多い部位がありません。だから肉ではありません。骨髓の多い部位が多いことが分かりますね。もちろん他にもいろいろな部位が出ますが、そもそも背骨や肋骨は管になっていないので、骨髓は関係ないわけです。骨髓のある部位の上位が上っ原からは多く出ているのがよく分かります。上っ原では、骨髓のある部位だけを持ち込み、肉のある部位は、必ずしも持ち込んでいないということです。

ここからもう一つ分かるのは、明らかに解体した後のもの



【図 29】



【図 30】

を持ってきているということです。解体して骨になったものを持ってきて、それも全部持っているわけではなく、骨髓を目当てに持ってきて、あそこであぶって割っています。

残った疑問は、骨髓を食べるために持ってくるほど、平安の人はわびしい生活だったのか。それはやはり疑問でした。調べていたらここでも、動物考古の先達の松井先生が、かつて大阪や奈良から出た馬の頭蓋骨が頭頂部で割れている。非常に残りがいいのにそこだけが割れている、取られているという例を報告されています。これは発掘のときに壊れたとか、残りが悪くて消滅したのではなく、当初から壊されていたのです。

何のために壊すかというのが、養老厩牧令の牛馬の規定の中にあります。【図 30】およそ官の馬牛が死んだら、皮、なすきと読みますが脳、角、胃、胆のうなどを取れ。牛が死んだら皮や脳、牛の場合は角を取りなさい、あるいは胃を取りなさい。特に牛黄（ごおう）という牛の胆石です。これは漢方薬にもなりますが、貴重な牛黄があれば別に進ぜなさいという規定があります。

この規定の中で、脳を取ってどうするのか不明だったのですが、松井先生は民族例から脳漿（のうしょう）なめしという用途を見出されました。これもあまり美しい話ではありません。先ほどなめすと言いましたが、皮を分解するとき、皮に付いているたんぱくを分解するのを促進する際に、脳漿に漬け込むのだそうです。

同じ文献をよく見ると、脳や骨髓を使って皮をなめすと書かれています。最近、奈良の藤原宮跡でも、同じように頭頂部が割れている馬がたくさん出てきて、かなり一般的に脳を使ってなめしています。もちろん、これを食べたという解釈をする人もいでしょうけれども、こういう規定からすると、食べるというよりは脳漿なめし、要するに皮なめしの証跡ではないかと思えます。

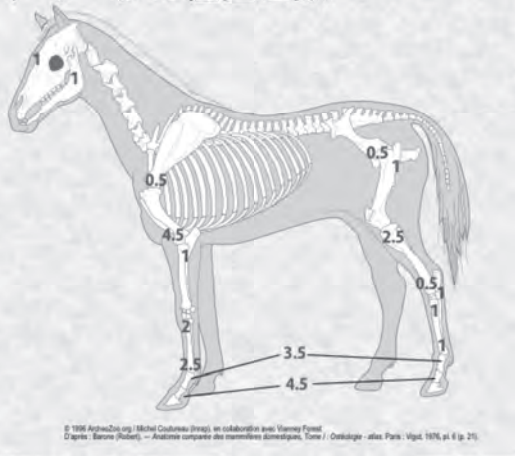
そういう目で見ると、上っ原も実は骨髓だけではなく、頭も出てきています。だから脳漿を使った。ただ、残りが悪過ぎて、顎までしか残っていません。だから、頭を割っているかどうかは厳密には検証できません。ただ、頭もきちんと出ていますし、下顎も出ていて、下顎の中には、やはり骨髓が結構入っています。解体した後に骨髓が入っている部位を

青森県林ノ前遺跡における死馬利用



【図 31】

カットマークの位置と数



【図 32】

持ってきて、ここであぶって、割って、皮なめしに使ったのではないかというのが、私の最終的な解釈です。

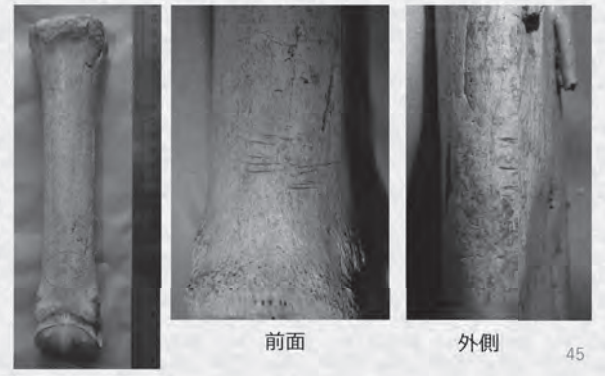
上っ原というのは落川・一の宮に比べると小さな散村のようなものです。ただそこにあのような、解体した牛骨を持ってきて、骨髓を取った痕跡があります。あるいは皮を取って加工するような、ちょっとした工房的なものがあつた遺跡ではないかと思ひます。そこに実は蝦夷の痕跡があるのも面白いところす。最後に少しだけ蝦夷の話をしませう。

基節骨



【図 33】

中手骨

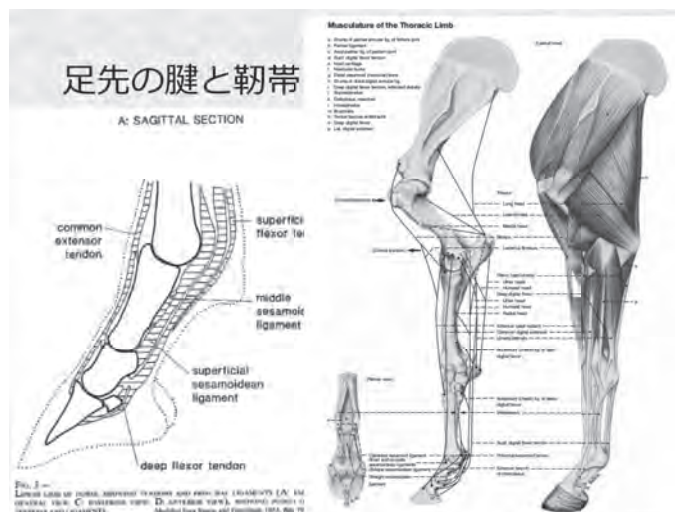


【図34】

私が去年、青森の八戸で調査した例で言うと、ここでも馬がたくさん溝から出ていますが、ばらばらです。【図 31】明らかに解体した後なので、カットマークという刃物で切りつけた痕が結構残っていました。【図 32】非常に残りが良いです。上っ原は残りが悪くてここまで細かい観察はできませんが、非常に残りが良く、表面が良く見えます。そうすると、末端の骨にカットマークが結構付いていました。指先辺りです。これは人間でいうと、指の付け根の骨になりますが、側面に刃物の痕が付いています。【図 33】当然、当時は鉄器がありますので、鉄器で付けた鋭い切り痕です。

末端には肉も付いていないし、皮を取るといっても指を切ってもしょうがないだろうと、最初はこれが謎でした。イギリスの旧石器時代の例ですが、狩られていた野生馬に同じような痕が結構付いています。その解釈は何かというと、これは指に連なる手の甲の先の辺りです。【図 34】手の甲に付いています。皮を取るにしてもこんな先端は切りつけません。この辺りに何が付いているかというと、たくさんの腱(けん)です。【図 35】馬ですから丈夫な腱を持っていて、その末端の辺りにあります。ですから、恐らく皮をはいた後、この辺に切れ目を入れて、腱を取って使っていたのでしょう。文献には出てこないの、その使い道は分かりません。腱自体は非常に弾力があるので、外国では弓に使ったりするのですが、日本ではまだ文献で確かめられません。もう一つはコ

足先の腱と靭帯



【図35】



【図36】

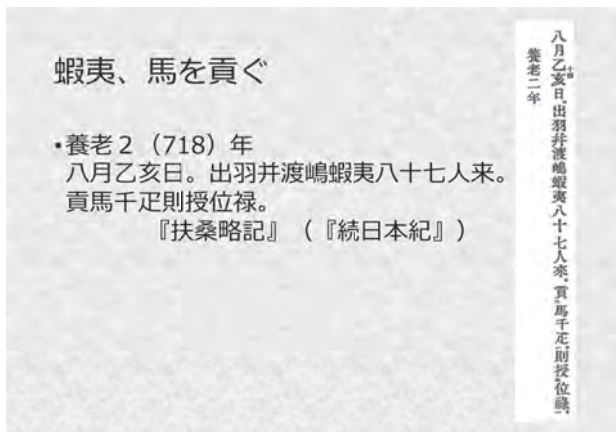
ラーゲンが非常に豊富なので、煮詰めて、にかわの材料にすることも考えられます。文献的な裏付けはできていませんが、いずれにしても青森の地で馬を飼って、馬から腱を取っていることが分かります。

おわりに 残された謎

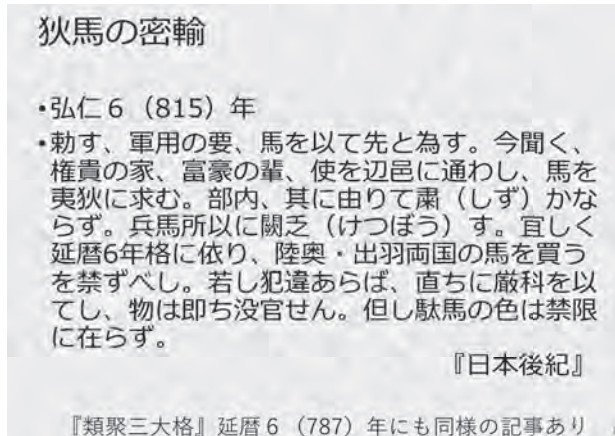
非常に雑ばくな話でしたけれども、最後に、今回の展示は蝦夷がテーマなので、空想的な話を交えて、残された謎に触れます。

もう展示をご覧になっていると思いますが、あのようには蝦夷の土器が出ています。実は蝦夷というと、言葉が悪いですが野蛮で未開なイメージがあるかもしれません。あるいは展示をご覧になったら、そのイメージも変わったかもしれません。実は蝦夷は馬をよく使いこなしていました。象徴的な例として、青森から出た平安くらいの土器ですが、この時期、青森は土師器（はじぎ）というこちらから行った土器と、北方の擦文というのが共存するエリアになります。この遺跡では両方出ているのですが、文様の入った擦文系の土器に馬が刻まれています。【図 36】

文献上も蝦夷と馬に関する記録が知られています。例えば奈良時代には、出羽や渡嶋、出羽は素直に読むと秋田のほうになり、渡嶋は北海道になるので疑問は残りますが、蝦夷が87人やってきて、馬は1,000匹いて、貢いだと書いてあり



【図37】



【図 38】

ます。【図 37】 当時 1,000 匹も連れてくるのは、にわかには信じがたいです。ただ、そういう記録が古くにあります。

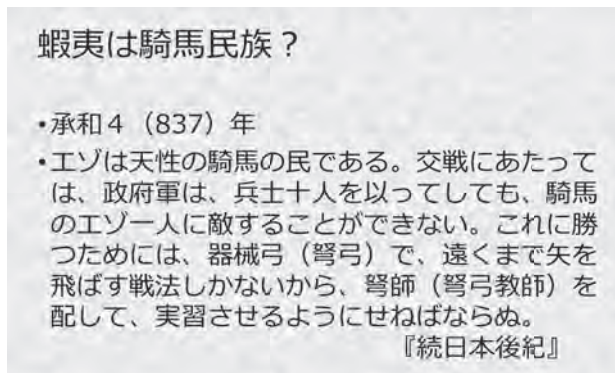
その後、8世紀の史料にもあります。【図 38】 時間がないので概要だけ言います。都の貴族が競って蝦夷の馬を密輸入する。それを禁止する命令が何度か出されています。蝦夷の馬が欲しいばかりに、よろいを渡したり、鉄器を渡したり、敵を利するような行為をやっている人たちはけしからんということで禁止されます。それくらい都の貴族たちからも羨望（せんぼう）の的だった名馬を蝦夷が生産していました。

別の史料には、蝦夷は天性の騎馬民族である。非常に騎馬戦に長けているので、政府軍 10 人を持ってきてもかなわない。だから弩（ど）、石弓、これで対抗するしかない。実習をしなければいけないという記事があります。【図 39】 蝦夷というのは馬の生産や馬術に非常に長けていたのです。

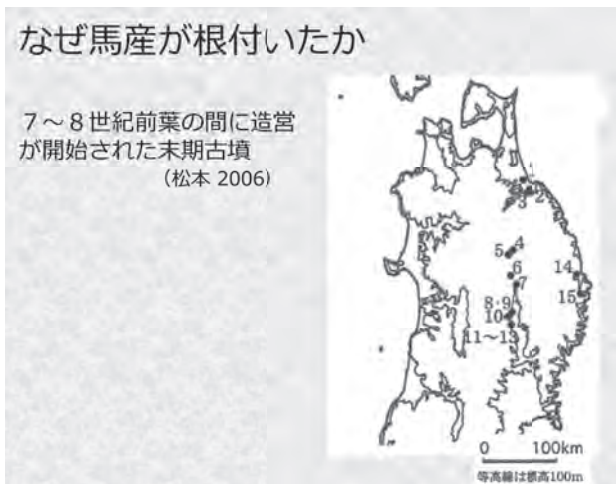
なぜ馬産が根付いたかは、東海大の松本先生が書かれています。【図 40】 まず、あちらの地域では、末期古墳という、こちらでいう奈良時代に古墳をつくります。その分布は太平洋側に濃いのです。権力者はこちらに最初出現し、古墳をつくります。

このエリアは今もそうですが、稲作に適したエリアではありません。稲作適地はどちらかという日本海側ですが、最初に古墳をつくるような権力者が出てきたのは、太平洋側であり、しかもそこには馬具が副葬されていたり、馬が埋葬されていたりします。

太平洋岸エリアの何が権力者たちの生産基盤になっていたかということ、一つは馬だといわれています。雑穀地帯でもあ



【図 39】



【図40】

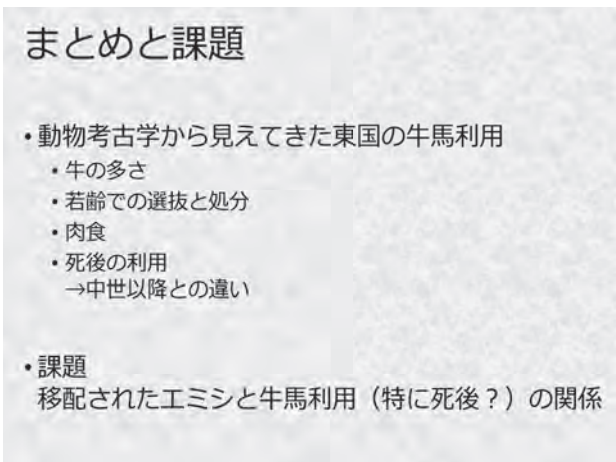
るのですが、雑穀を生産して、馬を生産して、馬の餌もそうです。馬が何を食べていたのかも調べたのですが、案の定、雑穀を与えています。そういう結果が出ています。ですから北東北の太平洋側は、このころから馬産地であり、中世、江戸時代まで続き、やがて南部馬という名馬を生みます。源平合戦の名馬も、みんなこの辺の出です。

以上のように蝦夷は早くから馬に乗って、馬を生産していました。そういうエリアから、場合によっては、東国や各地に蝦夷が移配されたわけです。

何をさせたかというのが問題ですが、上っ原の例を見ると、あるいは連れてきた蝦夷の人たちに従事させていた仕事のひとつが、馬の処理、馬を解体して皮を取って加工することだったのかもしれない。今ひとつ牛との関係が見えていないので、そこが弱いところですが、上っ原の例を見ると、牛も出ています。牛を解体し、皮をなめしていた痕跡がありました。そこから岩手県あたりの土器が出てきて、蝦夷が住んでいたらしい。長いかまどのような蝦夷的な痕跡も出ていることを踏まえると、各地に移配された蝦夷たちの従事していた作業のひとつが、生産のところはよく分かりませんが、少なくとも牛や馬を解体したり、皮を取ったりということだったのではないかと。まだまだ裏付けが足りないのですが、その辺に今興味を持って、東北のほうも調べています。

最後にきょうお話したことをまとめます。【図41】骨の話ばかりでうんざりかもしれませんが、骨からいろいろなことが見えてくるということでまとめると、古代には以外と多く牛が飼われていた。特に古代の特徴として、牛も馬も割に若い時期に選抜して処分したり、牛の場合は結構食べていた痕跡がある。

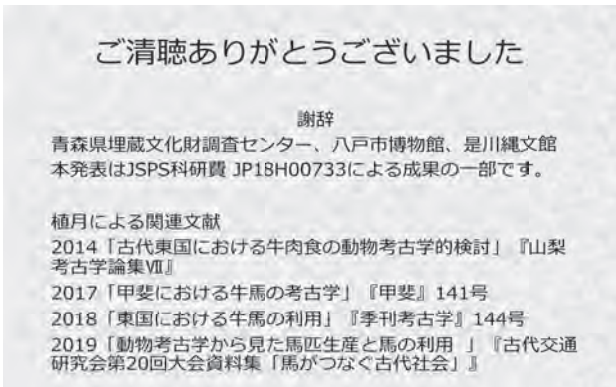
後半お話したのが、牛の皮を取ってなめしたり、解体したりということが見えてきたというところで、古代と中世では違う。中世はあまりそういうことが見えません。年齢もそうですし、解体も見えませんが、それはやっていないということではなくて、区別、境界ができたということかもしれません。これは西日本の方が研究が進んでいるのですが、古代は同じところでやっているけれども、中世以降はそういう人たちがだんだん被差別民となり、河原などどんどん周縁に追い



【図41】

やられている。そこが調査対象になっていないので、考古学的には見えなくなってくる。西日本ではそういうことも言われています。東日本ではこれからの課題です。

最後はほとんど空想を交えてお話した、蝦夷と牛馬の利用です。この関係を今後追いかけていきたい。また調査が進んだら、お話する機会ができたらと思っています。ご清聴どうもありがとうございました。



「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編
第1回 明治憲法と議会

帝京大学文学部史学科教授 小山 俊樹

〈実施日 2020年1月25日(土) 於 帝京大学ソラティオスクエア S 011教室〉

はじめに—日本近代史の大きな流れをつかむ

本日は『大学でまなぶ日本の歴史』という書籍の内容を中心に、お話をいたします。そのなかで今回は「明治憲法と議会」というテーマを担当しますが、それはひとまず置き、まず『大学でまなぶ日本の歴史』というタイトルについて触れたいと思います。

大学で歴史を学ぶとは、どういうことなのか。端的にお話ししますと、クイズではないということです。年代や歴史的な語句などの知識を暗記して、例えば穴埋めで回答するような、クイズ的な歴史のテストは、この会場におられる皆さん方も、何年前かはさておき、された経験があるのではないのでしょうか。あるいは、テレビをつければクイズ番組などで、これは何か、この人は誰かなどと、いろいろなクイズをやっていますね。それはそれで楽しいですし、全く悪いことはありません。

ただ大学で歴史を学ぶには、中学や高校で学んできた「歴史」の授業、あるいはクイズ形式の知識にとどまらず、その先を意識することも大切です。それは、われわれは歴史を知ることでは何を考えるのか、ということです。

知識は必要です。けれども、知識を持っているから、つまりクイズに答えられるからといって、直接何かを考えるきっかけになるわけではありません。断片的な知識を結び付けて、ある時代や社会が、なぜ、どういったことで動いていたか、などと考える。こうした思考が大切です。

大学は、新たな知を生み出すところです。それまで培ってきた知識を元に、さらに何がわかり、どういったことが考えられるのか。問いかけを常に投げ続けて、新たな知見を生み出す。史学科をはじめ大学生たちは、高校までクイズ形式のように誰かが作った問いに答えていたのを、今度は自分の

知りたいことについての問いを自分で立て、自分で解答を探していきます。そのプロセスを、大学では学ぶのです。

ただ、そうはいっても、これは非常に大きな話です。問いを立てたり答えたりするためには、断片的な知識では役に立ちません。大きな見取り図——歴史や時代の流れや、転換点などを、単語ではなく思考として理解しなければいけない。その手助けとなることを期待して、『大学で学ぶ日本の歴史』が書かれたわけです。この本は重要な語句や年代がゴシック字体になっていませんし、細かい年表も付いていません。それは、逆にいうと文章を読んでほしい、この流れを読み取ってほしい。このコンセプトをまず理解していただきたいのです。

さらには、この大きな流れについて、大学の講義では本来半年ぐらいかけてお話しします。ただ今日はわずか60分と少しですので、かなり無理はありますが、できるだけ流れを重視してお話して、皆さんに日本の近代がどういう時代だったかを考えてもらうきっかけにさせていただければと思っています。

大きなことを言った手前、私も何かしなければと、今回はいくつか問いを立ててきました。私が執筆したのは、本書の28～33章。【表1】この6章分を前半・後半に区切ります。前半の28～30章は明治時代で、31～33章は大正・昭和初期です。この2つの時期を通貫するキーワードとして、私は「議会」を考えてみたいと思います。

前に国会議事堂が映っています。1920(大正9)年に着工し、実際には1936(昭和11)年に完工した建物です。今は国会ですが、当時は帝国議会と呼ばれていましたから、この他建物も帝国議会議事堂でした。この帝国議会と近代日本の動きはどういう関係性があったのでしょうか。【表2】

そもそもなぜ、日本に議会などできたのでしょうか。議

【表1】

『大学でまなぶ日本の歴史』 戦前(明治・大正・昭和初期)編	
● 28章	民権と国権
● 29章	憲法と議会
● 30章	日露戦争
● 31章	世界大戦
● 32章	関東大震災
● 33章	政党の政治

【表2】

議会(帝国議会)と近代日本
● なぜ日本に議会ができたのか(明治)
● なぜ政党政治があらわれ、消えたのか (大正～昭和初期)
こうした問いを考えるには、 当時の政治外交・経済社会の流れを つかむ必要あり → 本講演の目的

会があるのは当たり前と思われるかもしれませんが、話はそれほど単純ではありません。大日本帝国憲法は1889（明治22）年にでき、帝国議会は翌年（1890年）にできました。これは知識です。けれども、この知識からは、なぜ日本に議会ができたかは分かりません。こういった思考をぜひ考えてみてほしい、これが今回のテーマです。

ちなみに日本では、議会ができるよりも先に政党がつけられます。日本史の流れでは当たり前の知識ですが、じつは訳が分からない現象です。普通は政党、パーティーというのは議員同士がそれぞれ近い者が集まってつくるので、議会がなければ始まりません。なのに日本では、議会ができる10年も前に政党ができます。不思議な現象です。

そして明治期の政治制度は、私たちが現在の日本国憲法にある議院内閣制ではありません。つまり、衆議院議員が総理大臣になるとか、そういう制度ではないわけです。そこからなぜ、今の制度につながったのか。じつは大正・昭和初期の日本では、議院内閣制に近い「憲政の常道」とよばれる政治運用が一時行われます。なぜそんなことが可能だったのか。そして、それはなぜ戦争の時代まで続かなかったのか。これも一つ大きな問いであろうと思います。

今日はこうした問いを、皆さんと一緒に少しだけ考えていきたいと思います。そして、そのためには、一つの分野だけを見てはなかなか分からない。海外の動き（外交）や国内の政治・経済・社会の動き（内政）を、両方簡単に知っておく必要があります。そして、それぞれの時代の課題が何で、どう解決されて次の時代を生んでいくか。この大きな流れというのをつかんでもらいたいです。

もちろん全部覚えろとか、そんなことは言いません。知識は本を見ればいいのです。頭に入れておくべきはインデックスです。何かこういうことが、ワードが引っ掛かるな。では、本で見て確かめてみよう。その確かめる、何かのきっかけが頭に残ればいいのです。そういう意味で少し気楽に、教科書を持っている方は、対応する章をばらばらと見ながら、聞いていただくといいでしょう。

明治時代：帝国議会と近代日本① 民権と国権

さて、画像をご覧ください。国会議事堂の1階の玄関を入った所に、3人の銅像が建てられています。伊藤博文（初代総理大臣ですね）・大隈重信（早稲田大学をつくった人ですね）・板垣退助（自由は死せずと言った人ですね）。最後の一角だけ空いていて、これから議会をもっともり立ててくれる素晴らしい人が出たときのため、だそうです。誰がそこを占めるのか、それは知りませんが、占めた瞬間にろくなことが起きそうにないですね。

明治憲法、そして議会がつけられる過程は、明治政府のインシアチブを執った伊藤博文。それから、在野で民権を率いて政府に対抗した大隈・板垣。この3人を中心に展開したとよくいわれます。その中身を少し考えてみましょう。

ものすごくざっくり流れを説明すると、明治ゼロ年代、つまり1868～1877年ぐらいは西郷隆盛、大久保利通、そして

木戸孝允、いわゆる維新の三傑といわれる3人が明治政府の主導権を執っています。幕末期を物語にすると必ず出てくる人たちですね。

ところが、その維新の三傑——西郷、大久保、そして木戸は、明治10年前後にばたばたと死んでしまって、全員いなくなってしまう。そのあたりから幕末維新期が好きな人たちは日本史に興味を失うのですが、実はそこからが大事で、本格的な日本の議会設立の動きが始まっていきます。

西郷隆盛が1877（明治10）年に城山で死んだ後、西郷と共に明治6年政変で政府から離脱した板垣退助が、今度は言論の力で政府に対抗しようと動き始めます。これがいわゆる自由民権運動の始まりとよく言われています。

それにくわえて、伊藤と共に政府にいた大隈重信が下野させられ、板垣らと近い民権派をつかって政府に対抗し始めます。この事件を明治14年政変と呼んでいます。それによって伊藤と大隈・板垣が、それぞれ政府と在野の立場で、国会開設に向けて競い合う状況が生まれます。

なぜ彼らは国会開設を目標に掲げたか。まず板垣が、政府のやり方は独裁である、より多くの意見を政治に取り入れるため、議会（民撰議院）を設けるべきだと主張します。また伊藤や大隈も海外の事情をよく知っていて、日本が近代国家だと世界に示すには、憲法に規定された議会をつくる必要があると考えました。つまり三人は、立場の違いこそあれ、日本に議会が必要という点では一致していました。そこで議会の開設を前提に、どのような憲法・議会をつくるかが争点となります。

板垣は自由党、大隈重信は立憲改進黨という2つの政党をつくります。そして伊藤は大隈を追い出すとともに、10年後に国会をつくることを「国会開設の勅諭」を打ち出します。大隈は追放しますよ、だけど10年後には必ず議会をつくりますよ、という公約をうけて、国会開設に向けてのインシアチブを朝野が争うこととなります。

さて、次に経済の話に移ります。明治政府を追い出された大隈は、ずっと財政の担当者でした。しかし大隈財政は非常に放漫でした。西南戦争という最大の内戦のため、紙幣をどンドン刷って、インフレーションが急激に進んでいました。

そこで、大隈を追放したついでといったら語弊がありますが、財政再建と金融改革という目標が掲げられます。いわゆる

【表3】

28章 民権と国権	
●	伊藤博文と大隈重信（明治14年政変） 政府と民権派が国会開設に向けて競いあう
●	財政再建とデフレ（松方財政・デフレ） 不況が農村を直撃、社会秩序に動揺を与えた
●	激化事件（福島・秩父事件） 政府の弾圧とさらなる混乱、民権運動の衰退
●	条約改正の失敗（三大事件建白運動） 民権派の復活、対外世論の硬化

る松方財政、松方正義という薩摩の人物が主導した財政政策だったのですが、これが極端な緊縮政策でした。政府の支出はほとんど切り詰め、浮いたお金で銀本位制を実施しました。それは意義あることでしたが、日本経済、とくに農村に非常に大きな打撃を与えます。今でもそうですが、デフレ状況はいいことはありません。ものの値段が下がる。つまり、売ってももうからない。ということは、売る側がどんどん縮小していく。さらに農産物価格が下落すれば、農家は貧窮に直面します。

当時の農村は比較的大きな、名望家と呼ばれる大地主層が地域社会を支えていましたが、その層がどんどん没落するという、大きな社会変動が起きます。そして、地域の名望家や豪農は民権派の支持基盤でもありました。大農家が政府の重税に反対して民権派を支援するという動きがあったところに、松方デフレが農村を直撃し、民権派の地盤を壊していったわけです。

松方デフレの結果、農村にかなりのダメージが蓄積し、いわゆる激化事件を生んでいきます。民権派に協力してきた中上層の農民が力を失い、より貧困に直面していた下層の農民が、一部自由党员などと連携して政府に反発する。蜂起という形で借金の帳消しなどを求めていく。秩父事件はこの三多摩の地域と同じく「困民党」という組織があり、これが秩父での蜂起の中心となっていきます。秩父や福島で起こった激化事件が、さらなる政府の弾圧を招き、民権派は衰退していきます。

つまり、政府と民権派が国会開設に向けて競い合う状況の中で、経済的な変動によって民権派が主導権を失っていく。それが帝国憲法が政府主導でつくられていった理由の一つと考えられます。

しかし、次に話をさらに外交に広げてみると、政府主導という単純な結論では収まらなくなります。政府の国会開設に向けた準備が着実に、そして完璧に進んだかという、そうでもありません。その最大のポイントは条約改正でした。江戸幕府が結んだいわゆる不平等条約——関税に自主権がない、治外法権がある（日本で犯罪を起こした外国人を日本の法律で裁くことができない）という不平等な規定を、諸外国に強いられた。実は、それに反発してできたのが、明治政府だといっても過言ではありません。そのため、政府にとって

【表4】

29章 憲法と議会	
● 帝国憲法の制定（議会権限の決定）	伊藤博文の主導、法・予算を議会在「協賛」
● 初期議会の波乱（超然主義と民力休養）	政府と民党の激しい対立—軍拡v.s.減税
● 日清戦争（下関条約+三国干渉）	朝鮮半島をめぐる対決、議会は全面協力
● 産業革命（近代工業化・資本主義成立）	軽工業等の盛況、労働者の環境悪化

条約改正は絶対に達成しなければならない外交課題でした。

ところが、諸外国には、憲法も議会もない、文明国でない国家にそのような対等な条約は認められないという姿勢があるわけです。政府は何のために議会をつくるのかというと、この公約を果たすためという部分もありました。それがアジアで最初に日本が議会をつくらなければならなかった理由の一つです。諸外国に文明化したことを見せる、アピールする必要があったのです。

政府は条約改正を、国会開設の前に何とか済ませたいと考えていました。議会ができれば無視することはできず、条約改正に複雑な条件を付けられたら、改正自体がままならない状況にもなりかねません。そこで政府は条約改正を急ぎました。例えば井上馨の条約改正ですが、鹿鳴館は聞いたことがありますか。日本人は洋服も着ればダンスもできると外国にアピールして、あきれられたのですけれども、そうまでして政府は条約改正を進めます。

しかし鹿鳴館外交は、人々の反発を買います。農村はひどいことになっているのに、豪華絢爛（けんらん）な洋服を政府の役人たちが着て、どんちゃん騒ぎをするわけですから、何をやっているのだという話に当然なるわけです。この政府に対する反発を、民権派がすくい上げます。政府は外交に対してちっとも真面目ではない。外国に対してもっと厳しく対するべきだ。こうして、民権派はこの条約改正の問題を取り上げて国民的な運動に展開し、民権派は復活を遂げていきます。

そのことは同時に、政府の外交政策をもっと強硬な立場から国民が批判する「対外世論の硬化」をもたらします。これはのちの時代まで影響を及ぼし、戦争や対外進出を賛美する風潮につながる意味で、非常に重要なターニングポイントであったともいえます。

明治時代：帝国議会と近代日本② 憲法と議会

こうして国会開設までの10年に、日本は多種多様な経験を経ましたが、最終的に公約は守られて憲法が発布され、議会が開設されます。

帝国憲法には、いくつかの特色があります。この憲法をつくるまでに、政府はさまざまな準備を周到に行います。今は陸とつながってしまいましたが、神奈川県八景島シーパラダイスのすぐ近くに夏島という所があります。かつては伊藤博文の別荘があり、そこで彼が井上毅らと作った帝国憲法の草案は「夏島草案」といわれますね。

伊藤の主導した憲法案には、統帥権など、いろいろ重要なポイントがありますが、それは戸部先生の授業にお任せすることにして、ここでは帝国憲法が、議会が同意しなければ政府は法律や予算を通せないように規定した、という点を強調しましょう。

これは当然ですが、政府の中から大きな反発がありました。そもそも伊藤はドイツ・プロイセンで学んだとき、予算や法律を議事に任せたら大変だから、日本ではそういうことをしないようにとアドバイスを受けているのですね。しかし、伊

藤はそのアドバイスを蹴ったわけです。これが後々、議会与政府の関係に大きく影響します。帝国憲法はプロイセン型と言われますが、やはり伊藤はどちらかというと、プロイセンよりも4回ほど行って慣れ親しんだイギリスにシンパシーを置いて、そこでの議会の在り方を理想として持っていたのではないかと。そういう説もあります。

いずれにせよ憲法上の規定によって、帝国議会の権限はかなり強く設定されました。そして、民権派もこの規定をうまく使えば、政党が意思決定に参加することも可能ではないかと考える。暴力ではなく、憲法に基づいて言論で解決しようという機運が高まります。

ところが、現実運用され始めた憲法と議会は、そう簡単には機能的に働きませんでした。初めて開かれた議会（第1議会）から第4議会になるまで、政府と大隈・板垣の民党は非常に激しい対決を繰り返し、妥協点が見えないという問題が生じます。これを初期議会と呼んでいます。

政府は大方針として軍拡を唱え、かつ憲法制定のときから、繰り返し「超然主義」を唱えました。これは政党から超然する、党派におもねらず政治をする。大隈が主張する議院内閣制などは絶対に採らない、という宣言です。

一方で民党は、もう既にかなり重税感があり、崩壊しつつある農村の負担を軽減しなければいけない。従って、この議会で話し合われるべきは減税である、と主張します。対外関係を理由に軍拡を主張する政府と、減税を主張する民党。税金を上げるのか、下げるのか。もう真っ向から話が食い違って、議会は空転に空転を重ねます。

私の考えですが、この時代にできた議会は、よりよい解決案を探るディベートの場所ではなく、先ほども言いましたように、設置することで外国にアピールするためのものもありました。そして、政府は決定を承認させる場として設定したものですから、有益な話し合いを行う前提がなく、議論が食い違ってしまいます。実質的な討議の場として機能しない、という議会の状態は、何も今に始まるわけではないのです。

結局、このときは板垣の周辺が民権派を裏切って大混乱になったり、天皇が出てきて調停したりと、さまざまな過程を経て法律や予算が制定されていくのですが、明治政府の中では、こんな憲法はもう停止したほうがいいのではないかと。という意見も強まります。それを解決したのが、実は戦争でした。

第2次伊藤内閣のときに、日清戦争が勃発します。当時、明治政府は朝鮮半島への進出を企てていましたが、朝鮮は清国の側に傾きます。最終的に日本側が清国に戦争を仕掛けることによって、朝鮮を勢力下に置いてしまうわけですが、清国との戦争となれば、政争はひとまず置いて国家に協力するとの風潮が生まれます。それが議会を政府に協力させる非常に大きなきっかけになりました。さらに憲法や議会の構造的矛盾が戦争で解決された、という経験が後々まで残ります。

ただし日清戦争の結果、日本は朝鮮半島を勢力下に置きましたが、ロシアの干渉を招きます。清国を退けたことで、もっと強大なロシアを東アジアに引き寄せてしまうのです。三国干渉で日本が手に入れたはずの遼東半島を返還すると、

次の目標はロシアだと、日本はますます軍拡の道を進んでいきます。そして、その動きに議会も全面協力せざるを得ないことになっていきます。もちろん国内には、戦争はよろしくないと言う一部の人もいたのですが、軍拡の流れは動かしがたいものになっていきます。

こうして戦争が時代の主軸となっていく背景として、経済に触れておかねばなりません。日清戦争の前後10年で、日本はいわゆる産業革命を達成したとされます。日本でも欧米と似た近代工業化、そしていわゆる資本主義が、この時期に成立したのです。

日本の貿易構造は特徴的で、戦前の主要産業は軽工業です。紡績業とか、製糸業です。この多摩の丘陵を少し行くと、絹の道資料館という所がありまして、立派な茅葺きのお宅を保存しています。その屋根裏で蚕を飼って、生糸を紡ぎ、開港地である横浜まで持って行ってアメリカに売る。それで「絹の道」、シルクロードというわけですが、戦前日本はまさに、シルクを農村で作って、横浜発でアメリカに売って、そのお金で武器・軍艦を買うという貿易構造になっていました。その主要産業である軽工業で、機械化が進み、投資が行われ、資本主義が発展します。それによって清国その他のライバルを凌駕し、アメリカの市場を席捲します。これは非常に重要な産業になっていきます。

しかし、いつの時代もそうですが、機械化・オートメーションが進んだから人々は楽になるかということ、そんなことはありません。作れば売れるのだから、とにかく安い賃金でひたすら働かせる。そして、環境が整っていない所にぶち込んで、さあ、働けということになってしまうのですね。

例えば世界遺産になった有名な富岡製糸場は、官営工場であり、模範工場であったわけで、働く女工も技能が評価されるシステムがありました。ただ農村はあちこちにありまして。絹も蚕も大体の場所で育ちますから、工場が日本じゅうにたくさんあるのです。それらの工場で労働者の環境が徹底して守られているかということ、そうではない。「女工哀史」の世界は現実がありました。劣悪な労働環境のなか、人々は産業革命で必ずしも幸せにばかりなっていたわけではない。これが次の時代に影響をもたらしていきます。

明治時代：帝国議会与近代日本③ 日露戦争

20世紀初頭、日本はロシアとの大きな戦争、日露戦争を戦います。【表5】1904～1905年にかけてのことです。

日露戦争への道を考えるときに、転機となる北清事変が1900年、19世紀最後の年に起こっています。中国で外国人排斥を唱えた義和団の乱が発生し、その混乱に乗じて清朝が諸外国に宣戦を布告します。そこで英米日など8カ国の連合軍が結成され、清朝に北京議定書を結ばせます。

そのときに大規模な軍隊を出せたのは、ロシアと日本です。その日露が北京の北方に位置する現在の中国東北部、いわゆる満州を巡って、対立を激化させていきます。北清事変に乗じて、ロシアは満州を占領しました。そして事変が収まった後も居座り続けます。これを日本は、朝鮮への侵出をうかが

【表5】

30章 日露戦争	
● 三国干渉以後（北清事変）	ロシアの満洲占領、朝鮮への進出
● 立憲政友会の成立（伊藤博文総裁）	政府と政党の提携・合体、反発（山県有朋）
● 開戦一講和一戦後の東アジア	奉天会戦・日本海海戦、ポーツマス条約
● 大正政変（民衆騒擾、護憲運動の時代）	日比谷焼き討ち事件、政治的不満の直接表明

う非常に危険な行為とみなしました。

このころの日本の安全保障についての考え方には、朝鮮半島を他の大国に支配されてはならないとの強い信条が見られます。当時の最先端兵器は軍艦です。もし、その軍艦が朝鮮半島に大量に常駐したら、日本はいつでも攻められてしまう。だから、朝鮮半島から他国の影響力を排除しなければいけない、と考えたのです。今の感覚でいうと、長距離核ミサイルが目と鼻の先に設置されるようなものではないでしょうか。そこで満洲に侵出したロシアに、日本側は非常に危機感を持つわけです。

海外情勢と並行して、内政に話を転じますと、政府と日清戦争で全面的に協力した政党は、戦争の後、さまざまな形で政府と提携を試みるようになります。自由党と改進黨が合同して、野にいた大隈重信が総理大臣になったり、伊藤博文が自由党と合体して立憲政友会という政党の党首になったり、といったことが起こってきます。とくに政友会の成立は、政権担当の可能性の高い政党の出現と言えるでしょう。政府の中心であった伊藤博文は、憲法思想に見えるように、議会議場と政府は連携・提携できると考えました。そして、実際に政党との協同で政治を動かそうとしていきます。

しかし、それまで政府を独占していた役人、ここから「官僚」という言葉を使いますが、これらの人たちは基本的には、政党の進出に危機感を持ちます。官僚たちは、政党人について自らのポストを取り、お金を得ることに夢中で、本当に国家を考えているのかと、疑いと批判の目を向けていました。官僚たちは次第に、政党を重視する伊藤のやり方に反発するもう一人の実力者、山県有朋の下に集結して、いわゆる山県官僚閣として政党と厳しく対峙するようになっていきます。

こうして政治が政党対官僚という対立軸を形成するなかで、伊藤も山県も次第に現役の宰相としての地位を退き、山県の後輩であった桂太郎が初めて、維新の元勳級の人たちから下がった世代として政権を担当します。その第1次桂内閣の下で、日露戦争は戦われることとなります。

日露戦争そのものについては、いろいろな物語が知られていますから、そこまで詳しく話しません。日本軍は二〇三高地などで苦戦しながらも、旅順・大連を落とし、奉天で大規模な陸戦に勝利します。また日本海においてロシア

の旅順艦隊、あるいはバルチック艦隊を撃滅します。陸海で勝利した日本は、アメリカを仲介にポーツマスで講和条約を結びます。日本がロシアに薄氷の勝利を収めるのですが、この結果は世界に衝撃を与えました。

この間、知り合いの研究者に聞きましたが、アメリカで日露がかつて戦争した話を学生にして、どちらが勝ったと思うかと聞いたら、100人ほどいた学生は全員ロシアと答えたそうです。今の感覚ではそうですね。けれども、当時も似たようなものです。日本がまさか勝つとは思わない。

しかし日本には、ロシアを退けた代償が当然発生します。確かにロシアは南満洲の権利を日本に譲り、朝鮮は名実ともに日本の勢力圏に入りました。ただ日清戦争と比べものにならない死傷者を出し、すさまじい重税に耐えてきた民衆が、ポーツマス条約で賠償金が取れないことに激怒して、日比谷公園で騒動を起こします。講和をしろと騒いだのではなく、金も取れないのならもっと戦争を続けろ、でないと犬死にではないか、という抗議でした。まさに対外硬論からの政府批判だったわけです。

日比谷での焼き討ち以降も、民衆騒擾（そうじょう）は頻繁に続きます。それまで物言わぬ存在であった人々、「民衆」が政治の舞台に登場し、政党などを介さず直接的に意思表示を始めた時代。日露戦争の大きな負担がそれを促したと言っても良いでしょう。ただそれは世界的な現象で、日本だけにとどまりません。第一次世界大戦後にイギリスで起こった民衆の権利要求もそうですし、日露戦争や大戦後のロシア国内の暴動も似た面があったわけですが、日本も例外ではなかった。こうして時代は大正期、いわゆる大正デモクラシーの時代に進んでいくわけです。

さてテーマに戻り、明治期の議会にはどういう意味があったのか。【表6】考えてみると一つには、対立していた政府と民権派を、国会開設という政治目標を共有することで、決定的な分裂に至らないようにした、国内融和の観点がありました。議会の舞台上で政府と民権派の戦いは続きますが、それを議会政治の枠内に収めることができた。それも議会の役割であったと考えられます。

もう一つ、議会をつくり憲法を定めるのは、対外アピールの側面が大きかった。議会での議論を実質的に何かに反映さ

【表6】

明治期のまとめ	
● 「議会」の効能	(1) 分裂した政府と民権派の結節点 (2) 「文明国」としての対外アピール ←政策意思決定機関はあくまで政府
● 現実としての「議会」	(1) 政府・政党対立の解決＝「戦争」 (2) 軍役重税の負担、労働環境の悪化 ←政治的要求の主体「民衆」の登場

せるというよりは、議会在形式的に存在することが重要であった。つまり、議会での議論の内実化は、議会ができたからといって進まない。アピールのためにつくられた議会ですから、政府と政党はそもそも話し合いの基盤を持っていません。そして両者の対立を緩和したのが、戦争であったという事実が大きな影響をもたらします。

さらに、せっかく議会はできましたが、人々の生活を守るといった議論に、議会は積極的に対応することができませんでした。人々の声が反映されなかったわけです。そうすると、議会や政党に任せられないと考える民衆が、直接的な要求を行おうとする状況が生まれます。政治的要求の主体としての民衆の登場は、議会の機能が本来の形で発揮されていないことの現れでもありました。従って大正期以降には、議会をどう実質化するのか。人々の要求にどう応えるのか、が大きな課題となります。それは日清・日露戦争での人々の負担と密接につながっていたのです。

大正・昭和初期：帝国議会と近代日本④ 世界大戦

それでは後半、大正・昭和初期の時代に入ります。20世紀に入ると、写真や映像がよく残るようになります。第一次世界大戦、塹壕（ざんごう）戦の様相を図で出してみました。何かもうみんな疲れ果てた感じがしていますね。1,400万人ともいわれる死傷者を出した世界大戦は、日本では大正期にあたる出来事です。20世紀前半の世界は戦争の世紀となりますが、日本も例外ではありませんでした。

従来、日本史の分野では、第一次世界大戦はあまり重視されていませんでした。それは日本は参戦するが、本格的戦闘をあまり行わなかった……実際は地中海に艦隊を派遣したり、山東半島に行っているのですが、あまり影響はなかったとされてきました。しかし、それは誤りです。この世界大戦が日本にもたらした影響は、政治・経済・社会にもたいへん大きなものがありました。【表7】

世界大戦で日本は日英同盟を口実に参戦し、ドイツと戦いました。ロシアが日露戦争で後退し、ドイツも世界大戦で東アジアから撤退します。すると、中国大陸に残る列強は日本とイギリスという状況が生まれます。しかしイギリスはヨー

【表7】

<ul style="list-style-type: none"> • 世界大戦と大戦景気(対独戦争) 対華21カ条要求、貿易振興・対外関係悪化 • 米騒動と民衆運動(労働・農民・社会運動) 経済格差の拡大、民衆の権利要求高揚 • 本格的政党内閣(原敬内閣・立憲政友会) 官僚閥の譲歩と妥協、地方利益の拡充 • ワシントン会議(中国保全・海軍軍縮) 大戦後の東アジア秩序＝アメリカ主導
<h2>31章 世界大戦</h2>

ロッパなどでドイツと死闘を繰り広げている。東アジアはがら空きです。

そこに日本は野心を持っていきます。それまで諸外国は勢力均衡のもと、中国への干渉は相談してからにしましょうと内々に取り決めていました。しかし日本は、列強と相談なしに、いわゆる対華21カ条の要求を、清朝崩壊後の実力者・袁世凱の政権に行います。朝鮮半島の保全が課題だったはずの明治日本は、大正期になると中国に侵出し、独占的に利益を得ようとの考えに変わっていたわけです。そして、秘密であったはずの対華21カ条が中国側によってばらされて、イギリスやアメリカは日本に強い不信感を抱き始めます。

日本とアメリカの関係が、このころから次第に揺らぎ始めます。日露戦争の講和条約はアメリカの軍港ポーツマスで結ばれました。アメリカは中国の市場に強い関心をもっていました。ハワイを併合し、フィリピンをスペインから奪って、徐々に中国に近づいてはいたのですが、そこでロシアを中国から追い払うために日本に好意的に接したわけですが、中国に関しては「機会均等」「門戸開放」を宣言します。中国に足掛かりを持たなかったアメリカは、自分にも機会を与えろと言ったわけです。

ところが、その「均等」を日本が真っ先に破ってしまう。アメリカはロシアの次は日本が中国を独占しようとしている、との疑惑を持つに至ります。疑惑を持ったら徹底的にやる国ですから、アメリカの対日感情は非常に悪化します。

さらに、大戦景気の影響も甚大です。東アジアからイギリスが一時的に撤退したことで、日本の製品が大量に輸出されました。紡績による綿布などが大量にアジア各地に流れ、日本に好景気が訪れます。あちこちで船が沈められますが、造船技術を持った国はそれほど多くありません。そこで日本の造船業も盛んになります。「船成金」のイメージは皆さんおありでしょう。対外関係が悪化しながら、景気は良くなっていく。ですが、好景気の成果は人々に直接還元されません。働き口は増えましたが、賃金水準は変わらず、物価だけがどんどん上がっていき、庶民の生活は圧迫されます。これはつまり、格差の拡大です。

日露戦争から続いてきた重税感に、大戦景気での格差拡大が加わって、人々はさまざまな形で民衆騒擾を起こし、あるいは権利要求のデモや賃金獲得のストライキを広範に行うようになっていきます。世界大戦の終わる前後に発生した米騒動をきっかけに、民衆運動、労働運動、農民運動、そして社会運動、女性や被差別部落などの権利要求、これら数々の動きが同じ時期に現れます。

人々の動きに押されるように、官僚側も妥協と譲歩を行わなければならないとの判断を下します。これが本格的政党内閣といわれた、原敬(政友会)内閣成立の背景です。政党内閣に強く反対していた山県有朋なども、米騒動に直面して、多数の民衆と接点を持つ政党の特性を利用し、政党内閣で人々の権利要求を緩和しようと考えざるをえなかったわけです。

政権を獲得した「平民宰相」原敬は、立憲政友会を率いて、地方利益を拡大する政策を取ります。鉄道・港湾などの

インフラ整備はもちろん、高等教育の希望を持つ地方に学校をつくり、私立学校を大学と認める(大学令)。地方の要求に応える、それには政党が最も前向きだったわけです。こうして民衆の要求と、それに応える政党内閣という構図が出てきます。

外交の面でも、政党内閣は調整を図ります。世界大戦の結果、アメリカが圧倒的超大国としての存在感を出し始めます。衰退していくイギリスは、アメリカと組むことで退潮を緩やかにしようとした。日本はアメリカとどう向き合うか。原はアメリカが提唱したワシントン会議に、積極的に参加していきます。アメリカと万が一でも衝突が起らないように、中国には機会均等を守り(九か国条約)、海軍は各国が軍縮して、お互いに決定的なダメージを与えられない軍備にとどめる(ワシントン海軍軍縮条約)。そしてアメリカを孤立させかねない日英同盟は廃棄する(四か国条約)ことが決まりました。軍縮や対米協調に不満をもつ日本人も少なくありませんでしたが、外交的には小康状態を得られたのです。後からみれば、ほんのつかの間の平穩に過ぎませんでした。

大正・昭和初期：帝国議会と近代日本⑤ 関東大震災

大正期の終わりごろ、日本では社会不安が高まっていました。1923(大正12)年には、関東大震災が発生します。【表8】崩壊した浅草十二階の写真を出していますが、浅草・上野など、下町を中心に非常に大きな直下型地震が起き、大火災が多くの命を奪いました。死者は約9万人で、その半数以上が両国の近くの横網町、今は都の慰霊堂がありますが、当時は陸軍の被服廠跡で、そこで亡くなっています。

震災の前後、政治もまた混乱に陥っていました。盤石の基盤をもっていた原内閣が、首相暗殺という結末を迎えたのち、高橋是清が総理大臣、政友会の総裁となります。が、高橋は財政には非常に詳しくはなかったのですが、政治的な調整能力はゼロでした。政友会政権は内紛で自滅してしまいます。その後、政権は再び官僚が担いますが、官僚主導の震災復興事業に政友会が反発します。大規模な復興事業に、政党が経済不況を理由として批判を加えたのです。

今、オリンピックで再開発がいろいろされていますが、1964年五輪大会の都市インフラ計画は、ほとんどが実は震【表8】

- ・ マグニチュード7.9(死者約9万人)
首都圏壊滅、政治の混乱・復興事業の大幅縮小
- ・ 恐慌の時代(戦後・震災・金融恐慌)
不況・恐慌の連続、不健全な日銀融資＝金融不安
- ・ 都市と農村(近代化する都市と貧窮地方)
モダニズム、享乐的文化の発達＝農村との格差

32章 関東大震災

災復興事業の計画を実行したにすぎない、などといわれます。予算規模が大きすぎて大正期には実現できなかったのですが、そこには政党による官僚の事業への批判と、さらに世界大戦終結後に発生した恐慌の連続が影響しています。

世界大戦の後、東アジアの市場にイギリスが復帰すると、粗悪な日本製品は瞬く間に淘汰されます。作れば売れるで投資した設備も全てパーになり、大戦景気の揺り戻しが来たわけです。そこで発生した「戦後恐慌」に対処していたところへ、「震災恐慌」が起こります。やむなく日銀が手形を割り引いて引き受け、融資をする。すると、本当はつぶれるであろう会社も延命し、産業構造が改まらずに、貸金が焦げ付いて「金融恐慌」につながります。不況の連続、そして不健全な融資。そして政府が不況のダメージを切り捨てられず、ずるずると不況が続く。日本の1920年代は失われた10年となっていく。そのうちに都市と農村の格差が開き、とくに農村が恐慌の影響を強く受けます。一番の大きなダメージは「昭和恐慌」によるものでした。

規模は縮小されましたが、復興事業によって首都圏の東京は3年ぐらいでおおかた機能するようになり、より近代化した都市として生まれ変わりました。都市に電車が通り、郊外に人々が家を買ひ、都心に電車で通勤するスタイルが生まれる。ターミナルには百貨店ができ、銀座の目抜き通りで買い物を楽しむ、一部の余裕ある人も現れました。当時華開いた都市文化は、モダニズム、近代化、アメリカ化、享乐的な文化、エログロナンセンスなど、そういった言葉でよく表現されます。

しかし他方で、貧窮する地方、農村は不況の連続で、食べ物にも苦しむような状況が生まれてきます。都市と農村の格差はますます深刻化します。そうしたなか、期待された政党政治にも試練が訪れます。

大正・昭和初期：帝国議会と近代日本⑥ 政党の政治

政党の政治ということで、この絵を見てもらいましょう。【図1】私の大好きな岡本一平さんという当時の漫画家、岡本太郎のお父さんですけど、この時代の政治を風刺しています。



33章 政党の政治

【図1】 (岡本一平『現代世相漫画』より)

ここに「肥料分配大将と消極そろばん総裁」と書いていますね。「肥料分配大将」とは田中義一、政友会の総裁です。陸軍大将だった田中義一は、高橋是清のあとに政友会の総裁となって、総理大臣となりますが、金を積極的にじゃぶじゃぶばらまく、肥料をばらまいていると、ひしゃくを持っているわけですね。そして、この両手にそろばんを持って応戦しているのが、民政党総裁の浜口雄幸です。浜口は大蔵官僚出身で緊縮財政を志向し、分配なんてけしからんとやっているわけです。

積極と消極、この相反する経済政策を志向する二大政党が、政治を動かしていく。これが戦前日本の「憲政常道の時代」だったのですが、そのことで日本はどういう影響を受けたのかを考えてみたいと思います。【表9】

まず大正デモクラシーの帰結としての、普通選挙制度の導入があります。先に述べた社会運動のほとんどが、一部の高額納税者しか認められていなかった選挙権の獲得を要求に掲げていました。そこで、政党は人々の要求をうけて、震災の後にできた実行力を欠く官僚内閣を倒し、政権を奪取して普通選挙法を成立させます。このとき婦人参政権は実現しませんでした。当時その議論はすでに行われていました。不十分ではありますが、政党は人々の期待に応えました。これが戦前政党政治の始まりをもたらします。衆議院を押さえる政党なら、憲法のもとで政策が実現できる。議会や政党政治への期待を人々に抱かせたのです。

ところが、普選実施と官僚内閣打倒で結束していた政党は、普選の成立後にバラバラとなり、大きな2つの政党に再編されます。かつて伊藤博文と板垣退助の自由党を合体させた政友会と、大隈重信系の政党を受け継ぐ憲政会・民政党の2つです。憲政会は1927年に民政党となるので少しややこしいですが、政権担当可能な二大政党が成立するのです。

これによって、政争が激化します。何しろ政権は衆議院の政党が担うわけですが、しかし、現在のように議席が多い方が政権を獲るというルールはありません。憲法自体が政党政治を想定していないのですから、ルールなどあるわけがない。そこで、反対党の政権を倒ささえすれば、自党の政権となるというルールが発生します。どんな手段を使ってもよい。するとスキャンダルの摘発が相次ぎます。汚職が明るみに出ます。そして、政党政治に対する人々の期待はどんどん失われていきます。

地方では、利権が絡んだ地域間対立が、それぞれの政党をバックにして激しさを増していきます。ある地域に2つの大きな派閥があるとすれば、どちらかは政友会に、どちらかは民政党に付いて、これを政治の争いとしてやり始めるのです。そうするとまるで冗談のようですが、警察署が2つでき、消防署が2つでき、役所が2つできたりして、政友会政権のときは、民政党支持者の家が火事になっても消防車が出動しないとか、そういうことが起こってしまうわけです。これは、どちらの政党にも属していない普通の人からすれば、迷惑以外の何物でもありません。こんな議会政治でいいのかしら、と人々に不安を抱かせる状況が生まれていきます。

さらに外交に目を向けると、政党政治の基盤であった国際

協調路線が次第に崩れていきます。先ほどのひしゃくを持った田中義一総裁は、中国に強く出るべきだという人々の意見を取り入れるため、中国に軍隊を出します。田中大将は、別に中国をやっつけようとしたわけではありません。内戦で混乱する中国にいる日本人を、なぜ守らないのだという人々の声に応えるために、軍隊を出したのですが、それが現地の中国軍と軍事衝突を起こしてしまうのです。結果、中国は日本に大変な不信感を持ち、英米も日本の野心を警戒して、対外関係は悪化していきます。

もう一つ、経済の失政が重なります。政友会の田中政権が倒れますと、今度は民政党の浜口政権になります。浜口雄幸は非常に謹厳実直な人でした。しかし元大蔵官僚で、当時の大企業・財閥などの経済的要求を含めて政策にします。それが金解禁であり、緊縮財政であり、そして軍縮でした。

先ほども言いましたように、日本の不況は、本来ならつぶれる企業も生き残らせていたために、長引いている。これが当時の定説でした。そこで浜口内閣の井上準之助蔵相は、産業合理化を進めて、不良の中小企業は淘汰されてもやむを得ないと決断し、「金解禁」政策を断行します。金解禁は為替レートを安定化することで、対外貿易の促進をはかる目的がありました。しかしそのため政府は極度の緊縮デフレ政策をとり、しかも為替レートを高く設定したため、円高が進行します。そのうえに、ずっと好景気だったアメリカで株価の大暴落が起き、世界大恐慌が発生して対米輸出の増加どころではなくなります。

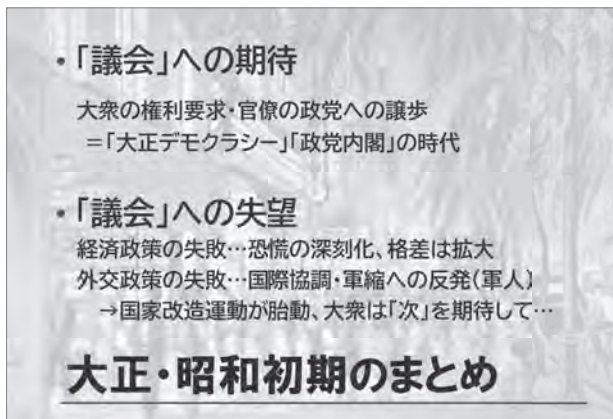
先ほどの話を思い出してください。日本の貿易構造は、農村で作った生糸をアメリカに売るものでした。そのアメリカが、生糸を買わなくなったらおしまいです。とくに農村はすさまじい、経験したことのないような不況に陥っていきます。東北の村々では、3日も食べていないという欠食児童が多数あらわて、農家の娘は享樂的な都市に売り飛ばされていきます。それでも農村の人たちは、売る娘がいる人はまだ、と嘆きました。ひどい時代になってきました。しかし浜口首相や井上蔵相は、まだ緊縮だ、まだ耐えなければならぬと言い続け、人々に忍耐を求めました。ですが、人々はそれを許容できませんでした。

最後に、この後の時代につながるごととして、農村の悲惨

【表9】

<ul style="list-style-type: none"> ・ 普選とデモクラシー（+治安維持法） 第二次護憲運動＝普選実現、民衆の政治参加要求に応える ・ 二大政党政治の成立（憲政会・民政党v.s.政友会） 衆議院「政党」の優位確立、政党同士の政争が激化 ・ 中国統一と日本（外交の失敗・政友会） 国民党「北伐」への山東出兵で軍事衝突、対外関係悪化 ・ 国家改造運動の胎動（経済の失敗・民政党） 金解禁＋緊縮＋世界大恐慌＝昭和恐慌、農村窮乏・軍反発
<h2>33章 政党の政治</h2>

【表10】



な状況が何をもたらしたのか、を考えてみます。困窮する農村は、陸軍の兵士たちの郷里でもあります。また軍という組織は、農村にいて大学に行けない、しかし優秀な人を軍事エリートとして陸軍大学校、あるいは海軍兵学校に送り込んでいました。軍人にとって、農村の窮乏は故郷の崩壊です。この状況を作ったのは何か。政党によるデタラメな政治だ、となるわけです。

昭和初期に盛んとなる国家改造運動には、こうした背景がありました。政党政治は期待されて成立しましたが、外交で失敗し、経済でも失敗して、人々の支持を失っていく。いったんは議院内閣制に近い政治が実現しながらも、それは政策の失敗によって潰え、人々は次の期待——戦争が好景気をもたらし、すべてを解決してくれる——そうした新たな期待を持つようになるのではないかと私は考えています。【表10】

ここに示した図は、昭和8年ごろの銀座です。時計台もありますね。今とあまり変わらないような光景が、もうこのときには生まれています。こうした都市の経済的繁栄の裏で、農村では悲惨な状況があり、それがまた次の時代の展開を生んでいく。こうした大きな流れというものを中心に、今日はお話しさせていただきました。

それでは、時間が押ししましたけれども、これで終わります。ご静聴ありがとうございました。

「大学でまなぶ日本の歴史」近代・現代編

第2回 満洲事変から太平洋戦争へ

元帝京大学文学部史学科教授・防衛大学校名誉教授 戸部 良一

<<実施日 2020年2月8日(土) 於 帝京大学ソラティオスクエア S012 教室>>

1. 「戦争」の呼称

今日の私の話のタイトルは、「満洲事変から太平洋戦争へ」ということになっていますが、1時間程度で、昭和期に日本が戦った軍事紛争の全てを説明することは無理です。従いまして、今日は、昭和期に日本が戦った軍事紛争をどのように捉えるかということにつきまして、まず、概略的にお話をします。その上で、最初の軍事紛争であった満洲事変について、これも細かい事実経過はなるべく割愛して、その問題点を指摘して、皆さんに考えていただこうと思っています。レジュメに従ってお話ししていきたいと思いますが、資料の部分は細かく説明しませんので、少しずつ読みながら話を聞いていただければありがたいと思います。

まず、戦争の呼び方、呼称という問題から考えてみたいと思います。問題になるのは、皆さんもご存じのとおり、紛争の呼び名が一定していないということです。レジュメの1に「戦争の呼称」と書いていますけれども、スラッシュで3つに区切っています。左にあるのが、当時日本で使われた呼び方です。右側にあるのが、どの紛争も一応中国が当事者、あるいは当事者の一員でありますので、現在の中国で使われている呼び名、呼称です。真ん中にはそれ以外、日本で一般に使われている名称、呼称の代表的なものを挙げておきました。

かつて日本政府が用いた「大東亜戦争」という呼称は、敗戦後、占領軍当局によって禁止されました。その後、「太平洋戦争」という呼称、呼び方が定着したように見えたのですが、この呼び方では、中国あるいは東南アジアで戦われた部分が抜け落ちてしまう、そういう主張が最近強く唱えられまして、「アジア太平洋戦争」という呼び名が、あるいはそう呼ぶ例が増えてきているようです。

昭和期に日本が戦った軍事紛争には、当時の呼称を使いますと、それ以外に満洲事変と支那事変があります。実は、1941年の12月に、対米英開戦の後に中国が宣戦布告をします。逆にいいますと、それまで日本と中国は宣戦を布告していませんでした。そのため法的には戦争とされていなかったわけです。そういう意味で、「事変」という呼び名を当時の日本は使いました。

戦後は、満洲事変という言葉はほぼそのまま使われてきていますけれども、支那事変につきましては、支那という言葉が蔑称である、侮蔑的であるという中国側の主張あるいは批判によりまして、さらには、事変というよりは、実態的には戦争だったのではないかという主張によりまして、例えば「日華事変」という言葉が当初使われたり、最近では「日中戦争」という名称がほぼ定着したりしたように思われます。中国では、満洲事変は、柳条湖事件が起こった日を取りまして、9・

18事変。それから、盧溝橋事件に始まる日中間の戦争は「抗日戦争」と呼ばれます。1941年12月以降、中国が連合国の一員となった後の戦争は、「世界反ファシズム戦争」というような呼び方がなされるようになっていきます。

このような呼称、呼び方の背後には、それぞれ歴史観、歴史認識、歴史解釈の違いがあります。歴史認識や歴史解釈が多様であるが故に、さまざまであるが故に、お互いに相いれない部分があるために戦争の呼び名もなかなか一定しないということになります。日中間で一定しないだけではありません。日本国内でもさまざまであり、一定しないのです。そのためあってでしょう、昭和天皇は「先の大戦」という呼び方をされていました。

ただ、この呼称の問題にこだわるのはあまり賢いとは思われません。呼称の問題でつまずきますと、その後に実のある議論ができなくなるからです。戦争の呼び方が多様である、そして、その背後にさまざまな歴史認識や歴史観があるとすると、その歴史観や歴史認識の違いを無視して戦争の呼び方を一緒にしようと思っても無理です。歴史観や歴史認識を同じくしようというのも、周辺諸国との間でももちろん難しいことですし、国内でさえ難しい。従いまして、戦争の呼び方など違って当然と考えたほうがいいたろうと私は思います。

その呼び方をお互いに理解して、それがどの戦争、どの紛争を指しているのかがお互いに了解されればそれで十分だろうと私は考えて、これまで中国の研究者であるとか、あるいは韓国の研究者などと議論を重ねてきました。そういう立場であるということ、最初にお断りしておきたいと思います。

2. 「十五年戦争論」

では、満洲事変、それから日中戦争、太平洋戦争（一番ポピュラーな名前をここでは使います）、この3つの軍事紛争はどのような関係にあるのかということになります。これにつきましては、3つの「戦争」を一括して「十五年戦争」と捉える歴史観、解釈があります。これは3つの戦争、軍事紛争を連続的に、その連続性を強調して捉える歴史解釈です。すなわち満洲事変、日中戦争、太平洋戦争は、3つの戦争が連続している。相互に関係している。それだけではない。満洲事変から日中戦争を経て太平洋戦争に至るこの道筋は、歴史的な必然である。満洲事変が日中戦争を不可避的にし、日中戦争が太平洋戦争を避けられないものにした、こういうふうに考えるのがいわゆる「十五年戦争論」です。

十五年戦争論の立場を取る歴史家の方々は、その後その見解をややトーンダウンさせました。ただ、3つの戦争、紛争

の関連性と連続性を強調していることには変わりありません。3つの紛争の間に関連性があることは、当然です。それに異論を唱える人たちは研究者の中にはあまりいません。問題は連続性というところにあります。十五年戦争論を唱える方々は、連続性と必然性は違うのだといいながら、しかし、やはり3つの紛争が必然的な連鎖、必然的なつながりであるというふうに論じているように私は感じます。

しかし、3つの戦争、3つの紛争は、そもそも始まり方からして違っています。今日お話しする満洲事変は、出先軍の謀略によって始まりました。日中戦争は、恐らくは偶発的な事件によって始まった。それがエスカレートしたということだろうと思います。そして、太平洋戦争は国家の正式な意思決定によって開始されました。このように、それぞれ始まり方が違う3つの紛争を必然的な連鎖、必然的なつながりとみなすということはかなり無理がある。

必然的な連鎖でなかったとしますと、満洲事変が起きても、その後の日中戦争を避ける道はあったのです。日中戦争が始まって、太平洋戦争を回避する可能性はあったこととなります。ところが、実際には、満洲事変の数年後に日中戦争が起り、日中戦争の数年後に太平洋戦争は始まりました。

ということは、当時の政府や軍の指導者たちは、衝突を回避する可能性、その道をつぶしてしまったということの意味します。あるいは戦争に至る過程の節目で選択を誤って、選択の幅を狭めていって、そして、最終的には戦争を選ばざるを得なくなってしまったと、こういうことを意味します。なぜ衝突回避の道を選ばなかったのか。この問題こそ、実は昭和前半期の最も重要な歴史的な問題と私は考えます。そして、この問題の重要性というのは、十五年戦争論というものを一応退ける、否定するところから始まるということもいいたいでしょう。

もし、3つの戦争、軍事紛争が必然的な連鎖であるとしなすと、それを引き起こしたとされる日本に長期的な戦略があった。その戦略に基づいて行動したということになります。しかしながら、今、歴史を振り返ってみますと、当時の日本にそうした長期的な戦略があったとは考えられません。長期的な戦略を日本が持っていたなら、もう少し合理的に、もう少し賢く立ち回ったでしょう。当時の日本の行動はどう見ても行き当たりばったりで、合理性にも、戦略性にも欠けたものでした。この点でも、十五年戦争論は成り立たないといつてよろしいのではないのでしょうか。

では、この満洲事変、日中戦争、太平洋戦争という3つの戦争は、1939年に始まるヨーロッパの戦争とどのように関連していたのか、このことも一つの問題になります。第2次世界大戦というくくり方をしますと、アジアで戦われていた戦争も、ヨーロッパで始まった戦争も同じ戦争の一部であるかのように考えられてしまいます。果たしてこれは適切な捉え方といえるのでしょうか。

まず、第1次世界大戦と第2次世界大戦を比較してみましよう。第1次世界大戦はほとんどヨーロッパで戦われました。当時の日本人は、これを欧州大戦と呼びました。あなたがちそれは的外れではありません。確かにヨーロッパ以外にも

戦争は波及しまして、中近東とか、あるいは南米、さらには太平洋やアジアでも戦闘はありました。しかしながら、大戦末期に始まったロシア革命と、それに対する干渉戦争を別としますと、ヨーロッパ以外の戦いはほとんど全てヨーロッパの戦いから派生したものです。主戦場はあくまでヨーロッパでした。

第2次世界大戦はこれと違うのです。第2次世界大戦のアジアと太平洋の戦争は、ヨーロッパの戦争から派生したものではありません。ヨーロッパでドイツのポーランド侵攻によって戦争が始まったとき、既にアジアでは戦争が継続中でした。アジアの戦争がいつから始まったかについては、これまでお話ししてきたように論争があります。十五年戦争論からすると、アジアの戦争は満洲事変から、つまり1931年9月から始まったということになります。しかしながら、満洲事変は1933年5月の塘沽(タンクー)停戦協定によりまして、一応のピリオドを打ったと考えることができます。それから1937年7月の盧溝橋事件まで、日中間に本格的な戦闘はありませんでした。

十五年戦争論を説く人々は、満洲で抗日ゲリラ戦があっただろうと、抗日ゲリラを討伐する戦いもあっただろうと言います。さらに、関東軍が内蒙古工作をやって、それとの関連で中国軍とぶつかったらうということも指摘します。でも、こうした軍事行動が果たして本格的な戦争といえるかどうか。これには多分に疑問が付きまといまいます。むしろ、これを戦争というのは軍事的な常識に反するのではないのでしょうか。そうなりますと、アジアの戦いは1937年の7月に始まったと、こう考えておくのが無難でしょう。中国側が抗日8年といっていたのも、本格的な戦争が1937年から始まったことを意味しています。

いずれにしても、アジアの戦争はヨーロッパの戦争が始まる前から、少なくとも2年以上は続いていたということになります。となると、この2つの戦争、アジアの戦争とヨーロッパの戦争は別物だと考えるべきではないでしょうか。要するに、第2次世界大戦というのはアジアの戦争とヨーロッパの戦争が別々に始まって、それが1941年の独ソ戦争と、それから、同じ年の12月に始まった太平洋戦争によって結合する。そして、文字どおりの世界大戦になった。こう考えるべきではないかと私は思います。

3. アジアの戦争とヨーロッパの戦争

では、なぜこの2つの戦争が結合したのか。やはり、これには日中戦争が長引いていた、長期化していたということが関連してきます。中国の蒋介石は、中国単独では日本に勝利することができないので、日本と列国との衝突に期待します。そして、その期待の下に長期抵抗を続けていました。蒋介石は当初、日本とソ連がぶつかることに期待していましたが、日中間の紛争が長期化すると、日本がいわゆる南進を始める。南方に進出する姿勢を示し、英米との関係を悪化させることとなります。そうなる蒋介石は日本と英米とがぶつかる、戦争をすることに期待するようになります。そうした中でヨーロッパの戦争が始まるわけです。つまり、蒋介石は

アジアの戦争に欧米を巻き込むことによって、あるいはアジアの戦争をヨーロッパの戦争に結合させることによって、対日戦を勝利に導こうとした、こう考えることができます。

アジアの戦争とヨーロッパの戦争を結合させようとしたのは、蒋介石だけではありませんでした。実は日本もそうでした。特に日本の陸軍では、長期化する日中戦争を日中間の二国間戦争という枠組み、あるいは文脈だけでは解決できない。だから、いずれ世界に歴史的な大変動が起こるので、それにつなげて、それに連動させて日中間の紛争を解決しようという考えが強まっていました。つまり、日中戦争というのは世界的な変動の一部なので、その大変動が本格的に起こったとき、その文脈に合わせて、その状況に合わせて解決すべきだと考えられていくわけです。

そして、この世界的な大変動は、ヨーロッパでの戦争勃発によって本格的に始まったと考えられるようになります。さらに、1940年の前半に、西部戦線でドイツ軍が圧倒的な勝利を収めます。いわゆる電撃戦によって勝利を重ねていくわけですが、これを見た軍人たちは、世界的な変動、歴史的な大変動の輪郭が明らかになったと判断していくようになります。こうして日本は三国同盟を締結して、世界における新興勢力としてのドイツ、イタリアと手を結び、北部仏印進駐によりまして、ベトナム北部に進駐することを通じて武力を伴う南進行動を始めます。ヨーロッパ列強の植民地に足を踏み入れていくわけです。三国同盟と南進行動によりまして、日本はアジアの戦争とヨーロッパの戦争を結合させようとした。

蒋介石は、もともと別の戦争であったアジアの戦争とヨーロッパの戦争を結び付けようとした。日本も蒋介石とはまた別の思惑から、2つの戦争を結び付けようとしたのです。やがて、先ほども申し上げましたように、1941年の独ソ戦と日米英開戦によってアジアの戦争とヨーロッパの戦争が完全に結合する、文字どおりの世界大戦になっていったわけです。

アジアの戦争とヨーロッパの戦争はもともと別だった。本来別個の戦争だった。そうであるなら、これを別個の戦争として、別の戦争だとして結び付けない選択肢もあり得たはずなのですが、しかし、その選択肢を日本は選び取りませんでした。

4. 満州事変

(1) 満洲問題解決のオプション

少し前置きが長くなりましたが、以上のことを頭に入れて少し歴史をさかのぼって、満洲事変のことを考えてみたいと思います。

既に述べましたように、そして、皆さんもよくご存じのとおり、満洲事変は関東軍の一部将校の謀略によって始まりました。そして、その過程で満洲国という、かいらい国家が樹立されました。ただし、もし解決すべき問題が満洲における日本の権益の維持と増進・拡張ということにあったなら、レジュメに書きましたように、その解決方法は4つあったと考えられます。

第1は、現地の張学良政権と協力して問題を解決するという、いわば現状維持策。第2は、張学良政権は反日的で信用できないので、それに代わる親日的な政権を満洲に樹立するというオプション。第3は、単なる独立政権、親日政権ということではなくて、独立国家をつくるという案。そして、最後に、第4に、日本が満洲を併合してしまうという領有案。この4つです。

1920年代の後半に政治に傾いた中堅将校たちが集まって、木曜会というグループを作りました。そこで国家をどうするか、あるいは満洲問題をどうするかということを議論したわけですが、その結論は、皆さんのお手元にある資料1のようなものになったといわれています。

【資料1】

木曜会記事 (1928.3.1)

「帝国自存ノ為満蒙ニ完全ナル政治的権カヲ確立スルヲ要ス」

「完全ナル政治的勢(ママ)カトハ取ルコト」

出所:「木曜会記事」『鈴木貞一氏談話速記録 下巻』

かなり過激な結論で、満洲領有に近いといっても言い過ぎではないかもしれませんが。こういう考え方が陸軍の将校の一部にあったということは否定できません。ただ、これは過激な少壮将校の私的な会合での議論と結論にすぎません。陸軍全体の方針として決まったわけではありません。ただ、こういう考え方があったということです。

1931年、昭和6年の春に、参謀本部の情報部が作成した情勢判断の中には、第1に親日政権、第2に独立国家、第3に領有という、3つのオプションが記されています。この時点では既に張学良政権との協調というオプション、現状維持策が既に問題外とされているところに注意しておく必要があるだろうと思います。

同じころ、陸軍大臣が、陸軍省と参謀本部の中心に位置する5人の課長を集めて、彼らに満洲問題をどのように解決するかということの検討を命じます。そして、6月ころにその結論がまとまったとされています。ただし、この結論の文書の原本は残っていません。戦後に、関係者の記憶に基づいて再現したのが資料2です。

【資料2】

満洲問題解決方策の大綱 (1931.6.19)

一、満洲に於ける張学良政権の排日方針の緩和については、外務当局と緊密に連絡の上、その実現につとめ、関東軍の行動を慎重ならしめることについては、陸軍中央部として遺憾なきよう指導に努める。

一、右の努力にもかかわらず排日行動の発展を見ることになれば、遂に軍事行動の已むなきに到ることがあるだらう。

- 一、満洲問題の解決には、内外の理解を得ることが絶対に必要である。陸軍大臣は閣議を通じ、現地の状況を各大臣に知悉せしめることに努力する。
- 一、全国民特に操觚界に満洲の実情を承知せしめる主業務は、主として軍務局の任とし、情報部は之に協力する。
- 一、陸軍省軍務局と参謀本部情報部とは、緊密に外務省関係局課と連絡の上、関係列国に満洲で行はれてゐる排日行動の実際を承知させ、万一にもわが軍事行動を必要とする事態にはいつたときは列国をして日本の決意を諒とし、不当な反対圧迫の挙に出でしめないやう事前に周到な工作案を立て、予め上司の決裁を得てをき、その実行を順調ならしめる。
- 一、軍事行動の場合、如何なる兵力を必要とするかは、関東軍と協議の上作戦部に於て計画し上長の決裁を求める。
- 一、内外の理解を求むるための施策は、約一ヶ年即ち来年春迄を期間とし、之が実施の周到を期する。
- 一、関東軍首脳部に、中央の方針意図を熟知させて、来る一年間は隠忍自重の上、排日行動から生ずる紛争にまきこまれることを避け、万一に紛争が生じたときは、局部的に処置することに留め、範囲を拡大せしめないことに努めさせる。

出所：『現代史資料7 満洲事変』

この文書の解釈につきましては、実は、研究者の間でも違いがあります。これは既に陸軍の中樞が満洲事変を起こすことを決定したに等しいとみなす研究者もいます。確かに第2項では、反日行動が広がれば、高まれば、武力発動もやむを得ないと述べています。しかし、第3項では、満洲問題の解決には内外の理解を得ることが絶対に必要であると述べまして、その内外の理解を求めするために、約1年間PRをしなければならぬと主張しています。その間はできるだけ隠忍自重し、関東軍の突出を押さえよう、抑制しようと言っているのです。ということは、この結論がまとまった数カ月後に始まった満洲事変は早過ぎたということになります。陸軍中央の課長クラスで満洲事変を計画していたわけではないということも大体ここからうかがえるだろうと思います。ただ、彼らは武力発動を容認していましたので、実際に事変が勃発してしましますと、関東軍の動きを支持していくこととなります。

では、満洲事変を引き起こした張本人たち、彼らは何を考えていたのか。満洲事変の首謀者が関東軍高級参謀の板垣征四郎、そして、作戦参謀の石原莞爾であったということはよく知られています。その石原莞爾の考えをよく示しているのは、資料3です。

【資料3】

石原莞爾「満蒙問題私見」(1931.5)

要旨

- 一 満蒙ノ価値
 - 政治的 国防上ノ拠点
朝鮮統治支那指導ノ根柢
 - 経済的 刻下ノ急ヲ救フニ足ル
- 二 満蒙問題ノ解決
 - 解決ノ唯一方策ハ之ヲ我領土トナスニアリ
之カ為ニハ其正義ナルコト及之ヲ実行スルノカアルヲ条件トス
- 三 解決ノ時期
 - 国内ノ改造ヲ先トスルヨリモ満蒙問題ノ解決ヲ先トスルヲ有利トス
- 四 解決ノ動機
 - 国家的 正々堂々
 - 軍部主動 謀略ニ依リ機会ノ作製
 - 関東軍主動 好機ニ乗ス
- 五 陸軍当面ノ急務 [略]

[本文]

第一 満蒙ノ価値 [略]

第二 満蒙問題ノ解決

…吾人ノ直観スル所ニヨレハ支那人カ果シテ近代国家ヲ造リ得ルヤ頗ル疑問ニシテ寧ロ我国ノ治安維持ノ下ニ漢民族ノ自然的發展ヲ期スルヲ彼等ノ為幸福ナルヲ確信スルモノナリノ在満三千万民衆ノ共同ノ敵タル軍閥官僚ヲ打倒スルハ我日本国民ニ与ヘラレタル使命ナリ…

第三 解決ノ時期 [略]

第四 解決ノ動機

…然レ共国家ノ状況之レヲ望ミ難キ場合ニモ若(も)シ軍部ニシテ団結シ戦争計画ノ大綱ヲ樹テ得ルニ於テハ謀略ニ依リ機会ヲ作製シ軍部主動トナリ国家ヲ強引スルコト必スシモ困難ニアラスノ若シ又好機来ルニ於テハ関東軍ノ主動的行動ニ依リ回天ノ偉業ヲナシ得ル望絶無ト称シ難シ

第五 陸軍当面ノ急務 [略]

出所：『石原莞爾資料 - 国防論策篇』

注目されるのは、「要旨」の「二」というところなので、そこをご覧ください。そこでは満蒙を領土とするという主張を石原が述べています。石原莞爾は満蒙領有論者です。そして、その正当化理由として挙げられているのが「本文」の「第二」のところ。そこでは、中国人には近代国家を建設する能力がないので、日本が治安を維持してやるほうが彼らにとっては幸せであるという論理が展開されています。

もう一つ注目されるのは、「解決ノ動機」というところ。満蒙問題の解決、満洲問題の解決は満洲を領有することにあると言っているわけですから、これはほぼ必然的に武力を用

いることとなります。そして、武力を用いるためには国家が一体となって正々堂々取り組むのがベストだけれども、それができなければ謀略によって軍部主導で国家を引きずることでもできると石原は言います。また、もし軍部が動かなければ、何らかのチャンスを利用して関東軍が動いて引っ張ることも困難ではないとされています。そして、実際には、この石原の考えどおり、関東軍が動いて、謀略により柳条湖事件を引き起こし、その後には本国の軍部全体を引きずり、さらに国家をも引きずったわけです。

「解決ノ時期」というところを見てください。ここでは、国内の改造よりも満蒙問題の解決を先にするという趣旨が述べられています。当時、政治に傾斜していた中堅将校たちの間では、腐敗した政党政治を打破し、国家総力戦を戦うために国内の改造を行わなければならないということが活弁に論じられていました。先ほどの木曜会がその一つの例ですが、石原は、まず、満洲で武力を行使して対外的な危機をつくり、その危機を利用して国内の改造に進もうとしていました。この点で、満洲事変は現状を根本的に変革する、少し強い言葉を使えば、一種のクーデター的な性格をも持っていたと考えられるのではないかと思います。

現状を根本的に変革するというのは、国内的な意味だけではありませんでした。対外的にも当時の東アジアの国際秩序、いわゆるワシントン体制と呼ばれるものですが、このワシントン体制を打破するという意味もありました。

資料3は、その部分をストレートには述べていませんけれども、石原莞爾の考え方に近い、あるいは当時の中堅軍人たちの考え方に近いと思われるのは、資料4の2つの抜粋です。

【資料4】

佐多弘治郎（満鉄調査課長）「科学的に満蒙対策を観る」（1931.1.24）

「…マルクスの所謂（いわゆる）大資本が小資本を吸収するが如く小領土国は自ら大国の権力に支配せらるるの傾向を有す…すなわち領土拡大にして資源豊富なるもの愈々（いよいよ）強大となるに至るべし 又経済的見地よりせば経済活動の自由は大国に於て之を獲得すること有利なり 之が為近時其の経済圏を益々拡充し之を保護すべく努力せられつつあり 翻（ひるがえつ）て我日本の状態を觀察せるに四面悉（ことごと）く大国に圍繞せられ連合すべき小国を有せざるのみならず是等超大国の国家機構は共和国社会主義にて感情上よりするも我国家と相容れず 以上に依り大日本として所謂超大国を建設するの要は極めて明白にして之が為領土を獲得するが少くも之と同価値のものを得ざるべからず…即ち満洲を我絶対権の支配下に入れ此処（ここ）に超大国を建設するの要あり／ 如何なる形式にて経済自由生命の安全を獲得すべきか 此の形式に二あり 一は満洲に清朝を回復し之と連合せんとするもの、一は満洲に日滿漢鮮の四族共和国を建設せんとするものなり 満洲を觀察せるに、…人種的よりせば日漢人は相異なるも日鮮滿蒙は同一蒙古種に属すと称せらる 即ち満洲は当然支那本土と分離して独立性を保有すと謂（い）ふことを得べし 扱（さて）右案の実行は寧（むし）ろ政府の手を煩わすことなく在満日本人の手に於て決行するを得策とす 滿蒙四族共和国は「支那現時の政權にては滿蒙の開発困難なるを以て在満民族の生命財産の保護上並世界文化の開発上滿蒙共和国建設の要ある」旨を白人種間に自己権利の主張として開示し得べく現実の問題として実現可能にして且公明正大に之を主張し得べく予は實に之を提唱するものなり」

出所：『現代史資料7 満洲事変』

「大川周明 五・一五事件予審訊問調書」（1933.10.7）

「今後世界に於て言葉の充分な意味で独立国として立つて行く為めには、少なくとも自給自足し得るだけの経済領域を確保しなければならぬ 独立国としての政治単位は自給自足の一大経済単位でなければならぬ即ち大英帝国、北米合衆国、ソヴェート連邦、中華民国等の如き国家のみが将来の国際舞台に独立国として存続する可能性がある …然るに日本の状態を見れば其の政治的版図の狭小にして資源の貧弱なる…第一次生活必要品さえも国外よりの供給に待たねばならぬ 而も我々を囲む国々はソヴェート連邦中華民国と北米合衆国である／ 此の三国は先ず第一に超大国としての可能性を具備する強大なる経済単位である 第二には其の孰（いず）れもが国際間の横紙破りである 而して第三には其の孰れもが日本に好意を有せず支那の如きは峻烈無謀なる敵意を示して憚（はばか）るところなく米國も亦我國を以て近き将来に於ける唯一の仮想敵国とし露國に至つては其の共產主義を以て我が国体に挑戦して居るのであります／ 斯（か）くの如き事情の下に在りて我國が消極的には単に将来の独立を確保する上からも更に進んでは積極的に国民的使命を実現する上からも日本は何を措（お）き少くも自給自足し得るだけの経済単位を政治的に支配する必要がある 而して其の発展の方向は實に滿蒙の外にない日本は滿蒙を取り入れた大経済単位に於て其の経済組織を革新しなければならぬ 私は大正末期に於て堅く斯く信じたのであります」

出所：『現代史資料5 国家主義運動2』

後からゆっくりお読みいただければありがたいと思いますが、まず、満鉄調査課長の佐多弘治郎という人の文章です。佐多は次のように述べています。

「国家が経済的な自由と安全を確保するためには、領土を拡大して、資源の自給自足を図らなければならない。国家のイデオロギーの上で対立するソ連、中国、アメリカといった超大国に囲まれている日本としては、満洲を絶対的な支配下に入れなければならない。日本人、満洲人、漢人、朝鮮人、こうした四族からなる共和国を建設しなければならない。これは本国政府の手をわずらわすことなく、在満日本人の手で成し遂げなければならないことだ」。このように佐多は述べ

ています。

興味深いことに、マルクスの名を出していることからうかがえるように、佐多は経済的な観点から議論を出発させました。いわゆる広域経済圏をつくることによって自給自足を図ると、こういう主張を訴えたものでした。

同じような発想は、5・15事件に連座して逮捕された大川周明の議論にも見ることができます。大川も日本がいわば超大国として独立して、国際的に独立して行動するためには、経済的に自給自足できるだけの政治的な領域を持たなければならない。ソ連がそうだ。アメリカもそうだ。中国もそうだ。ヨーロッパが、今のEUの先駆けですけれども、統合を図ろうとしているのもその現れだと言っています。日本はそうした経済的に自給自足し得るだけの政治的な領域を構築しようとするれば、まず、満蒙を取り入れなければならない。満蒙を取り入れた経済単位を政治的に支配しなければならない。大川はこのように述べました。石原も、そして、陸軍の急進的な中堅将校たちも、恐らくこの2人と同じような考え方を持っていただろうといえます。

ただし、石原が主張する満蒙領有は本国の政府には受け入れられませんでした。本国の軍にも受け入れられませんでした。本国の陸軍首脳、あるいは中堅層の一部を除いた多数は、親日政権の樹立ぐらいでことを収めようと考えていたからです。これに対して石原莞爾は領有論こそ撤回しましたが、親日政権ではなくて、断固として独立国家を樹立するという方向に進んでいくことになります。そのための論理として用意しましたのが、満鉄の職員であり、関東軍の法律顧問としても働いていた松木俠という人物の意見書、文書でした。関東軍が松木に依頼して作ったもらったもので、それが資料5になります。一部だけ引用しています。

【資料5】

関東軍（松木俠（たもつ））「満蒙自由国設立大綱」（1931.11）

[前略]

(二) 満蒙独立政権説の誤謬

[中略]

1. 満蒙を以て支那国家の一部と為（な）す以上之と条約又は約束を締結すること能（あた）はず単なる地方的問題にして而（しか）も極めて軽微なるものならば地方政権と約束を締結すること可能ならむも苟（いやしく）も条約として国家の権利義務に関する程度のものは締結し得ざるなり…

2. 独立政権と条約を締結し得ざる以上之を意の儘に動かすことは絶対に不可能なり…

3. 加之（しかのみならず）既存条約の義務さへも之を蹂躪して省みざるに至れること之亦最近の日満関係に鑑みて明瞭なり

4. 独立政権なるものは必ず軍閥となる…

[後略]

出所：『現代史資料7 満州事変』

ここでは、日本が満洲を意のままに動かすためには、権利義務をきちんと約束する条約を相手と結ばなければならない。条約を結ぶことは、地方政権とはできないので、独立国家としなければならない。こういう論理が展開されています。

(2) 事変の推移

満洲事変の進行過程を少しおさらいしてみましょう。レジュメでは、後先になりますけれども、関係年表というところをご覧いただきながら話を聞いていただければありがたいと思います。繰り返すことにはなりますが、事変は石原、板垣といった人々を中心とする数名の関東軍将校たちの謀略として始まります。関東軍司令官の本庄繁は当初、武力発動に消極的だったとされていますけれども、結局は石原たちの参謀の意見具申によって押し切られてしまいます。

高級参謀の板垣は奉天にいました。軍司令部は当時旅順に置かれていました。奉天にいた板垣は、参謀ですから部隊指揮権は持っていなかったはずですけれども、非常事態だということで、独断で現地の日本軍に中国軍を攻撃することを命令します。関東軍の本来、主な任務は、満鉄の保護にありました。ところが、満鉄にはつながっていますけれども、その本線の沿線にはない吉林で、これも謀略によって不穏な事態を醸し出します。そして、吉林の居留民保護を名目としまして、関東軍はそこに出動します。主力が吉林に向かいます。

関東軍の主力が吉林に向かって、南満洲が手薄になる。それを名目に関東軍は朝鮮軍に援助を要請し、朝鮮軍はこれに応じて鴨緑江を横断する、越境することになります。朝鮮軍の越境は陸軍中央の了解を得ないままに始まってしまいます。

10月に石原莞爾は偵察機に乗って、当時 張学良が本拠を置いていた錦州を爆撃します。偵察機なので、爆撃装置がなく、手で爆弾を落とすということが伝わっています。これは、そのころ国際連盟で妥協が成立しそうになったので、石原はそれを粉碎するためにあえて国際連盟をも刺激するためにやったのだといわれています。北満洲のチチハルへの進出。これも陸軍中央が止めていたものでしたけれども、謀略とまではいいませんが、かなり強引な方法で関東軍はやってのけてしまいます。ラストエンペラーの溥儀を天津から連れ出すときには、謀略によって天津で騒動を起こす。その混乱に紛れて溥儀を連れ出しました。

1932年1月の上海事件は、列国の目を満洲からそらすために謀略を行うことから始まったといわれています。満洲国の樹立については本国政府や陸軍中央から再三、関わるなという厳命を受けていながら、関東軍は裏工作によって独立国家樹立にまで進めていくことになります。このように、満洲事変は度重なる現地の謀略、独断専行、下克上によって進められました。

下克上は現地の関東軍で見られただけではありません。陸軍中央でも見られました。当初、事態を不拡大に留めようとした陸軍首脳に対しまして、局部長、課長クラスを中心にした陸軍の中堅将校が関東軍に同調して、事態拡大の方向に動

いたからです。事変はあれよあれよという間に、独立国家樹立まで急ピッチで進みます。一体政治家は何をしていたのかということになります。この動きを止める最大のチャンスは朝鮮軍の独断越境のときでした。

軍隊が国境を越えるという特別の場合は予算措置を講じなければなりません。従って、政府が予算措置を講じなければ越境は不可能だったはずですが、若槻総理大臣はこれを追認してしまいます。関東軍や朝鮮軍の動きに不信感を持っていた昭和天皇も、政府、内閣が認めた以上、それを承認しないわけにはいきませんでした。

若槻禮次郎という政治家は有能な官僚政治家でした。ただ、勇気と決断力に乏しかったという側面があります。第1次内閣では枢密院とぶつかって、総辞職してしまいます。実は解散総選挙に訴えて内閣の権力基盤、政権基盤を強化して、さらに枢密院と対決しようという選択肢もあり得たはずですが、彼はそうしませんでした。そのとき総選挙に訴えますと、実はその総選挙は日本で初めての普通選挙になるはずでした。それが怖かったといいますか、予見できない、予想できない要素が絡まるので、なかなか総選挙に訴えることができなかつた、尻込みしてしまったというのがよく指摘されているところです。恐らく若槻は朝鮮軍の独断越境に関しましても、これは非常事態での一回限りの例外的なことだろうと。今後こんなことが繰り返されるはずがない、そう判断してしまっただろうと思います。

当時の状況を見ますと、若槻首相だけではなくて、新聞を代表とするマスメディア、あるいは議会の政治家たちも関東軍の行動に拍手を送っていたことがよく分かります。若槻内閣が総辞職して、犬養内閣が登場した後のことですが、衆議院は満洲国の国家承認を早く行うべきであるという決議を満場一致で可決しています。外務大臣の内田康哉は国会答弁で、事変以来の日本の行動の実績は国を焦土にしても守り抜くと答弁しています。

(3) 国際連盟と日本

致命的だったのは現地調査に当たった国際連盟のリットン調査団の報告書が公表される前、日本が満洲国を承認してしまったことです。実は、リットン調査団の報告書は、今考えるとかなり穏当なものだったことが分かります。資料6は、長い報告書ですが、その結論の最後の部分です。

【資料6】

『リットン報告書』第九章「解決ノ原則及条件」

「単ナル原状回復ガ何等解決タリ得ザルコトハ既ニ吾人ノ述ベタル所ニ依リ明ナルベシ蓋(けだ)シ本紛争ガ去ル九月前ニ於ケル状態ヨリ発生セルニ顧ミ該状態ノ回復ハ単ニ紛糾ノ反覆ヲ招徠スルニ止マルベク斯ノ如キハ全問題ヲ理論的ニ取扱ヒ事態ノ現実性ヲ閉却スルモノナリノ前掲ニ章ニ述ベタル所ニ顧ミ現政権ノ存置及承認モ亦等シク不満足ナルベシ斯カル解決ハ現存国際義務ノ根本諸

原則トモ将(はた)又(また)極東平和ノ基礎タルベキ両国間ノ良好ナル了解トモ両立スルモノト見受ケラズ右ハ支那ノ利益ニ背馳シ又満洲人民ノ希望ヲ無視スルノミナラズ結局ニ於テ日本ノ永遠ノ利益ト為ルベキヤ否ヤハ少クトモ疑問ナリ」

[中略]

1. 「支那及日本双方ノ利益ト両立スルコト」
2. 「ソヴィエト」聯邦ノ利益ニ対スル考慮」
3. 「現存多边的条約トノ合致」
4. 「満洲ニ於ケル日本ノ利益ノ承認」 / 「満洲ニ於ケル日本ノ権利及利益ハ無視スルコトヲ得ザル事実ナリ之ヲ承認セズ且満洲トノ日本ノ史的関聯ヲモ考慮ニ入レザル如何ナル解決モ満足ナルモノニ非ザルベシ」
5. 「支那及日本間ニ於ケル新条約関係ノ設定」
6. 「将来ニ於ケル紛争ノ解決ニ対スル有効ナル措置」
7. 「満洲ノ自治」 / 「満洲ニ於ケル政府ハ支那ノ主権及行政的保全トノ一致ノ下ニ東三省ノ地方的状況及特質ニ応ズル様工夫セラレタル広汎ナル範囲ノ自治ヲ確保スルガ如キ方法ニ依リ改メラルルコトヲ要ス」
8. 「内部的秩序及外部的侵略ニ対スル安全保障」 / 「満洲ノ内部的秩序ハ有効ナル地方的憲兵隊ニ依リ確保セラルルコトヲ要シ外部的侵略ニ対スル安全保障ハ憲兵隊以外ノ一切ノ武装隊ノ撤退ト利害関係国間ニ於ケル不侵略条約ノ締結トニ依リ与ヘラルルコトヲ要ス」
9. 「支那及日本間ニ於ケル経済的接近ノ促進」
10. 「支那ノ改造ニ関スル国際協力」 / 「支那ニ於ケル現時ノ政治的不安定ハ日本トノ友好関係ニ対スル障礙ニシテ…右ニ列挙シタル条件ハ支那ニ於ケル鞏固ナル中央政府ナクシテハ実行スルコト能ハザル所…」

「…日本ノ有スル問題ノ核心ニ現代支那ノ政治的發展及其ノ進ミツツアル将来ノ傾向ニ関スル日本ノ危惧ノ存スルコトヲ認識セザルヲ得ズ」「支那ハ政治的及経済的事項ニ於テ一切ノ主要国ノ協カヲ必要トスルモノ而モ支那ニトリテ有益ナルハ日本政府ノ友好的態度及満洲ニ於ケル日本ノ経済協カナリトス」

出所：『日本外交年表並主要文書 下巻』

注目されるのは、満洲国は認められないと、こう結論付けているのは当然としながらも、事変以前の状態に戻ること、すなわち原状回復も問題解決にはならないと言っている部分です。問題解決のためには日本の利害や日本と満洲との歴史的な関係も考慮に入れる必要がある。満洲には中国の主権の下で地方的な自治政権をつくって、外国の軍隊を撤退させる。周辺諸国と不可侵条約を結び、治安維持に当たる警察部

隊のようなもので安全を保障する。これがリットン調査団の提案です。

外国軍隊の撤退ということになりますと関東軍撤退になりますので、日本としては受け入れられなかったと思いますけれども、ただ、この報告書の提案は、日本の立場にもそれなりに配慮した内容になっています。そして、そこを糸口として、日本は国際連盟と妥協を図る可能性もないわけではありませんでした。しかし、日本は、この報告書が公表される前に満洲国を承認してしまいましたので、妥協が極めて困難なことになりました。そうした立場に追い込んだのは日本自身の行動ということになるのでしょうか。

さらに、妥協が困難なことになっても、実は、日本は国際連盟を脱退する必要はありませんでした。リットン調査団の報告書に基づく国際連盟の対日勧告案が日本としてどう受け入れられないものだったとしても、そして、それが国際連盟総会で可決されたとしても、日本は脱退しなくてもよかったのです。面の皮を厚くして、知らぬ顔の半兵衛を決め込んで居座っていればよかったのです。実際、このときの国際連盟総会に臨む前の日本政府の方針は、日本の主張が受け入れられなければ脱退する、というものではありませんでした。しかし、政府は最終的に脱退を決定します。なぜか、よく分かりません。

当時日本は熱河作戦というものを始めていまして、このままでは国際連盟の制裁を受ける恐れがあると判断して脱退を決めたのだという解釈があります。つまり、国際連盟の制裁を避けて、列国との衝突を回避するために、より強い言葉でいえば、国際協調を図るために実は国際連盟を脱退したのだという解釈もあるのですけれども、魅力的な解釈ですが、これについて、それを裏付ける証拠があるわけではありません。きっぱりと白黒付けるという日本人の潔癖さが脱退させたのだという解釈もあります。しかし、この解釈でいくと、連盟総会前の脱退回避という方針がなぜ脱退の方向に変わってしまったのか、それをうまく説明できません。

最近の研究によりますと、連盟の対日勧告案がリットン報告書より強硬になってしまって、日本に満洲国承認撤回を求めたので、日本としてはもう和解、妥協の可能性がないと判断して脱退に踏み切ったのだということもいわれています。いずれにしてもよく分からないというのが実情です。

国際連盟脱退につきましては、連盟総会で対日勧告案が可決されたとき、全権・松岡洋右が派手に見えを切って会議場から退場していく、そういうシーンが印象的ですが、実は、松岡自身は当初から脱退には消極的でした。松岡は自分の任務に失敗したと思って帰国するのですけれども、帰国したところ、まるで英雄のように喝采をもって迎えられました。それで驚いたといわれています。当時の国内世論の傾向がこんなところにも、はしなくも現れたのだらうと思われまます。

資料7は日本の国際連盟脱退通告文です。ここには次のような趣旨が述べられています。東アジアの国際関係というのは欧米の国際関係とは違って、特殊、例外的なものである。欧米に適用される国際協定とか国際慣例というのは、そのままでは東アジアには適用できない。そのことを口を酸っぱく

して再三日本は主張したのに、理解を求めたのに、国際連盟は理解してくれなかった、だから脱退する。こういう理由が述べられています。こうして日本は、欧米で適用される国際協定や国際慣例が東アジアには適用されないということで、東アジアの国際秩序の修正の方向に踏み出していくこととなります。

【資料7】

「国際連盟脱退通告文」(1933.3.27)

…帝国政府は…就中(なかんづく)支那が完全なる統一国家にあらずして其の国内事情及国際関係は複雑難澁を極め変則、例外の特異性に富めること従て一般国際関係の規準たる国際法の諸原則及慣例は支那に付ては之が適用に関し著しき変更を加へられ其の結果現に特殊且異常なる国際慣行成立し居れることを考慮に入らざるの絶対に必要なる旨力説強調し来り

…之を要するに多数連盟国は日支事件の処理に当り現実に平和を確保するよりは適用不能なる方式の尊重を以て一層重要なりとし又将来に於ける紛争の禍根を芟除(せんじょ)するよりは架空的なる理論の擁護を以て一段貴重なりとせるものと見る外なく他面此等連盟国と帝国との間の規約其の他の条約の解釈に付重大なる意見の相違あること前記の如くなるを以て茲に帝国政府は平和維持の方策殊に東洋平和確立の根本方針に付連盟と全然其の所信を異にすることを確認せり…

出所：『日本外交年表並主要文書 下巻』

5. まとめ

残された時間でちょっとしたまとめをしてみましょう。

以上のような満洲事変に関する検討で、どのようなことがいえるのでしょうか。まず指摘しなければならないのは、国際連盟を脱退したからといって、また、東アジアの国際秩序の修正を目指すようになったからといって、日本が国際的に完全に孤立したとか、戦争への道を歩むようになったということではないということです。この後日本は、国際連盟の枠外で国際協調を模索することになりますし、中国との和解、少なくとも日中関係の安定化を中国に働き掛けていくようになります。

ただ、そこには一定の前提といったらいいでしょうか、あるいは制約、限界がありました。それは満洲国の存在です。日本は自ら国家承認をした満洲国の存在を前提として、国際関係を営んでいかなければならなくなってしまいます。中国との関係安定化の試みも満洲国の存在が前提でした。国際連盟の枠外での国際協調も満洲国の存在が前提でした。この意味で、満洲事変以降の日本外交の選択の幅は大きく制約されていったわけです。

もう一つ指摘しておかなければならないのは、日本の国内政治が変調をきたし始めたという点です。それはまず、軍人の政治介入という点に表れてきます。先ほど述べましたように、朝鮮軍が国境を越えようとしたとき、若槻首相はそれに

ストップを掛けようとはしませんでした。掛けることができたのに、しなかったわけです。予算を付けないと兵隊さんたちが困るだけだというのが彼の回想録に書いている弁明ですけども、先ほど申し上げたとおり、これは緊急事態での例外的、一時的な措置だという考え方、判断が彼にあったから、今から考えると安易に認めてしまったのでしょうか。ただ、そのツケはかなり大きなものとして残ってしまいます。軍では、政府の意向を一時的に無視しても、それは追認されるのだ、結果がよければ認められるのだという風潮が広がってしまいます。この風潮は政府と軍との関係だけに限られませんでした。軍内部でもそうした風潮が広がりました。

独断越境をした朝鮮軍司令官の林銑十郎、謀略に関わり独断専行した関東軍参謀の板垣征四郎や石原莞爾、彼らは、本来なら軍の規則やルールに照らして処分を受ける、あるいは、少なくともけん責を受けるべきでした。しかしながら、彼らは皆、満洲事変というサクセスストーリーの主人公になってしまいます。石原莞爾はその後、参謀本部の中樞である作戦部長のポストに就きます。ひげが格好よかったのですが、越境將軍の林銑十郎が陸軍大臣になり、総理大臣にまでなりません。板垣征四郎も陸軍大臣になりました。こうした人事から見ると、陸軍は組織として腐敗、墮落したということになるでしょうが、このような腐敗、墮落の始まりは満洲事変にあったということになるかと思えます。

政治の変調でもう一つ考えておかなければならないのは、政治家や世論が関東軍の行動を支持し、満洲国承認でも、国際連盟脱退でも、政府や陸軍よりも強硬だったことです。しかも日本では濱口内閣の前、1928年に田中義一内閣の下で普通選挙が実施されていました。男性だけではなく、国民の政治参加が大きく拡大したばかりでした。これを見落とすべきではないだろうと思います。政治の大衆化が始まったというべきか、あるいは現代ふうにいえばポピュリズム的な傾向が強まったというふうにも考えられるでしょう。こうした傾向が出たのも満洲事変がきっかけです。

私は今日のお話の冒頭で、十五年戦争論というものを否定しました。満洲事変が日中戦争を必然としたわけではない。日中戦争が太平洋戦争を避けられなくしたわけでもないとし上げました。次の戦争を避ける可能性は常にあったのだということを申し上げました。この解釈、この考え方を私は撤回しようとは思いませんが、ただ、次のようには申し添えるべきだろうと思います。

もし満洲事変が起こらなかったなら、日中戦争は起こらなかっただろう。必然ではないのです。ないのですが、満洲事変が起こらなかったなら日中戦争は起こらなかっただろう。満洲事変は日中戦争を必然にしたわけではありません。しかし、その後の日本の選択の幅を大きく制約してしまった。幅を狭めてしまった。これは間違いありません。そして、その狭い選択の幅の中で日中戦争を避ける可能性を切り開くというのは、やはりかなり難しいことだったと考えざるを得ないだろうと思います。

この辺で一回りしたことになりますので、私の話は終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

【関係年表】

- 1931.09.18 柳条湖事件
- 09.19 関東軍、奉天占領
- 09.21 関東軍、吉林出兵 朝鮮軍、独断越境
- 10.08 関東軍、錦州爆撃
- 10.17 十月事件発覚
- 10.24 国際連盟理事会、期限付撤兵勧告案可決（13対1）
- 11.10 溥儀、天津脱出
- 11.19 千子ハル占領
- 12.10 連盟理事会、満洲問題調査委員会設置決議案可決→リットン調査団
- 12.11 第2次若槻礼次郎内閣総辞職
- 12.13 犬養毅内閣成立
- 1932.01.03 錦州占領
- 01.07 米國務長官、不承認政策声明（スティムソン・ドクトリン）
- 01.28 上海事変
- 02.05 ハルビン占領
- 02.09 井上準之助暗殺（03.05 團琢磨、暗殺）→血盟団事件
- 02.20 第18回総選挙（政友会301、民政党146、無産政党各派5）
- 03.01 満洲国独立宣言
- 05.05 上海停戦協定調印
- 05.15 五・一五事件
- 06.14 衆議院、満洲国承認決議を満場一致で可決
- 08.25 内田康哉外相、「焦土外交」演説
- 09.15 日満議定書調印（満洲国承認）
- 10.01 リットン調査団、日本政府に報告書通達（10.02公表）
- 1933.02.20 閣議、国際連盟が対日勧告案を可決した場合は連盟脱退を決定
- 02.23 熱河作戦開始
- 02.24 国際連盟総会、対日勧告案を可決採択 全権松岡洋右、抗議退場
- 03.27 日本政府、国際連盟に脱退通告文を通達
- 05.31 塘沽停戦協定調印

V 研究ノート

コロナ禍で大学博物館は社会に対して何を果たせるか
－帝京大学総合博物館の1年とこれから－

..... 堀越 峰之

『立教ディスプレイ—立教学院展示館年報—第6号』（2021.3）から転載

《 研究ノート 》

コロナ禍で大学博物館は社会に対して何を果たせるか

— 帝京大学総合博物館の1年とこれから —

帝京大学総合博物館学芸員 堀越 峰之

はじめに

「新型コロナウイルスは今後、この世から消えることはあるのでしょうか。」

「それは誰にも分らないよ。新型コロナウイルスの存在を気にしつつ生活することが普通になるかもしれないね。」

この会話は日本国内において、新型コロナウイルスに感染した患者の増加がみられ始めた2020年2月に筆者が勤務する帝京大学八王子キャンパス内の学生食堂において微生物学を専門とする同僚教員に素朴な質問をした際のものである。

この言葉を裏付けるように、世界中で感染者数は増加の一途をたどり、現在（2021年1月）では感染者数9,000万人、死亡者は200万人に上る。日本国内においては新型コロナウイルス感染症の第3波とされる感染者の爆発的増加の真っただ中である。世界では都市のロックダウン、移動の禁止、商工業の停滞とそれに伴う企業の倒産、失業、学校の休校などその影響は凄まじく、筆者も含めた多くの人々は不安な毎日を送っている。そして医療従事者や飲食業など厳しい状況に立たされている人々は数多くいる。新型コロナウイルスワクチンや抗ウイルス薬の開発は進められているが、世界的に広がったこのウイルスを抑え込むためにはまだまだ時間がかかりそうだ。

このようなコロナ禍の世界において筆者が勤務する帝京大学総合博物館（以下本館）はどんな役割を果たせるのだろうか、自問自答しながら活動をしてきた。本稿では、「コロナ禍で大

学博物館は社会に対して何を果たせるか」をテーマに、2020年の冬から現在までの1年間に本館は何ができたのかを振り返ると共に、今後は何ができるのだろうかと展望を描いてみたいと思う。

1 コロナ禍での帝京大学の状況と取り組み

本館は帝京大学八王子キャンパス内に設置された博物館である。そのため帝京大学全体の動向が本館の運営に自ずと影響するため、まずはコロナ禍において帝京大学がどのような対策をとったのかを報告する。

新型コロナウイルス感染症の拡大に対応するため2020年3月に学校法人帝京大学新型コロナウイルス対策本部が立ち上げられた。以後、対策本部の方針を受けて帝京大学の各キャンパス（板橋、八王子、宇都宮、福岡の4キャンパス）は、



帝京大学メディアライブラリーセンターでのソーシャルディスタンスの様子。座ってはいけない場所に×印で掲示している。

それぞれの置かれている状況に合わせた教育研究活動が行われることになった。本館が所在する八王子キャンパスでは、緊急事態宣言の発令により学生のキャンパス内への入構は全面禁止となった。

これにより2020年4月から6月初旬の授業は全ての講義がオンラインとなる。帝京大学では以前よりオンライン授業に対応できるLMS(Learning Management System)が整えられていたが、すべての講義を動画配信や双方向型でZoom等を使用してオンラインで実施するとサーバーがダウンする可能性があった。そのためサーバーへの負荷と、学生のインターネット環境を考慮し、データ容量が少ない音声データとレジュメ等の資料をサーバーに上げ学生に聴取してもらう方式でオンライン授業を開始した。教員は突然「ラジオ講座」を作ることになったため授業の準備、進め方について多くの時間と労力を割くことになった。またゼミナールや実習など同じ場、同じ時間を共有しつつ双方向でのコミュニケーションが必要な授業においても、音声データとレジュメを基本とした一方通行の形で授業を実施しなければならなかった。しかし、5月25日の緊急事態宣言の解除にあわせて6月8日からは50人以下の対面授業が再開。さらに動画配信が可能になり、あわせてZoomやMicrosoft Teamsを使用した、同時双方向のオンライン授業も実施できるようになった。現在では、授業の特性に合わせてオンライン授業と対面授業を織り交ぜた講義が行われている。

新入生や在學生は、待ち望んでいた4月からのカンパスイブを過ごせなくなり、自宅でオンライン授業を受講することになった。しかし、オンライン授業を受講できる環境が整備されていない学生がいることが懸念された。さらに家計の急変で学費を支払う見通しが立たず退学を検討する学生も多数いる可能性も予想された。そのため学納金の納期の延長、そして家計

が急変した学生への対応とオンライン環境の整備を支援する目的で大学から学生に対して総額22億円の経済的支援を行った。

このように教職員・学生共に苦しい立場に立たされた1年であった。これらを踏まえて、帝京大学総合博物館の1年を振り返ってみたい。

2 コロナ禍での帝京大学総合博物館の1年

本館では新型コロナウイルス感染症が日本国内で確認された1ヶ月後の2020年2月末から活動の制限を始めた。2月29日に約200人が受講する予定だった講座「ミュージアムセミナー 大学でまなぶ日本の歴史」を延期し、これを以って当面の間、他の講座も延期することになった。その後、感染拡大に伴い東京都の外出自粛要請を受けて3月21日、28日、4月4日と臨時閉館を行った。そして4月8日からの緊急事態宣言を受けて当面の間、休館となる。

緊急事態宣言発令から7月末までは、職員間でシフトを組み、在宅勤務と事務所勤務を1日おきを実施した。在宅勤務の実施にあたって一番心配したことは、所蔵資料に触れられないことだったが、1日おきに事務所へ出勤したため、この部分は問題がなかった。

打ち合わせについては、メール、チャットツール、Zoom等の遠隔会議システムを活用した。在宅勤務は、初めての経験ばかりで慣れない部分があったが次第にリズムをつかんでいく事ができた。それでも以前とは異なる環境と仕事のストレスで思い通り業務が進まないことも多々あった。

前述の通り、5月25日に緊急事態宣言の解除を受けて6月8日から一部対面授業が開始された。それに伴い本館は学内関係者のみ入館可能とした。初年次教育を担当する教員より博物館の見学が可能か多くの問い合わせがあったこと、あわせてキャンパスに入ることがままならな



帝京大学理工学部 30 周年を記念した
 展覧会。開催が危がまれたが 会期を
 後ろ倒しにして開催した。

かった新生に少しでも帝京大学について知ってもらいたいとの思いからである。開館にあたっては、日本博物館協会が策定した「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」や他館の事例を参考にした。具体的な感染対策として、入館と退館の際に手指消毒をお願いした。教職員・学生共に自身で毎朝検温し、体調管理シートを使って毎日の体調管理を行っているため、館内入口での検温は省略した。観覧にあたっては来館者同士でソーシャルディスタンスを保つことを呼びかけた。タッチモニターやスイッチについては定期的に消毒を実施し、可能な限り触れることができるよう対策をした。8月に入ると、感染者数の低下を受けて事務所でフル勤務が再開される。そして、2021年1月現在の時点では勤務体制に大きな変化はない。

一般利用者（学外）の入館再開は、10月3日から開催の企画展「帝京大学理工学部創設30周年記念 理工学部のラボのなか！ -コトワリとワザの探究-」のオープニングにあわせて実施

した。当初は事前来館予約システムの導入を検討したが、コロナ以前の来館者の状況を考慮すると、事前来館予約制を導入せずとも、「密」の状態は回避できると判断した。入館にあたっては、入口で検温・手指消毒・健康状態の確認・感染者が発生した場合に来館した方へ状況をお知らせするための連絡票への記入をお願いした。またコロナ禍だが新たな試みとして触れる展示を設置したため、感染防止対策として展示物付近に除菌ペーパーを設置した。これにより来館者自身が展示物に触れる前、触れた後に除菌を行い、展示を楽しむ事ができる。

本企画展開催は当初7月から開始予定だったが、緊急事態宣言下での作業スピードの遅れとあわせて、6月末の時点では国から出ている博物館への休館要請が解除されない可能性もあった。そのため次年度への延期を検討したが、入館者を迎え入れることが難しい場合でもオンラインで展示を発信する方策をとることを前提に、開催日を3ヶ月延期し、10月よりオープンとした。結果として博物館に対する休館要請は他の施設より早めに解除され、現時点まで開館は継続できている。

以上簡単ではあるが、本館の1年間を振り返ってみた。本館の新型コロナウイルス感染症への対応は場当たりの対応が多くなったと反省するばかりだが、この厳しい状況の中でも今後に生かせそうな新たな取り組みを開始した。さらに大学史・大学アーカイブズの重要性を改めて認識する体験もできた。次項ではそれらについてご紹介したい。

3 コロナ禍における人々の人間形成の場としての 学習権を保障する活動

帝京大学総合博物館は「本学の教育・研究活動と連携し、総合的・学際的な活動を行ない、その向上を図るとともに、それに必要な、歴史、芸術文化、自然等の資料を収集・保管する。併

せて教育・研究活動の成果の公開や、他機関との連携を通じて、大学の社会貢献を推進すること」を設置目的として2015年9月に開館した。学内関係者だけではなく、学外の方も無料で自由に利用できる博物館である。しかし、人の移動や集まることが制限されてしまったコロナ禍では、以前と同じ方法で設置目的を達成することは難しい。だが、コロナ禍だからこそ設置目的を果たすため活動しなければならないという思いから、いくつか新たな取り組みをスタートした。この取り組みの根底には開館以来、本館の社会的な役割を考え続けた結果、おぼろげながら見出した「帝京大学総合博物館は人々の人間形成の場として学習権を保障する」という考えがある。

本館には大きく分けて3つの属性の利用者がいる。一般利用者（学外からの利用者）、帝京大学の在学生、帝京大学の教職員である。利用者は、それぞれ利用の目的や興味関心が全く異なる。そのためそれぞれの利用者に対してそれぞれの求めに応じた活動を展開した。

① 一般利用者へ向けたインターネットを活用した情報発信

人の移動と集まることが制限される状況で、以前のように気軽に来館できない一般利用者や本館の存在を知らない人々に本館の活動を知ってもらうため、インターネットを活用して情報発信を行った。これまでオンラインでの情報発信はホームページのみだったが、Twitter・Instagram・YouTubeの計3つのソーシャル・ネットワークワーキング・サービス（SNS）の利用を開始した。目玉展示のピーアールから、博物館の仕事紹介、博物館職員の視点から面白いと思った日常の一言などを発信している。各SNSのフォロワー数はまだ100件に満たないが、一般の方々だけでなく、遠方の大学博物館もフォローして下さるようになった。現在はSNS上だけの繋がり

だが、これが今後具体的な活動の連携に発展することを期待したい。

そして、インターネットを使った情報発信で本館にとって最大の新しい試みは企画展の関連講座をオンラインでライブ配信した事である。10月24日に実施した理工学部展関連イベント「最新研究講座 理（コトワリ）と工（ワザ）の研究者たち 帝京大学から宇宙へ—学生が挑む超小型衛星開発—」の開催にあたって、対面での講座と同時にZoomを使いYouTube経由でライブ配信を実施した。ライブ配信は初めての試みで、機材の選定、通信環境の確認、リハーサルなど準備に多くの時間を割いたが、その甲斐あってトラブルなく講座を実施することができた。

オンラインでのライブ配信のメリットは、物理的な距離は問題にならないことである。本館の近隣に在住していても子育てや介護など、様々な理由で直接会場に足を運ぶことが出来ない人々や、移動時間の捻出が難しい人々も受講可能な事である。あわせて、チャット機能なども活用すれば双方向の講座も実施でき、コロナ禍では大変有効であると感じた。



講座をオンラインでライブ配信した。初めての試みであったがオンラインの可能性を感じた。

② 学習意欲の高い学生とニュースレターづくり

本館は帝京大学に在籍する学生が人間形成を図る場としての役割もある。前述の通り大学の授業はコロナ禍により制限された状態だが、在学生の中にはオンライン授業以外でも学びたい意欲を持っている学生がいることが予想された。これを踏まえて、コロナ禍だからこそ学習意欲が高い学生に自分を磨くための機会づくりとして、あわせて、キャンパスが立地する多摩地域について学生の視点から価値を発見し、それを記録し社会に発信することを目的とした「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」を立ち上げた。これは多摩地域の歴史・文化・自然・現在を取材・記録し、その成果を社会に広く発信するニュースレターの刊行や、本館で展覧会を開催するものである。今期はニュースレターづくりに力を入れ活動を展開した。作成に必要な、企画・取材・執筆・デザインのすべてを学生が行った。感染



博物館の活用法や大学の歴史を知ってもらうためにオンライン教材を作成。教員への授業支援をする意味も持つ。

対策をしながらの活動となり満足に打合せができず、指導する博物館側もニュースレター作りは初めての経験であるため予定通りに進まないこともあったが、学生の感性が満ち溢れ多摩地域の魅力が詰まった素晴らしいものが完成した。今後も活動は継続予定である。

③ 学芸員資格課程履修者の博物館実習の受け入れ

本館は学芸員資格課程において博物館実習を受講する一部の課程履修者を受入れている。帝京大学では通常、学外の館に博物館実習の受け入れをお願いするが、コロナ禍で実習の受け入れを中止にする館が少なからずあった状況下で、学外の実習先が確定しなかった3名の学生を本館で受け入れた。実習のためオンラインでの実施は難しく、感染症対策をしつつ対面で実施した。実習内容は展覧会の企画書作りから、実際に展示室を使って展示を作り上げるまでの一連



学生の視点で地域の魅力を伝えるニュースレターづくりの活動を開始。学生はキャンパスのなかでは経験できないことを街に出ることによって経験できた。

の手順を実践的に学ぶものとした。実習生からは座学やオンラインで得ることのできない経験ができ、大変有意義であったとの評価を得た。

④ 教員への授業支援

コロナ禍で、教員の多くはオンライン授業の準備に膨大な時間を割くことになった。その手助けになればと博物館を活用したオンライン授業用教材（音声データとパワーポイントがセットになった一方向型のオンデマンド授業形式の教材）を作成し、活用いただいた。今年度は2つのメニューを用意した。「帝京大学の歴史を知る」と「必ず役に立つ博物館の使い方」の2つである。主に初年次教育で活用いただいており、概ね好評である。教員からは、博物館を授業に組み込めないと考えていたが予定通り組み込むことができ安心したとの声をいただいた。学生からは、大学に自由に入構できない中で、これから4年間学ぶ大学の教育や研究活動の背景を知ることができ良かったとの感想があった。

以上、本館がコロナ禍で行ったもので特徴的と考えられる活動を紹介させていただいた。コロナ禍以前のような対面でのコミュニケーションが制限されると、これまでと同じ形式での教育活動を継続することは大変厳しい。しかしこのような状況だからこそ、人間は学び、そして楽しむ事が必要だと考える。決して思考停止にならず、そして人間として何をしなければならぬかを考えるための場や材料を提供し続ける事こそ帝京大学総合博物館の役割と考え、これからも人々の人間形成の場として学習権を保障する活動を展開していきたい。

4 コロナ禍において大学史・大学アーカイブズは何を果たすか

ここで大学博物館だけでなく、大学史・大学

アーカイブズの役割にも触れておきたい。本館は、年史編纂や、親組織である法人の非現用文書に移管して管理する機関ではない。しかし、現在の帝京大学において上記の機能の少なくない部分を担っているため、大学史・大学アーカイブズがコロナ禍において何を果たせるかも考えてきた。

現在の地球上に生きている人々が経験したことのないパンデミックに対して、何を考えの拠り所にして対処したらよいか全く分からない状況下で、多くの人々が国、地方自治体、マスメディア、インターネットなど様々なものを拠り所にしていただろう。その中で1918年から1919年にかけてパンデミックを起こしたスペイン風邪の歴史を紐解き今回の新型コロナウイルスに対してその経験を生かそうと紹介した人々が多くいたことは注目される。「歴史は役に立たない」とよく言われるが、コロナ禍においては今後のパンデミックの動きを想定する指標になる。スペイン風邪とコロナ禍の関係性は過去を知ることによって未来への希望を見通せるヒントが得られる事を私たちに教えてくれる。

上記の関係性を大学史・大学アーカイブズに当てはめて考えるとき、学校の危機に創立者たちはどのように対応したのかを知ることは重要である。それが現在立ち上がる危機に対応するための拠り所になる可能性があるためだ。いくつかの大学史資料所蔵機関で自校のスペイン風邪関係の資料に光を当て、ホームページなどで紹介する試みがされている²。100年前の各校に残された資料から当時の人々がどのようにパンデミックに向かい合ったのかが垣間みられる。

1 マスメディアにおいて アフレッド・W・クロスビー(2009)『史上最悪のインフルエンザ-忘れられたパンデミック-』みすず書房 が盛んに紹介されていた事が印象的であった。

2 東北学院ホームページ「スペイン風邪の流行と東北学院」2020年11月19日

<https://www.tohoku-gakuin.jp/info/top/201119-1.html>

2020年4月の緊急事態宣言発令中に筆者は帝京大学の職員として何を拠り所にして仕事をしていくのかを考えるにあたって、その拠り所を大学の歴史に求めた。

帝京大学の原点は、1931年に創立した帝京商業学校である。その90年の歴史の中で最大の危機がアジア・太平洋戦争とそれに関係する空襲による学校の焼失であった。その危機に対して創立者たちはどのように立ち向かったのかの記録を探すと、ヒントは意外にもすぐ近くにあった。本館の常設展示室で展示中の帝京商業学校0Bから寄贈された同窓会誌の記事である。それは帝京商業学校の元教諭であった山添清の回顧談だ。

1945年8月30日に当時の帝京商業学校理事長であった沖永莊兵衛の自宅に5人の教員があつまった。学校の存続を議論するためである。度重なる空襲により帝京商業学校の校舎は焼け落ちていた。さらに生徒もどうなったかわからない。そのような状況下での話し合いだった。皆、学校の今後の方向性について明言を避ける中、一番若い山添清が思い切って発言した言葉が学校の存続に結びつく一つのきっかけになった。

少し長くなるが、その一部を紹介する。

私の網膜にはっきりと浮かんできた光景があった。8月20日頃だっただろう。私は幡ヶ谷（帝京商業学校の所在地）の校門の前に呆然と立ち尽くして校舎の焼跡を見つめていた。校門のうかがわに帝京のシンボルのように植えられていた2本のシュロの木も焼けていた。そこから玄関へ行くまでの前庭は、校舎が焼け落ちるときに飛び散ったらしい瓦の破片が敷きつめられてあった。

と玄関跡にうずくまっている少年の姿が眼に飛び込んで来た。近づいてみると、少年は1年生らしくカーキ色の制服を着ていた。私に気がつくと、立ち上がって挙手の

礼をした。私も挙手で返礼をしながら、「何してるの。」と声をかけた。1年生らしい少年は、にっこりと笑顔を見せて言った。「瓦を片づけているんです。先生、9月には学校が始まるんでしょう。」そして、「みんな歩きにくいでしょう。道を作っているんです。」と付け加えて、またにっこりとした。「そうか、ご苦労だな。」「いえ、いいんです。僕の家は、すぐ近くだし、何もすることもありませんから。」彼は、そう言うと、くると背を向けて、またしゃがみ込み、何枚かの瓦を両手で持ってこんもりと積み上げた瓦の方へ歩いて行った。その背を丸めた姿を見た時、私の胸は非常な力で締め付けられるような思いがした。目頭には熱いものが溢れかけていた。

私は、私の発言を指示された時、この時の事を語った。「ああいう生徒が一人でもいる限り、学校は続けるべきだと思います。それが教育だと思います。」（中略）私発言の後、いろいろ発言があったようだが、今なにがあったのか思い出すことはできない。ただ、理事長の言葉だけがはっきりと記憶の中に刻み込まれている。「よし、判った。あなた方の意見通り学校は継続するように努力しよう。」あの日、炎天下に作った少年の細い、細い一本の焼跡の中の道の彼方に現在の巨大な帝京が聳え立っている³。

このエピソードは、大きな危機であっても一人の勇気と行動が原動力となり、それを乗り越えるためのきっかけとなることを証明したものである。あわせて当時の帝京商業学校の教育に対する姿勢も知ることができる大変重要な証言である。しかし、本館が開館する以前の大学内では誰一人として知らなかった。筆者ももちろん知らず、この回顧談を発見した際は大変驚い

3 帝十会（1996）『五十年乃思以出』



帝京大学の原点である帝京商業学校の存続の危機に創立者たちがどう立ち向かっていったのかを知ることのできる同窓会誌。

た。この重要なエピソードを学内外の来館者に知ってもらおうと開館当時から常設展示内で紹介していたのだが、他の展示物とあまり差を付けずに紹介していた。しかし、コロナ禍で改めてこのエピソードに触れたとき、この厳しい状況下での大学運営の拠り所になる重要なものであることを再度認識した。

では、この貴重な証言を現在の我々が知ることが可能だったのはなぜか。その理由を考えると、資料を保管し、その内容を紐解いていたからという当たり前の結論にたどり着く。未来の人々が過去の歴史を検証可能なようにするため、関係する資料を残していくことこそ、大学アーカイブズの使命であると今更ながら強く感じた。さらに過去の記録を紐解き明らかになったことを、年史の編纂を行い、出版し周知する大学史編纂や、展示を通して来館者に明らかになったことを知らせる博物館の重要性もあわせて実感した。

5 コロナ禍で博物館は無力か

博物館は館に大量に蓄積された実物を見る、実物に触れるなどの行為や、実物が展示されている場に直接身を置くことで感じられる体験を

重視する場所である。しかし、コロナ禍で人の移動や集まることが制限されているなか、その特徴を生かした活動を展開することはかなり厳しい。ここまで、コロナ禍での1年間の本館の活動を述べてみたが、正直どの程度、コロナ禍以前と同じように社会に対して設置目的に掲げた役割が果たせるのかと自問自答している。それでは博物館はこのコロナ禍では無力なのか。その答えは「否」である。コロナ禍においても、そしてこれからも博物館は存在し続けるだろう。その証拠に、博物館はその起源から現在までの長い歴史の中で、社会の変化とともに目的や形を変化させて存在し続けてきた。

現在の博物館に直接つながる原型は、15世紀から17世紀にかけてヨーロッパの王侯貴族達が自身で集めた世界中の珍しいものを陳列したコレクションルームである。ヴァンダーカンマー（驚異の部屋）と呼ばれたこの部屋は、学問の探求のためというよりも、それを所有する王侯貴族の権力を示すためのものであった。それが18世紀の近代の市民社会形成の中で一般国民にも開放されるようになる。この博物館のシステムが日本に入ってきたのは19世紀末である。その役割は殖産興業のための展示場としてスタートし、その後、国家の権威を象徴する役割を担っていく。アジア・太平洋戦争下では、戦時体制に組み込まれ戦意高揚のための役割を担うことになった。戦後になると、社会教育機関として位置づけられ、さらに歴史的遺産を保存する場としても活用される。1980年代に入ると、博物館教育を重視した見方が定着するようになる。このように博物館は社会の状況に合わせて変化するとともに、新たな博物館観⁴が誕生し、人々に活用し続けられてきた。

4 博物館観の変遷については新藤浩伸(2011)「博物館批判の論点に関する一考察—文化学習基盤としての博物館に向けて—」『生涯学習基盤経営研究』第36号・君塚仁彦・名児耶明編(2012)『現代に生きる博物館』が参考になる。

ここで確認しておきたいことは、新たな博物館観で運営される博物館が出現しても、それ以前の博物館観で運営される館は淘汰されず、両者は共存し続けることである。人々の博物館観は多様であり、それぞれの目的に合わせて多様な活動を展開しているためである。博物館といえども一括りにできない多様性の一因がここにある。このように博物館は形を変え、バリエーションを増やして存在し続けてきた。

これを裏付けるように、多くの博物館でコロナ禍においてそれ以前ではごく少数に留まっていたオンラインでの発信を初め様々な取り組みが行われている。あわせて注目されるのが、浦幌町立博物館のように、コロナ禍に関係する記録や記憶を残そうという取り組みを行っている館もみられはじめてのことだ⁵。博物館は過去のものを収集すると思われがちだが、同時代のものも収集の対象となりつつある。このような取り組みは博物館の持つ可能性を示す重要な事例である。

まとめにかえて

最後にコロナ禍での本館の活動について今後の展望を2点示して結びとしたい。

1点目はインターネットを活用し同時性と双方向性の両方を満たしたオンラインでの情報発信の模索である。先に述べた通り博物館は、実物を見る、実物に触れるなどの行為や、実物が展示されている場に直接身を置くことで感じられる体験を重視する場所である。そのため物理的に博物館へ移動する必要がある。しかし、このコロナ禍で否応なしに手に取った「オンライン」という道具を使えば、この特別な体験を遠方にながらも得られるようになる可能性がある。そのキーワードは同時性と双方向性である。

なぜ同時性と双方向性なのか。それは博物館が

コミュニケーションの場だからである。これをドイツの芸術家であり教育者・社会活動家でもあったヨーゼフ・ボイス（1921 - 1986）は「ミュージアムは、われわれを成り立たせているものや成り立たせ方、そしてどのような存在にわれわれは成りたいのかを論じ合う『常設会議』」なのであると説明する⁶。博物館は静寂な空間と思われがちだが、そこに身を置く事は「人とのコミュニケーション」だけでなく、展示されている「実物とのコミュニケーション」も同時に行っている状態を意味する。これこそ博物館に身を置くことで得られる特徴的な体験である。以上がオンラインで発信するにあたって同時性と双方向性の両方が担保されるべき理由である。これを踏まえればこれらが担保された状態でギャラリートークや講座をライブ配信することで配信者と参加者が同じ時間を共有することが可能となり、チャットやマイク・WEBカメラを用いて参加者の考えの共有もできる。展示室に直接身を置かなくとも「人とのコミュニケーション」を通じた博物館特有の体験を得られる可能性がある。

すでに他の館でもオンラインでギャラリートーク・講座をライブ配信している事例は多くある。他大学でゲスト講師として本館を紹介するため、ライブ配信でギャラリートークを行ったところ、受講者には非常に好評であっただけでなく、講師を務めた筆者自身も一方通行の授業と比べ、その場で学生からの反応があり、非常にやりがいを感じた。

だが残念ながら「実物とのコミュニケーション」は、オンラインでは限界がある。本来実物は視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の五感を総合的に使い感じ取るものである。そのためパソコンの画面上の限られた視覚と聴覚情報から実物が持つ本来の迫

5 持田誠（2020）「コロナ関係資料収集の意義と必要性」『博物館研究』2020年11月号

6 ミヒャエル・パーモンティエ／眞壁宏幹訳（2012）『ミュージアム・エデュケーションー感性と知性を拓く想起空間』慶應義塾大学出版 p iii

力を感じ取ることは難しいだろう⁷。

2点目はコロナ禍における大学内の状況や学生、教職員の記憶を記録化し後世に残す必要性である。2020年3月10日、内閣府は新型コロナウイルス感染症に関わる事について行政文書のガイドラインに規定する「歴史的緊急事態」に該当するものとした。「歴史的緊急事態」とは、「国家・社会として記録を共有すべき政策事項であって、社会的な影響が大きく政府全体として対応し、その教訓が将来に活かされるようなもののうち、国民の生命、身体、財産に大規模かつ重大な被害が生じ、又は生じるおそれがある緊急事態」と定義づけられ、政策決定の際の議事録などの文書を後世の人々が検証可能なよう保管するために規定されたものである。つまりコロナ禍の記録は、国により後世の人々に継承すべきものと位置付けられた。これは国だけの問題ではなく社会全体として取り組むべき問題だろう。帝京大学は1年間に約4000人の卒業生を社会に送り出し、さらにそこで行われている教育・研究活動には多額の公的資金が投入されていることから社会に対する責任は大きい。その責任を果たし、後世の大学運営に活かすため、そして、再び訪れるかもしれない危機に立ち向かう指針とするため、コロナ禍の大学内の記録は残す必要がある。さらに記録に残らない筆者を初めとした学生、教職員の記憶も残す必要があるだろう。その一端を本館がどれだけ担えるかわからないが、できる範囲で模索をしていければと考えている。

以上2点の展望について挙げさせていただいた。誤解の無いように付け加えるが、今までの資料の収集や調査研究を続けるとともに実物の「もの」を最重視するという土台があったうえでの展望である。どこまでできるかわからないが、一步一步確実に歩を進めたいと考えている。

7 オンライン化は以下が示唆に富む指摘をしている。吉見俊哉(2020)「ポストコロナの大学論 キャンパスは本当に必要なのか」『世界』2020年9月号

帝京大学総合博物館 館報 第4号
2019・2020（令和元・2）年度

2022年3月31日発行

編集・発行者 帝京大学総合博物館

〒192-0395 東京都八王子市大塚359番地

電話 042-678-3675 FAX 042-690-8231

URL https://www.teikyo-u.ac.jp/campus/hachioji_campus/museum

印刷 株式会社 ムレコミュニケーションズ

